

常呂川河口遺跡

—常呂川河口右岸掘削護岸工事に係る発掘調査報告書—

2002

北海道常呂町教育委員会



1. 常呂川河口遺跡から常呂川河口を望む（南側より撮影）



1. 平成4年9月の洪水（南側より撮影）



2. 平成4年9月の洪水（東側より撮影）



1. 57号竖穴埋土出土の鈴谷式土器



1. 64号竖穴（擦文期）炭化材検出状況



2. 64号竖穴完掘状況



1. 73号竖穴埋土出土フイゴ羽口



2. 51号竖穴埋土出土トビニタイ土器



3. 57 a 号竖穴 (続縄文期) 礫検出状況



1. 329 a · 329 b 号土壙墓（続縄文初頭）完掘状況



2. 329 b 号土壙墓遺物出土状況



1. 329 b号土壙墓出土土器



2. 343号土壙墓（続縄文初頭）遺物出土状況



1. 470号土壙墓（続縄文初頭）遺物出土状況



2. 470号土壙墓遺物出土状況



1. 470号土壙墓琥珀玉出土状況



2. 470号土壙墓出土土器



1. 470号土壙墓クマ意匠ペンダント
(上面観)



2. 470号土壙墓クマ意匠ペンダント
(側面観)



3. 470号土壙墓石偶



4. 470号土壙墓琥珀玉

序 文

常呂町は北海道の東北端に位置しています。北側はオホーツク海、西側はわが国で第三番目の面積をもつサロマ湖、東部はなだらかな丘陵・森林地帯となり、森と海と湖に囲まれた理想的な地勢となっています。

町内128箇所遺跡はオホーツク海に沿って延びる砂丘上にあります。平野部を取り囲む様に分布する遺跡の中で最も最大なのは昭和49年に史跡指定を受けた「常呂遺跡」です。カシワ・ナラの樹林内には総数約2,500軒に及ぶ住居が見られ、屈指の規模と密度を誇っておりこの遺跡を訪れる見学者も多数みられます。本町では史跡常呂遺跡の保存・活用を図るため「ところ遺跡の森」として整備し保存と活用、啓蒙・普及の推進に努めています。

常呂川河口遺跡の発掘調査は常呂川河口右岸掘削護岸工事に伴うもので昭和63年から継続して調査を実施してまいりました。その結果、縄文文化・続縄文文化・擦文文化・オホーツク文化・アイヌ文化の各時期・文化にわたる大規模な遺跡であることが明らかになり、その成果の一部は「常呂川河口遺跡発掘調査報告書」(1)・(2)にまとめられています。今回の報告では続縄文文化の墓が目立ちます。中でもピット470からは土器5点、大小の琥珀玉約2,500粒、各種の石器55点が出土しました。多量の琥珀玉のみならず、人間を表現した石器や熊の頭部を表現したペンダントなどはこの時代の人々の習俗・儀礼を研究する上でも重要と考えられ、平成7年の文化庁考古速報展では全国7箇所の主要博物館で展示されました。また、ピット329bからはミニチュア土器、小型土器、双口土器など13点まとまって出土しました。土器の中には縄文文化と続縄文文化の特徴を合わせもった文様をもつものがあり、両文化の土器変遷を解明する上で貴重な資料となりました。

昨年の調査では擦文文化のものと思われる弓、篋、ヤス、木杭などの木製品が水に浸った状態で発見されました。この遺物から当時の人々の生活道具を解明する手掛かりを掴むことができると考えられます。この様な遺跡の発掘は地道な作業ですが地域を知る学習の場でもあり、平成6年から発掘体験の場所として活用しています。平成12年は646名、13年696名の小・中・高生、一般人が体験しました。この様な事業の継続が文化財に興味を抱かせ、保護啓蒙に果たす役割を担うものと確信するところです。

最後に調査当初から北海道教育委員会、北海道埋蔵文化財センター、東京大学名誉教授（現新潟大学教授）藤本強氏、東京大学大学院人文社会系研究科教授宇田川洋氏をはじめ関係各位から多大なご協力を頂きました。衷心より感謝申し上げます。

平成14年3月

北海道常呂町教育委員会

教育長 谷 昭 廣

例 言

1. 本書は、主に平成5年から6年にかけて実施した常呂川河口遺跡掘削護岸工事に係る常呂川河口遺跡（TK73遺跡）の緊急発掘調査の報告書である。平成7年度以降の調査分については次回に報告する予定である。
2. 本遺跡は北海道常呂郡常呂町字常呂100-1番地先にある。遺跡の登載番号はI-16-128である。
3. 発掘調査は網走開発建設部から委託を受けて、常呂町教育委員会が主体となって実施した。
4. 本書の執筆は報告末尾に氏名を記載したものが行い、編集は武田修による。
5. 付編の各種分析・同定については次の方々、機関に執筆を依頼した。

松村博文 国立科学博物館

和田恵治 北海道教育大学旭川校

新美倫子 名古屋大学大学院人間情報学研究科

パリノ・サーヴェイ(株)

6. 遺構、遺物の写真撮影は渡部高士が行った。
7. ピット450から456は欠番とした。
8. 各種遺物の実測は恒常的な整理員である吉田義子、加藤雪江、大西信子、矢萩友子、阿部真子が行った。
9. 年度毎の調査体制

平成5年度

調査期間 平成5年4月15日～10月31日

調査担当者 武田修、佐々木覚

事務 田淵由美子（10月まで）、林孝子（10月から）、馬淵和恵

作業員 近江谷光荣、大谷俊子、小野寺金夫、川村武子、栗原アサ子、後藤幸三郎、
佐々木富男、佐々木由美子、竹内敦子、水野停子、室田恵美、矢萩友子

整理員 相田ゆり子、小林千花子

平成6年度

調査期間 平成5年4月15日～10月31日

調査担当者 武田修

調査補助員 佐々木覚、渡部高士

事務 馬淵和恵

作業員 臼井三郎、遠藤篤、近江谷光荣、大谷俊子、大野正男、大沼篤子、小野寺金夫、川村武子、清永順子、工藤清、熊谷弘子、栗原アサ子、後藤幸三郎、近

藤正幸，佐々木由美子，佐藤成子，杉田弘子，高木貴美子，高野貫，武田美津子，竹内敦子，富田すみれ，長谷川富次郎，氷室福二，藤沢正一，藤田英司，松田ハツエ，室田恵美，水野停子，矢萩友子

整理員 伊藤直枝，遠藤篤，近江谷さゆり，加藤幸恵，加藤雪枝，京谷みどり，木村いずみ，清永順子，高木貴美子，小林千花子，近藤正幸，坂下美津子，中島隆子，中村萬亀子，前田勇三郎，三好昭子，日脇京子，山内ゆり子，藤田英司，藤田朋美，矢野みどり

10. 発掘調査及び整理作業には下記の方々のご指導，助言を得ました。記して感謝の意を表す
しだいで。

新潟大学文学部 藤本強，東京大学大学院人文社会系研究科 宇田川洋，同大貫静夫 同
熊本俊朗，東京大学大学院新領域創成科学研究科 佐藤宏之，筑波大学文学部 前田潮，
国立歴史民俗博物館 西本豊弘，北海道教育委員会文化課 畑宏明，同大沼忠春，北海道
埋蔵文化財センター 種市幸生，同越田賢一郎，同熊谷仁，同西田茂，早稲田大学文学部
菊地徹夫，名古屋大学大学院 人間情報学研究科 新美倫子，余市町水産博物館 乾芳宏，
田中コンサルタント文化財調査室 豊原照司，枝幸町教育委員会 高島孝宗，北網圏文化
センター 太田敏量，同菅野友世，北海道開拓記念館 山田悟郎，同右代啓視，同赤松守
雄，北海道開拓の村 野村崇，釧路市埋蔵文財センター 西隆幸，同松田猛，石川朗，紋
別市立博物館 佐藤和利，斜里町知床博物館 松田功，斜里町図書館 合地信生

目 次

序	常呂町教育委員会 教育長 谷 昭 廣	i
例 言		ii
第 I 章	調査に至る経過	1
第 II 章	遺跡の地形と基本土層	3
第 III 章	周辺の遺跡	6
第 IV 章	竪穴住居	15
第 V 章	ピット	236
第 VI 章	まとめ	418
付 編		
付編 I	常呂川河口遺跡（続縄文期～擦文期）出土の動物遺存体 名古屋大学博物館 新美 倫子	422
付編 II	常呂川河口遺跡出土のヒト歯について 国立科学博物館 松村 博文	427
付編 III	電子プローブマイクロアナライザー（EPMA）による 石器黒曜石ガラスの主成分化学組成 北海道教育大学旭川校 岩石学研究室 和田 恵治	429
付編 IV	常呂川河口遺跡TK73遺跡・63号住居跡から出土した炭化材の樹種 パリオ・サーヴェイ株式会社	433

挿 図 目 次

第1図	基本層序模式図……………4		石器……………46
第2図	地形模式図……………5	第31図	52号竪穴, 52 a号竪穴, ピット 341平面図……………47
第3図	常呂川河口遺跡の位置と周辺の 遺跡……………7	第32図	52号竪穴床面・埋土出土土器……………48
第4図	遺跡配置図(1)……………11	第33図	52号竪穴床面・埋土出土土器……………49
第5図	遺跡配置図(2)……………13	第34図	52号竪穴床面・埋土出土土器……………50
第6図	47号竪穴平面図……………16	第35図	53号竪穴平面図……………53
第7図	47号竪穴床面出土土器……………17	第36図	53 a号竪穴平面図……………55
第8図	47号竪穴床面・埋土出土土器……………18	第37図	53号竪穴床面・表土・火山灰直 上・火山灰直下・埋土出土土器……………56
第9図	47号竪穴埋土出土土器……………19	第38図	53号竪穴埋土出土土器……………57
第10図	47号竪穴床面・炉・埋土出土石 器……………20	第39図	53号竪穴埋土出土土器……………58
第11図	47 a号竪穴, 47 b号竪穴平面図……………22	第40図	53号竪穴床面・埋土・表土・火 山灰直下出土土器……………59
第12図	47 a号竪穴床面・埋土出土土器 ……………23	第41図	53号竪穴埋土, 53 a号竪穴埋土 出土土器……………60
第13図	47 a号竪穴床面・埋土出土土器 ……………24	第42図	53 a号竪穴埋土出土土器……………61
第14図	47 a号竪穴埋土出土土器……………25	第43図	53 a号竪穴埋土出土土器……………62
第15図	48号竪穴埋土出土土器……………28	第44図	53 b号竪穴平面図……………63
第16図	49号竪穴, 49 a号竪穴平面図……………30	第45図	53 b号竪穴埋土, 54号竪穴埋土 出土土器……………64
第17図	49号竪穴床面・埋土出土土器……………31	第46図	53 b号竪穴埋土, 54号竪穴埋土 出土土器……………65
第18図	49号竪穴埋土出土土器……………32	第47図	54号竪穴平面図……………66
第19図	49号竪穴埋土出土土器……………33	第48図	55号竪穴平面図……………68
第20図	49号竪穴埋土出土土器……………34	第49図	55号竪穴床面・表土・埋土出土 土器……………69
第21図	48号竪穴埋土, 49号竪穴床面・ 埋土出土土器……………35	第50図	55号竪穴埋土, 55 a号竪穴埋土 出土土器……………70
第22図	49号竪穴埋土, 49 a号竪穴床 面・埋土, 50号竪穴埋土出土石 器……………36	第51図	55号竪穴床面・埋土出土土器……………71
第23図	49 a号竪穴床面・埋土出土土器……………37	第52図	55 a号竪穴平面図……………72
第24図	50号竪穴平面図……………39	第53図	55 a号竪穴床面・埋土出土土器……………73
第25図	50号竪穴床面・カマド・埋土出 土土器……………40	第54図	56号竪穴, ピット360, 360 a, 361, 362, 363, 363 a, 363 b, 364, 365, 366, 367平面図……………75
第26図	51号竪穴平面図……………42	第55図	56号竪穴埋土出土土器……………76
第27図	51号竪穴埋土出土土器……………43	第56図	56号竪穴埋土出土土器……………77
第28図	51号竪穴埋土出土土器……………44	第57図	56号竪穴埋土出土土器……………78
第29図	51号竪穴埋土出土土器……………45		
第30図	51号竪穴埋土・カマド煙道出土		

第58図	57号竪穴, 57 a号竪穴, ピット 461平面図 ……………79	第85図	60号竪穴埋土, 61号竪穴埋土出 土石器 ……………112
第59図	57号竪穴鈴谷式・後北 C ₂ ・D 式・北大 I 式土器分布図…………81	第86図	61号竪穴埋土, 61 a号竪穴床 面・埋土出土石器 ……………113
第60図	57号竪穴床面・床面直上出土土 器……………82	第87図	61 a号竪穴埋土, 61 b号竪穴床 面・埋土出土石器 ……………114
第61図	57号竪穴埋土出土土器……………83	第88図	61 b号竪穴平面図 ……………116
第62図	57号竪穴埋土出土土器……………84	第89図	61 b号竪穴床面・埋土出土土器 ……………117
第63図	57号竪穴床面・埋土出土石器…………85	第90図	61 b号竪穴埋土出土土器 ……………118
第64図	57 a号竪穴埋土出土土器……………87	第91図	61 c号竪穴, 61 d号竪穴, 61 e 号竪穴, ピット357, 358, 458平 面図 ……………120
第65図	57 a号竪穴埋土, 57 b号竪穴床 面・埋土出土土器……………88	第92図	61 c号竪穴床面・埋土出土土器 ……………121
第66図	57 b号竪穴埋土, 57 c号竪穴埋 土出土土器……………89	第93図	61 c号竪穴埋土, 61 e号竪穴埋 土出土土器 ……………122
第67図	57 a号竪穴埋土, 57 b号竪穴埋 土, 57 c号竪穴埋土出土土器…………90	第94図	61 c号竪穴床面, 埋土出土石器 ……………123
第68図	57 b号竪穴, 57 c号竪穴平面図…………92	第95図	61 c号竪穴埋土出土石器・石製 品 ……………124
第69図	58号竪穴, ピット369, 392平面 図……………93	第96図	61 f号竪穴, ピット337平面図…………125
第70図	58号竪穴床面・埋土出土土器…………94	第97図	61 f号竪穴埋土出土土器 ……………126
第71図	58 a号竪穴, ピット368, 387平 面図……………96	第98図	61 f号竪穴埋土, 61 g号竪穴床 面, 62号竪穴埋土出土土器 ……127
第72図	58 a号竪穴床面・埋土出土土器…………97	第99図	61 g号竪穴平面図 ……………129
第73図	58 a号竪穴埋土出土土器……………98	第100図	61 f号竪穴埋土, 61 g号竪穴床 面, 63号竪穴埋土出土土器 ……130
第74図	58 a号竪穴埋土出土土器……………99	第101図	62号竪穴平面図 ……………131
第75図	58 a号竪穴床面・埋土出土石器 ……………100	第102図	63号竪穴, ピット430, 430 a, 495平面図……………133
第76図	58 a号竪穴埋土出土石器・石製 品・琥珀玉 ……………101	第103図	63号竪穴遺物出土分布図 ……134
第77図	59号竪穴平面図 ……………102	第104図	63号竪穴床面・埋土出土土器 ……………135
第78図	60号竪穴, ピット348, 377, 378, 423, 424, 435, 436, 436 a, 437, 438平面図……………103	第105図	64号竪穴平面図 ……………137
第79図	60号竪穴埋土, 61号竪穴・埋土 出土土器 ……………104	第106図	64号竪穴遺物出土分布図 ……138
第80図	61号竪穴平面図 ……………106	第107図	64号竪穴床面・カマド・煙道・ 埋土出土土器 ……………139
第81図	61号竪穴出土土器 ……………107	第108図	64号竪穴埋土出土土器 ……………140
第82図	61号竪穴埋土出土土器 ……………108	第109図	64号竪穴床面・カマド・埋土出
第83図	61 a号竪穴平面図 ……………110		
第84図	61 a号竪穴埋土出土土器 ……111		

	土石器 ……………141	第133図	70号竪穴埋土出土土器 ……………172
第110図	65号竪穴, 65 a 号竪穴, ピット 425, 425 a, 425 b, 426, 426 a, 426 b, 426 c, 427, 428, 429, 429 a, 431, 432, 433, 434, 434 a, 460, 460 a 平面図 ……………143	第134図	70号竪穴埋土出土土器 ……………173
第111図	65号竪穴床面・埋土出土土器 ……144	第135図	70号竪穴埋土出土土器 ……………174
第112図	65号竪穴埋土, 65 a 号竪穴埋土, 66号竪穴埋土・カマド出土土器 ……………145	第136図	70号竪穴床面・埋土出土土器 ……175
第113図	66号竪穴, ピット422平面図…………147	第137図	70号竪穴埋土, 70 a 号竪穴埋土 出土土器 ……………176
第114図	65 a 号竪穴埋土, 66号竪穴床面 直上・埋土出土土器 ……………148	第138図	70 a 号竪穴平面図 ……………177
第115図	67号竪穴, 内ピット 1, 2, 3, 4, 5 平面図 ……………150	第139図	70 a 号竪穴床面・埋土出土土器 ……………178
第116図	67号竪穴床面・内ピット 3・埋 土出土土器 ……………151	第140図	71号竪穴平面図 ……………179
第117図	67号竪穴埋土出土土器 ……………152	第141図	71号竪穴埋土出土土器 ……………180
第118図	67号竪穴埋土出土土器 ……………153	第142図	72号竪穴, 72 a 号竪穴, 72 b 号 竪穴, 72 c 号竪穴, 72 d 号竪穴, ピット442, 443平面図 ……………181
第119図	67号竪穴床面・埋土出土土器 ……154	第143図	72号竪穴床面・埋土出土土器・ 土製品 ……………182
第120図	68号竪穴, 内ピット 1, 2 平面 図 ……………156	第144図	72号竪穴出土土器 ……………183
第121図	67号竪穴埋土, 68号竪穴床面・ 埋土出土土器 ……………157	第145図	72号竪穴埋土出土土器 ……………184
第122図	68号竪穴埋土出土土器 ……………158	第146図	72号竪穴埋土出土土器 ……………185
第123図	68号竪穴埋土出土土器 ……………159	第147図	71号竪穴埋土, 72号竪穴埋土出 土土器 ……………186
第124図	69号竪穴平面図 ……………160	第148図	72 b 号竪穴床面出土土器 ……………189
第125図	69号竪穴床面・埋土出土土器 ……162	第149図	72 d 号竪穴床面張出し・埋土出 土土器 ……………190
第126図	69号竪穴埋土 (1 ~ 9) 出土土 器 ……………163	第150図	72 d 号竪穴床面・埋土, 73号竪 穴床面・煙道・埋土出土土器 ……………191
第127図	69号竪穴埋土出土土器 ……………164	第151図	73号竪穴, ピット457平面図…………193
第128図	69号竪穴床面・埋土出土土器 ……165	第152図	73号竪穴床面・埋土出土土器 ……194
第129図	69 a 号竪穴, 69 b 号竪穴, 69 c 号竪穴平面図 ……………167	第153図	73号竪穴埋土・カマド出土土器 ……………195
第130図	69 a 号竪穴埋土, 69 b 号竪穴埋 土, 69 c 号竪穴埋土出土土器 ……168	第154図	73号竪穴埋土出土土器 ……………196
第131図	69 a 号竪穴柱穴・埋土, 69 b 号 竪穴埋土, 69 c 号竪穴埋土出土 土器 ……………169	第155図	74号竪穴, 74 a 号竪穴, ピット 479, 480平面図 ……………199
第132図	70号竪穴平面図 ……………171	第156図	74号竪穴床面出土土器 ……………200
		第157図	74号竪穴床面・火山灰上・埋土 出土土器 ……………201
		第158図	74号竪穴床面・埋土出土土器 ……202
		第159図	74号竪穴埋土出土土器 ……………203
		第160図	74号竪穴床面, 74号竪穴埋土出

	土石器 ……………204	第186図	ピット316, 316 a, 316 b, 317, 319, 320, 324, 441平面図 ……238
第161図	74号竪穴埋土・火山灰上, 74 a 号竪穴床面・埋土, 75号竪穴埋 土出土石器・鉄製品 ……………205	第187図	ピット316埋土, 316 a埋土, 316 b埋土, 317埋土, 318埋土, 出 土石器 ……………239
第162図	74 a 号竪穴床面・埋土出土石器 ……………207	第188図	ピット316 a埋土, 316 b埋土, 324埋土, 327埋土出土石器 ……240
第163図	75号竪穴, ピット349, 350, 351, 352, 353, 354, 463, 464平面図 ……………208	第189図	ピット319埋土出土石器……………242
第164図	75号竪穴埋土, 76号竪穴埋土出 土石器 ……………209	第190図	ピット321, 321 a, 322, 325, 326平面図……………243
第165図	76号竪穴, 78号竪穴, ピット499, 499 a, 499 b平面図 ……………211	第191図	ピット320埋土, 321埋土, 321 a 埋土, 323埋土, 324埋土, 327埋 土出土石器 ……………245
第166図	76 a 号竪穴平面図 ……………212	第192図	ピット327平面図……………247
第167図	76 a 号竪穴床面, 77号竪穴床 面・埋土出土石器 ……………213	第193図	ピット328, 328 a, 328 c 平面図 ……………249
第168図	76号竪穴床面・埋土, 77号竪穴 埋土, 78号竪穴床面・埋土出土 石器 ……………214	第194図	ピット328埋土, 328 a埋土, 328 b埋土, 328 c埋土出土石器……………250
第169図	77号竪穴, ピット491, 491 a 平 面図 ……………215	第195図	ピット328床面・埋土, 328 a埋 土, 328 c埋土出土石器……………251
第170図	78号竪穴床面・埋土出土石器 ……216	第196図	ピット328 b平面図……………253
第171図	79号竪穴平面図 ……………218	第197図	ピット328 b 上部ベンガラ内・床 面・埋土出土石器 ……………254
第172図	79号竪穴床面出土石器 ……………219	第198図	ピット328 b埋土出土石器……………255
第173図	79号竪穴床面・埋立出土石器 ……220	第199図	ピット328 b埋土出土石器……………256
第174図	79号竪穴埋立出土石器 ……………221	第200図	ピット328 b埋土出土石器……………257
第175図	79号竪穴埋土出土石器 ……………222	第201図	ピット328 b埋土出土石器……………258
第176図	79号竪穴埋土出土石器 ……………223	第202図	ピット328 b埋土出土石器……………259
第177図	79号竪穴床面・埋土出土石器 ……224	第203図	ピット328 b埋土出土石器……………260
第178図	80号竪穴平面図 ……………226	第204図	ピット328 b埋土出土石器……………261
第179図	80号竪穴床面・埋土出土石器 ……227	第205図	ピット329, 329 b平面図 ……264
第180図	80号竪穴埋土出土石器 ……………228	第206図	ピット329 a平面図……………266
第181図	80号竪穴埋土出土石器 ……………229	第207図	ピット329埋土, 329 a埋土出土 土器 ……………267
第182図	80号竪穴床面・埋土出土石器 ……230	第208図	ピット329 a埋土出土石器……………268
第183図	80 a 号竪穴, 80 b 号竪穴平面図 ……………232	第209図	ピット329 b 土器石器出土分布 図 ……………270
第184図	80 a 号竪穴埋土, 80 b 号竪穴埋 土出土石器 ……………233	第210図	ピット329 b埋土出土石器……………271
第185図	80 a 号竪穴床面・埋土, 80 b 号 竪穴床面・埋土出土石器 ……235	第211図	ピット329 b埋土出土石器……………272
		第212図	ピット329 b埋土出土石器・土製

	品 ……………273		c, 372, 375, 376, 393, 393 a
第213図	ピット330, 331, 332, 333, 334, 335, 336平面図 ……………275	第231図	ピット370 b埋土, 370 c埋土, 370 d埋土, 371埋土, 371 a床面, 371 b埋土, 371 c埋土出土石器 ……………311
第214図	ピット330埋土, 331埋土, 338 a 埋土, 340埋土, 342埋土, 343床 面・埋土出土石器 ……………276	第232図	ピット370 c埋土, 370 d埋土, 371埋土, 371 a床面, 371 b埋土, 371 c埋土, 372ベンガラ内・埋 土出土石器 ……………312
第215図	ピット330埋土, 332床面・埋土, 337埋土出土石器・琥珀玉…………277	第233図	ピット372床面・埋土, 373埋土, 374埋土, 374 a埋土, 375埋土出 土石器 ……………315
第216図	ピット338, 338 a平面図 ……………280	第234図	ピット373平面図……………316
第217図	ピット339, 339 a, 339 b, 339 c, 339 d, 342, 342 a, 384, 385, 397, 411, 413, 414, 415 平面図 ……………282	第235図	ピット374, 374 a, 374 b, 374 c, 374 d平面図……………318
第218図	ピット338 a床面・埋土, 339 b 埋土, 340埋土, 342埋土, 342 a 埋土出土石器 ……………283	第236図	ピット373遺体上部・埋土, 374 a埋土, 374 d埋土, 378埋土, 379埋土, 380埋土出土石器・琥 珀等 ……………320
第219図	ピット343, 343 a平面図 ……………286	第237図	ピット379, 379 a, 379 b, 379 c平面図 ……………322
第220図	ピット343埋土・遺体上, 353埋 土, 361埋土出土石器……………287	第238図	ピット378埋土, 379埋土, 379 a 埋土, 379 b床面, 380埋土出土 石器 ……………323
第221図	ピット347埋土,ピット350埋土, ピット351埋土, ピット352埋土 出土石器 ……………290	第239図	ピット318, 380, 381, 382, 383, 390, 419, 420平面図……………325
第222図	ピット353埋土, 355埋土, 356埋 土, 360床面・埋土, 361埋土出 土石器 ……………292	第240図	ピット386平面図……………327
第223図	ピット362埋土, 363埋土, 363 a 埋土, 363 b埋土出土石器……………299	第241図	ピット381埋土, 383埋土, 386埋 土, 389埋土出土石器……………328
第224図	ピット362埋土, 363埋土, 363 a 埋土, 363 b埋土, 370床面・埋 土出土石器 ……………300	第242図	ピット384埋土, 385埋土, 386埋 土, 389床面・埋土, 391床面・ 埋土出土石器 ……………329
第225図	ピット365埋土, 366埋土, 367埋 土出土石器 ……………301	第243図	ピット389平面図……………331
第226図	ピット370平面図……………303	第244図	ピット391平面図……………333
第227図	ピット370床面・埋土, 370 a床 面・埋土出土石器 ……………304	第245図	ピット391床面, 392埋土, 394埋 土, 396埋土, 398埋土, 400遺体 上, 401埋土, 404遺体上, 404 a 遺体上, 405床面出土石器……………335
第228図	ピット370 a床面・ベンガラ内・ 埋土出土石器 ……………305	第246図	ピット394埋土, 397埋土, 400遺
第229図	ピット370 a, 370 b, 370 c, 370 d平面図 ……………306		
第230図	ピット371, 371 a, 371 b, 371		

	体上, 401埋土出土石器……………336		449, 459, 465, 466, 467平面図 ……………372
第247図	ピット323, 399, 集石6, 7平 面図……………338	第261図	ピット445埋土, 447埋土, 448埋 土出土石器……………373
第248図	ピット388, 394, 395, 396, 398, 400, 402, 403, 409, 409 a, 409 b, 409 c, 439, 462, 462 a平 面図……………339	第262図	ピット448埋土, 464埋土出土石 器……………374
第249図	ピット404, 404 a, 405, 406, 408平面図……………343	第263図	ピット463埋土, 464埋土, 466埋 土, 469埋土出土石器……………380
第250図	ピット401, 407, 407 a, 410平 面図……………347	第264図	ピット470平面図……………383
第251図	ピット407埋土, 409 a床面, 410 床面・埋土, 415埋土, 416埋土, 417埋土, 419埋土出土石器……………350	第265図	ピット470土器石器出土分布図…384
第252図	ピット404遺体上・埋土, 404 a 遺体上, 405ベンガラ上, 409 a 埋土, 410床面・埋土, 412埋土, 416埋土出土石器……………352	第266図	ピット470琥珀玉出土状況(1) ……………385
第253図	ピット412, 412 a平面図……………353	第267図	ピット470琥珀玉出土状況(2) ……………386
第254図	ピット421埋土, 423埋土, 425埋 土, 425 a埋土, 425 b埋土, 426 埋土, 426 c埋土出土石器……………358	第268図	ピット470遺体上出土石器……………387
第255図	ピット419埋土, 420埋土, 421埋 土, 425 b埋土, 427埋土, 429埋 土, 430埋土出土石器……………360	第269図	ピット470床面出土石器……………388
第256図	ピット427埋土, 429埋土出土土 器……………362	第270図	ピット470床面・遺体上・ベンガ ラ内出土石器・土製品・石製品 ……………389
第257図	ピット429 a埋土, 430埋土, 432 埋土, 433埋土, 436 a埋土出土 土器……………363	第271図	ピット470遺体上出土琥珀玉……………390
第258図	ピット432埋土, 436埋土, 438埋 土, 439床面・埋土, 440埋土, 440 a埋土, 444埋土, 444 a埋土, 445埋土出土石器・琥珀玉……………368	第272図	ピット471埋土, 472埋土, 473埋 土, 474埋土出土石器……………391
第259図	ピット439埋土, 440埋土, 440 a 埋土, 444埋土, 444 a埋土出土 土器……………369	第273図	ピット474 a埋土, 474 b埋土, 474 c埋土, 474 d埋土, 478埋土, 479埋土出土石器……………392
第260図	ピット340, 344, 345, 346, 347, 355, 356, 359, 444, 444 a, 444 b, 444 c, 445, 446, 447, 448,	第274図	4号小竪穴, ピット421, 468, 469, 473, 474, 474 a, 474 b, 474 c, 474 d, 474 e, 475, 483, 487, 489, 489 a, 489 b平面図 ……………394
		第275図	ピット416, 417, 418, 471, 472, 476, 477, 478, 478 a, 478 b, 478 c平面図……………396
		第276図	ピット482, 482 a, 500, 500 a 平面図……………399
		第277図	ピット480埋土, 481埋土, 482上 部, 484埋土出土土器……………400
		第278図	ピット440, 440 a, 484, 485, 485 a, 486平面図……………402
		第279図	ピット485埋土, 485 a埋土, 487

	埋土出土土器 ……………404		497, 498平面図 ……………411
第280図	ピット488, 490平面図 ……………405	第284図	ピット489 a 床面・埋土, 494埋 土, 495埋土出土土器……………412
第281図	ピット471埋土, 474埋土, 474 a 埋土, 474 b 埋土, 478埋土, 480 埋土, 481埋土, 484埋土, 488埋 土, 489埋土, 489 a 埋土, 491埋 土, 494埋土出土土器……………406	第285図	ピット497埋土, 499 a 埋土出土 土器 ……………413
第282図	ピット489埋土出土土器……………407	第286図	埋 甕 5 平面図 ……………415
第283図	ピット481, 492, 493, 494, 496,	第287図	埋 甕 5 ……………416
		第288図	集石 7 出土土器 ……………417

図 版 目 次

図版 1	47号竪穴 47 a 号竪穴		物出土状況
図版 2	47号竪穴埋土出土土器 47 a 号竪穴 床面出土土器 49号竪穴 49号竪穴 埋土出土土器	図版17	64号竪穴 64号竪穴床面・埋土出土 土器
図版 3	50号竪穴 50号竪穴床面・埋土出土 土器	図版18	65 a 号竪穴 66号竪穴 66号竪穴床 面直上出土土器 67号竪穴床面出土 土器
図版 4	51号竪穴 51号竪穴埋土出土土器	図版19	67号竪穴 68号竪穴 68号竪穴床 面・埋土出土土器
図版 5	51号竪穴埋土出土土器 52号竪穴床 面・埋土出土土器 52号竪穴	図版20	69号竪穴 69号竪穴床面・埋土出土 土器
図版 6	53 a 号竪穴・53 b 号竪穴 53号竪穴 床面・火山灰直上・埋土出土土器 54 号竪穴	図版21	69 a 号竪穴 70号竪穴 70号竪穴埋 土出土土器 70 a 号竪穴埋土出土土 器
図版 7	55号竪穴・55 a 号竪穴 55号竪穴埋 土出土土器 56号竪穴	図版22	71号竪穴 72号竪穴・72 a 号竪穴・ 72 b 号竪穴
図版 8	57号竪穴 57号竪穴床面・埋土出土 土器	図版23	72号竪穴床面・埋土出土土器 72 b 号竪穴床面出土土器 (正面・側面)
図版 9	57 a 号竪穴 57 a 号竪穴礫出土状況 57 a 号竪穴埋土出土土器	図版24	73号竪穴 73号竪穴床面・埋土出土 土器 73号竪穴床面・埋土出土土製 品
図版10	57 b 号竪穴 57 c 号竪穴	図版25	74号竪穴床面出土土器 74 a 号竪穴 床面出土土器 74号竪穴・74 a 号竪 穴 75号竪穴
図版11	58 a 号竪穴床面・埋土出土土器 58 a 号竪穴 60号竪穴	図版26	76号竪穴 76号竪穴埋土出土土器 76 a 号竪穴 76 a 号竪穴床面出土土器
図版12	61号竪穴 61号竪穴埋土出土土器 61 a 号竪穴埋土出土土器 61 a 号竪 穴	図版27	77号竪穴 78号竪穴
図版13	61 b 号竪穴 61 c 号竪穴	図版28	79号竪穴 79号竪穴床面・埋土出土
図版14	61 f 号竪穴 62号竪穴		
図版15	63号竪穴遺物出土状況 63号竪穴		
図版16	63号竪穴床面出土土器 64号竪穴遺		

	土器		面・ベンガラ内・埋土出土石器
図版29	80号竪穴 80号竪穴床面出土土器	図版51	ピット371・ピット371a・ピット371
	80a号竪穴		b・ピット372・ピット371埋土出土
図版30	4号小竪穴		石器 ピット371a床面出土土器
図版31	ピット327 ピット327埋土出土土器		ピット371a床面出土石器 ピット
	ピット328埋土出土土器 ピット328		372床面出土土器
図版32	ピット328床面・埋土出土石器 ピッ	図版52	ピット372ベンガラ内・埋土出土石器
	ト328a埋土出土土器		ピット373 ピット373埋土出土土器
図版33	ピット328b ピット328b埋土出土	図版53	ピット373遺体上部・埋土出土石器
	土器 ピット328b上部ベンガラ		ピット378埋土出土石器 ピット379
	内・埋土出土石器		b床面出土土器 ピット379b遺物
図版34	ピット328b埋土出土石器		出土状況
図版35	ピット328b埋土出土石器	図版54	ピット379b ピット384埋土出土石
図版36	ピット328b埋土出土石器		器 ピット386埋土出土石器
図版37	ピット328b埋土出土石器	図版55	ピット389 ピット389床面・埋土出
図版38	ピット328c埋土出土石器 ピット		土石器 ピット391床面出土土器
	329埋土出土土器 ピット329		ピット391床面出土石器
図版39	ピット329a ピット329a埋土出土	図版56	ピット400遺体上出土石器 ピット
	土器		404遺体上出土土器 ピット404遺体
図版40	ピット329a埋土出土土器		上出土石器 ピット404a遺体上出
図版41	ピット329b ピット329b遺物出土		土土器 ピット405床面出土土器
	状況		ピット405
図版42	ピット329b埋土出土土器	図版57	ピット409a ピット409a床面出土
図版43	ピット329b埋土出土石器		土器 ピット411琥珀玉出土状況
図版44	ピット329b埋土出土石器・土製品	図版58	ピット412埋土出土石器 ピット419
図版45	ピット330埋土出土土器 ピット330		埋土出土石器 ピット438
	埋土出土石器 ピット337埋土出土石	図版59	ピット439床面・埋土出土土製品・石
	器・琥珀玉 ピット338a埋土出土土		器 ピット444埋土出土琥珀玉
	器 ピット338a床面・埋土出土石器		ピット444a埋土出土石器・琥珀玉
図版46	ピット342埋土出土石器 ピット343		ピット459埋土出土土器 ピット466
	遺物出土状況		埋土出土土器
図版47	ピット343 ピット343床面・埋土出	図版60	ピット470 ピット470遺物出土状況
	土土器 ピット343埋土出土石器		ピット470遺体上出土土器
図版48	ピット343埋土・遺体上出土石器	図版61	ピット470床面出土石器
	ピット363b埋土出土石器 ピット	図版62	ピット470床面出土石器 ピット470
	363b		遺体上出土土製品 ピット470ベン
図版49	ピット370床面出土土器 ピット370		ガラ内出土土製品
	床面・埋土出土石器 ピット370a	図版63	ピット470遺体上出土琥珀玉
図版50	ピット370a遺物出土状況 ピット	図版64	ピット482上部出土土器 ピット494
	370a床面出土土器 ピット370a床		埋土出土土器 埋甕5出土状況

付編表図版目次

付編 I

表 1	出土動物種名	422
表 2	資料重量	422
表 3	統縄文期魚出土量	423
表 4	オホーツク文化期・擦文期・時期不明魚類出土量	423
表 5	鳥類出土内容	424
表 6	哺乳類出土内容	425

付編 III

図 1	黒曜石原産地同定ダイアグラム	430
表 1	黒曜石ガラス化の化学分析値	431

付編 IV

表 1	樹脂同定結果	434
図版 1	炭化材 (1)	437
図版 2	炭化材 (2)	438

口 絵 写 真

1	1. 常呂川河口遺跡から常呂川河口を望む 南側より	2. 343号土壙墓(統縄文初頭) 遺物出土状況
2	1. 平成4年9月の洪水 南側より 2. 平成4年9月の洪水 東側より	8
3	1. 57号竪穴埋土出土の鈴谷式土器	2. 470号土壙墓遺物出土状況
4	1. 64号竪穴(擦文期)炭化材検出状況 2. 64号竪穴完掘状況	9
5	1. 73号竪穴埋土出土ファイゴ羽口 2. 51号竪穴埋土出土トビニタイ土器 3. 57a号竪穴(統縄文期)礫検出状況	10
6	1. 329a・329b号土壙墓(統縄文初頭)完掘状況 2. 329b号土壙墓遺物出土状況	1. 470号土壙墓クマ意匠ペンダント 上面観 2. 470号土壙墓クマ意匠ペンダント 側面観 3. 470号土壙墓石偶 4. 470号土壙墓琥珀玉
7	1. 329b号土壙墓出土土器	

第 I 章 調査に至る経過

1

常呂川は十勝、石狩、北見の分水嶺である三国山(標高1,541m)に源を發し、流路延長 120km、流域面積1,930km²に及ぶ一級河川である。

常呂川流域の気候は、オホーツク海高気圧の影響を受け雨の少ない地域であるが、明治30年頃からの開拓による森林伐採の結果、河川の水量調節機能は低下し洪水が起りやすくなったと考えられている。明治31年、大正4、8、11年、昭和7、9、10、14、22、23、28、30、32、33、37、39、44、46、47、50年と相次いで記録的な洪水が発生している。毎年のように起こる洪水の治水対策は大正10年から始められ現在も営々と続けられている。常呂川治水の完成は地域住民の悲願でもある。

今回、緊急発掘調査の対象となった地域は昭和50年の台風6号による出水で河川の決壊、床上浸水等の被害が出たため新捷水路を設けるために工事計画が策定された。常呂川は本遺跡の付近で大きく蛇行しているため水の疎通が悪く、豪雨の時に上流部で溢水するなどの問題があり、水の流れをスムーズにするために蛇行部のショートカットを行うことを目的とされた。発掘調査中の平成4年9月、平成7年9月の集中豪雨では発掘区のほぼ全域が水に浸かり、一部は堆積土が押し流され遺構が破壊されるということもあった。昭和52年から用地内の土地買収も進められ、昭和56年には工事着手の計画であった。しかし、直前に遺跡の存在が確認され昭和56年11月4日に埋蔵文化財保護のための事前協議書が網走開発建設部から提出された。これを受けて同年11月11日～12日に北海道教育委員会、(財)北海道埋蔵文化財センター、本町教育委員会の三者で包蔵地範囲確認調査を実施した。この結果、本遺跡の主体は標高4～5mの砂丘上にあり、さらに低地域にも竪穴の存在することが判明した。本遺跡の面積は約140,000m²に及びこの内39,000m²が発掘必要区域である。時間的には縄文中期・後期・晩期、続縄文、擦文、オホーツク、アイヌ文化の各期にわたっている。砂丘上では縄文前期までの包含層は砂層を挟んで表土から約1m50cmにも達する。これらの調査結果を踏まえて発掘調査を行うことも協議されたが、調査には莫大な経費と期間が費やされるなどの問題があり早速の実施には至らなかった。

その後、網走開発建設部で常呂川下流域の堤防整備が構じられ、本遺跡を回避するため新捷水路ルートの変更も考えられるため、工事計画以外の区域についても包蔵地範囲確認調査が必要となった。昭和57年9月2日に再度、事前協議書が提出された。このため北海道教育委員会と本町教育委員会は昭和60、61、62年の3年間で確認調査を実施した。昭和60年、61年度の調査地域は標高2～3mの常呂川の氾濫原と考えられる地域であり、全域に包含層が認められた。

常呂川河口遺跡

昭和62年の調査地域は常呂大橋下の中洲であるが包含層は認められなかった。このような背景とともに常呂川下流域の堤防整備もほぼ完了したため本来の計画通りに新捷水路工事を進めるために事前の緊急発掘調査の依頼があった。しかし、調査にはかなりの歳月を要することや調査体制の問題などもあり、本町教育委員会が独自に対応することは困難であるため北海道教育委員会に調査機関の紹介を依頼したが、他に適した機関が無いとの回答があったので本町教育委員会が調査体制の充実を図り実施することになった。

新捷水路は護岸工事部分を含めると全幅120m、延長320mであるが調査を終了するには約10年間の歳月が予想される。協議者としてもそれまで事業の実施を延ばすことは困難であり、新捷水路幅80mのうちセンターから東側の幅40mから着手したいとの要望があった。しかし、この場合幅20mの護岸部が後回しになり、検出される遺構も半掘りのまま残される恐れもあるため調査については護岸部を含めて行うことにした。

2

調査グリッドは新捷水路センター杭のIP. No1～600を基準に4×4mで設定し、東西をアルファベット、南北を数字で示した。

参考文献

- 網走開発建設部 『常呂川治水史』 1987
常 呂 町 『常呂町史』 1969

第II章 遺跡の地形と基本土層

常呂地域の地形・地質は標高70～175m以上の丘陵・高位段丘，標高20～30mの中位段丘，標高5～15mの低位段丘に分けられる。1)本遺跡は中位段丘から派生する。常呂川に向かって伸びる標高4～5mの低位段丘と，この面よりもさらに低面の標高2～3mほどの常呂川の氾濫原に存在している。昭和63年と平成1年にはこの氾濫原と考えられる区域を調査した。この区域の地盤は層厚約30～40cmの黄褐色粘土層でありその下層は粒子の粗い砂と礫混じりの層が堆積している。黄褐色粘土層は常呂川岸の付近では層厚約3～4mに及んでいる。川岸に移行するにしが黄褐色粘土層の堆積は厚みを増すようである。昭和63年に行った包蔵地範囲確認調査では深度約3mのところから木杭が出土している。平成13年度の調査では流木と共に木杭，弓，篋，ヤス，刺突具などの木製品が出土した。この木製品は擦文晩期の完形土器の下部約20cmから出土している。周辺にある擦文文化の竪穴の時期は後期を主体とするものであるためこの木製品はこの頃のものである可能性が高い。氾濫原と考えられるこの区域には大正年間に作られた築堤がある。盛土による築堤の上部を道路として利用していたため原地形は捉えにくい。が，おそらく中位段丘方面から常呂川に向かって緩く傾斜していたと思われる。一方，平成2年から調査している標高4～5mの低位段丘はトコロチャシ跡付近から西側に向かって伸びている。調査当初は栄浦第二・第一遺跡，常呂竪穴群のある新砂丘I，古砂丘と同一の海成砂丘台地と考えていたが，調査が進むにつれて様々なことが判明した。一つはこの低位段丘面が常呂川の氾濫の繰り返しによる堆積で形成されたと考えられることである。第1図の基本層序模式図に示すとおり基本的な土層は砂質土層であるが，この砂層の粒子は海成層のものよりも極めて粗く，海成層には含まれない大型の角礫を多量に含むことである。角礫混じりの砂層は特に第III層において顕著である。この砂礫層・砂層は数枚の薄い文化層と交互に堆積を繰り返す。平成8，9年の調査では縄文中期のトコロ六類・五類の下層に第Xa層の（古）トコロ六類と第XII層の平底押型文II群，平成10年の調査では第Xa層の下層にある第Xc層からも北筒式系の土器包含層，平成11年の調査ではさらに第XVI層の縄文前期綱文式の包含層を確認した。

第VII層の砂礫層からは層厚約30cmの中から縄文前期中野式，シュブノツナイ式，押型文と中期のトコロ六類・五類の北筒式が満遍無く出土している。安定した遺物の出土状態をもつ第VIII層とは明らかに異なった出方をしている。第VII層は河川の氾濫等による土砂の流失等による影響で，本来は下層にある土器が上部に押し上げられ時期が逆転したものと考えられる。平成2年から調査を行っている低位面はこの様な洪水等による土砂の堆積がたえず繰り返され現在の様な地形になったものであり，そこには第2図の地形模式図に示すとおり少なくとも3回のせり出しがあったようである。

第一次形成地は第XII層の縄文前期末の押型文から第VIII層中期のトコロ六類・五類が形成され

礫、角礫を含む極めて硬質な黒色土である。層厚は薄い区域で10~15cm, 厚い区域で約20~30 cm。河川の氾濫等によって西側域が削り取られている。

第二次形成地は第一次形成地を覆い、第II層~第VII層が約2~20mほど大きくせり出している。

第三次形成地には擦文期の竪穴と続縄文後北C₂・D式の生活面、オホーツク文化期の遺物包含層があるだけで、それよりも以前の時期の遺構は全く認められない。第二次形成地と第三次形成地の間は自然にできた窪みが細長く伸びており、オホーツク文化期の生活面があり土器などのほか獣骨類も散布されている。このことから第二次形成地は縄文中期後半から晩期にかけて少なくとも6回の河川堆積の後に形成された可能性がある。第三次形成地はそれ以後のものであり、砂質土は第二次形成地に比して粒子は極めて細かい。

層位ごとの時期区分は概ね次の通りである。

第I層 表土層

第II層 茶褐色砂層 縄文晩期, 続縄文, 擦文
オホーツク文化

第III層 褐色砂層 無遺物層

第IV層 黒色土層 縄文後期

第V層 褐色砂層 無遺物層

第VI層 黒色砂層 縄文中期後葉

第VII層 褐色砂層 遺物包含層

第VIII層 黒色土層 縄文中期中葉

第VIIIa層 褐色砂層 無遺物層

第VIIIb層 黒褐色砂層 遺物包含層

第IX層 褐色砂層 無遺物層

第X層 明褐色砂層 無遺物層

第Xa層 黒褐色砂層 縄文中期前葉

第Xb層 褐色砂層 無遺物層

第Xc層 黒褐色砂層 縄文中期前葉

第XI層 褐色砂層 無遺物層

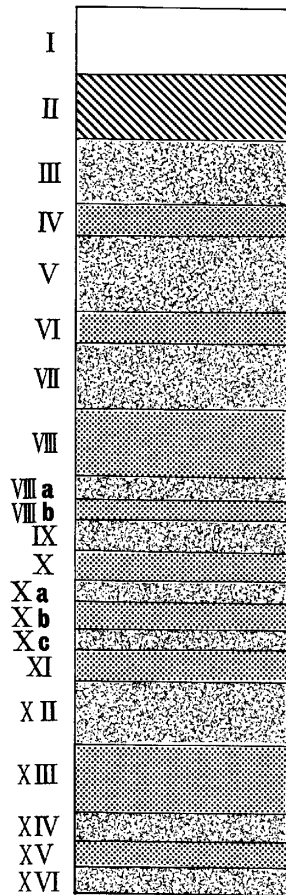
第XII層 黒色砂層 縄文前期末

第XIII層 褐色砂層 無遺物層

第XIV層 黒色砂層 無遺物層

第XV層 明褐色砂層 無遺物層

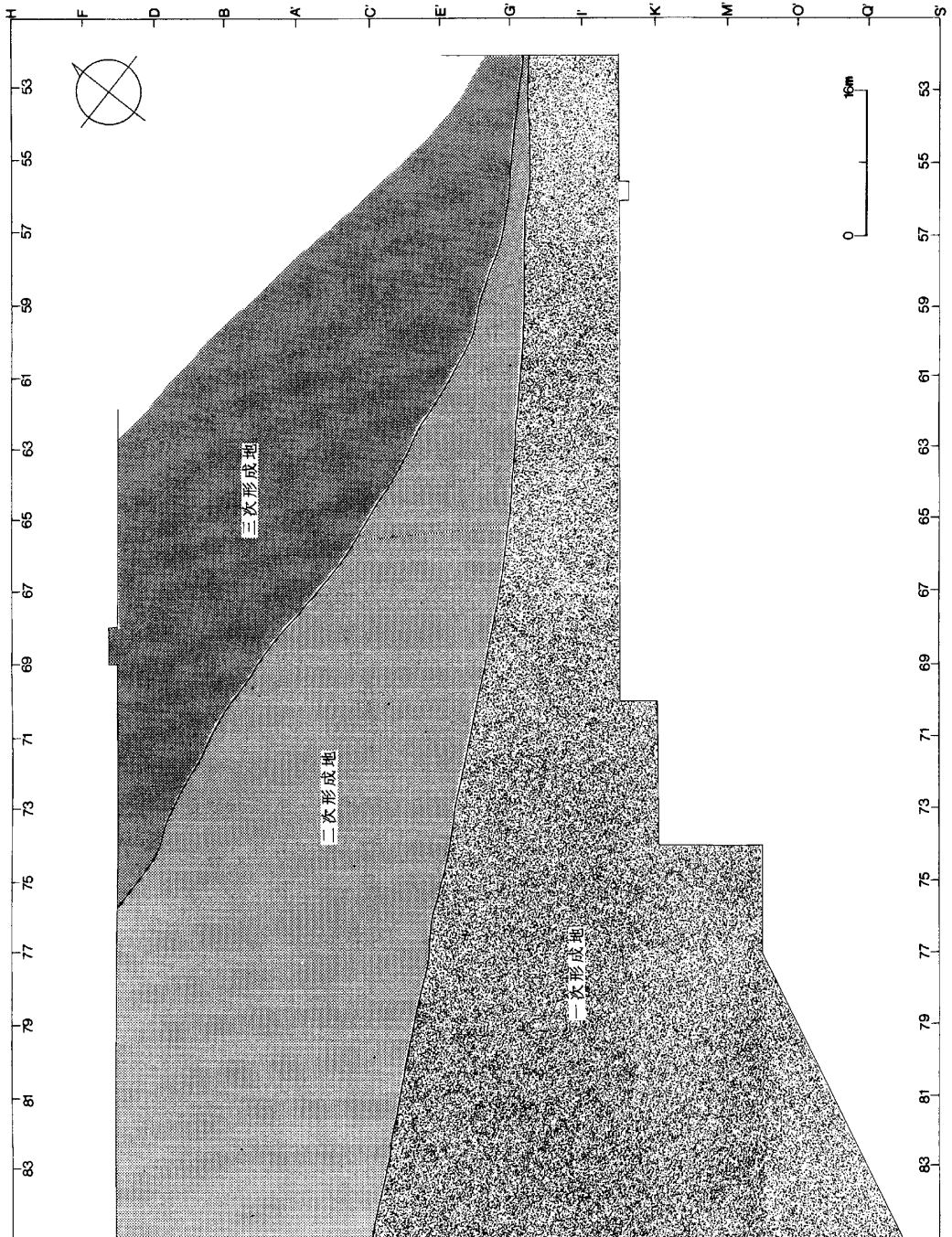
第XVI層 黒色砂層 縄文前期



第1図 基本層序模式図

参考文献

- 1) 遠藤邦彦・上杉陽『常呂』所収 東京大学文学部 1972

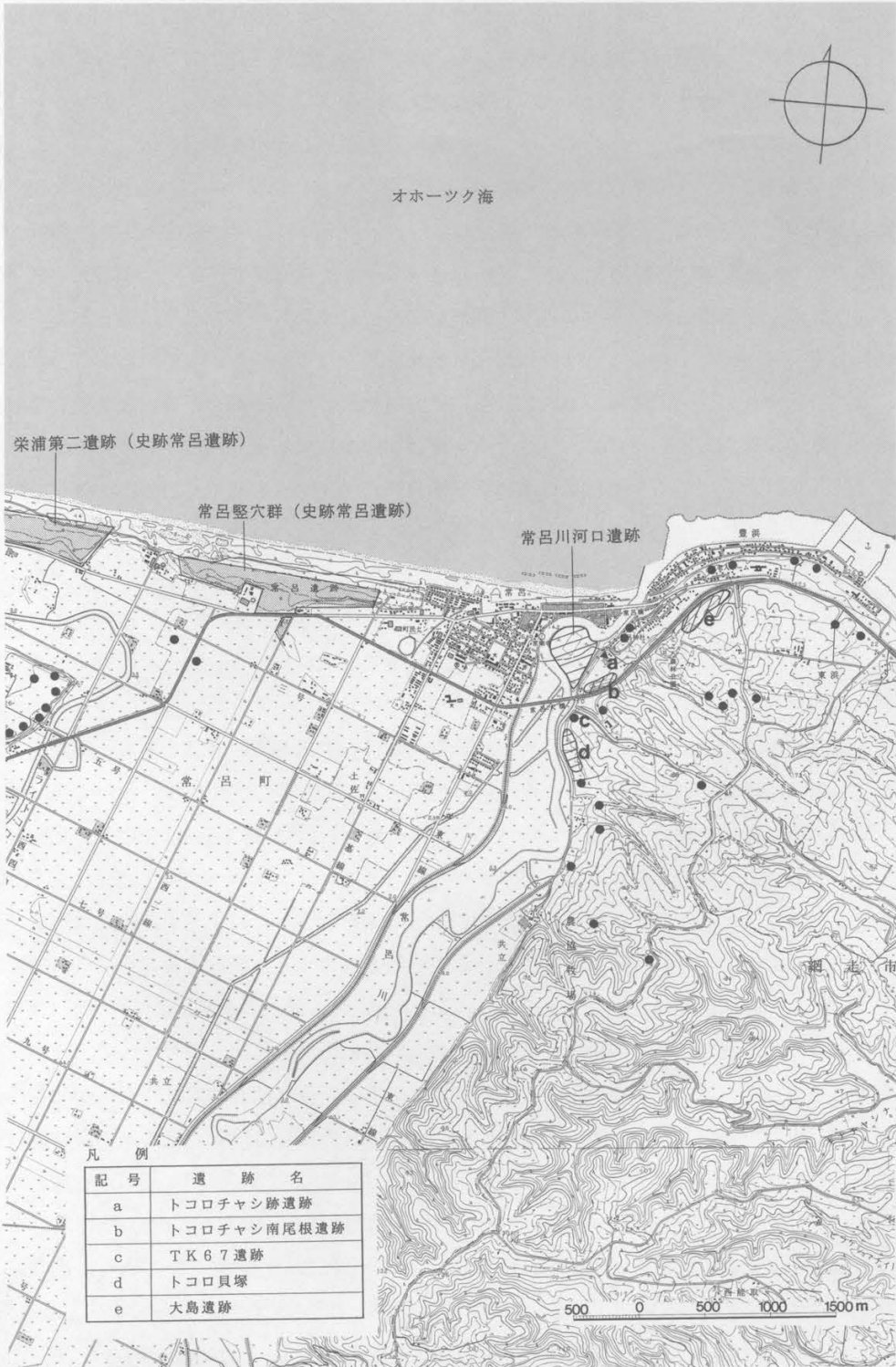


第2図 地形模式図

第Ⅲ章 周辺の遺跡

本遺跡の後背地にある標高20～30mの中位段丘には学史的にも有名な遺跡が多数存在する(第3図)。トコロチャシ跡遺跡は本遺跡から約100～150mの距離である。昭和35年には擦文文化とアイヌ文化の研究を目的とした調査が東京大学文学部により行われ、オホーツク文化期1号内側(藤本e群)、1号外側の2軒が調査された。また、竪穴の埋土中には近世アイヌ文化の遺構も検出されている。昭和38年にはアイヌ文化期の濠とオホーツク文化期の竪穴との関係を解明するためオホーツク文化期2号竪穴(藤本e群)と新旧2本の濠が調査されている。平成3年からは再度、トコロチャシ跡の濠の調査を実施しており、平成7年度の調査においては刀子、中柄、青銅製円盤をもつ矢筒、短刀、長刀を副葬するアイヌ墓のほかオホーツク文化期の屋外の骨塚も発見されている¹⁾。平成8年の調査ではチャシへの入口と思われる橋状遺構(ルイカ)に類する箇所も検出され、先に検出されていた柵列柱穴と合わせチャシ跡の構造解明に大きな成果が得られている。

さらに東京大学は平成10年からオホーツク文化期の竪穴の調査を開始した。トコロチャシ跡遺跡0地点としたチャシの濠の南側に位置する7号竪穴住居である。この竪穴の調査は平成11年も引き続き行われた。長軸13.5m、短軸9.7mの7a号と長軸8.5m、短軸7.4mの7c号の2軒重複住居である。いずれも火災を受けているが、特に7a号では白樺樹皮で巻かれた炭化材列などが確認され、住居の内部構造を解明する上で貴重な情報をもたらした。さらに各種の遺物も豊富である。骨塚の前面から出土した十字形の青銅製品をはじめ、炭化木製品では大小の盆・椀・樹皮容器・櫛・杓子・スプーンなどがある。骨塚ではクマ・エゾシカ・タヌキ・キツネなどがある。時期はソーメン状貼付文(藤本編年e群)に比定される²⁾。今後の調査と詳細な分析が待ち遠しいところである。この様に、トコロチャシ跡遺跡から南側に続く台地の縁辺部にはオホーツク文化期をはじめとした大型の住居の窪地が遺されており、常呂川河口遺跡を含むこの区域は栄浦第二遺跡に匹敵するオホーツク文化の集落遺跡と言える。トコロチャシ跡遺跡に連続するトコロチャシ南尾根遺跡は標高60～80mの高位段丘面から西側に派生する台地の縁辺部にある。地表面から32軒の竪穴が観察され、昭和39年に東京大学文学部により北筒式の1号竪穴が調査されている。昭和50年には「トコロバイパス建設」(国道238号線)工事に伴う緊急発掘調査がおこなわれ18軒の竪穴が発掘されている。この調査では特に縄文後期中葉の船泊上層式・鮎澗式・エリモB式が出土している。昭和61年にはこの遺跡の最西端部で住宅建設工事に伴う緊急発掘調査が行われ8軒の竪穴が調査されている。擦文文化の竪穴埋土からは頸部に「井」のヘラ記号を持つ五所川原産の須恵器である長頸壺が出土し、縄文晩期のピットからは中葉頃の刺突の施された鉢型土器、ボート形の浅鉢が出土している。トコロチャシ南尾根遺跡から沢を挟んだ対岸にはTK67遺跡がある。昭和47年に発見されたこの遺跡は昭和61年、



第3図 常呂川河口遺跡の位置と周辺の遺跡

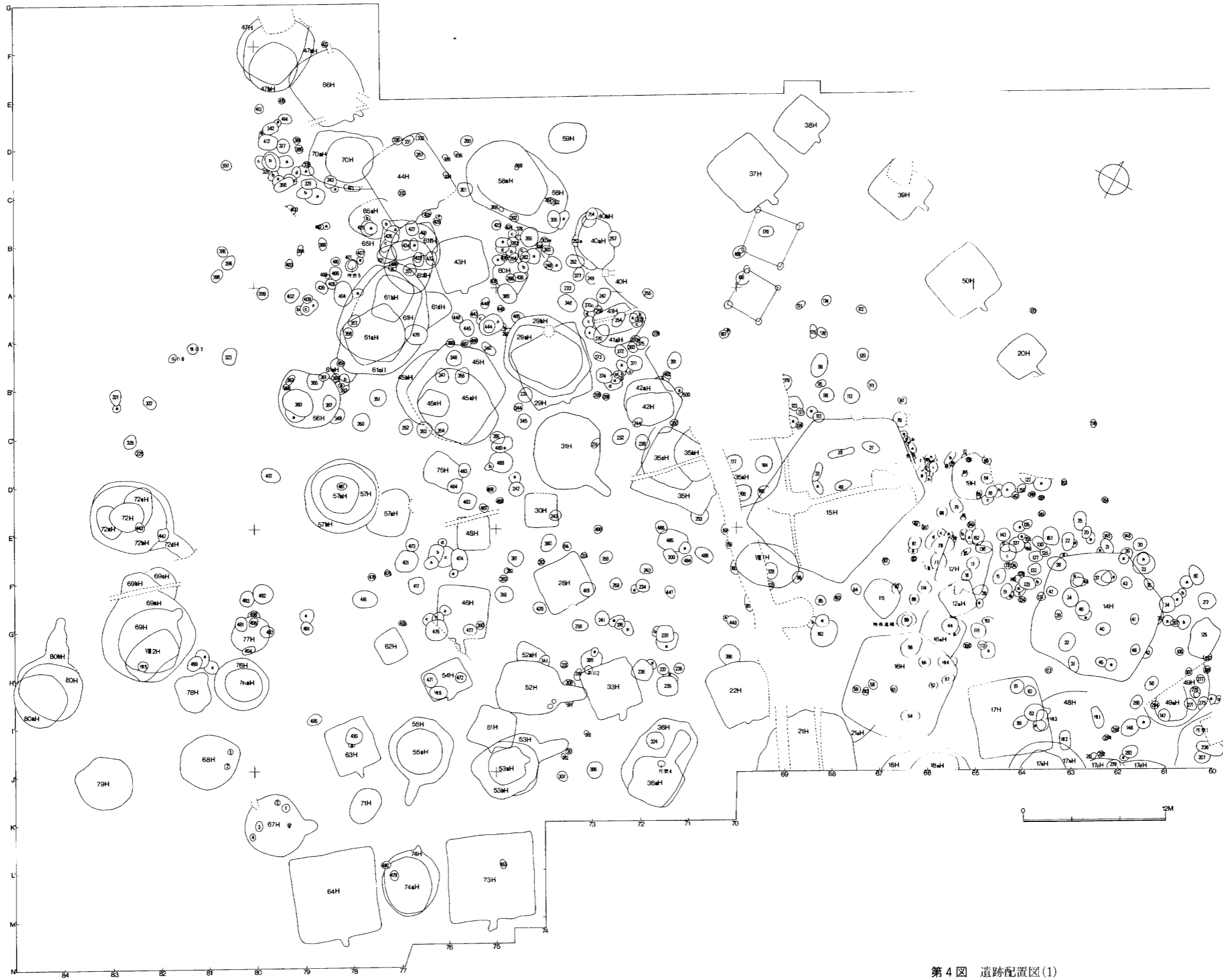
常呂川河口遺跡

62年に道営畑総事業の農道改良工事に伴い緊急発掘されている。常呂川を望む台地の縁辺部から比較的急傾斜な北側斜面に擦文期の竪穴5軒、時期不明のピット群があり、さらに奥まったところには続縄文期を主体とした竪穴がある。擦文期は後半期のものであり、包含層からは五所川原産の大甕の須恵器が出土している。常呂町内から須恵器が出土する遺跡はこのほか包蔵地範囲確認調査において岐阜127-6番地から1点、常呂川河口遺跡から1点出土している。いずれも五所川原産である。TK67遺跡に連続しているのがトコロ貝塚である。長さ約200m、幅約70mのカキ貝を主体とした縄文中期北筒式の貝塚である。昭和33年～36年に東京大学文学部による学術調査が実施され、トコロ六類・五類が層位的に確認されるとともに縄文早期の石刃鏃が類竹管文を3段めぐらしたトコロ14類土器と共伴することが明らかにされた。石刃鏃は平成11年度に行われた東京大学大学院人文社会系研究科教授宇田川洋氏を研究代表とする地域連携推進研究の確認調査においてもトコロチャシ跡遺跡に近接する台地縁部から多量の石刃とともに出土している。同じく平成12年には縄文早期の竪穴、前期～中期の集石遺構が確認されている。さらに平成13年には2基のオホーツク墓、続縄文後北C₂・D式期の竪穴が発見されている。

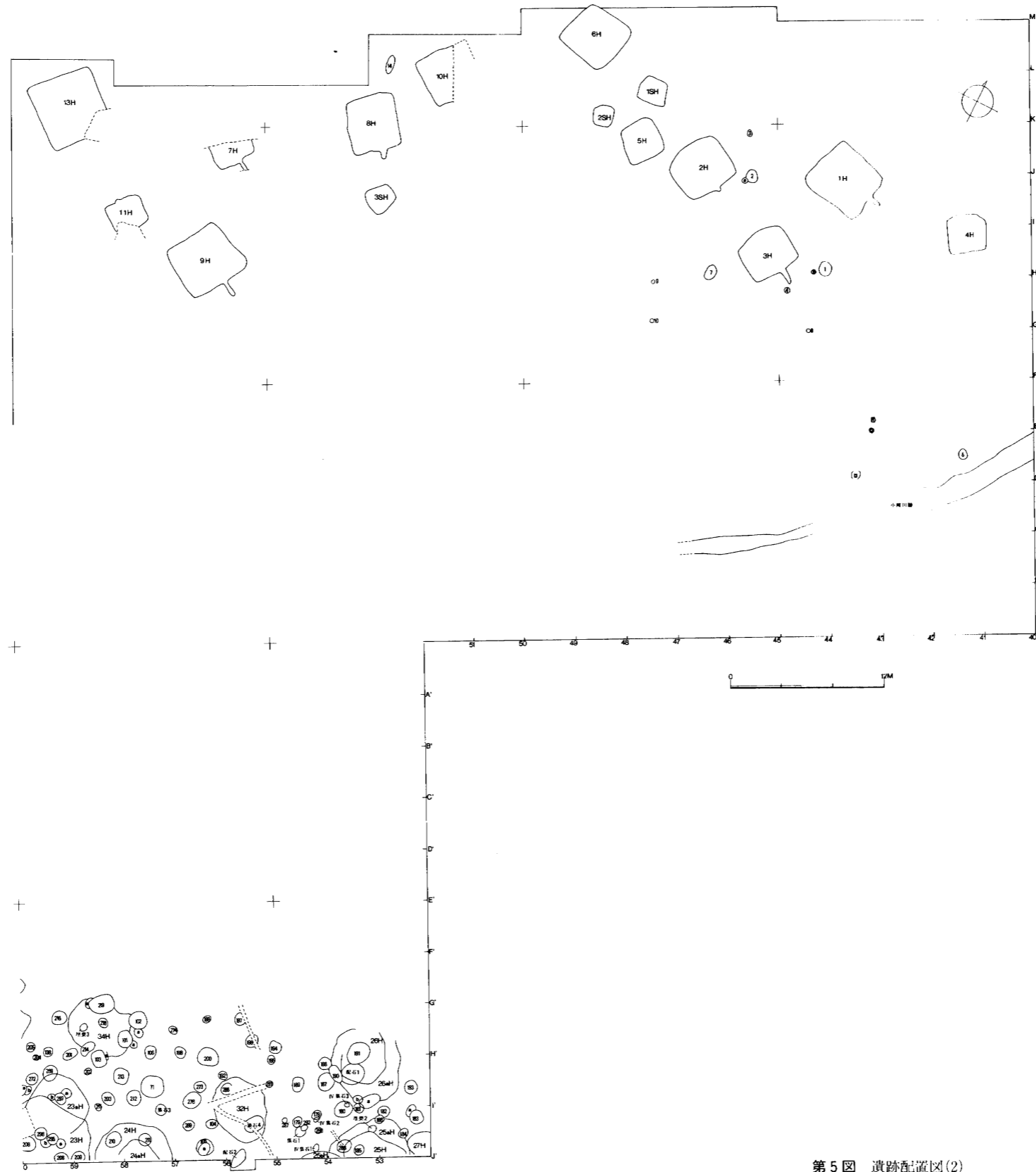
この様に本遺跡の後背地の段丘上には大遺跡が多く、時期も縄文早期からアイヌ期まで連続しており、常呂川河口遺跡の性格を解明する上でも重要な地域である。例えばオホーツク文化1期の竪穴をみてもトコロチャシ跡の4軒と本竪穴の15号はソーメン状貼付文（藤本e群）の時期であり、両者に新旧関係があるのかそれとも同時併存するか等の問題がある。擦文期の竪穴も常呂川河口遺跡と同じ後期のものが多い。続縄文期の竪穴では宇津内系、次いで後北系が多い様である。縄文後期では今のところ常呂川河口遺跡からは竪穴の発見はないが、ピット2基、集石4基がありこの周辺にも集落跡が予想される。これはオホーツク文化期に限らず全時代にも共通することである。これらの遺跡はごく一部分を調査したにすぎず各時期の全容を明らかにすることはできないが、現時点でこれらの遺跡と対比すると低地である常呂川河口遺跡の方が面としての広がりは大いようである。段丘上の遺跡と低地の遺跡は同時併存したのか、ある程度の時期（間）があるのか今後の課題である。常呂川河口遺跡の場合は漁労活動の一時的な生活場としてではなくかなり定住しているようである。それは前北式系の人々が最も顕著である。宇津内系の竪穴は最も多く、集落の近くに墓域を形成している。墓の副葬品は他の遺跡から比較すると圧倒的に豊富である。前回報告したピット95・254・263a・301と今回、報告するピット470がその例であり、琥珀玉の出土量の多さには目を見張るものがある。ピット470では大型・小型土器、各種の石器の中には石偶、クマを意匠したペンダントもある、副葬品の豊富さは生産活動の賜物であり、安定した食料源の獲得が一定の定住をもたらしたのであろう。低地にも大規模の遺跡が存在する理由を改めて考える必要がある。

文 献

- 1) 東京大学文学部考古学研究室・常呂研究室 「トコロチャシ跡遺跡」1995年度調査略報 1995.9
- 2) 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室・常呂実習施設「トコロチャシ跡遺跡0地点」1999年度調査略報 1999.9
- 3) 東京大学大学院人文社会系研究科・常呂町教育委員会「トコロチャシ跡遺跡群の調査」トコロチャシ跡遺跡・同オホーツク地点及び「常呂遺跡」の史跡整備に関する調査概要報告 2002.2



第4図 遺跡配置図(1)



第5図 遺跡配置図(2)

第IV章 竪穴住居

47号竪穴

遺構 (第6図, 図版1-1)

本竪穴はE79・80, F79・80グリッドにまたがって位置する。規模は長軸5.8m, 短軸5.2mであるが、西壁が攪乱をうけており未検出であるため、本体長軸は6m以上であったと考えられる。平面形態は不整形な縦長の楕円形を呈する。壁高は確認面から30cmを測る。柱穴は直径10~15cm, 床面からの深さが15~20cmである。壁の立ち上がりに沿って検出され、南西部分がやや不規則なのに対して、北東部分はほぼ等間隔に配置されている。

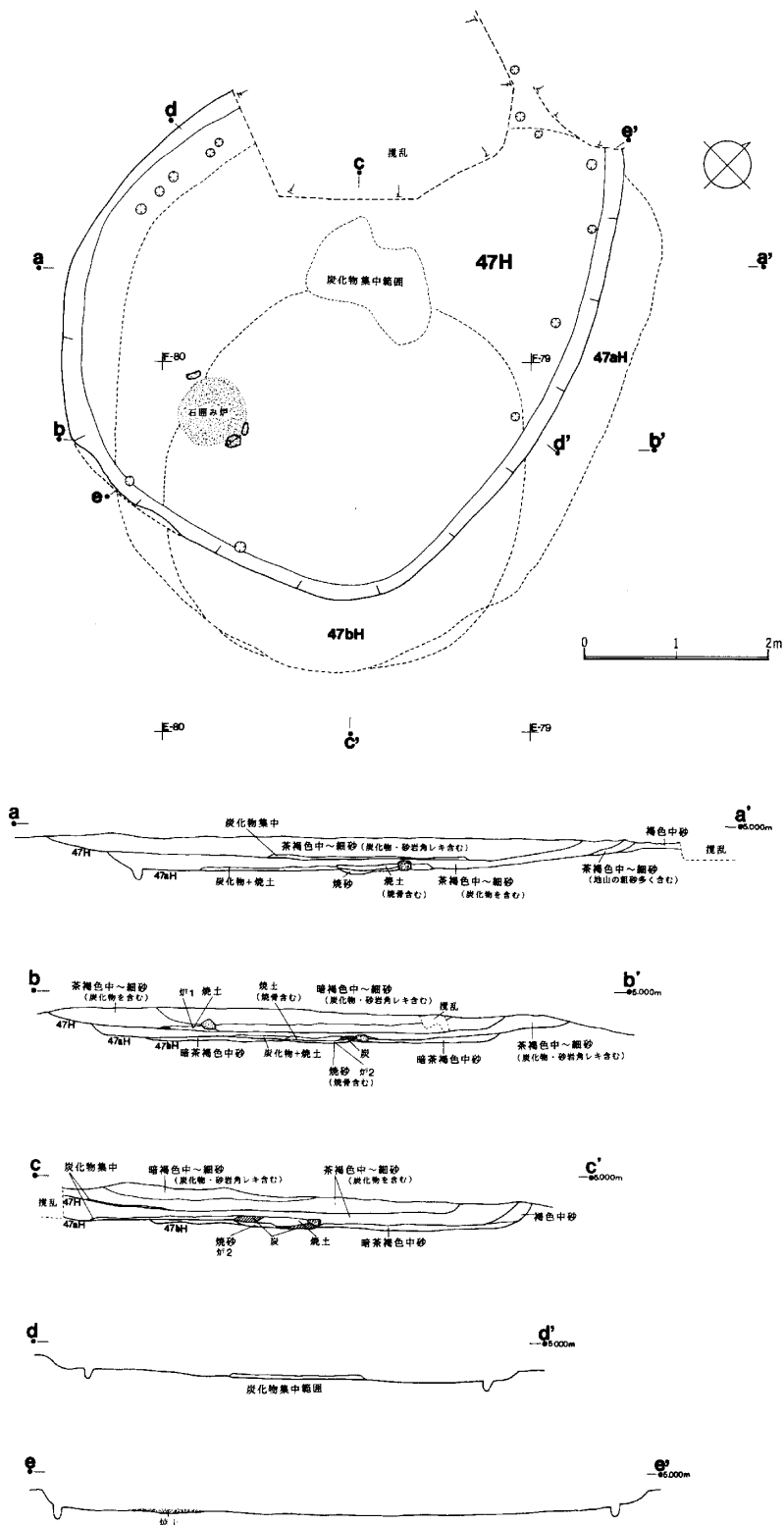
炉跡は竪穴中央よりも南寄り、直径70cmほどの円形の黄褐色土と焼土、焼骨の含まれた土とその周辺から角礫2点を検出しており、石囲み炉であったと考えられる。この北側には床面で長軸50cm, 短軸40cmの範囲で炭化物が集中している。その他に床面には竪穴中央付近で1.4×1.0mの範囲で炭化物と焼土の混在した層が1~2cmの厚さで堆積しており、黒曜石のフレーク・チップが多量に含まれていた。この範囲の北側では黒曜石のフレーク・チップ集積を検出した。

遺物 (第7図, 第8図, 第9図, 第10図)

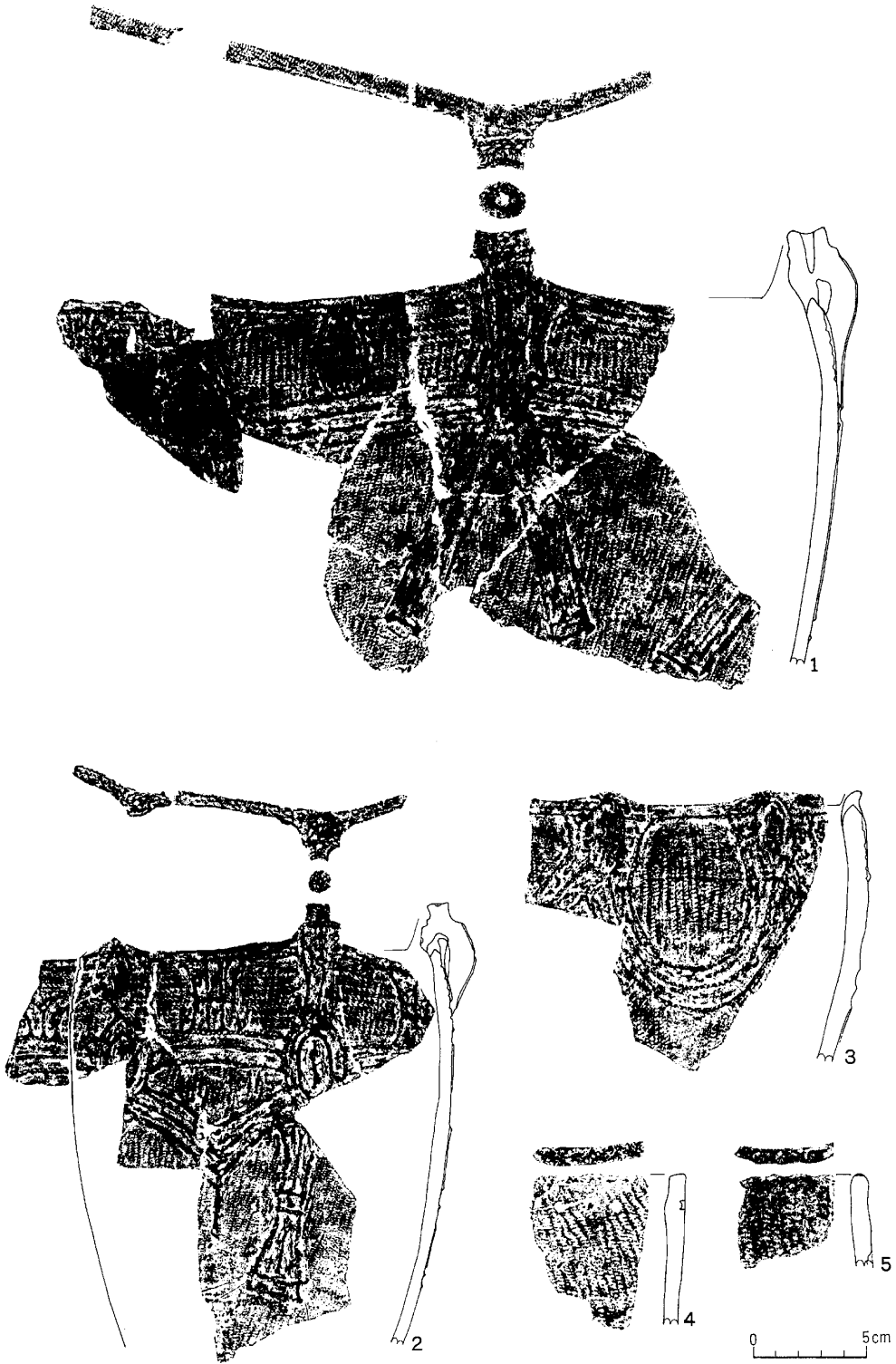
第7図はすべて床面出土である。1~3は続縄文宇津内II b式。4・5は続縄文初頭のもの。4は口唇部に縄文, 外面に円形刺突文。5は口唇部に2条1対の縄端圧痕文施文。

第8図-1・2は床面出土, 3~6は埋土出土。1は口唇部に刺突, 胴部に縦走縄文。口縁部と胴部にそれぞれ幅2cmほどの横ナデが施されている。2は胴部から底部に縦走縄文。揚げ底の底部。3~5は宇津内II b式。5は口縁部内面に縄線文。小突起部分には縦方向の縄線文。外面には小突起部分に3つ, 口縁部に1つの刺突がある。6は埋土出土。宇津内II b式。器高10cmほどの小型土器である。口唇部に刻みが施される。4箇所以小突起があり, それぞれの下部には2つずつ隆起がある。また, 小突起の頂点から縄線文が1条垂下し, 口縁部から胴部にかけては8条の縄線文を施しているため, 隆起が十字形に四分割されているように見える。縄線文の上から2本目と3本目の間と5本目と6本目の間, 8本目の下に縄端による圧痕が施される。

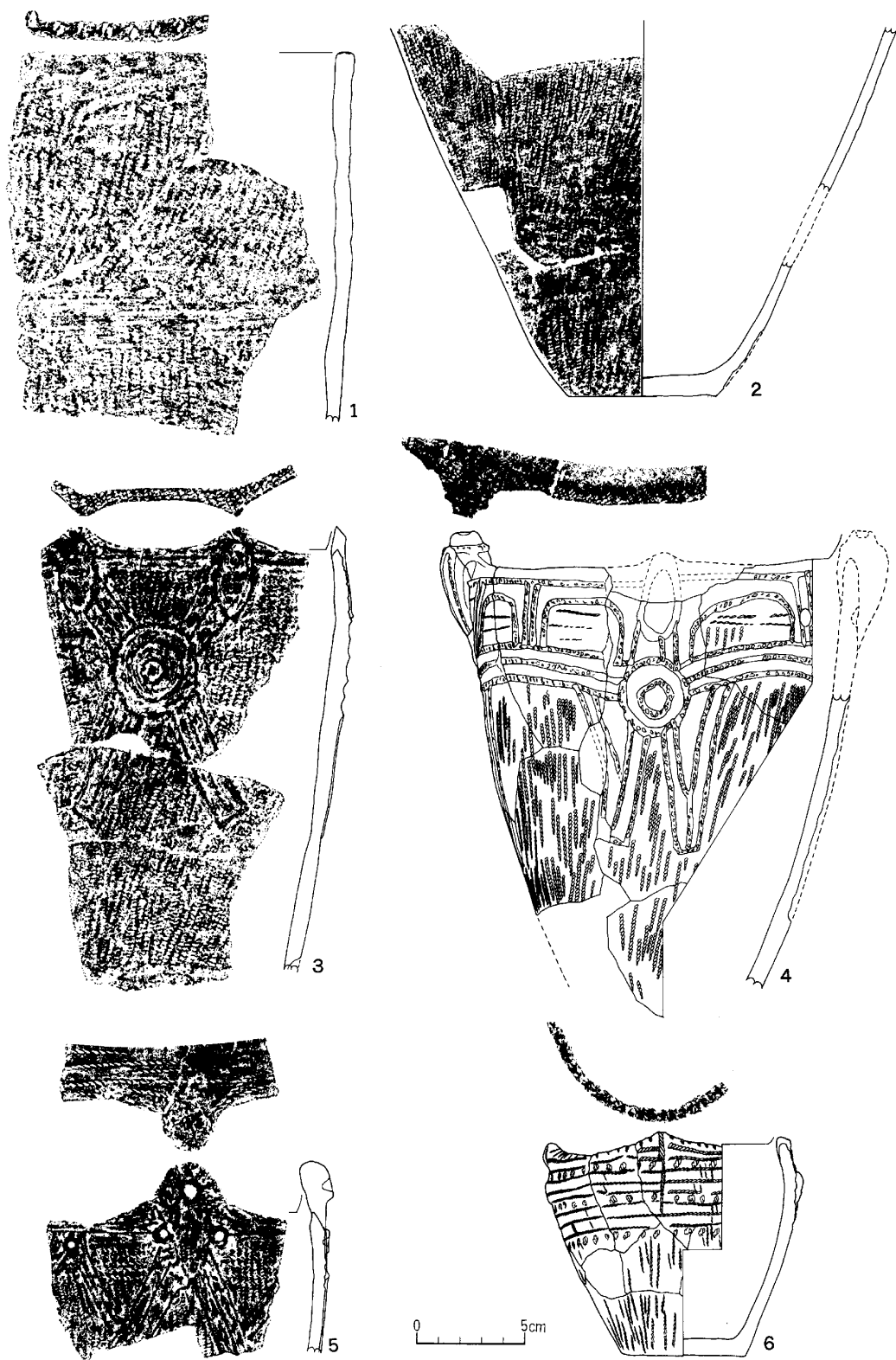
第9図はすべて埋土出土。1は外面は横ナデ, 内側からの突瘤文の下に列点文。2は続縄文初頭。一部欠けているが, 刻みのついた山形の貼付文が頸部につく壺型土器。貼付文の輪郭に沿って刺突がある。頸部に2条の横走縄線文。3も続縄文初頭。口唇部に縄文施文。外面に刺突文。4は縄文晩期末。口唇部に刻み。口縁部に3本の横走沈線。5~8は縄文晩期末から続縄文初頭の土器。5は口唇部に円形刺突文。口縁部に斜めの沈線。6は口縁部上部に縄端圧痕



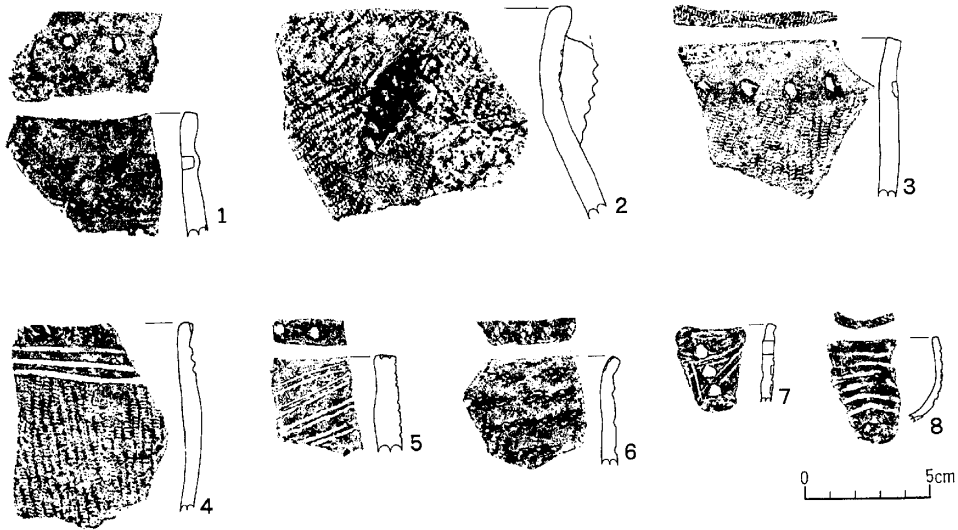
第6図 47号竪穴平面図



第7图 47号竖穴床面(1~5)出土土器



第8圖 47号竖穴床面(1・2)・埋土(3~6)出土土器



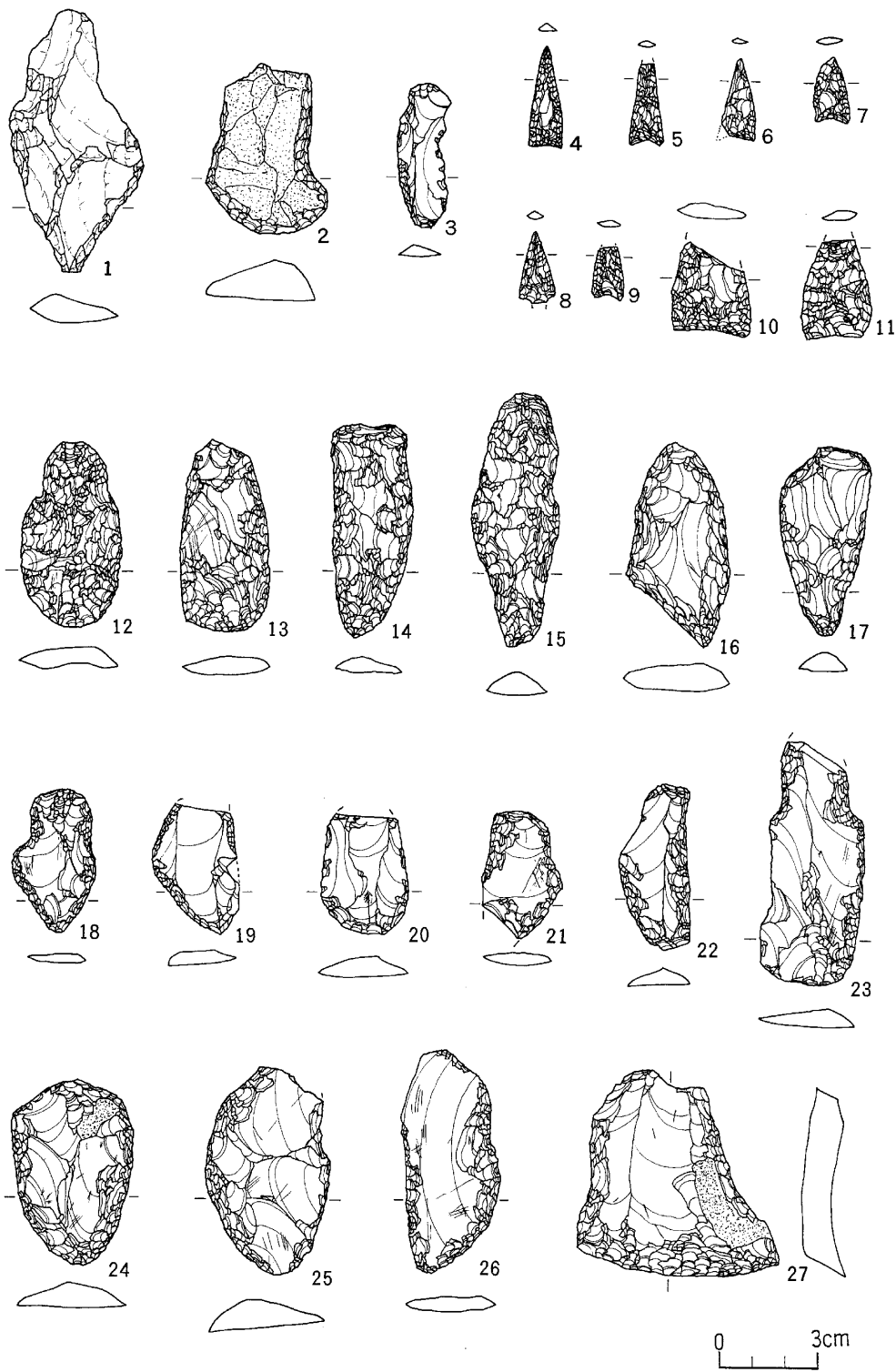
第9図 47号竪穴埋土（1～8）出土土器

文。外面は4条の縄線文。7は小型土器。口縁部に外からの穿孔とその下に縦に円形の刺突。斜めと縦の沈線で施文。8は鉢形のミニチュア土器。横走沈線が口縁部から胴部に施される。

出土石器は第10図である。1は床面出土で玄武岩製の搔器あるいは未製品。2・3は石囲み炉出土。2は原石面の多く残る搔器。4～27は埋土出土。4～11のうち8は有茎石鏃、その他は無茎である。10・11は大型の石鏃。どちらも先端部が欠失している。12～15は両面加工ナイフ。16・17・22・23は削器。16は折損部を再加工して刃部を作り出している。23は柄付である。18～21・24・25・27は搔器。26は両面加工ナイフ。左縁辺に両面加工がされている。1以外はすべて黒曜石製。

小 括

床面から続縄文字津内II b式が出土しているため、この時期の竪穴である。（熊木美野里）



第10图 47号竖穴床面(1)·炉(2·3)·埋土(4~27)出土石器

47 a 号 竪 穴

遺 構 (第11図, 図版1-2)

47号竪穴よりやや東にずれた形で重複している。長軸6.2m, 短軸5.4mである。東壁は擦文期の66号竪穴に切られており, 壁の立ち上がりはほとんど検出できない。平面形態は不整形な縦長の楕円形を呈する。壁高は確認面から40cm, 47号竪穴の床面からは10cmと浅くなっている。柱穴は壁の立ち上がりに沿っており, 直径15~18cm, 床面からの深さ15~20cmのものと, 直径6~10cm, 床面からの深さ10~15cmのもの2種類がある。

炉跡は竪穴中央よりも南寄りと北寄りの2箇所検出した。南寄りの炉1, 北寄りの炉2ともに黄褐色土と焼土, 焼骨の周囲に被熱した角礫がめぐっており, 石囲み炉であったと考えられる。石囲みはどちらの炉も1/3ほどしか残っていない。炉1よりも炉2により多く焼骨が含まれている。

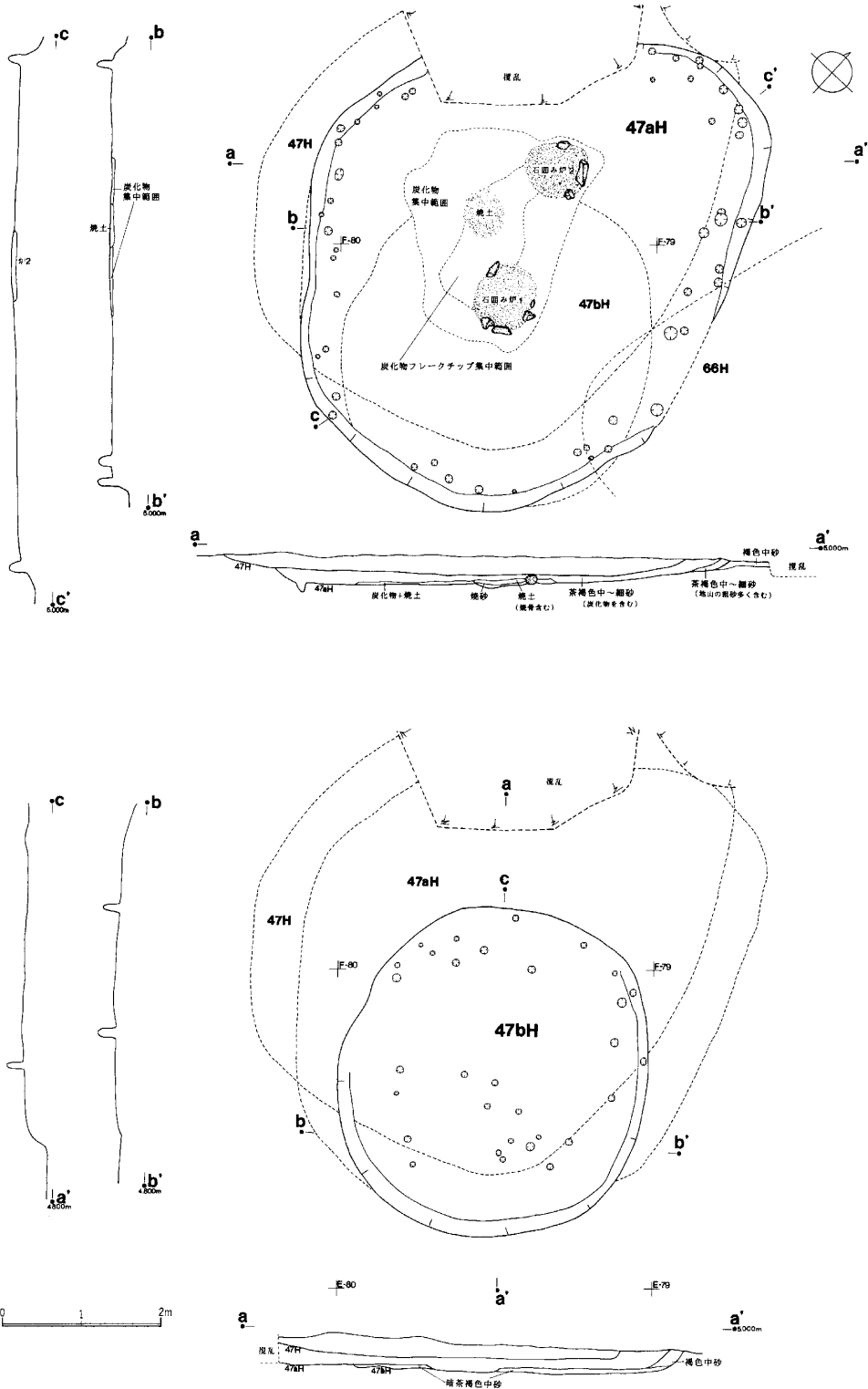
床面からは2基の炉の周囲を中心に2.5×1.6mの範囲で炭化物と焼土の混在した層が1~2cmの厚さで堆積しており, 黒曜石のフレーク・チップが多量に含まれている。この状況は47号竪穴に類似している。また, 竪穴の中心部分に直径50cmの円形の焼土を検出しているが, 焼骨は含まれていない。2つの炉とこの焼土を繋ぐように, 特に炭化物と黒曜石のフレーク・チップが集中して分布している。

遺 物 (第12図, 第13図, 第14図)

第12図-1~4は床面出土。5~7は埋土出土である。1は宇津内II a式。口縁部外面には直径2cmほどの円形貼付文が縦方向に2個1対と, 胴部に1個。貼付文には上部, 中央, 下部にそれぞれ3つ1組の縄端圧痕文。口縁部外面に2条の縄線文。貼付文のの内側からの突瘤。2は縦位縄文。3は口縁部上部内面に1対で原体を押捺している。外面は縦位縄文のち縄端による施文。4は宇津内II b式。器高10cmほどの小型土器。口唇部に部分的に縄文施文, 口縁部に1対の吊り耳とその中間位置にあたる胸部に2個1組のボタン状の貼付文が2箇所ある。口縁部には継続して4~7条の縄線文が施文されている。5・6も宇津内II b式。5は僅かに突起がある。6は小型土器。小突起があり, 口縁部上部に1条の貼付文と断続的な浅い縄線文が施文されている。7は口唇部に刻み, 口縁部に4条の縄線文と一部円形の刺突がある。内側から突瘤。

第13図-1は床面。2~10は埋土出土である。1は宇津内II a式の壺形土器。口縁部には上下を縄端で押捺した2列の隆帯がめぐる。下列の隆帯が1対で垂下し, これによって区画された部分に縄端圧痕文が充填されている。その下に2列の縄端圧痕文がめぐる。2は頸部が「く」の字状に外反する。口唇部に縄端圧痕文。口縁部には円形に器面が剥落している部分があり, 円形の貼付文があった可能性がある。捺糸文が地文。3は下田ノ沢2式の系統。口唇部に縄文。胴部は一部刺突のある貼付文が斜めに交差している。地文は斜めまたは横走縄文。4~10は続

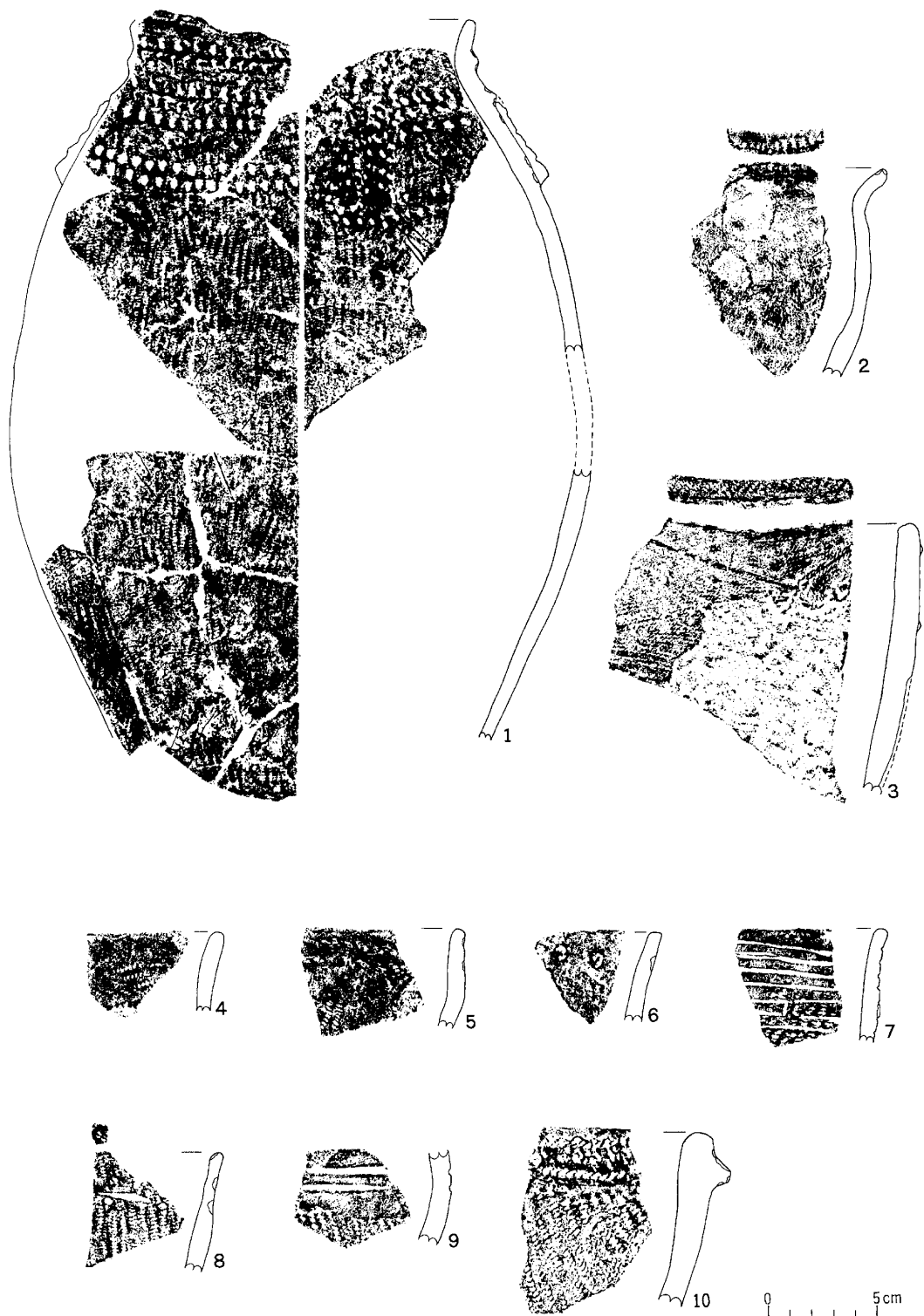
常呂川河口遺跡



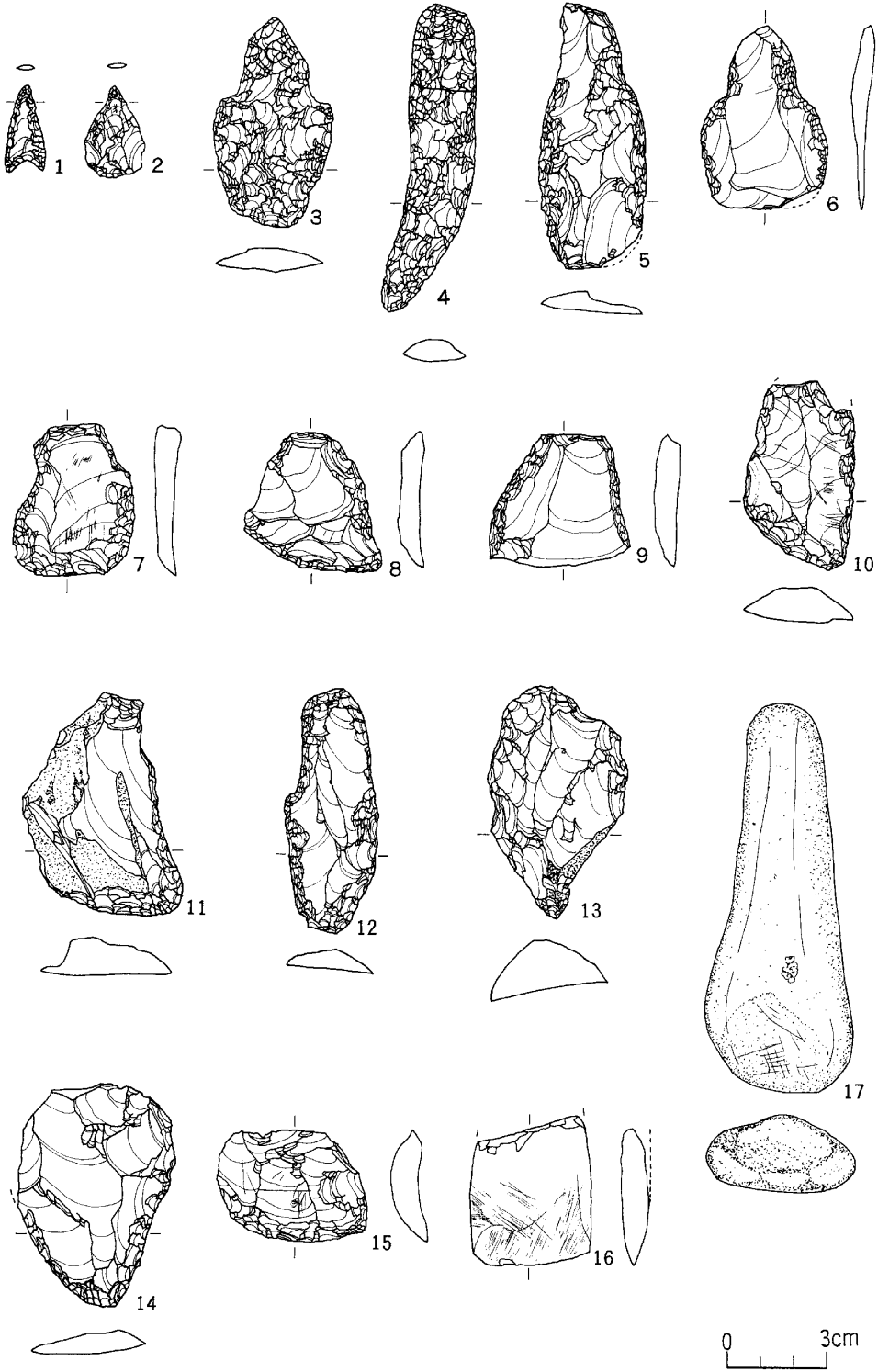
第11図 47a号竪穴, 47b号竪穴平面図



第12图 47a号竖穴床面(1~4)·埋土(5~7)出土土器



第13図 47a号竪穴床面(1)・埋土(2~10)出土土器



第14图 47a号竖穴埋土(1~17)出土石器

縄文初頭。4は口縁部に横走縄文と縄端圧痕文。5は口縁部が垂直に立ち上がり、胴部がやや内湾する。口縁部に2条の縄端圧痕文。6は口縁部外面に刺突。7は口縁部に横走沈線と工字文。上部2条の沈線は浅く、それ以下の沈線はやや深く施文されている。8は口唇部に縄端縄端圧痕文。外面は2列の刺突文。9は2条の横走沈線。器面は外面が赤く、内面が黒く焼成している。10は口縁部に突帯。突帯上面には縄端を押捺し、平坦面と下部にはそれぞれ1条の縄線文を施文。

石器はすべて埋土出土。第14図-1~15は黒曜石製。1は無茎石鏃。2は石錐。3・4は両面加工ナイフ。3は柄付き。5・6・8・9は削器。7・10~15は搔器。16は青色泥岩製の磨製石斧。刃部に擦痕が残る。17は泥岩製のたたき石。

小 括

床面から続縄文期の宇津内II b式が出土しているため、この時期の竪穴である。また、47、47a号竪穴は出土遺物の時期差がほとんど見られないこと、規模、平面形態が類似していることから短期間のうちに建て替えられたものと考えられる。(熊本美野里)

47 b 号 竪 穴

遺 構 (第11図)

47a号竪穴の下層から検出した。直径約4mの円形を呈する。南東壁がほぼ47a号竪穴のそれに重複している。壁高は47a号竪穴の床面から6cmであるが、南東部分以外はほとんど立ち上がりは検出できない。柱穴は直径5~15cm、床面からの深さは15cm前後である。炉跡は検出していない。また、埋土がほとんどなかったことから遺物は出土していない。

小 括

出土遺物がなく、時期の確定は困難であるが、宇津内II b式より古いことは確実である。また、重複する47、47a号竪穴とは平面形態、規模ともに類似がないため、時期を異にするとも考えられる。(熊本美野里)

48 号 竪 穴

遺 構

本竪穴はI'62, J'62グリッド、擦文期の17号竪穴の北側に位置する。平成4年9月の集中豪雨により遺跡の大半が冠水し、土地の一部が削り流される被害を受けた。本竪穴は概ね、壁の立ち上がりと床面を精査した段階で影響を蒙ったため竪穴の平面図も記録することができなかった。当時の調査日誌からの概要では擦文期の17号竪穴に南東側が切られており、床面は部分的に黄褐色粘土が貼られている。規模は直径約8～9mの円形を呈する様に見受けられた。ほぼ中央部に直径約30cmの炉跡がある。壁の立ち上がりは浅く皿状であり、高さは約15～20cmであった。

遺 物 (第15図, 第21図-1～7)

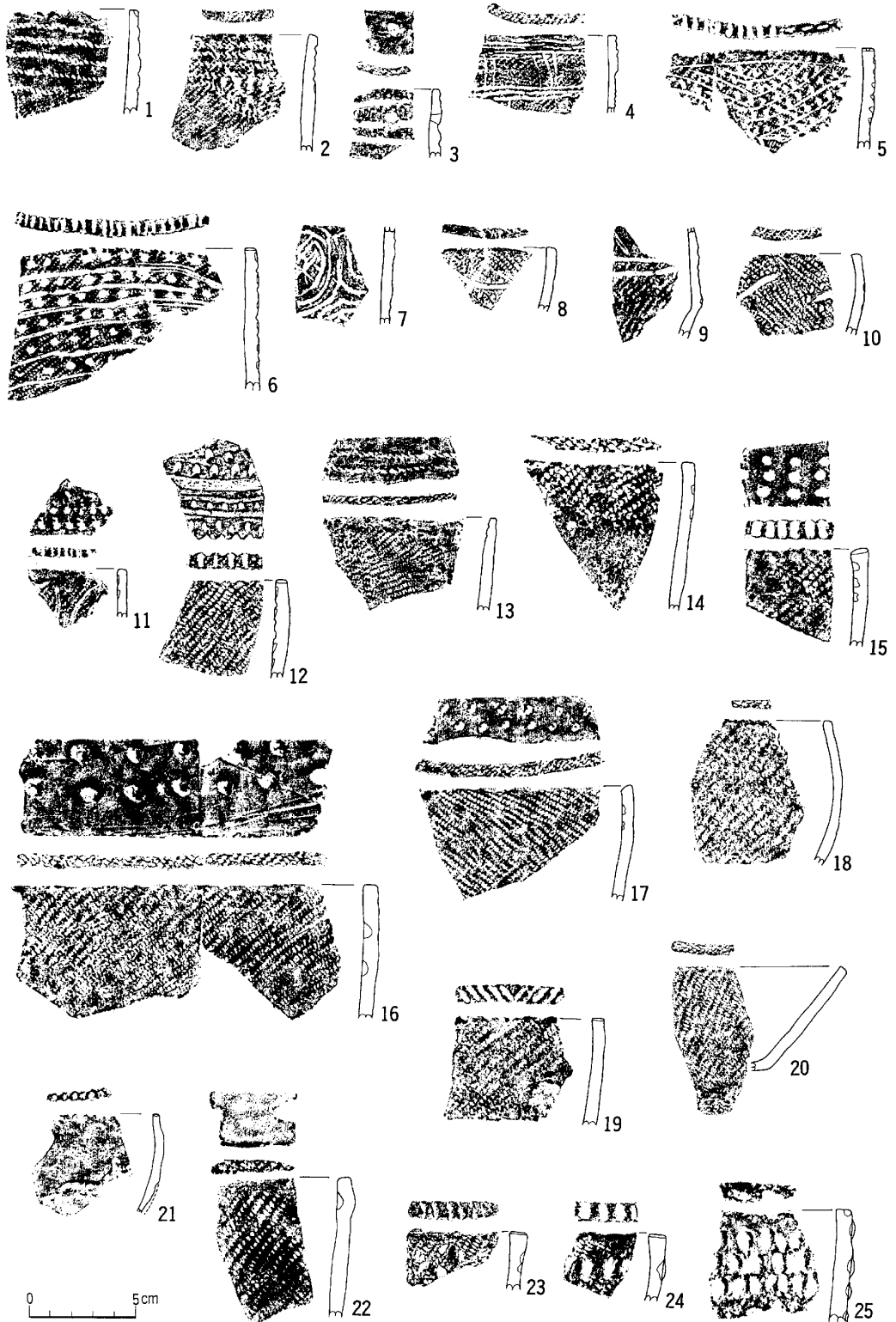
遺物はすべて埋土出土であり、縄文晩期の土器が比較的多く出土している。1～21・23は縄文晩期中葉, 22・24・25は同前葉であろう。1は口縁部に5条の縄線文が施される。口唇部は小波状を呈するもので晩期中葉であろう。2は縄線文を直線, 曲線的に施す。3・4は沈線のあるもので, 4は数珠の細い沈線文間に縦位の沈線が加わる。5は曲線化した沈線間に刺突が重鎮され, 6は直線化した沈線間に円形状の刺突が施される。7・8とも曲線的な沈線が施され, 8は上下に刺突が連続する。9は張り出した胴部に円形刺突が加わり, その上部には横位と斜位の沈線が見られる。10は口縁部が内湾し, 短刻線を囲む様に刺突が施される。小型の土器である。11は曲線的な沈線が施され, 内側には横方向からの刺突が連続する。12・13, 15～20は縄文を地文とするもので, 12は内側に沈線と下方からの刺突が加えられる。13は内側に縄線文, 15・16は円形刺突, 17は楕円形刺突が見られる。14は器面に縄端圧痕文が施される。20は浅鉢であろう。21は無文。22は内側からの突瘤がある。23は盛り上がりのない爪形文。24・25は盛り上がりのある「ハ」字状の爪形文。

石器は第21図-1～7が出土。1～4は有茎石鏃。4は返しが見えずで先端部と基部が欠失するものの鏃身は長い。5・6は削器。5は下端部に原石面を残す。7は刃部に粗い加工を加えた分銅状のナイフ。3・7は玄武岩製であり, 他は黒曜石製。

小 括

集中豪雨による溢水で遺構の全容を掴むことはできなかったが, 途中の調査状況から判断すると本竪穴は縄文晩期中葉の可能性が高いと思われる。「常呂川河口遺跡調査報告書(1)」1996年の特殊遺構1(粘土貼り遺構)としたものは本竪穴の西側約16mに位置しており, 本竪穴同様の晩期中葉の土器を伴っている。

(武田 修)



第15图 48号竖穴埋土(1~25)出土土器

49 号 竪 穴

遺 構 (第16図, 図版2-3)

本竪穴はI'60, 61グリッドに位置する。平成4年9月の17号台風に伴う集中豪雨による冠水で西側の半分は削り取られている。規模は残存部から判断すると推定長軸約7m, 短軸約5mの楕円形を呈する様である。壁高は約15cmを測る。中央部には角礫を用いた直径約80cmの石囲み炉がある。石囲みは南側に小角礫がある。おそらくこの南側部は開口するのであろう。焼土の赤化はそれほど著しくない。石囲み炉から南壁部にかけての床面はやや盛り上がりを見せる。直径約10~25cm, 深さ約5~14cmの壁柱穴は7本あり, やや内側に直径約30cm, 深さ約11cmの支柱穴が1本ある。

遺 物 (第17図, 第18図, 第19図, 第20図, 第21図-8~23, 第22図-1~3, 図版2-4~6)

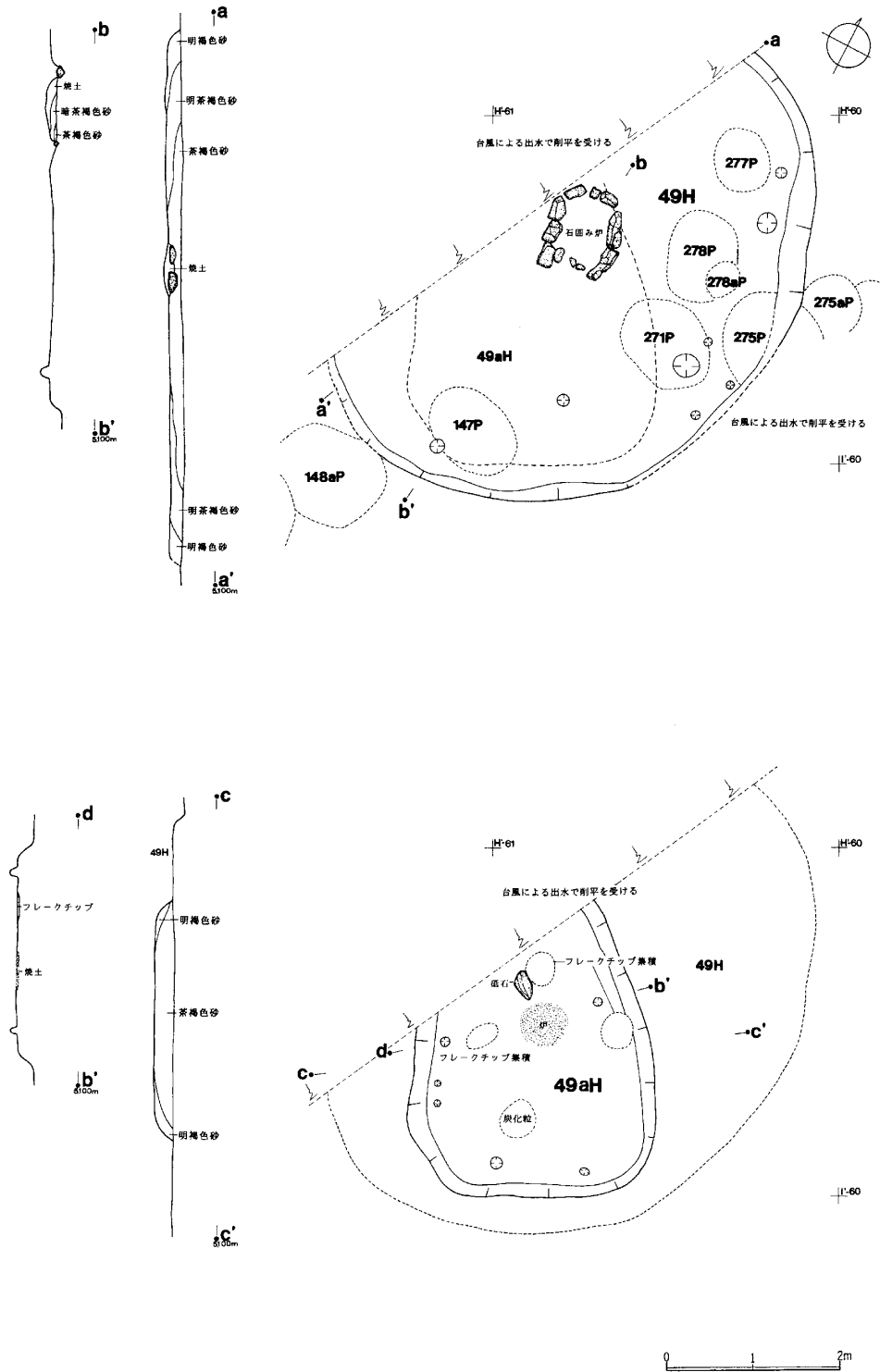
第17図-1は床面から出土した突瘤文のある続縄文宇津内II a式。2は口径10cm, 器高7.2cmの小型鉢形土器。器面は無文で刷毛により調整された擦文土器。3~6は後北C₂・D式。7~12は宇津内II b式。8は口径約15.2cm, 器高14.7cmの中型土器。1対の大形突起と2個1対の小形突起から擬縄隆帯が垂下する。9は口縁部の横位微隆起帯と胴部から底部にかけて施された縦位の微隆起帯で構成される。12は口径約12cmの小型土器。小さな同心円文を隆帯で連結する。7~12は宇津内II b式。

第18図-1は口径約36cmの大型土器。口縁下部に突瘤文と縄線文が施され, 小突起下部のボタン状貼付文から断面台形状の隆帯が垂下する。器面は撚糸文を地文とする。宇津内II a式。

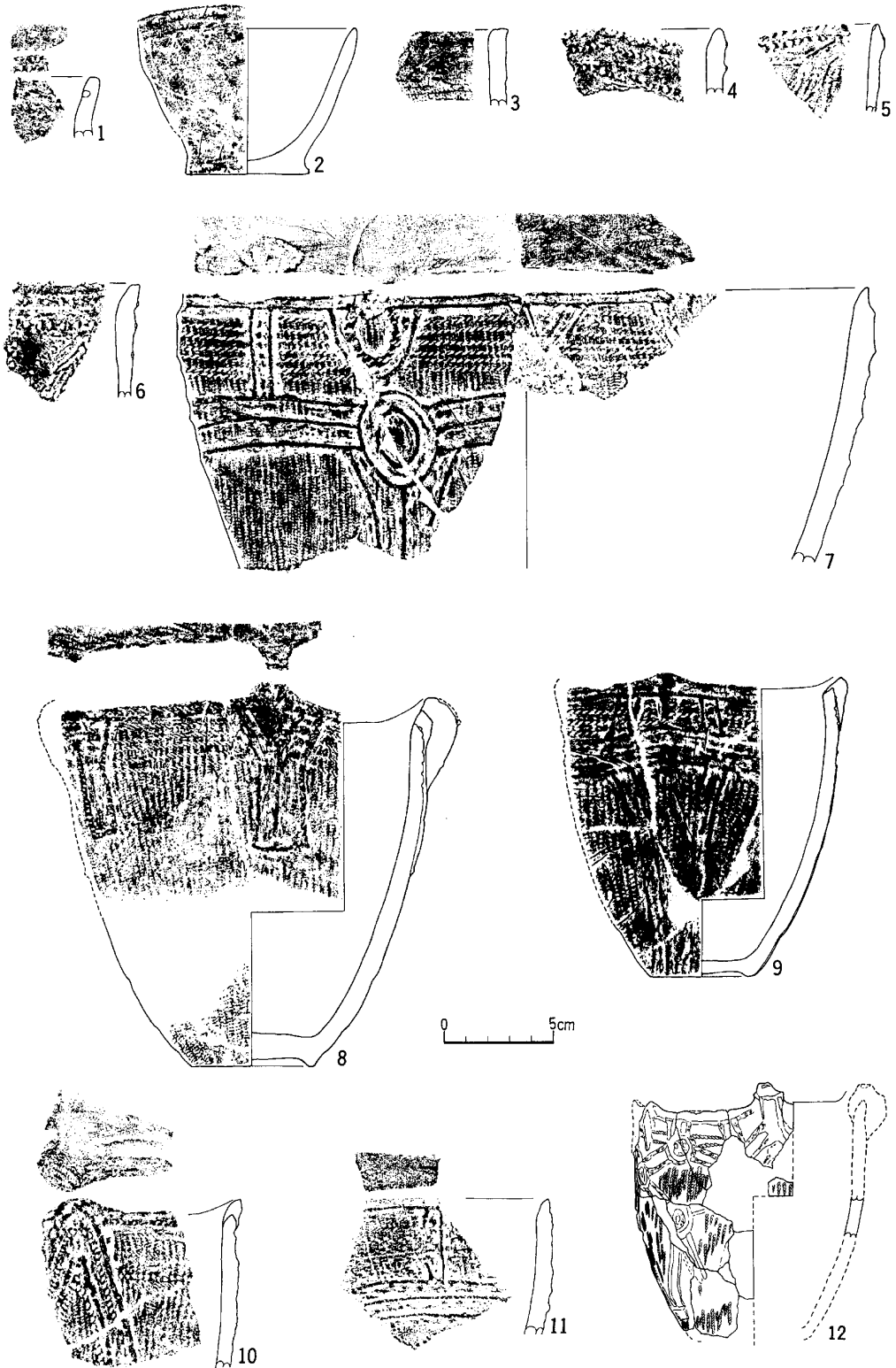
第19図-1・2, 5は突瘤文が施された宇津内II a式。2は突瘤文の下部に円形刺突が2条連続する。3は揚げ底の底部に幾何学文状に列点文が施される。宇津内II a式であろう。4は口縁部の円形突起とその下部に微隆起帯が垂下し, 組紐圧痕文が施される。下田ノ沢2式の様相をもつ。6は横撫で後に突瘤文, 縄端圧痕文を施している。宇津内II a式より古手のものかもしれない。7は僅かに外反した口縁部に沈線文があり, 内側には短刻線が施される。8は縄端圧痕文が2列施される。続縄文初頭であろう。9~12は縄文晩期幣舞式。13は縄線文が多様される。13・14・16・17は縄線文と17では円形刺突文が加わる。15は2本の鐺状の張出しをもつた異形土器。18は円形刺突, 19は無文で内外面に刻みがある。20・21は縄文。22は突瘤文が施される。13~22は晩期中葉, 23は前葉であろう。

第20図-1・2は無文であり, 2は円形刺突が加えられる。続縄文初頭であろう。3も無文。胎土の状態から縄文晩期と思われる。4は盛り上がりの無い半截状の爪形文で内側から突瘤が加えられる。5は円形刺突が右方向から加えられる。7は内面に円形刺突が施される。6は器面に縄線文, 円形刺突文, 内側からの突瘤文が施される。8は内側からの突瘤文, 9・10は盛り上がりのある爪形文。3~6は縄文晩期中葉, 7~10は前葉であろう。

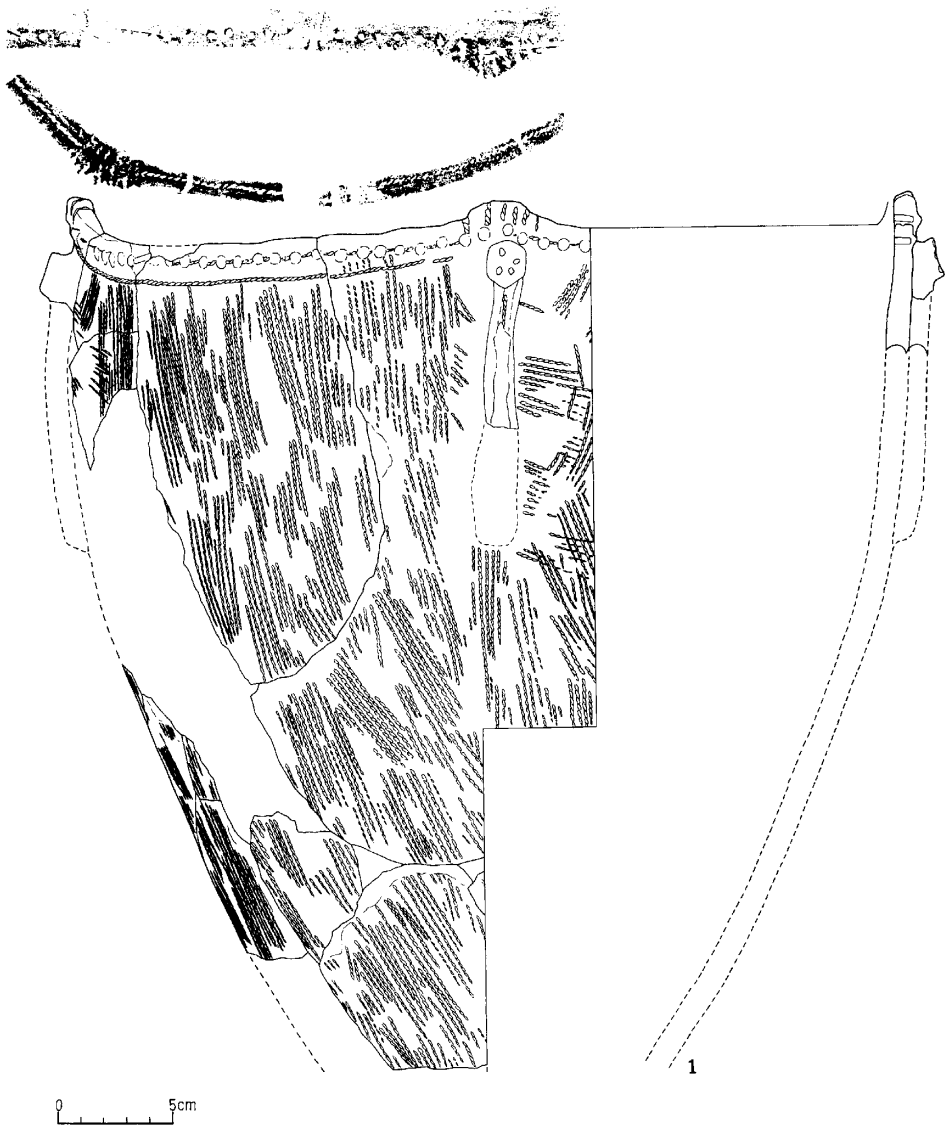
常呂川河口遺跡



第16図 49号竪穴、49a号竪穴平面図



第17图 49号竖穴床面(1)·埋土(2~12)出土土器



第18図 49号竪穴埋土(1)出土土器

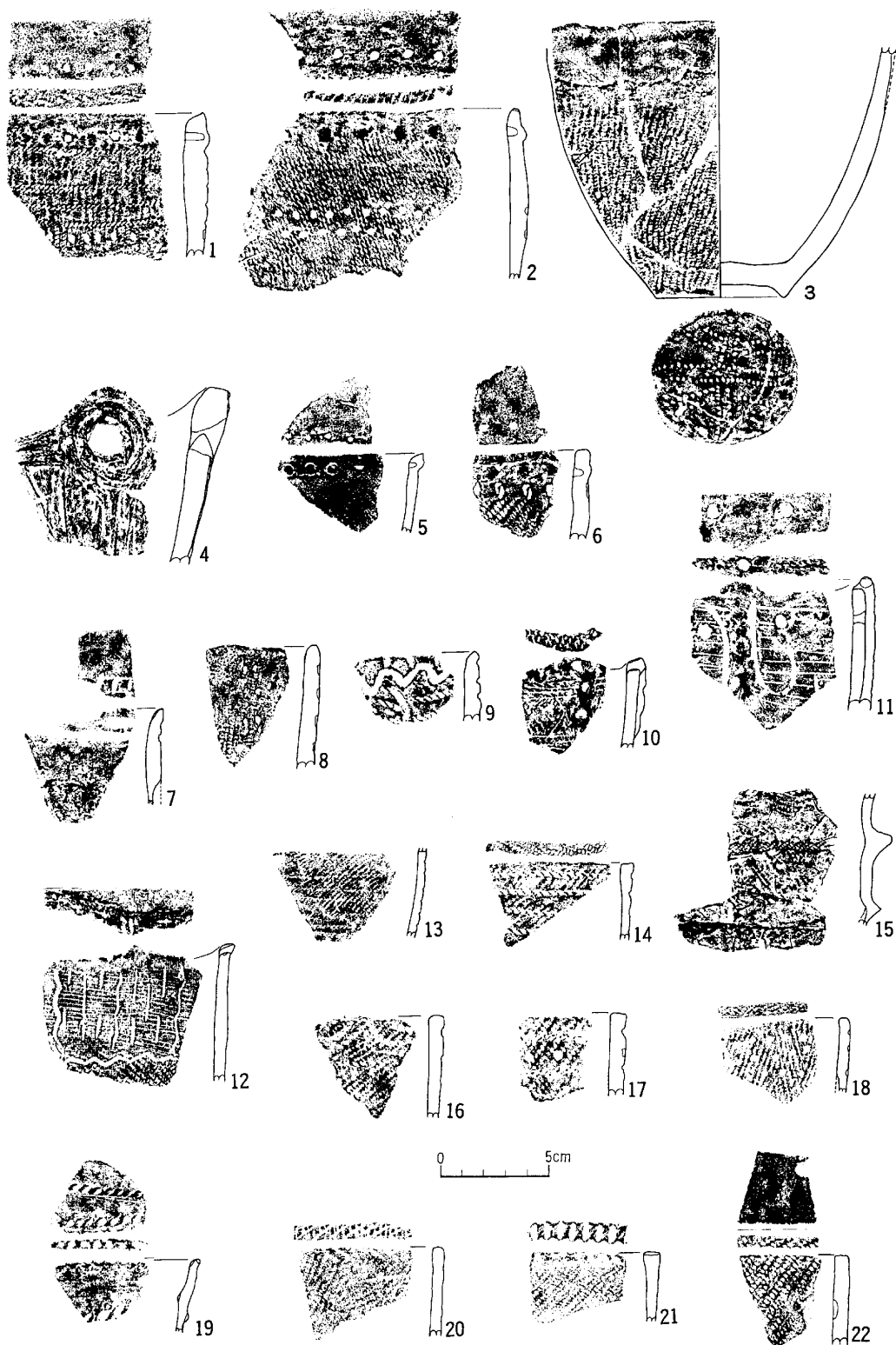
石器は第21図-8~23。第22図-1~3がある。第21図-8は床面出土。急斜な刃部をもった端側器。9・10は有茎石鏃。11は石銛。12~14は両面加工ナイフ。15~18・20は削器。19は石匙。21は端側器。22は円形搔器。23は磨石。19は頁岩製、23は泥岩製であり他は黒曜石製である。

第22図-1・2はたたき石。1は先端部、2は表裏面に使用痕がある。3は磨石。3点とも泥岩製。

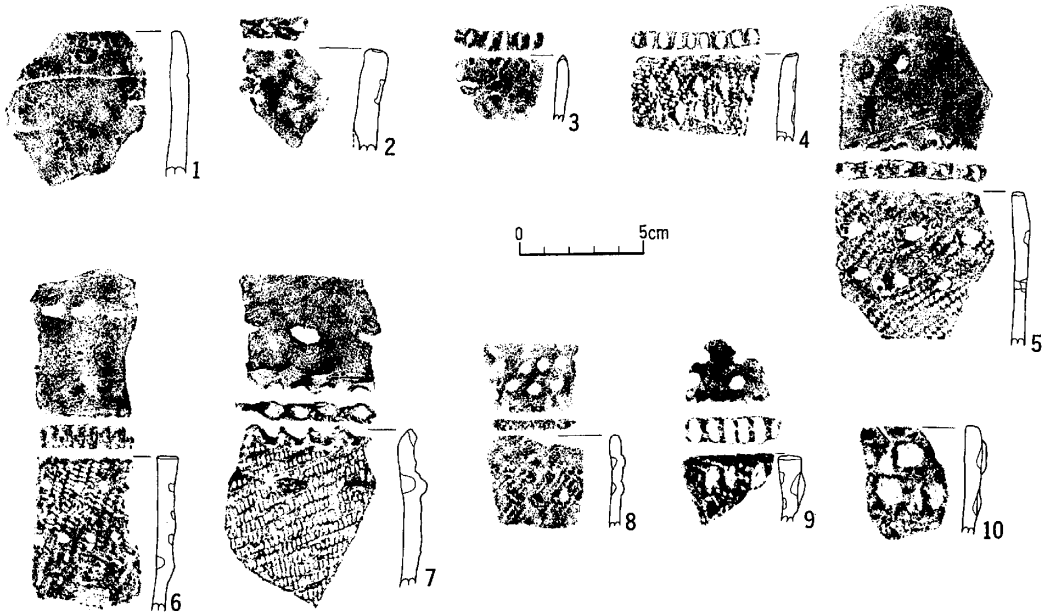
小 括

本竪穴の時期は続縄文字津内II a式であろう。

(武田 修)



第19图 49号竖穴埋土(1~22)出土土器



第20図 49号竪穴埋土（1～10）出土土器

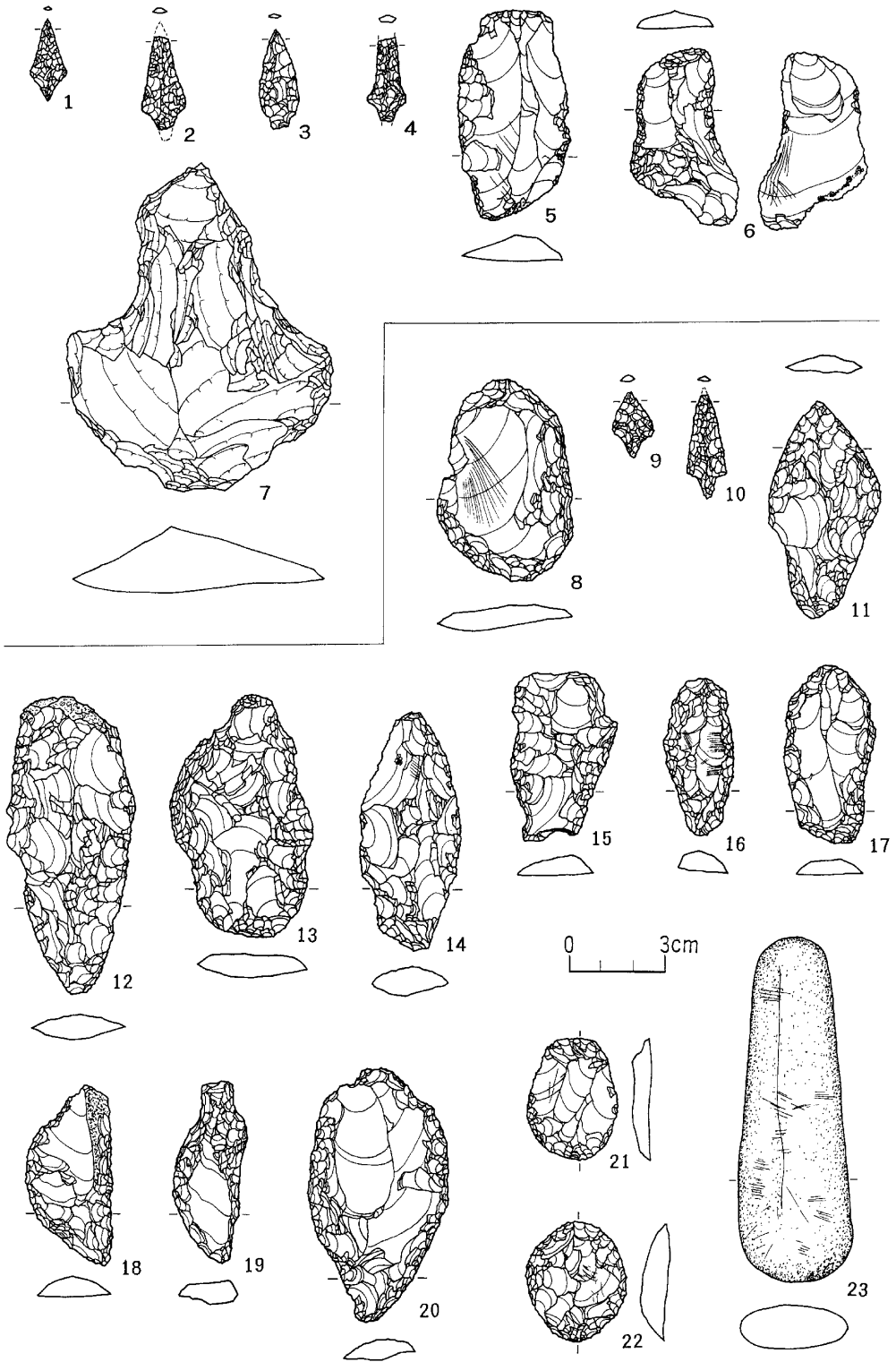
49 a 号 竪 穴

遺 構（第16図）

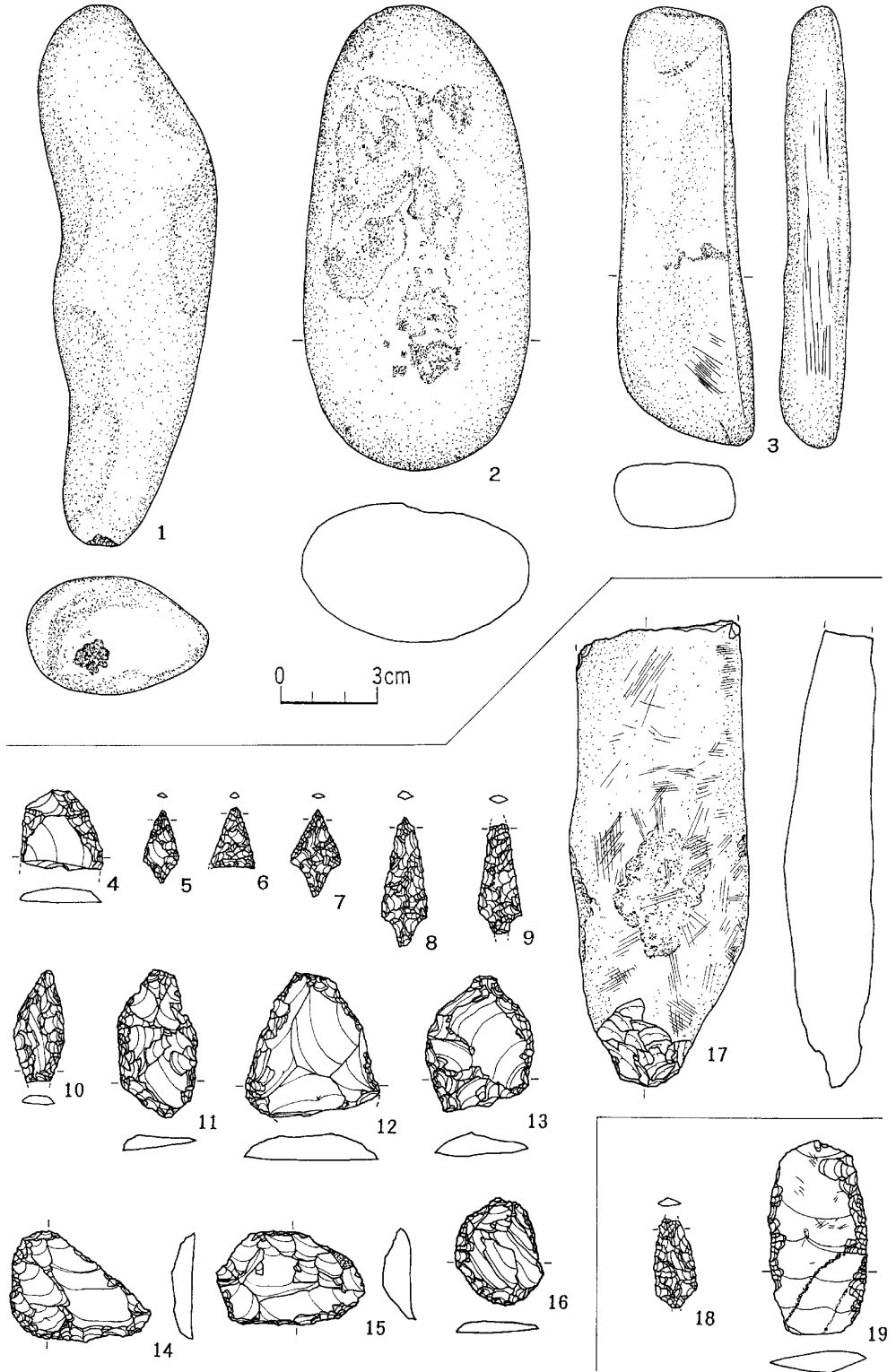
本竪穴は I'60・61グリッドに位置する。49号竪穴の床面精査中に土質の変化を確認したものである。西側の半分は集中豪雨による冠水の際に削り取られたため検出できたのは東側半部である。全体の規模は不明であるが中央に炉があり短軸が約2.88mと短い。長軸も約4m程度であろう。東西にやや長い小型の竪穴と思われる。壁高は49号竪穴の床面から約20cmである。支柱穴は認められず直径約10～15cm、深さ約7～10cmの壁柱穴が南壁で3本、西壁で2本、北壁で1本検出した。中央の炉を取り囲む様にフレーク・チップの集積が3箇所見られる。全て黒曜石製の集積である。49号竪穴の石囲み炉の下部にあることから新旧関係は明らかである。

遺 物（第23図、第22図－4～17）

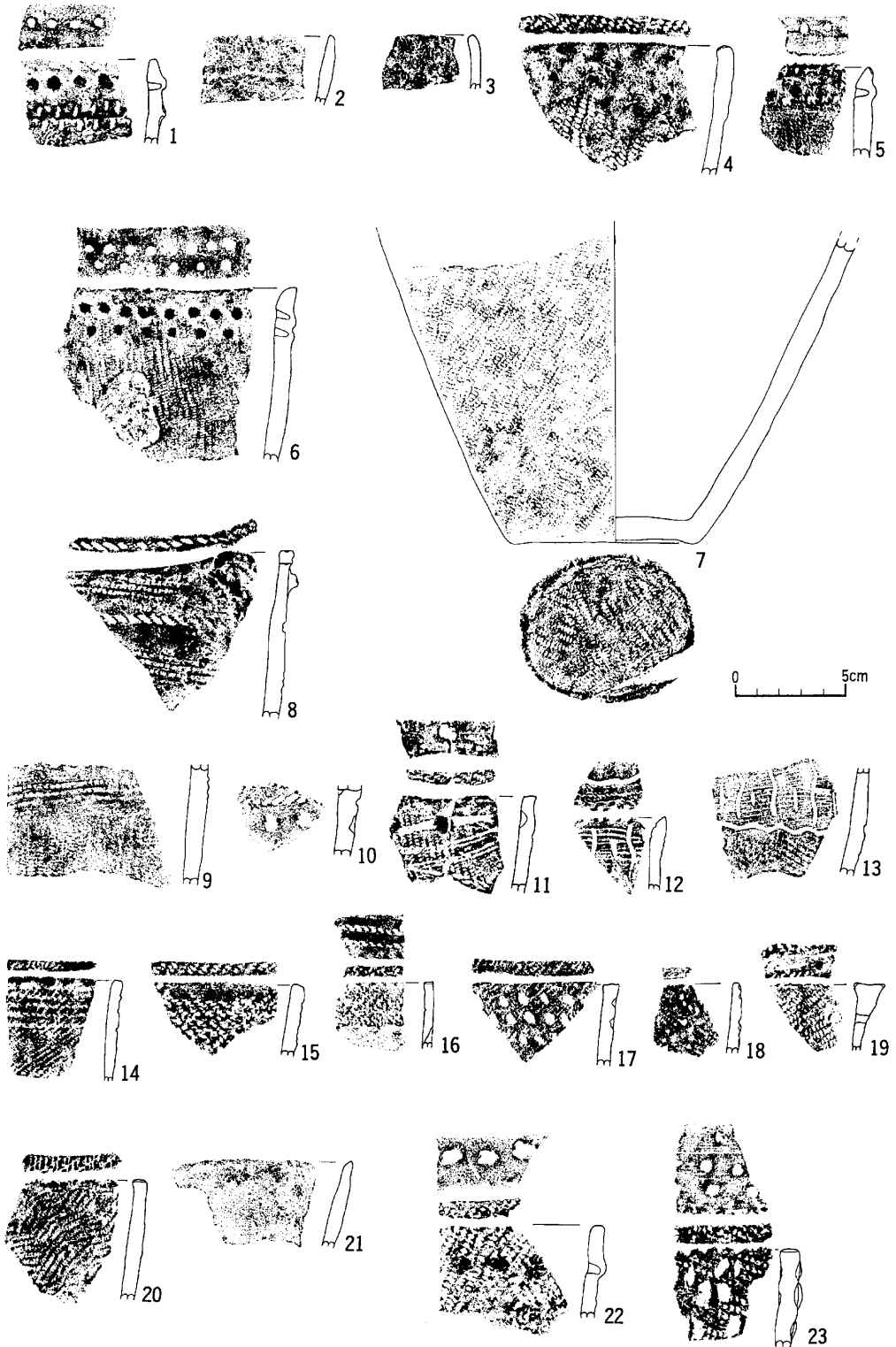
床面からは3点の土器片が出土している。1は宇津内II a式。内側からの突瘤文と細い隆帯の上下に縄端圧痕文を交互に施す。2・3は縄文晩期と思われる無文土器。埋土からは4～23が出土。4は続縄文初頭であろう。口縁下部は広い無文部を残す。5・6は宇津内II a式。7も宇津内系であろう。8～10は続縄文初頭であろう。8は小突起から斜めに隆帯が垂下する。体部は帯縄文を地文に太い縄線文がある。9はその同一個体と思われるもので帯縄文の下部は縦位の縄文である。興津式であろう。10は縄線文の下部に縄端圧痕文が押捺される。11は内側からの突瘤文をもち、半截状施文具による弧線状の沈線文を施す。興津式前後の土器であろう。12・13は縄文晩期幣舞式。14～21は縄文晩期中葉と思われる。14・15は器面、16は内側に縄線



第21图 48号竖穴埋土(1·7), 49号竖穴床面(8)·埋土(9~23)出土石器



第22図 49号竖穴埋土 (1~3), 49a号竖穴床面 (4)・埋土 (5~17), 50号竖穴埋土 (18・19) 出土石器



第23图 49a号竖穴床面(1~3)·埋土(4~23)出土土器

文がある。17は縄端圧痕文、18は円形刺突文が施される。19は幅広い口唇部の両端に刻みが施される。20は縄文、21は無文、22・23は縄文晩期前葉であろう。22は内側からの突瘤文、23は「ハ」字状の爪形文と内側に円形刺突文が施される。

石器は第22図-4~17がある。4は床面出土の削器片。5・7~9は有茎石鏃。8・9は鏃身が長い。6は無茎石鏃。10は片面加工の小型ナイフ。11は削器。12~16は端削器。17はたたき石と磨石の複合石器。17は泥岩製であり、他は黒曜石製である。

小 括

本竪穴は長軸約4m、短軸約2.80mの小型竪穴である。床面からは続縄文字津内II a式が出土している。(武田 修)

50 号 竪 穴

遺 構 (第24図, 図版3-1)

本竪穴は第II章遺跡の地形で記述した第三次形成地にある。A64・65, A'64・65グリッドに位置するもので、層厚約5cm前後のオホーツク文化(藤本e群)と続縄文後北C₂・D式の包含層を切り込んで構築されている。西壁から南壁、カマドの一部が近代の攪乱を受けているため遺存は悪い。

規模は東西約4.80m、南北約5.10mの方形を呈する。壁高は確認面から約15~30cmである。カマドは東壁の中央部に構築されている。天井部は黄褐色粘土を用いるが、袖部は暗褐色砂土と角礫を芯材としているものの西側は破壊を受けている。煙道部の傾斜はなく壁からほぼ水平の状態で煙口に続いている。

炭化材はカマドの上部を中心に、西壁を除く各壁際に認められるが多くはない。細いもので幅約5cm~6cm、太いもので幅約18cm程の断片的な炭化材である。支柱穴は直径約20~22cmのものが4本ある。深さは約20cm~50cm。特に西南側の支柱穴1本だけが20cmと極端に浅い。壁柱穴は北西隅にある5本がほぼ等間隔に並ぶものの他の壁では数本確認できただけである。

炉跡は中央よりやや西側に寄った位置にあり、魚骨片が含まれる。

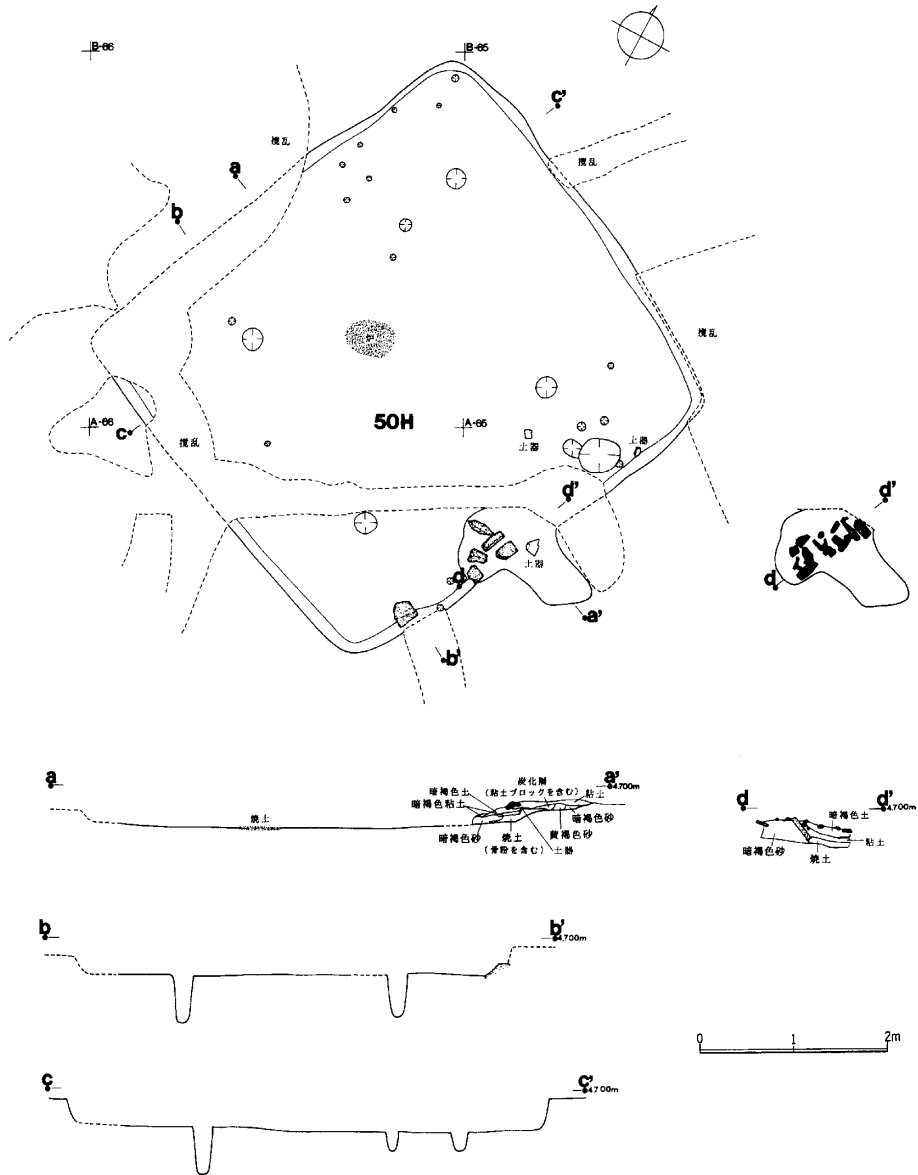
遺 物 (第25図, 第22図-18・19, 図版3-2~4)

第25図-1~7は擦文土器。1は口径約12.7cm、器高約9.4cmの無文小型鉢形土器。口縁部は2条の沈線、胴部は刷毛により調整されている。2は紡錘車。重量は55g。3はカマド内から出土した大型鉢形土器の底部。器面は火熱を受け赤化している。4は口径約33cmの大型鉢形土器。器面は篋により丁寧に調整されている。5は口径約13cm、器高約13.3cmの中型鉢形土器。器面は縦位の刷毛調整、内面は部分的に横位の刷毛目痕がみられる。6は刻線文を左右交互に二段配列する。7は高杯の口縁部であろう。8は口縁部が外反したオホーツク土器。9はソーマン状貼付文のあるオホーツク土器。

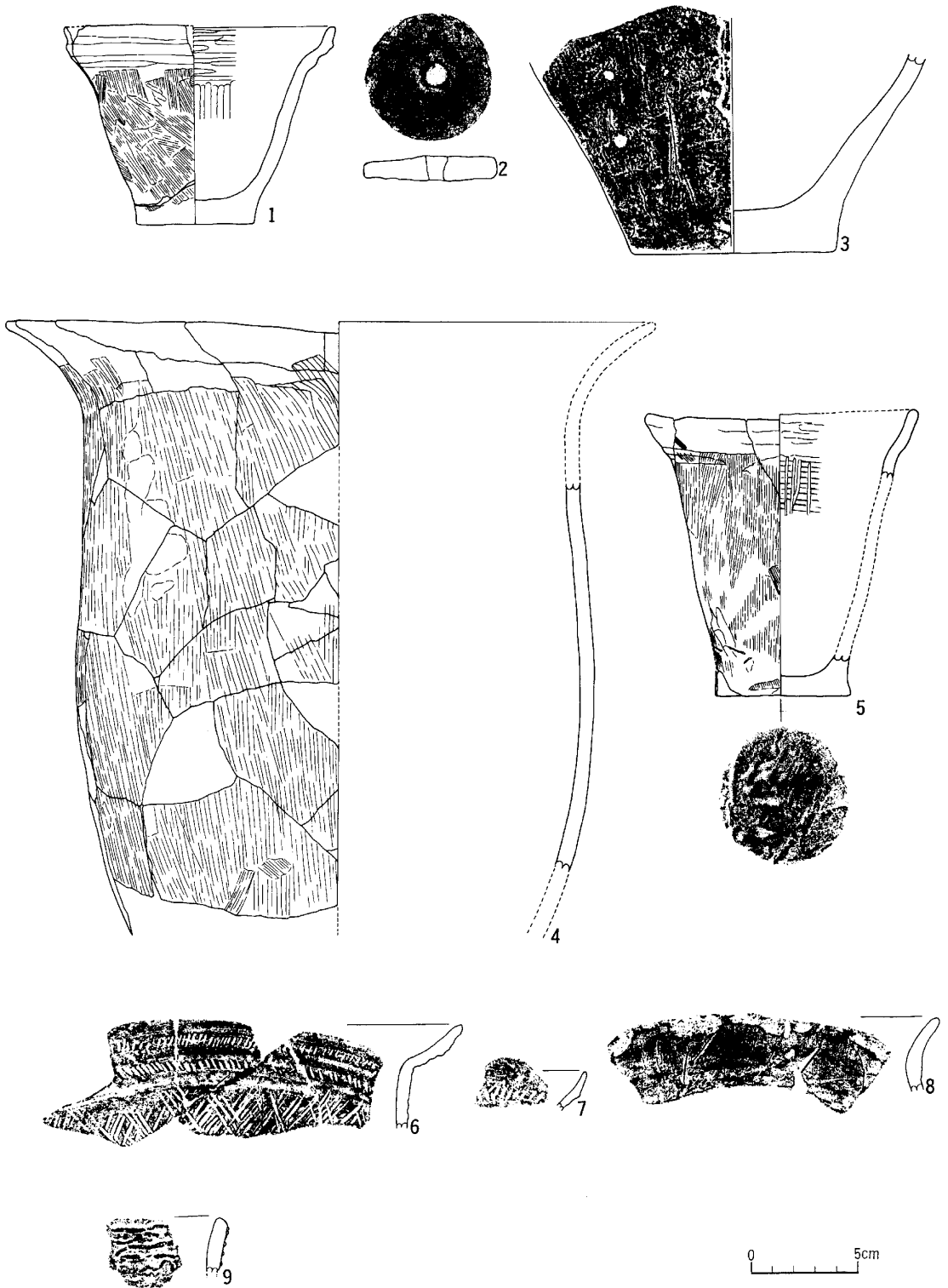
小 括

本竪穴は擦文期の火災住居と判断される。時期は藤本編年h期、宇田川編年後期であろう。

(武田 修)



第24図 50号竪穴平面図



第25図 50号竖穴床面(1~3)・カマド(2)・埴土(4~9)出土土器

51 号 竪 穴

遺 構 (第26図, 図版4-1)

本竪穴はI'74・75, J'74・75グリッドに位置する。規模は東西約3m, 南北約3.60mで, 東西側がやや長い長方形状を呈し, 北西隅と南西隅は丸みをもつ。表土を剝土した段階で樽前a火山灰をブロック状に含む暗黒褐色土層が堆積しており, この層を除去すると埋土からは擦文土器の出土が多く見られる。

埋土を掘り下げた段階で東南壁近くの上部から第28図-1のトビニタイII群と第27図-2・3の擦文土器が出土した。トビニタイII群土器は完形品で正立の状態出土し, 擦文土器は割れた状態で出土したが2個体とも復元できた。トビニタイII群と擦文土器は同一層内にあり, ほぼ同一のレベルから出土したもので伴するものと考えている。壁は各壁ともほぼ垂直に立ち上がり高さは確認面から約40cmである。床面は中央部が僅かに盛り上がりを見せる。

カマドは黄褐色粘土混じりの暗茶褐色土で構築されている。南側の袖部には扁平な角礫4枚があり, うち2枚は垂直に立てられているものの北側袖部には認められない。天井部は幅約10cmの暗黄褐色土を用いている。煙道は緩く立ち上がる。燃焼部にある焼土は粘性を有する赤褐色土で良く焼けており, 骨粉を含む。

炉跡は中央部とやや西側に寄ったところの2箇所ある。

主柱は無く直径約8~12cm, 深さ約6~11cmの壁柱穴がほぼ等間隔にめぐる。

遺 物 (第27図, 第28図, 第29図, 第30図, 図版4-2~7, 5-1)

第27図-1~5は擦文土器。1は西壁近くの床面上8cmのレベルから出土した中型鉢形土器。口径20.5cm, 器高26cm。鋸歯文, 矢羽根文を複段的に施す。文様帯下部と内面は篋により丁寧に整形され, 底面には板目状圧痕が観察される。口縁部から胴部にかけて著しく赤化した箇所がある。2は口径約15cm, 器高約16cmほどの小型鉢形土器。矢羽根文を左右交互に施す。底面は小さな凹凸が著しい。3はカマド前面の床面上7cmのレベルから出土した。口径約14.5cm, 器高約13.5cmの小型鉢形土器。横走沈線で仕切られた短刻線を三段施す。口縁部は「手塩手法」による。底面には板目状圧痕が観察される。4は北東壁の上部から出土した。口径約14cm, 器高約12cmの小型鉢形土器。鋸歯文と矢羽根文の下部は篋により整形される。底部には板目痕の上に短刻線が観察される。5は口径約11.3cm, 器高約10cmの小型鉢形土器。文様は4同様の鋸歯文と矢羽根文で構成される。この5点は藤本編年g・h期, 宇田川編年後期に比定できる。

第28図-1は口径約12cm, 器高約14cmの壺型を呈したトビニタイII群土器である。胴下部に膨らみをもち, 頸部は無文帯となる。口縁直下に2条の擬縄貼付文がある。頸部下にはソーメン文で区画され長方形内に擬縄貼付文が施される。2~9は擦文土器。2は口径12.4cm, 器高10.2cmの小型鉢形土器。器面は篋により丁寧に調整され, 底面には板目状圧痕が観察される。

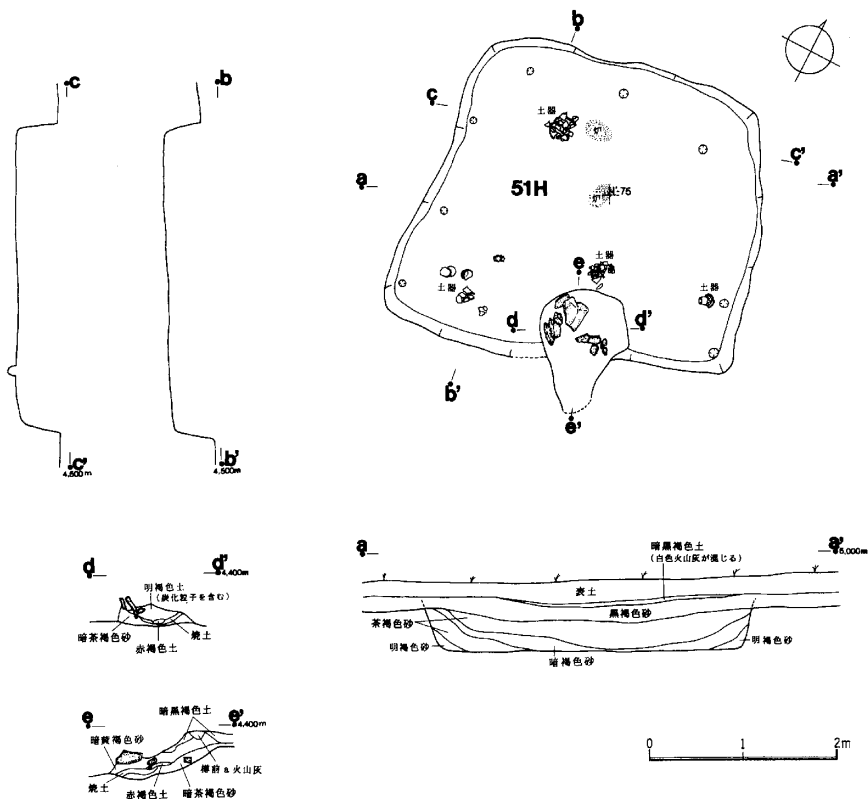
3は口径約18cm, 器高約20cmの中型鉢形土器。胴下部に張り出しをもつ点は1のトビニタイII群と共通する。4は高杯脚部。5は高杯の口縁部。6は口径約16cm, 高さ約22cmの中型鉢形土器。7・9は無文鉢型土器。8は針葉樹状刻線文と矢羽根文が施される。10は後北C₂・D式。11は宇津内II b式。12は同II a式。

第29図-1・2は縄文晩期幣舞式。3~10は同中葉であろう。3は細い刻線と刺突, 4は太い刻線が描かれる。5は縄線文を渦巻状に施す。浅鉢であろう。7は縄線文と縄端圧痕文, 8・9は刺突文, 10は無文。11は縄文後期堂林式。12は胎土に繊維を含む。縄文中期北筒式。13は縄文前期末押型文。

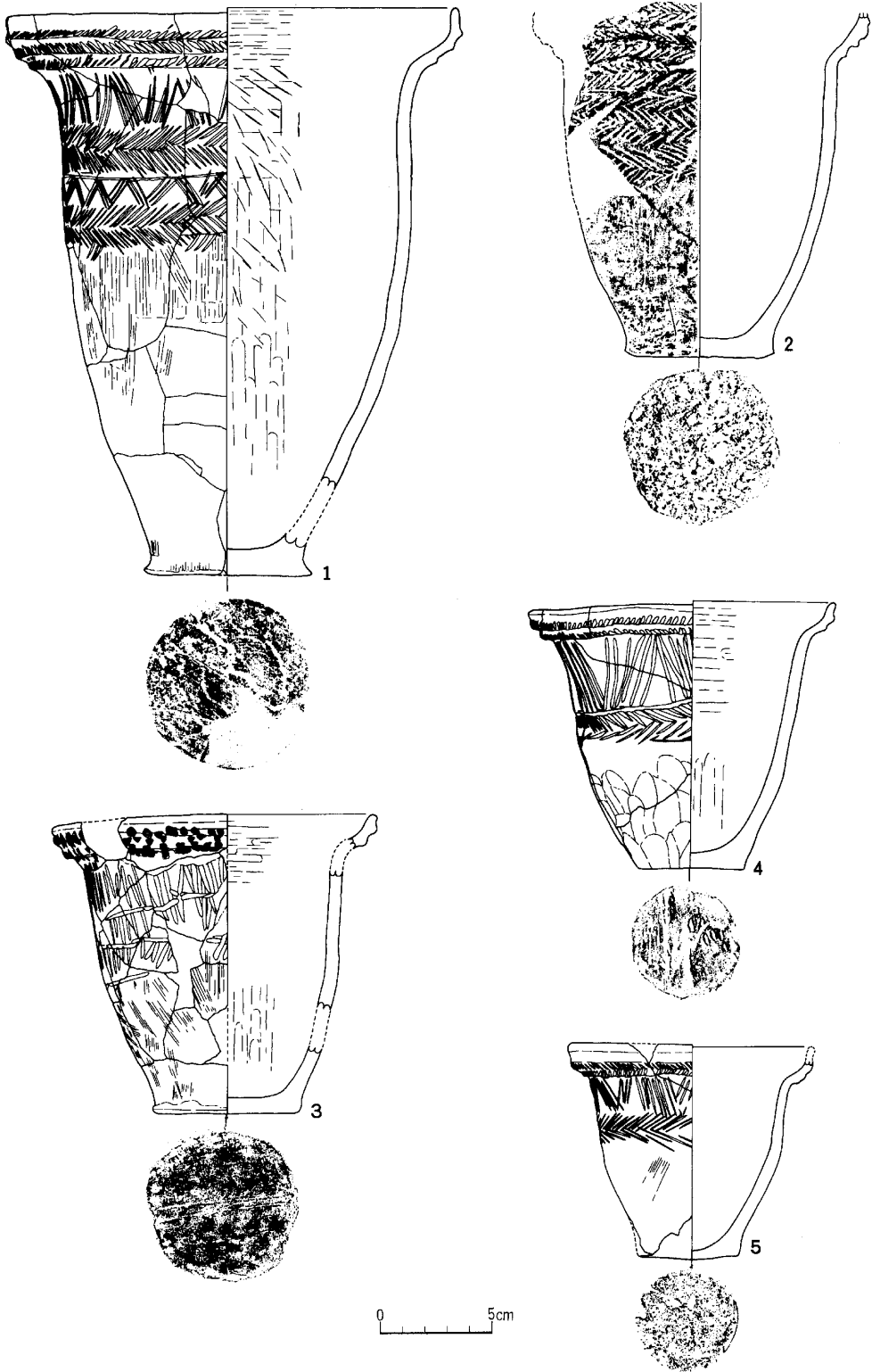
石器は第30図-1~13が出土する。1・2は無茎石鏃。3~8は有茎石鏃。9は片面加工ナイフ。10は端削器。11は両側縁が弧状を呈した削器。12は円礫の端部が剥離されている。刃部は作出されておらず未製品であろう。泥岩製。13は凹石。

小 括

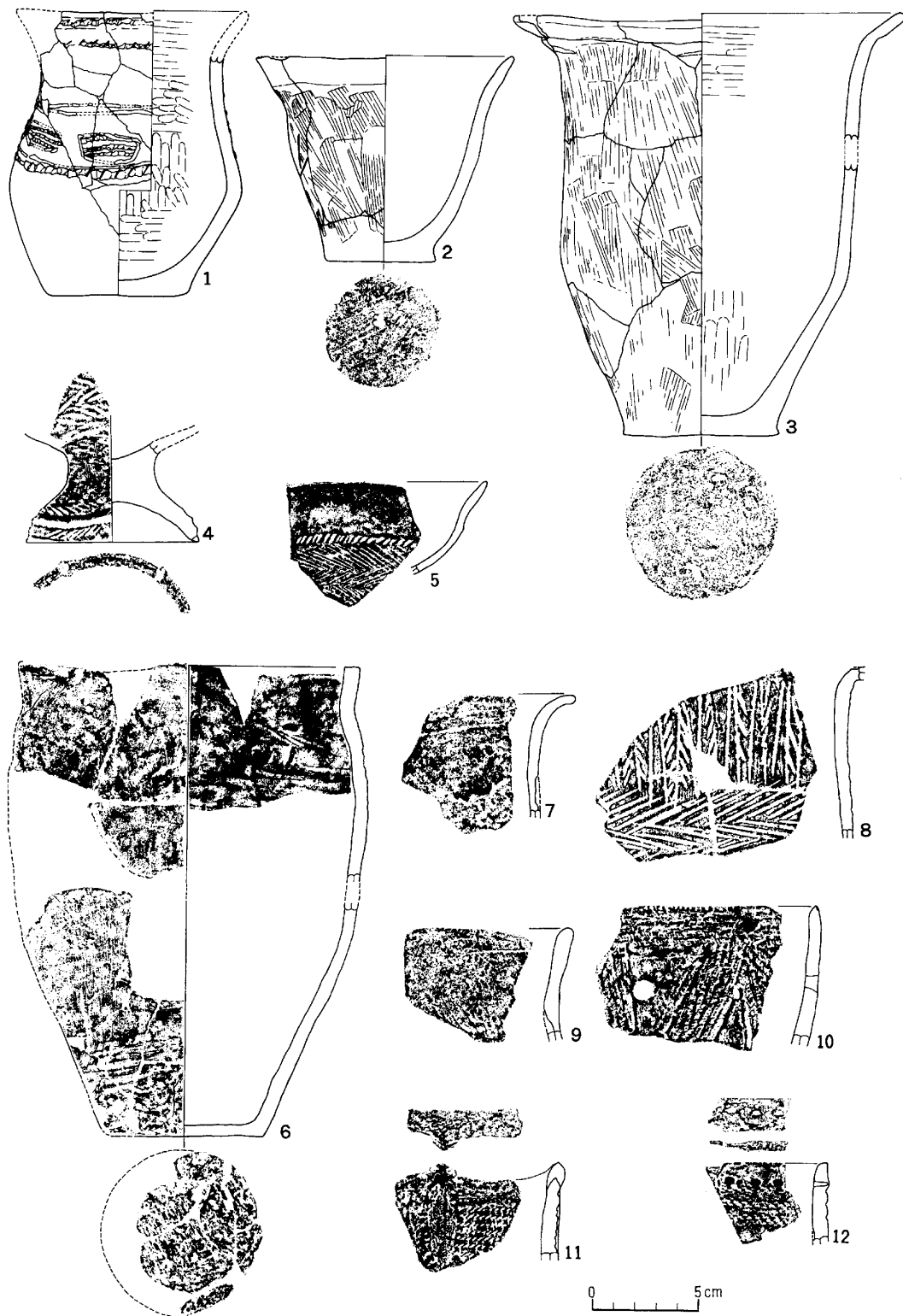
本竪穴は小型の住居跡であり, 支柱穴は存在しない。埋土からはトビニタイII群と擦文後期の土器が共伴する。時期は藤本編年g・h期, 宇田川編年後期に比定される。埋土出土の第27図-2・3は藤本編年g・h期に相当する。 (武田 修)



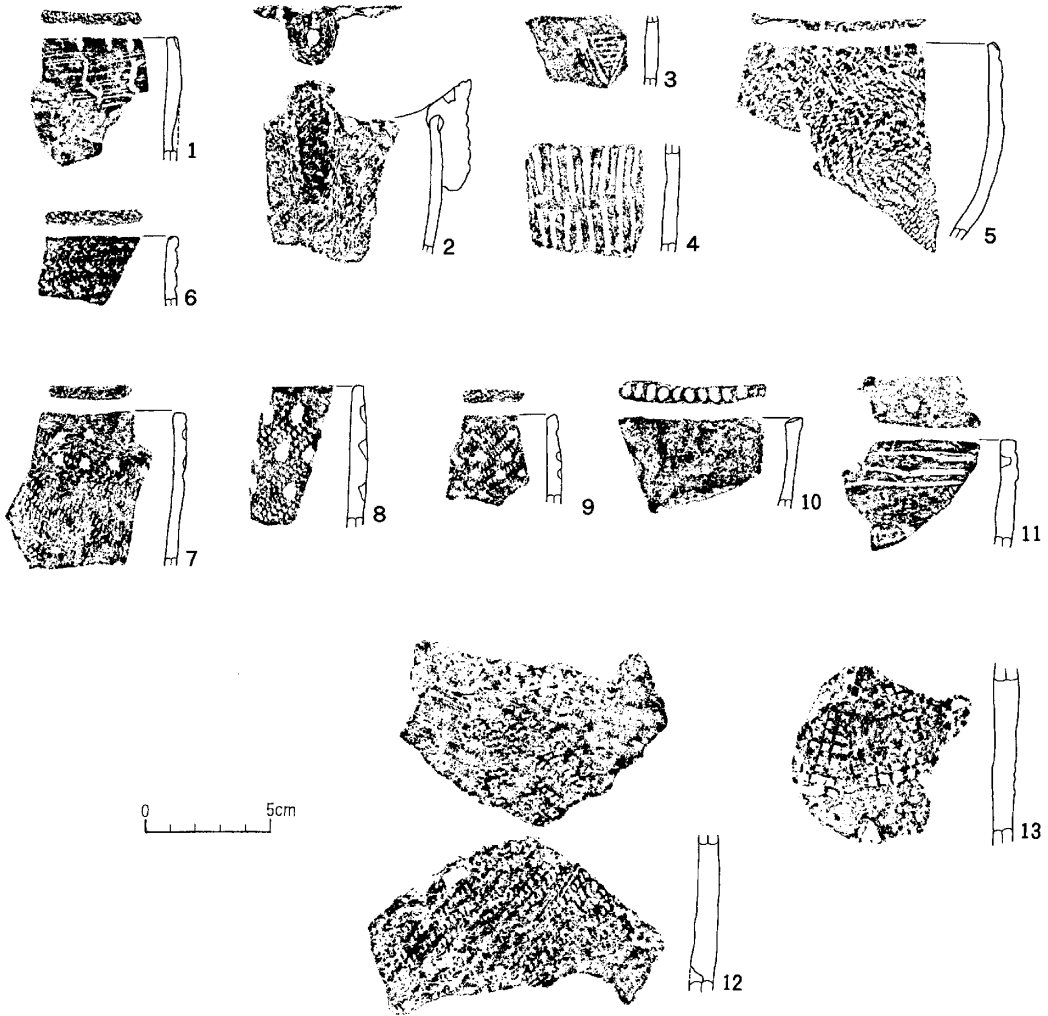
第26図 51号竪穴平面図



第27图 51号竖穴埋土(1~5)出土土器



第28图 51号竖穴埋土(1~12)出土土器

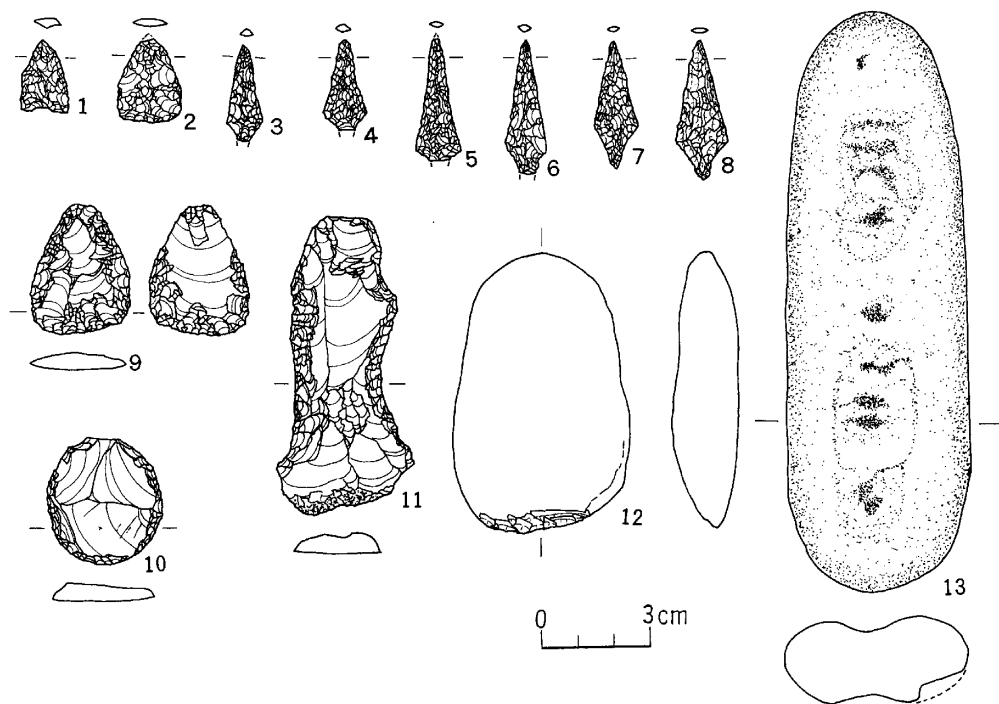


第29図 51号竪穴埋土（1～13）出土土器

52 号 竪 穴

遺 構（第31図，図版5－4）

本竪穴はH'73・74，I'73・74グリッドに位置する。表土を剥土した段階で粒状化した灰白色の樽前a火山灰の堆積が確認され，さらに下層には黄褐色を呈した摩周b火山灰が薄く堆積している。本竪穴は第II層の茶褐色砂の上面で掘り込み面を確認した。規模は長軸約5.30m，短軸約3.40mの不整形を呈し，北東側に約2.30mの張出しをもつ。壁は各壁ともほぼ垂直に立ち上がり，高さは確認面から約40cmである。中央部に石囲み炉が配置される。石囲み炉の南側は欠失し，小型の角礫が4個が並んでいる。小型ながら欠失部の石囲み炉として使用されていたのか



第30図 51号竪穴埋土（1・2，4～10，12・13）・カマド煙道（3・11）出土石器

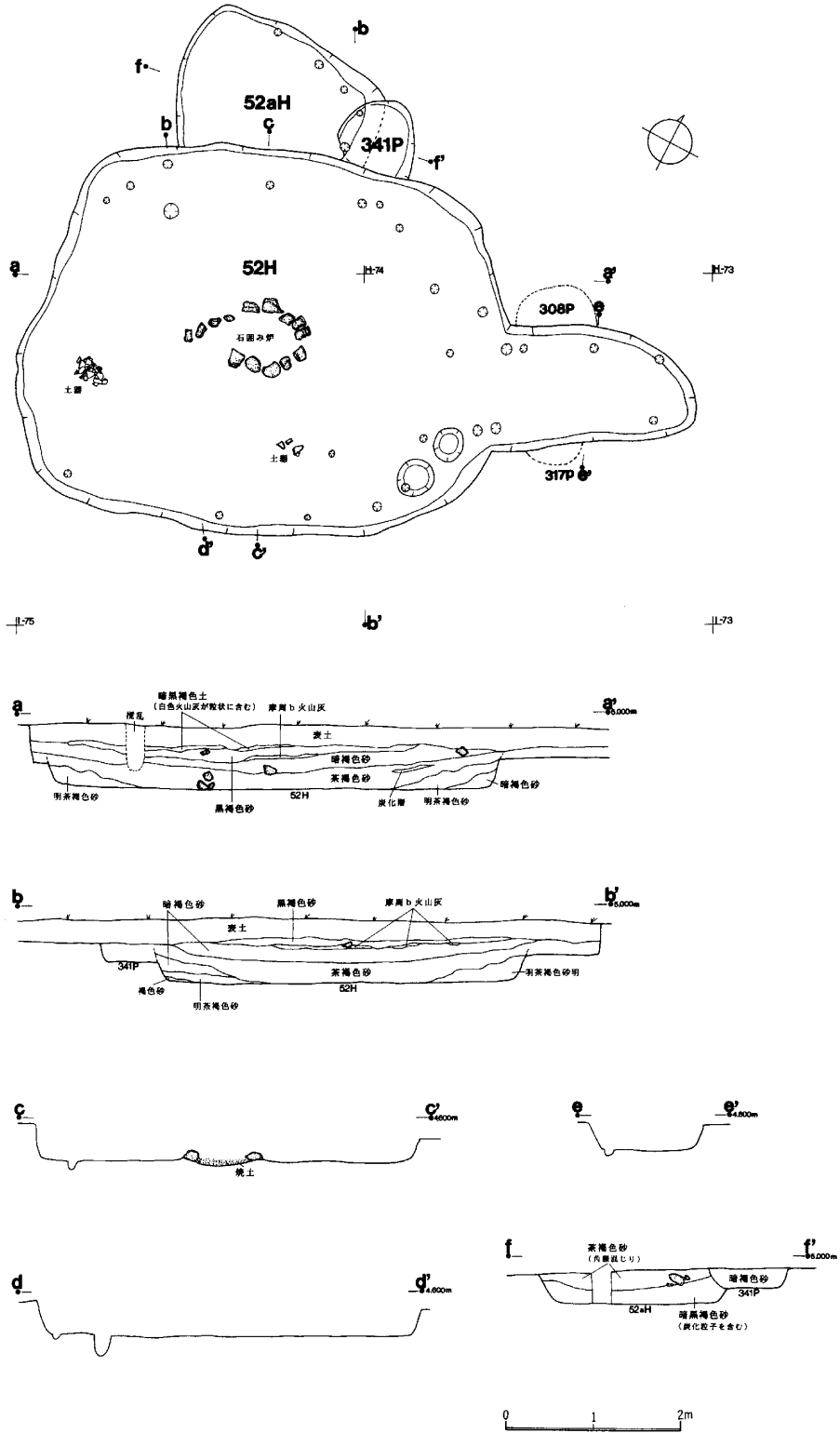
もしれない。

壁柱穴は南壁を除く各壁際に認められる。直径約5～12cm、深さ約4～12cmのものである。西南壁の近くに直径約20cm、深さ15cmの柱穴がある。主柱穴と思われるが、他には認められなかった。東壁隅に直径約30cm、深さ8cm、直径約42cm、深さ約8cmの皿状ピットが2基ある。竪穴との新旧関係は不明であるが、本竪穴に伴うものかもしれない。

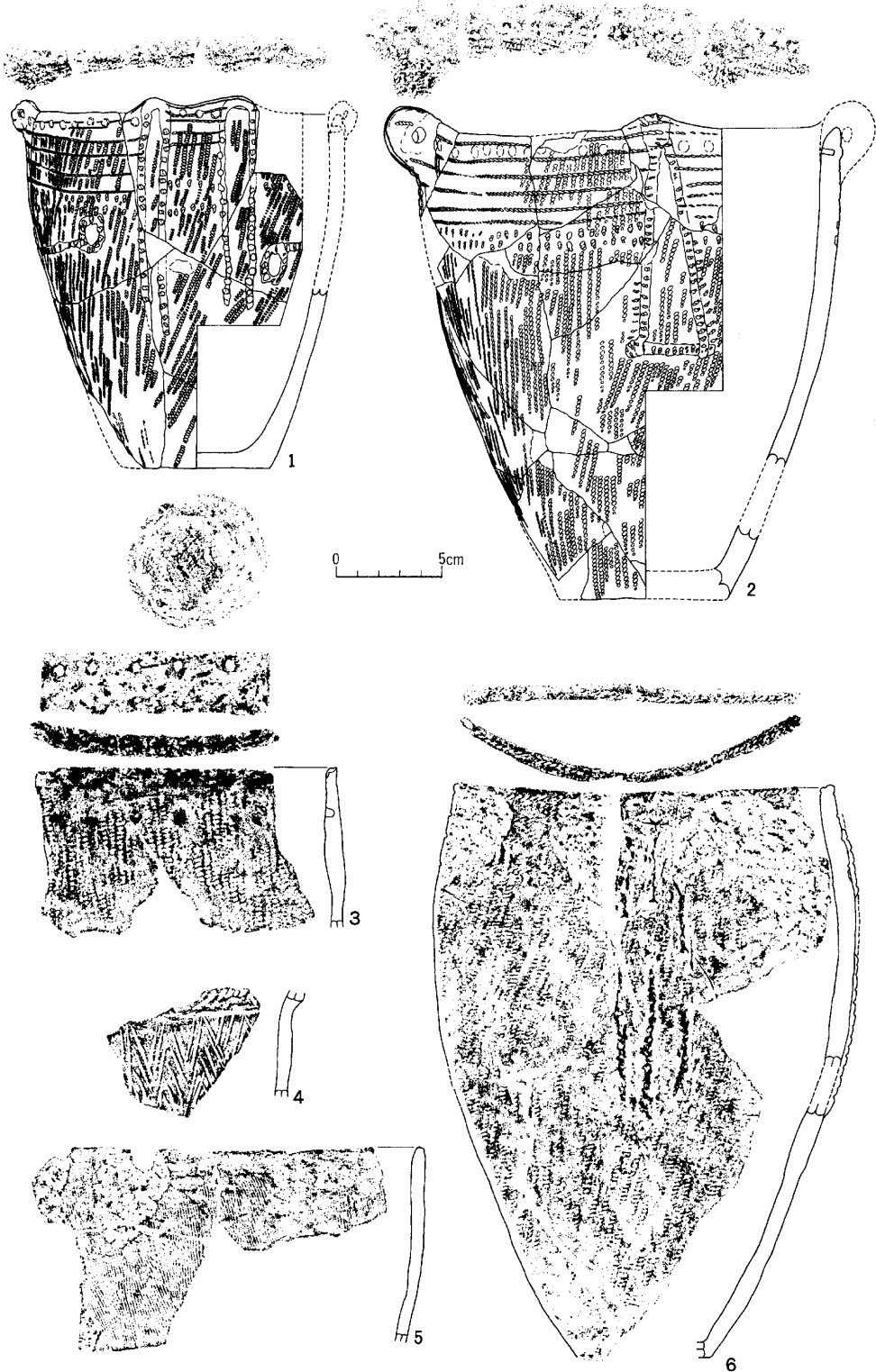
遺物（第32図，第33図，第34図，図版5－2・3）

第32図－1・3は床面出土。いずれも内側からの突瘤文をもつ。1は口径14.3cm、器高18cmの中型土器。縄線文下に縄端圧痕文が施され、2個の吊り耳間の小突起から擬縄隆起帯が底部近くまで垂下する。2も1と同様の文様構成である。口径約19cm、器高約25cmの中型土器で吊り耳からは「八」字状、小突起から三角形の擬縄隆起帯が施される。1～3は宇津内II a式。4は擦文土器。5は極めて細かい撚糸文が施される。続縄文初頭のものであろう。6は底部が小さく、口縁部で内湾する土器である。口縁部は剥落するものの4条の縄線文下に縄端圧痕文があり、3本の隆帯が垂下した宇津内II a式。

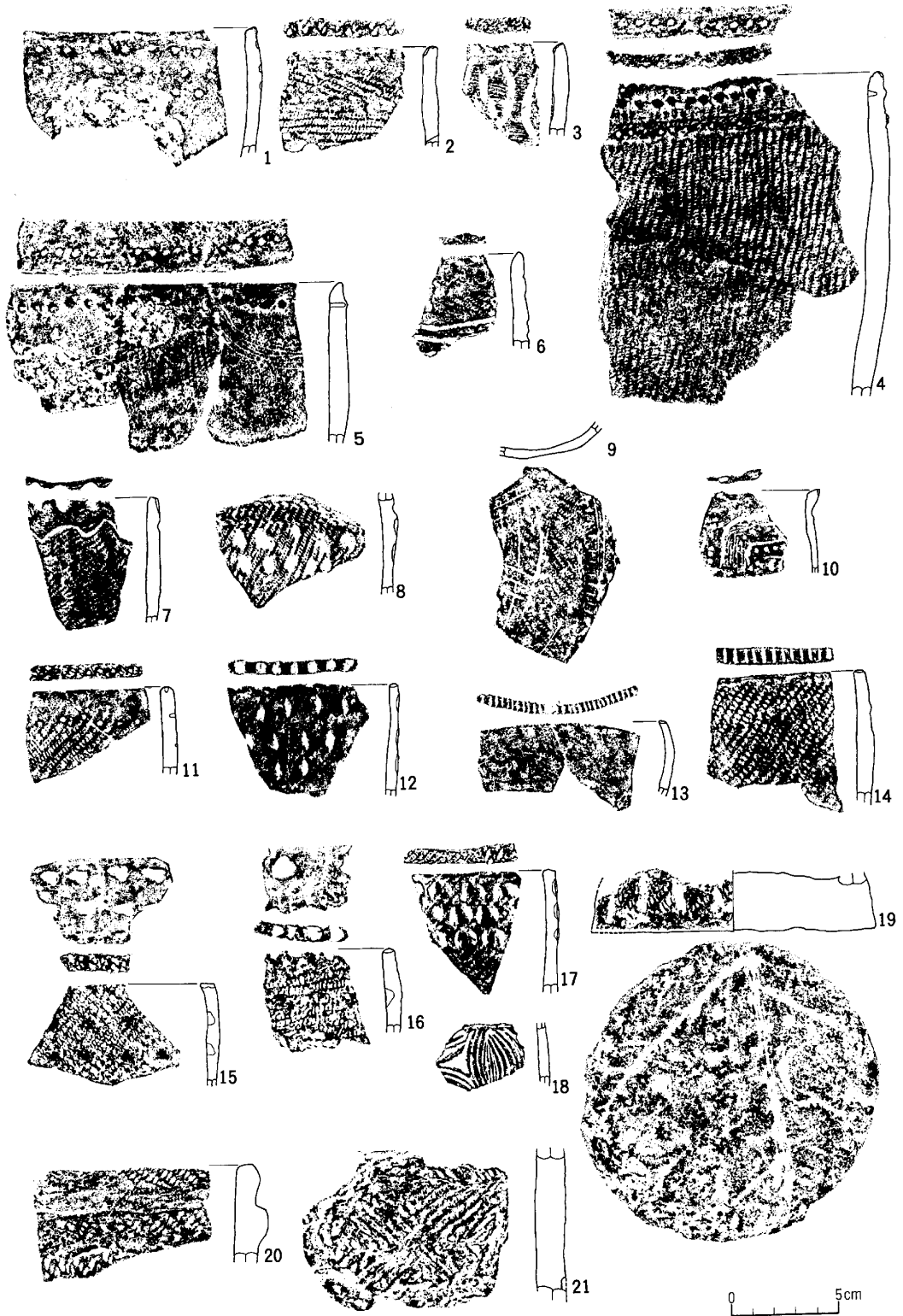
第33図－1～3も床面出土である。この3点は続縄文期のものでなく埋土の堆積過程で混入したと思われる。1は円形刺突文が3段施される。2の口唇部に縄端圧痕文、器面は帯縄文が



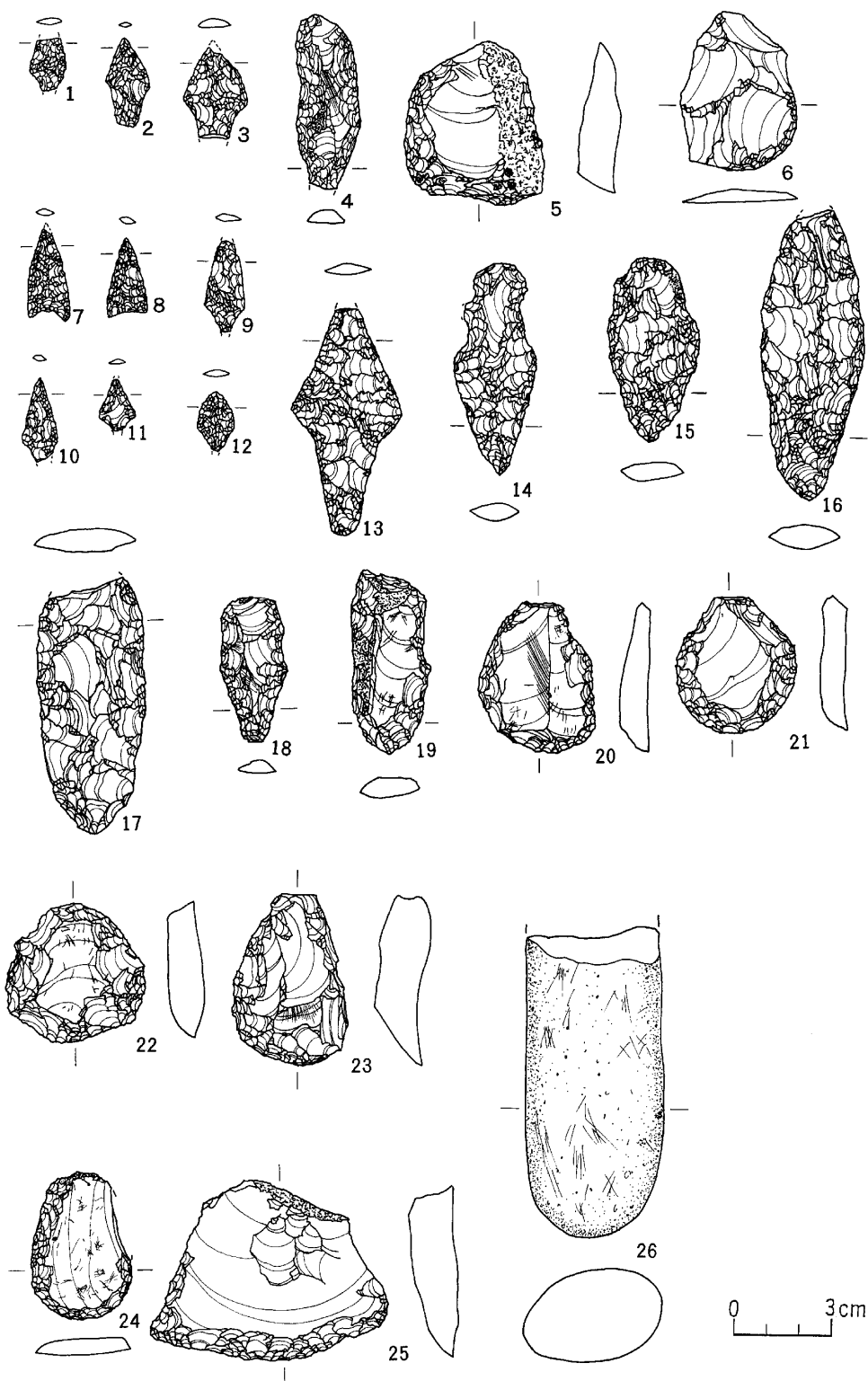
第31図 52号竖穴, 52a号竖穴, ピット341平面図



第32図 52号竖穴床面 (1・3)・埋土 (2・4~6) 出土土器



第33图 52号竖穴床面(1~3)·埋土(4~21)出土土器



第34图 52号竖穴床面(1~6)·埋土(7~26)出土石器

施される。1・2は縄文晩期後葉であろう。3は縄文晩期幣舞式。4～21は埋土出土。4・5とも突瘤文をもつ。4は擬縄隆起帯の上下に縄線文がある。5は細い沈線が曲線的に施される。4・5は宇津内II a式。6は2条の横走沈線文と縄線文が施される。続縄文初頭であろう。7は幣舞式。8は縄線文の下部に半截状の刺突がある。晩期中葉であろう。9は底部に細い沈線がある。11は円形刺突文を楕円状に配列する。12は半截状の刺突。13は無文。14は縄文。15は内側に刺突が加えられる。9～15は縄文晩期中葉であろう。16は内側から突瘤文が施される。17は「ハ」字状の盛り上がりのある爪形文。18は縦・横の弧線文により三叉文を施す。16～18は晩期前葉であろう。19は底部に縦位の刻線が施され、底面には木葉痕が観察される。縄文中期トコロ五類であろう。20は口縁と平行して横位の太い隆帯がめぐる。縄文中期後葉北筒IV式に比定できる。21も北筒系であろう。

石器は第34図－1・2が有茎石鏃。3は石銛。4は削器。5は搔器。6は微細な使用痕をもつ剥片。7・8は無茎石鏃。9～12は有茎石鏃。13は石槍。14～17は両面加工ナイフ。18は片面加工ナイフ。19は削器。20～25は搔器。26は磨石。26の泥岩を除き黒曜石製である。

小 括

本竪穴の規模は長軸約5.30m、短軸約3.40mの不整形を呈し、東側に舌状の張出しをもつ。時期は床面出土土器から続縄文字津内II a式に比定される。(武田 修)

52 a 号 竪 穴

遺 構 (第31図)

本竪穴はH'74グリッドに位置する。52号竪穴に大半を切られている様であり、正確な平面形態は不明である。おそらく直径約2m程の不整形を呈しているであろう。壁高は確認面から約40cmである。壁柱は北壁に3本、東壁に2本ある。いずれも直径約4～10cm、深さ約5～12cm。炉跡等は認められなかった。

遺物の出土が無いため詳細な時期は不明であるが、52号の続縄文字津内II a式よりは古いことは確実である。(武田 修)

53 号 竪 穴

遺 構 (第35図)

本竪穴はJ'74・75、K'74・75グリッドに位置する。埋土には白色の樽前a火山灰が2層黒色土の下部で僅かに見られ、床面上部では黄褐色の摩周b火山灰が4～5cmの層厚で堆積する。規模は長軸約5.80m、短軸約4.60mの不整形を呈し、北側に向かって長さ約2.60m、幅約1.20mの舌状部をもつ。舌状部の北端は皿状に立ち上がる。各壁はほぼ垂直に立ち上がる。高さは確

認面から約35cmである。石囲み炉は中央からやや東側に寄った位置にある。直径約20～30cmの大型角礫2点と直径約15cmの中型角礫1点で構築されている。焼土の赤化はそれほど著しくない。

主柱穴は直径約20～30cm。最も深い21cmが2本、7～12cmのもの5本が壁隅とそれを結ぶ中間位置にある。壁柱穴は直径約8～13cm、深さ約6～12cmのもので各壁際にはほぼ等間隔に配置されている。

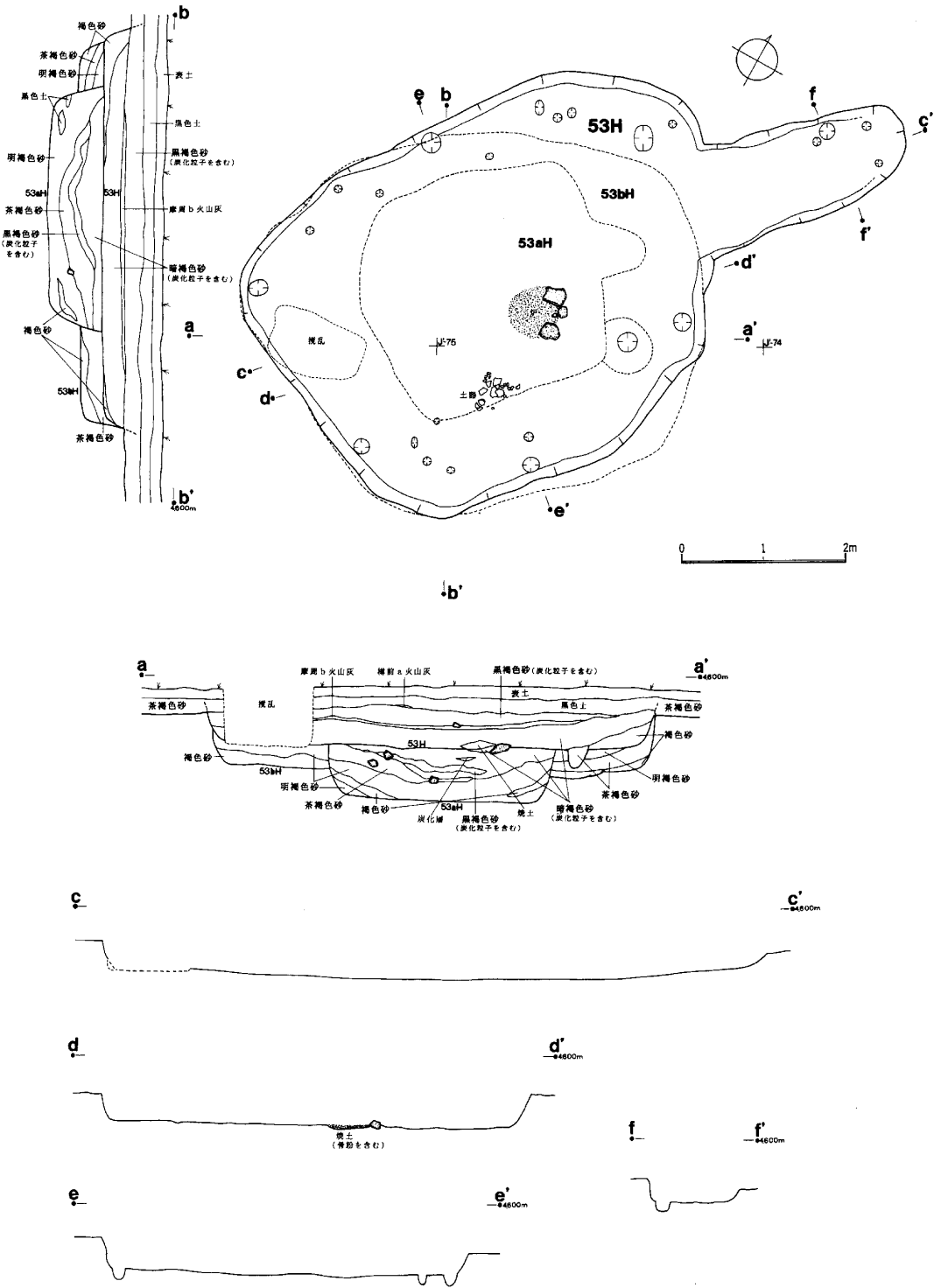
遺物（第37図、第38図、第39図、第40図、第41図－1～3、図版6－2・3）

第37図－1は床面出土。内側からの突瘤文、縄線文、小突起間を「∩」状隆帯で構成された続縄文宇津内II a式。2・3は擦文土器。2は口径約12cm、器高約11cmの無文小型土器。3は口径約23cmの中型土器。4は縄文中期後葉の北筒IV式。5は口径約12.5cm、器高約16.5cmの小型土器。大小の微隆起線を菱形状に配置したもので、続縄文後北C₁式である。内面には縄文が見られる。6・7は後北C₂・D式。

第38図－1・2も後北C₂・D式。1・2とも帯縄文を鋸歯状に施す。2は注口土器。3は上部が欠失する。続縄文土器である。

第39図－1～5は突瘤文をもつ。1は吊り耳から垂下した隆起線が左右に別れ、横の隆起線と連結するのであろう。2は突瘤文の上下に縄線文があり、突瘤間に円形文を施す。3は円形文を基準に半截状施文具による沈線を直線的に施す。他の突瘤文系の土器に比べると器壁は薄く、焼成も良い。4は撚糸文を地文に曲線文が施され、5は横位の縄文を地文とする。1・2は宇津内II a式。3～5、特に3・5は宇津内II a式よりも古手に位置付けられよう。6は6条の横走沈線下に刺突が連続する。7は横走沈線と口唇部には深い刻みがある。8は2本の横走沈線文間に弧線文が施され、9は縄線文と弧線文内に円形刺突が加わる。10は斜位の沈線文が見られる。11・12は口唇部に刻みをもち、11では1条、12は3条の縄線文が施される。13は4条の絡縄体が施される。14は2本単位の山形沈線、15は小楕円形状の刺突文が施される。7～15は続縄文初頭であらう。16・17は縄文晩期幣舞式。18は3条の縄線文間に刺突文、19は内側に刺突文、20は盛り上がりのある爪形文。18・19は縄文晩期中葉、20は同前葉であらう。21は縄文前期末葉の押型文。

石器は第40図－1・2は床面出土。1は無茎石鏃。2は削器。火熱を受けている。3～19は埋土出土。3～5は無茎石鏃。6・7は有茎石鏃。8は縁辺部のみに加工を施した菱形状の石鏃。9・10は両面加工ナイフ。11は搔器。12～17は削器。18・19は片刃の磨製石斧。20はたたき石。20・24～26は表土出土。21～23は摩周b火山灰直下から出土。21は搔器。22・23は削器。24は無茎石鏃。25は円形搔器。26は削器。9は頁岩製、14は玄武岩製、18・19は緑色片岩製、20は泥岩製であり、他は黒曜石製。



第35图 53号竖穴平面图

小 括

本竪穴は長軸面側（北側）に舌状の張出し部をもつ。時期は続縄文宇津内II a 式である。

（武田 修）

53 a 号 竪 穴

遺 構（第36図，図版6-1）

本竪穴は53b号竪穴を切り込んで構築されている。直径約2.80mほどの方形を呈するが、北西隅から西南隅にかけては弧状である。北側に約70cmほどの小さな舌状部をもち、その基部にはフレーク・チップの集積が幅40cmにわたって広がっている。掘り込みは深く53号竪穴の床面から約65cmである。炉跡は認められず、柱穴は西壁側、北壁側にそれぞれ直径約6cm、深さ7cmのものを2本検出できただけである。

遺 物（第42図，第43図，第41図-4~22）

第42図-1は口径約14cm、器高約21cmの中型土器。胴中央部が膨らみ、口縁部がすぼまる器形を呈し、底面は欠失する。2は底部に微隆起線が加えられる。1・2は南壁側の攪乱土から出土。後北C₂・D式。3・4は宇津内II a 式。6の3本の縄線文の間隔は広く、突瘤文が施される。7~10は沈線文が見られる。7は横走沈線文間に三角形の弧線文を上下に配置する。8は口縁下部に工字文状の沈線を施し胴下部の無文帯と太い隆帯で区画する。器面には赤色顔料が付着する。9は6条の横走沈線が施される。大洞A'式相当であろう。10の口唇部には斜めの刻み加わる。11の内側には円形刺突が2列施される。13は屈曲部に刺突がある。6~13は続縄文初頭であろう。14・15は縄文晩期弊舞式。14の器面には赤色顔料が付着する。

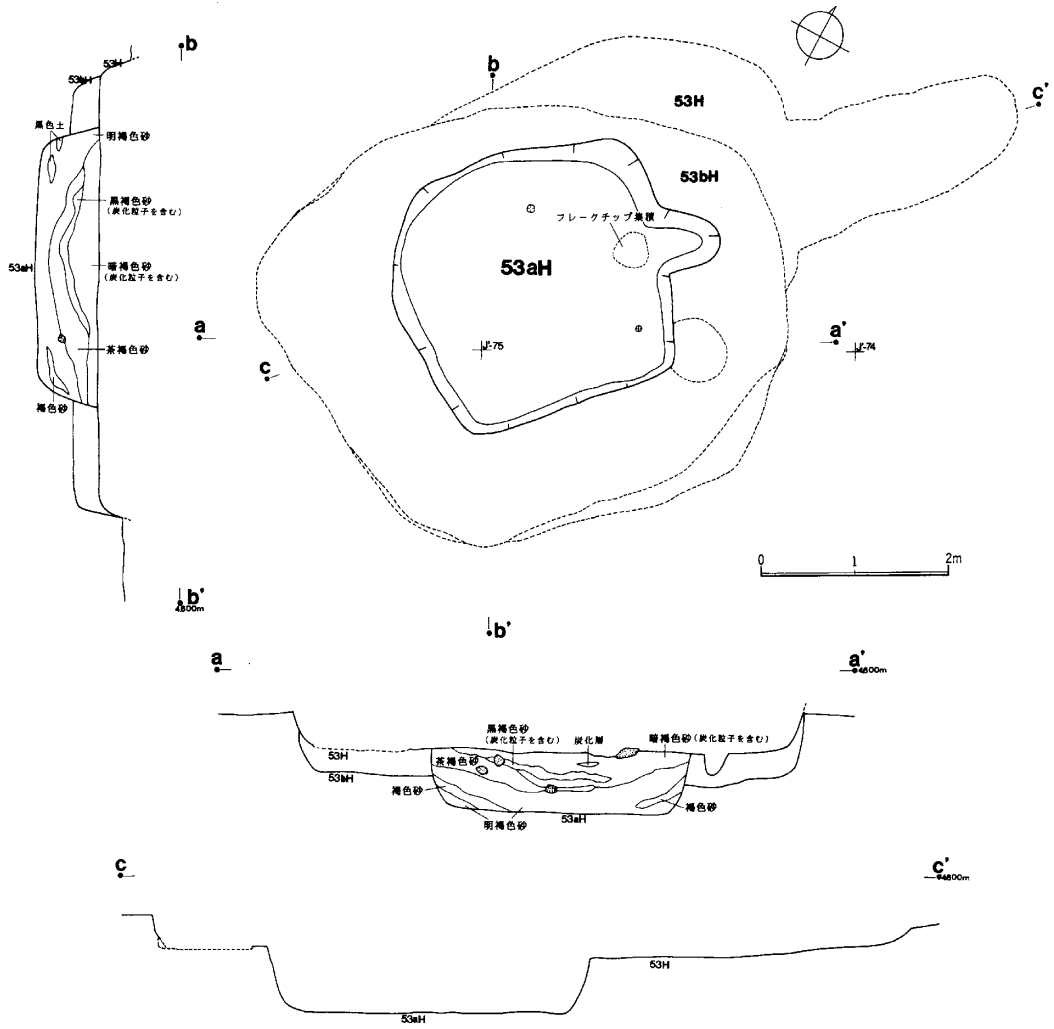
第43図-1は底部，3・4は口縁下部に細い沈線が横走する。2は縄線文。5は円形，6は半截状施文具による刺突文が施される。7・8は縄文を地文に7では沈線による円形文が描かれ、その周りと下部に小さな刺突加わる。9は縄文後期鯨潤式。10は同前期末の刺突文系土器。11は無文であるが外側から小さい円形文が連続した常呂川河口押型文II群。

石器は全て埋土出土である。第41図-4・5は無茎石鏃。6・7は有茎石鏃。8・9は石槍。10は両面加工ナイフ。11~13・19は削器。14は石錐。15~18・21は搔器。15・16は上部がすぼまり、柄部を作出している。17・18は肉厚で形状は方形を呈する。21は自然礫の右側縁部に使用痕がある。22の全周面は研磨され、断面は丸みを帯びる。刃部と思われる下端部も周辺から剝離されている。21は泥岩製，22は砂岩製であり他は黒曜石製。

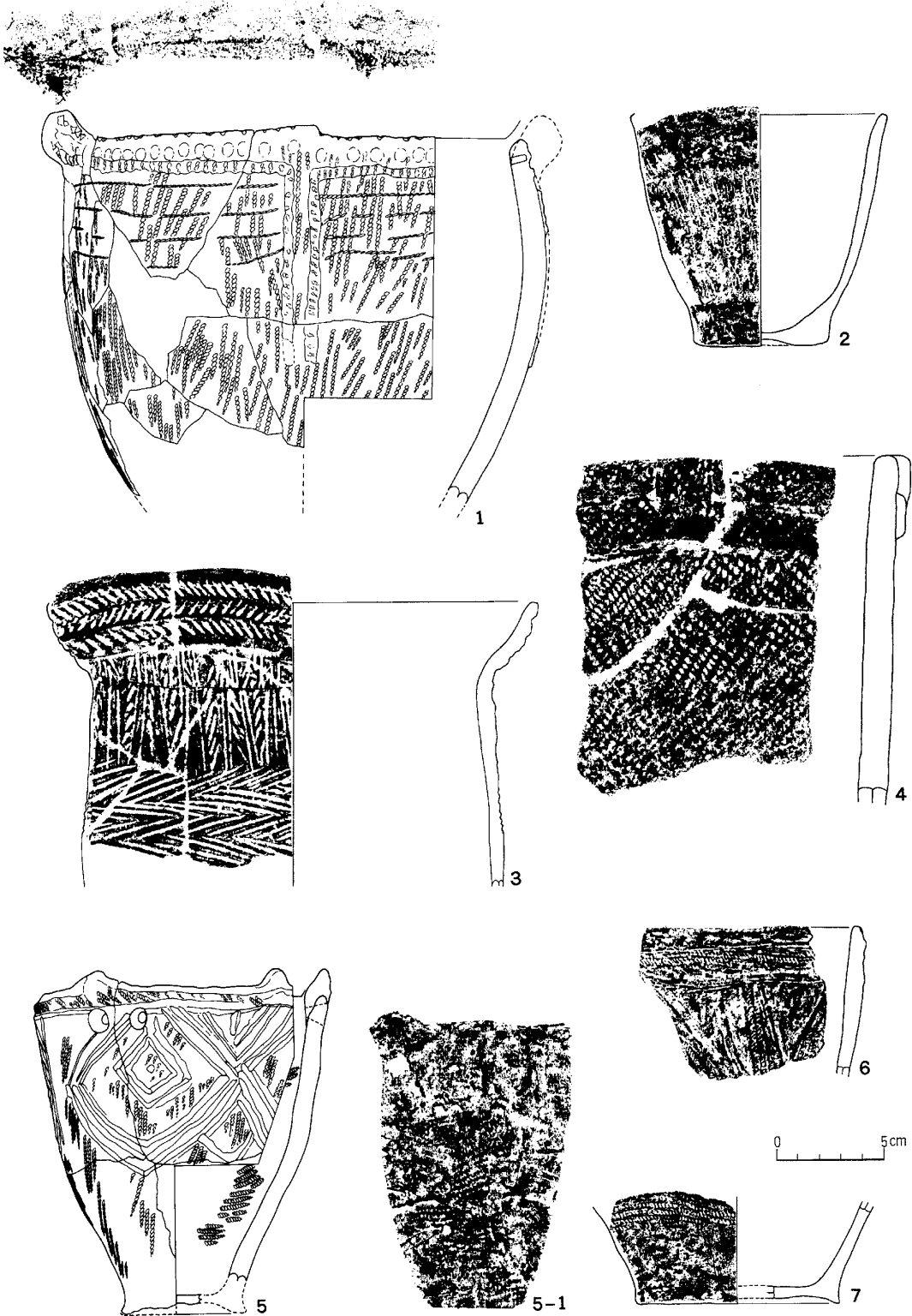
小 括

直径約2.80mの小型竪穴であるが、北壁に舌状部をもつ。53号の宇津内II a 式よりは古い時期のものである。

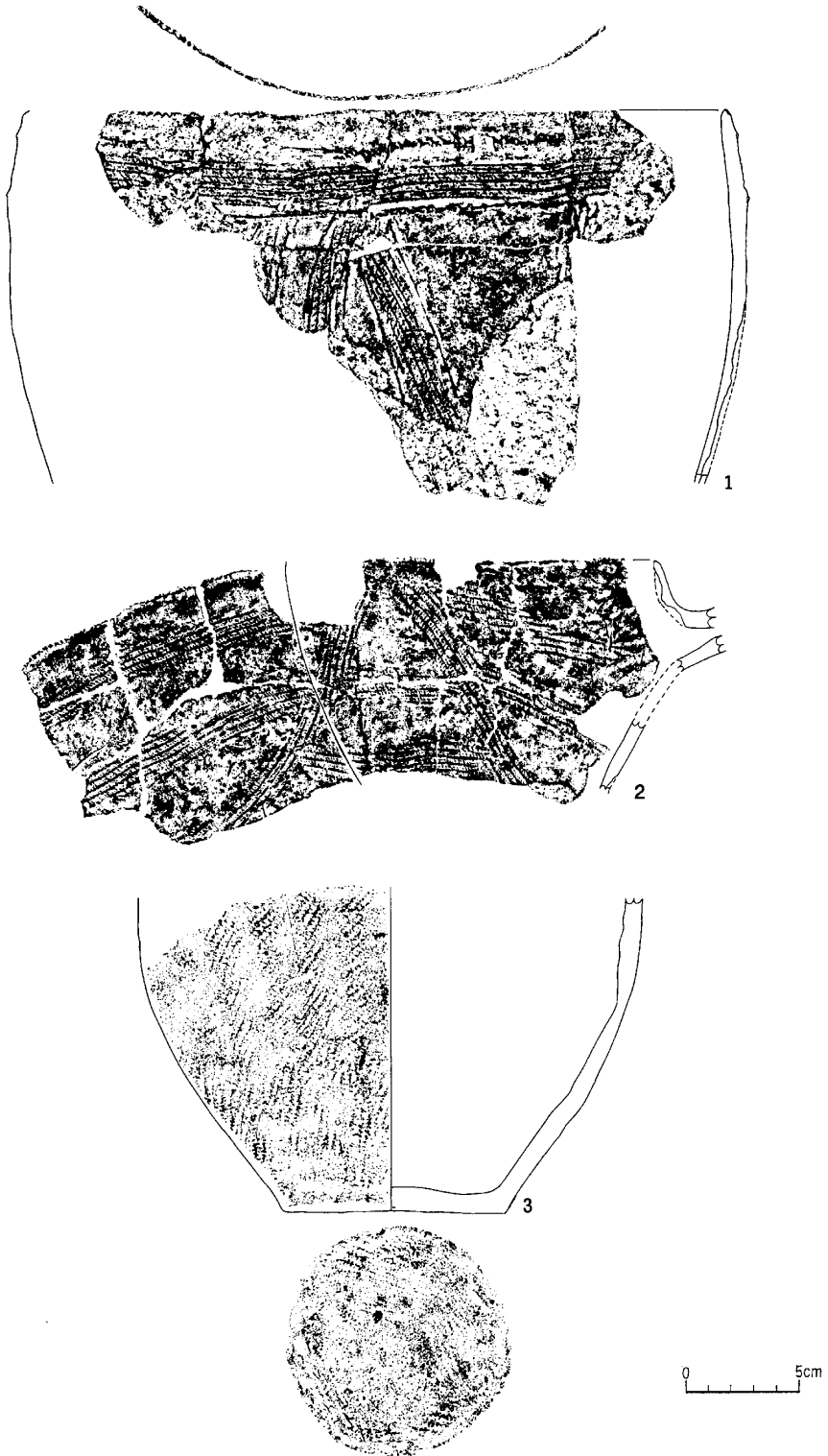
（武田 修）



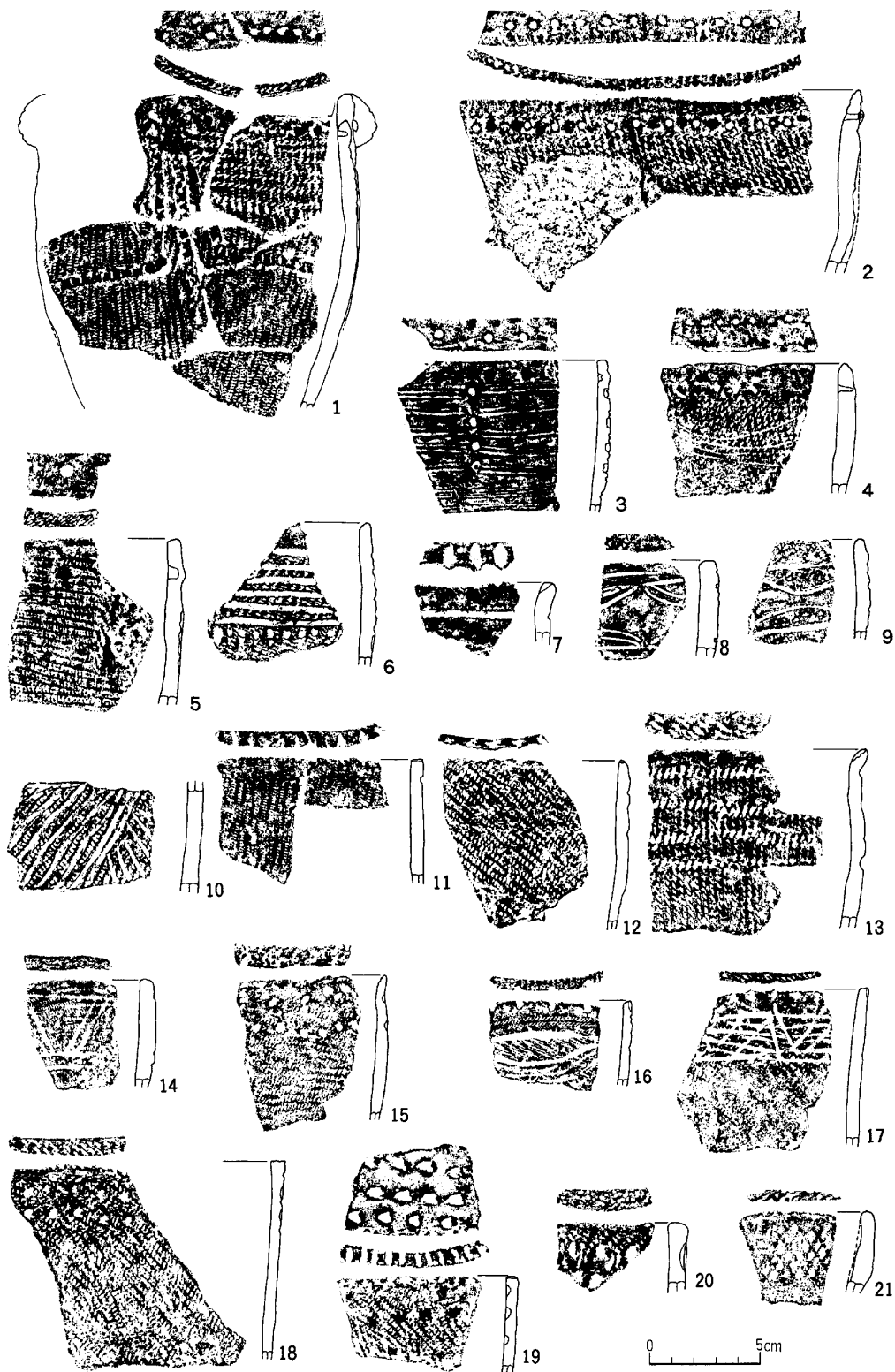
第36図 53a号竖穴平面図



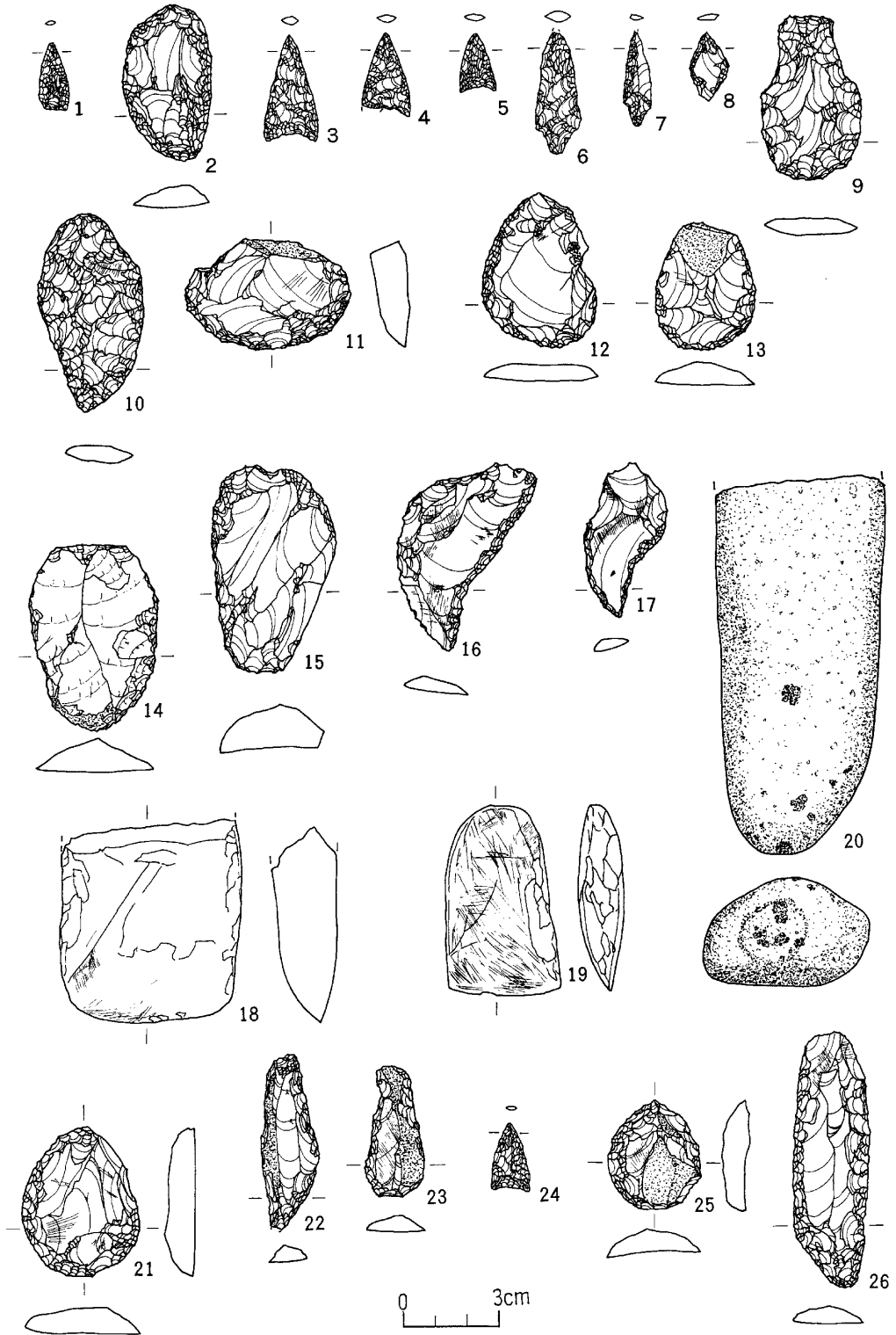
第37图 53号竖穴床面 (1)·表土 (2~4)·火山灰直上 (5)·火山灰直下 (6)·埋土 (7) 出土土器



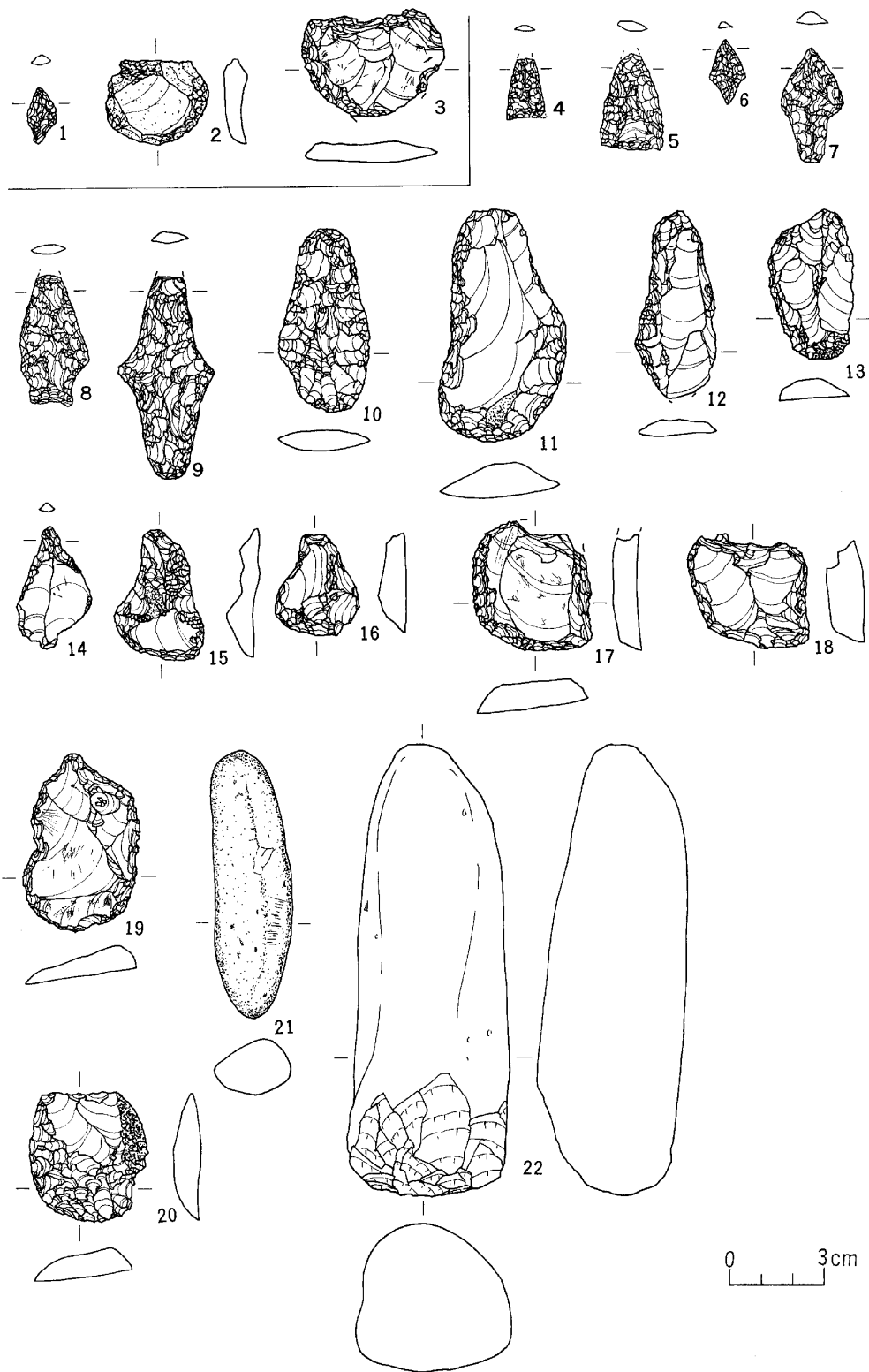
第38图 53号竖穴埋土(1~3)出土土器



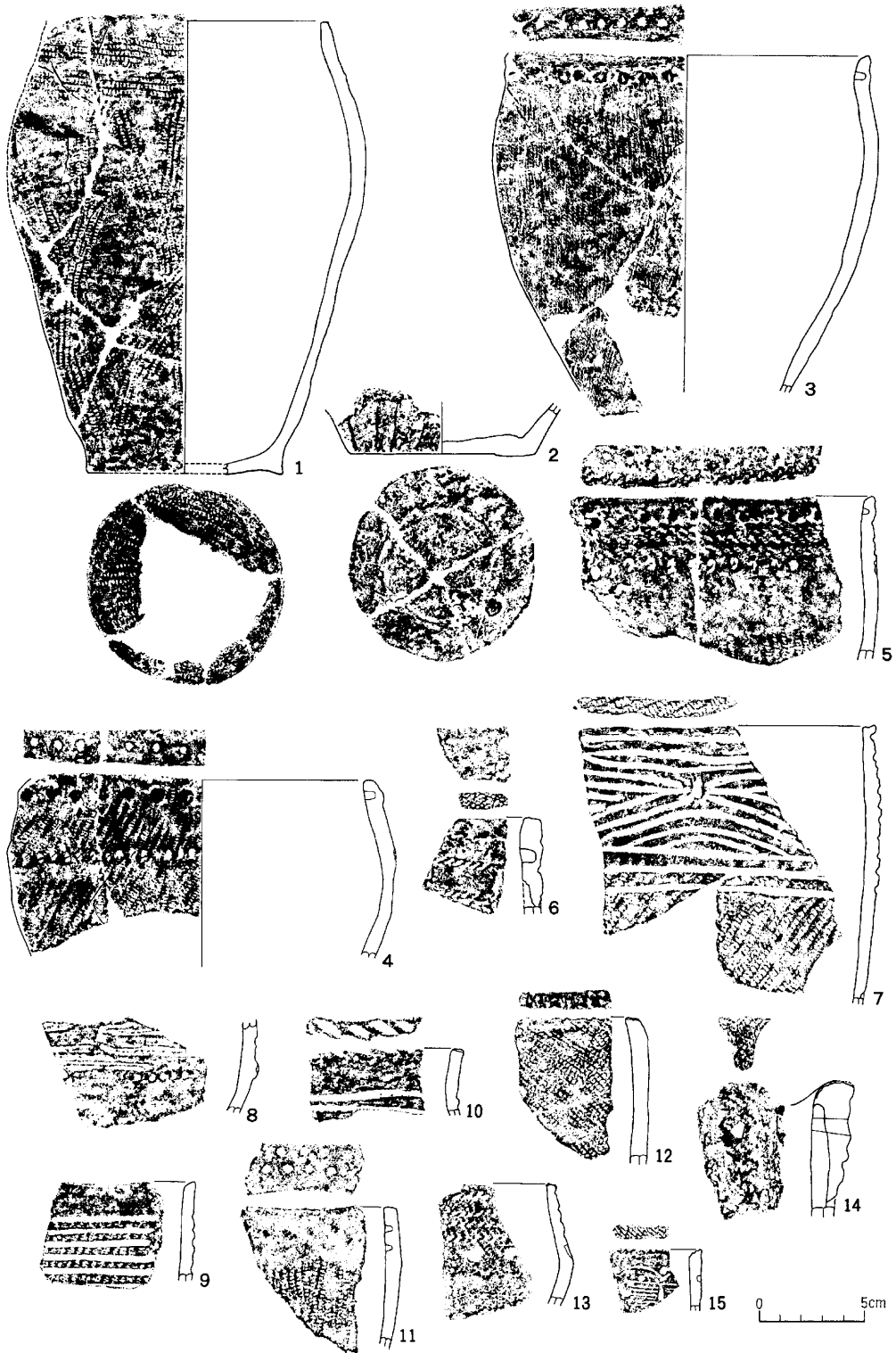
第39图 53号竖穴埋土(1~21)出土土器



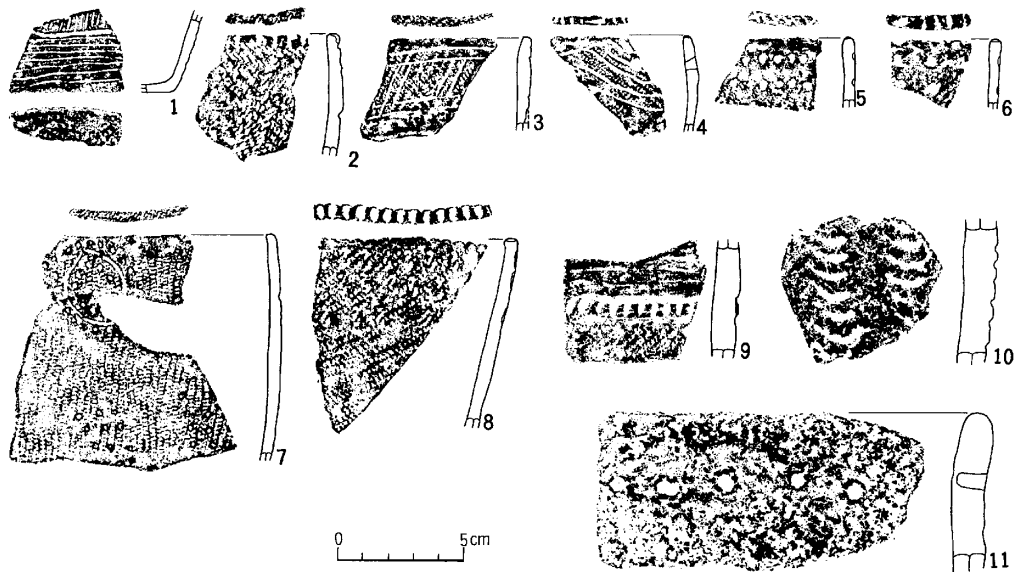
第40图 53号竖穴床面 (1·2)·埋土 (3~19)·表土 (20·24~26)·火山灰直下 (21~23) 出土石器



第41図 53号竪穴埋土(1~3), 53a号竪穴埋土(4~22)出土石器



第42图 53a号竖穴埋土(1~15)出土土器



第43図 53a号竖穴埋土（1～11）出土土器

53b 号 竖 穴

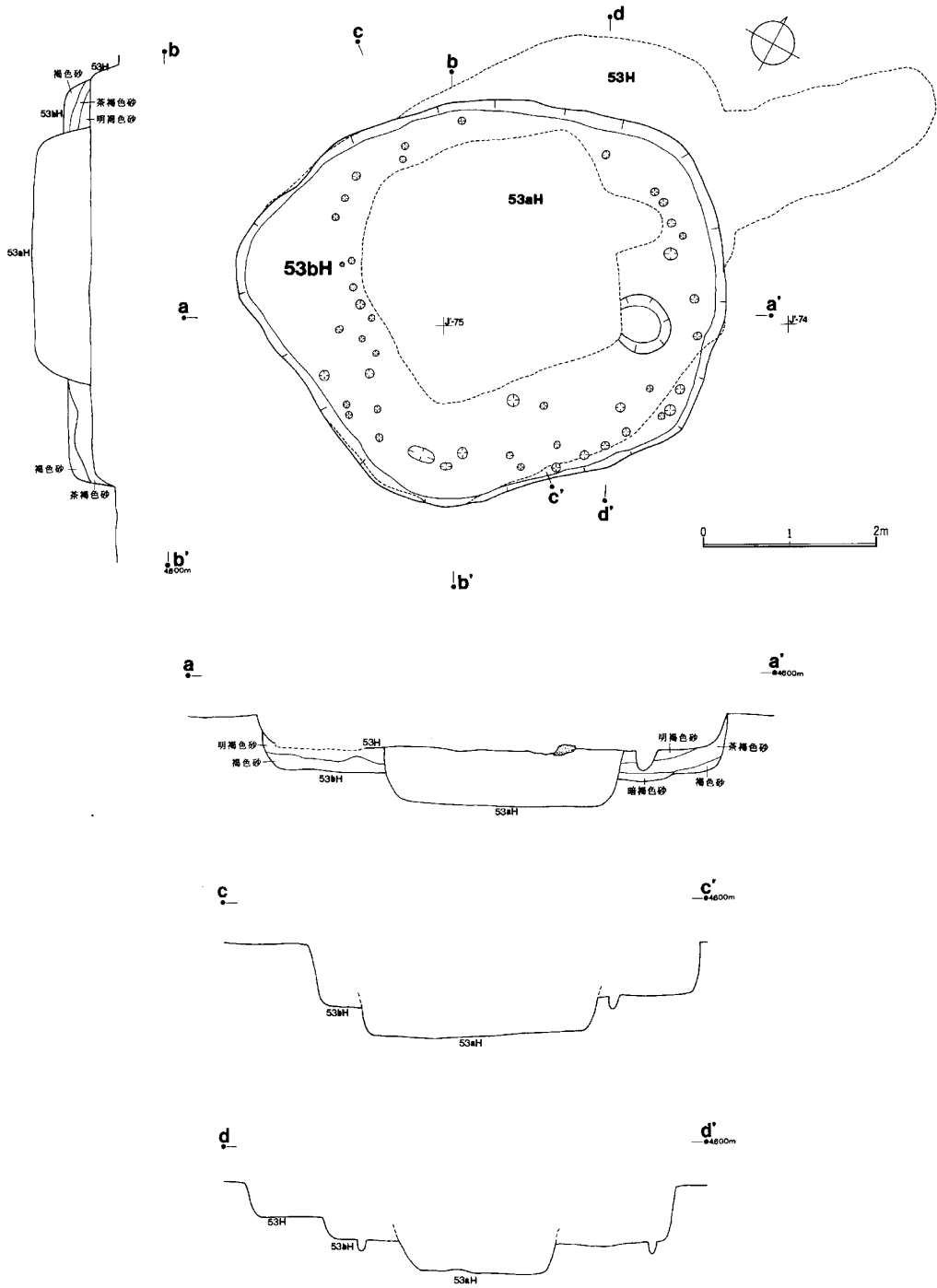
遺 構（第44図）

本竖穴は53号、53a号と重複する。規模は長軸約5.14m、短軸約4.50mを測る。南西隅側がやや突出した不整形である。西壁中央部から南壁は53号竖穴の壁と共有する様である。柱穴は壁際から多数検出された。主柱穴と思われる最も太いものでも直径約10～15cm、深さ約14～16cm、壁柱穴は細いもので直径約4～10cm、深さ約4～24cmである。壁柱穴の間隔はかなり狭い。ほぼ垂直に立ち上がった壁高は53号竖穴の床面から約24cmである。

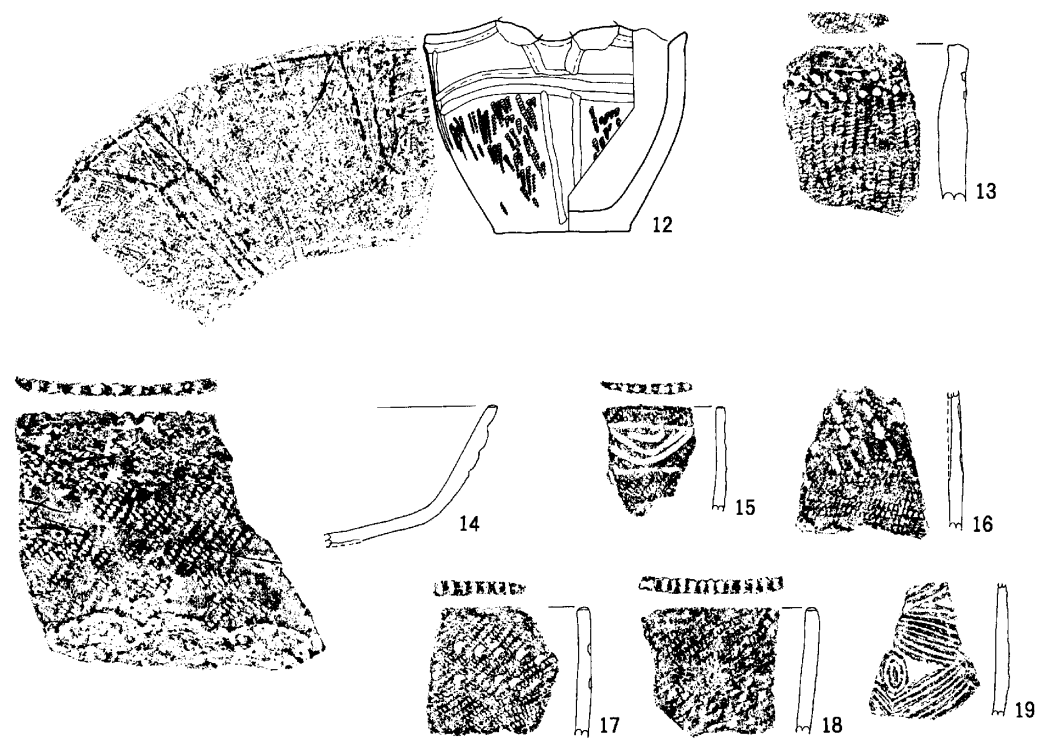
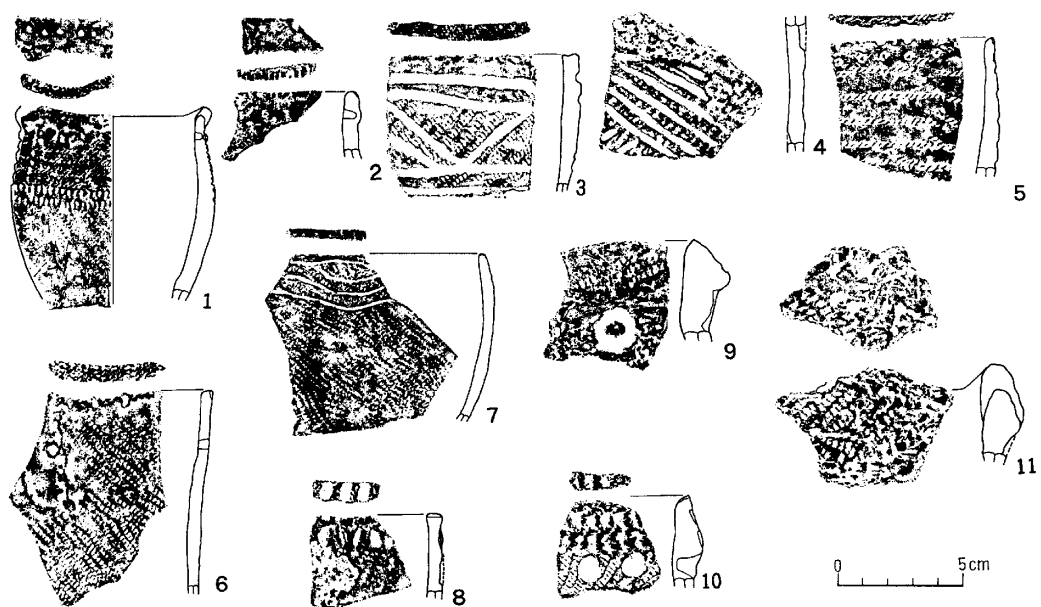
中央部が53a号竖穴に切られているため炉跡は検出できなかった。北東壁側にある直径約65cm、深さ約8cmの円形ピットは53a号にも切られるもので本竖穴に伴うものであろう。

遺 物（第45図－1～11、第46図－1～5）

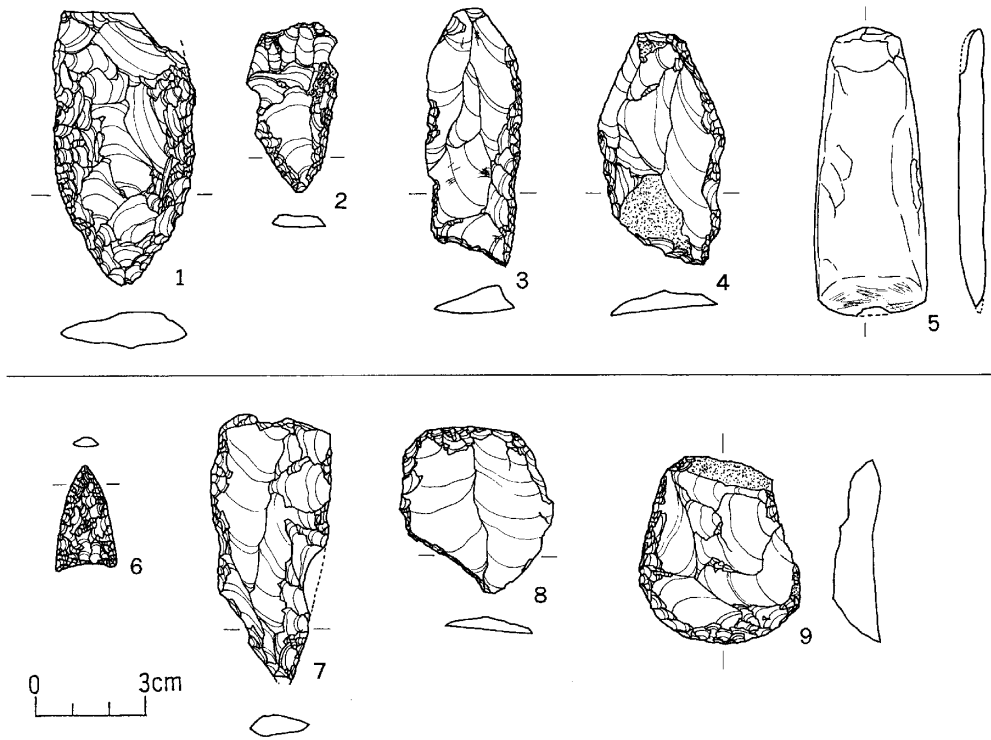
第45図－1・2は突瘤文のある字津内II a式。3は横位の沈線文間に「V」字状の沈線を施す。4は斜位の短刻線がある。5は縄線文の上部に浅い円形刺突がある。3～5は続縄文初頭であろう。6は縦位の隆帯が貼付されていたと思われるが剥落している。縄文晩期幣舞式。7は内屈した口縁部に曲線状の沈線文が施される。8は「ハ」字状の爪形文が施される。縄文晩期前葉であろう。9～11は縄文中期トコロ六類。



第44图 53b号竖穴平面图



第45図 53b号竖穴埋土 (1~11), 54号竖穴埋土 (12~19) 出土土器



第46図 53b号竪穴埋土（1～5）、54号竪穴埋土（6～9）出土石器

石器は第46図－1が両面加工ナイフ。2～4は削器。5は片刃磨製石斧。1～4は黒曜石製，5は青色片岩製である。

小 括

本竪穴は53号，53a号と重複する。切り合い関係から3軒の中で最も古い，詳細な時期は不明である。

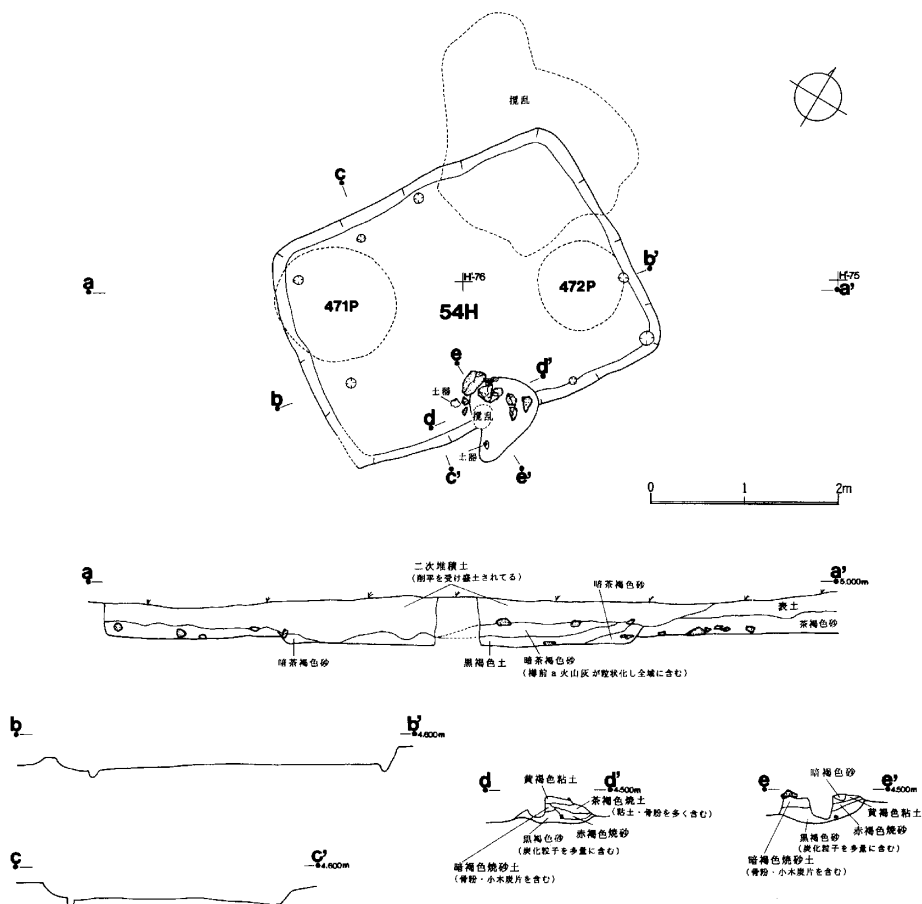
(武田 修)

54号 竪穴

遺 構 (第47図, 図版6-5)

本竪穴はH'75・76, I'75・76グリッドに位置する。表土層の大半が削り取られ、黄褐色粘土が2次堆積され、北西壁側も攪乱を受けているため遺存はあまり良くない。表土層下部の暗茶褐色砂層には白色を呈した樽前a火山灰が粒状に混入する。規模は長軸約3.60m, 短軸約2.70mの南-北に長軸をもつ方形を呈する。壁高は確認面から約18cmである。

カマドは東壁の中央部に構築されている。燃烧部から煙道部、袖部は弧状の丸みをもつ。この弧状の丸みはカマド構築時の掘り方を現すものと思われる。袖部と天井部は黄褐色粘土で構築されており上部に角礫が見られるものの、袖部の芯材として用いられたのかは南側袖部が残っていないため不明である。袖部に角礫が達していないことから推測すると掛口部に使用したのかもしれない。



第47図 54号竪穴平面図

竪穴中央部の床面は盛り上がりを見せるものの炉跡は検出できなかった。主柱穴は無く、直径約8～14cm、深さ約6～12cmの壁柱穴はほぼ等間隔に配置されている様である。

遺物 (第45図-12～19, 第46図-6～9)

本竪穴は擦文期のものであるが、擦文期の遺物は出土していない。他の時期のものが埋土から出土している。第45図-12は口径約10cm、器高約8.4cmの小型土器。小突起から微隆起帯が垂下する。実測図正面の口縁部には吊り耳があったのであろう。この箇所のみ横位の微隆起線が付された後北C₁式。13は口縁下部に2列の円形刺突がある。14～18は縄文晩期中葉のものであろう。14は3条の縄線文が施された浅鉢。15は曲線状の沈線、16・17は半截状の刺突、18は縄文、19は上下に弧線文を描き、中央に渦巻文を施し三叉文としたもの。縄文晩期前葉であらう。

石器では第46図-6の無茎石鏃。7・8の削器。9の搔器がある。6は頁岩製、他は黒曜石製。

小括

本竪穴は擦文期のものであるが、詳細な時期は不明である。 (武田 修)

55号 竪穴

遺構 (第48図, 図版7-1)

本竪穴は53号竪穴の西側にあり、竪穴を摩周b火山灰が覆っている。火山灰を剥土するとその下から長軸約5.60m、短軸約5mの不整円形の竪穴が認められた。当初、舌状部は検出できずにいたが周辺を精査の結果、南側に幅約0.87m、長さ約2.10mの舌状の落ち込みを検出した。壁高は確認面から北壁で40cm、南壁で30cmある。壁は斜めに立ち上がる。中央に30×45cmの範囲で炉跡と考えられる焼土が検出され、その東側40cmにも25×35cmの範囲で焼土が認められた。柱穴は直径約10～14cm、深さ約7～11cmのものが3本検出できただけである。埋土中から炭化物が検出されていることから火災住居と考えられる。

また、竪穴を覆っていた火山灰の上面から擦文土器と5～45cmの礫が多数出土している。

遺物 (第49図, 第50図-1～5, 第51図, 図版7-2・3)

第49図-1～5は床面出土。1・2は宇津内式の底部。3～5は縄端圧痕文が施された続縄文初頭の土器と思われる。

6～9は火山灰の上面から出土している。6は後北C₂・D式。7～11・13は擦文土器。7・9・10は高坏で10は矢羽根状文を2列めぐらす。12・14・15は火山灰下の埋土から出土。12は口径約8cm、器高約7cmの小型土器。口唇部に刻みをもち、文様は細い沈線と刺突文で施されている。後北C₂・D式のものと考えられる。14は宇津内II a式。15は続縄文初頭であらう。第50図-1～5も火山灰下の埋土から出土したもので、1は縄文後期。2は同晩期の幣舞式。3・4は

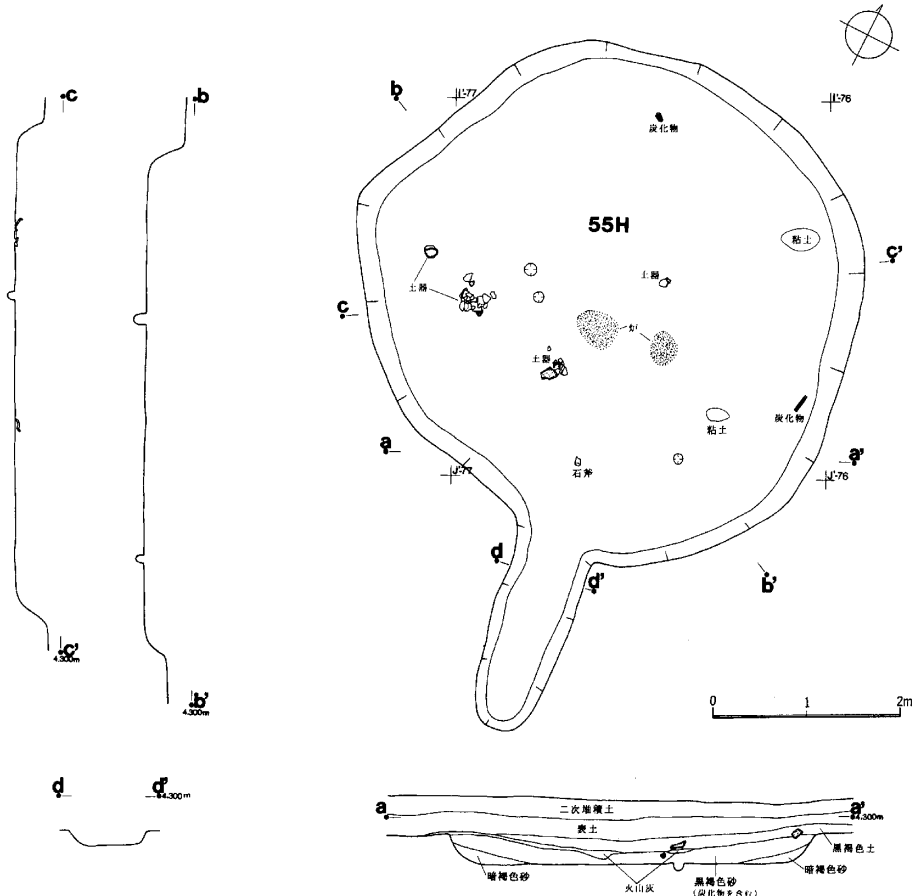
常呂川河口遺跡

縄文晩期中葉と思われるもので、3は刺突文、4は縄端圧痕文をもつ。5は胎土に繊維を含む縄文中期トコロ六類。

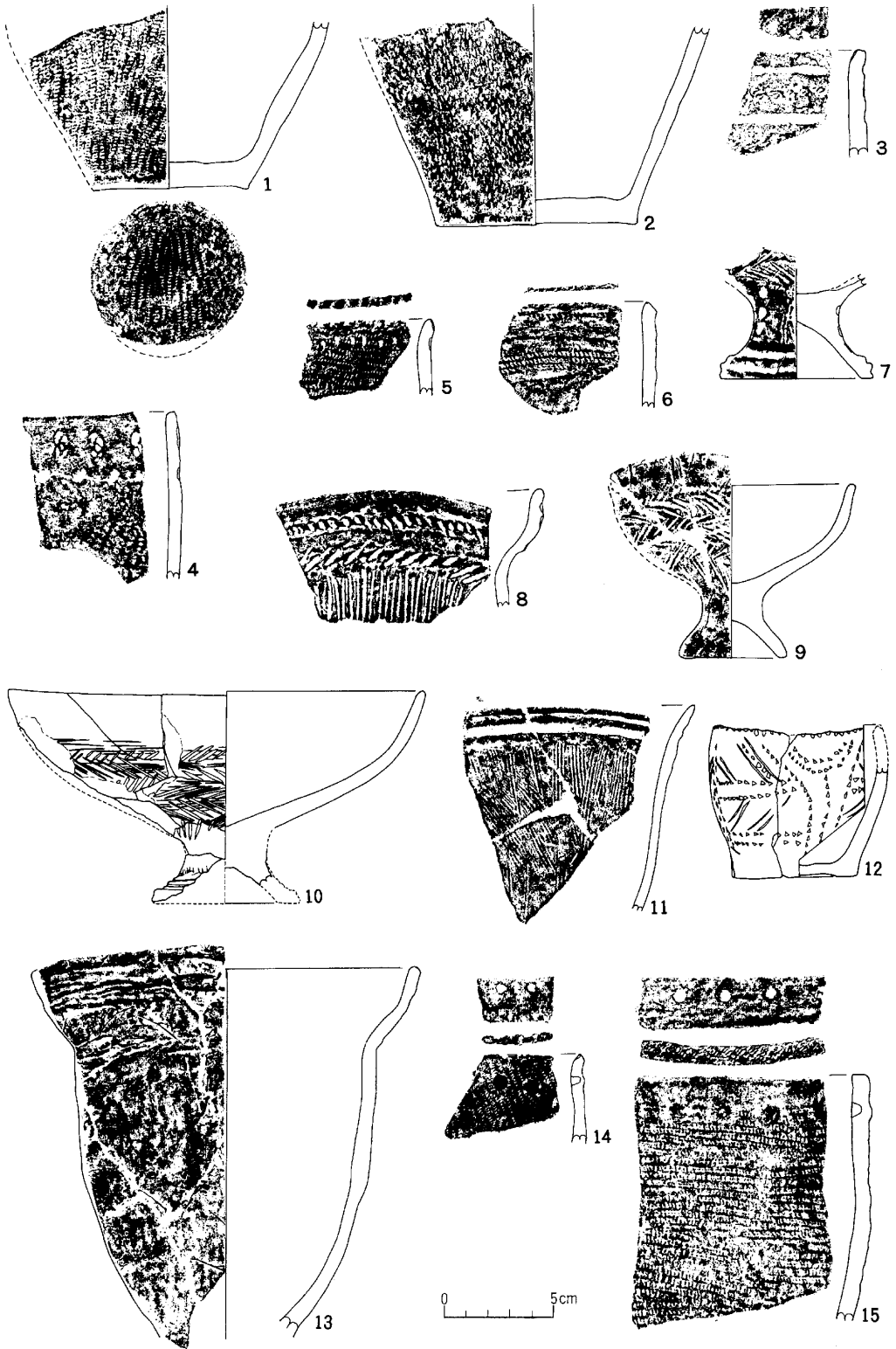
石器は第51図-1~4が床面出土。1・2は削器。3は搔器。4は泥岩製の磨製石斧。埋土からは5~25の各種の石器が出土している。5・6は無茎石鏃。7~12は有茎石鏃。13は石槍。14~16は両面加工ナイフ。17・18は削器。19~23は搔器。24は泥岩製の磨製石斧。25は安山岩製のたたき石。4・24・25以外は黒曜石製。

小 括

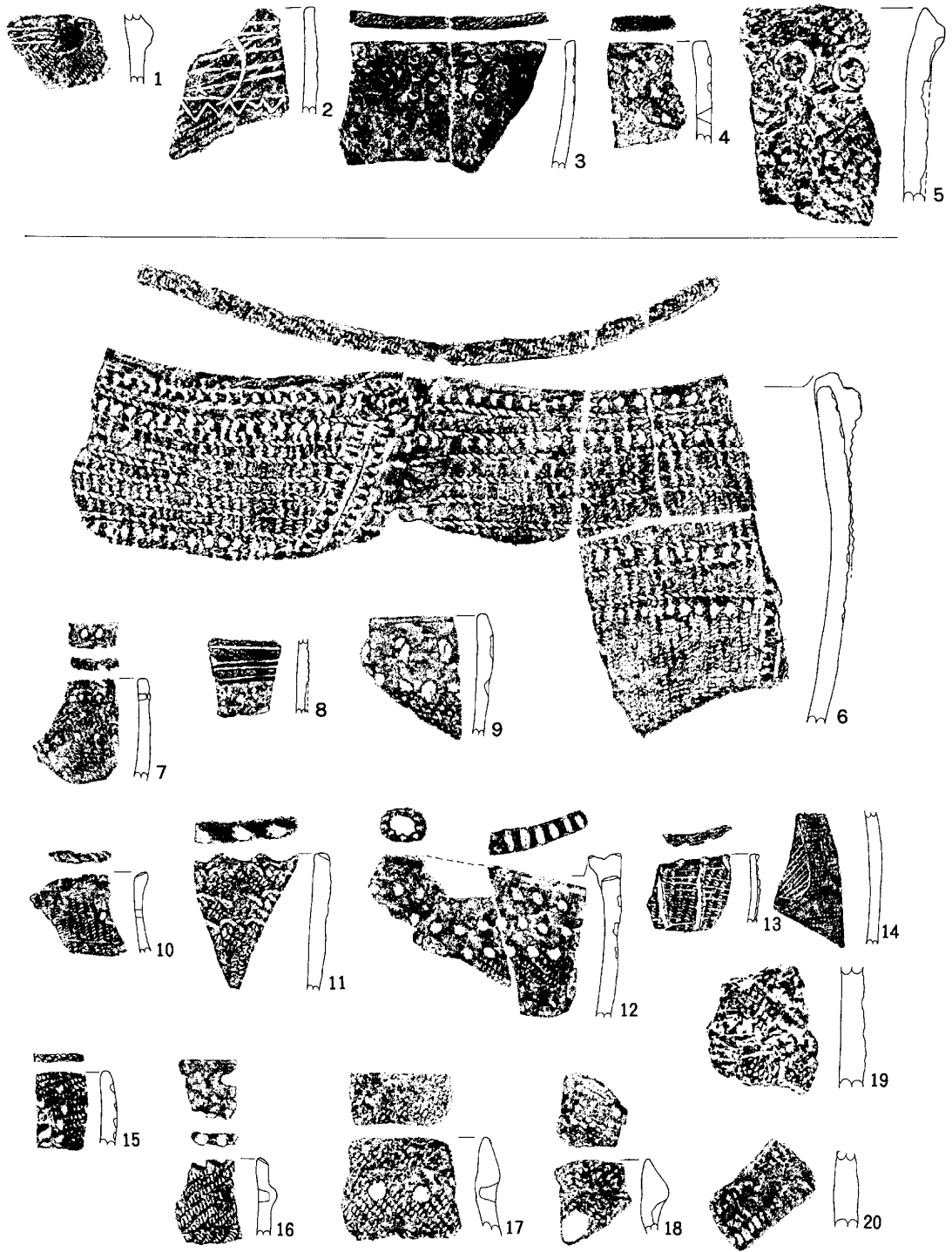
本竪穴は舌状部をもつ不整円形の竪穴である。時期は床面から出土している土器から続縄文初頭と考えられる。 (佐々木 覚)



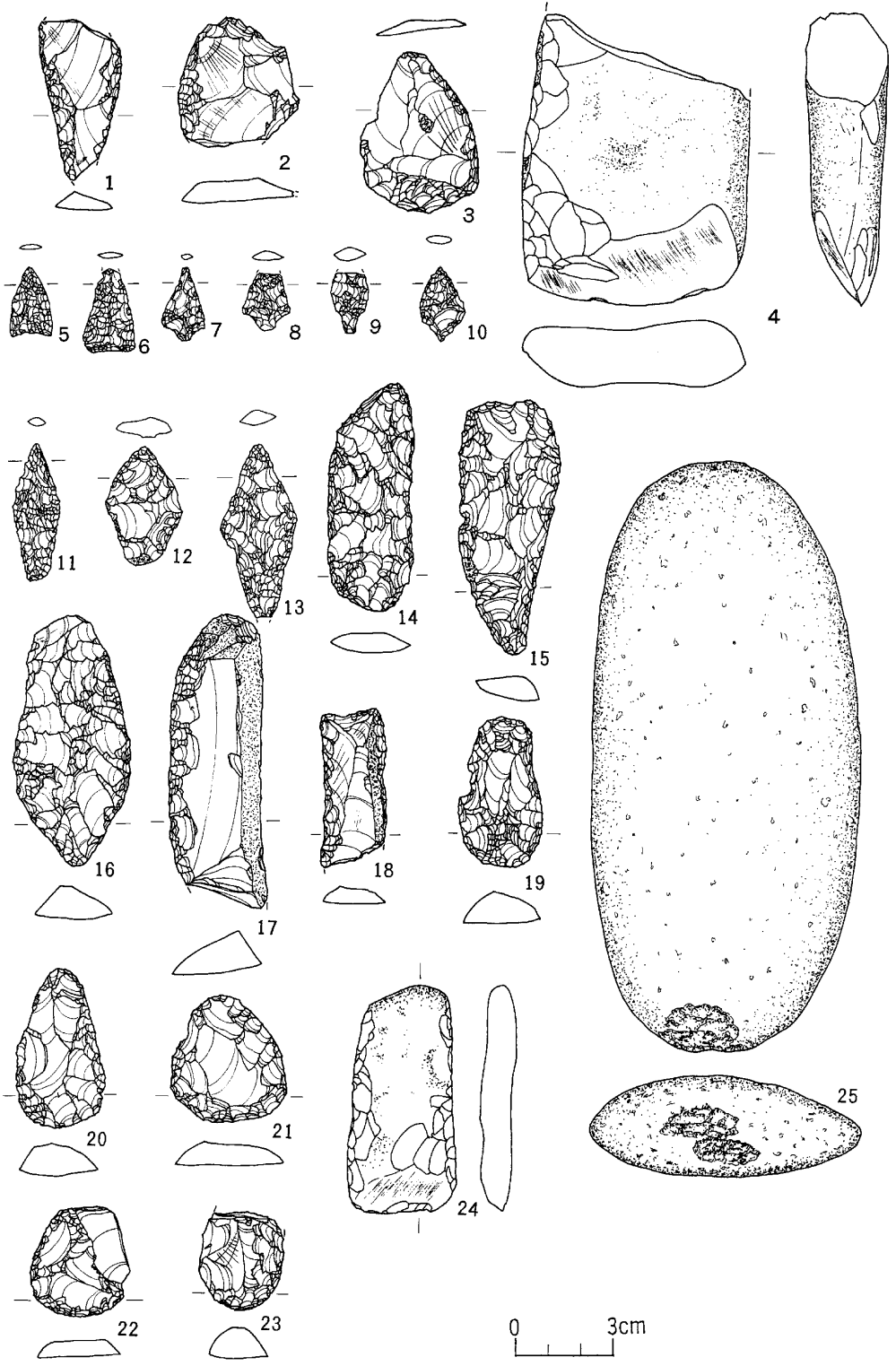
第48図 55号竪穴平面図



第49图 55号竖穴床面(1~5)·表土(6~9)·埋土(10~15)出土土器



第50図 55号竪穴埋土（1～5），55a号竪穴埋土（6～20）出土土器



第51图 55号竖穴床面(1~4)·埋土(5~25)出土石器

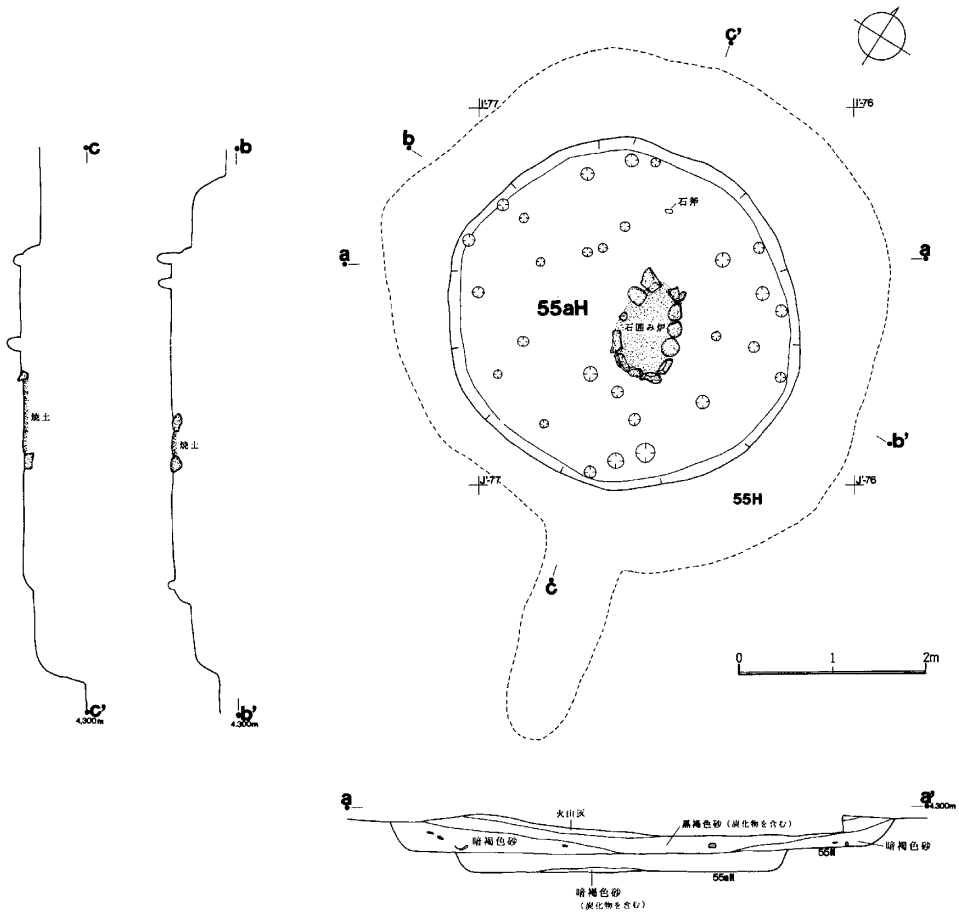
55 a 号 竖 穴

遺 構 (第52図, 図版 7 - 1)

本竖穴は55号竖穴と重複しており, 55号竖穴の床面精査の際に発見した。規模は長軸約3.90m, 短軸約3.60mの円形を呈し, 壁高は55号竖穴の床面から20cmを測り, 壁は斜めに立ち上がる。竖穴中央部に110×70cmの範囲で礫12個を伴う石囲み炉があり, 炉の焼土は骨片を含んでいる。柱穴は直径約10~20cm, 深さ6~16cmのものが20本検出された。

遺 物 (第50図- 6 ~ 20, 第53図)

すべて埋土出土である。第50図- 6は宇津内II b式。7は同II a式。8は続縄文初頭。9~15は縄文晩期中葉と思われる。16は内側に斜めの突瘤をもつ縄文晩期前葉と思われる。17は縄文中期後半であろう。18・19は胎土に繊維を含むトコロ六類。20は同五類。

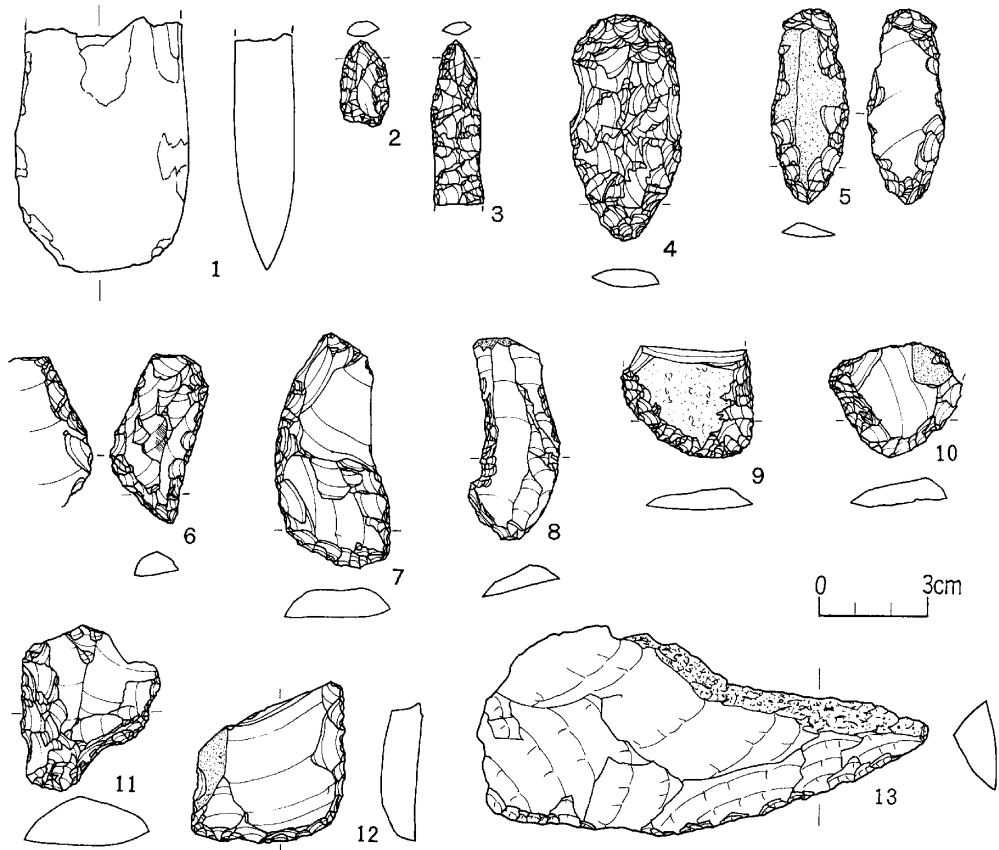


第52図 55a号竖穴平面図

石器は第53図- 1が床面出土の安山岩製の磨製石斧。埋土から2～13が出土。2・3は石鏃。4はナイフ。5～8は削器。9～13は搔器。13は玄武岩製。2～12は黒曜石製。

小 括

本竪穴は55号竪穴より古いことは確実であるが、詳細な時期は不明である。(佐々木 覚)



第53図 55a号竪穴床面(1)・埋土(2～13)出土石器

56 号 豎 穴

遺 構 (第54図, 図版7-4)

本豎穴はB'78・79, C'78・79グリッドに位置する。規模は長軸約5m, 短軸約4.5mの不整形を呈する。壁は皿状に緩く立ち上がる。高さは確認面から約34cmである。埋土の基本土層は7層に分層される。北壁側の床面上に堆積する暗褐色砂には火熱を受けた焼礫が混入する。この焼礫は北壁際の埋土中に構築されているピット365のものと考えられる。このピットは本豎穴の廃絶後に構築されたものである。炉跡は確認できなかった。ピット360により破壊を受けているのであろう。

柱穴は各ピットにより破壊を受けていると思われるものの、支柱穴と思われるものは2本ある。豎穴の中央部付近のものが直径約30cm, 深さ約40cm。中央部からやや東側に寄ったものが直径約25cm, 深さ約15cmである。壁柱穴は北壁で3本, 南壁で2本, 東壁で1本確認した。細いもので直径約4~8cm, 深さ約6~8cm。太いもので直径約12~22cm, 深さ約10~16cmである。

遺 物 (第55図, 第56図, 第57図)

第55図-1は左右方向からの刻線文と鋸歯文で構成された擦文土器。2は後北C₂・D式。3の口唇部は尖る。胴部文様は極めて複雑である。口縁直下に横走させた2条の沈線文から長方形の沈線を施し, 列点文を加える。さらに長方形の沈線文の下部からは「ハ」字状の沈線が2段にわたって施され, 横位に連結する。胴下部は縞縄文を意識した沈線文が2本単位で縦走する。胎土は後北C₂・D式に類似する。この種のモチーフをもつ類例は無いが続縄文後北C₁式に比定されるであろう。4は同C₁式。5は宇津内II b式。6は同II a式。7は剥落するものの小突起から太い隆帯が垂下し, 突瘤文間と胴部に縄端圧痕文が押捺される。8は口唇部に縄端圧痕文, 口縁部に刻み加えられ, 器面は縄線文が横走する。続縄文初頭であろう。9は縄文晩期弊舞式と思われる無文の浅鉢。10は縄線文が施される。11・15は複数の沈線文と刺突文のあるもので, 15の最下部には13に見られた縦横の細沈線がある。12は口縁部, 13はその下部に縦横の細沈線, 14は口縁部と胴部に細い沈線文が施される。10~15は晩期中葉であろう。16は「ハ」字状の爪形文, 17は突瘤文が施される。縄文晩期前葉であろう。

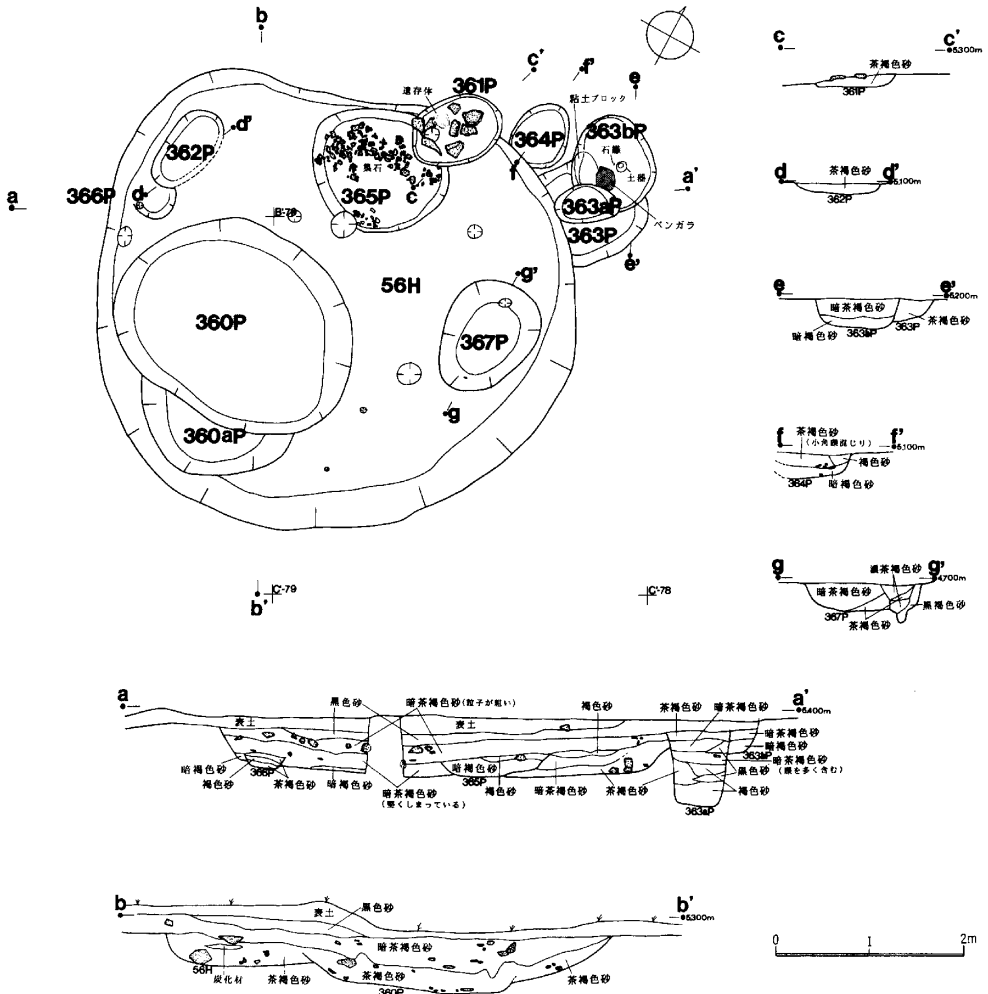
第56図-1~5は無茎石鏃。6~9は有茎石鏃であり, 7は先端部が欠失した長身鏃。10・11は両面加工ナイフ。12~27は削器。28~32は円形搔器。6がメノウ製の他は黒曜石製。

第57図-1は削器。玄武岩製。2は磨製石斧。両面の刃部表面は欠失する。頭部に敲打痕がある。黒色片岩製。3は砂岩製の凹石。4は泥岩製のたたき石。表面に擦痕が残る。

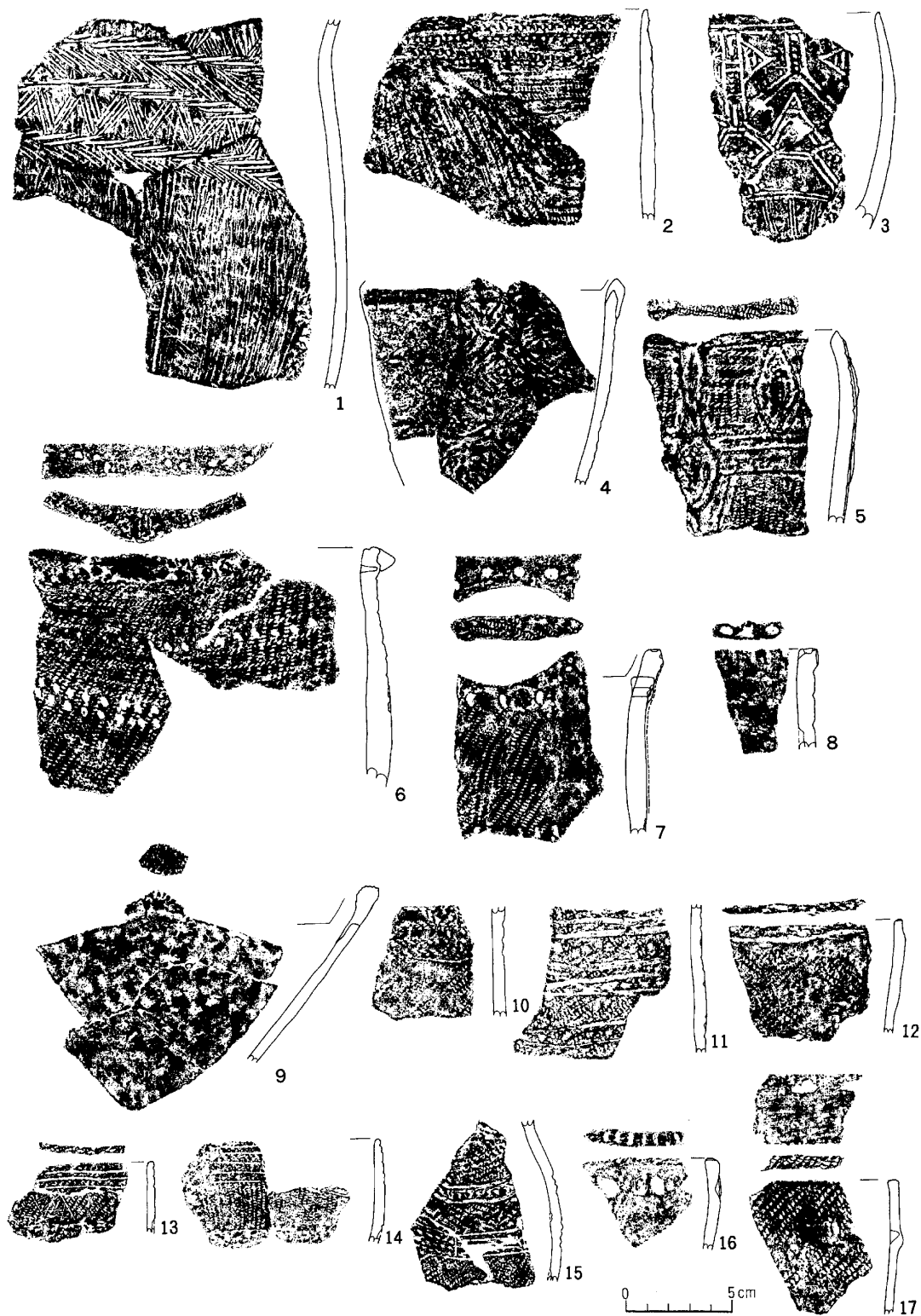
小 括

本豎穴の時期は不明である。ピット360の時期は続縄文宇津内II a式であるためそれ以前であろう。

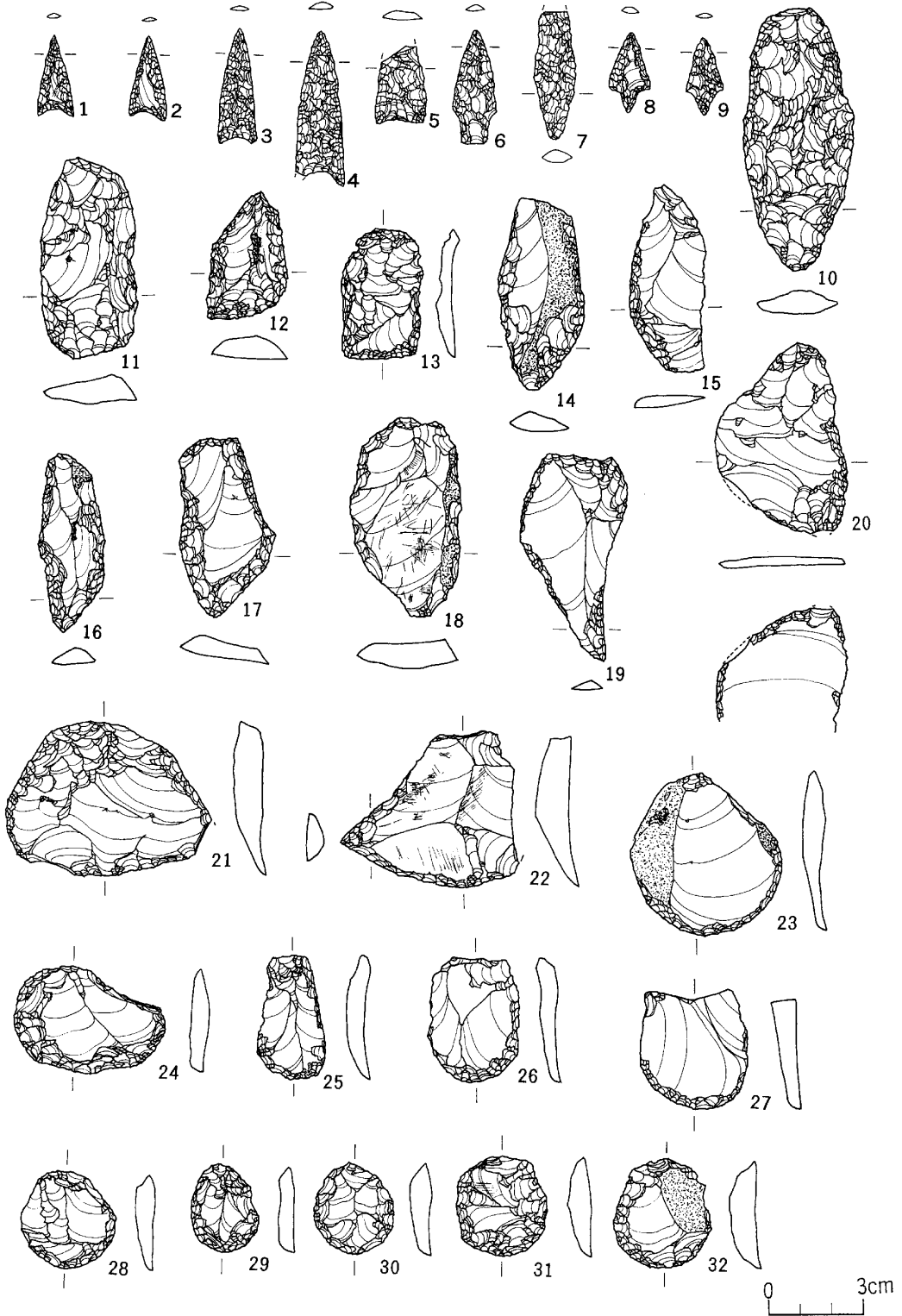
(武田 修)



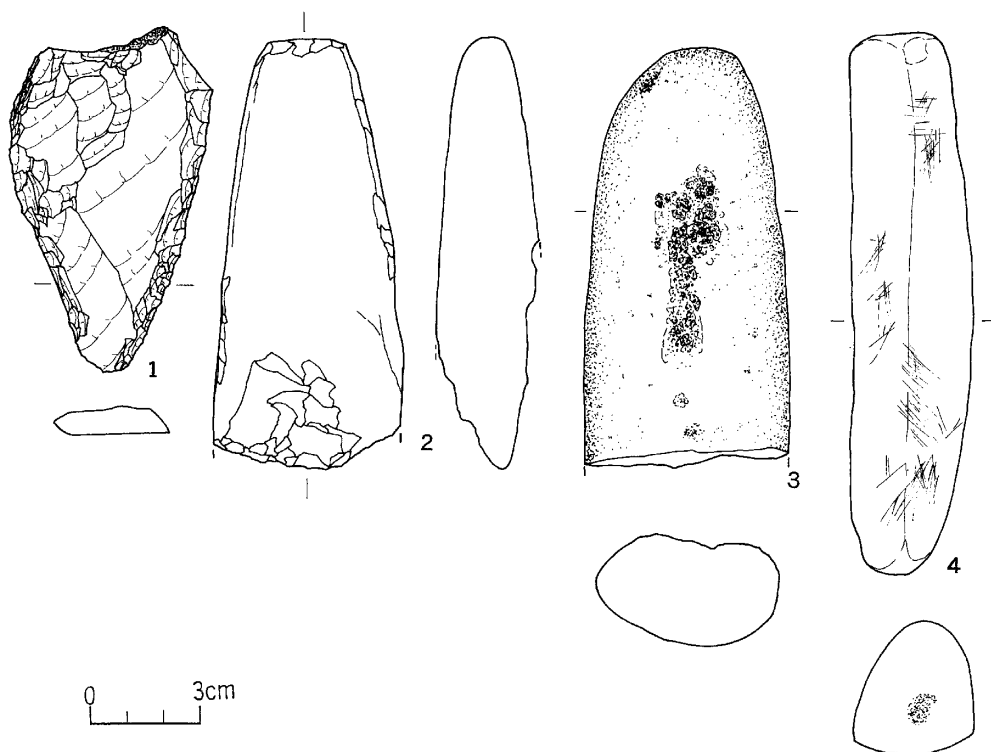
第54図 56号竖穴，ピット360，360a，361，362，363，363a，363b，364，365，366，367平面図



第55図 56号竪穴埋土(1~17)出土土器



第56图 56号竖穴埋土(1~32)出土石器



第57図 56号竪穴埋土（1～4）出土石器

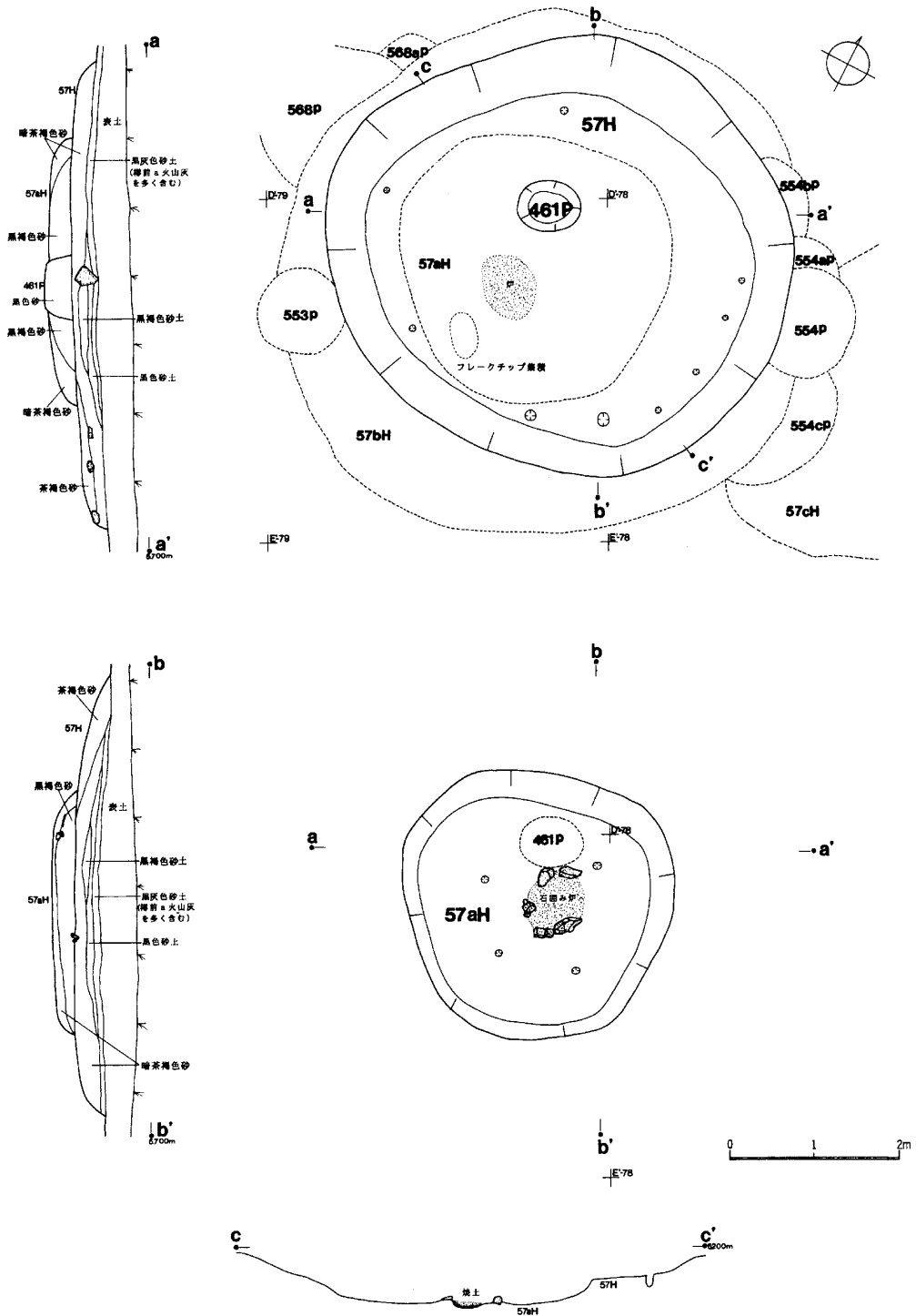
57号竪穴

遺 構（第58図，第59図，図版8-1）

本竪穴はD'77・78，E'77・78グリッドにまたがって位置する。表土を剝土すると白色の樽前a火山灰を含む黒色砂土が層厚約8～10cmの厚さで堆積し，その下層には黒色砂層を挟んで黄褐色を呈した摩周火山灰bが極めて小範囲に認められる。規模は長軸約5.60m，短軸約5mを測る。西壁側が僅かに張り出した不整形のプランである。各壁は皿状の浅い立ち上がりをもち，高さは確認面から約30～35cmである。床面からは第59図の出土石器分布図に示す通り，主に第60図-1の後北C₂・D式が出土し，やや浮いて4の鈴谷式，第61図-5の北大I式が出土した。この3点の土器はやや離れて出土したため積極的に共伴したとは言えないが，同一層から出土したものであり，極めて近い時間関係があると思われる。竪穴の中央部からやや東側に直径約80×60cmの地床炉がある。

主柱穴は全く認められず直径約5～16cm，深さ約10cm前後の壁柱穴があるだけである。壁柱穴は東壁側の6本がほぼ等間隔に配置され，西壁・南壁の3本の間隔は広い。

遺 物（第60図，第61図，第62図，第63図，図版8-2～7）



第58図 57号竖穴, 57a号竖穴, ピット461平面図

第60図-1～3は後北C₂・D式。1は口径約20cm，器高約20.5cmの中型土器。口縁部と胴部の帯縄文間を縦位の帯縄文が3本基準に施される。胴下部は無文となる。4は道北及びサハリン南部に分布する鈴谷式である。口径約30cm，器高約34cmの底部尖底土器。口縁部が「く」字状に外反する。4列の櫛歯列が施される。櫛歯は6～7本単位であり，櫛歯の両端は円形文となる。器壁は薄く，胎土は1～2cm程の小砂利を含み脆弱である。

第61図-1～3は擦文土器。1は口径約11cm，器高約9cmの小型鉢形土器。口縁部に2本の沈線文をもち，器面は刷毛，内面は篋により調整される。底面は板目状圧痕が見られる。2は口径5cm，器高3cmのミニチュア土器で2個の小孔をもつ。3は格子目文が施される。4は擬縄貼付文のあるオホーツク土器。5は口径約22cmの北大I式。器面は凹凸が著しく底部は欠失する。「く」字状に外反した口縁部に外側から突瘤文が連続する。円形刺突文は口唇部と内面では連続するものの器面では実測図に示す箇所のみ施される。文様は突瘤文下の「ハ」字状の短沈線文と右方向・左方向に描いた長い沈線文で構成されるが，施文は雑である。6も北大I式である。埋土出土の数点の破片と近くのグリッド出土のものが接合した。5同様の「く」字状に外反した口縁部に突瘤文があり，器面は円形刺突文を「三日月状」の曲線風に施す。底部近くには鋸歯状の沈線文が見られる。内面の調整は雑である。7は2本単位とした縦位の沈線間を横位の沈線で重鎮させた北大I式。8は後北C₂・D式。9は直径約5.5cmの有孔土製品。重量は30g。表裏面に円形刺突文が重鎮する。胎土は後北C₂・D式と同様であり，この時期のものであろう。

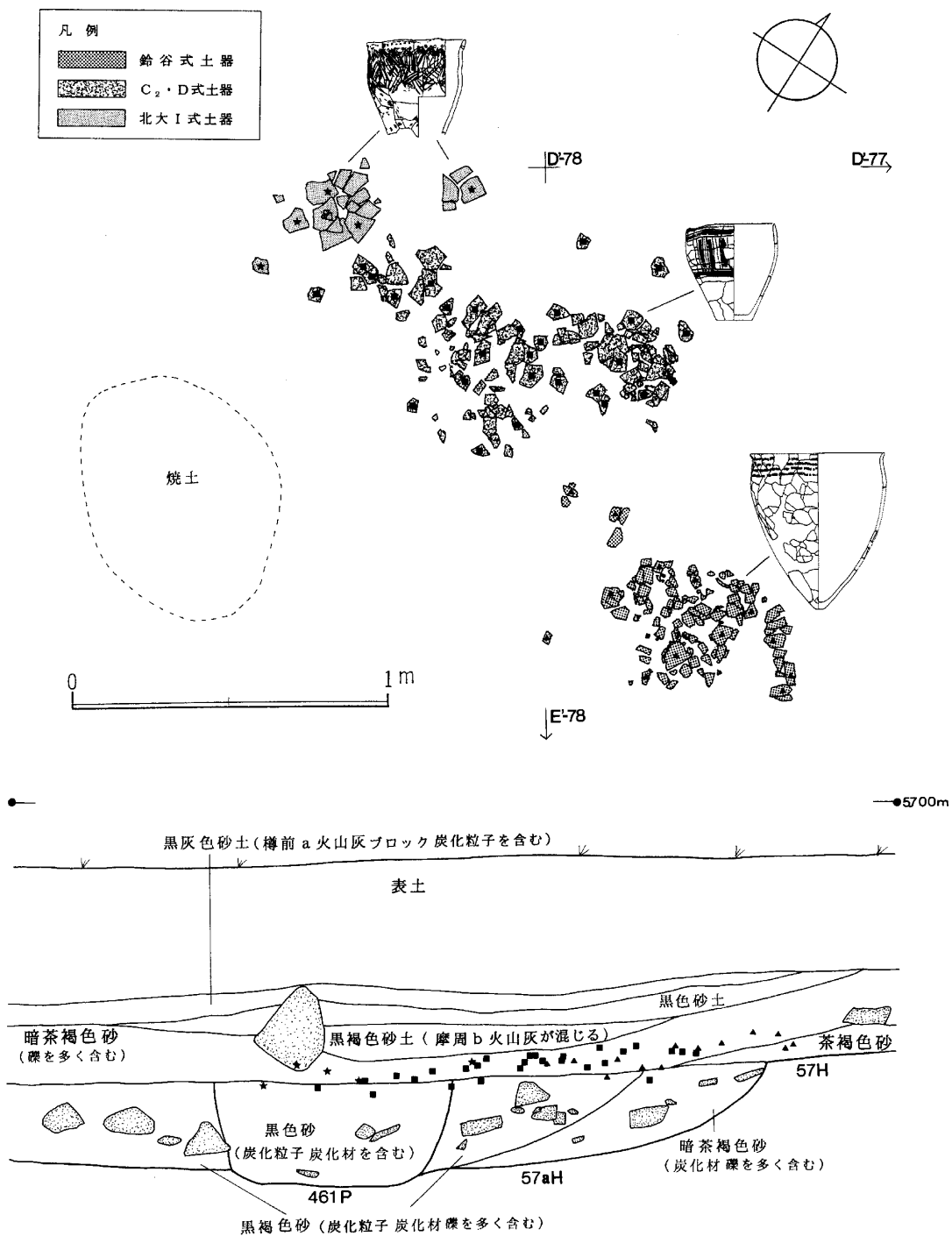
第62図-1は後北C₂・D式。胴上部が欠失するものかなり大型の土器である。2～4は宇津内II b式。5・6は突瘤文のある宇津内II a式。7は横位の沈線，8・9は縄文，10は円形刺突が施されたもので縄文晩期の土器と思われる。

石器は第63図-1～8が床面出土である。1～3は無茎石鏃。4は両面加工ナイフ。5は片面加工ナイフ。6～8は削器。9～24は埋土出土である。9～11は無茎石鏃。12は両面加工ナイフ。13～18は削器であり，17はつまみ，18は柄部をもつ。19～22は搔器。23はたたき石。24は棒状の砂岩の中央に幅約1.2cmほどの研磨された有溝をもつ。23・24を除き黒曜石製である。

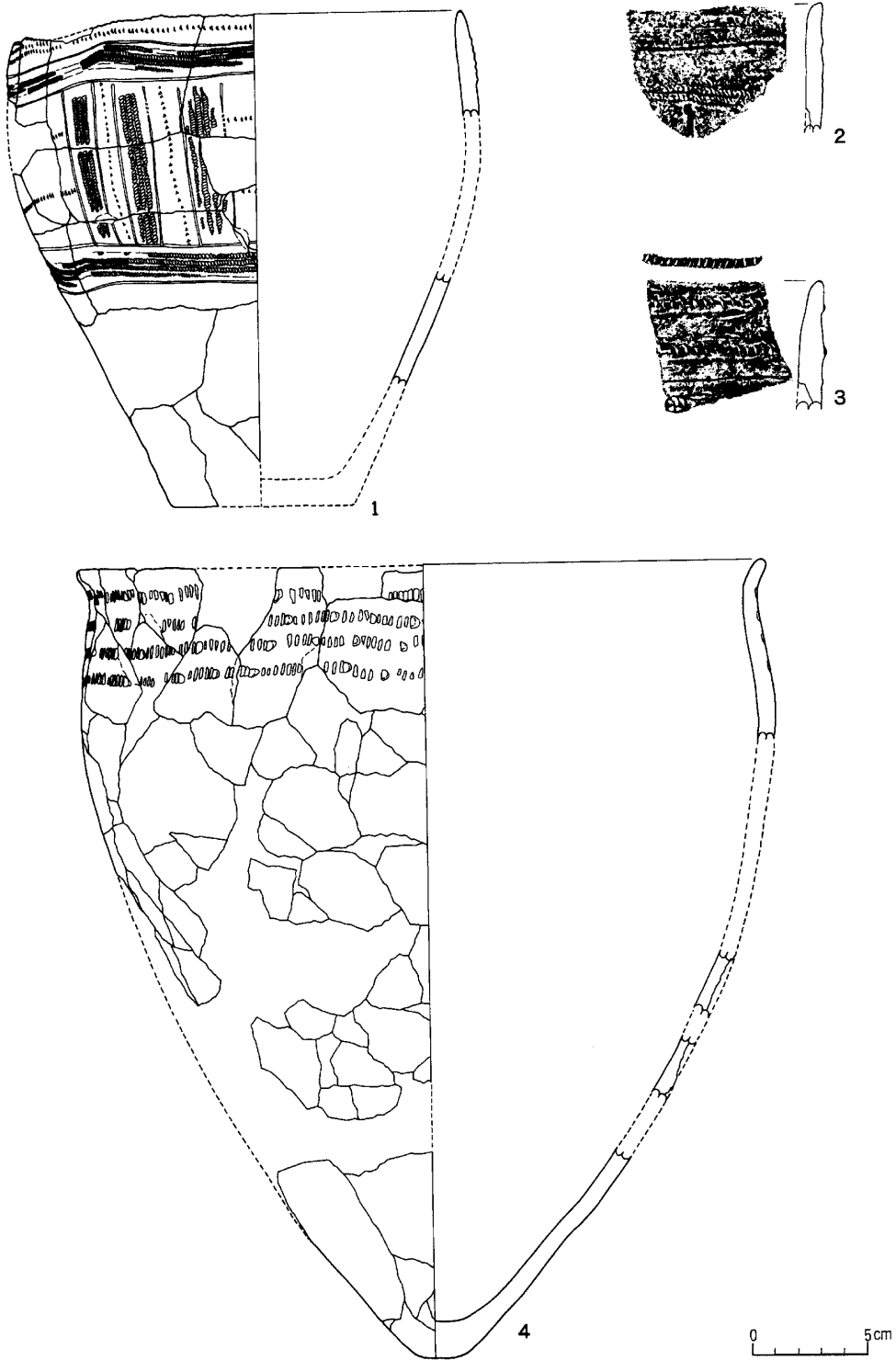
小 括

本竪穴からは第60図に示す通り床面及び埋土から後北C₂・D式が多く出土しているため，この時期と判断できる。鈴谷式は余市町プゴッペ洞窟，札幌市K135遺跡などから断片的に出土している。道東部では斜里町ピラガ丘遺跡に続いて2例目となる。本資料は後北C₂・D式期に客体的に搬入されたのであろう。

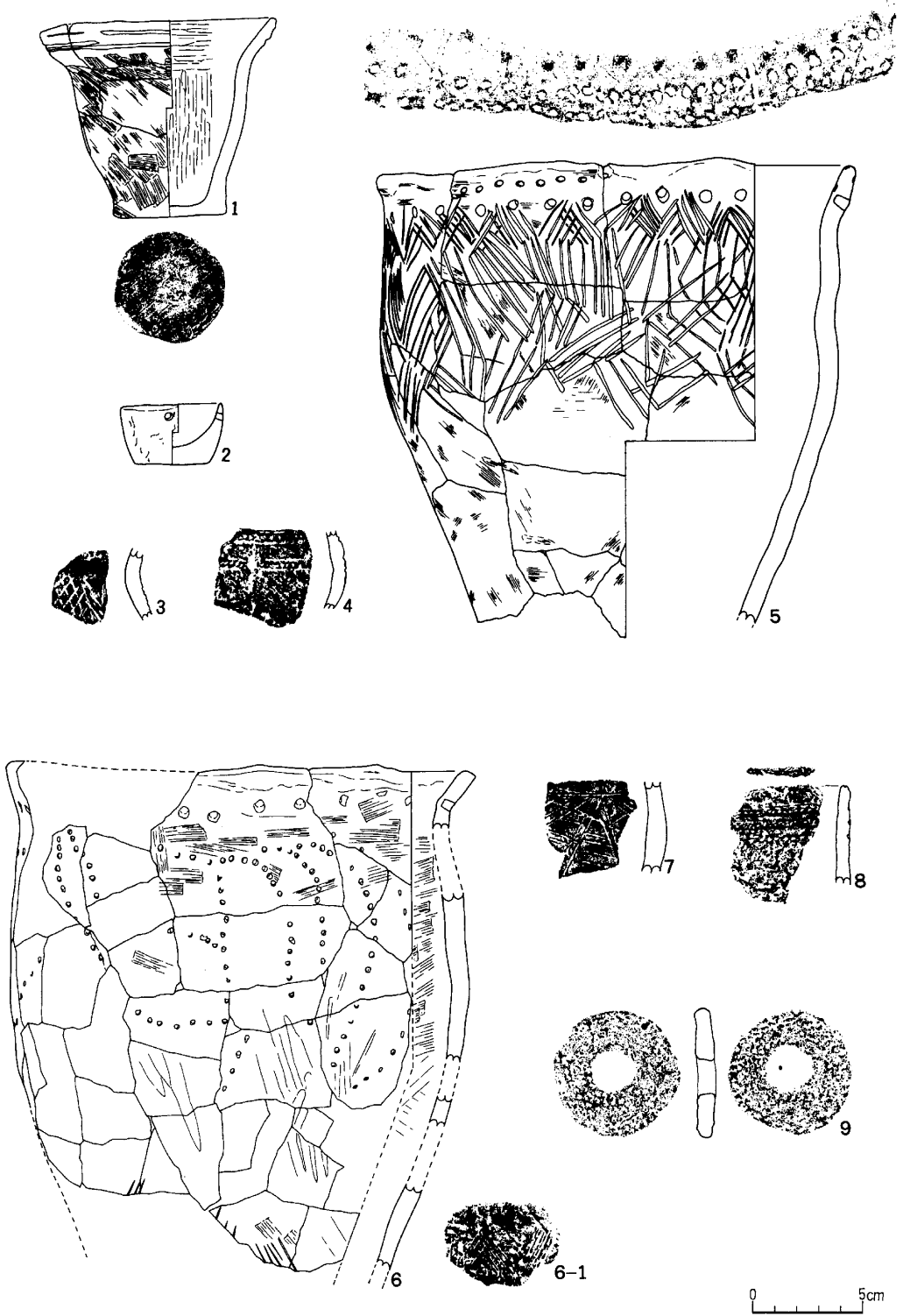
(武田 修)



第59図 57号竪穴鈴谷式・後北C₂・D式・北大I式土器分布図



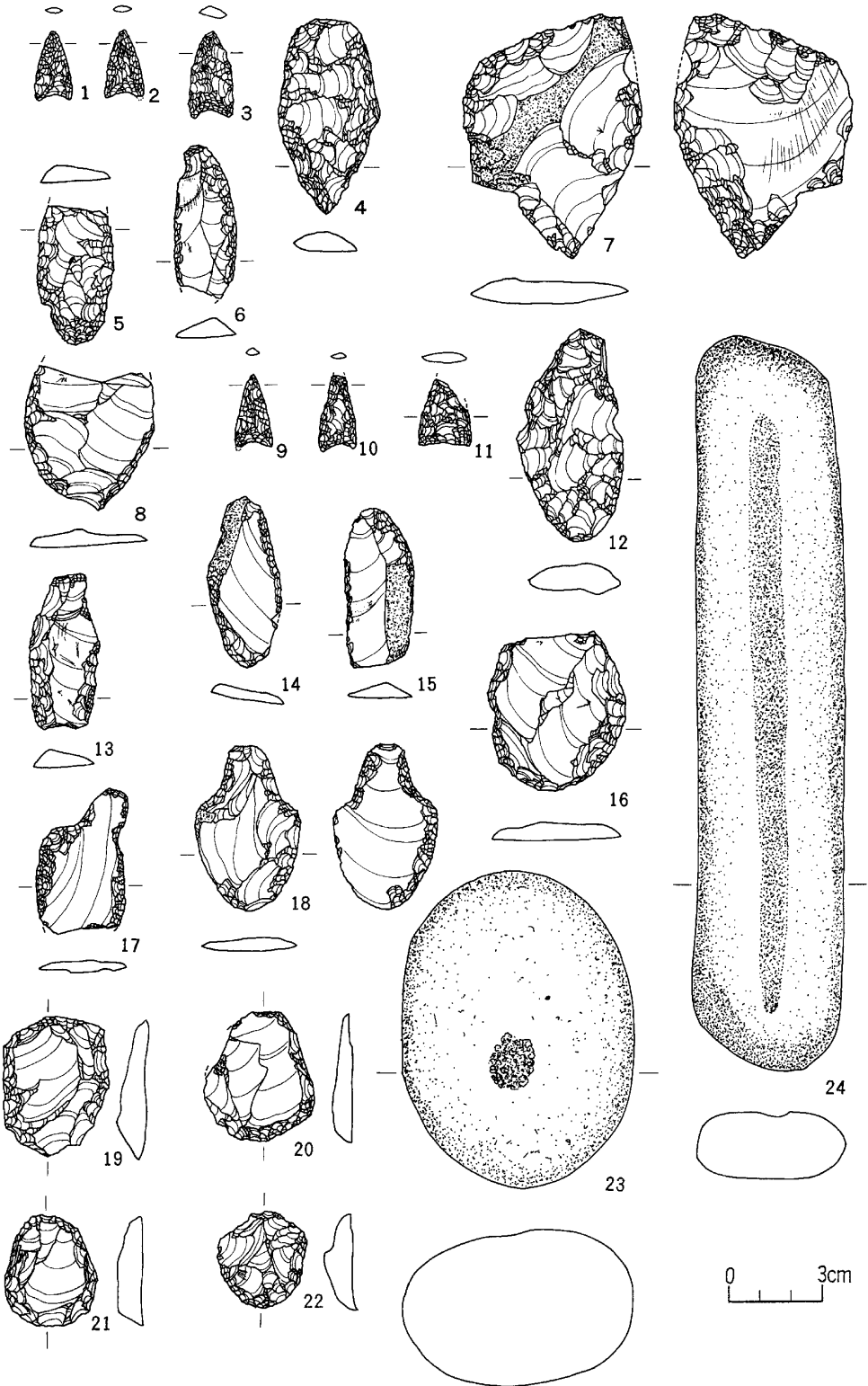
第60図 57号竖穴床面(1~3)・床面直上(4)出土土器



第61图 57号竖穴埋土(1~9)出土土器



第62図 57号竖穴埋土（1～10）出土土器



第63图 57号竖穴床面(1~8)·埋土(9~24)出土石器

57 a 号 豎 穴

遺 構 (第58図, 図版9-12)

本豎穴は57号の床面精査の段階でその落ち込みを確認した。規模は長軸約3.20m, 短軸約3.10mの不整形を呈した小型の豎穴である。掘り進めると各壁の上部から床面にかけて大小の角礫が多量に出土した。図版に示す通り、豎穴のほぼ全面を埋めつくす様な状態である。角礫は最小のもので約3~4cm, 最大のもので直径約40cmのものがある。平均すると約10~15cmのものが最も多い様である。床面から壁にかけて皿状に緩く立ち上がり、高さは57号豎穴の床面から約20cmである。炉跡はほぼ中央部に位置する。6点の角礫を利用した石囲み炉である。直径約8~10, 深さ約8~15cmの小柱穴はこの石囲み炉の周りに4本配置されている。

遺 物 (第64図, 第65図-1~6, 第67図-1~9, 図版9-3・4)

第64図-1は後北C₂・D式。2~4は宇津内II b式。5は縄線文が施される宇津内系の土器。6は無文帯を挟み捺糸文, 円形列点文がある。続縄文初頭であろう。7・8は続縄文期の底部。9は口径約22cm。4個の吊り耳間には擬状の縦の隆帯線がある。続縄文宇津内II b式。10は口径約13cm, 器高約20cmの中型土器。突瘤文と縄線文が施された続縄文宇津内II a式。

第65図-1は縄線文を長形状に施す。2は横位・縦位の沈線に刺突文が加わる。3は半截状刺突, 5は細い竹管状の施文具を利用した刺突文。1~3・5は縄文晩期中葉であろう。4は同後葉の幣舞式。6は内側から突瘤文が施される。縄文晩期前葉。

第67図-1~4は無茎石鏃。5は縦長剥片を利用した石錐。6・7は削器。8・9は円形搔器。すべて黒曜石製。

小 括

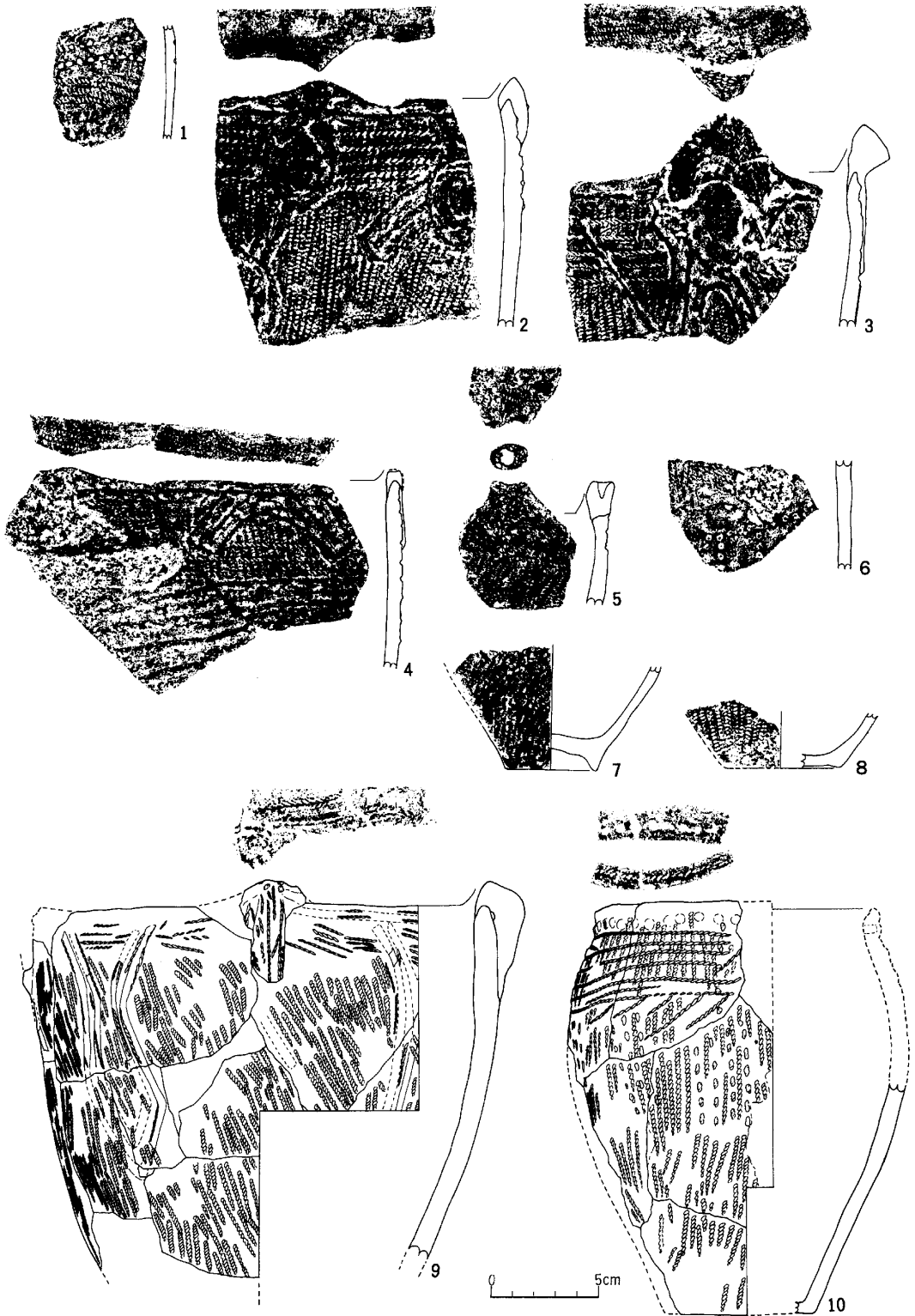
本豎穴は57号豎穴より古いことは確実であるが、詳細な時期は不明である。埋土内に大小の角礫をもつことが特色である。壁際から豎穴中央部にかけてレンズ状に出土し緊密であるため廃棄されたとは考えにくい。あるいは角礫を土の固定として利用した土葺き屋根だったことも考えられる。

(武田 修)

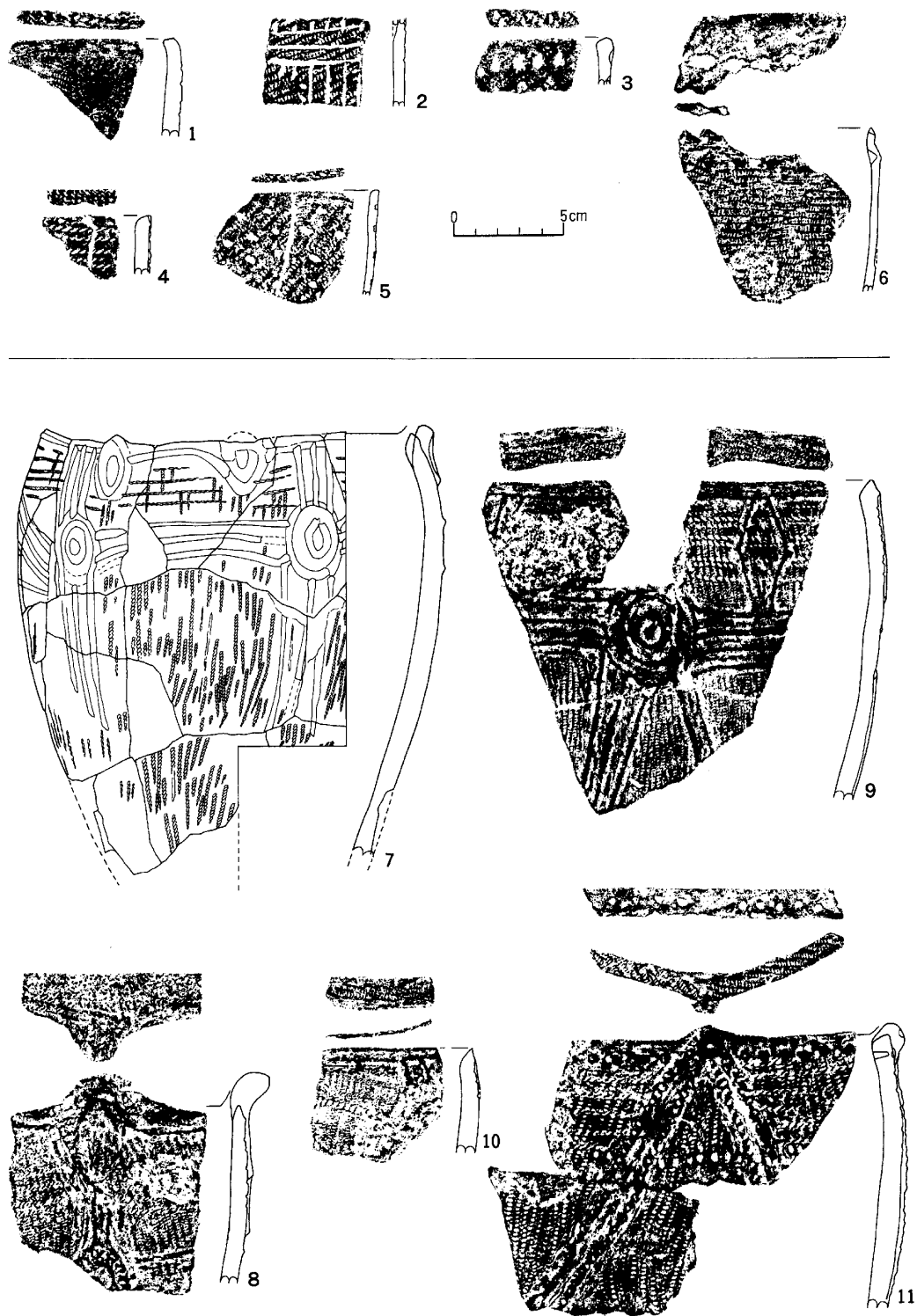
57 b 号 豎 穴

遺 構 (第68図, 図版10-1)

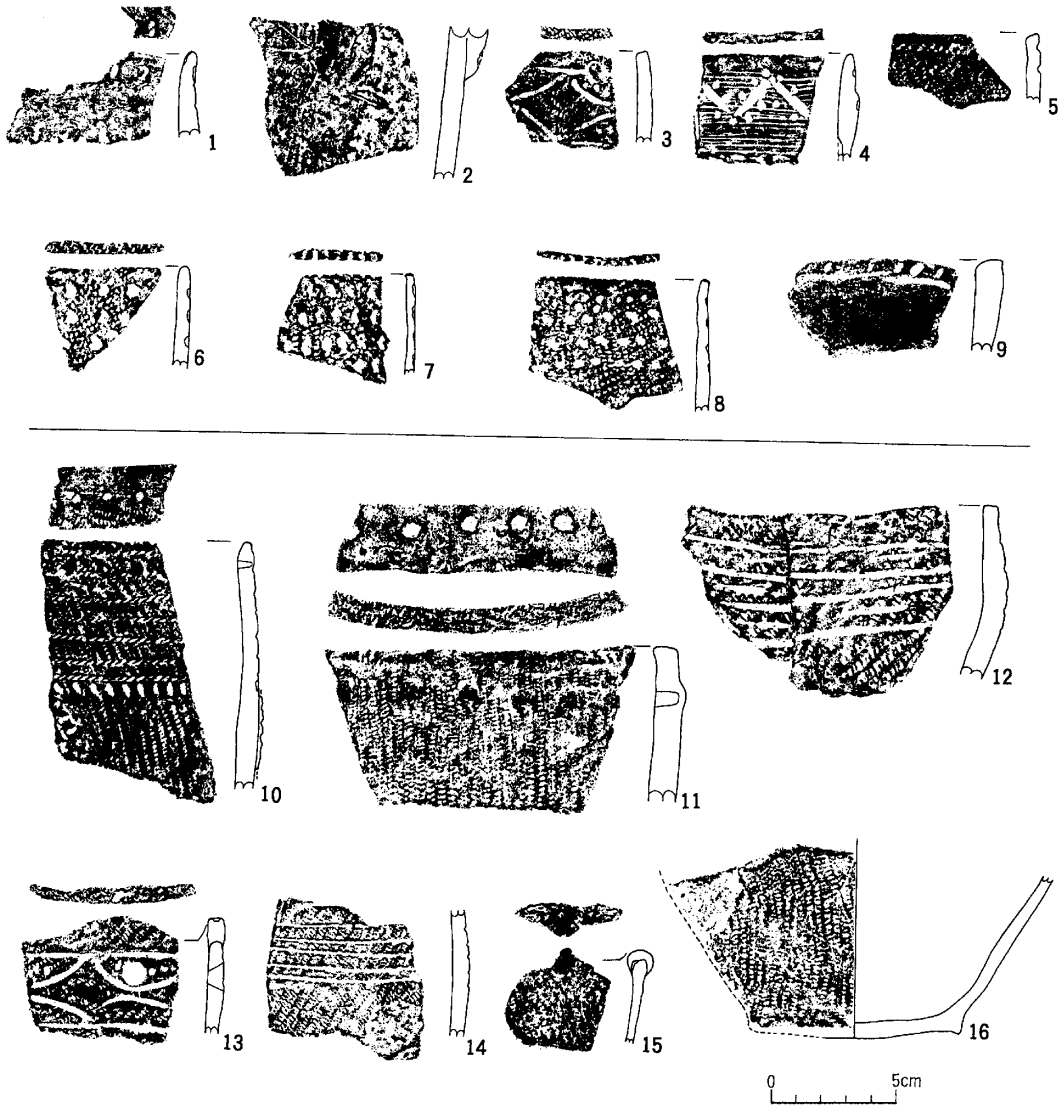
本豎穴は57号豎穴の外側で検出された遺構で、直径約6mの円形を呈する。壁高は確認面から約50cmを測り、斜めに立ち上がる。東壁の一部はピット554, 554a, 554b, 西壁の一部もピット553によって破壊されている。主柱穴は直径約16~18cm, 深さ約16~22cmのものが3本, 壁柱穴は直径約8~14cm, 深さ約7~13cmのものが20本検出されている。



第64图 57a号竖穴埋土(1~10)出土土器



第65図 57a号竖穴埋土(1~6), 57b号竖穴床面(7·8)・埋土(9~11)出土土器



第66図 57b号竪穴埋土（1～9）、57c号竪穴埋土（10～16）出土土器

遺物（第65図－7～11、第66図－1～9、第67図－10～16）

床面から第65図－7・8の宇津内II b式が出土している。7は2個1対の小突起をもち、口縁部に4条の縄線文をめぐらす。縄線文の下には4個の同心円文を施し、隆帯で連結させている。8も同心円文がみられる。

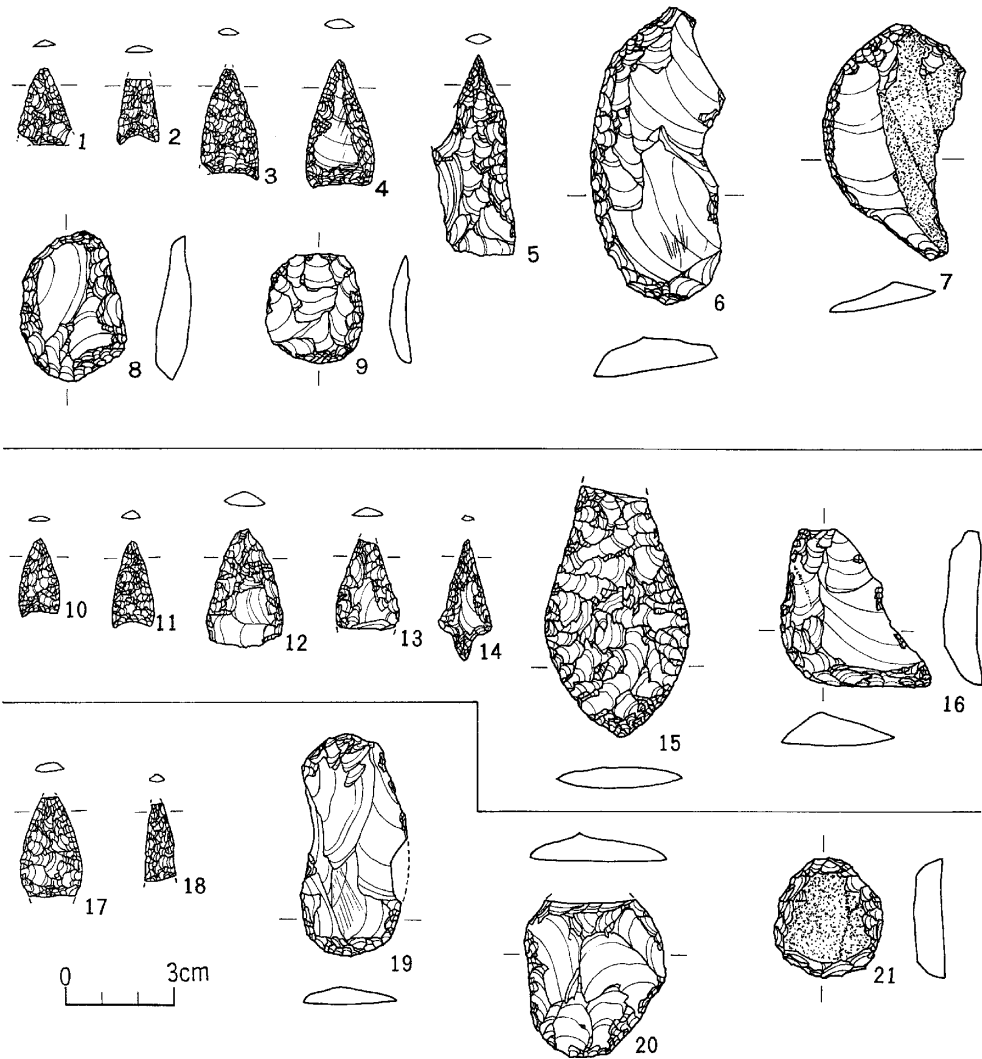
埋土からは9・10が宇津内II b式。11が宇津内II a式。第66図－1～3は続縄文初頭。4は縄文晩期幣舞式。5～8は同中葉であろう。6～8は刺突文をもつ。9は同後期の鯨潤式。

石器はすべて埋土出土。第67図-10~14は石鏃。15は両面加工ナイフ。16は搔器。7点とも黒曜石製。

小 括

本竪穴は床面から続縄文字津内II b 式の土器が出土しており、この時期の竪穴と考えられる。

(佐々木 覚)



第67図 57a号竪穴埋土（1～7）、57b号竪穴埋土（10～16）、57c号竪穴埋土（17～21）出土石器

57c 号 竪 穴

遺 構 (第68図, 図版10-2)

本竪穴は直径3.80mの不整形円形を呈し、壁高は確認面から約50cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。西壁がピット554に、南西側をピット554cにそれぞれ破壊されている。北側に一部攪乱を受けているが、床面までは達していない。竪穴の中央に直径約50cmの範囲で炉跡の焼土が検出され、焼土の中からは骨片が検出されている。壁柱穴は直径12cm、深さ11~16cmのものが2本検出され、その他に直径14cm、深さ14cmの柱穴が1本検出された。竪穴埋土の上面から直径約40cmの範囲で黒曜石のフレーク・チップの集積が認められた。

遺 物 (第66図-10~16, 第67図-17~21)

すべて埋土出土。第66図-10・11は宇津内II a 式。12~14は続縄文初頭。15は縄文晩期。16は底部で続縄文初頭と思われる。

石器は第67図-17・18が石鏃。19~21は搔器。すべて黒曜石製。

小 括

本竪穴は57b号竪穴と重複する。57b号竪穴が古いが正確な時期は不明である。

(佐々木 寛)

58 号 竪 穴

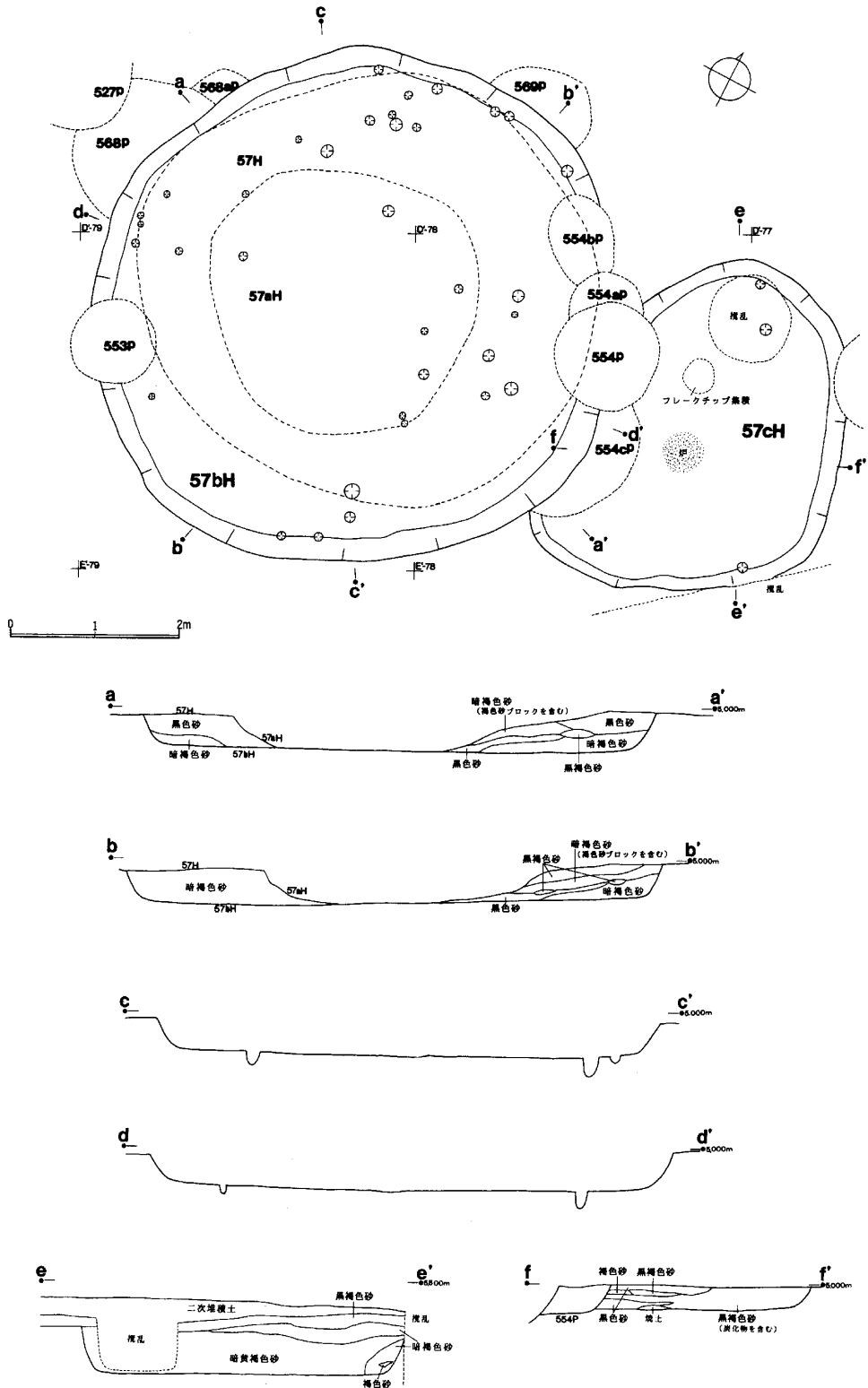
遺 構 (第69 図)

本竪穴はB74, C74グリッドに位置する。掘り込みは浅く確認面から約10~15cm程度であり、西壁は検出できなかった。西壁が検出できなかったため正確な規模は不明であるが、西側床面に柱穴が取り巻くことから判断して長軸は推定約6.50m、短軸約4.80mになり、形態は不整形長方形を呈すると思われる。小型の角礫を用いた石囲み炉は中央部に位置する。石囲み炉に近接して骨粉混じりの焼土が2箇所、北壁に骨粉混じりの黄褐色土が検出された。本竪穴に伴うものであろう。

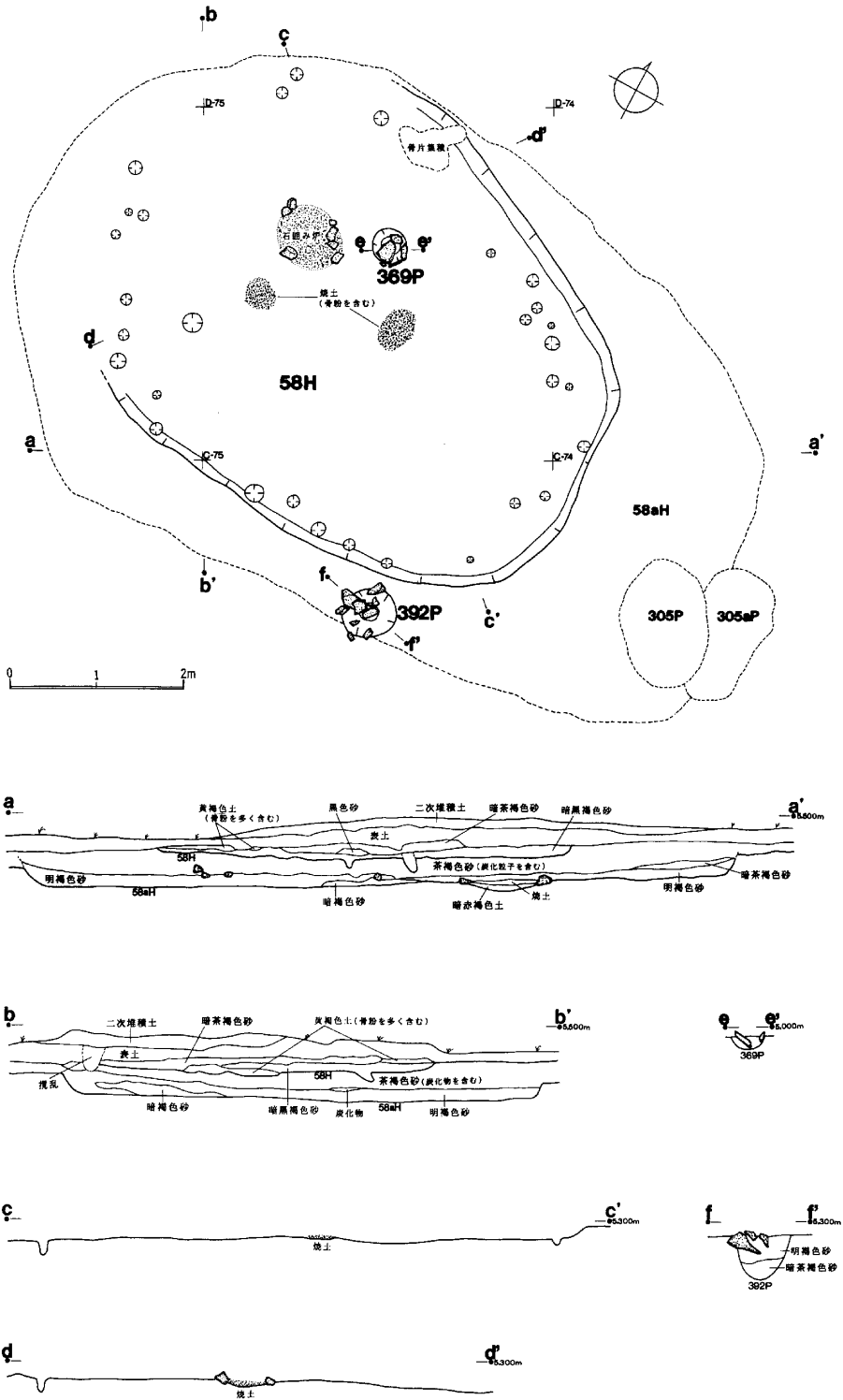
柱穴は主柱穴と壁柱穴が壁際に沿って検出できた。配列に規則性は無いようである。主柱穴と思われるものは北壁3本、西壁1本、南壁4本ある。直径約18~20cm、深さ約15~21cmである。壁柱穴は北壁7本、西壁6本、南壁で5本、東壁で4本検出した。直径約7~16cm、深さ約6~22cmである。

遺 物 (第70図)

第70図-1・2は床面出土の後北C₁ 式。3~5は後北C₂・D式。6は宇津内II b 式。7~9は宇津内II a 式。



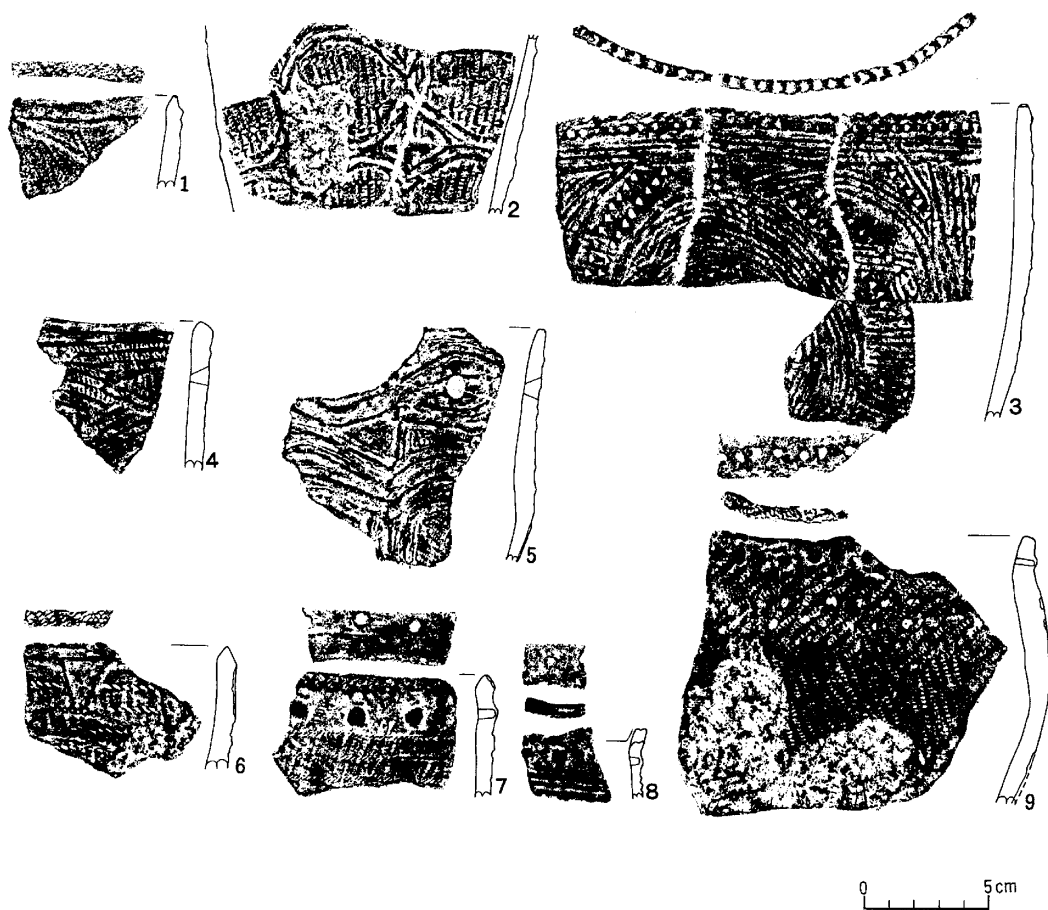
第68図 57b号竖穴, 57c号竖穴平面図



第69図 58号竪穴、ピット369, 392平面図

小 括

本竪穴の平面形態は不整長方形を呈し、掘り込みは浅い。時期は統縄文後北C₁ 式の可能性が高い。
(武田 修)



第70図 58号竪穴床面(1・2)・埋土(3~9)出土土器

58 a 号 竪 穴

遺 構 (第71図, 図版11-4)

本竪穴はB73・74・75, C73・74・75グリッドに位置する。規模は長軸約8.90m。短軸は西壁側が約5.50m, 東壁側が3.20mの不整長楕円形を呈する。壁高は58号竪穴の床面から約20~25cmを測る。この竪穴の最大の特徴は3基の石囲み炉をもつことである。西側の石囲み炉はやや小型で, 中央の石囲み炉に近接するもののほぼ等間隔に配置されている。3基とも楕円状の形態を有し角礫を利用する。角礫は比較的大型のものを使用しており, 表面の赤化は著しい。焼土には微細な骨粉が含まれる。

主柱穴と思われるものは西側の石囲み炉の近くにある。縦に並ぶ3本の柱穴は直径約15~21cmとやや大きく, 深さも約16~28cmとやや深い。壁柱穴は壁に接するものとやや離れたものが対になる壁柱穴も見られるが全体的には不規則に配置される。直径約6~15cm, 深さ約3~19cmのものである。

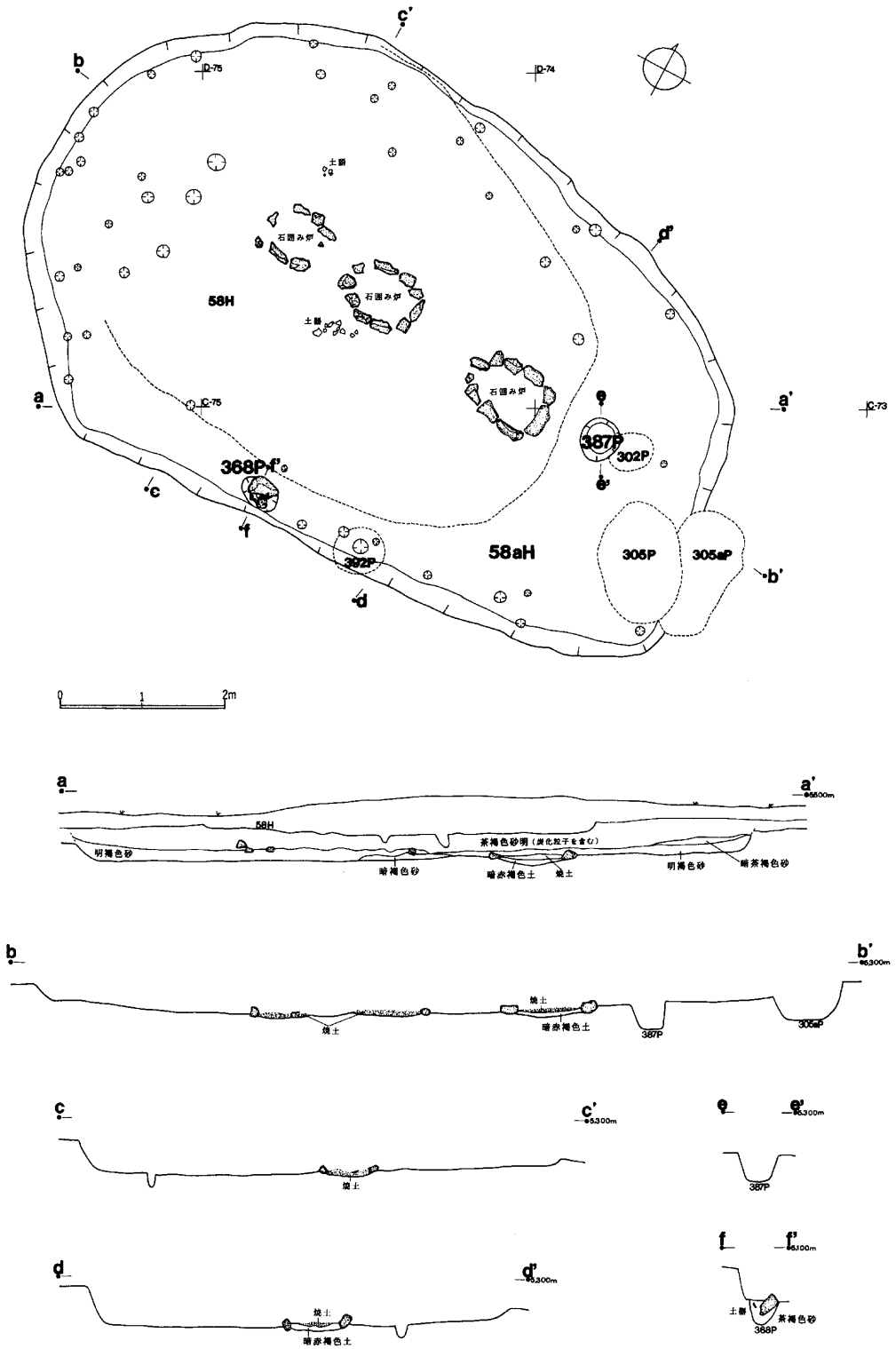
遺 物 (第72図, 第73図, 第74図, 第75図, 第76図, 図版11-1~3)

第72図-1~3は床面出土。1は口径約6.5cm, 器高約6.2cmの小型土器。口縁下部の円形貼付文とそれを連結する隆起帯から上下に派生する「▽」「U」状の隆起帯で構成され, 胴下部では横位の縄文が施される。後北C₁式, 宇津内II a式両方の特徴をもつ。2は宇津内II b式。3は宇津内系の底部であろう。4~10は埋土出土の宇津内II b式。5は口径約8cm, 器高約9.4cmの小型土器。弧線状の微隆起帯が垂下する。8は口径約7cm, 器高約7.2cmの小型土器。「ハ」字状の擬縄隆起帯が垂下する。9は口径約18.6cm, 器高約26.8cm。4個の小突起下部に同心円文が配置され微隆起帯で連結する。10は口径約12.5cm。底部は欠失する。小突起下部の同心円とそこから派生する微隆起帯が器面全体に施される。

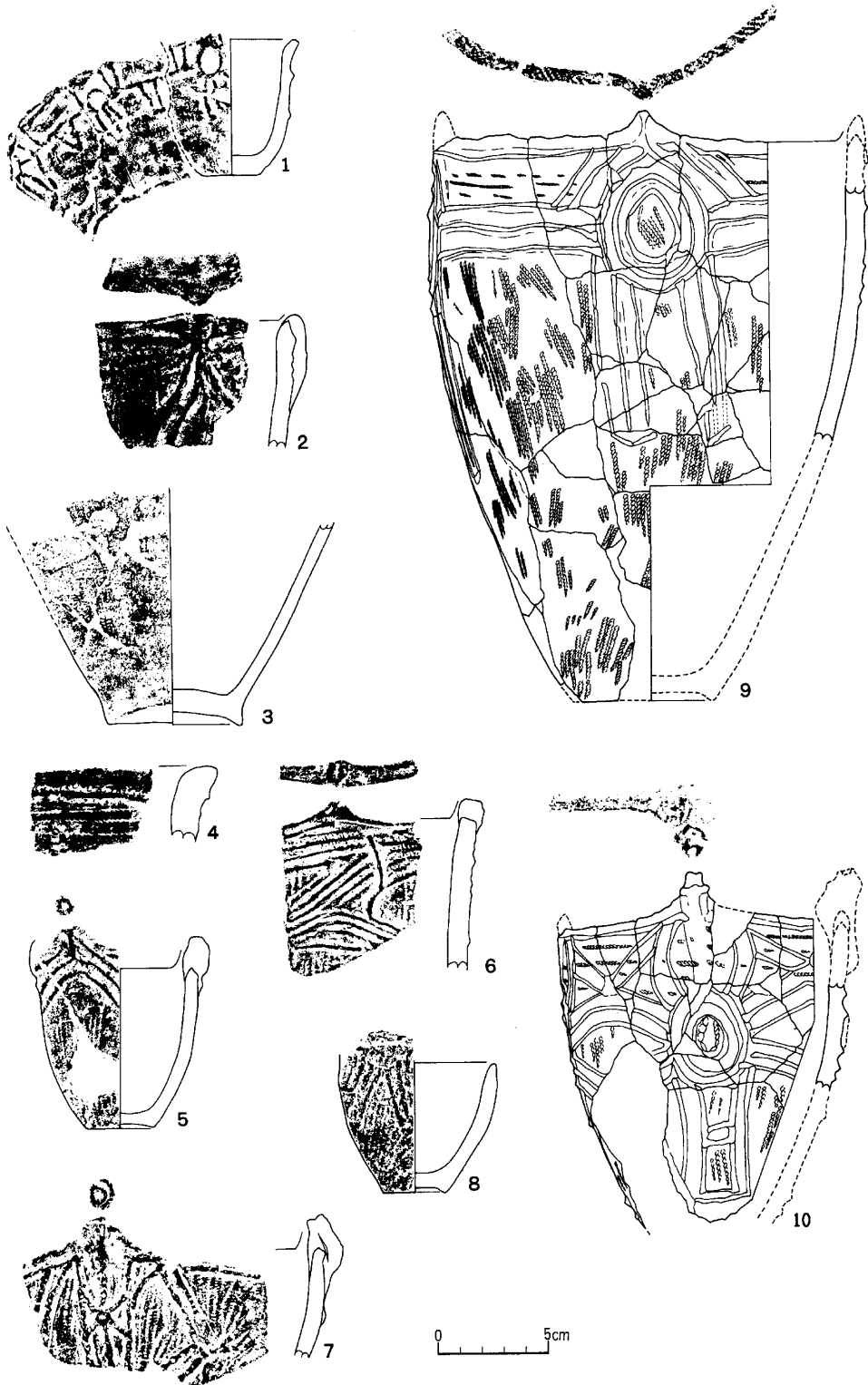
第73図-1~3は宇津内II b式。1は胴部が丸みを帯び, 縮約した口径約23cmの口縁下部に縄線文, 同心円文が施された壺形土器, 2は口径約19cm, 器高約20cmの中型土器。小突起部に円形貼付文が見られる。4は宇津内系の底部。

第74図-1は6条の縄線文下に縄端圧痕文が施される。この縄端圧痕文は拓本図の左下で曲線化する。宇津内II b式。2~5は内側から突瘤文が加えられた宇津内II a式。3は縄端圧痕文, 4は「ハ」字状の太い隆起帯と円形刺突文, 5は横位の浅い沈線と円形刺突文がある。6も突瘤文が施されるものの下部は横位の縄文があるもので, 宇津内II a式より古手であろう。7はボタン状貼付文をもち縄端圧痕文が施される。8・9は横位の沈線文を基本とする。8は横走沈線を2段, 10は1段区画し, 斜位の沈線と刺突が加わる。上下の山形沈線になるかもしれない。11の口縁部は無文帯となり, 円形貼付文がある。12は口縁下部に縄端圧痕文が縦横位に施される。6~12は続縄文初頭と思われる。

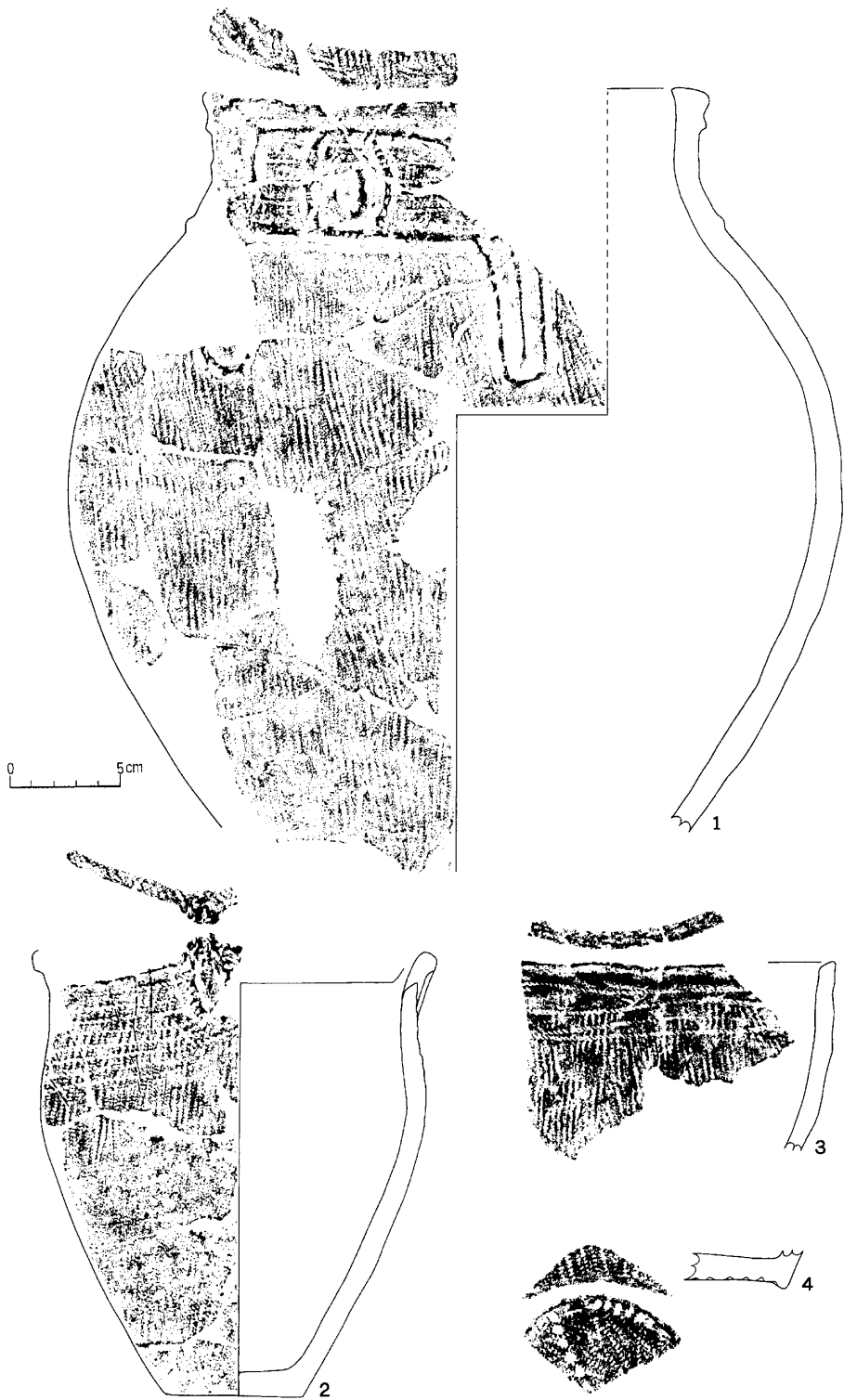
石器は第75図-1~8が床面出土。1は両面加工ナイフ。2は削器。3は円形搔器。4は頁



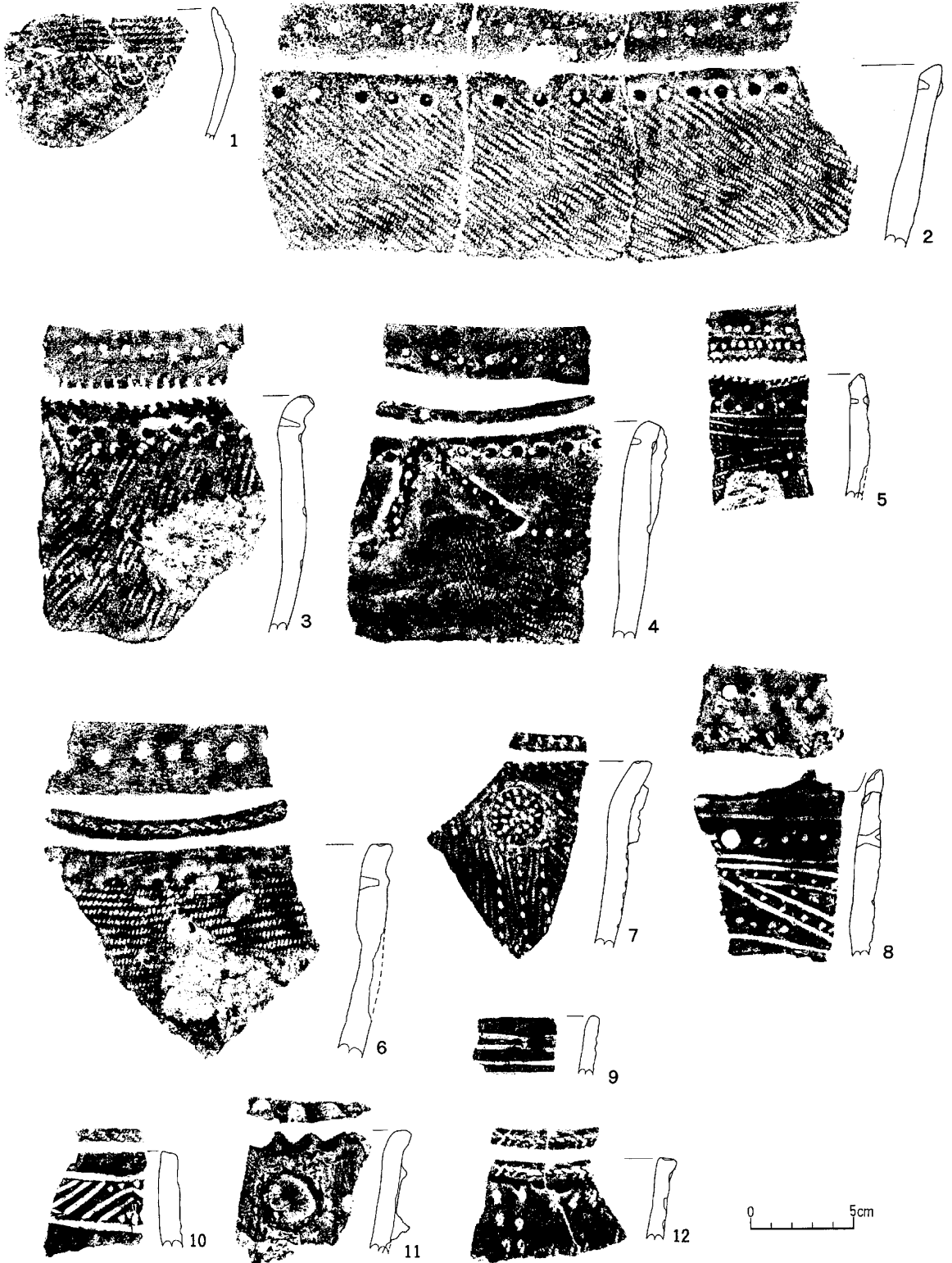
第71図 58a号竖穴，ピット368，387平面図



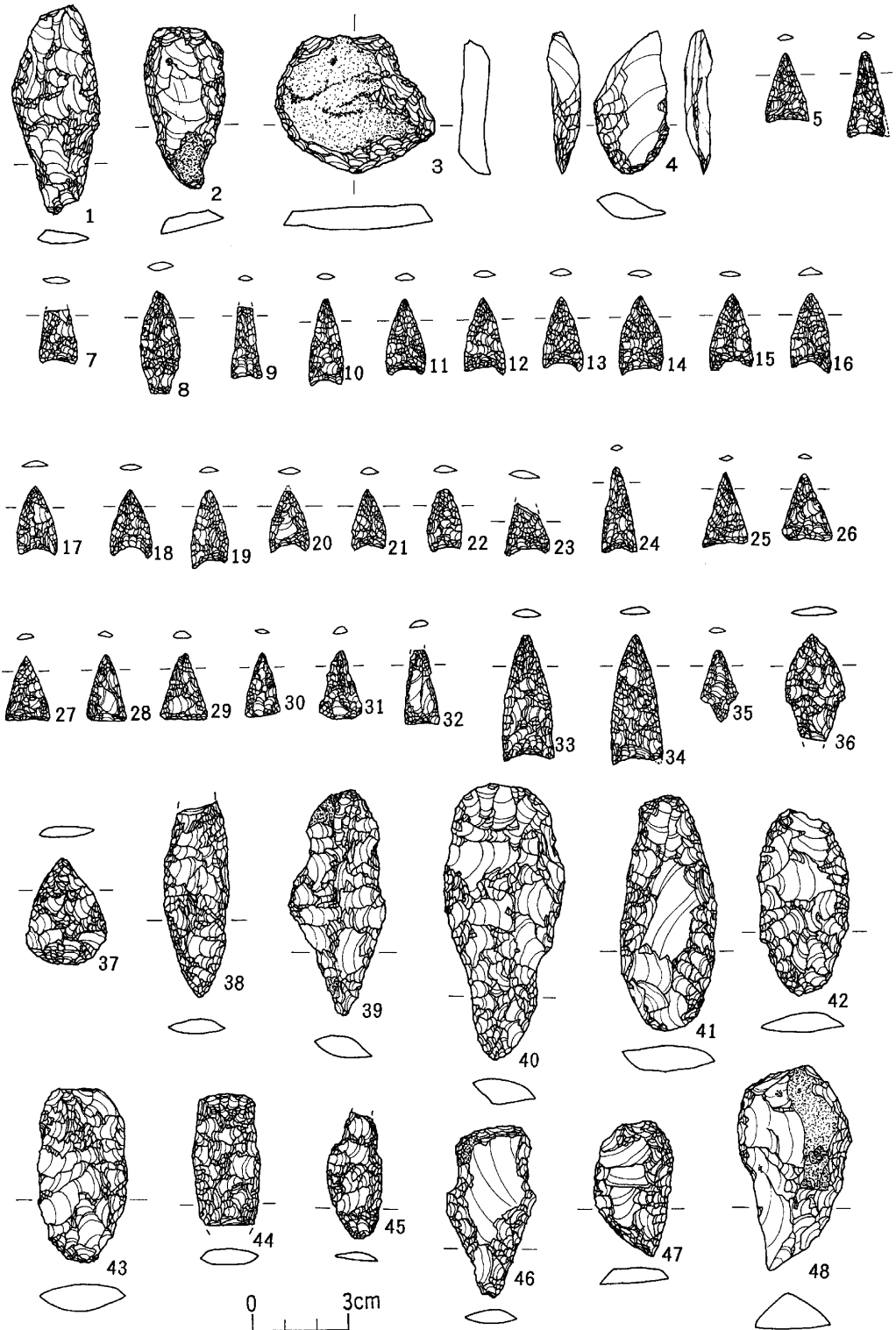
第72图 58a号竖穴床面(1~3)·埋土(4~10)出土土器



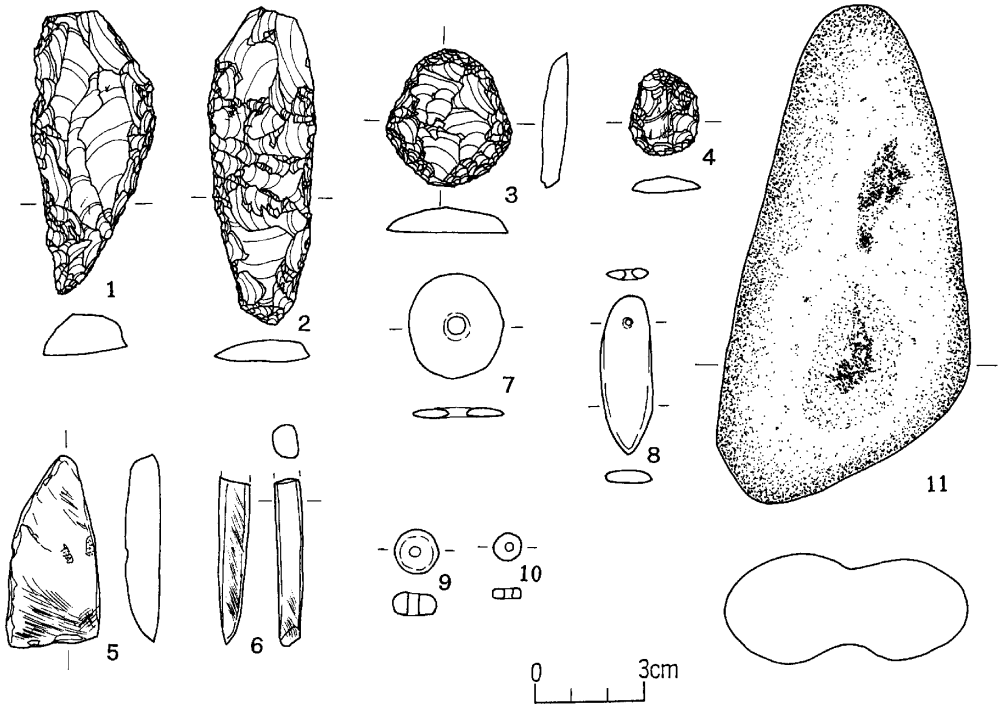
第73図 58a号竖穴埋土(1~4)出土土器



第74图 58a号竖穴埋土(1~12)出土土器



第75図 58a号竪穴床面(1~8)・埋土(9~48)出土石器



第76図 58a号竪穴埋土（1～11）出土石器・石製品・琥珀玉

岩製の彫器。彫刀面は先端部で交叉する。左肩の彫刀面幅は広く、右肩は狭い。表表面の縁辺部は加工されている。5～7は無茎石鏃。9～48は埋土出土である。9～34は無茎石鏃。35・36は有茎石鏃。37は無茎石鏃であるが、鏃身の幅は広く、基部は丸みをもつ。38～45は両面加工ナイフ。46・47は片面加工ナイフ。48は削器。4の頁岩製を除き黒曜石製。

第76図－1～11は埋土出土である。1・2は削器。3・4は搔器。1～4は黒曜石製。5は片刃磨製石斧。緑色泥岩製。6は断面が楕円形で細い棒状の黒色片岩を素材とする。全面研磨され、刃部は両刃となる。7・8は硬質頁岩製の装身具。両方向から穿孔されている。9・10は琥珀製の平玉。11は凹石。砂岩製。

小 括

本竪穴は長軸約8.90m、短軸が約3.20～5.50mの不整長楕円形を呈した大型住居。3基の石囲み炉を配置する稀な住居である。時期は続縄文字津内II b式。 (武田 修)

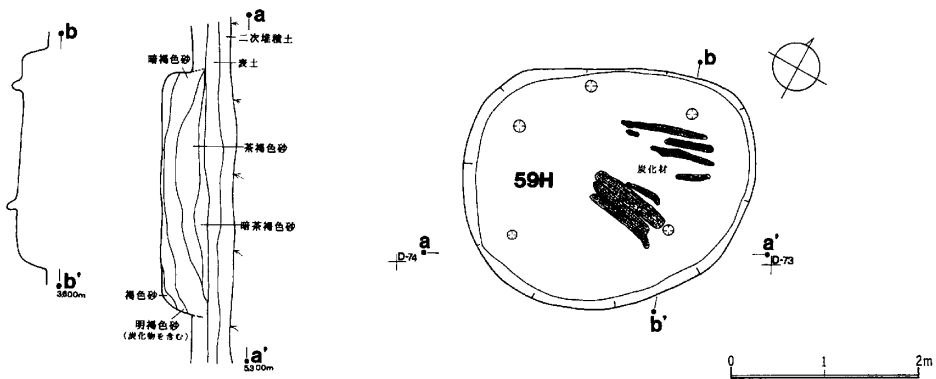
59号 竪穴

遺構 (第77図)

本竪穴はD73, C73グリッドに位置する。規模は長軸約3.1m, 短軸約2.5mの小楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり高さは確認面から約30cmである。竪穴の中央部からやや北側にかけて炭化材が認められる。炭化材は床面上にあり, 細いもので直径約6cm, 太いもので直径約20cmである。それぞれの炭化材の間隔は狭く, 箇所によっては炭化材同士が接する部分もある。一部には茅もあり, この炭化材は屋根材として使用されたのであろう。炉跡は認められない。小柱穴は西壁に3本, 東壁に2本ある。直径約10~12cm, 深さ約13~15cmである。

遺物は出土せず詳細な時期は不明である。

(武田 修)



第77図 59号竪穴平面図

60号竪穴

遺構 (第78図, 図版11-5)

本竪穴はA74グリッドに位置する。規模は長軸約2.93m, 短軸約2.40mの不整形を呈した小型の竪穴である。壁高は確認面から約26cm。炉跡は中央部から北西側にやや寄った位置にある。赤化は著しい。主柱穴か壁柱穴か定かでないが直径約15cm, 深さ約21cmのものが北西隅に2本ある。壁柱穴と思われるものは北壁1本, 西壁1本, 東壁2本ある。直径約6~13cm, 深さ約8~10cmである。

南東壁隅のピット389, 南壁側のピット435, 西壁側のピット436, 436a, 北西壁側のピット437は本竪穴より新しく, 床面にあるピット438を切って構築されている。

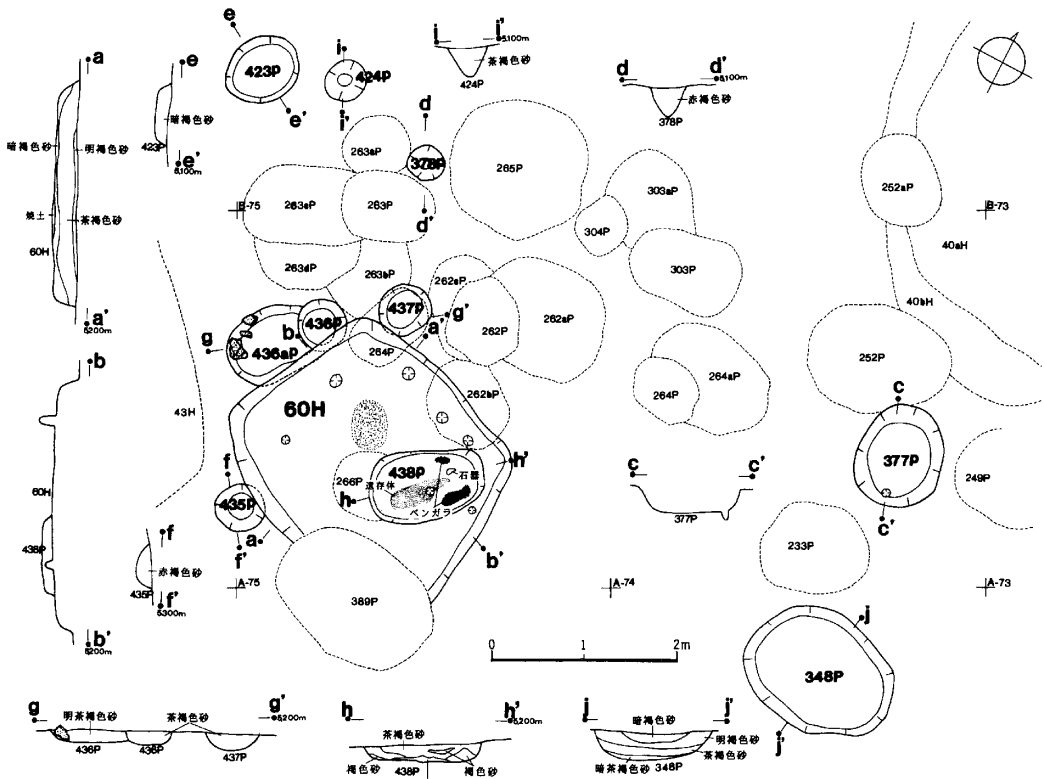
遺物 (第79図-1~3, 第85図-1~4)

第79図-1・2は字津内II b式。3も字津内系の底部であろう。3点とも埋土出土。

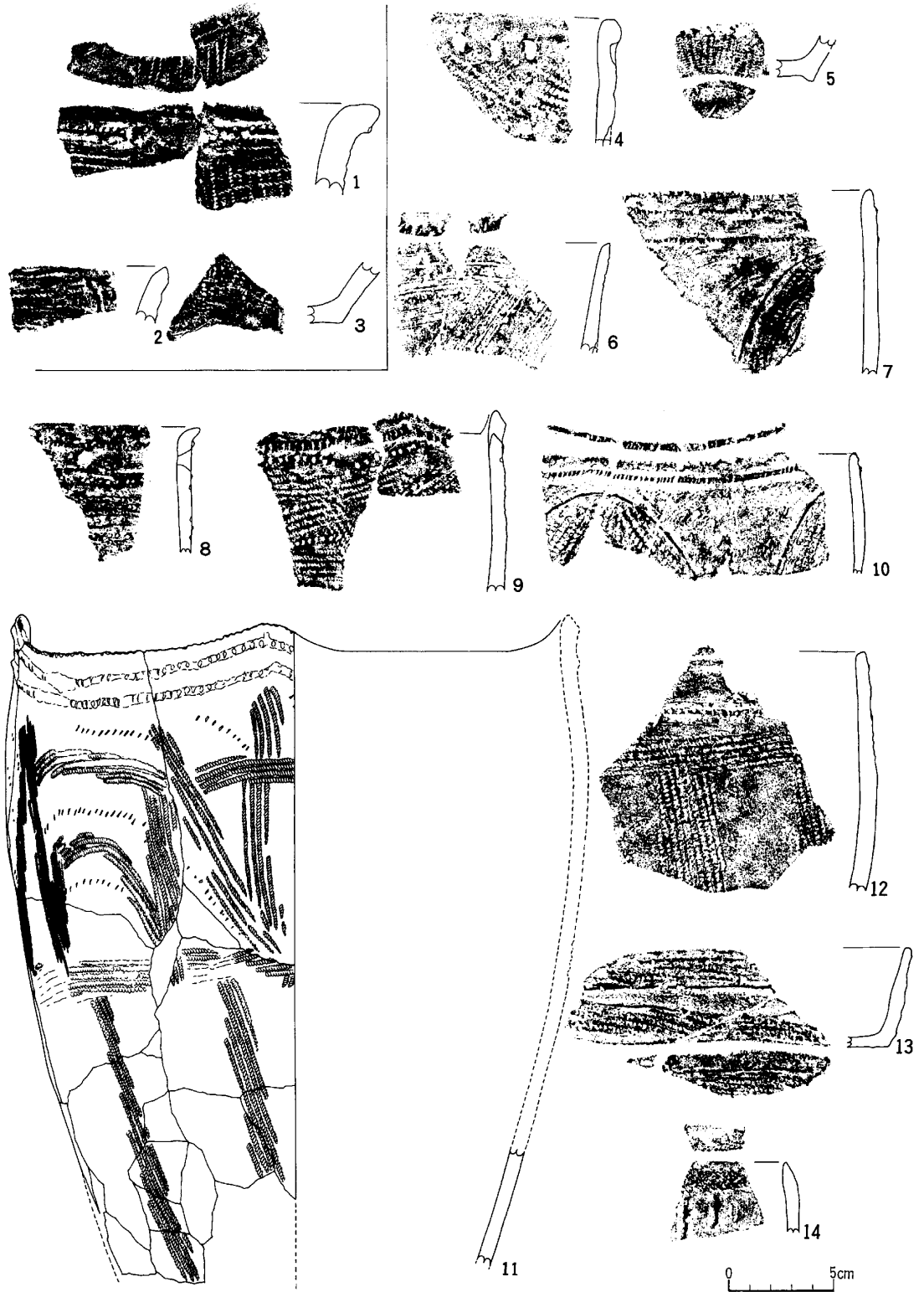
第85図-1・2は無茎石鏃。3は青色片岩製の片刃磨製石斧。4は緑色泥岩製を素材とした擦切技法による両刃磨製石斧。裏面の刃部は刃部と並行して研磨されている。

小括

床面出土の遺物が無いため時期は不明であるが, 続縄文期のものであろう。(武田 修)



第78図 60号竪穴, ピット348, 377, 378, 423, 424, 435, 436, 436a, 437, 438平面図



第79図 60号竖穴埋土(1~3), 61号竖穴(4・5)・埋土(6~14)出土土器

61 号 竪 穴

遺 構 (第80図, 図版12-1)

本竪穴はA76・77, A'76・77・78, B'77グリッドに位置する。表土下の黒褐色土には樽前a火山灰が粒状に混入し, より下層の暗褐色砂層中にある黒色砂層から第81図-1・2に示す後北C₂・D式が出土しておりこの時期の包含層と思われる。規模は長軸約7.6m, 短軸約6mの不整長方形を呈する。各壁は緩く立ち上がり, 高さは北壁約30cm, 東壁約15cm, 西壁約38cm, 南壁約21cmである。炉跡は中央部からやや南側に寄った位置にある。柱穴は直径約8~15cm, 深さ約7~24cmの小さな柱穴が壁の周りである。直径約20cm, 深さ約20~25cmのやや大きな柱穴は北壁際に2本ある。炉の周囲には柱穴等は認められない。

南壁際に直径約20cmの範囲に黒曜石製のフレーク・チップが集積されている。

遺 物 (第79図-4~14, 第81図, 第82図, 第85図-5~30, 第86図-1~6, 図版12-2)

第79図-4・5は床面出土。4は口縁直下で僅かに外反し, 太めの縄端圧痕文がめぐり。5は宇津内系の底部であろう。6~14は後北C₂・D式。6は口唇部の内側に刻みが施され, 横位・斜位の沈線に列点文が加わる。11は口径約27cmの大型土器。13は比較的大型の浅鉢と思われる。14は内湾気味の口縁部に帯縄文と2本の隆起線がある。後北C₁式であろう。

第81図-1は口径約34cmの特大型土器。内湾した胴上部に文様帯をもつ。帯縄文と微隆起線を「V」字状に交互に配置し, 胴下部とは帯縄文で区画する。2は口径約31cm。1と同様の特大型土器で口縁部は内湾する。文様は円弧文で構成される。1・2は後北C₂・D式。2点とも大型深鉢土器である。

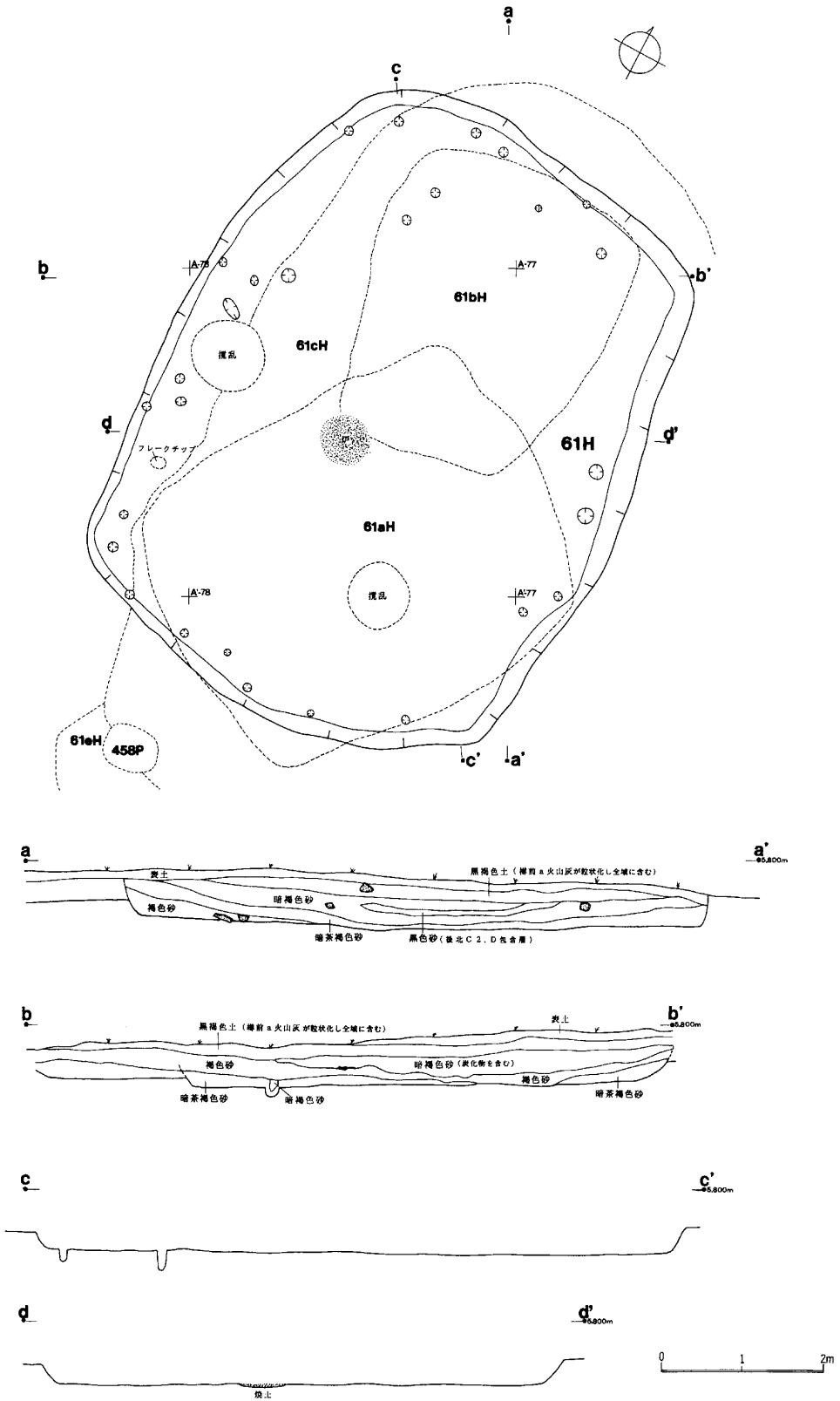
第82図-1は口径約16.5cm, 器高約15cmの小型土器。口縁部と並行して擬縄隆帯がめぐり後北C₂・D式。2は同心円文のある宇津内II b式。3は内湾した口縁部に太い隆帯が横走り, 縄端圧痕文, 縄線文が施される。4・5, 7は続縄文字津内II a式。6は突瘤文の下部に太めの縄端圧痕文があり, 8は口唇部の内側と口縁下部に縄端圧痕文が施される。9は捻糸文を地文に絡縄体が施される。10は縄線文, 11は横位・斜位沈線文に刺突文, 12は横位・短沈線が施される。6・8・9~12は続縄文初頭と思われる。

石器は第85図-5~12が無茎石鏃。13・14は先端部, 基部を調整した石鏃の未製品と思われる。15・16は両面加工ナイフで15には柄部に抉りがある。17・18は片面加工ナイフ。19~30は削器。30の刃部は丸みを有する。石器は全て黒曜石製。

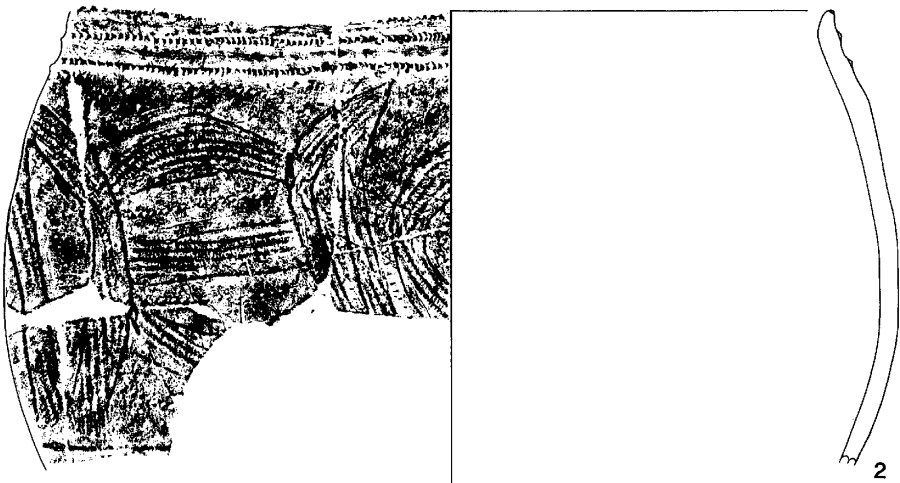
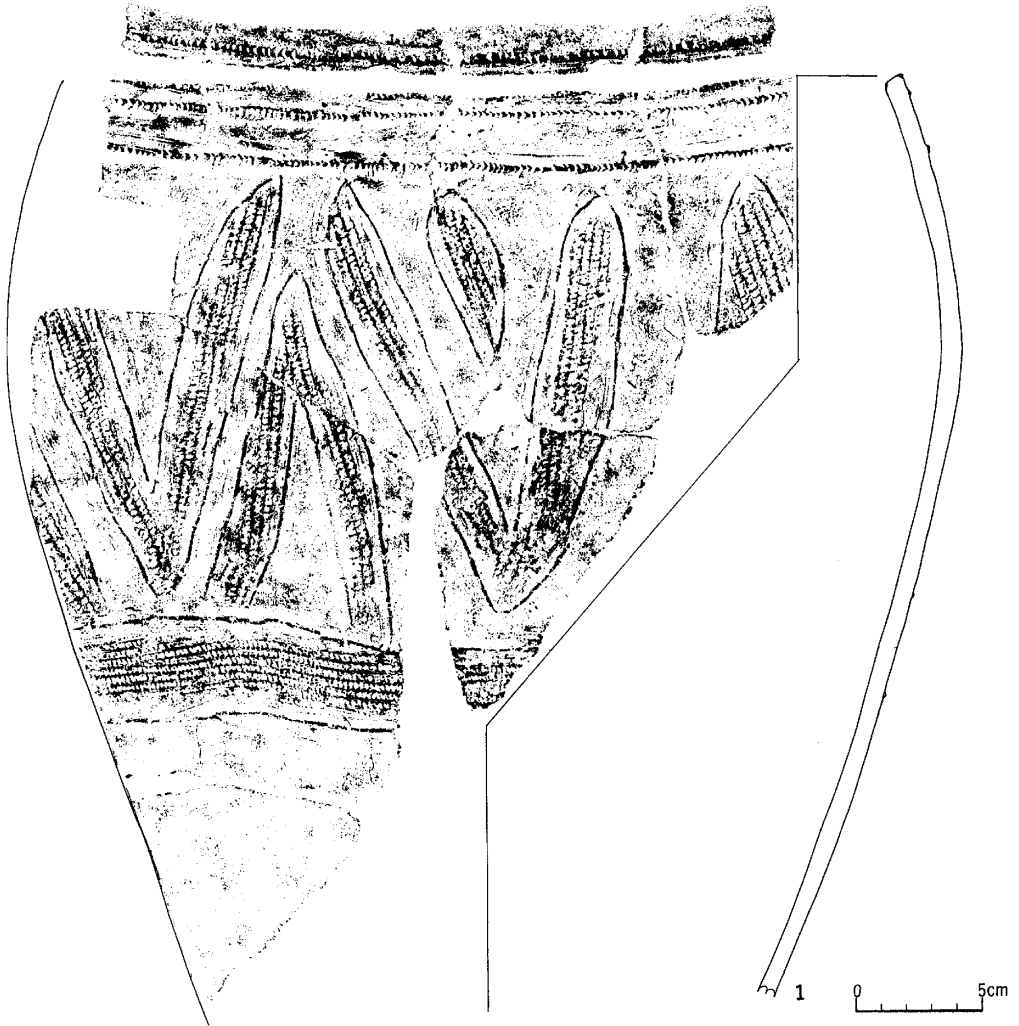
第86図-1は削器。2・3は搔器。4は青色片岩製の磨製石斧。5は自然礫を素材として刃部と右側縁部を粗く打ち欠いている。石斧の未製品であろう。6は砂岩製の凹石。

小 括

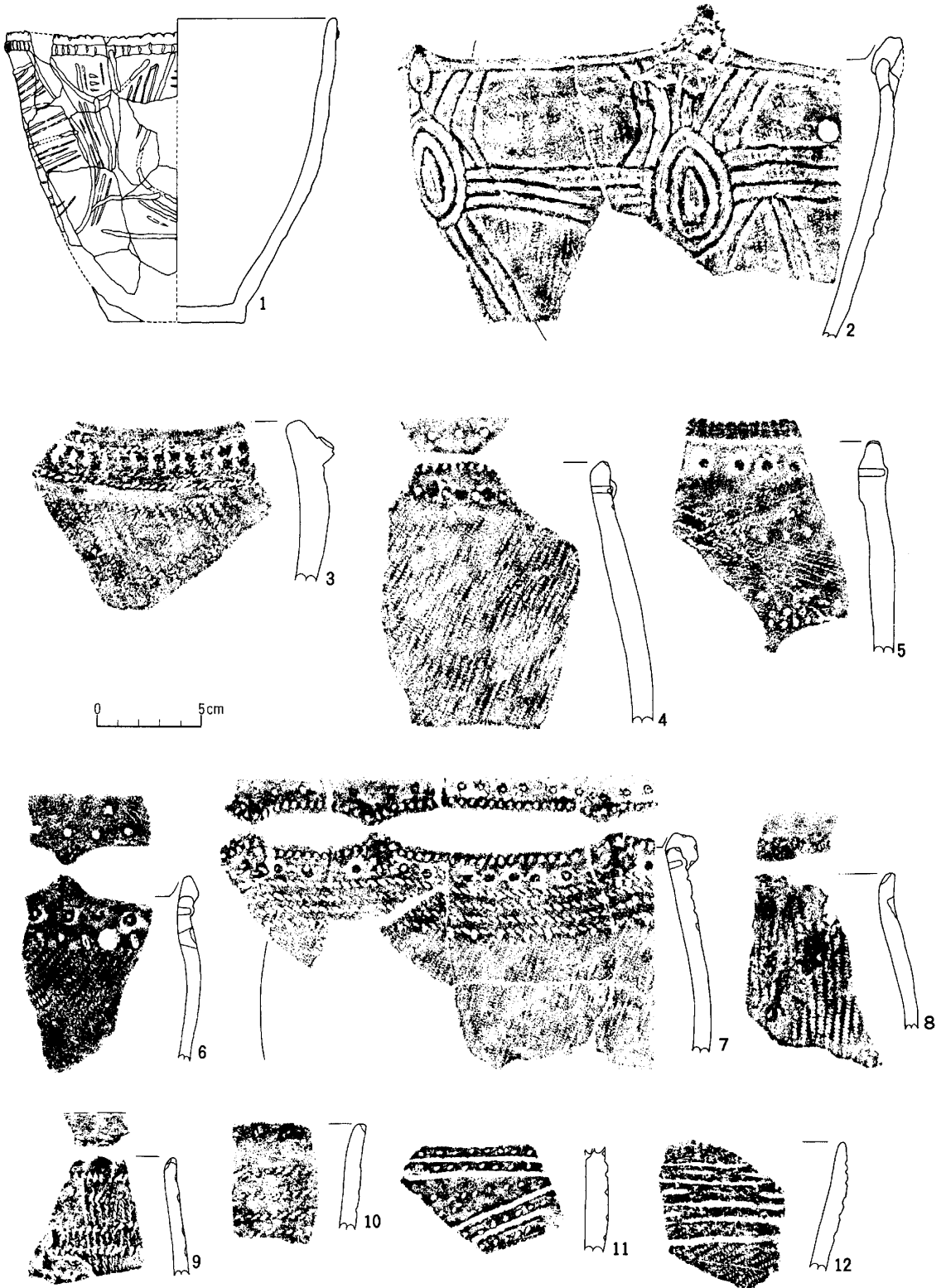
床面から続縄文初頭と思われる第79図-4の土器が出土しているものの, 1点であるためこ



第80図 61号竪穴平面図



第81图 61号竖穴(1·2)出土土器



第82图 61号竖穴埋土(1~12)出土土器

の土器が本竪穴に伴うものかは定かではない。第82図-6に示した土器は突瘤文があるものの口縁部が僅かに外反しやや太めの縄端圧痕文が見られるなど第79図-4の土器と共通する点がある。第79図-4、第82図-6の土器などは宇津内II a式よりやや古手に位置づけられる可能性がある。本竪穴は大量の遺物が出土した続縄文字津内II a式の470号土壙墓を切って構築されているためそれより新しいことは確実である。(武田 修)

61 a 号 竪 穴

遺 構 (第83図, 図版12-4)

本竪穴は61号竪穴の下面にある。61号竪穴の床面が汚れているため2本のサブトレンチを設定し東西南北各壁の立ち上がりと石囲み炉を確認した。規模は長軸約4.88m, 短軸約4mの不整形方形を呈する。埋土層には5cmほどの小型礫, 20cmほどの大型礫が混入する。各壁は緩く立ち上がり, 高さは61号の床面から約20cmである。角礫を利用した楕円形状の石囲み炉はほぼ中央部に位置する。東側の礫2点は近代の攪乱を受けているため移動しているものの他は原位置のままである。西側は開口する。

壁柱穴は南壁1本, 北壁4本, 西壁2本, 東壁2本の9本検出した。直径約6~13cm, 深さも6~17cm程のものである。A'77グリッドの下部にある直径約15cm, 深さ約18cmのものが主柱穴と思われるが, 他には検出できなかった。西壁に密着して直径約11cmの範囲にベンガラが散布されている。

遺 物 (第84図, 第86図-7~21, 第87図-1・2, 図版12-3)

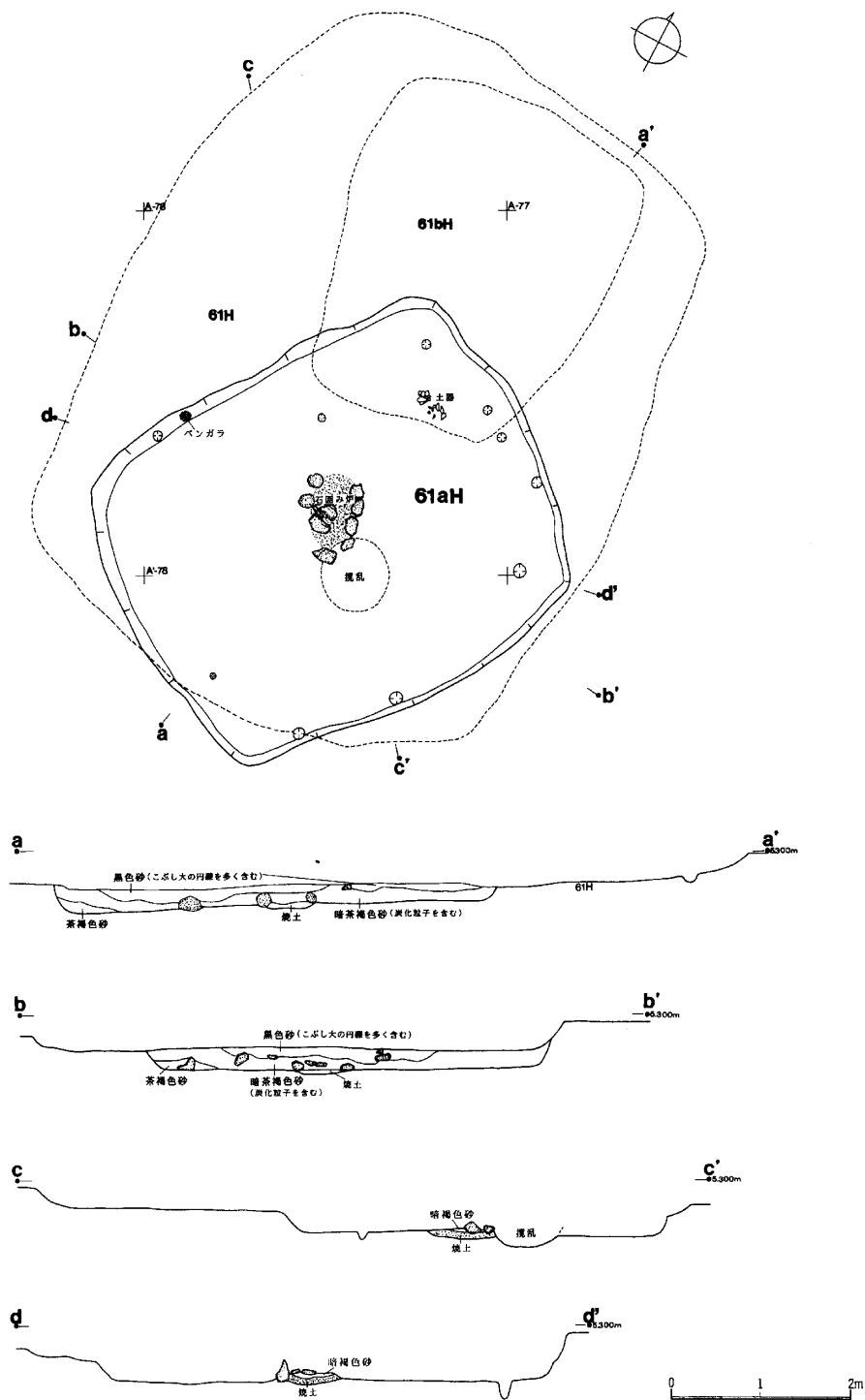
第84図-1~6は宇津内II b式。1は口径約12cm, 器高11.5cmの小型土器。3・4は同心円文がある。5は緩く外反した口縁部に8~9条の縄線文とそれを仕切る隆帯が施される。吊り耳は剥落している。6は縄線文と並行する擬縄隆起帯と縦位の短擬縄隆起帯で構成される。7は大きな山形突起から吊り手状の太い隆帯のある下田ノ沢2式。8は宇津内II a式。突瘤文の下部に半截状の刺突が連続する。9は口唇部, 口縁部に横位の沈線文が施される。続縄文初頭であろう。

石器は第86図-7は磨石。8~10は有茎石鏃。11~17は無茎石鏃。18は両面加工ナイフ。19は柄部だけを調整の施した片面加工ナイフ。7の泥岩製を除き黒曜石製。

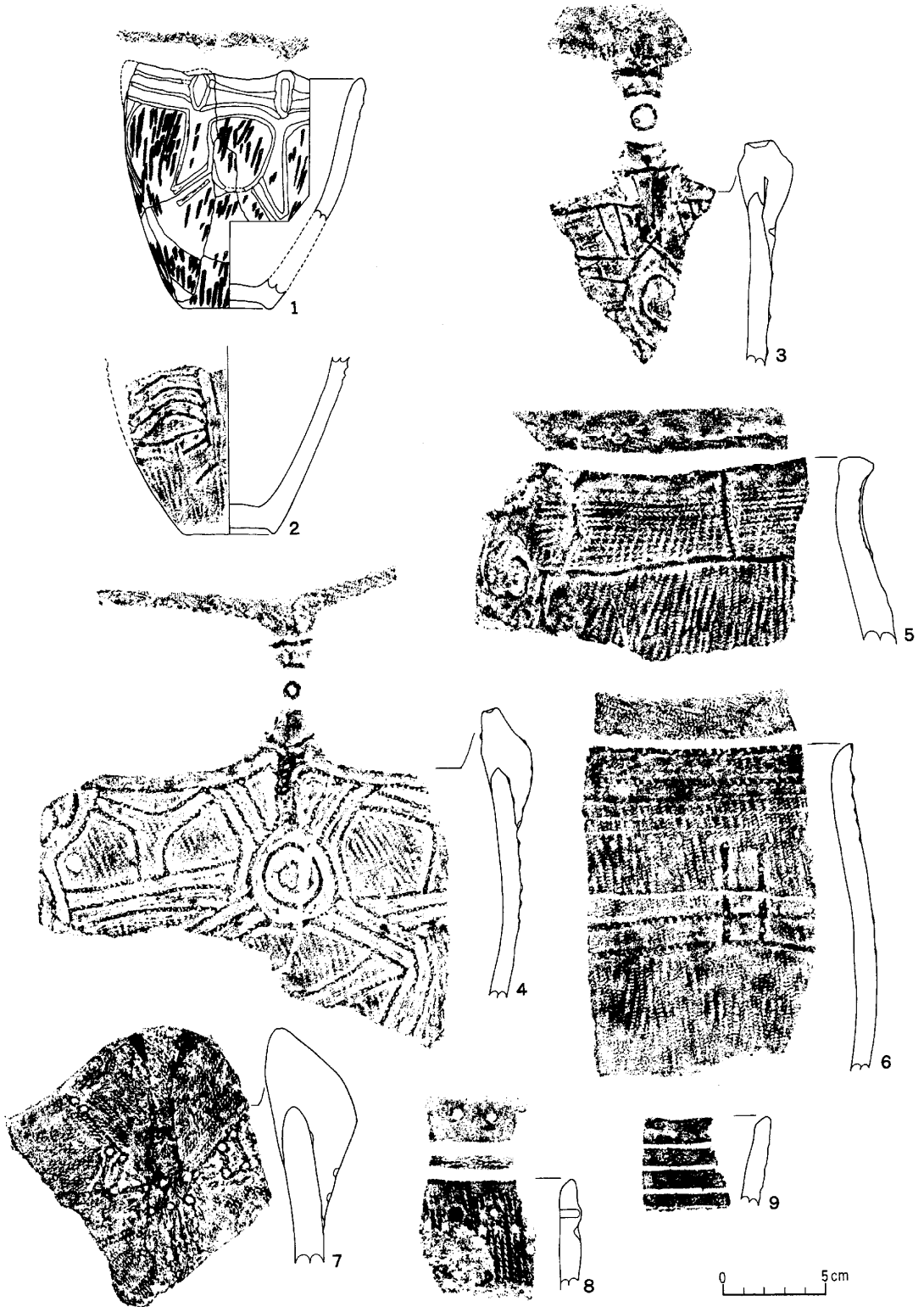
第87図-1は磨石。2はたたき石。

小 括

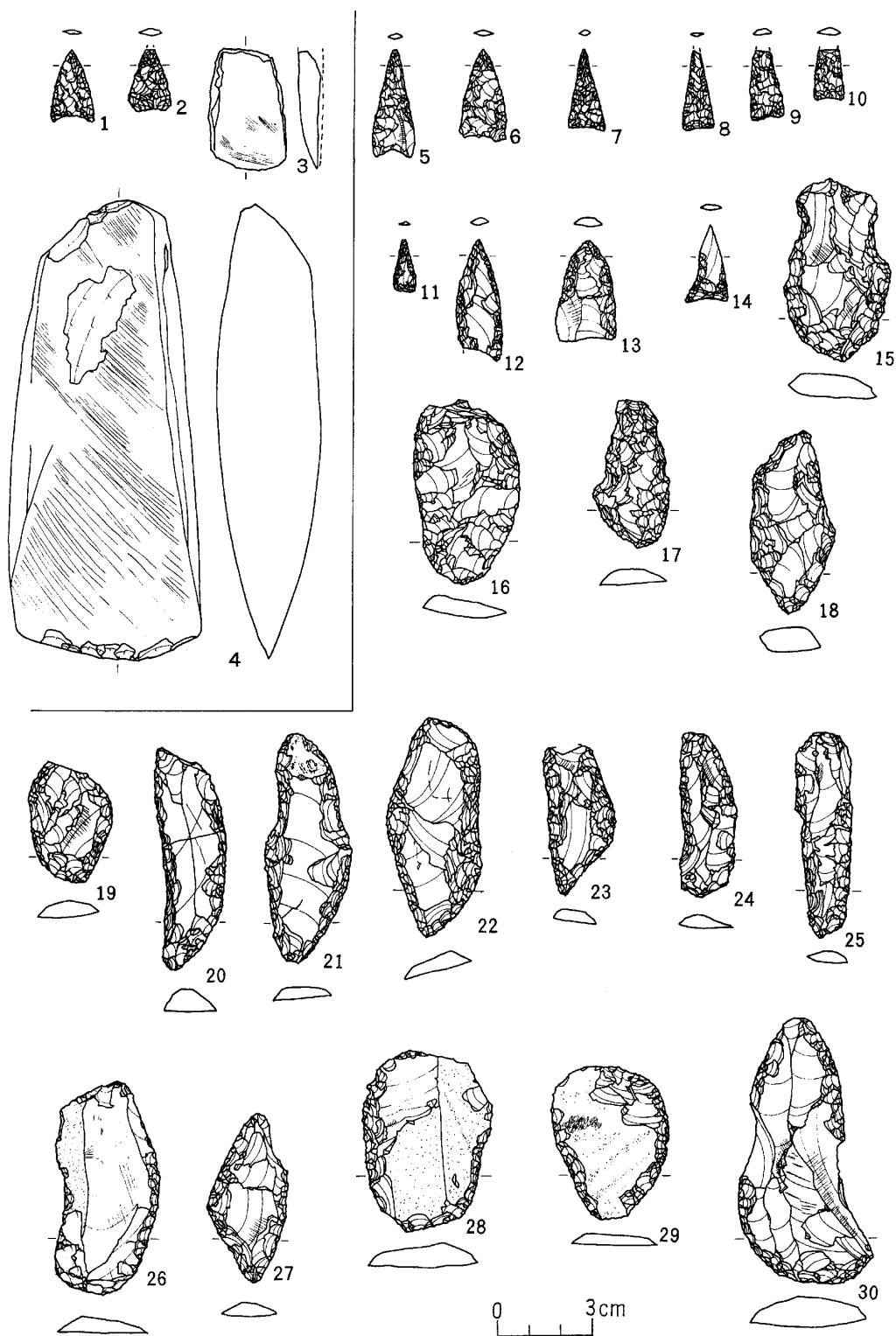
遺物は全て埋土からの出土であるため正確な時期は不明であるが第84図-1の続縄文字津内II b式の可能性がある。(武田 修)



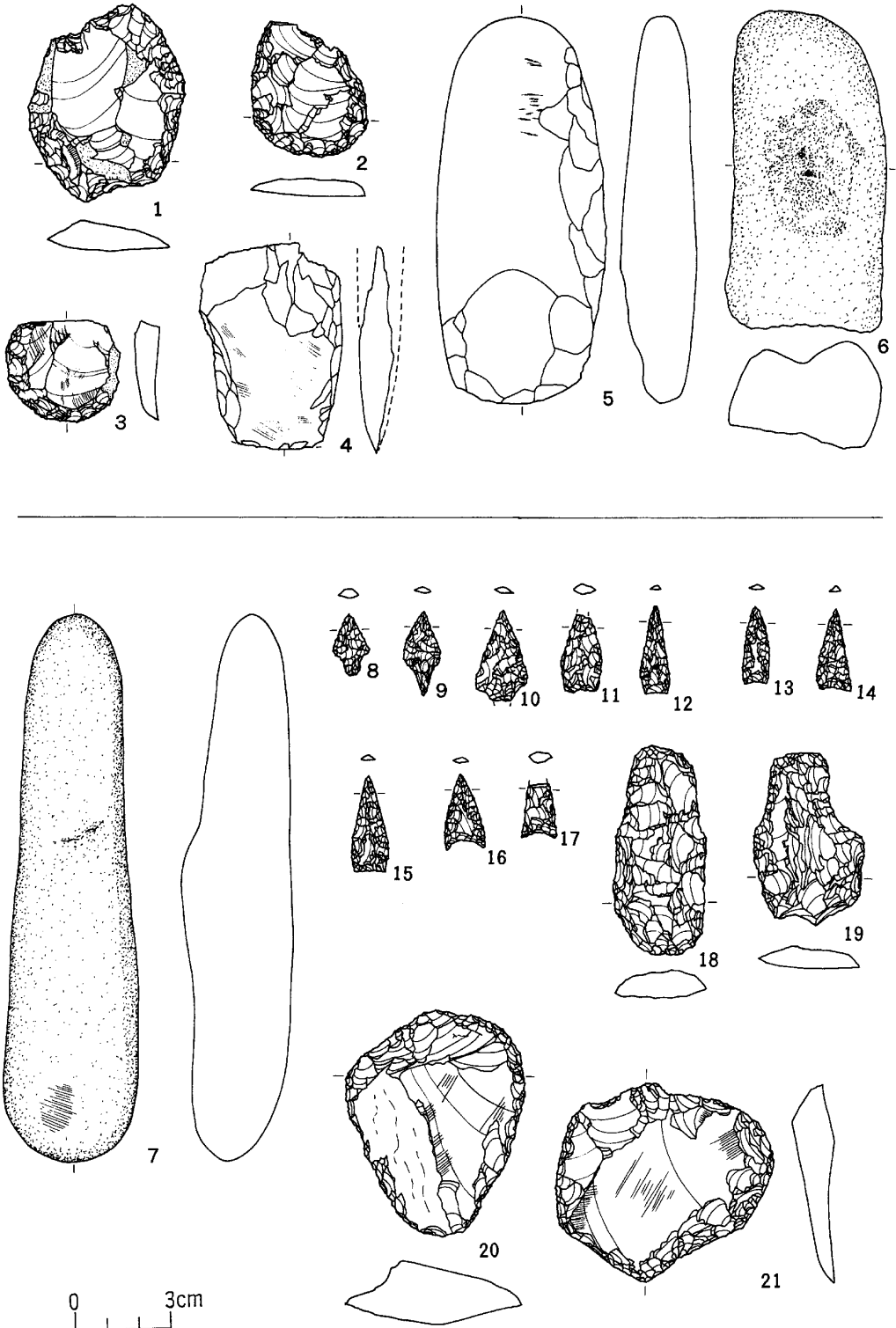
第83図 61a号竖穴平面図



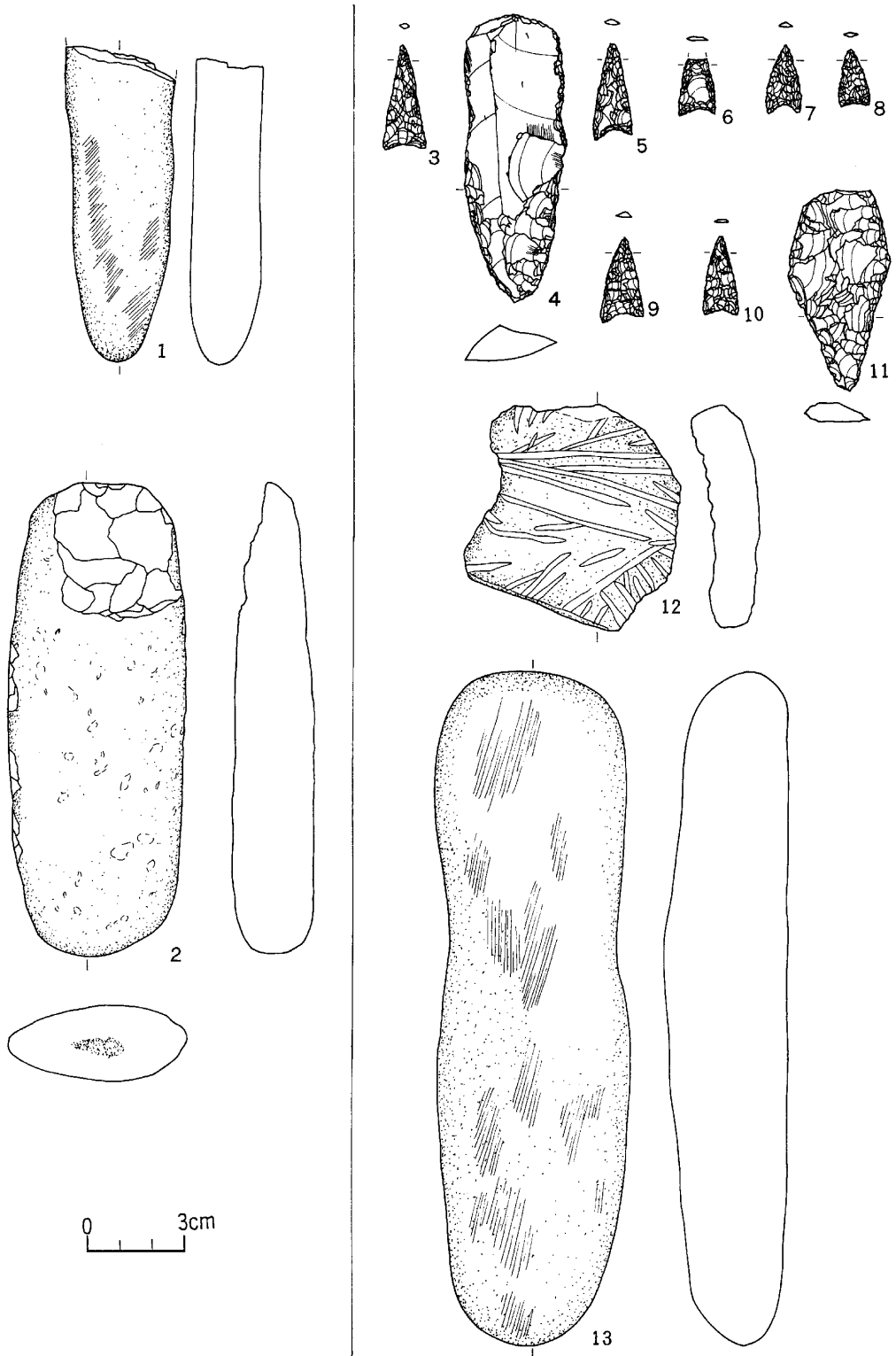
第84图 61a号竖穴埋土(1~9)出土土器



第85図 60号竪穴埋土(1~4), 61号竪穴埋土(5~30)出土石器



第86图 61号竖穴埋土(1~6), 61a号竖穴床面(7)·埋土(8~21)出土石器



第87图 61a号竖穴埋土(1·2), 61b号竖穴床面(3·4)·埋土(5~13)出土石器

61b 号 竪 穴

遺 構 (第88図, 図版13-1)

本竪穴は61号の下面にあり, 61a号と東壁で重複する。時間的には61a号が新しい。規模は長軸約3.80m, 短軸約2.30mで東壁側がわずかにすばまった不整形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり高さは61号の床面から約30cmである。中央部に地床炉があり, これに重なる様に大小10点の角礫を利用した石囲み炉が東側に寄った位置にある。石囲み炉は全周せず, 西側では見られない。石囲み炉には凹石が3点見られる。

柱穴は直径約8~13cm, 深さ約5~12cmの壁柱穴が各壁でほぼ等間隔に配列されている。主柱穴は東南壁隅に直径約21cm, 深さ約15cmのものを1本だけ検出した。

遺 物 (第89図, 第90図, 第87図-3~13)

第89図-1・2は統縄文津内II b式。3・4は同II a式。4は口縁直下に太い隆帯が施される。5は膨らみをもつ胴部に円形刺突文がある。興津式と思われる。

第90図-1は3本単位の微隆起線文が底部まで垂下した後北C₁式。2~4は突瘤文のある宇津内II a式。2は撚糸文を地文に突瘤の下に円形刺突が加わる。5の器壁は薄手で縄線文の下に縄端圧痕文が加わる。統縄文初頭であろう。6は宇津内系の底部であろう。7は下田ノ沢2式。8は縄端圧痕文が施される。縄文晩期中葉であろう。

石器は第87図-3・4が床面出土。3は無茎石鏃。4は縦長剥片の先端部を加工したナイフ。5~10は無茎石鏃。11は両面加工ナイフ。12は中央部を直線的, 縁辺部を斜位方向に使用した軽石製の有溝石器。有溝部以外の面は研磨されているので砥石もしくは石皿であったものを二次転用したものかもしれない。13は縦位方向に使用痕が残る磨石。実測図の下端部には赤色顔料が付着する。13は泥岩製であり他は黒曜石製である。

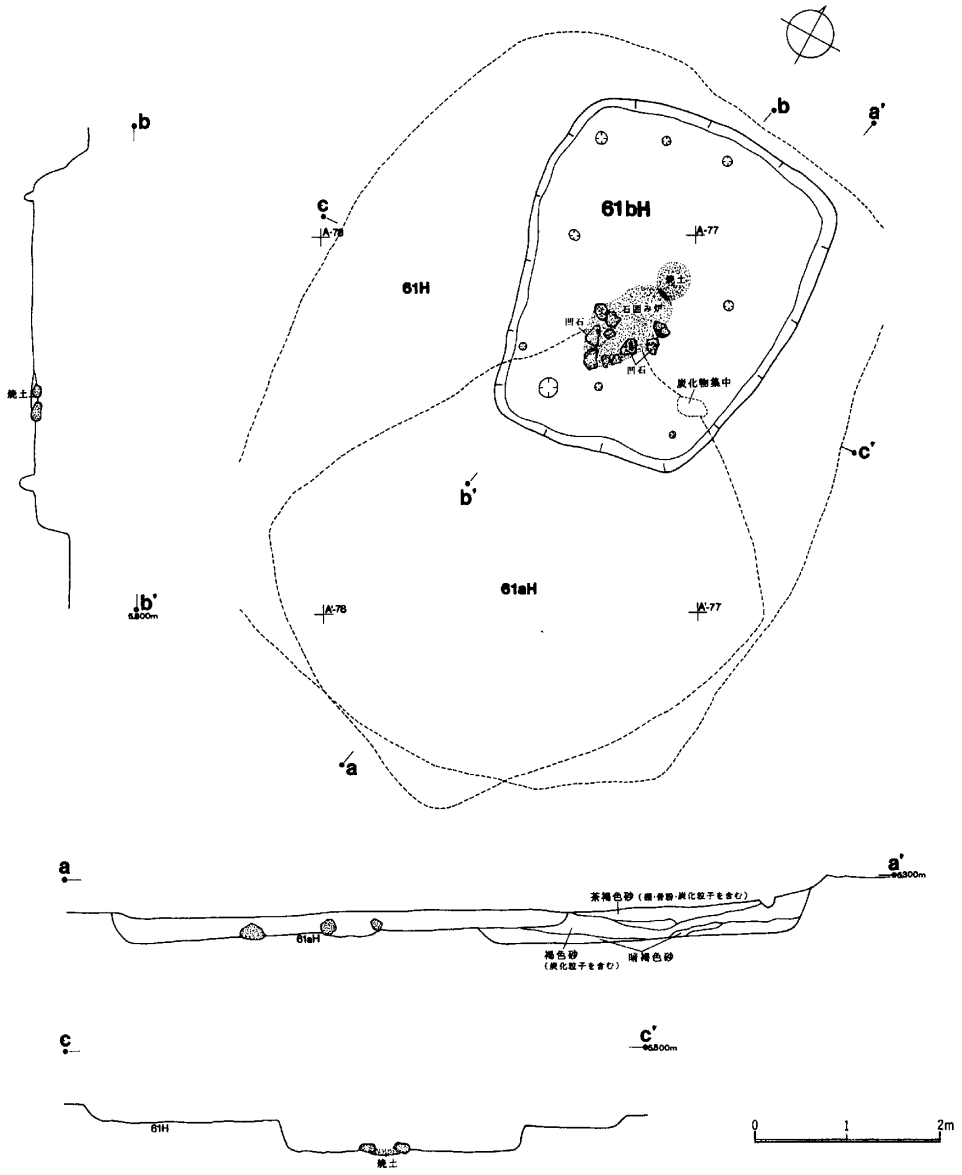
小 括

本竪穴は床面出土土器から統縄文津内II b式の時期と思われる。 (武田 修)

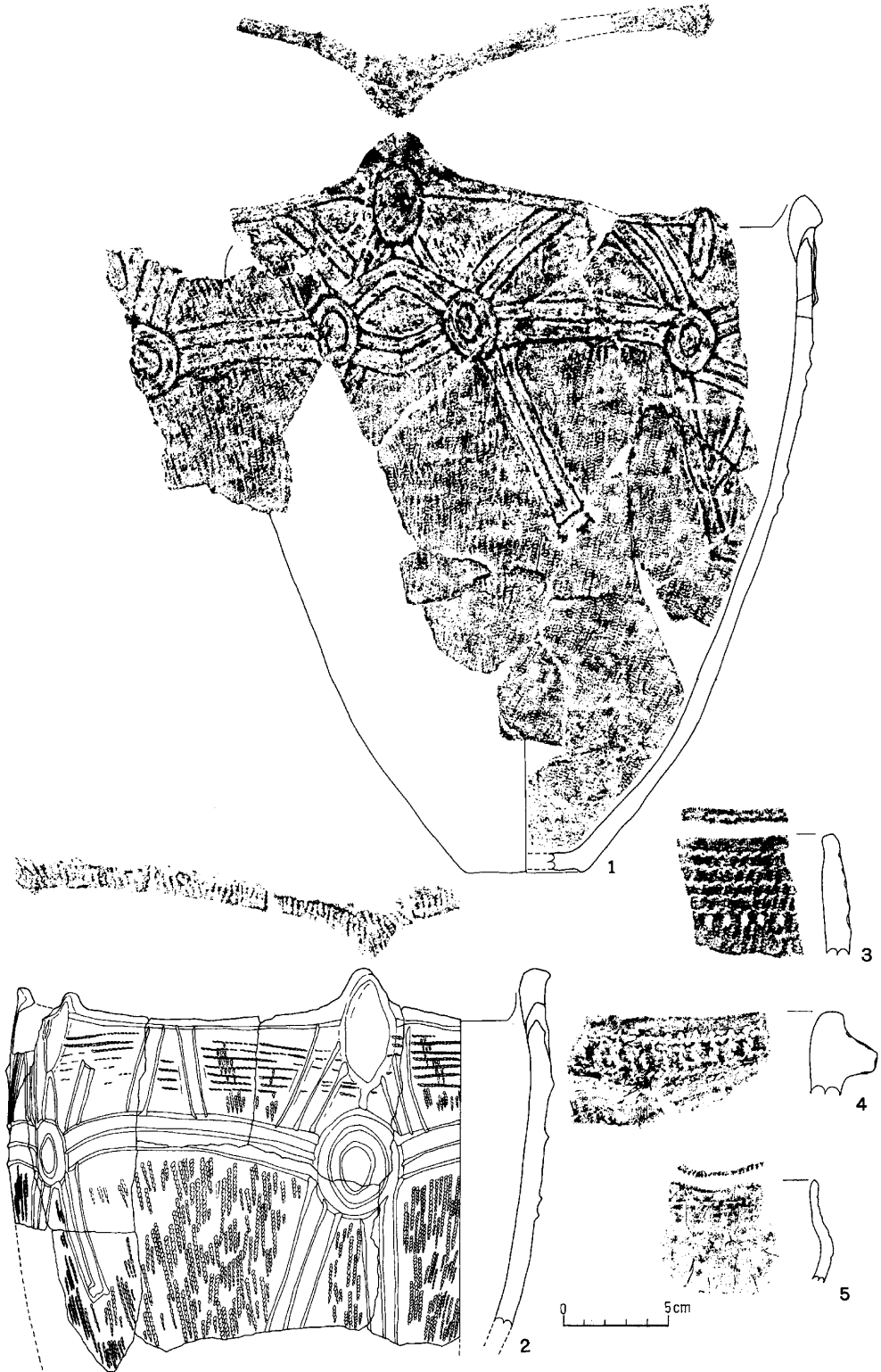
61c 号 竪 穴

遺 構 (第91図, 図版13-2)

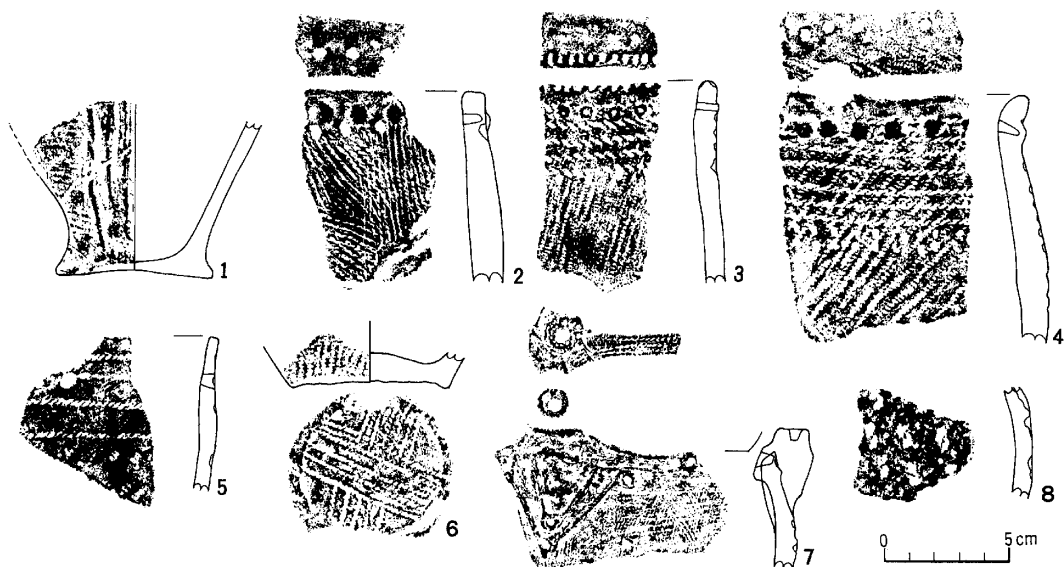
本竪穴は61号, 61a号, 61b号の下面にある。規模は長軸約9.43m, 短軸約6.20mの長楕円形を呈するが, 南壁は直線的であるのに対して北壁は弧状であり, 南壁の短部がややすばまる傾向である。壁は確認面から約44cmを測る。9点の角礫を利用した石囲み炉は楕円状であり中央部からやや南側に寄った位置にある。この各礫は比較的細長い種類のものを用いており, 1点は凹石である。



第88図 61b号竖穴平面図



第89图 61b号竖穴床面(1~4)·埋土(5)出土土器



第90図 61b号竪穴埋土（1～8）出土土器

遺物（第92図，第93図－1～8，第94図，第95図）

第92図－1は小突起下部，小突起間に「V」字状の微隆起線と円形刺突を加える。横位の縄文を地文に口縁部から胴部にかけて縦位に組紐文を施した下田ノ沢2式。2～6は同心円文のある宇津内II b式。7・8も宇津内系。9は後北C₁式。

第93図－1～3は宇津内II a式。4は口縁部に大小の突起が付けられ，3～4本単位の微隆起線が垂下し，横位の微隆起線で連結される。口縁部，胴部には部分的に組紐文が施される。5は横位・斜位沈線と刺突が施される。61号竪穴埋土出土の第82図－11と同一個体である。6・7は無文のミニチュア土器。8は内側から突瘤が施される。縄文晩期前葉であろう。

石器は第94図－1～3が床面出土。1～3は両面加工ナイフ。4～30は無茎石鏃。31は有茎石鏃。第95図－1は大型の無茎石鏃か石銛と思われる。2・3は両面加工ナイフ。4・5は台形状の搔器。6～9は削器。10は異形石器。11は上部の左右に穿孔を施したブーメラン状の装身具。12は磨石。縦位方向に細い使用痕が観察される。11は硬質頁岩製，12は泥岩製であり，他は黒曜石製。

（武田 修）

61 d 号 竪 穴

遺 構 (第91図)

本竪穴は61号の北東側に位置する。大半を61c号によって切られているため全体の規模は不明であるが、辛うじて残っていた炉跡を中心部と推測すると長軸約4m, 短軸約2.60mの小型住居と思われる。平面形態は不整形を呈する様である。壁高は確認面から約22cmである。

直径約6～8cm, 深さ9～15cmの壁柱穴が北壁3本, 東壁2本ある。支柱穴は検出できなかった。西壁近くに4～5cmの2箇所のベンガラ域がある。

遺物は出土していないため時期は不明である。 (武田 修)

61 e 号 竪 穴

遺 構 (第91図)

本竪穴は61a号竪穴の南壁隅に位置する。大半が61a号に切られているため詳細な規模は不明である。61a号, 61c号の張出し部とも考え調査したがレベル差があることから単独の竪穴とした。東西約2.4mの小型の竪穴である。壁高は確認面から約25cmである。

壁柱穴は西壁1本, 東壁1本ある。直径約10～15cm, 深さ約10～17cmである。

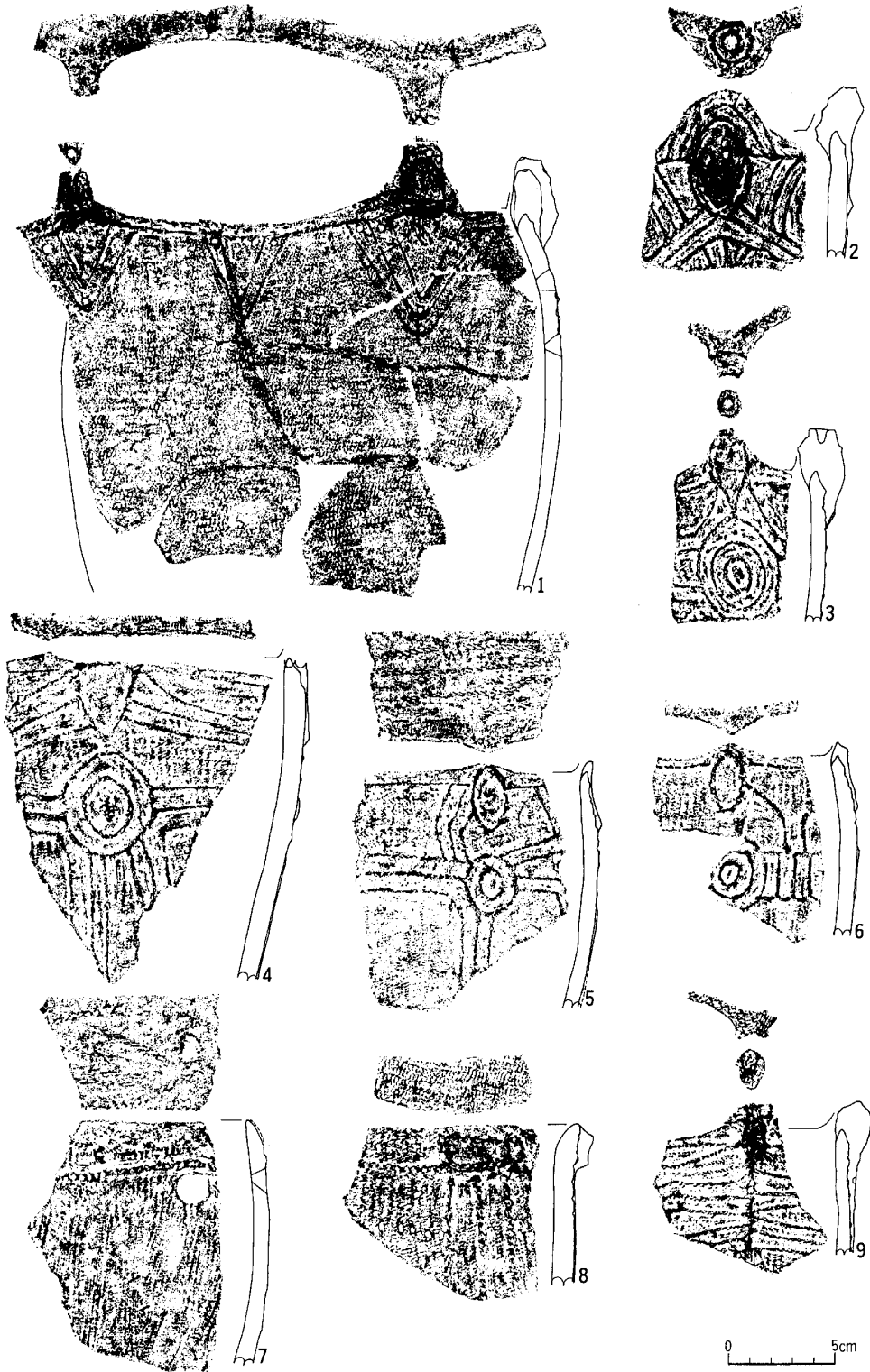
遺 物 (第93図-9・10)

第93図-9・10は縄文晩期中葉と思われる。

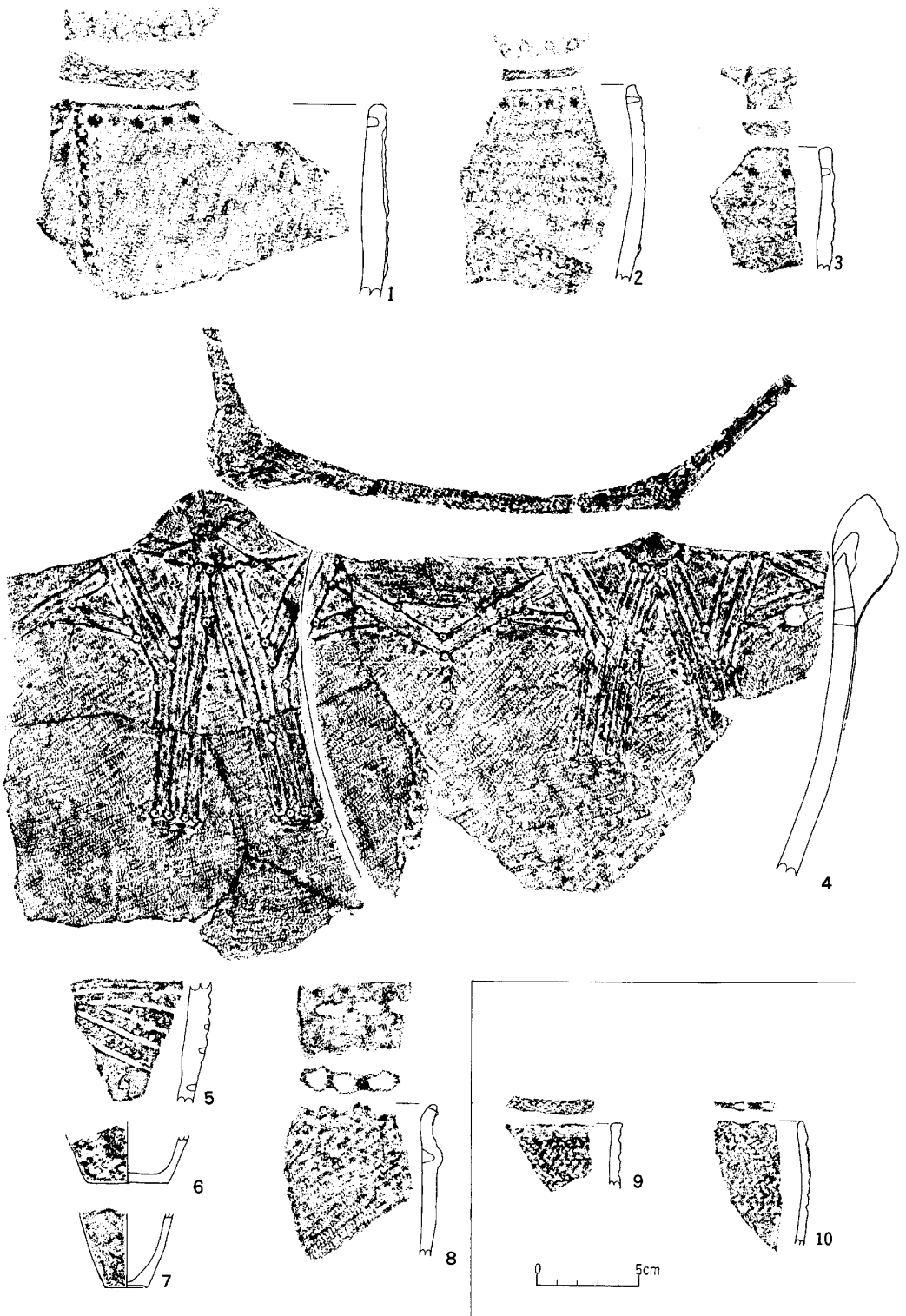
小 括

切り合い関係から61c号竪穴より古いことは明らかであるが詳細な時期は不明である。

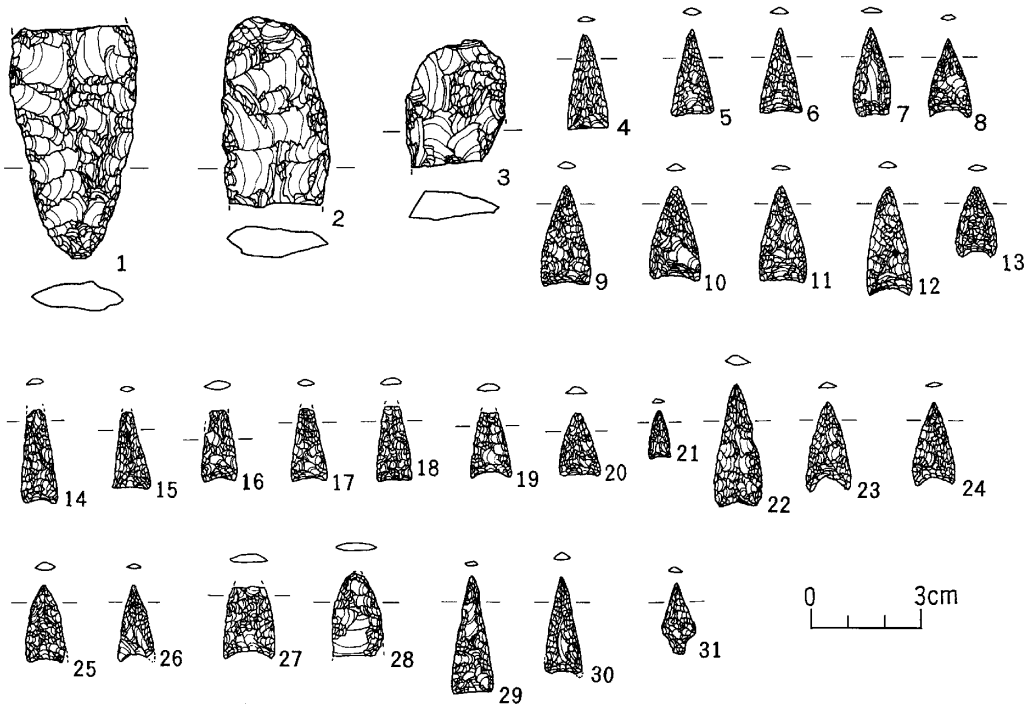
(武田 修)



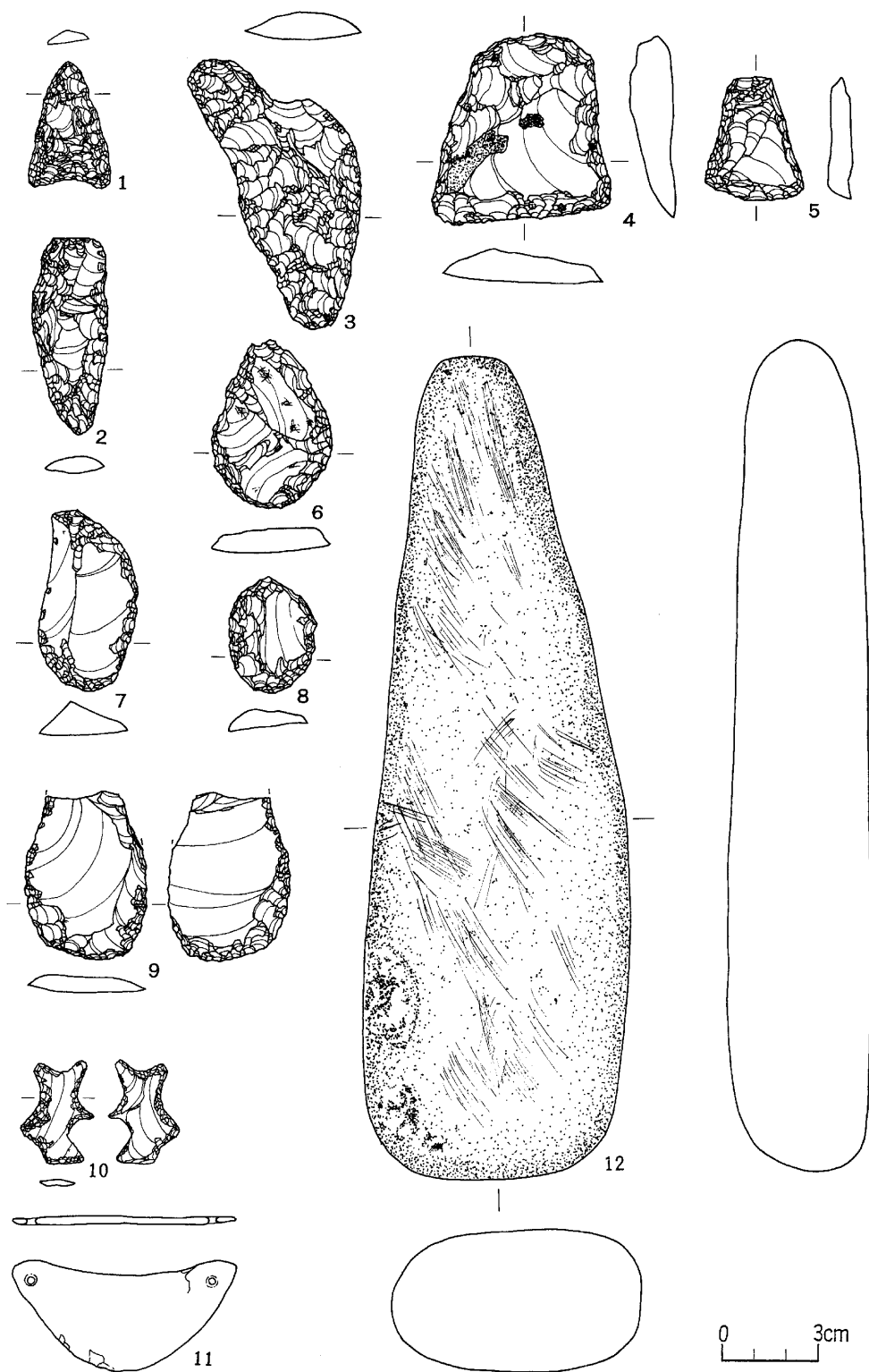
第92图 61c号竖穴床面(1)·埋土(2~9)出土土器



第93図 61c号竖穴埋土(1~8), 61e号竖穴埋土(9・10)出土土器



第94图 61c号竖穴床面（1～3），埋土（4～31）出土石器



第95図 61c号竪穴埋土(1~12)出土石器・石製品

61f 号 竪 穴

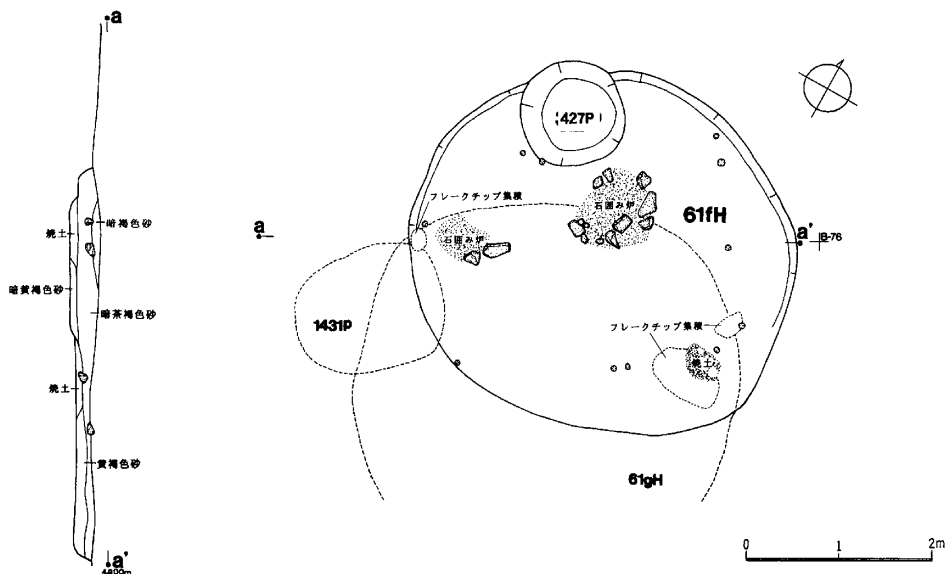
遺 構 (第96図, 図版14-1)

本竪穴は南東部分が61号竪穴など上層の竪穴と重複し、北壁部分はピット337と、西壁付近はピット1431と重複している。また、東壁にはピット1409が隣接しているが、切り合いはない。規模は長軸4.1m、短軸3.9mで平面形はほぼ円形を呈する。壁高は確認面から20cmを測る。柱穴は直径10cm前後、深さは5~20cmである。

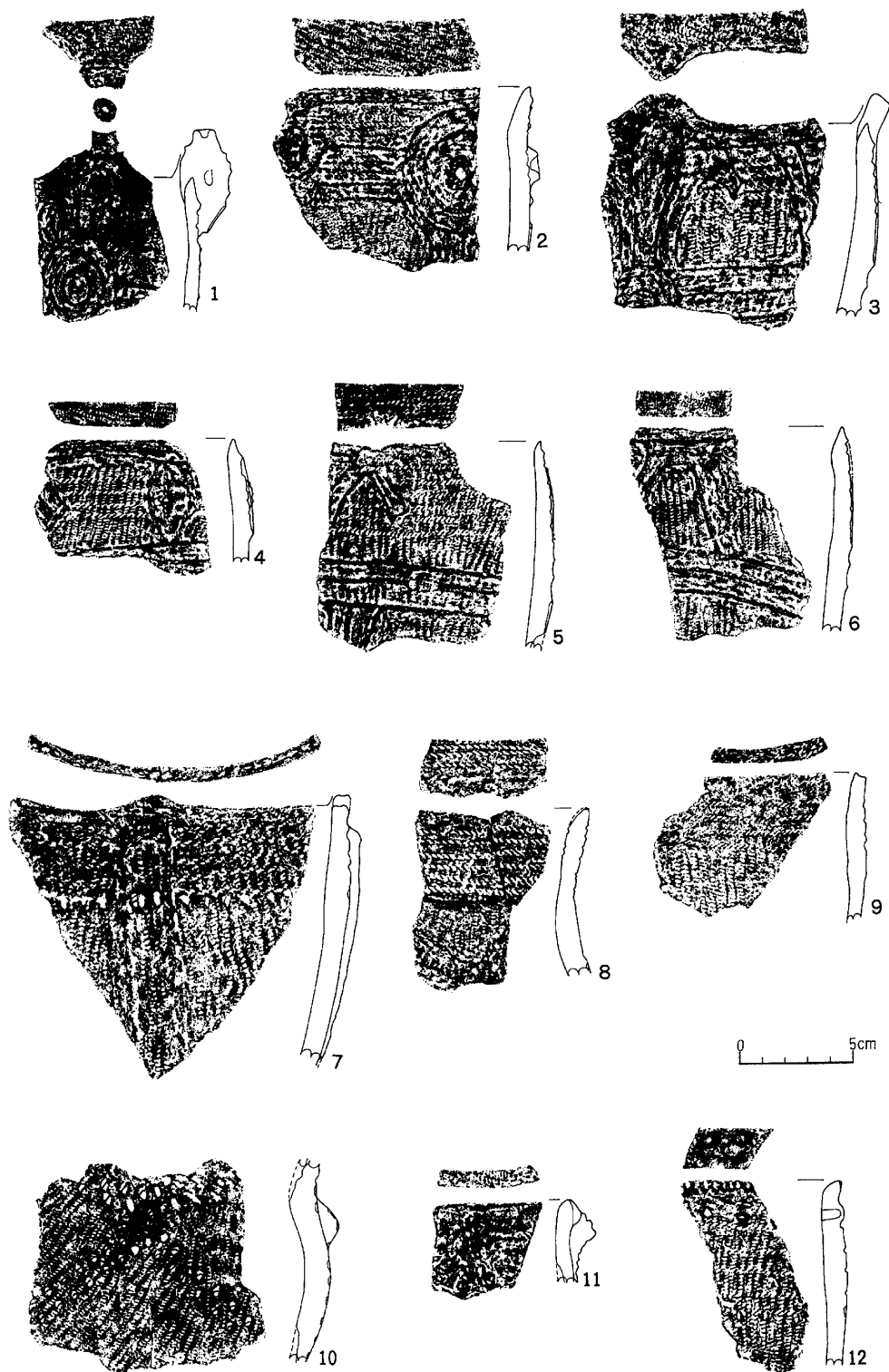
竪穴ほぼ中央に直径70cmほどの円形の黄褐色土と焼土、焼骨の含まれた土とその周囲から角礫2個を検出しており、石囲み炉であったと考えられる。この北側には床面で長軸50cm、短軸40cmの範囲で炭化物が集中している。その他に床面からは東壁付近に40×30cm、西壁付近に60×50cmの焼土が検出されている。このうち西壁付近の焼土には被熱した角礫2個がめぐっており、石囲み炉がもう1基あった可能性もある。また、北西の焼土付近には70×40cmと30×20cmの2箇所、東の焼土付近に20×10cmの範囲でそれぞれ黒曜石のフレーク・チップ集積を検出した。

遺 物 (第97図, 第98図-1~7, 第100図-1~11)

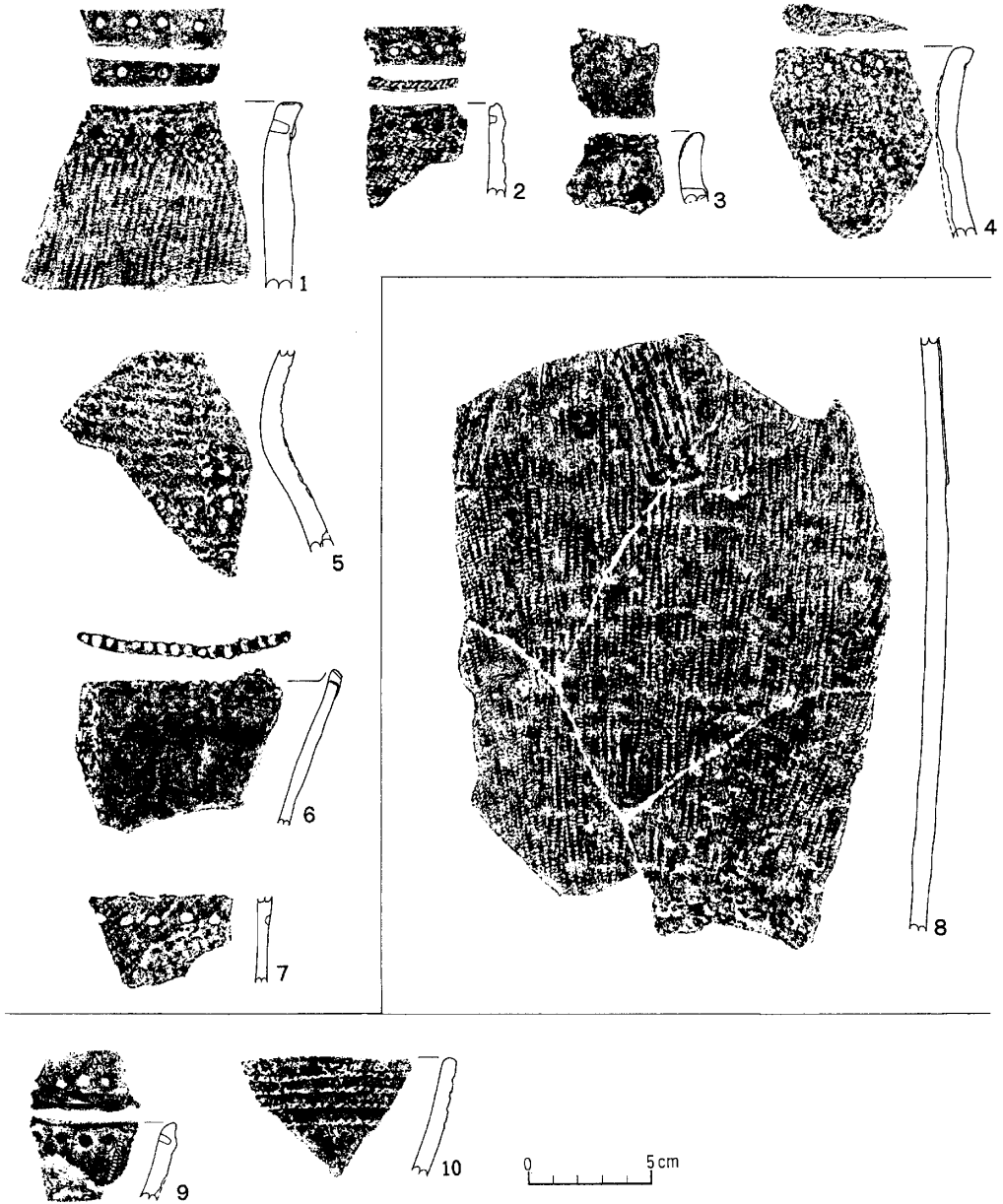
第97図はすべて埋土出土である。1~6は宇津内II b式。2は隆帯が同心円となりその内側にドーナツ状の貼付文。口縁部内面に縄文施文。7は口唇部には縄文。小突起から逆U字形に隆帯が胴部まで垂下する。口縁部に複節RLの縄線文が5条、その下に刺突文がめぐる宇津内II a式。8も宇津内II a式。口縁部に7条、口縁部内面に3条の縄線文。9は続縄文初頭。口



第96図 61f号竪穴、ピット337平面図



第97図 61f号竖穴埋土(1~12)出土土器



第98图 61f号竖穴埋土(1~7), 61g号竖穴床面(8), 62号竖穴埋土(9·10)出土土器

常呂川河口遺跡

唇部に縄端圧痕文，口縁部に4条の縄線文。10は宇津内II a式で口縁部を欠く。頸部に縄線文，その下に2列の刺突文がめぐる。刺突文の下には縄端圧痕文のあるボタン状の貼付文があり，その下から山形に2列の刺突文がのびる。12は続縄文初頭。口唇部に刻み，内側から突瘤。外面は6条の縄線文の下に刺突文。

第98図-1～7は埋土出土である。1は続縄文初頭で口唇部に円形刺突文，口縁部上部に刻み，内側から突瘤。外面は口縁部に2列の刺突文。2は口唇部に縄線文。口縁部内側から突瘤。外面は4条の縄線文。3は口唇部に刻み，内側に2つ一組の縄端圧痕。内側から突瘤。4は口唇部に縄文。口縁部外面に1列の刺突文。5は続縄文初頭。頸部付近で8条の縄線文と，おそらく口縁部から垂下する2列の円形刺突文が胴部付近で水平に展開する。6は口唇部に刻み。外面は丁寧な横ナデで調整されている。7は口縁部に1列の刺突文。

石器は第100図。すべて埋土出土で黒曜石製である。1・2は有茎石鏃。3～8は無茎石鏃。9～11は削器。

小 括

床面からの土器の出土はないが，本竪穴に切られている61g号竪穴床面から宇津内II b式が出土しているため，この時期よりも新しいと考えられる。(熊木美野里)

61g 号 竪 穴

遺 構 (第99図)

北半分が61f号竪穴に重複する。南側は61号竪穴などの上層の竪穴と重複している。また、東壁の一部をピット1431に切られている。規模は東西3.9m、南北で4mである。平面形態はおそらく不整形な楕円形を呈する。壁高は確認面から20cmを測り、61f号竪穴の床面からは10cmとなる。柱穴は直径5～10cm、深さは5～15cmで、壁の立ち上がりに沿っているものが多い。

炉跡については、床面で竪穴北側で40×30cmの焼土と竪穴のほぼ中央で床面から被熱した角礫3個と70×50cmほどの焼土を検出しているが、後者が石囲み炉跡であったと考えられる。

遺 物 (第98図-8, 第100図-12)

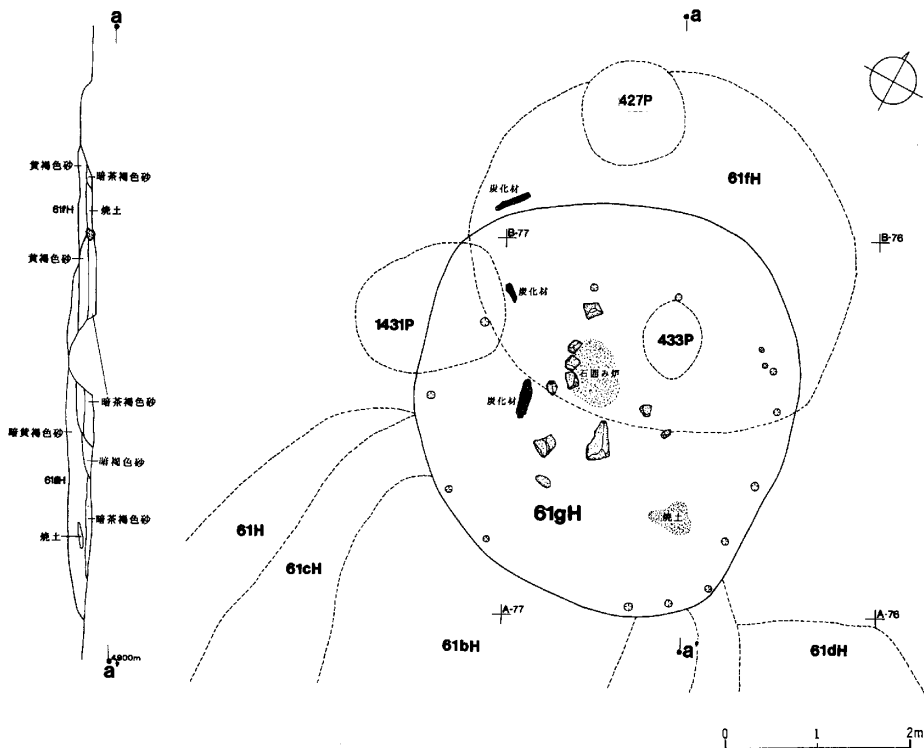
第98図-8は床面出土。宇津内II b式で、胴部のみ。細かい刺突のある貼付文が施文されている。

石器は床面から第100図-12の削器が出土している。黒曜石製。

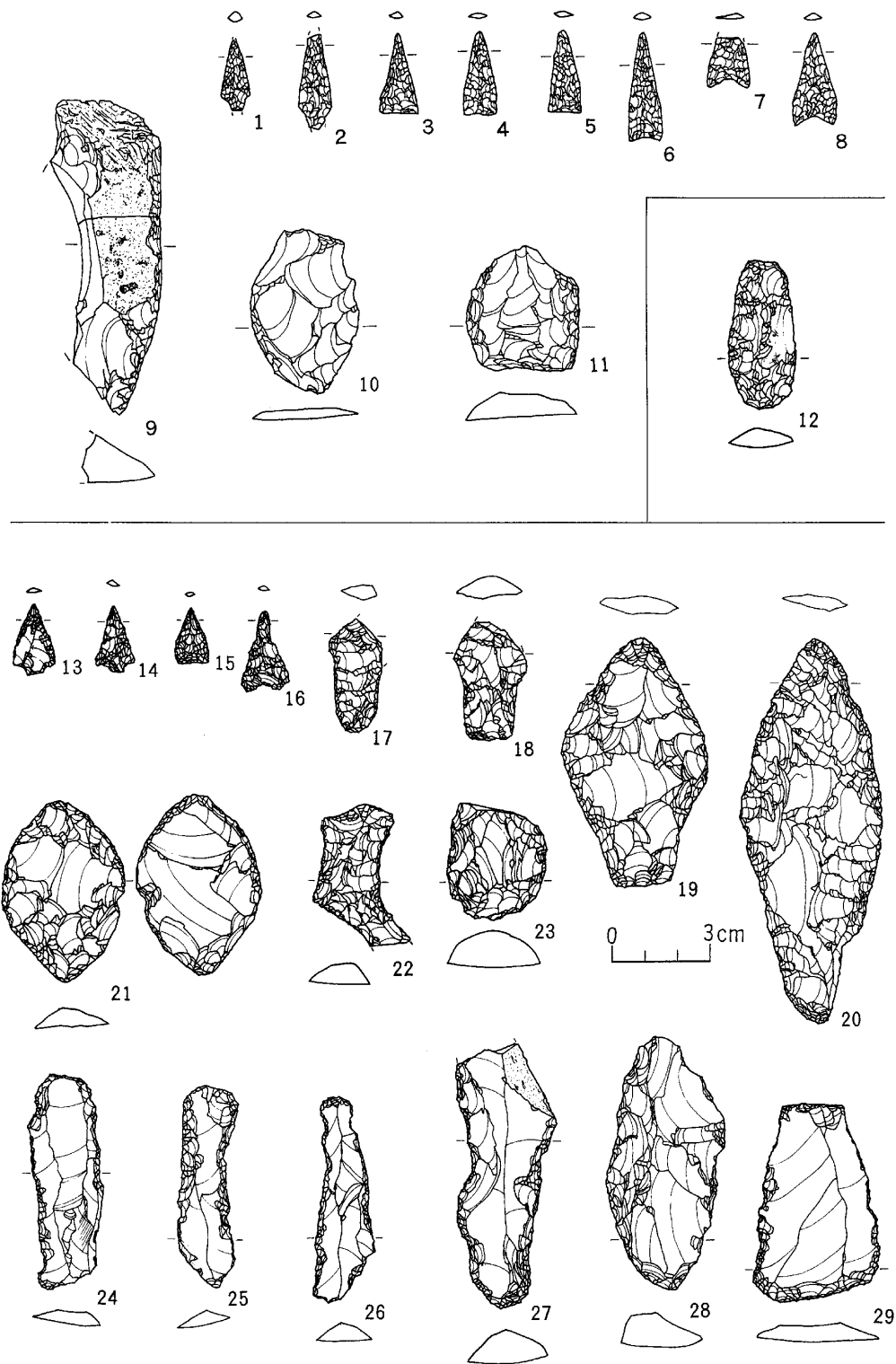
小 括

床面から宇津内II b式の土器が出土しているため、この時期が相当と考えられる。

(熊木美野里)



第99図 61g号竪穴平面図



第100図 61f号竖穴埋土 (1~11), 61g号竖穴床面 (12), 63号竖穴埋土 (13~29) 出土石器

62号 竪 穴

遺 構 (第101図, 図版14-2)

本竪穴はH77グリッドに位置する。表土の二次堆積土を剝土すると炭化粒子を多く含む黒色砂の落ち込みが現われた。それを約10cm掘り下げると樽前a火山灰を含む薄い層が現われ、さらに10~15cm下げたところで床面が現われた。規模は東西2.6m, 南北2.3mの方形を呈するが、南壁と東壁がやや短い。壁高は確認面から約25~35cmで、壁はやや開きぎみに立ち上がる。竪穴の中央部は近代の攪乱を受けていて炉跡は検出されなかった。カマドも認められない。床面近くに長さ12~22cmの炭化材が2点出土した。

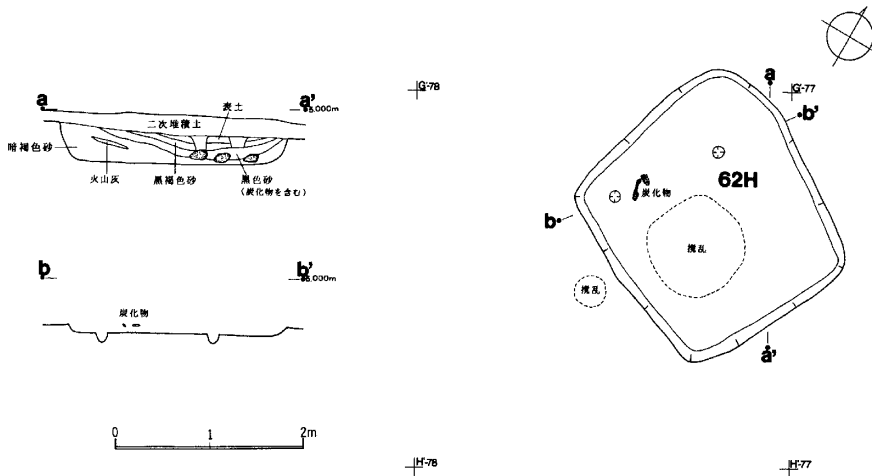
柱穴は床面西側に2箇所のみ検出された。直径9~10cmである。

遺 物 (第98図-9・10)

第98図-9は字津内II a式。10は縄線文の施された縄文晩期中葉。

小 括

南壁と東壁がやや短く、カマドも認められない。本竪穴は擦文期のものであるが詳細な時期は不明である。(渡部 高士)



第101図 62号竪穴平面図

63 号 豎 穴

遺 構 (第102図, 第103図, 図版15-1・2)

本豎穴は55号豎穴の南西0.50mにあり、一辺約3.90mの方形を呈する。各壁の長さは東壁・南壁・北壁で約3.90m、西壁で3.70mを測る。壁高は確認面から50cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。豎穴の周辺には摩周b火山灰が見られるが、豎穴の埋土にはほとんど見られないことからこの火山灰を切って構築されたものと考えられる。豎穴の埋土を剝土していくと北壁付近と西壁付近で多量の炭化物が検出され、その中に板状や半割状のものが平らな状態で多数出土している。西壁付近からは炭化した木皮が検出され、南西隅付近から第104図-2・5・9の土器が出土している。これらの炭化物と土器の下は西壁付近が30~50cmの幅で床面より10cmほど高くなっており、南壁付近も西側の3分の2が30cm位の幅で約10cmほど高くなっている。この高くなっている上には4~20cmの礫が多量に敷き詰められている。支柱穴は北側には直径18~22cm、深さ14~33cmのものが3本並んでいる。南側にも直径12~16cm、深さ9~18cmのものが3本並んでいるが、その外側にさらに直径12~16cm、深さ12~20cmのものが3本並んで検出された。壁柱穴は直径6~10cm、深さ5~9cmのものが6本検出されている。豎穴中央に直径約40cmの範囲で炉跡の焼土があり、東壁中央付近にカマドが構築されている。カマドの構築材は粘土で、燃烧部から煙り出し部にかけて煙道天井を覆っており、袖部の上部に白色粘土の塊がある。煙道は長さ80cmほどで燃烧部から緩やかに立ち上がる。カマドの焼土中に骨片を含み、焼土下の黒色砂中からは黒曜石のフレーク・チップが多量に出土している。カマドの北側から第104図-3の土器が出土しており、北壁際の炭化物の下からは第104図-1の土器も出土している。また、炉跡の北東側約50cmのところから紡錘車が出土している。

遺 物 (第104図, 第100図-13~29, 図版16-1~5)

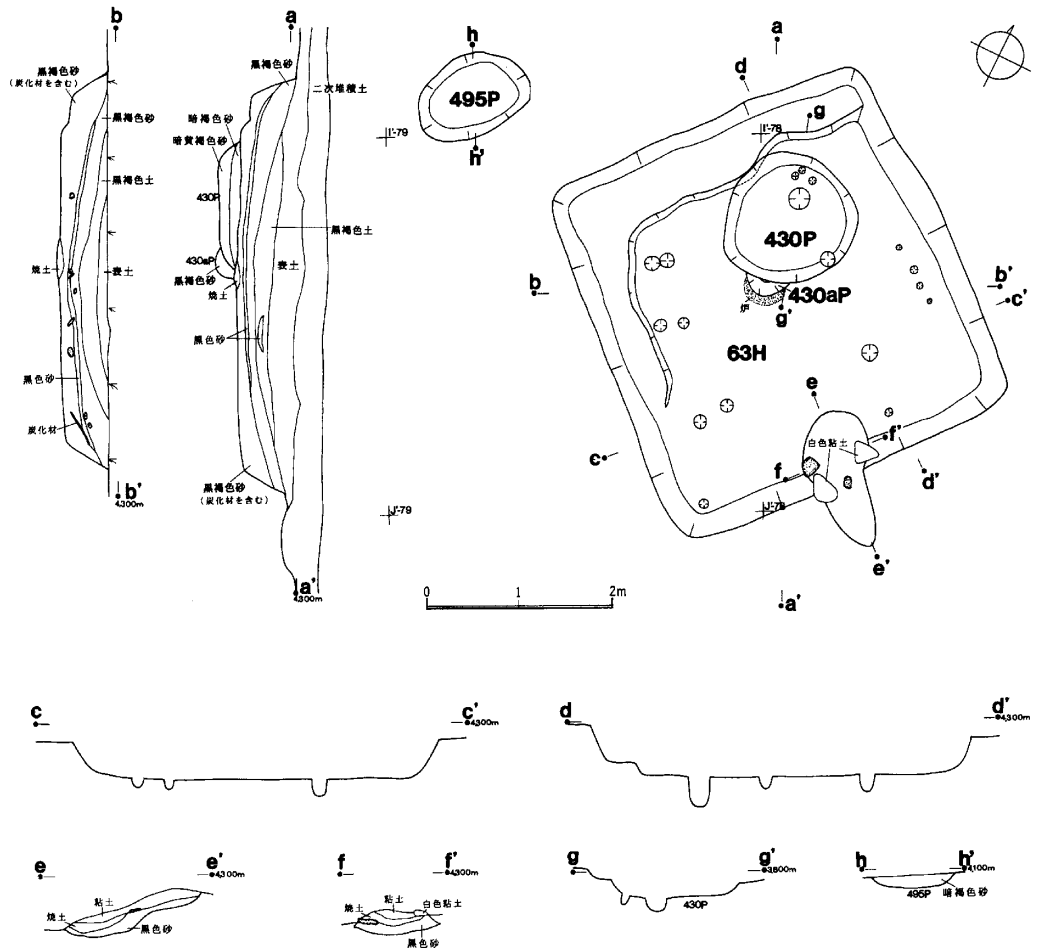
床面から第104図-1~5, 9が出土している。1は無文の小型环形土器。内側が刷毛により整形されている。底部に板目状圧痕がある。口径8cm, 器高6cm。2は高杯。坏部は半球状を呈し、文様は矢羽根状文を1条、鋸歯状文を1条、さらにその下に矢羽根状文を2条巡らす。3は無文で刷毛による調整がなされている。口縁部に1対の補修口があり、底部に板目状圧痕がある。口径13cm, 器高14.5cm。4は紡錘車で上面・下面とも無文であるが側面全体に2本1組の鋸歯状の刻線を配し、周縁には上下ともに刻みを入れている。直径5.5cm, 厚さ1.7cm, 重さ60g。5は矢羽根状文を配した高杯。9は無文で刷毛によって丁寧に調整されている。口縁部に3段の隆帯が施され、胴部は僅かに膨らみをもっている。口径25cmであるが底部は欠けているため器高は不明である。

埋土からは6・7が高杯。8は擦文土器。10は続縄文初頭。11は幣舞式。12は縄文後期鈍潤式。13・14は横走る隆帯上に円形文をもち縦位の山形文が施される。縄文前期末歯の押型文土器である。

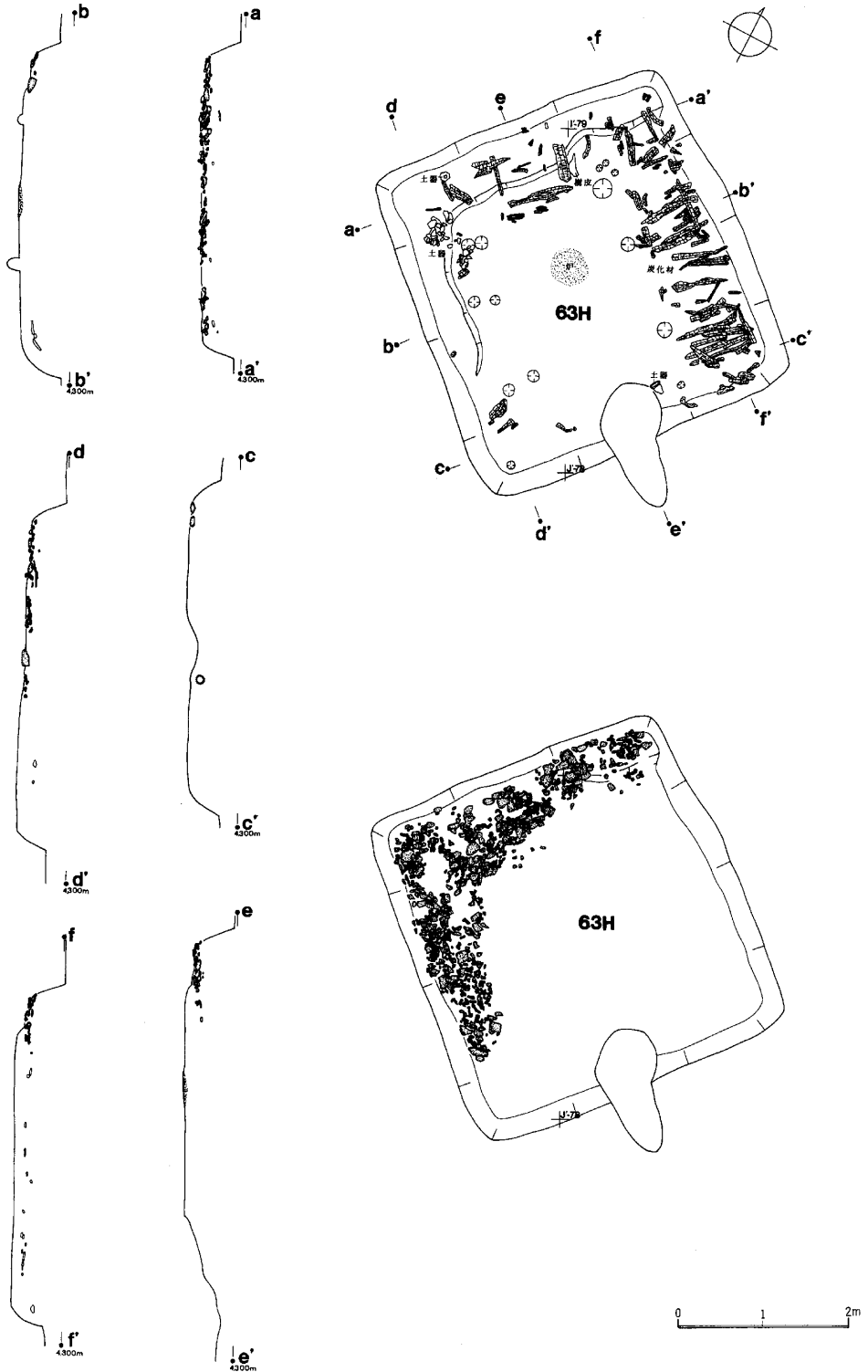
石器は埋土出土。第100図-13~18は石鏃。19・20は石槍。21は片面加工ナイフ。22は「く」字状の削器。23は搔器。24・25・27~29は削器。26は石匙。すべて黒曜石製。

小 括

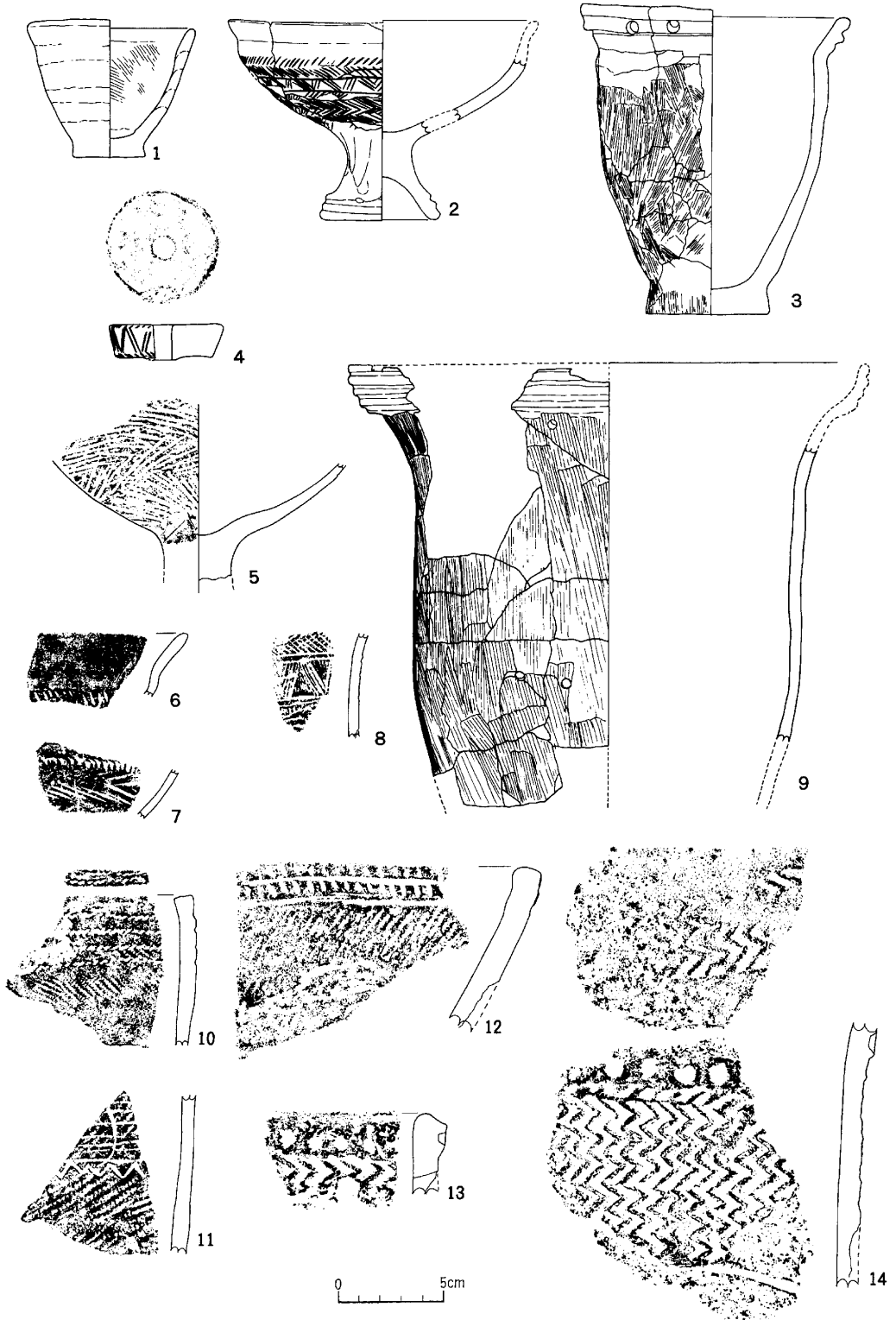
本竪穴は一辺約3.90mの方形を呈する擦文期の竪穴で、埋土の中から多量の炭化物が検出されていることから火災住居と考えられる。時期は床面出土の土器から宇田川編年後期に比定される。礫と炭化物の出土状態から北壁と西壁の一部は床面を一段高くし、その上に礫を平に並べ、さらにその上に板状の木材を敷いてベット状にしたものと考えられる。東壁から南壁にかけて同じ高さに板材が並べられ板敷としている。また、南側の柱穴列が2列になっていることから途中で建て替えられた可能性も考えられる。(佐々木 覚)



第102図 63号竪穴、ピット430, 430a, 495平面図



第103図 63号竖穴遺物出土分布図



第104图 63号竖穴床面(1~5·9)·埋土(6~8, 10~14)出土土器

64 号 豎 穴

遺 構 (第105図, 図版16-6, 図版17-1)

本豎穴は55号豎穴の南にあり一辺が約7mの方形を呈する。壁高は確認面から西壁側で70cm, 東壁側で50cmを測り, 壁は斜めに立ち上がる。埋土を剥土すると表土層の下から火山灰を含む茶褐色土層が認められた。この火山灰は樽前a火山灰と考えられる。その下の床面を覆っている黒褐色砂層と茶褐色砂層からは炭化物が多量に検出された。特に北壁際では壁の上部から床面に向かって斜めに, 豎穴中央部付近は床面に平らな状態で多量に出土している。北西隅からは炭化した樹皮も出土している。炭化物下の床面からは第107図-5の紡錘車が西壁際から, 3の紡錘車がカマドの南西側から3つに割れ, 4の紡錘車がカマドの北東側からそれぞれ出土している。また, 床面から炉跡は検出できなかった。

主柱穴は4本あり, ほぼ等間隔に配置されている。直径は22~30cmで, 深さは33~39cmと深い。壁柱穴は直径8~13cm, 深さ9~15cmのものが西壁際で10本, 南壁際で7本, 東壁際で1本, 北壁際で2本検出された。カマドは東壁中央部に構築されており, 煙道は1mある。カマドの構築材は粘土で, 両袖部に偏平な4枚の礫を立てており, 燃焼部の粘土と焼土の間には5~30cmの礫20個を平らに敷き詰めた状態で認められた。礫の上部からは数点の土器片が出土しており, 煙道の赤褐色砂中から第107図-8の土器も出土している。カマドの焼土中には骨片は見られなかった。

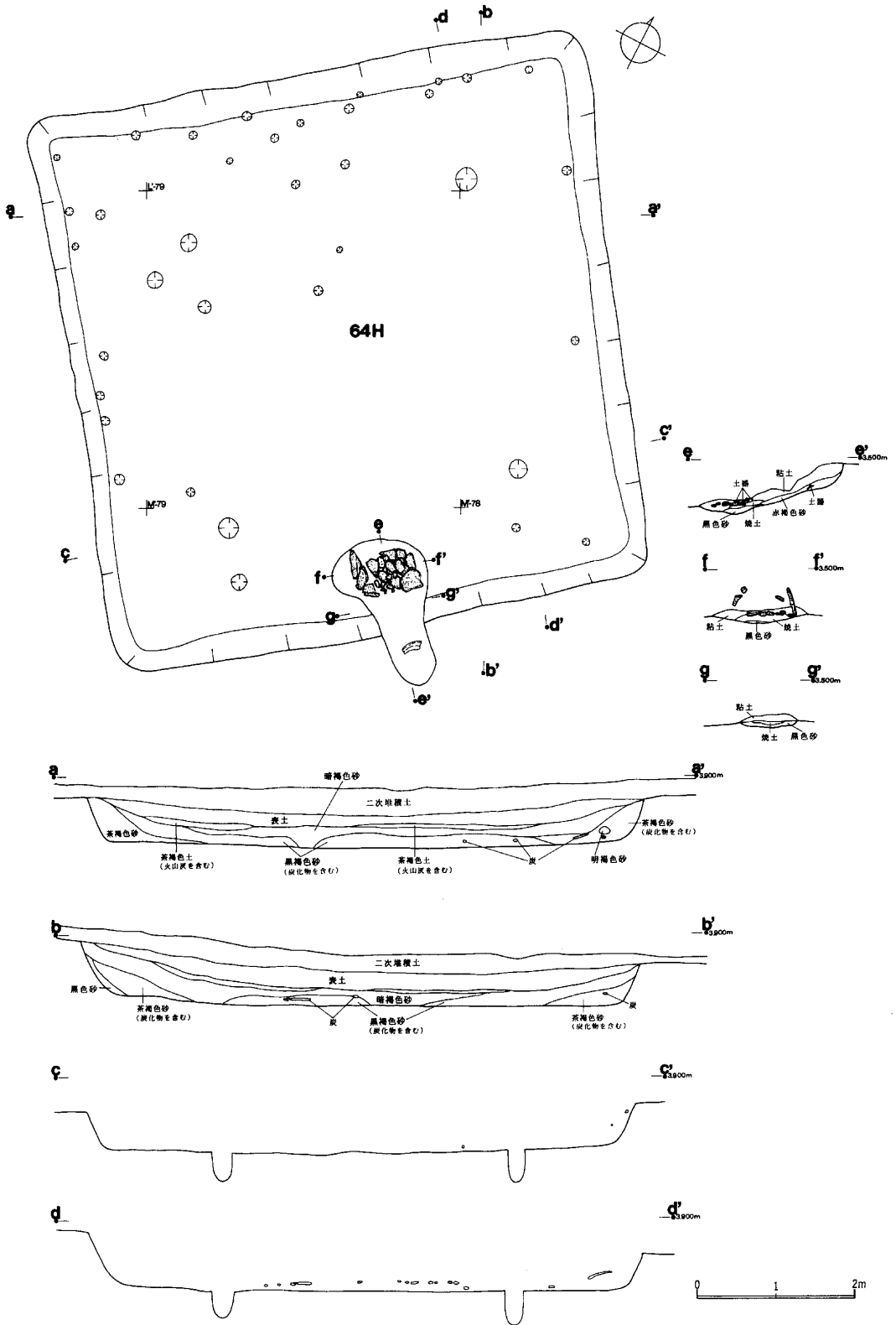
遺 物 (第107図, 第108図, 第109図, 図版17-2~5)

床面から第107図-1~6が出土している。1・2は高坏。3~5は紡錘車。3は2~3本1組の刻文を放射状に8組配している。直径7.3cm, 厚さ2cm, 重量115g。4は半分が出土したのみであるが, 綾杉文を放射状に施している。直径6.1cm, 厚さ2.3cm, 重量49g。5は1本の刻文を放射状に8本配している。直径約6.4cm, 厚さ1.8cm, 重量75g。6は擦文鉢形土器。底部に板目状圧痕をもつ。7はカマドから出土した擦文土器。8は煙道から出土, 口縁部に3段の隆帯を巡らし, その上に「手塩手法」により施文され, 胴部には針葉樹状文と横走る短刻線を交互に配す。

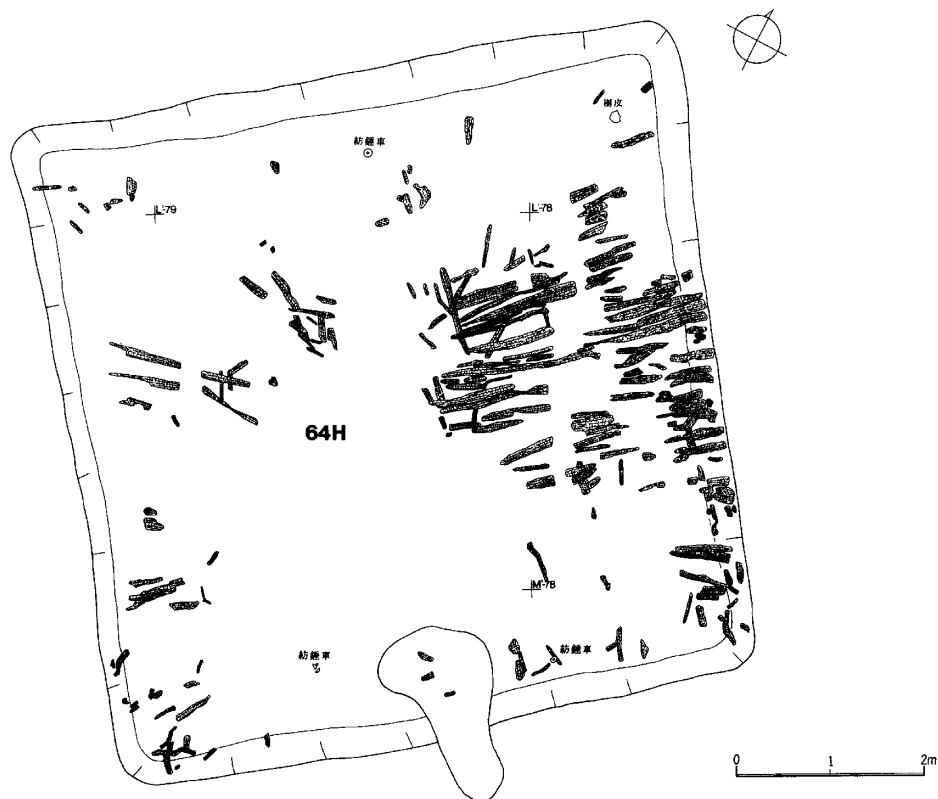
埋土からは9~11が高坏。12~17は鉢形の擦文土器。12は口縁部の隆帯に矢羽根状文を巡らし, 胴部は斜めの短刻文, 鋸歯状文, 矢羽根状文を配する。口径17cm, 器高19cm。

第108図-1・3はソーメン文のオホーツク土器。2は後北C₂・D式。4は宇津内II b式。5~7は続縄文初頭。8は緑ヶ岡式。9・11・14は縄文晩期中葉。10は幣舞式。12は縄文後期中葉。13は縄文晩期前葉の爪形文。15は堂林式。16はトコロ5類。

石器は第109図-1の石匙と3の凹石が床面から出土している。2はカマド出土の有茎石鏃。埋土からは4・5が無茎石鏃。6~18が有茎石鏃。19は石錐。20・21は両面加工ナイフ。22は断面が三角形を呈するナイフ。23~30は削器。31・32は搔器。33は磨製石斧。34はたたき石。



第105图 64号竖穴平面图

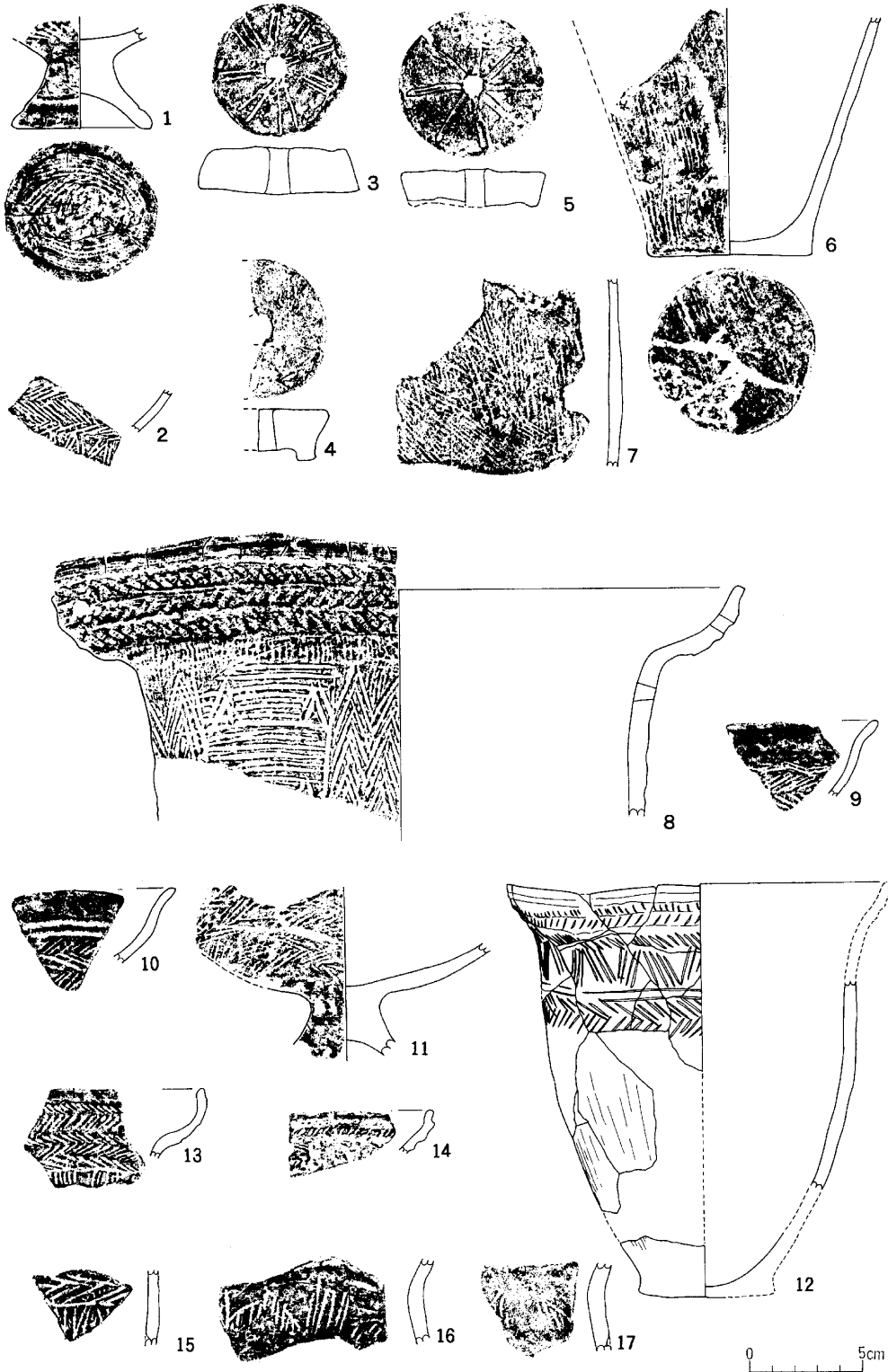


第106図 64号竖穴遺物出土分布図

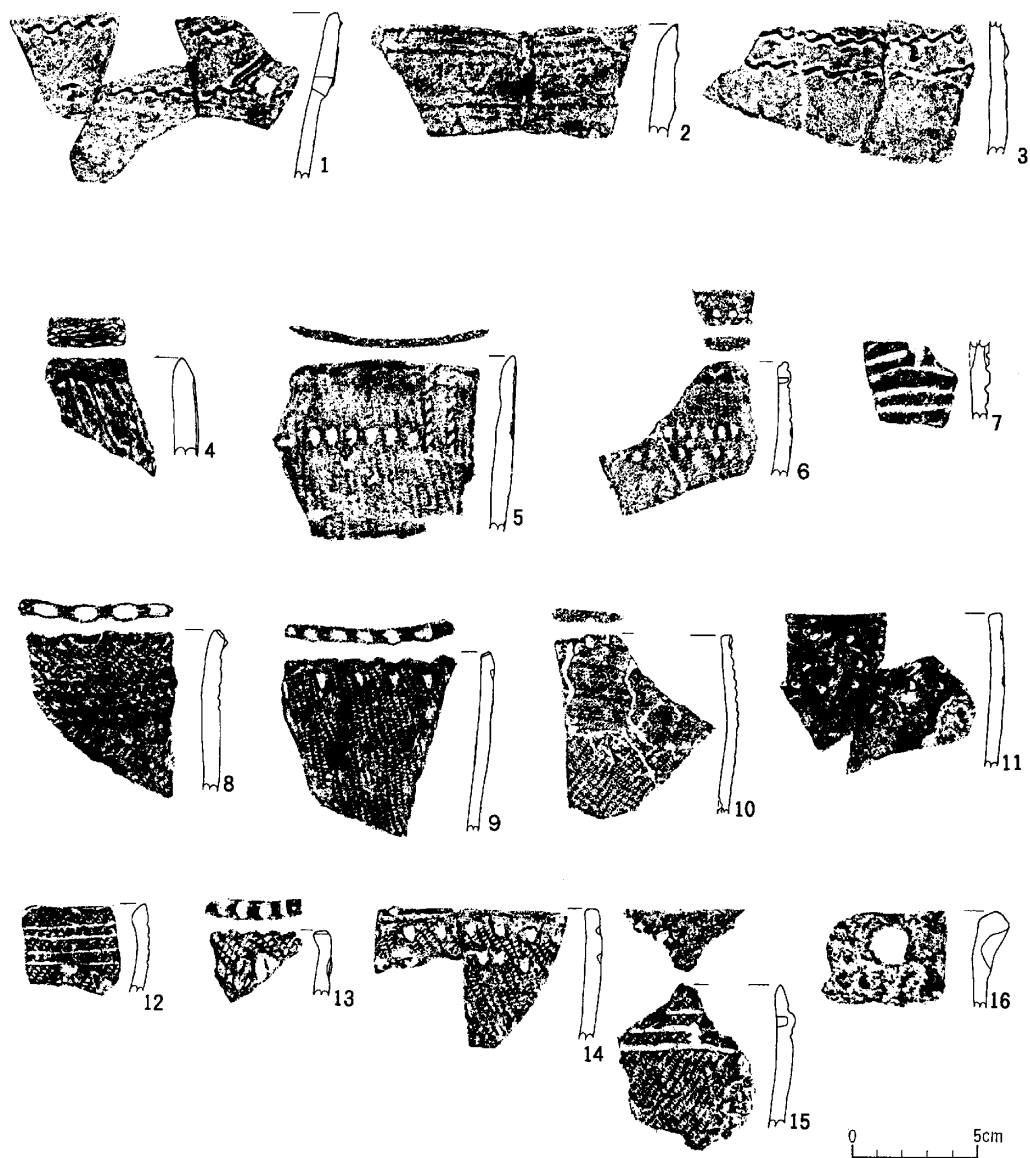
石材は1が頁岩製，3が砂岩製，19と22は硬質頁岩製，33は泥岩製，34は安山岩製，それ以外は黒曜石製。

小 括

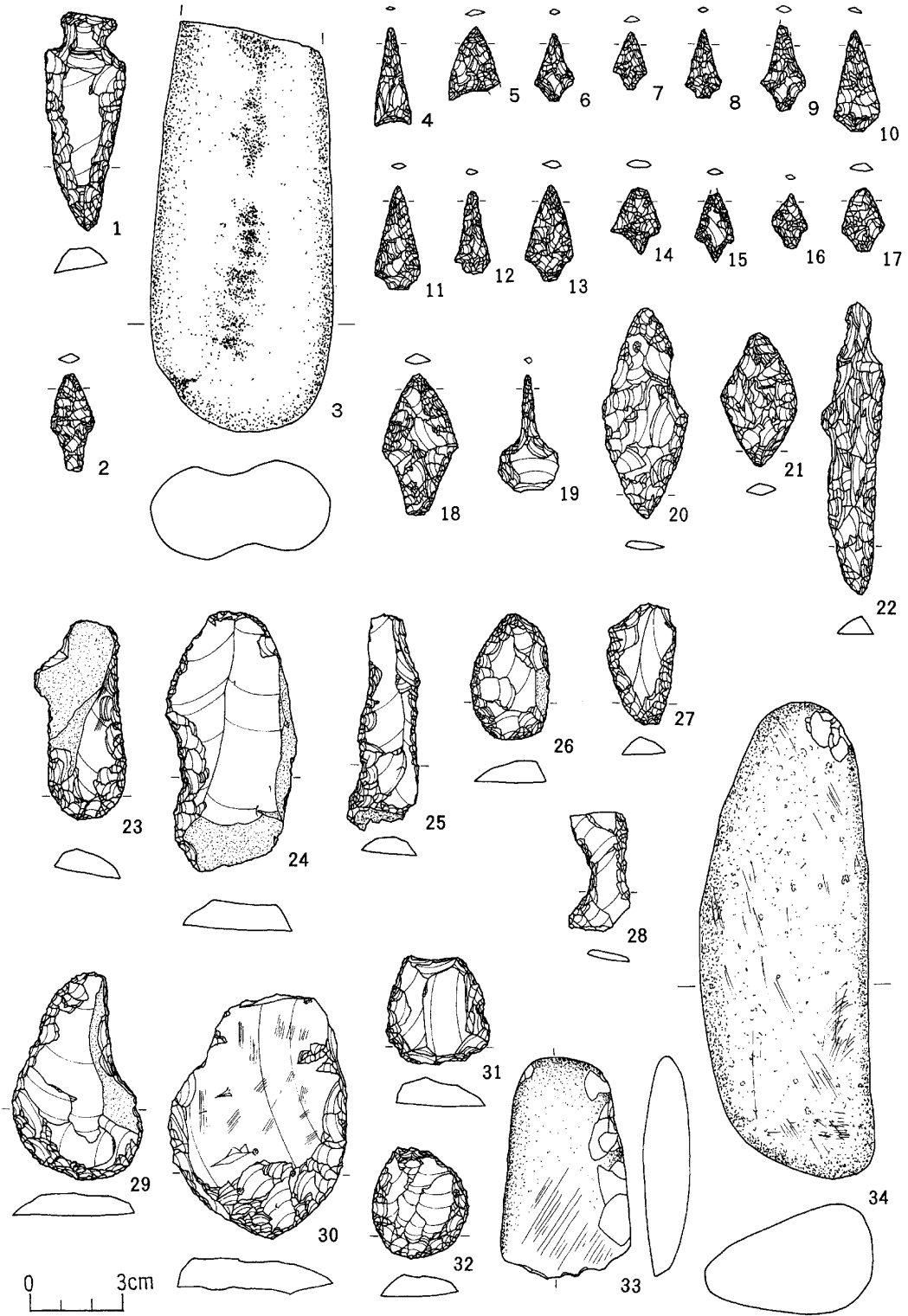
本竖穴は床面直上から炭化物が検出されていることから焼失住居と考えられる。時期は床面出土の土器から擦文期のもので，宇田川編年後期に比定される。 (佐々木 覚)



第107図 64号竖穴床面 (1~6)・カマド (7)・煙道 (8)・埴土 (9~17) 出土土器



第108図 64号竪穴埋土（1～16）出土土器



第109図 64号竪穴床面 (1・3)・カマド (2)・埋土 (4~34) 出土石器

65 号 竪 穴

遺 構 (第110図)

本竪穴はA76・77, B76, 77グリッドに位置する。規模は長軸約4.70m, 短軸約3.20mの長方形を呈する。壁高は確認面から約30cmである。各壁, 床面にはピットが構築されているため内部の炉跡は検出できなかった。支柱穴と思われる直径15cm, 深さ17cmの柱穴は北壁際にある。壁柱穴は東壁3本, 北壁2本, 西壁2本ある。直径6~10cm, 深さは5~8cmである。

遺 物 (第111図, 第112図-1~7)

第111図-1は床面出土。擬縄隆帯が垂下した宇津内II b式。2・3は同心円文のある宇津内II b式。4・5は同II b式。5には円形貼付文が見られる。6は5条の縄線文下に縄端圧痕文がある。縄線文上には直径1cm程度の竹管状施文具による刺突が縦位に2列あり, 横位の1列と連結する。底部は平底である。宇津内II a式より古手に属するかもしれない。7は突瘤文のある宇津内II a式。8も突瘤文をもつが幅広の無文帯が特徴的で下位の縦位の縄文と区切る様に刺突が連続する。9は口縁部が緩く外反し, 口唇部に縄が押捺される。2列の刺突列と楕円形状の沈線がある。8・9は宇津内II a式よりも古手に位置付けられよう。

石器は第112図-1~7がある。1は無茎石鏃。2は両面加工ナイフ。3~5は削器。6・7は円形搔器。3の玄武岩製の他は黒曜石製。

小 括

床面及び埋土からは縄文文字津内II b式が出土しており, この時期の竪穴である可能性が高い。(武田 修)

65 a 号 竪 穴

遺 構 (第110図, 図版18-1)

本竪穴はB77グリッドに位置する。掘り込みは浅く確認面から約34cmで床面になる。北東壁側が検出できなかったため全体の形態は不明であるが, 検出できた南側や中央部の石囲み炉から判断すると短軸約3mほどの楕円形の竪穴と思われる。壁柱穴は南壁際に3本ある。直径約8~14cm, 深さ約5~14cmである。

石囲み炉は細長い角礫を使用しているが内部は焼土化していない。

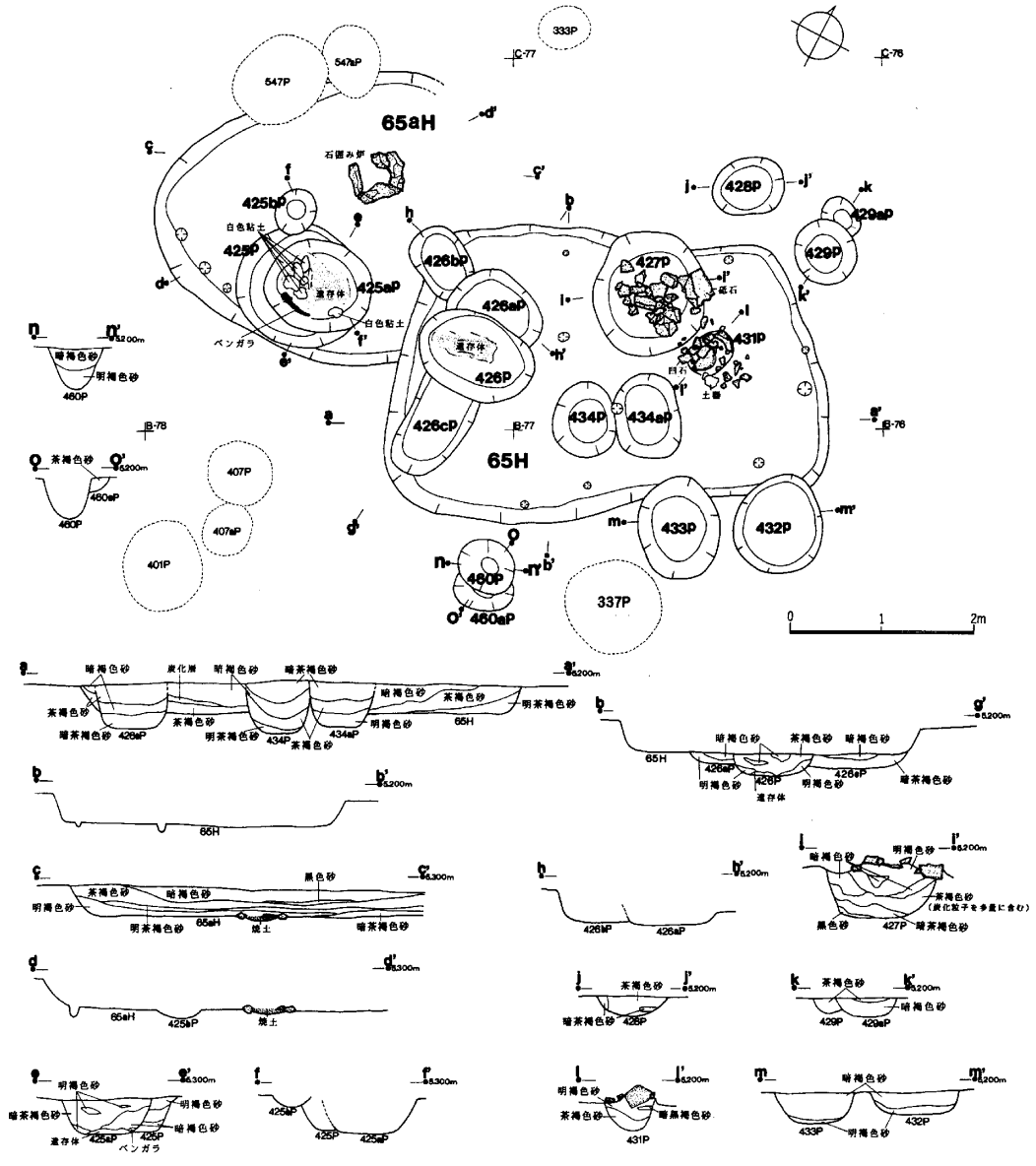
遺 物 (第114図-1~4, 第112図-8・9)

第114図-1は後北C₂・D式。2は宇津内II b式。3は口径5.5cmの縄文期のミニチュア土器。4は宇津内II a式。

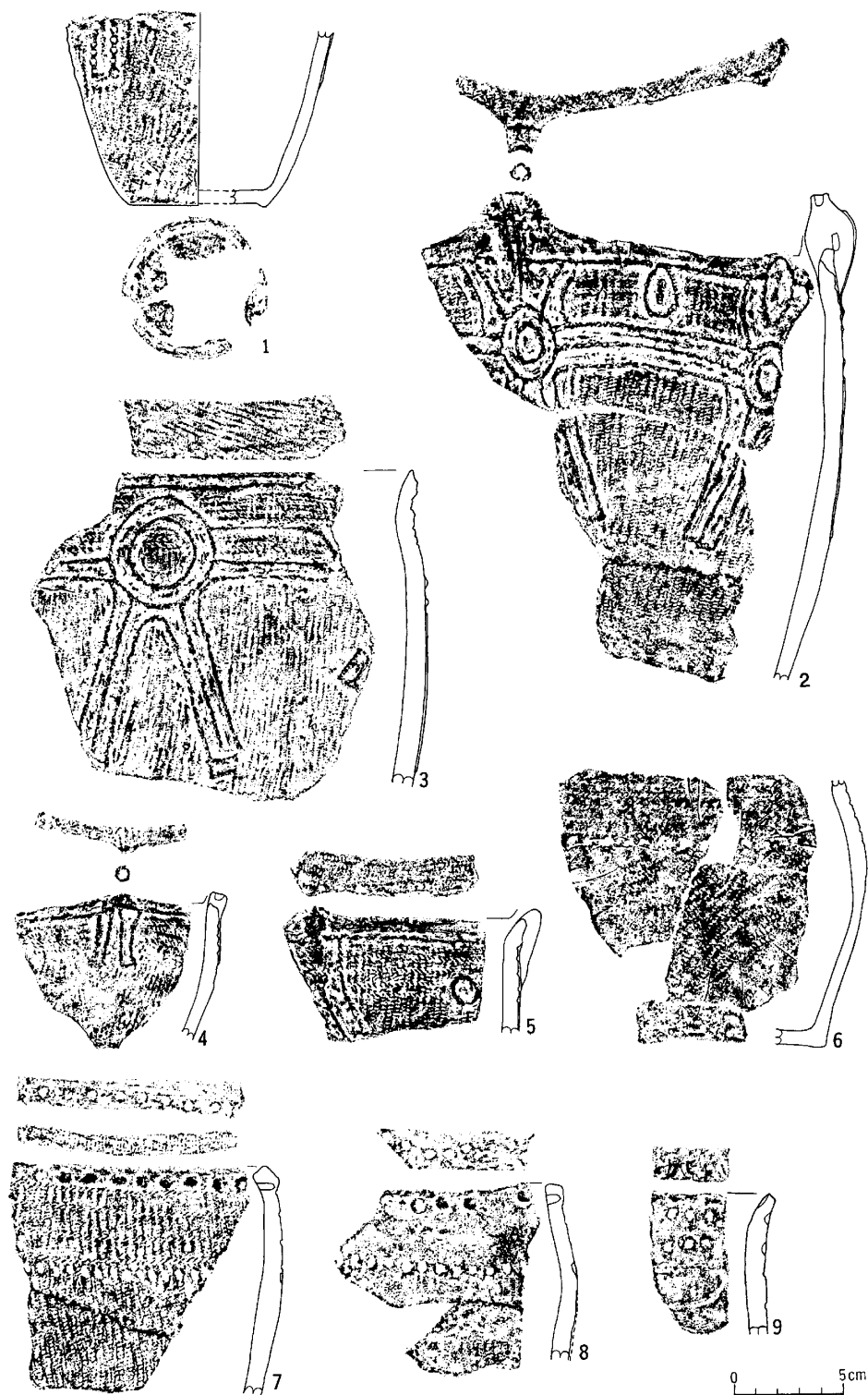
第112図-8は無茎石鏃。9の刃部は欠失した泥岩製の磨製石斧。

小 括

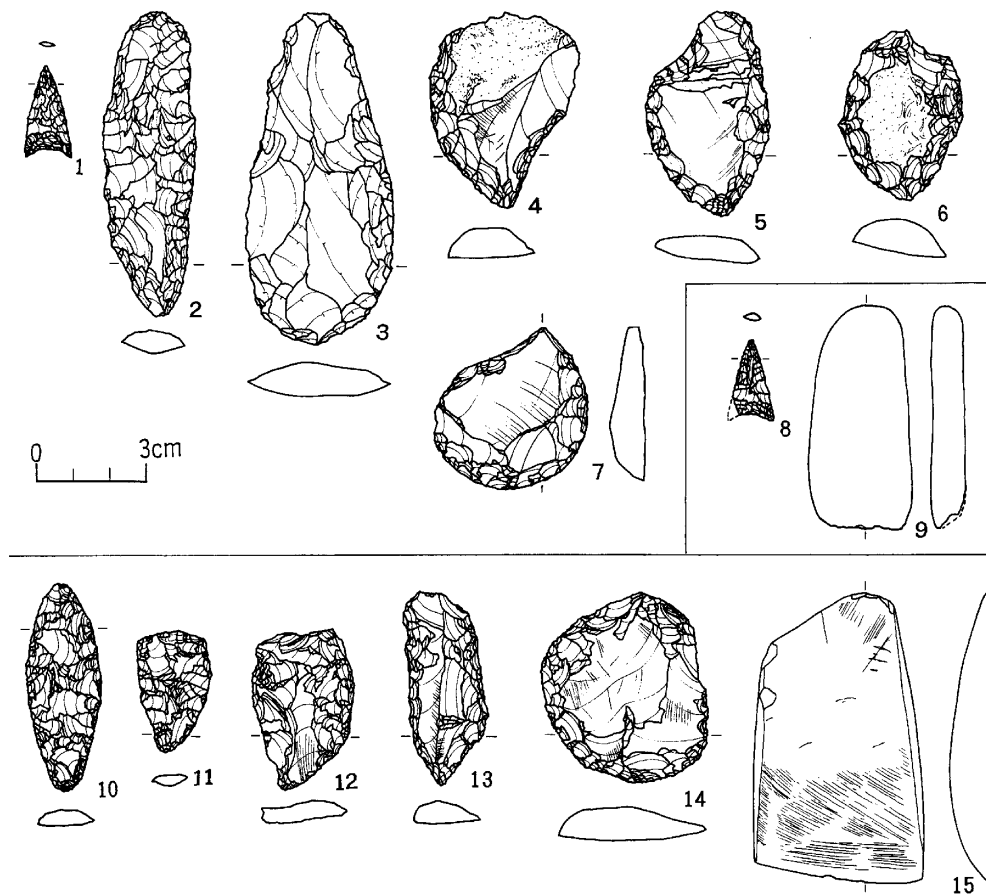
続縄文字津内系の竖穴と思われる65号と重複する。65号との切り合い関係から65号より古手の時期と思われる。
(武田 修)



第110図 65号竖穴, 65a号竖穴, ピット425, 425a, 425b, 426, 426a, 426b, 426c, 427, 428, 429, 429a, 431, 432, 433, 434, 434a, 460, 460a平面図



第111圖 65号竪穴床面(1)・埋土(2~9)出土土器



第112図 65号竪穴埋土 (1～7), 65a号竪穴埋土 (8・9), 66号竪穴埋土 (10～14)・カマド (15) 出土石器

66 号 竪 穴

遺 構 (第113図, 図版18-2)

本竪穴はD77・78, E77・78グリッドに位置する。攪乱溝により床面, 壁の一部は破壊を受けており遺存はあまり良くない。床面近くの黒褐色土には白色の樽前a火山灰がブロック状に混入する。規模は直径約5.5mの方形を呈するが, 北壁側は緩い弧状を呈する。壁高は丸みを持った立ち上がりをもち確認面から約63cmを測る。東壁中央部のカマドは黄褐色粘土を用い, 袖部に使用したと考えられる角礫は燃焼部に倒れ込んでいる。煙道は短く急斜である。煙道の断面は「U」字状を呈し黄褐色粘土で固めている。カマドの南側には幅約50cm, 長さ約45cmの張出し部をもつ。出入口かもしれない。4本の支柱穴のうち1本は攪乱溝により検出できなかったものの, 残る3本は検出できた。直径約10～13cm, 深さ25～33cmである。補助柱穴は各支柱穴

を結ぶライン状に数本見られ、壁柱穴の配置は不規則である。炉跡は竪穴の中央部に位置する。赤化は著しい。炭化材は僅かに西壁側とカマドの前面に認められ、焼失住居と思われる。

遺物（第114図-5~14、第112図-10~15、図版18-3・4）

第114図-5・6は床面出土。5・7は擦文土器。5は口径27cm、器高30cmの無文大型土器。器面の前面は篋により調整され、口縁下部に一条の細い沈線文が施される。底部には極めて細い櫛状施文具による擦痕が観察される。6は内側からの突瘤文が施された宇津内II a式。口径6.5cm、器高13cmの小型土器。7は高杯脚部。8は後北C₂・D式。9は宇津内II b式。10は撚糸文を地文に縄線文が施され、下部に円形文が加えられる。11・12は突瘤文の下部に縄線文が施される。宇津内II a式。13は1条の縄線文下に馬蹄形状の刺突があり、その下部には僅かながら細い沈線が見られる。続縄文初頭であろう。14は曲線的な沈線上に刺突文が数箇所見られる。縄文後期であろう。

石器は第112図-10~15が出土した。10は両面加工ナイフ。11~14は削器。15は片刃磨製石斧。10は緑色泥岩製であり、他は黒曜石製。

小括

本竪穴は擦文期のものである。床面出土の土器は無文であり、詳細な時期を決定することは難しいが、底部からラッパ状に開く器形と「く」字状に外反する口縁部から擦文後期と思われる。
(武田 修)

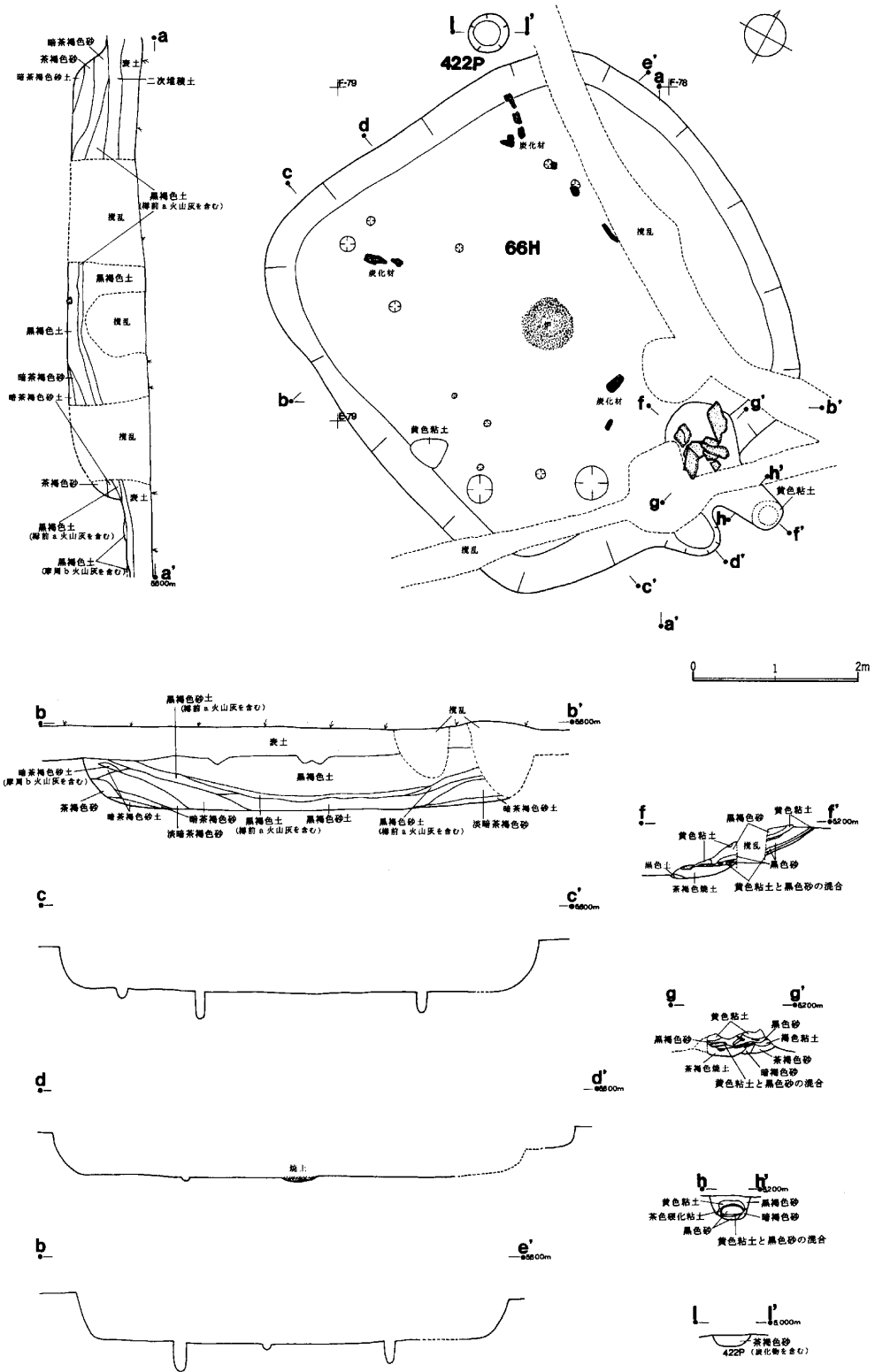
67号竪穴

遺構（第115図、図版19-1）

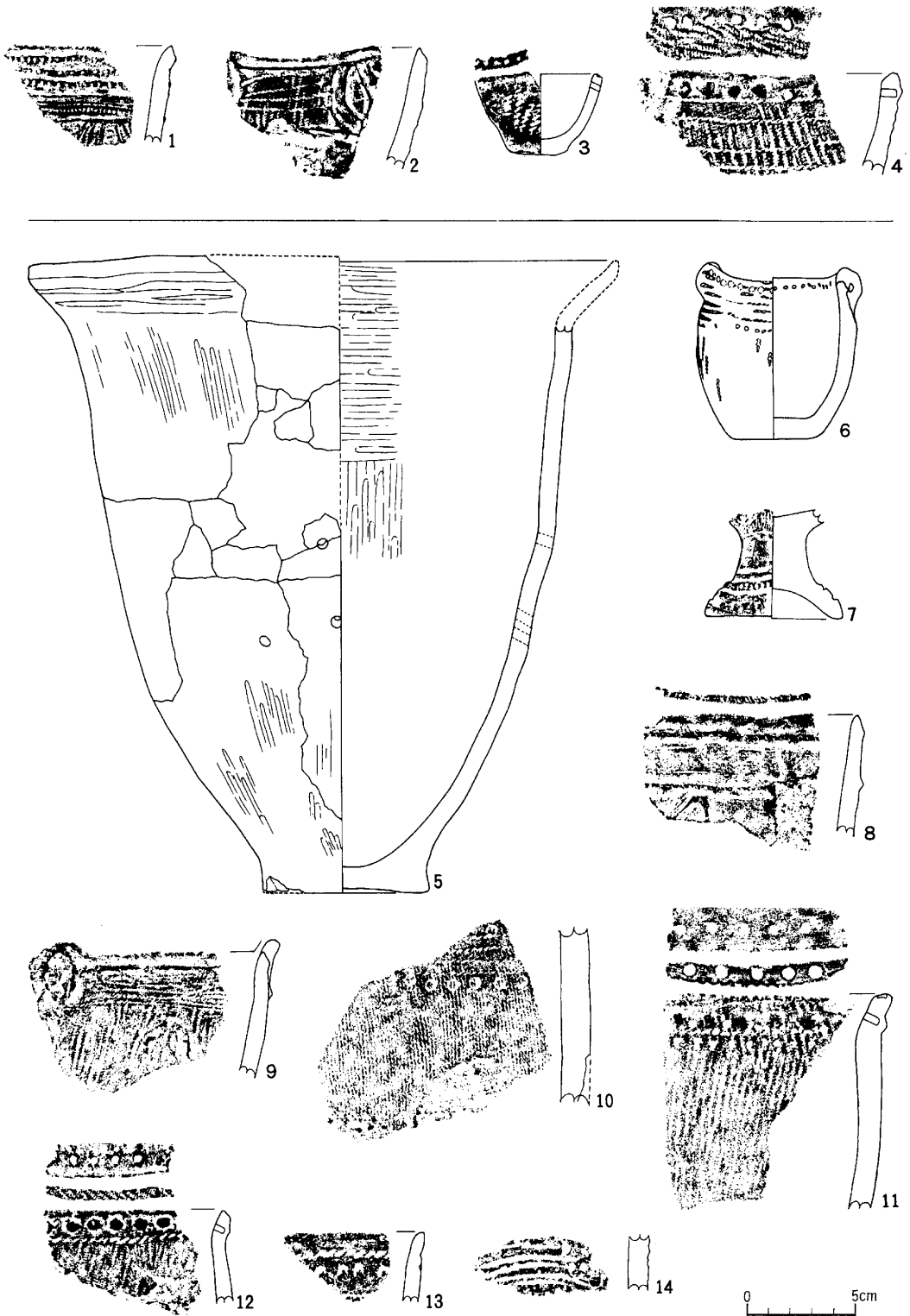
本竪穴は64号竪穴の北西0.70mにあり、直径5mのほぼ円形を呈し、西壁の一部から床面にかけて攪乱を受けている。竪穴は摩周b火山灰に覆われており、その火山灰の上面3箇所から第116図-8、第117図-1・2の擦文土器が出土している。竪穴の北東壁には舌状部があり、長さは1m、基部の幅1.20mを測る。壁高は確認面から北側で70cm、南側で50cmあり、斜めに立ち上がる。柱穴は直径8~12cm、深さ7~11cmのものが6本検出された。竪穴中央に炉跡があり、炉の焼土の中から多くの骨片が検出され、クルミの炭化物も見られた。炉跡の北側から礫が6点出土しているが、これは炉に使用されていたものとも考えられる。また、床面4箇所から黒曜石のフレーク・チップの集積が認められ、ピットも5箇所確認されている。ピットの埋土はピット1・ピット2・ピット5が暗褐色砂1層、ピット3が炭化粒を含んだ黒褐色砂1層、ピット4が黒褐色砂1層である。ピット3からは第116図-5・6の土器が出土している。

遺物（第116図、第117図、第118図、第121図-1~5、第119図）

床面から第116図-1~4が出土している。1は口径9cm、器高10cmで地文の縄文のみである。続縄文初頭と考えられる。2も口縁部が外反していることから宇津内II a式より多少古く、



第113図 66号竖穴、ピット422平面図



第114図 65a号竖穴埋土(1~4), 66号竖穴床面直上(5・6)・埋土(7~14)出土土器

続縄文初頭であろう。3・4は宇津内式の底部。5・6は竪穴床面のピットの埋土から出土したもので続縄文初頭のもの。

埋土からの出土は8～10が擦文土器。8は火山灰の上面から出土した土器で、口縁部に矢羽根状の刻線を配し、その下の胴部には斜めの刻線を巡らし、さらにその下には鋸歯状文を施している。口径は16cmであるが、器高は底部が失われているため不明である。

第117図－1・2は火山灰の上面から出土した擦文土器。3～5は後北C₂・D式。6・7は宇津内II b式。8は口径6.5cm、器高7cmの小型土器。口唇部に1対の小突起をもち、口縁部に突瘤を施す。胴部には刺突文列が施されている。続縄文初頭と考えられる。9は宇津内II a式。10は突瘤をもち沈線を施していることから宇津内式より多少古く興津式より新しいものではないかと思われる。

第118図－1～3は宇津内II a式。4・5は続縄文初頭。6は宇津内式の底部。7～9は続縄文初頭。10・11は幣舞式。12～14は縄文晩期中葉。15～17は同前葉。16・17は爪形文。

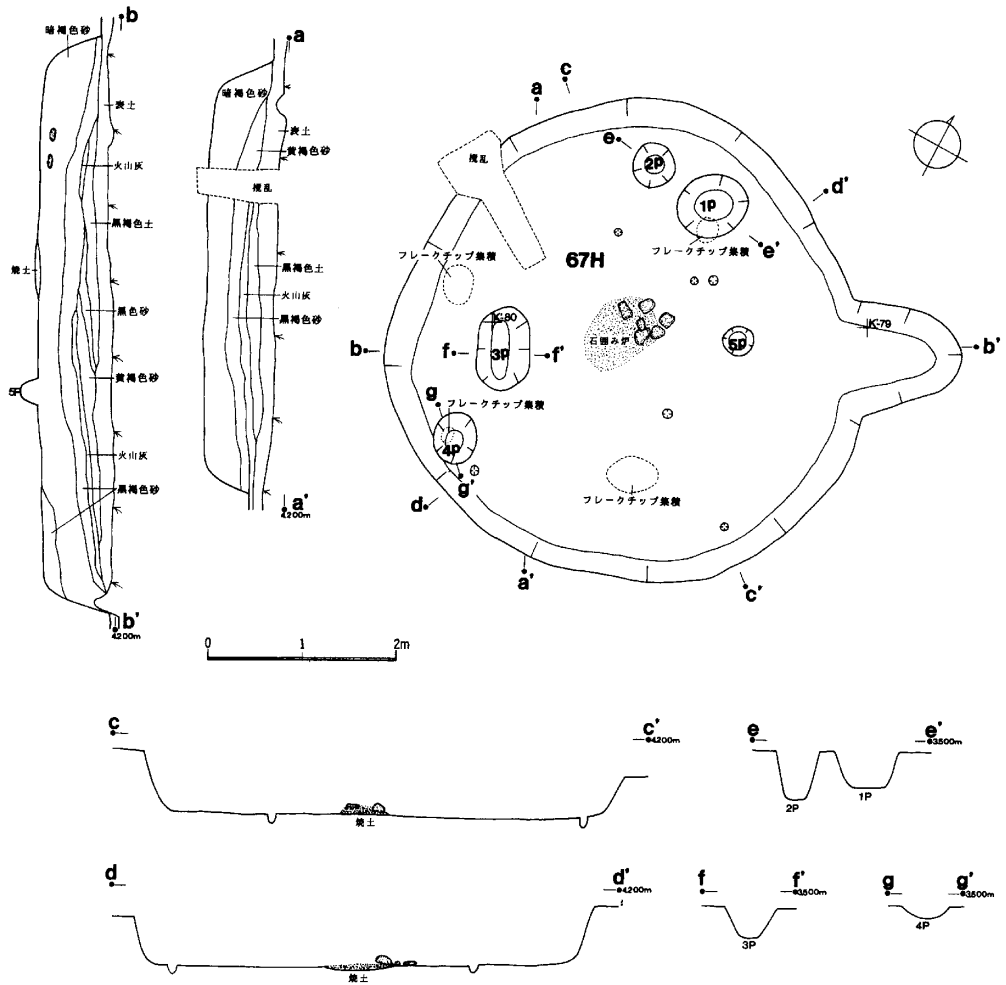
第121図－1・2は内側に斜め方向から突瘤文をもつ縄文晩期前葉のもの。3～5は胎土に繊維を含むトコロ六類。3・4は切り出し状の口縁部と押引文の口唇部をもち、円形刺突文を施す。

石器は第119図－1～7が床面から出土している。1は無茎石鏃。2～5は両面加工ナイフ。6・7は削器。埋土は8・9が無茎石鏃。10～15が有茎石鏃。16・17はナイフ。18～24は削器。25～30は搔器。23が玄武岩製、他は黒曜石製。

小 括

本竪穴は床面や床面のピットから続縄文初頭の土器が出土していることから、舌状部をもつ続縄文初頭の竪穴と考えられる。

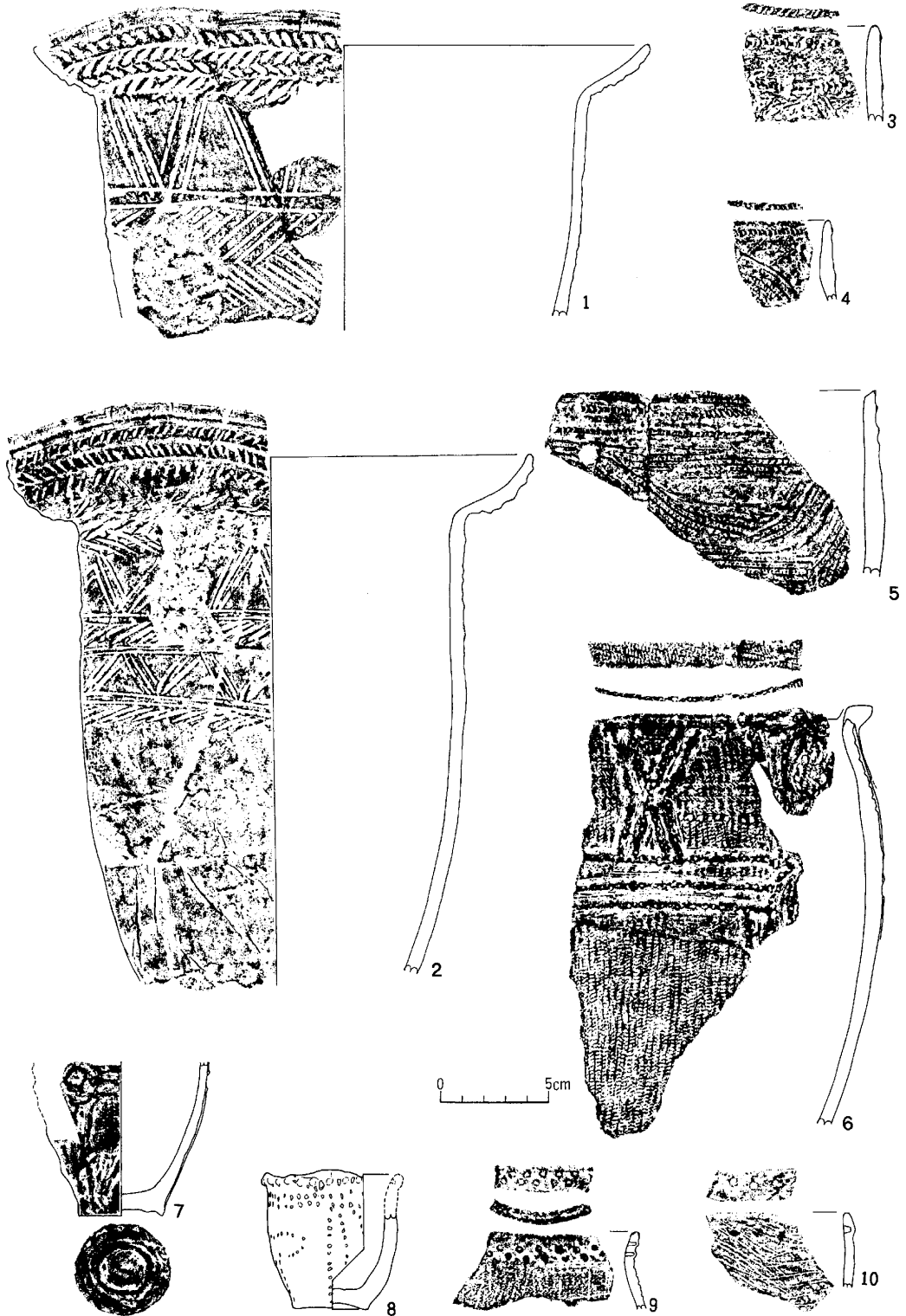
(佐々木 覚)



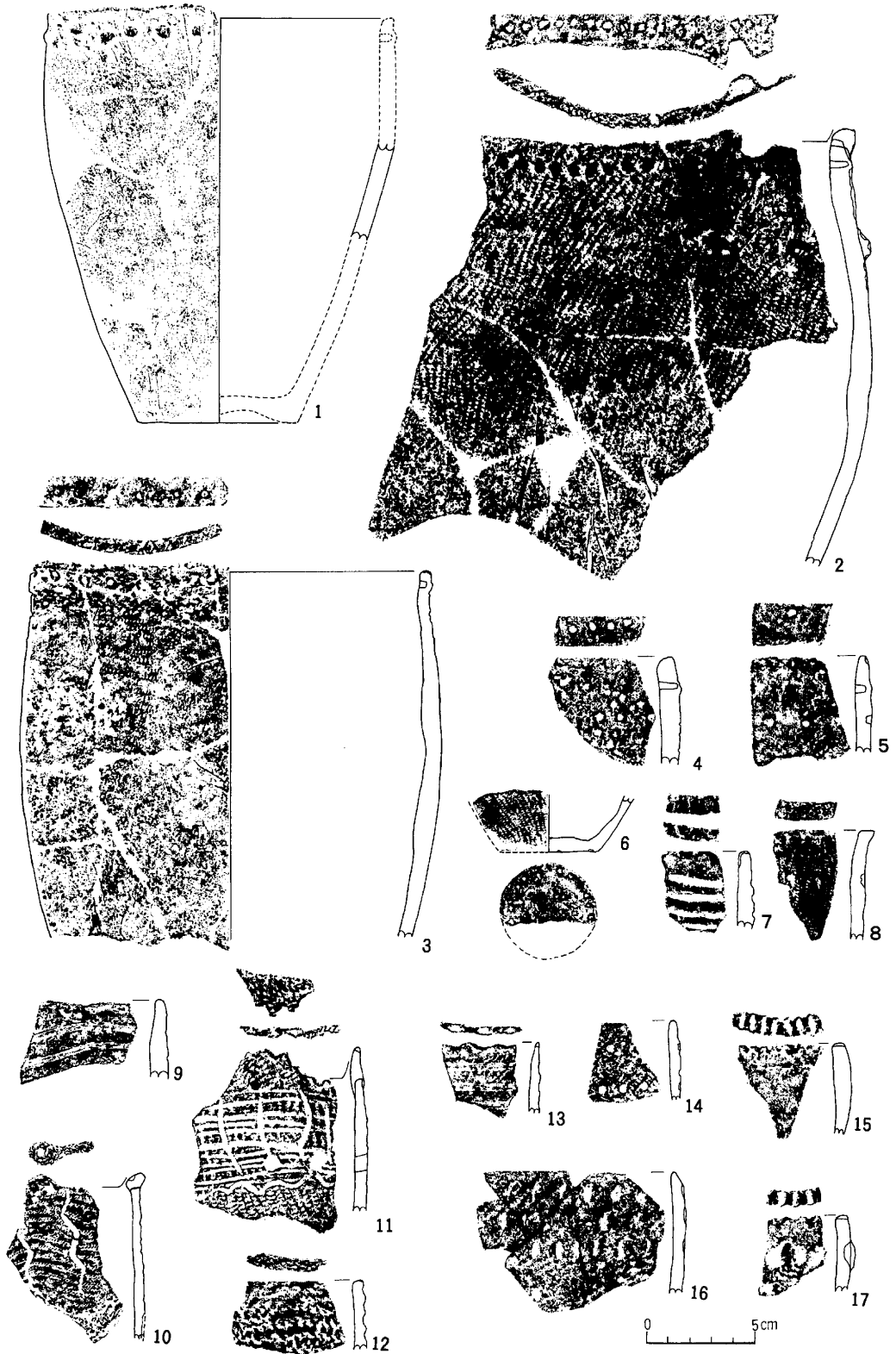
第115図 67号竖穴, 内ピット 1, 2, 3, 4, 5 平面図



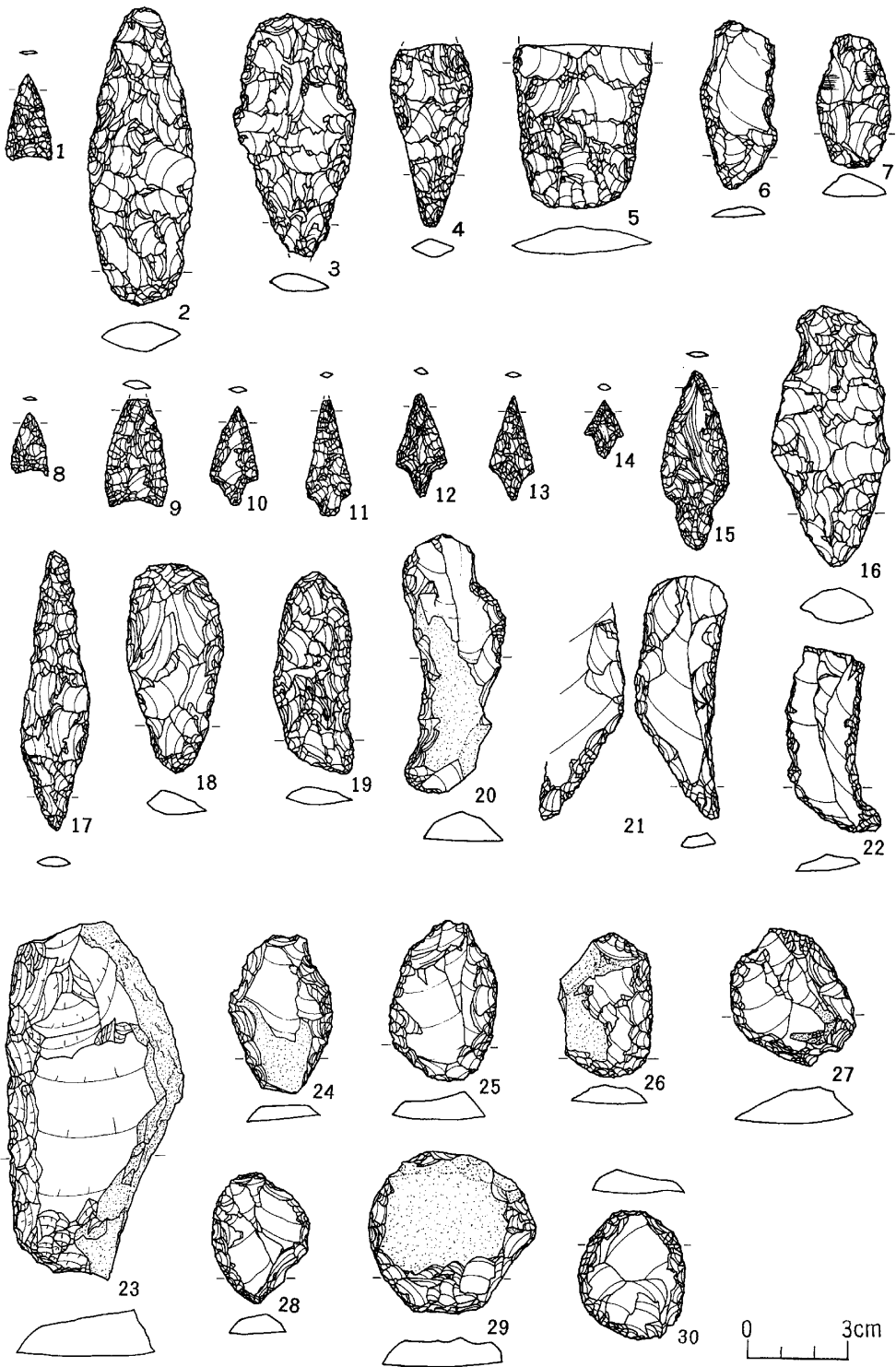
第116図 67号竖穴床面(1~4)・内ピット3(5・6)・埋土(7~10)出土土器



第117图 67号竖穴埋土(1~10)出土土器



第118图 67号竖穴埋土(1~17)出土土器



第119図 67号竖穴床面(1~7)・埋土(8~30)出土石器

68 号 竪 穴

遺 構 (第120図, 図版19-2)

本竪穴はJ'80・81グリッドに位置し、規模は長軸5.30m、短軸4.40mの六角形を呈する。埋土の一部は火山灰が覆っており、その下の黒色砂層、茶褐色砂層、黒褐色砂層中からは炭化物が検出されている。その間の暗褐色砂層からは第121図-7・8の土器が出土している。壁高は確認面から約70cmを測り、斜めに立ち上がる。竪穴中央と北東壁際に焼土が認められ、西壁際にも7点の礫で囲まれた焼土が認められた。中央の焼土には多少かぶさる様に黒曜石のフレーク・チップの集積が見られた。柱穴は壁柱穴が直径10~16cm、深さ8~17cmのものが11本ある。竪穴の北東隅と東壁際にピットがある。北東隅のピットは床面から28cmと深い、東壁際のピットは8cmと浅い。ピットの埋土はいずれも褐色砂1層である。

遺 物 (第121図-6~8, 第122図, 第123図, 図版19-3~5)

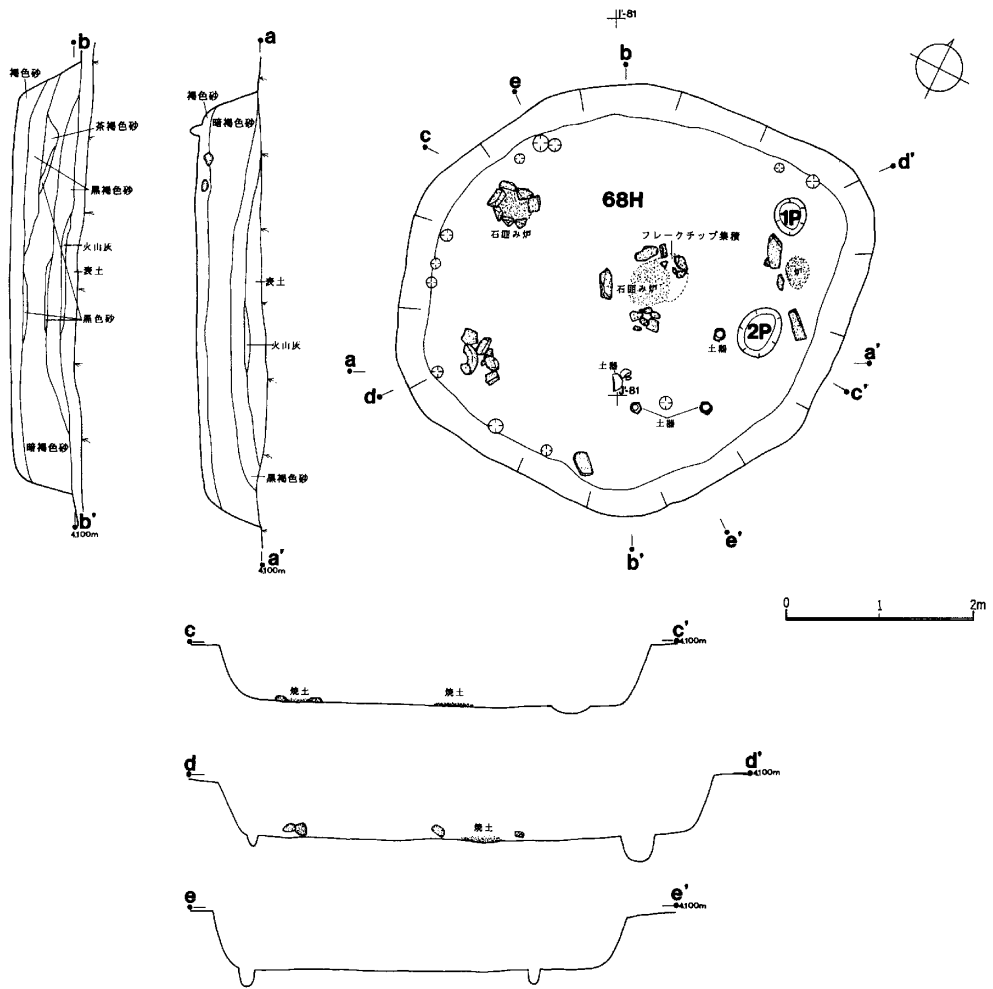
床面から第121図-6が出土している。口径約13cm、器高13cmで口縁部に縄端圧痕文を1列巡らし、口唇部に1対の小突起をもつ。続縄文初頭と考えられる。7は口縁部に突瘤をもち、縄線文と縄端圧痕文を巡らす。口唇部直下には2個一対となる大小の貼瘤をもつ。貼瘤の周りには縄端圧痕文を施した隆帯を巡らせ、小さな貼瘤からは隆帯を垂下させている。宇津内II a式と思われる。口径24cm、器高35cm。8は宇津内II b式で口唇部に二対の小突起をもち、一対の小突起の下には同心円文を施す。小突起と小突起の間にも同心円文を配し、隆帯で連結している。同心円文からは垂下した隆帯も見られる。口径11cm、器高14cm。第122図-1~4は宇津内II a式。5は北大式。6・7は続縄文初頭。8は幣舞式。9・10は縄文晩期中葉。11は同前葉の爪形文。12は内側から斜めの突瘤をもつ同前葉の土器。13は胎土に繊維を含むトコロ六類。

石器は全て埋土出土。第123図-1~4は無茎石鏃。8~13は両面加工ナイフ。14~16は削器。17・18は搔器。19は石錐。11は頁岩製、それ以外は黒曜石製。

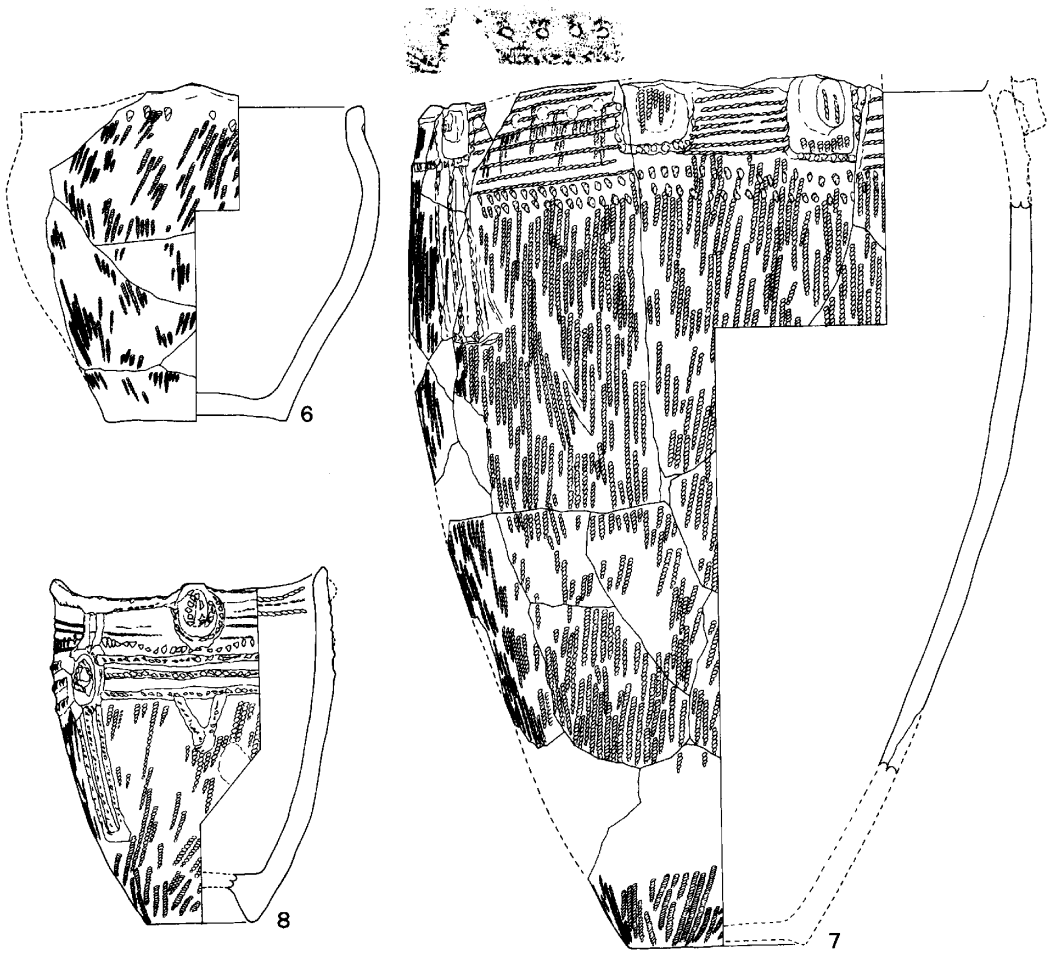
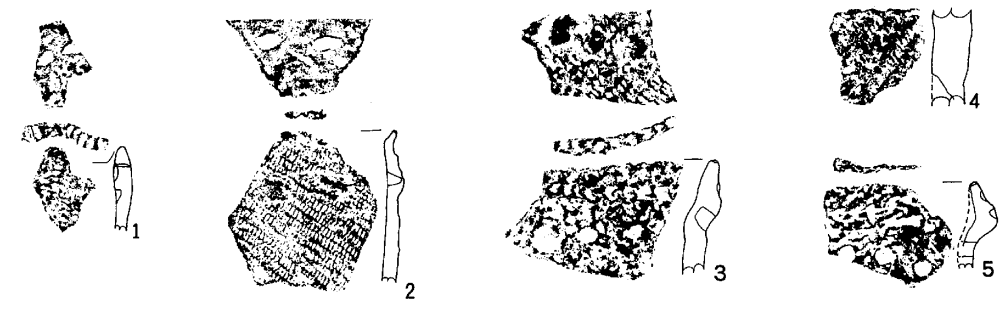
小 括

本竪穴は床面から続縄文初頭の土器が出土していることからこの時期のものと考えられる。

(佐々木 覚)



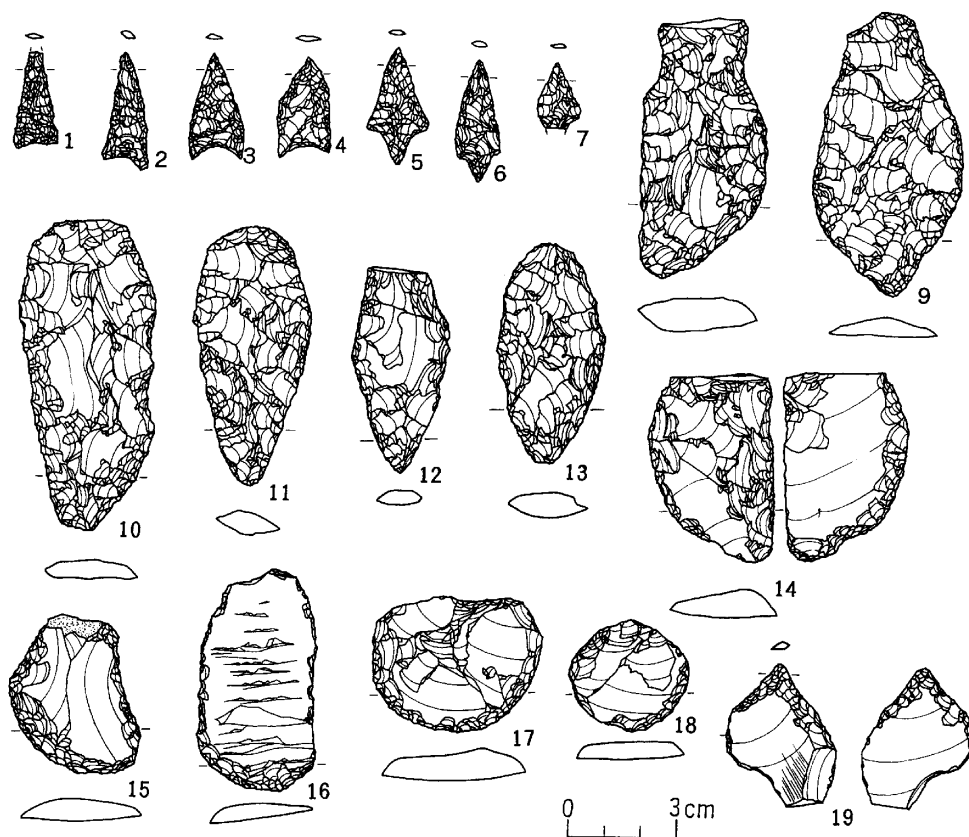
第120図 68号竖穴，内ピット1，2平面図



第121图 67号竖穴埋土(1~5), 68号竖穴床面(6)·埋土(7·8)出土土器



第122図 68号竖穴埋土(1~13)出土土器



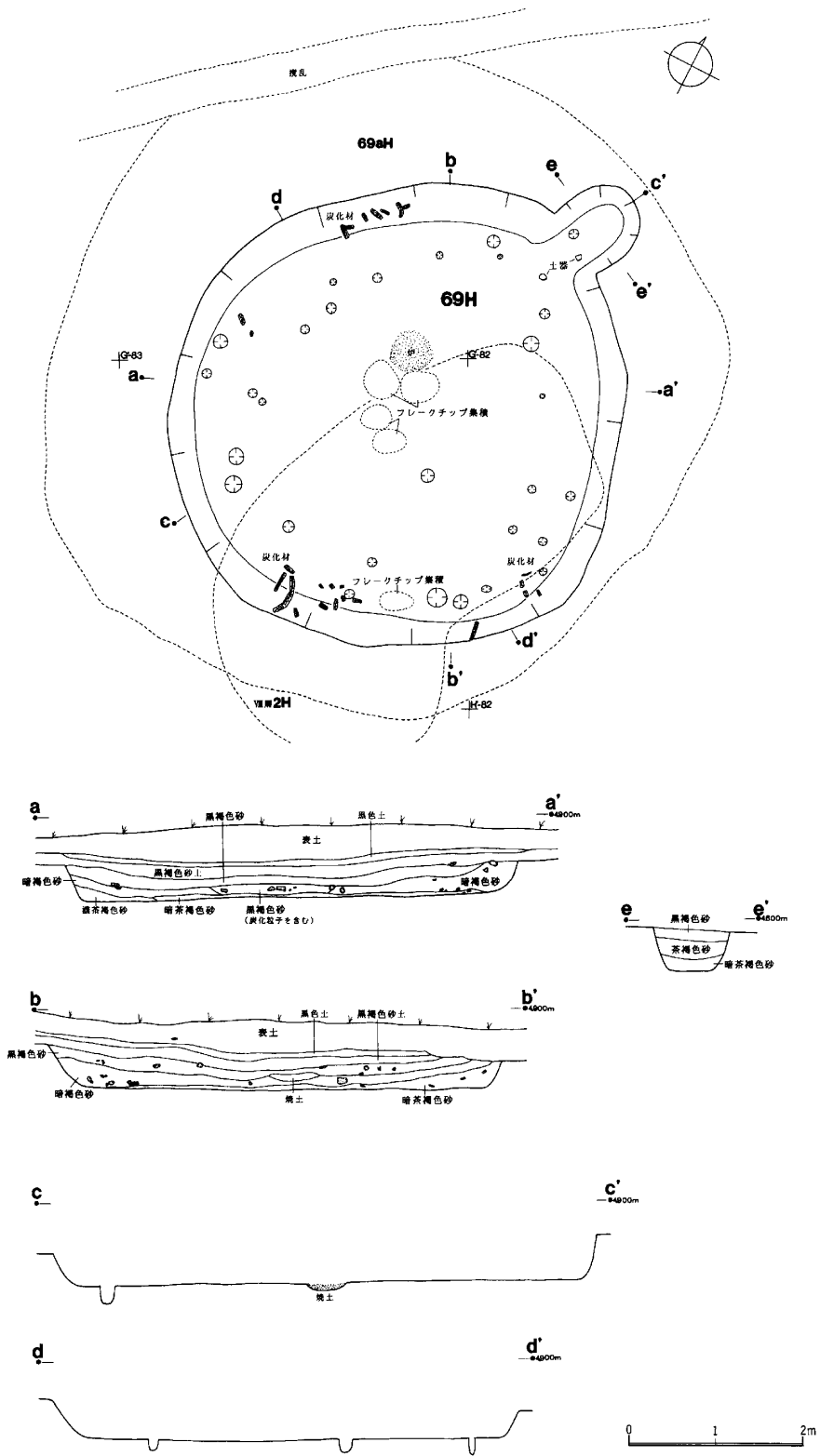
第123図 68号竪穴埋土（1～19）出土石器

69号竪穴

遺 構（第124図，図版20-1）

本竪穴はG'81・82，H'81・82グリッドに位置する。規模は長軸約5.20mの不整形を呈する。表土層下部の黒色には樽前a火山灰が粒状に混入する。埋土内を掘り進める段階では、セクションラインb・b'に見られる焼土が床面よりやや浮いて認められた。生活面の可能性もあるため精査したが、特に柱穴等の痕跡は認められず、廃棄された焼土と考えられた。床面はほぼ平坦であり、中央部からやや北側に寄った位置に直径約54cmの地床炉がある。壁は緩い傾斜をもって立ち上がり、高さは確認面から約48cmである。幅約90cm，長さ約1.20mの張出し部は北壁に設けられる。張出し部の壁は垂直の立ち上がりである。炭化材は西壁，南壁，東壁で検出した。幅約4～5cm程度の細い材であり，壁上部から出土する。

主柱穴は北壁側2本，南壁側に2本ある。直径約20cm，深さ約12～17cm。壁柱穴は西壁と東



第124図 69号竪穴平面図

壁のものがほぼ等間隔に配置される。直径約8～15cm、深さ約5～17cm。

フレーク・チップの集積は炉の南側に4箇所、東南壁に1箇所ある。いずれも黒曜石を主体とする。

遺物（第125図、第126図、第127図、第128図、図版20-2～6）

第125図-1は口径約30cm、器高約32cmの後北C₂・D式の大型鉢形土器。4個の小波状口縁から伸びる縦位の隆帯と胴部で横走する2本の隆帯により区画され、帯縄文と列点文を菱形文、円弧文としている。胴下部は火熱を受けて赤変し、口縁部には煤が付着する。2は底部に撚糸文が密に施される。宇津内系の底部であろう。3は口縁部に外側から突瘤文が加わり擬縄隆帯が縦走する北大I式。

第126図-1は北大I式の片口土器。口縁部に外側からの突瘤文と櫛歯状工具による横位、胴部は鋸歯状の刻線が描かれる。片口部の反対側は剥落するものの小突起があると思われる。2は長軸口径約13cm、短軸口径約11cmの楕円状の口縁部である。器高は8.5cm。長軸面に小突起をもち、2個の小孔と口縁部には刻みがある。器面は無文。時期は後北C₂・D式。3～9も後北C₂・D式。

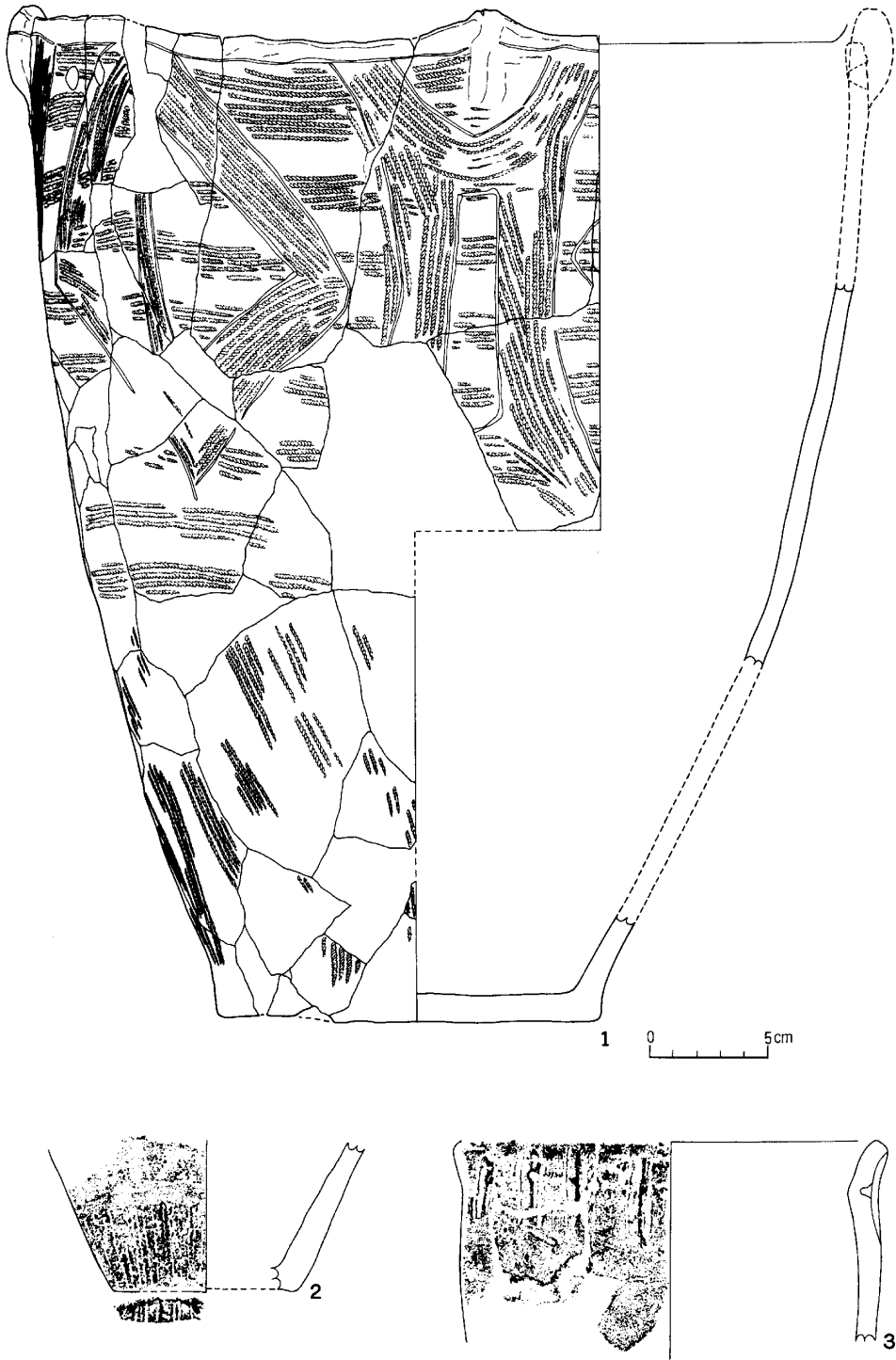
第127図-1は口径約27cm、器高約32.5cmの鉢型土器。後北C₂・D式。山形突起から垂下する3本の擬縄隆起帯が胴下部の横位の擬縄隆帯と連結する。文様は弧線状の縞縄文と列点文で構成される。2は口径約17cm、器高約19cmの後北C₁式。横位・縦位の微隆起線を基準に三角文、菱形文を割付けたもので、底部は縦位の縄文が施される。3も後北C₁式。4は宇津内II a式。5・6は縄文晩期幣舞式。7は縄文、8は沈線文、9は縄端圧痕文が施される。晩期中葉であろう。

石器は第128図-1～11は床面出土。1～6は無茎石鏃。7は石錐。8～11は削器。12～26は無茎石鏃。27～29は菱形状石鏃。30・31は有茎石鏃。32～36はオホーツク文化期に特徴的な柳葉形石鏃。37は基部が欠失する。石槍であろう。38～41は両面加工ナイフ。42はつまみ付きナイフ。43～46は削器。47～50は搔器。51～54は円形搔器。48～50は原石面を残す。55は異形石器。29はメノウ製。41は玄武岩製。他は黒曜石製。

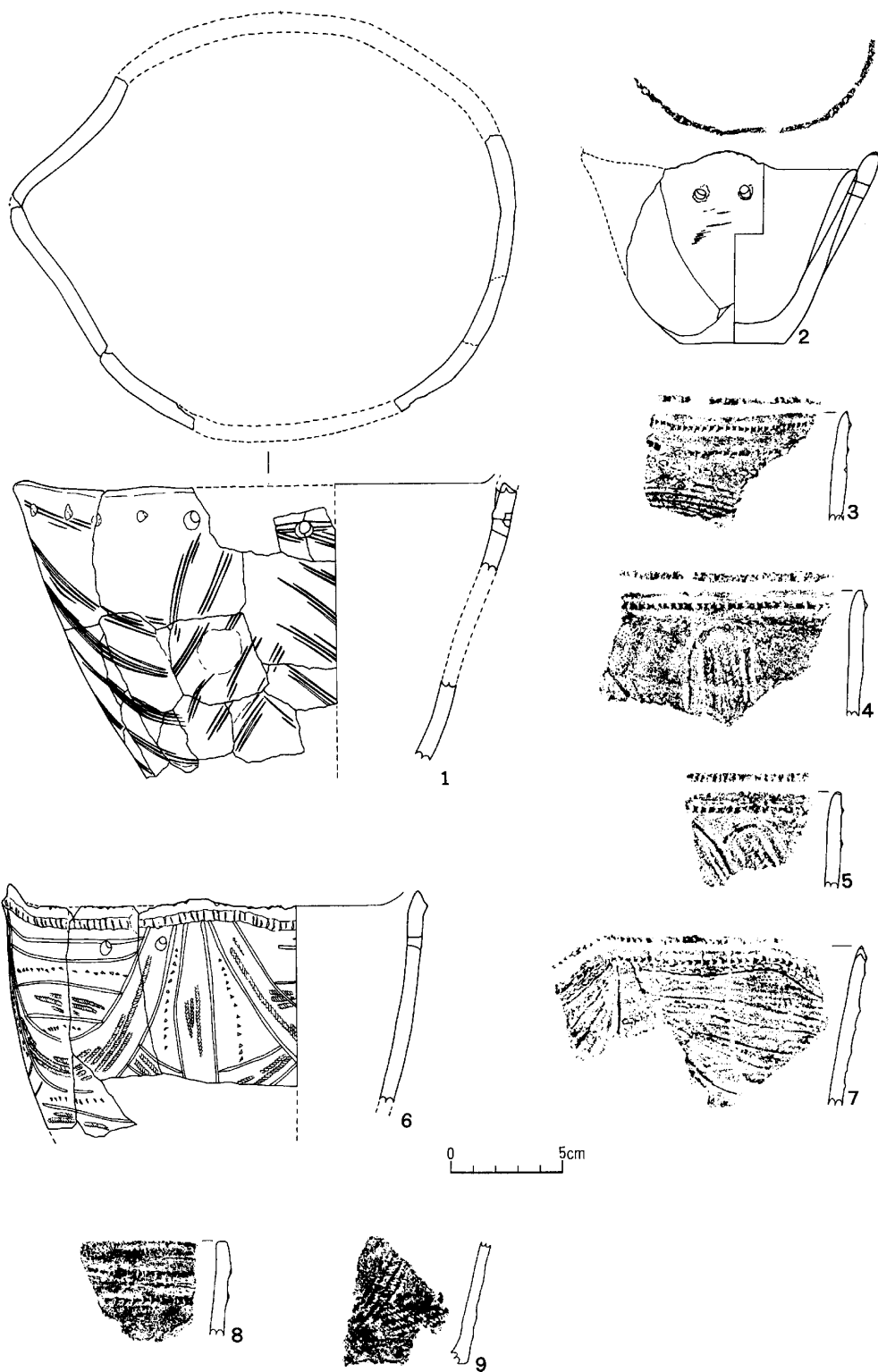
小括

本竪穴は北側に張出し部をもつ。床面から続縄文後北C₂・D式が出土している。この時期の竪穴と思われる。

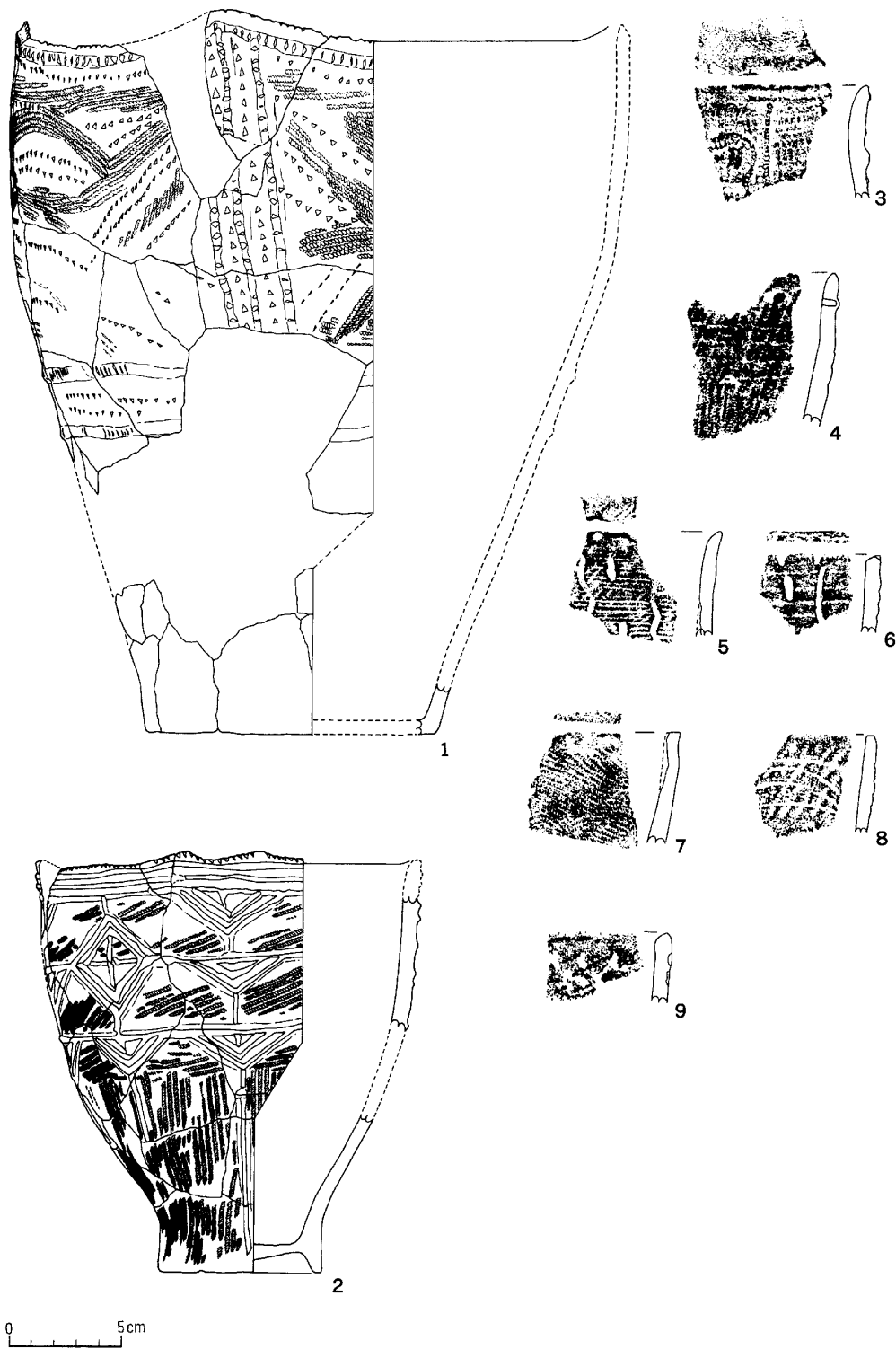
(武田 修)



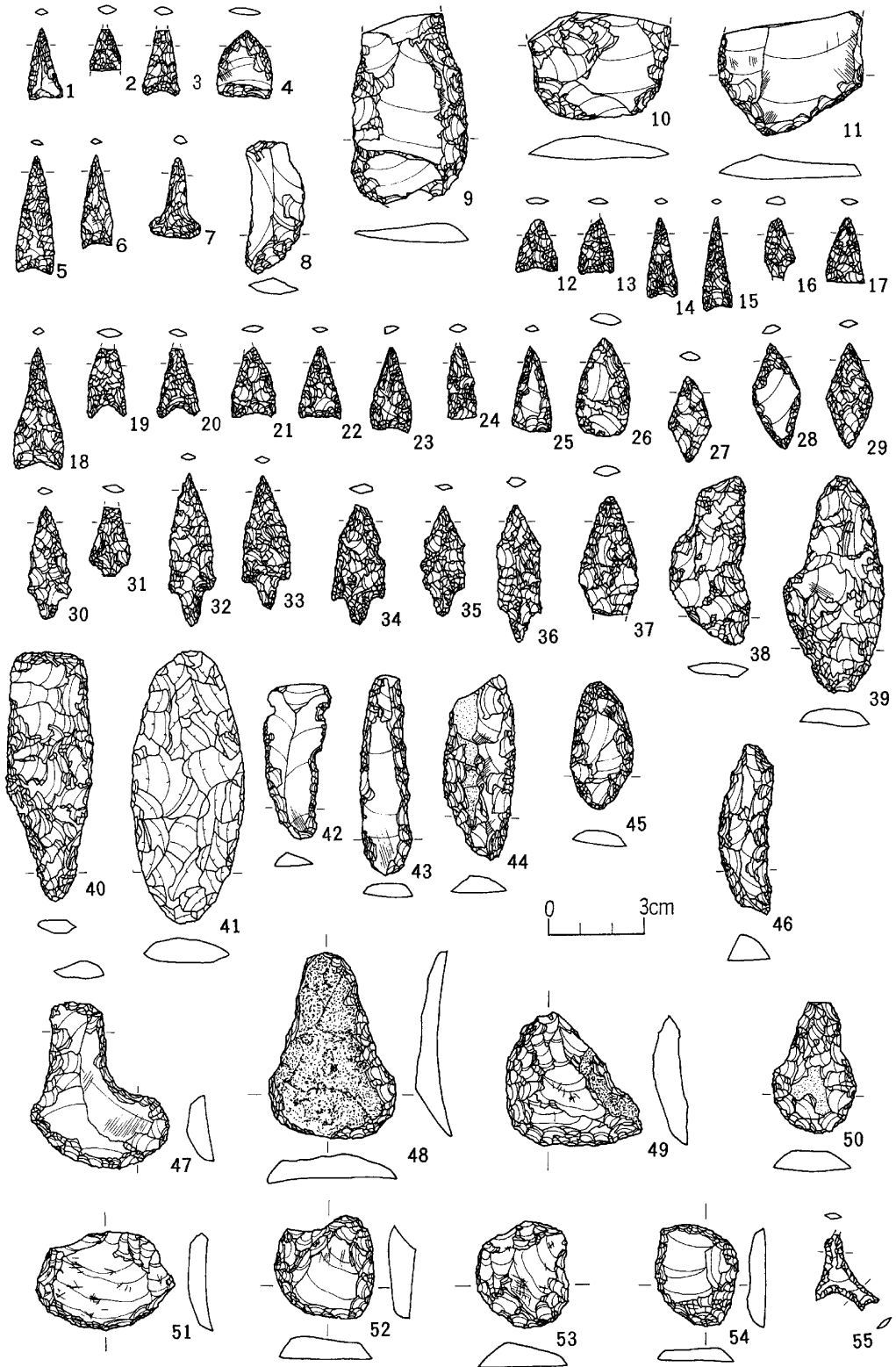
第125図 69号竖穴床面(1・2)・埋土(3)出土土器



第126图 69号竖穴埋土(1~9)出土土器



第127图 69号竖穴埋土(1~9)出土土器



第128图 69号竖穴床面(1~11)·埋土(12~55)出土石器

69 a 号 豎 穴

遺 構 (第129図, 図版21-1)

本豎穴は69号豎穴の外側に確認された豎穴で長軸7.40m, 短軸7.10mの隅丸方形を呈する。壁高は確認面から北壁で55cm, 南壁で25cmを測り, 緩やかに立ち上がる。北壁の一部は水道工事による攪乱を受けている。柱穴は主柱穴が直径22~26cm, 深さ28cmのものが2本, 壁柱穴は直径8~16cm, 深さ6~19cmのものが11本検出された。炉跡は床面が69号豎穴によって破壊されているため検出できなかった。西壁近くの床面から粘土塊が出土している。

遺 物 (第130図-1~5, 第131図-1・2)

床面の出土遺物はない。埋土からは第130図-1が口縁部から垂下させた宇津内II b式。2は宇津内II a式。3は無文。4・5は縄文晩期中葉。

石器は第131図-1が柱穴から出土した片面加工ナイフ。2が埋土出土の両面加工ナイフ。いずれも黒曜石製。

小 括

本豎穴は床面から土器が出土していないため時期は不明であるが, 69号豎穴より多少古いものと思われる。 (佐々木 覚)

69 b 号 豎 穴

遺 構 (第129図)

本豎穴は69a号豎穴の北西側に検出された豎穴で南半分は69 a号豎穴に切られており, 一部水道工事による攪乱を受けている。壁高は確認面から30cmを測り, 斜めに立ち上がる。直径8~10cm, 深さ7~14cmの柱穴が3本検出されている。

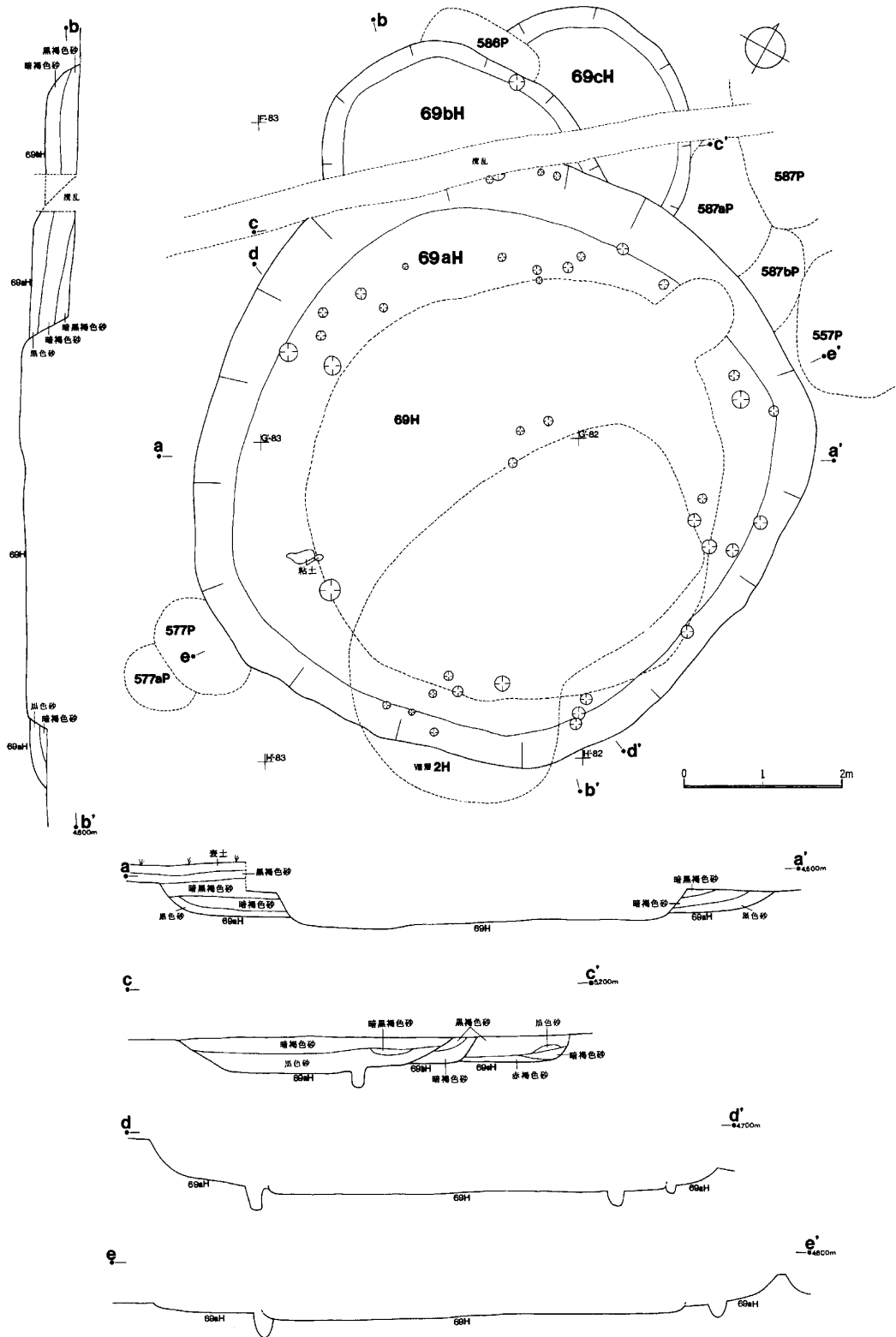
遺 物 (第130図-6~10, 第131図-3・4)

床面から遺物は出土しなかった。第130図-6は宇津内II a式。7~10は縄文晩期中葉。

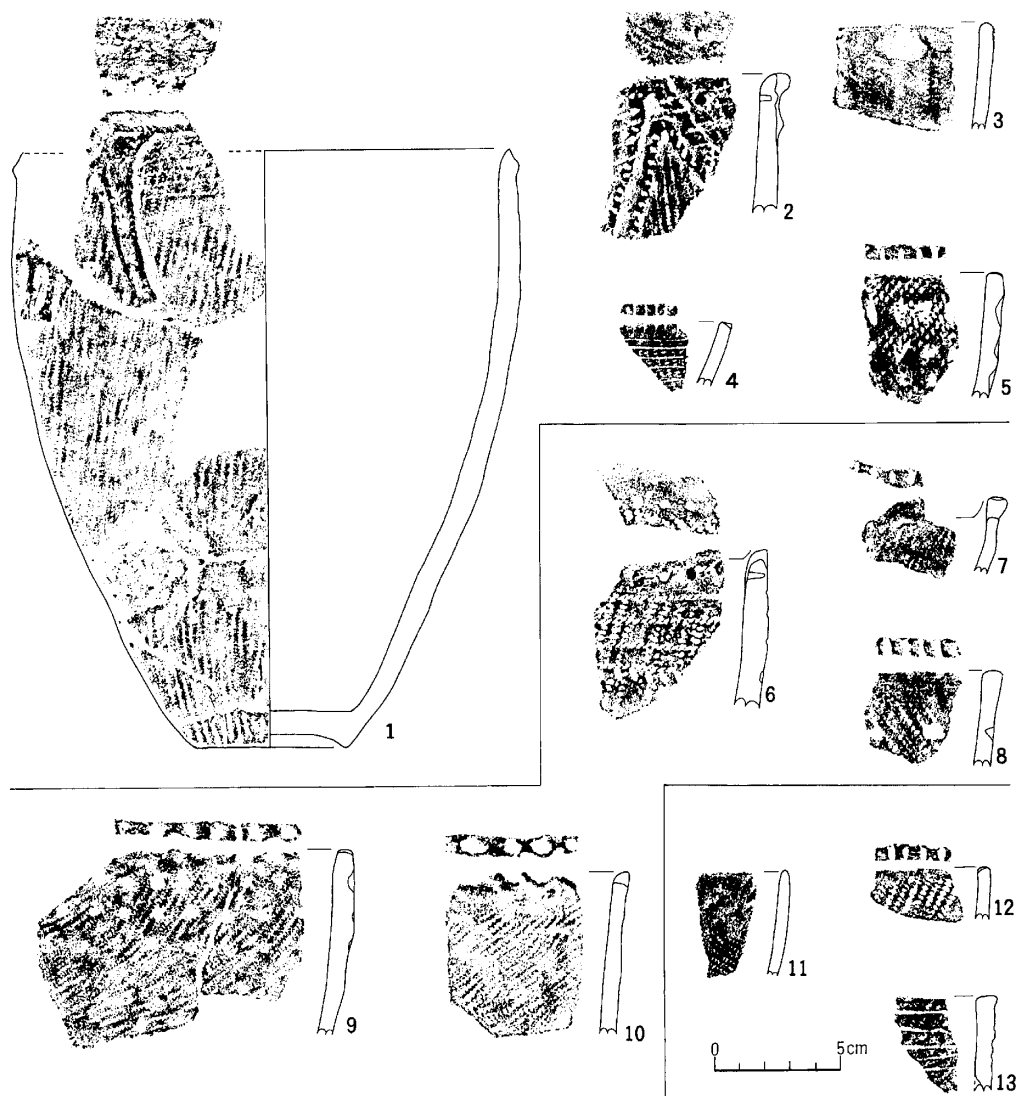
石器は埋土から第131図-3の削器。4の搔器がある。いずれも黒曜石製。

小 括

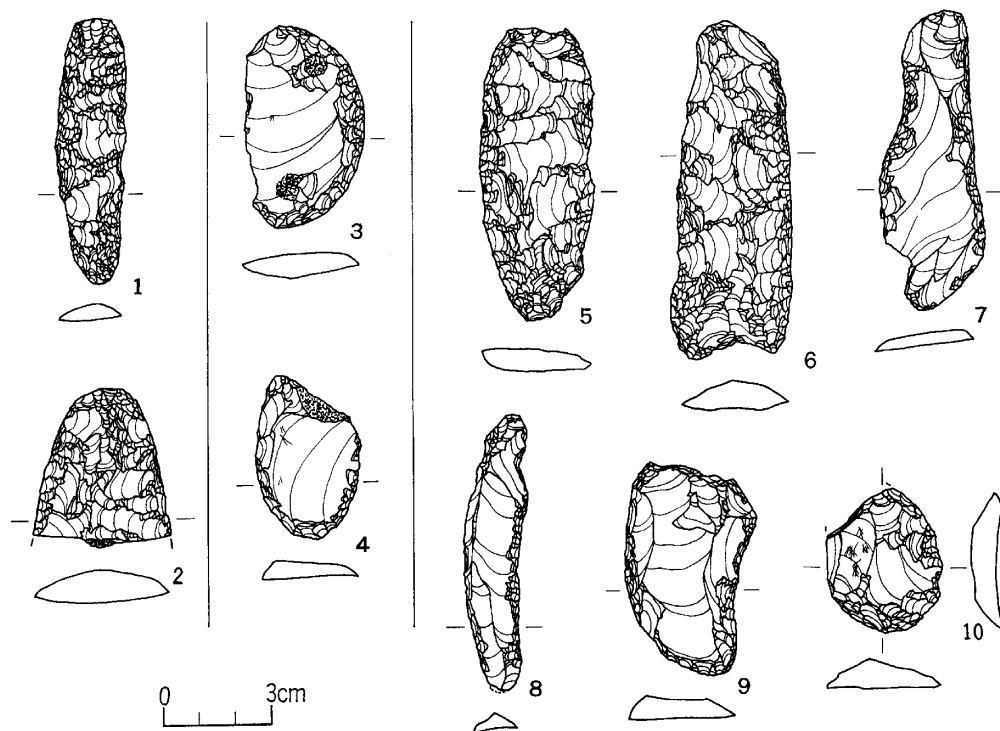
本豎穴は床面からの出土遺物がないため時期は不明である。 (佐々木 覚)



第129图 69a号竖穴, 69b号竖穴, 69c号竖穴平面图



第130図 69a号竖穴埋土 (1~5), 69b号竖穴埋土 (6~10),
69c号竖穴埋土 (11~13) 出土土器



第131図 69a号竪穴柱穴 (1)・埋土 (2), 69b号竪穴埋土 (3・4), 69c号竪穴埋土 (5~10) 出土石器

69c 号 竪 穴

遺 構 (第129図)

本竪穴は69a号竪穴と69b号の北側に位置し、69b号竪穴との間にはピット586があり、竪穴の一部は攪乱を受けている。壁高は確認面から30cmを測り、斜めに立ち上がる。柱穴は確認できなかった。

遺 物 (第130図-11~13, 第131図-5~10)

床面から遺物は出土していない。埋土出土の第130図-11は無文であるが下方にわずかに縄文がある。12・13は縄文晩期中葉。

石器は埋土から第131図-5・6の両面加工ナイフ。7~9が削器。10が搔器。いずれも黒曜石製。

小 括

本竪穴も床面からの出土遺物がないため時期は不明である。

(佐々木 覚)

70 号 豎 穴

遺 構 (第132図, 図版21-2)

本豎穴はC77・78, D77・78グリッドに位置する。擦文期の44号豎穴により東壁側が切られるものの長軸約6m, 短軸約4.40mの長方形を呈する。掘り込みは浅く壁高は確認面から約18cmを測る。表土下の茶褐色土層には灰白色の樽前a火山灰が粒子状に混入する。

豎穴の中央部からやや西側寄りに長さ約3.40m, 幅約60cm~1mの細長い炉跡がある。この炉は粘性のある焼土で骨片を多量に含むもので、床面上に約10cmほど盛り上がった状態で検出された。

床面は東壁から西壁にかけて緩く傾斜する。主柱穴と思われるものは西壁に並行して3本, 南壁に並行して2本ある。直径約18~25cm, 深さ約11~21cmである。壁柱穴は各壁に認められる。東壁から南壁において最も壁に接する柱穴が約1~2mの間隔があり規則的であるが, 西壁ではやや間隔が狭い。いずれも直径約6~16cm, 深さ約7~18cmである。

遺 物 (第133図, 第134図, 第135図, 第136図, 第137図-1~3, 図版21-3)

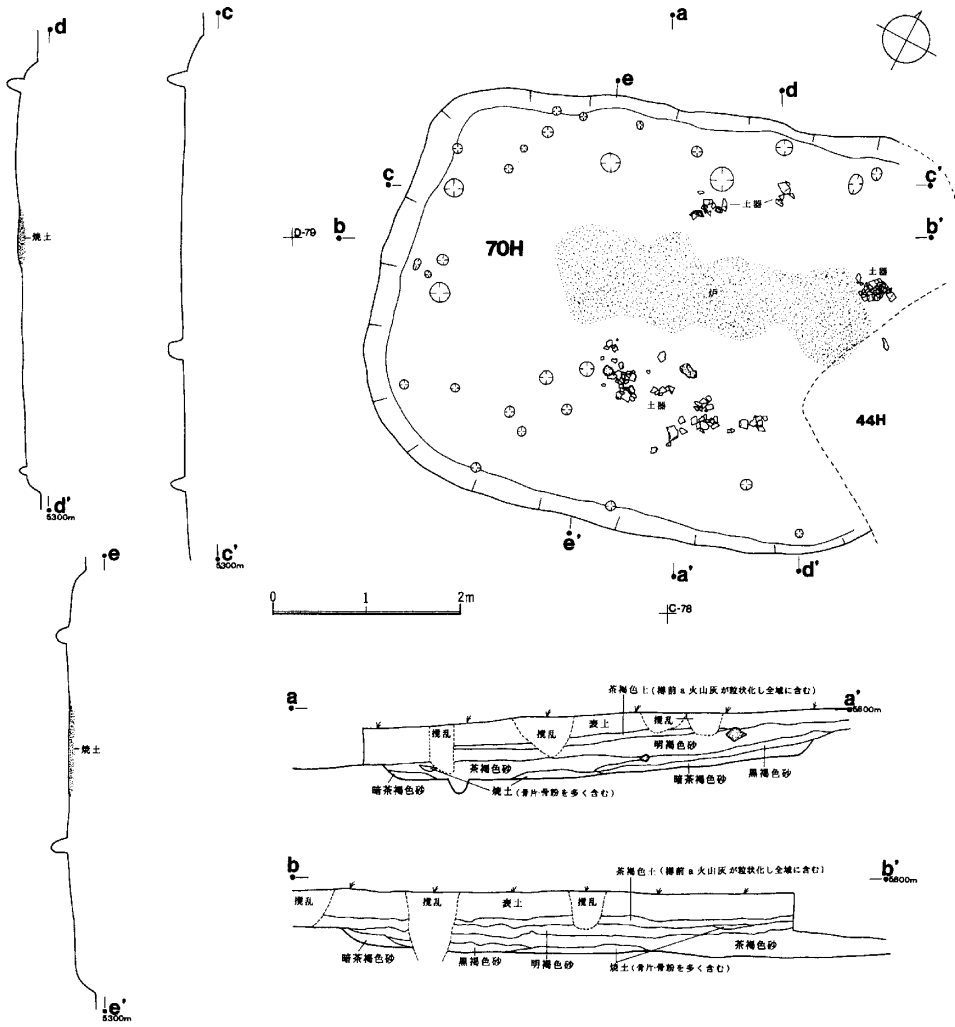
第133図-1は口縁部が「く」字状に外反し, 菱形の刻線文が施された擦文土器。2は後北C₂・D式。3は底部が欠失するものの口径約26.5cmの大型土器。口縁部下と胴部に微隆起帯を施し, 縦位, 円弧状の列点文を配置する。胴下部は帯縄文が垂下する。

第134図-1~5は後北C₂・D式。1は無文の注口土器。2は口縁部下に3個の小孔がある。焼成後に穿孔されたもので突瘤文とは異なる。5は口径約10cm, 器高約8cmの小型土器。6・7は宇津内II a式。8・9は縄線文がある。8は円形貼付文の下部に刺突が施され, 9は刺突文間が幅広の無文帯となる。興津式であろう。10は「×」字状の縄端圧痕文がある。宇津内系の底部と思われる。

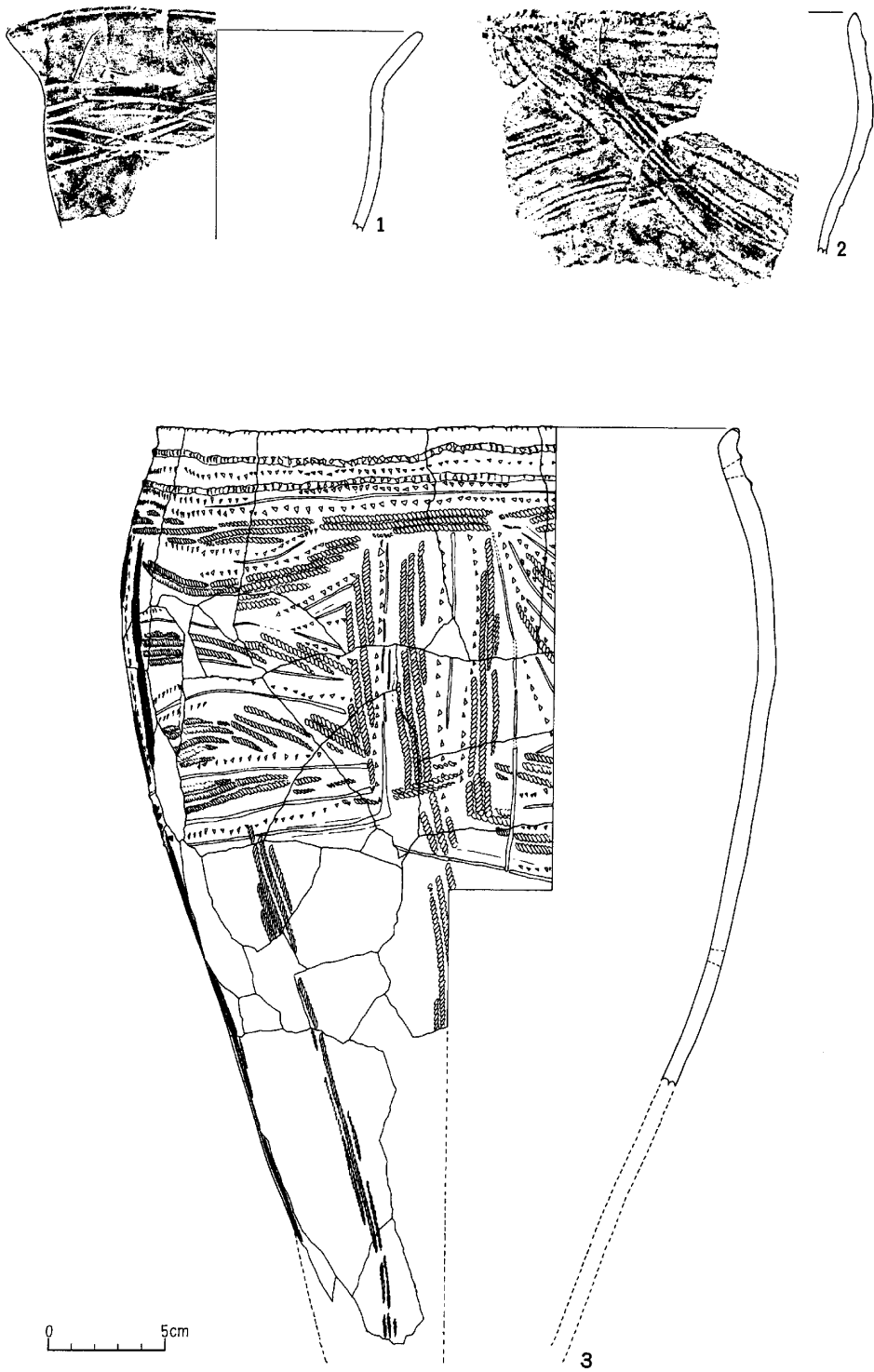
第135図-1は口唇部の内側に縄端圧痕文が連続する。続縄文初頭であろう。2は小突起のある無文土器。口縁部の断面は三角形状であり, 続縄文でも宇津内系の新しい時期のものかもしれない。破片の1点は72号豎穴のものと接合した。3・4は横位の沈線文があり, 3の小突起の表裏面には短縄文が押捺される。5は内側からの突瘤文と「ハ」字形の刻線, 円形刺突が施される。6・7は幅広の無文帯をもち, 縄端圧痕文が施される。8・9は縦走縄文を地文に沈線が施される。9は菱形文の内部を刺突で重鎮させる。10は刺突が見られる。11は縄文後期堂林式。

石器は第136図-1・2が床面出土の削器。1は先端部の尖った断面三角形の右側縁部が加工される。3~12は無茎石鏃。13・14は有茎石鏃。15は柳葉形の石槍。16・17は両面加工ナイフ。18・19の断面は蒲鉾状に肉厚で周辺の調整も粗い。ナイフの未製品と思われる。20~29は削器。30~33は搔器。30の刃部は直刃であり, 再加工されている。全て黒曜石製。

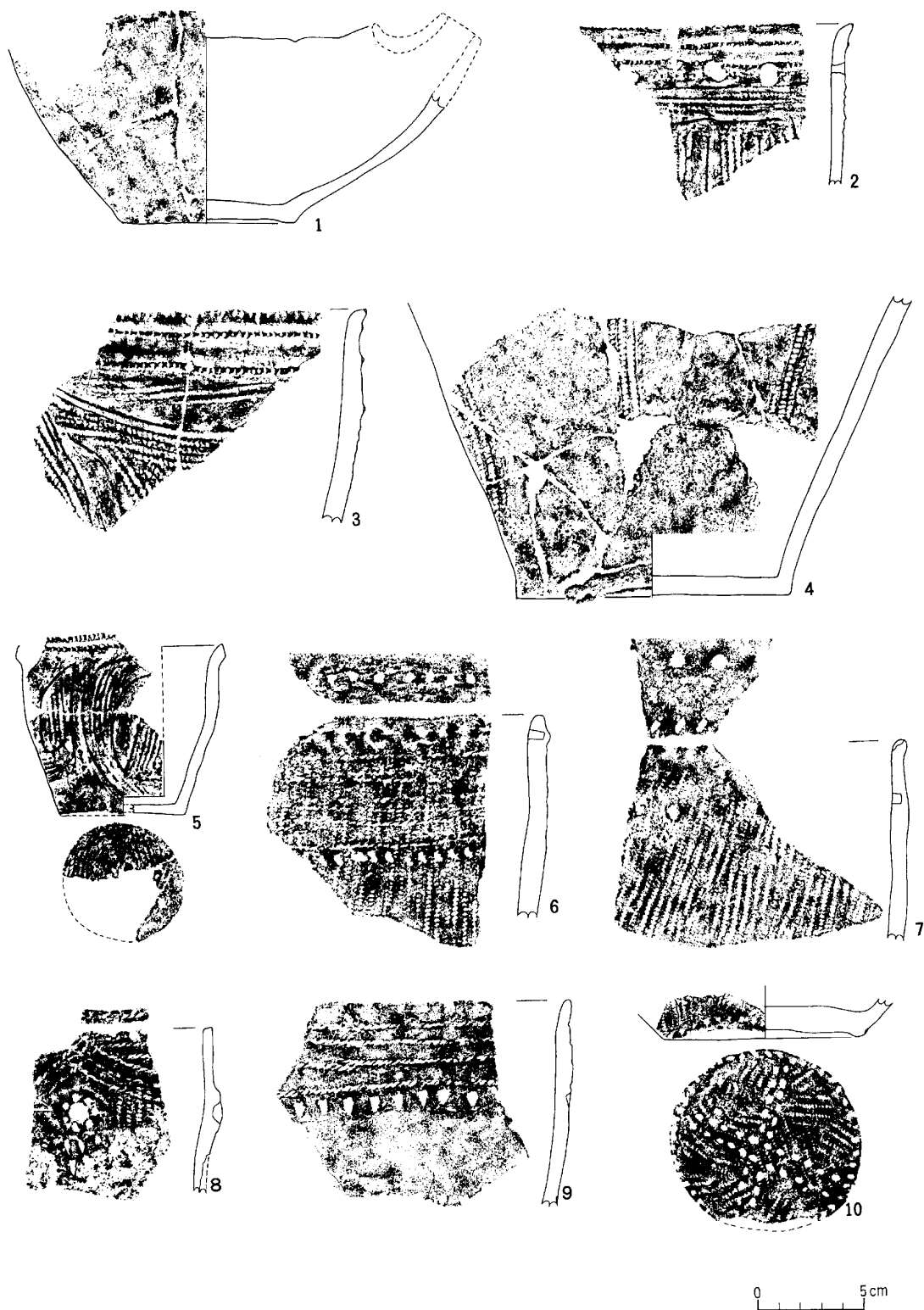
第137図-1~3は片刃磨製石斧。1は青色片岩製, 2・3は泥岩製。



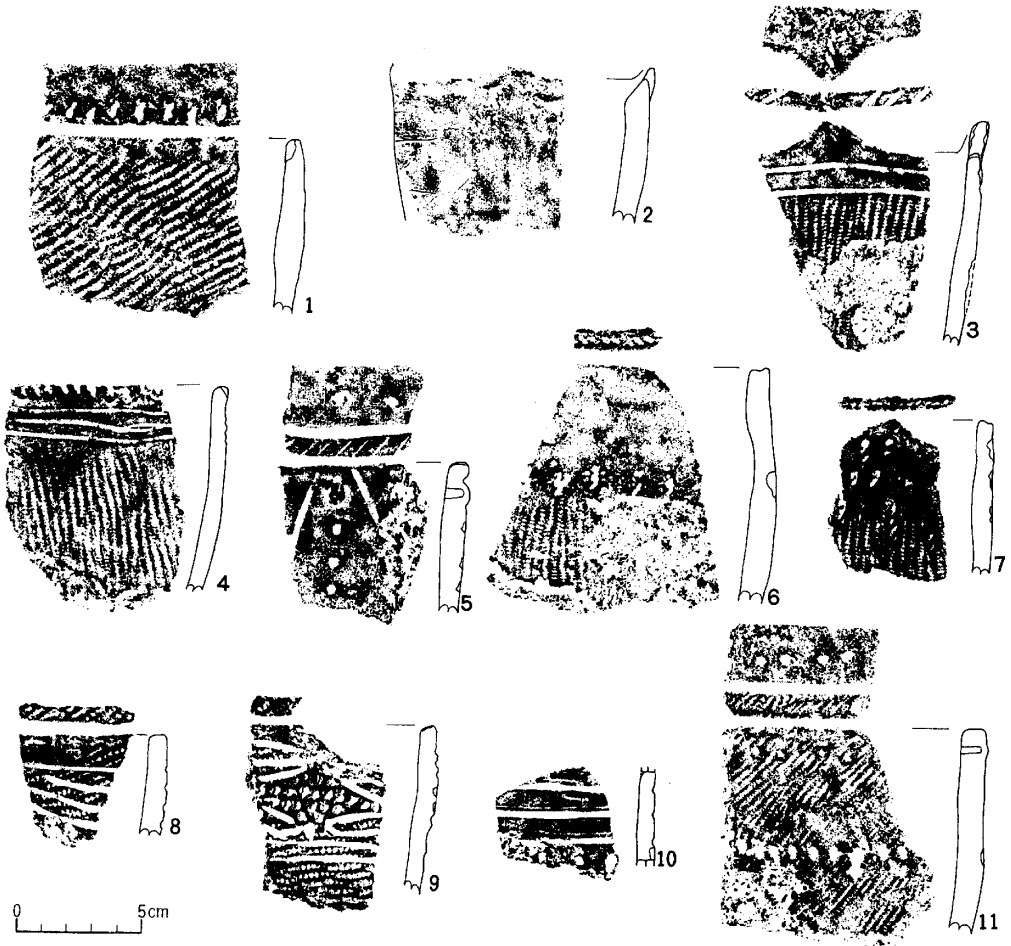
第132図 70号竖穴平面図



第133図 70号竪穴埋土(1~3)出土土器



第134图 70号竖穴埋土(1~10)出土土器



第135図 70号竪穴埋土（1～11）出土土器

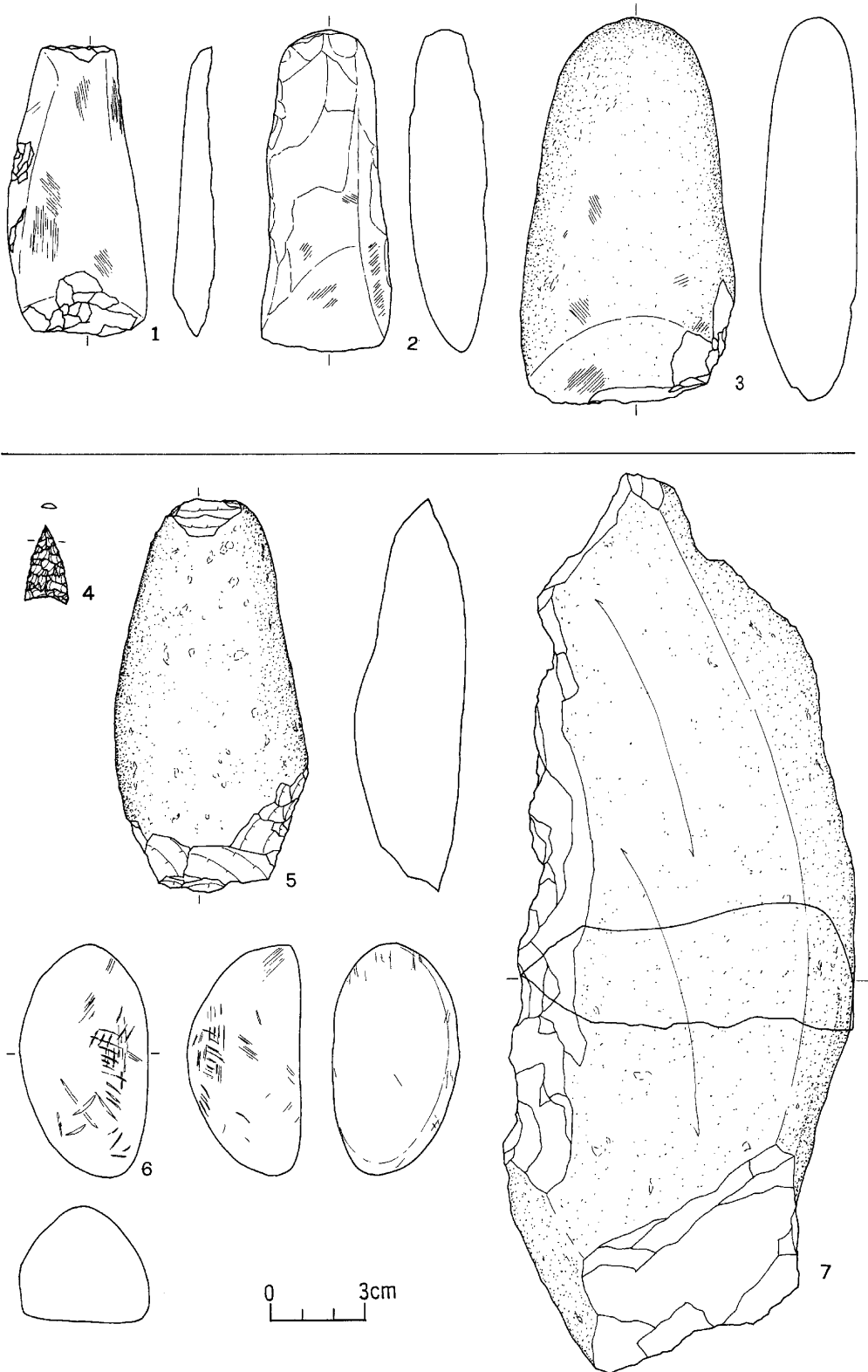
小 括

床面出土の土器が無いので時期は不明であるが、不整長方形の平面形態と浅い掘り込み、細長い炉は、本遺跡の続縄文後北C₁～C₂・D式に見られる特徴でありこの時期の可能性が高い。

（武田 修）



第136图 70号竖穴床面(1·2)·埋土(3~33)出土石器



第137図 70号竖穴埋土（1～3），70a号竖穴埋土（4～7）出土石器

70 a 号 竪 穴

遺 構 (第138図)

本竪穴はC77・78, D77・78グリッドに位置する70号竪穴と重複する。直径約3.76～4mの不整形方形を呈する。壁高は70号床面約18cmを測る。炉跡は中央部からやや西側に寄った位置にある。直径約5～15cm, 深さ約6～15cmの壁柱穴はほぼ等間隔に配置される。支柱穴は炉跡に近接して3本ある。直径12～20cm。深さ15～21cm。

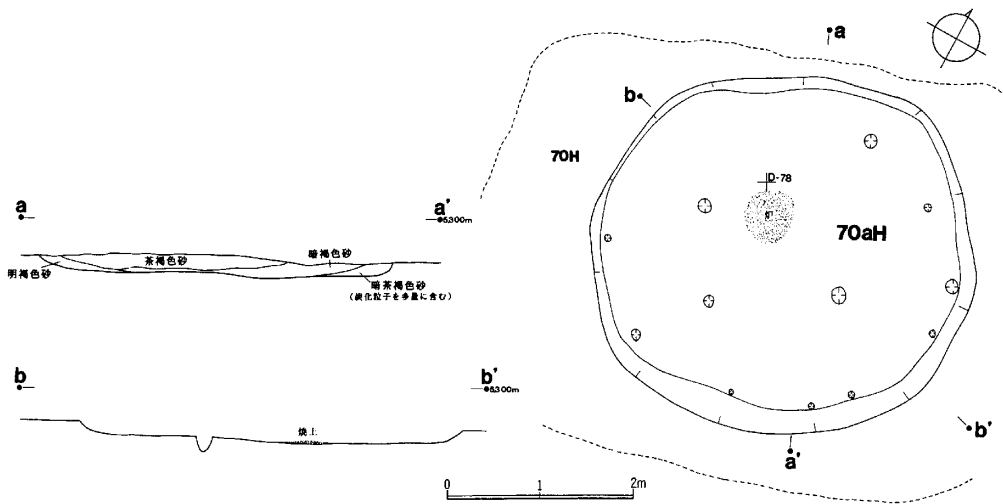
遺 物 (第139図, 第137図-4～7, 図版21-4)

床面出土の第139図-1・3・4は宇津内II b式。2は後北C₁式。5～7は宇津内II b式。8・9は同II a式。10は下田ノ沢2式。11・12とも幅広の口縁部に縄端圧痕文がある。続縄文初頭興津式。

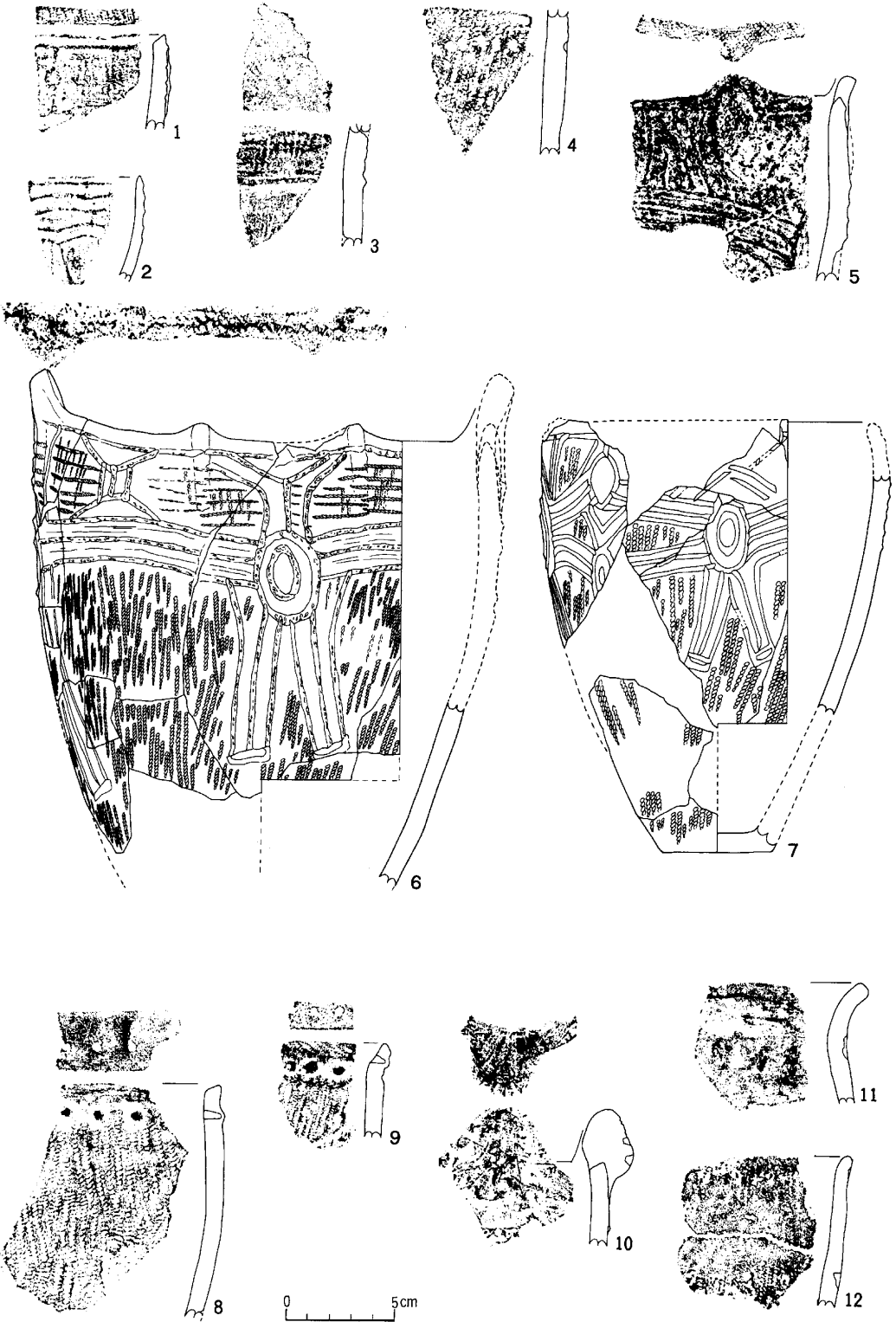
石器は第137図-4が無茎石鏃。5は両端軸の表裏面を打ち欠いた石錘。泥岩製。6は上部及び側縁部に細かい使用痕がある。硬質泥岩製。7は石皿。

小 括

時間的には後北C₁～C₂・D式と思われる70号竪穴より古いことは確実である。宇津内II a式と思われる。(武田 修)



第138図 70a号竪穴平面図



第139圖 70a号竖穴床面 (1~4)・埋土 (5~12) 出土土器

71 号 竪 穴

遺 構 (第140図, 図版22-1)

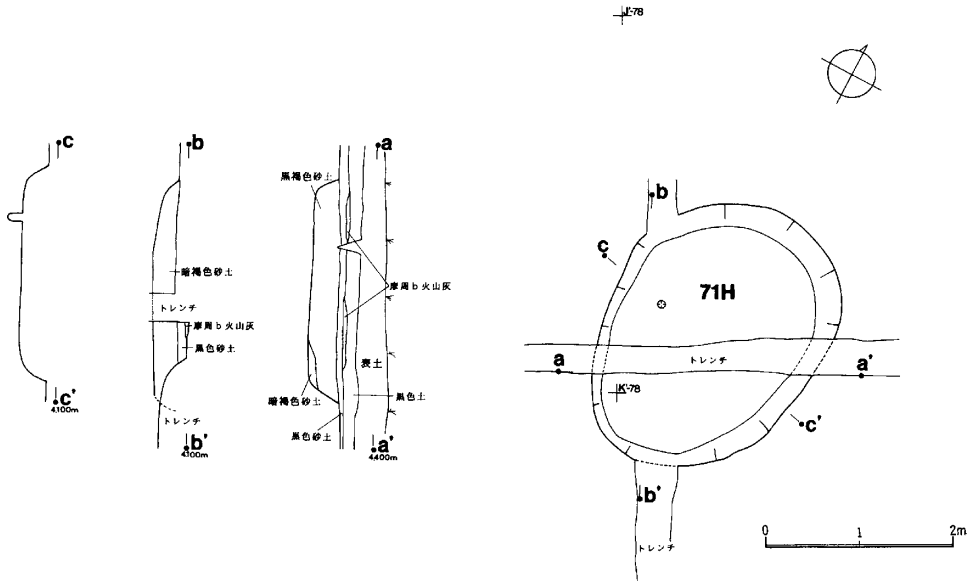
本竪穴はK'77, L'77グリッドに位置する。規模は長軸約3m, 短軸約2.30mの楕円形を呈した小型竪穴である。埋土上部に摩周b火山灰の堆積がある。壁高は確認面から約30cmを測る。壁柱穴は直径10cm, 深さ16cmのものが西壁に1本あるだけである。攪乱が横断するため炉跡の有無は確認できなかった。

詳細な時期は不明である。

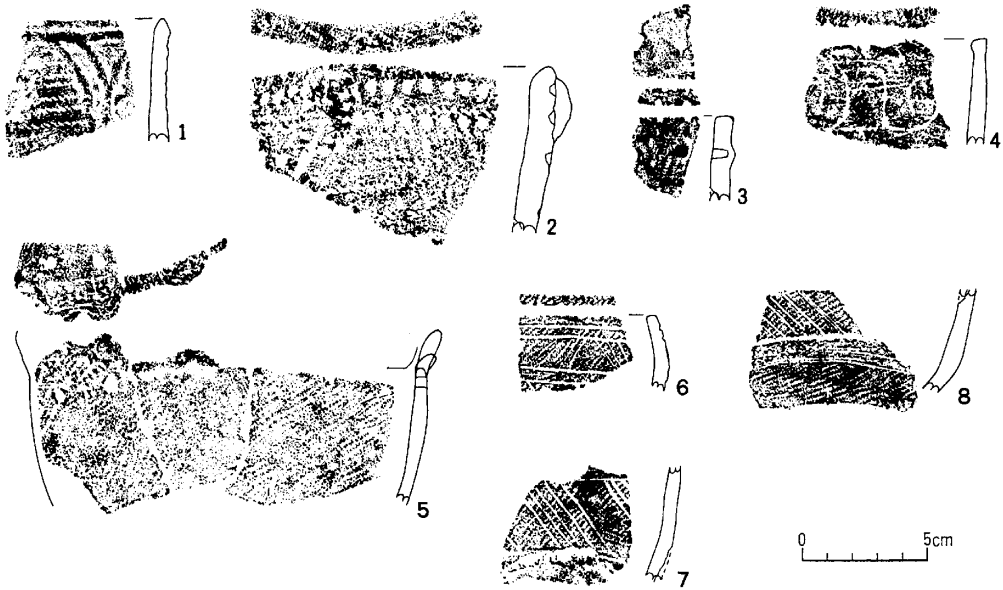
遺 物 (第141図, 第147図-1・2)

第141図-1・2は縄文文字津内II b式。3は同II a式。4・5は縄文晩期幣舞式。6～8は横走沈線文と斜位の沈線文が施される。縄文晩期中葉。

石器は第147図-1が有茎石鏃。2は彫器。表裏面が加工され, 上部に桶状剝離。1は黒曜石製, 2は頁岩製である。(渡部 高士)



第140図 71号竪穴平面図



第141図 71号竪穴埋土（1～8）出土土器

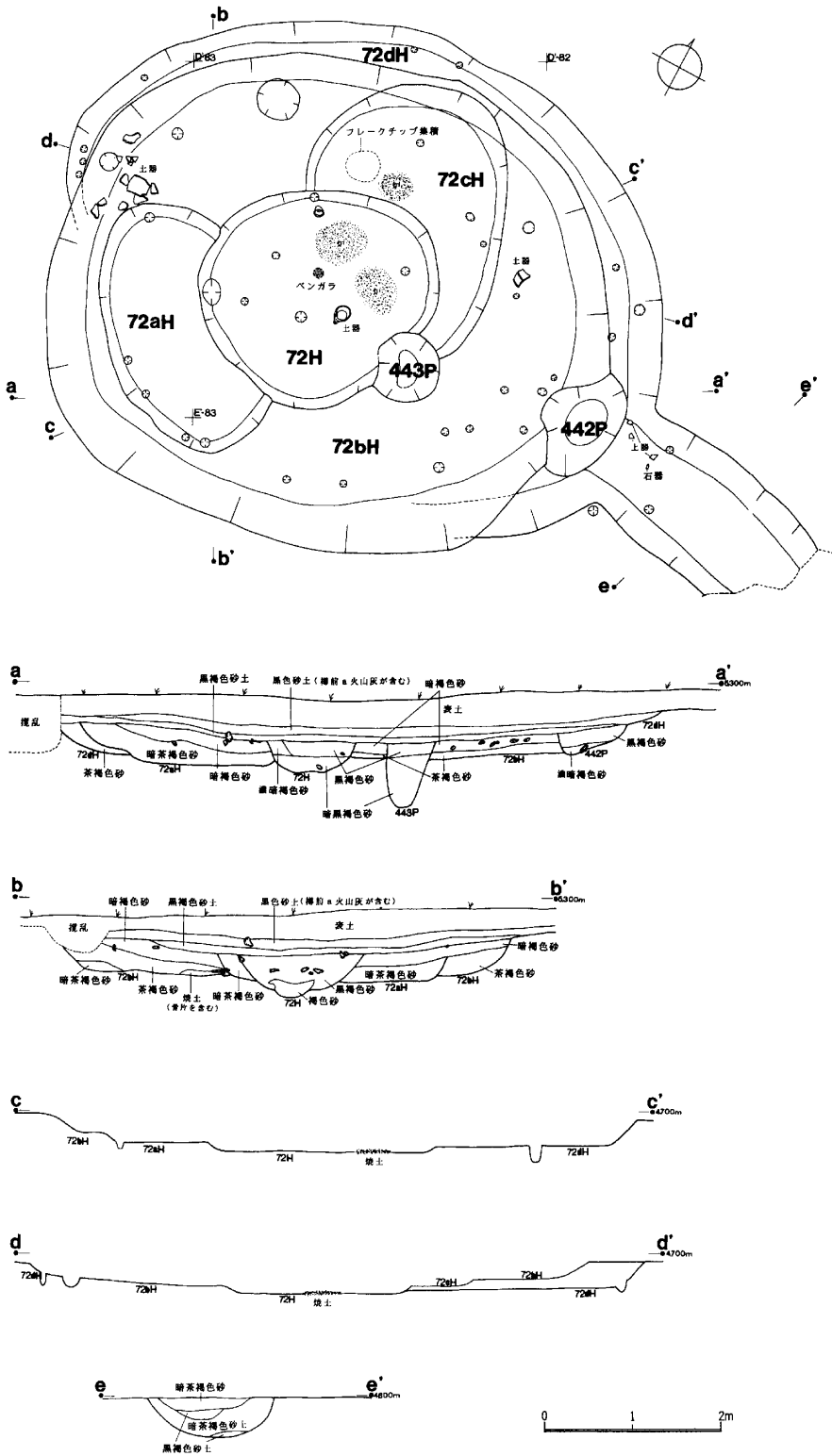
72 号 竪 穴

遺 構（第142図，図版22-2）

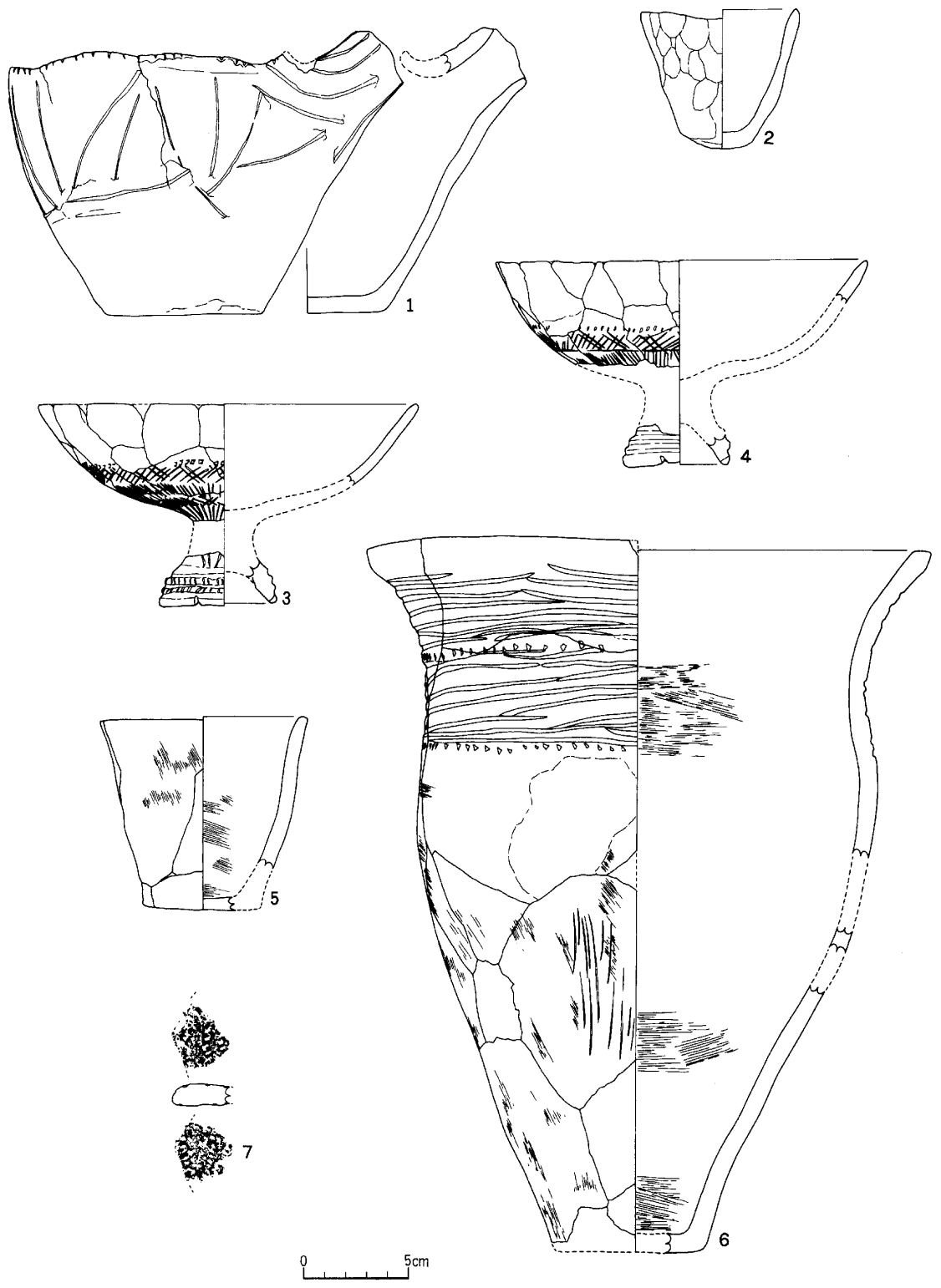
本竪穴はE'82グリッドに位置する。表土を20～30cm剥土すると樽前a火山灰を薄く含む硬く締まった黒色土の落ち込みが現われた。それを約10cm掘り下げると摩周b火山灰を薄く含む硬く締まった黒褐色土が現われ、そこから締まった黒褐色砂を30～40cm下げたところで床面が現われた。規模は北東-南西方向の長軸約2.7m，短軸約2.4mの楕円形で，壁は比較的緩やかに立ち上がり，壁高は確認面から約40cmである。埋土上部から一括土器が2個体分出土している。床面の中央部と北壁際からは完形品が出土している。また，床面中央部に直径約10cmのベンガラの塊が検出された。床面の北寄りに炉跡が2箇所あり，両方とも微細な骨片を含む。小柱穴が中央部に1本，壁寄りに4本ある。直径は8～12cm，深さ5～22cmである。西壁際に小ピットがあるが，埋土が堆積した後に掘られたものであろう。

遺 物（第143図，第144図，第145図，第146図，第147図-3～19，図版23-1～7）

第143図-1は口径約13cm，器高約13cmの注口土器。無文の器面に微隆起帯が施された後北C₂・D式。2は口径約7cm，器高約7cmの手づくね土器。器面に指頭痕があり，底部は丸底となる。後北C₂・D式であろう。3～6は擦文土器。3・4は高杯。2点とも口縁部の無文部は幅



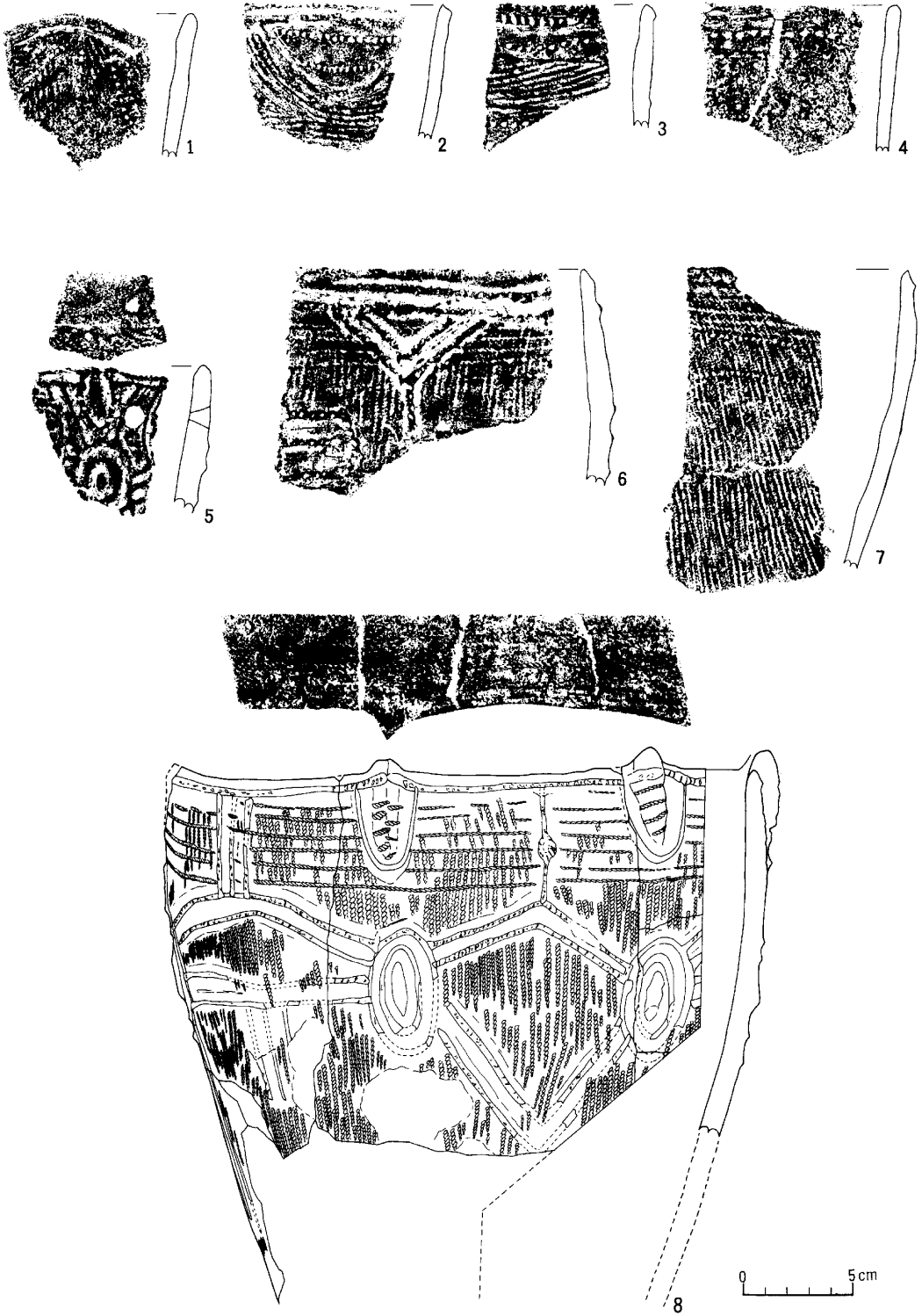
第142図 72号竖穴, 72a号竖穴, 72b号竖穴, 72c号竖穴, 72d号竖穴, ピット442, 443平面図



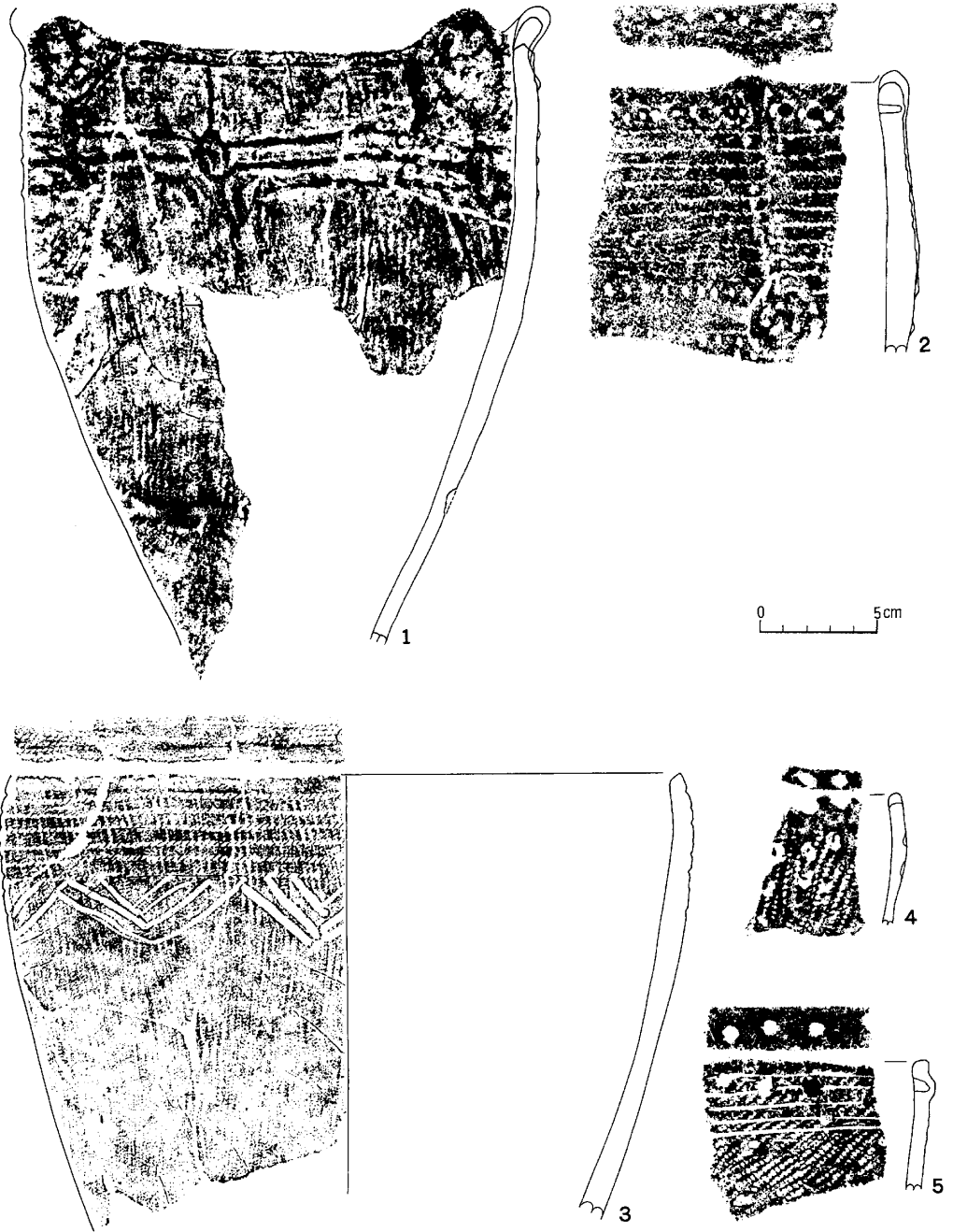
第143図 72号竖穴床面 (1・2)・埋土 (3~7) 出土土器・土製品



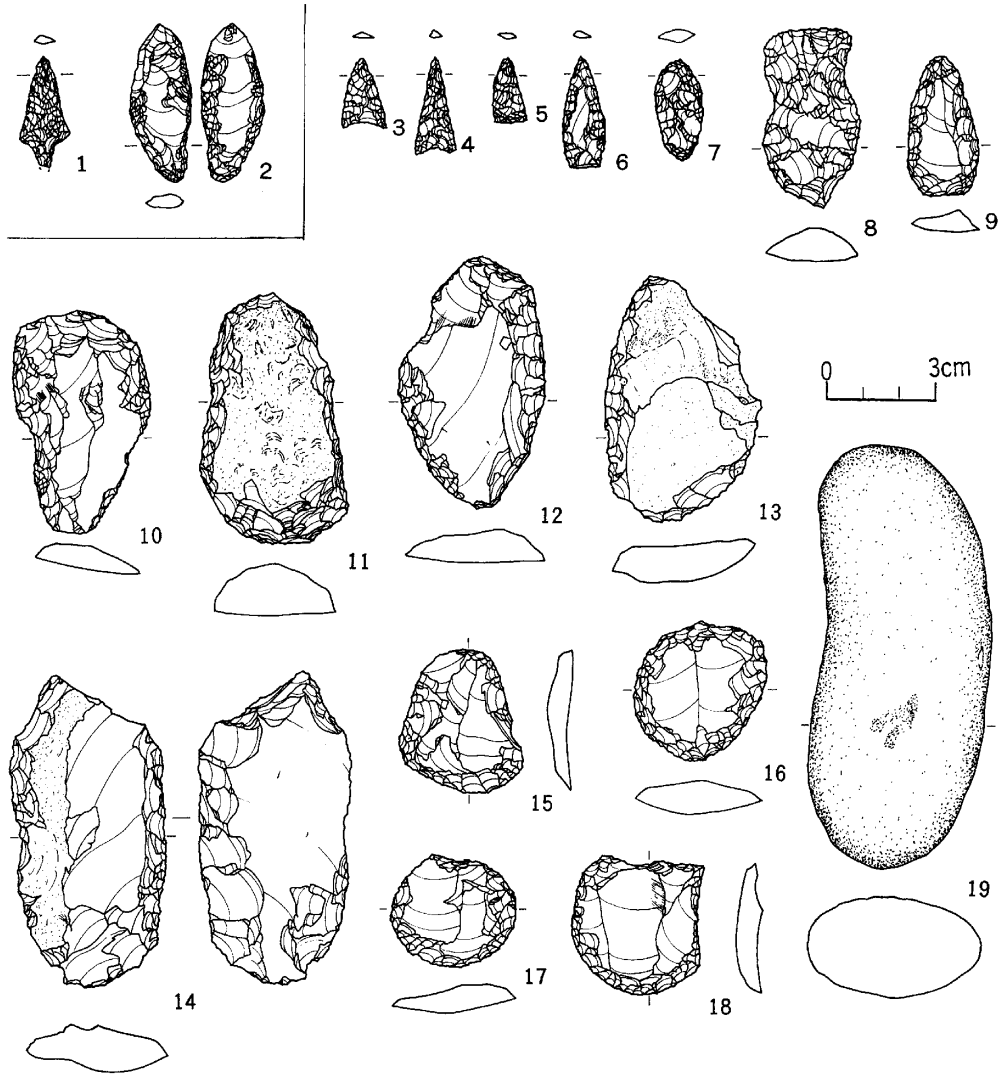
第144图 72号竖穴（1～7）出土土器



第145图 72号竖穴埋土(1~8)出土土器



第146图 72号竖穴埋土(1~5)出土土器



第147圖 71号豎穴埋土(1・2), 72号豎穴埋土(3~19)出土石器

広である。5は口径約10cm、器高約9.5cmの小型土器。内外面とも刷毛により丁寧に調整されている。6は口径約29cm、器高約35cmの大型鉢形土器。頸部を中心に横走する沈線18本と三角形の列点文が施される。この土器は藤本編年a期、宇田川編年擦文前期に比定される。7は表裏面に細い半截状の刺突が施される。角張った形態の土製品であり、焼成は極めて良い。詳細な時期は不明である。

第144図-1～7は統縄文後北C₂・D式。1は長径約19.5cm、短径約17cmの楕円形を呈し、長径端部に小突起をもつ。器高約19cmの中型土器。無文の器面に口縁部では横位の擬縄隆帯が施される。

第145図-1～4は後北C₂・D式。5～8は宇津内II b式。8は口径26.5cmの大型土器。小突起下部の同心円文は擬縄隆帯で繋がる。

第146図-1・3は宇津内II b式。2は同II a式。3はやや内湾した口縁部に7条の縄線文と下部には3本単位の鋸歯状沈線文が連続する。4は器面に円形刺突文が施された縄文晩期中葉。5は縄文後期堂林式。

石器は第147図-3～6は無茎石鏃。7は柳葉形石鏃。8は片面加工ナイフ。9～14は削器。15～18は搔器。19はたたき石。(渡部 高士)

72 a 号 竪 穴

遺 構 (第142図, 図版22-2)

本竪穴は72号竪穴周辺の暗褐色砂を10～15cm掘り下げた時にプランを確認した。埋土の暗茶褐色砂を15～25cm掘ると床面が現われた。北東側を72号竪穴に掘り込まれているので、本竪穴は72号竪穴より時期は古い。規模は北西-南東方向の長軸約2.9m、短軸推定約1.8mの楕円形を呈すると思われる。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は確認面から約25cmである。床面は72号竪穴の床面より10cm高く、遺物、炉跡はない。小柱穴が壁際に5本ある。直径は8～10cm、深さ6～8cmである。

詳細な時期は不明である。(渡部 高士)

72b 号 豎 穴

遺 構 (第142図, 図版22-2)

本豎穴は72号豎穴とほぼ同時にプランを確認した。埋土の茶褐色砂を掘り下げると72号豎穴の床面よりも約20cm高い位置で床面が現われた。床面の中央部から南西側にかけて72号・72a号豎穴に掘り込まれているので、本豎穴は72号・72a号豎穴より時期は古い。規模は東-西方向の長軸約6.3m, 短軸約5.5mの楕円形で、壁は緩やかに立ち上がり、壁高は確認面から約30cmである。炉跡は残っていない。床面の北東側と西壁際に土器片が出土している。壁寄りに小柱穴が9本ある。直径は6~12cm, 深さ8~14cmである。

遺 物 (第148図, 図版23-8)

1は口径約27cmの大型土器。実測図(上)は1対の大型突起は人間の顔, その下の同心円から延びる擬縄隆帯は手足を表現している様である。また, 実測図(下)の大型突起間にある2個の小突起は二人の人間が両手を差し出している様に見受けられ, それぞれの人間を2~3本の擬縄隆帯で連結する。宇津内II b式である。(渡部 高士)

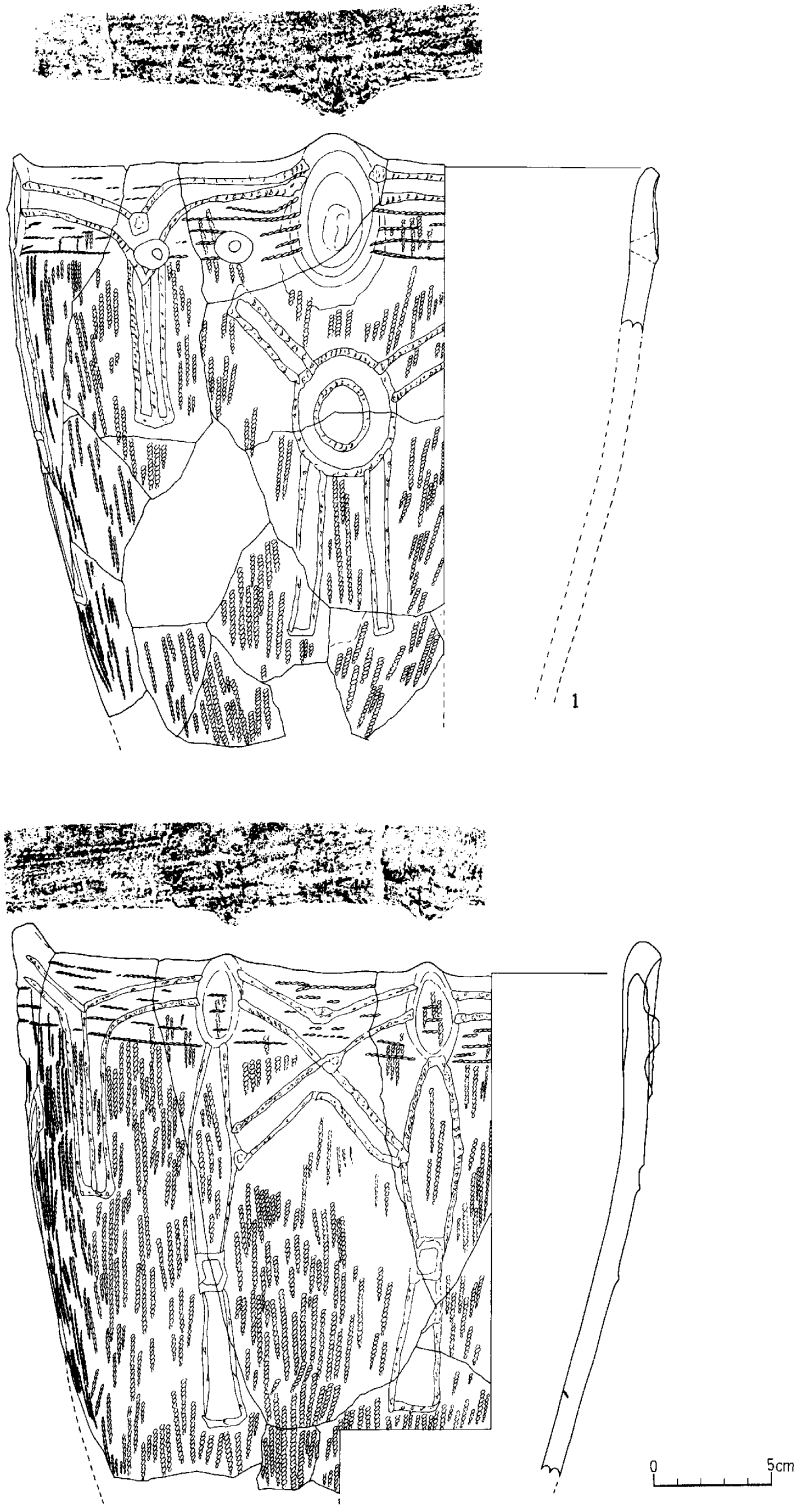
72c 号 豎 穴

遺 構 (第142図)

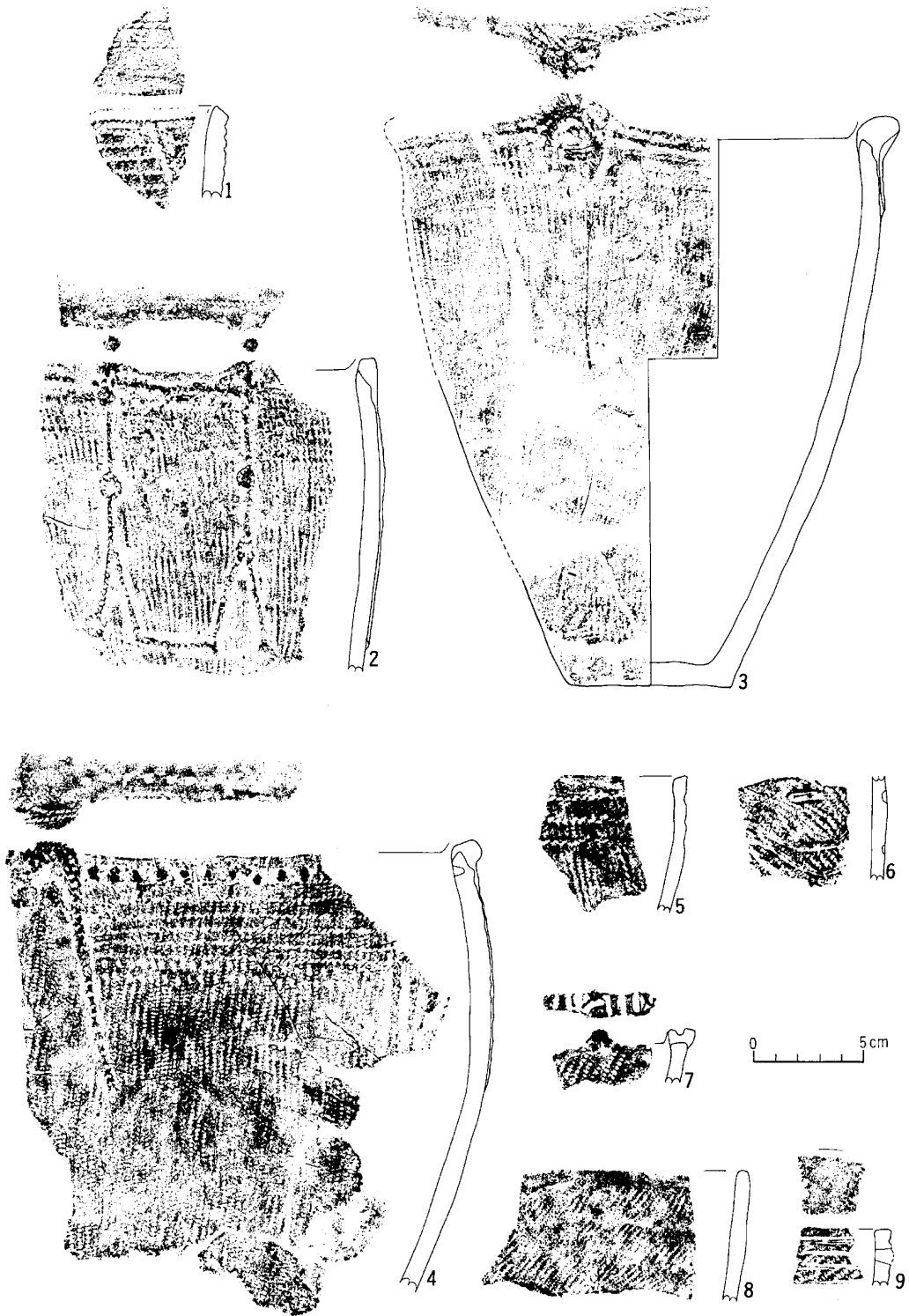
本豎穴は72b号豎穴の床面精査中にプランを確認した。埋土の暗茶褐色砂を約10~15cm掘り下げると, 72号豎穴の床面より約5~10cm高い位置で床面が現われた。規模は南-北方向の長軸推定約3.1m, 短軸約2.3mの楕円形を呈すると思われる。壁は緩やかに立ち上がり, 壁高は確認面から約15cmである。床面中央部の北西寄りに微細な骨片を含む炉跡があり, そのすぐ西側にフレーク・チップの集積がある。床面の東側に小柱穴が1本ある。直径10cm, 深さ5cmである。豎穴の南西側を72号に大きく掘り込まれ, 豎穴上部を72b号に削られているので, 本豎穴は72号・72b号より時期は古い。

遺物は出土しておらず時期は不明である。

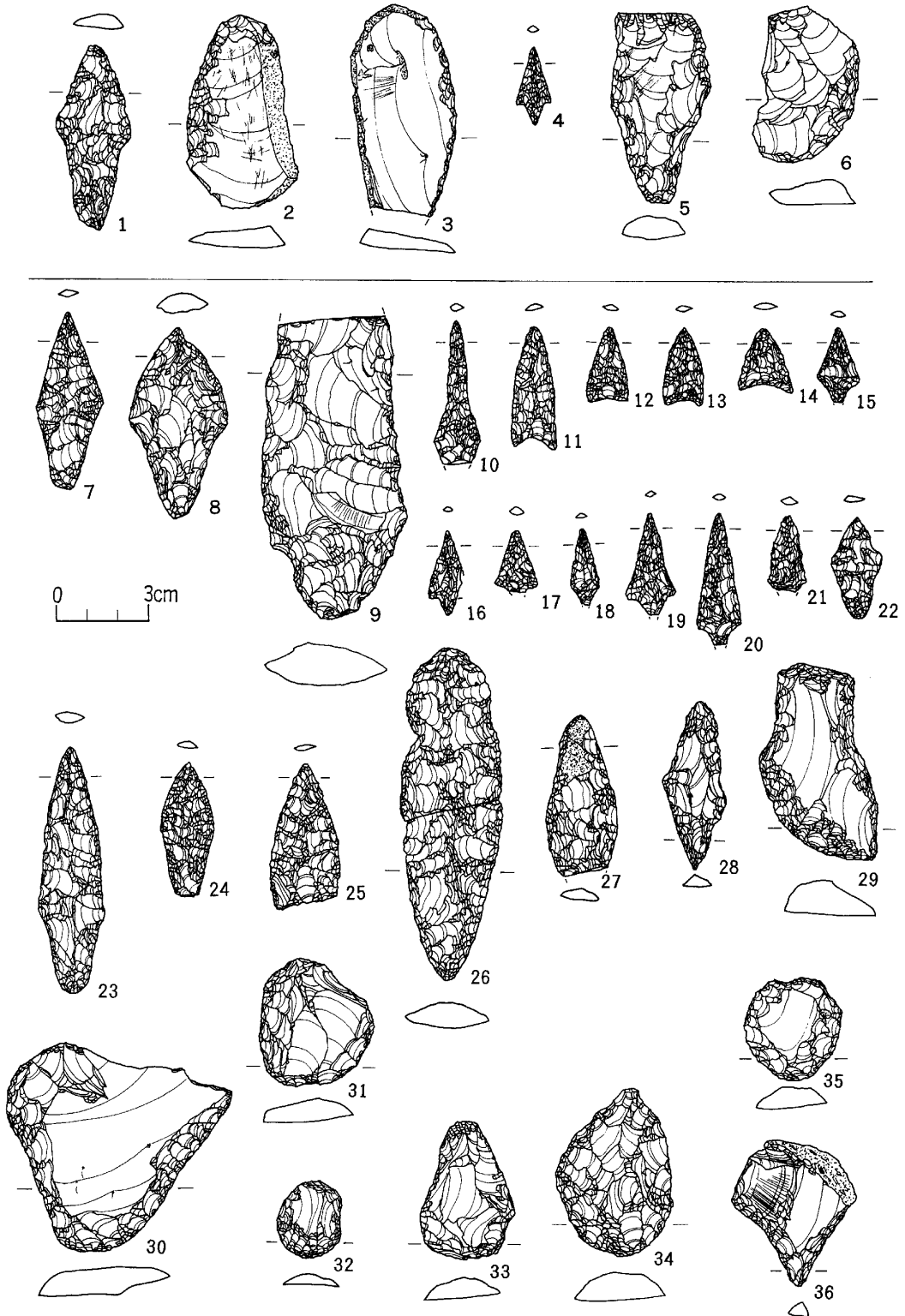
(渡部 高士)



第148图 72b号竖穴床面(1)出土土器



第149図 72d号竪穴床面張出し(1・2・8)・埋土(3~7・9)出土土器



第150图 72d号竖穴床面 (1~3)·埋土 (4~6), 73号竖穴床面 (7~9)·煙道 (10)·埋土 (11~36) 出土石器

72 d 号 豎 穴

遺 構 (第142図)

本豎穴は72b号豎穴の床面精査中にプランを確認した。72b号の北側床面の暗茶褐色砂を5～20cm掘り下げると72号豎穴の床面よりも約5cm高い位置で床面が現われた。中央部は72号豎穴に掘り込まれていて炉跡は残っていない。また、床面は南側が若干高くなり、72a・72b号豎穴に削られているため南壁はとらえられなかった。東壁隅に幅約1.3mの張出しがあるが、長さ約2.3mの所で破壊を受けて途切れている。規模は東－西方向の長軸約7.3m、短軸推定約5mの楕円形を呈すると思われる。壁は比較的緩やかに立ち上がり、壁高は確認面から約40cmである。豎穴の切り合いを見ると、本豎穴は72b・72c号より時期は古い。床面遺物は張出しに土器片3点、石器1点が出土している。小柱穴は床面壁寄りに5本、壁際に10本、張出しに2本ある。直径は6～20cm、深さ8～25cmである。また、床面の北西側に直径約45cm、深さ約10cmの円形の小ピットがある。

遺 物 (第149図, 第150図－1～6)

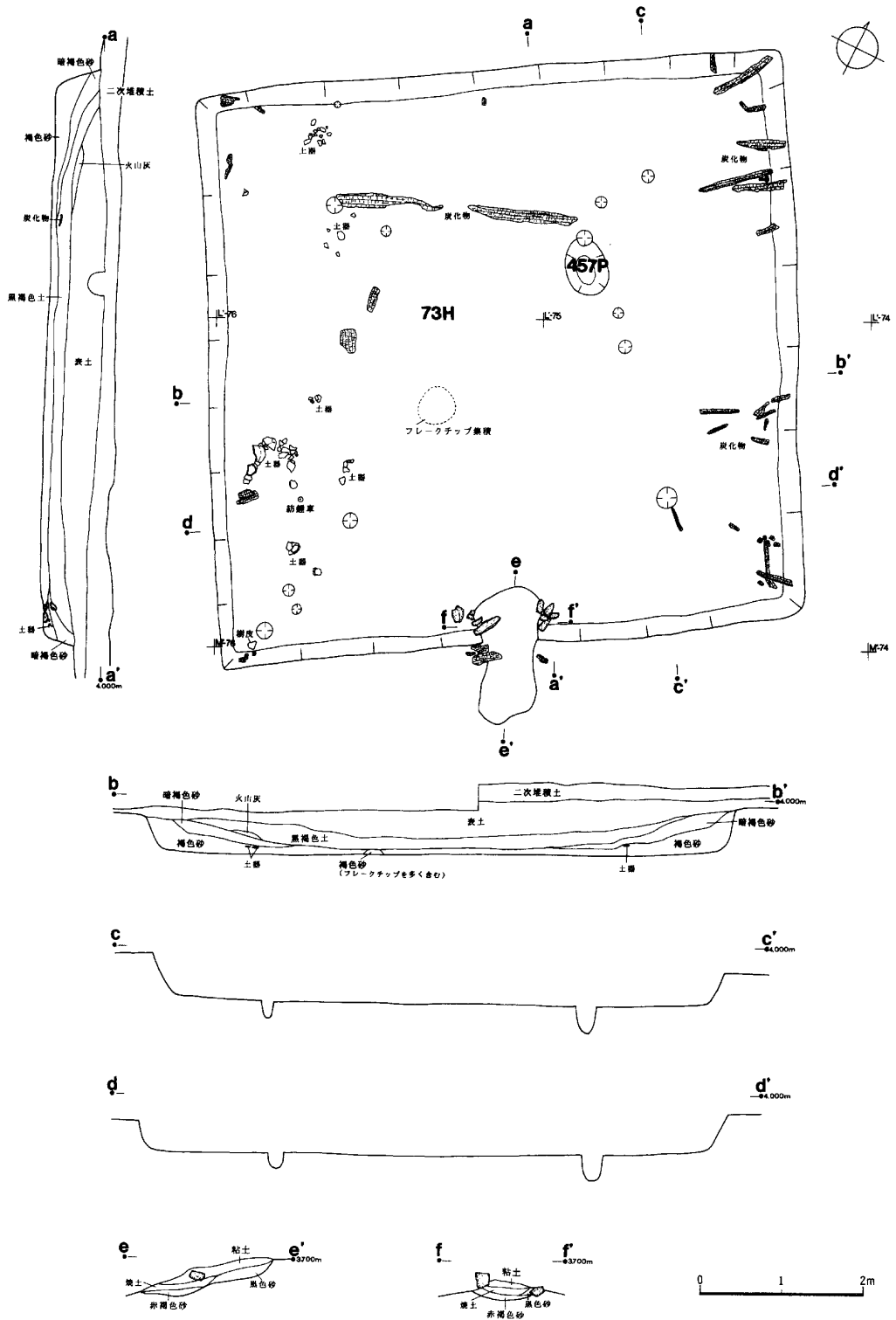
第149図－1は宇津内II b式。2は小突起から垂下した擬縄隆帯は二又に枝別れして連結する。宇津内II b式。3は口縁部に5条の縄線文が施される。口径約23cmの宇津内II b式。4は同II a式。5は縄線文、6は沈線文、7・8は縄文が施される縄文晩期中葉のもの。9は縄文後期堂林式。

石器は第150図－1～3は床面出土。1は石槍。2・3は削器。2は縦方向に微細な使用痕がある。4は有茎石鏃。5は両面ナイフ。6は削器。6点とも黒曜石製。(佐々木 覚)

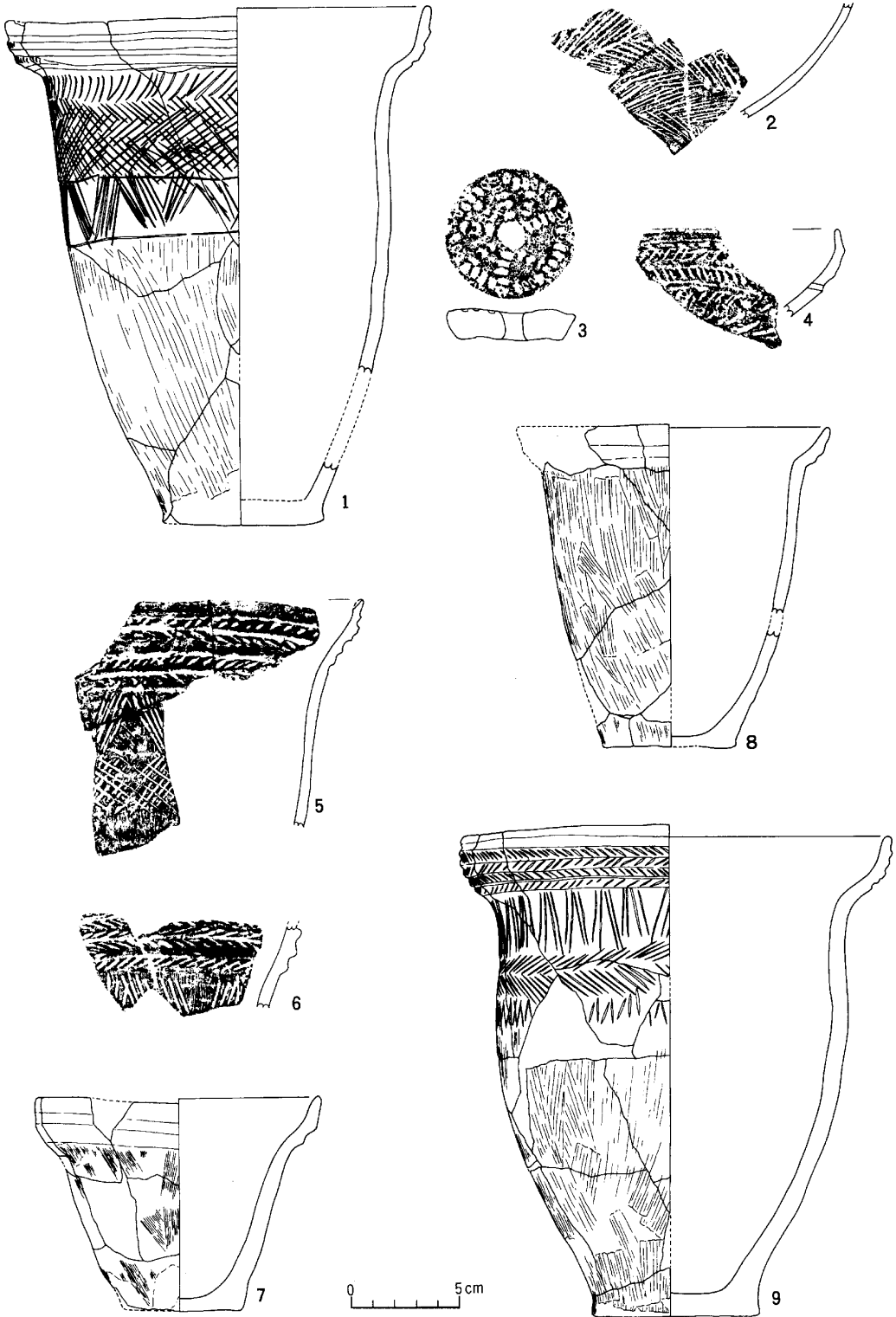
73 号 豎 穴

遺 構 (第151図, 図版23－9, 図版24－1)

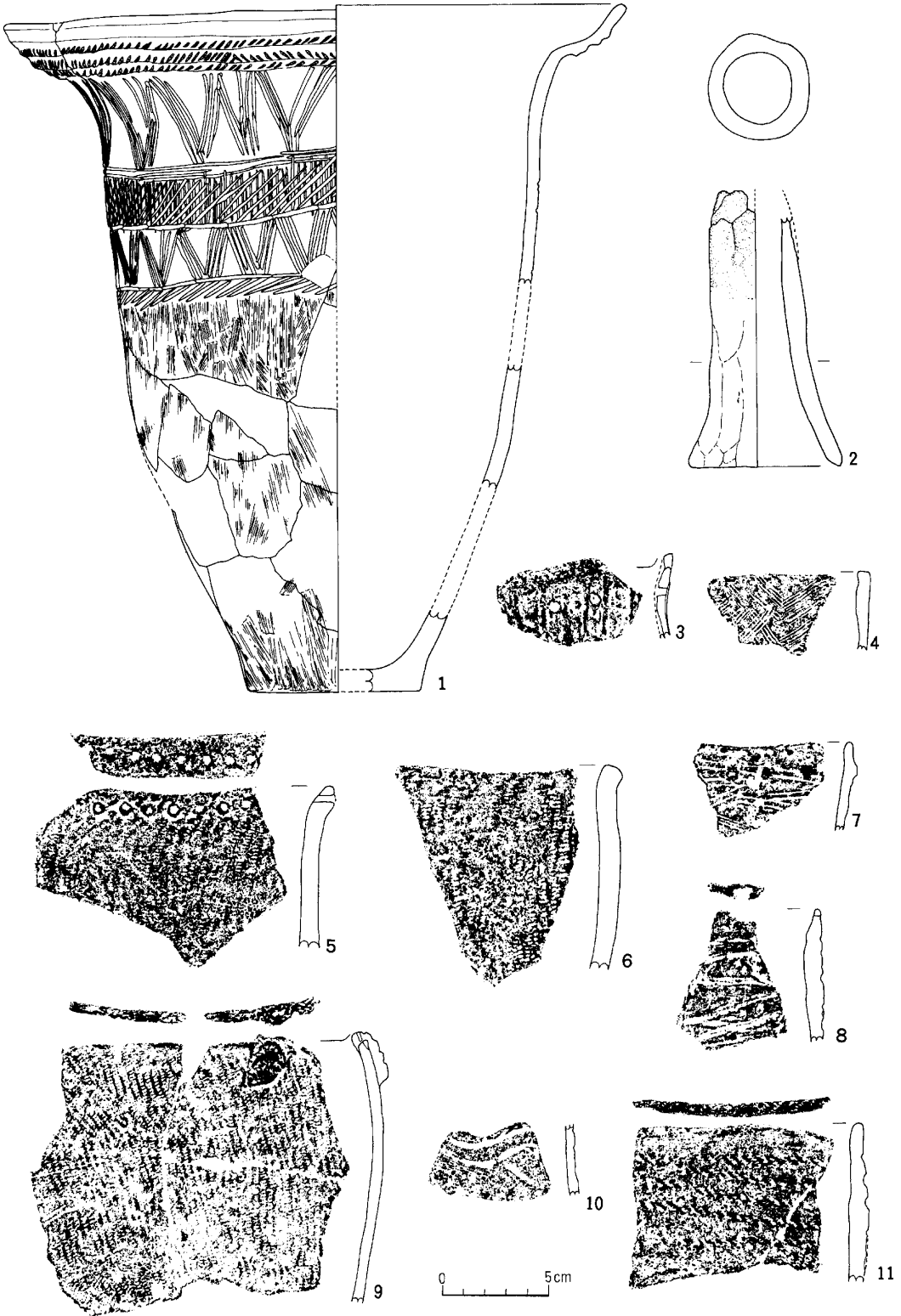
本豎穴はL'74・75, M'74・75グリッドに位置し、東西7m、南北7.20mの方形を呈する。壁高は確認面から西壁で55cm、東壁で40cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土の表土と黒褐色土層の間にはところどころに樽前a火山灰が認められた。床面と壁際から炭化物が検出され、壁際のは壁の上部から床面に倒れ込んだように斜めの状態で出土し、床面のは平らな状態である。南隅からは炭化した木皮もある。豎穴の中央よりやや東側の床面から黒曜石のフレーク・チップの集積が見られる。また、南壁近くの埋土中から第153図－2のフィゴの羽口が出土している。柱穴は支柱穴が直径18～26cm、深さ19～32cmのものが4本ある。その他に直径8～20cm、深さ8～20cmの支柱穴・壁柱穴を9本検出した。カマドは東壁中央に構築され、構築材は粘土である。カマドの両袖部には礫が用いられ、燃烧部の焼土中には骨片が含まれている。煙道の長さは90cm程で緩やかに立ち上がる。豎穴中央より少し北側にピットがある。埋



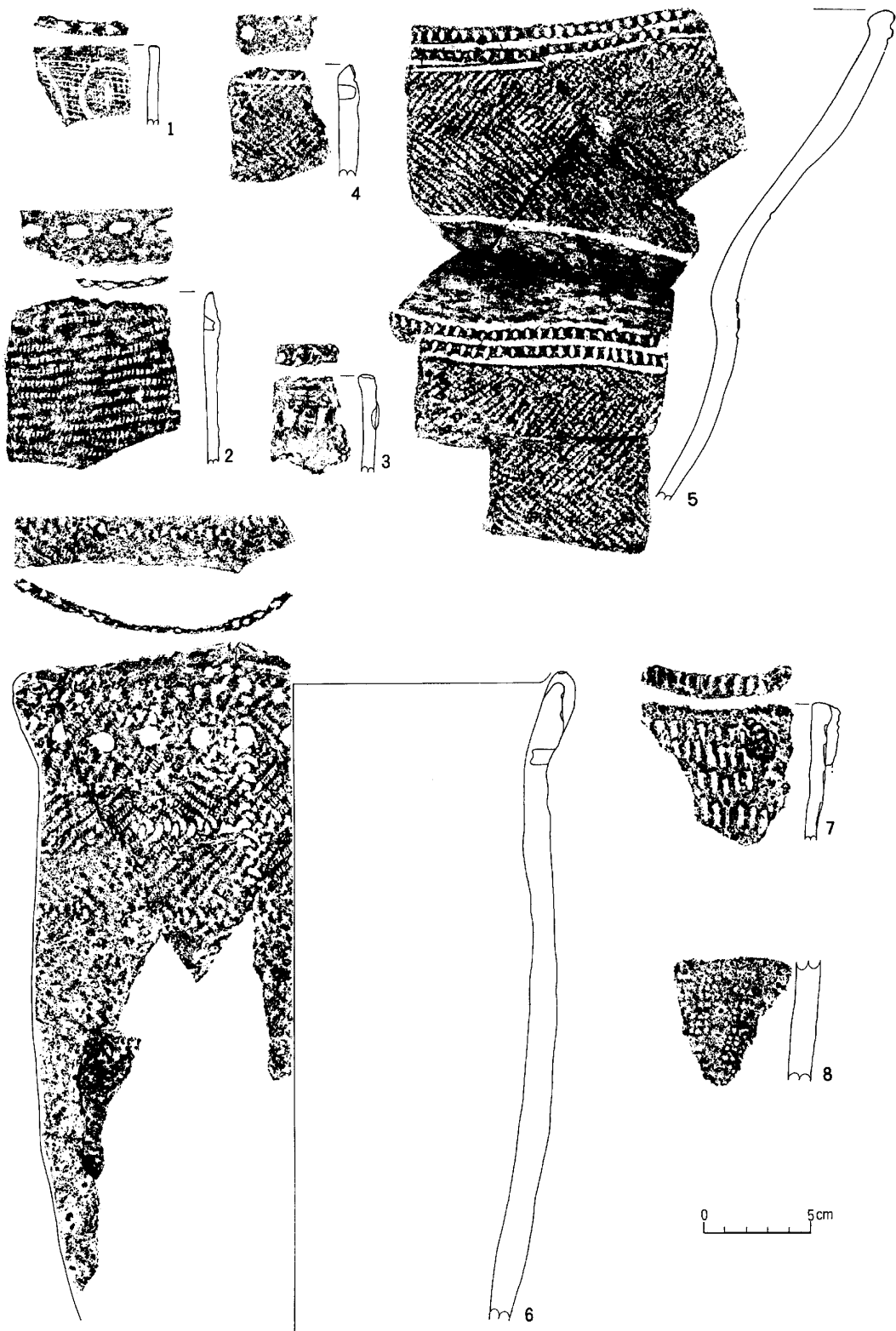
第151図 73号竖穴、ピット457平面図



第152図 73号竖穴床面(1~3)・埋土(4~9)出土土器



第153図 73号竖穴埋土 (1~3・5~11)・カマド (4) 出土土器



第154図 73号竪穴埋土(1~8)出土土器

土は黒色砂が堆積する。

本竪穴も炉跡は検出されず、竪穴の規模・形態ともに64号竪穴と酷似する。

遺物（第152図，第153図，第154図，第150図－7～36，図版24－2～8）

床面から第152図－1～3が出土している。1は口縁部の2段の隆帯上に短刻文が施され、矢羽根状、格子目状の刻線を巡らし、その下に鋸歯状文の刻線を施す。口径20cm，器高24cm。2は高杯。3は紡錘車。直径6cm，厚さ1.4cm，重量55g。中心から外に向けて8本，外周に1本の文様が工具により施されている。

埋土では4～6が擦文土器の口縁部。7は無文の鉢型土器。口径13cm，器高10cm。8も無文の鉢型土器。口径約15cm，器高15cm。9は口縁部に矢羽根状の短刻文が2列施され，胴部は鋸歯状文と矢羽根状文を巡らし，その下に1本の線による鋸歯状文が施される。口径20cm，器高23cm。

第153図－1は口縁部の3段の隆帯上に短刻文が施され，胴部は鋸歯状文と格子目状文を交互に施す複段文様。口径30cm，器高33cm。2はファイゴの羽口。長さ13cm，口径7cm。先端部は焼けている。3は北大式。4は北大式か後北C₂・D式と思われる。5は宇津内II a式。6～11は続縄文初頭。

第154図－1は幣舞式。2は内側の斜め方向から施した突瘤文をもつ縄文晩期前葉。3も同前葉の爪形文。4は縄文後期堂林式。5は同鮎澗式。6は胎土に繊維を含むトコロ六類。7・8は縄文前期末葉の押型文。

石器は床面から第150図－7の石槍，8の石銛，9の両面加工ナイフ，煙道から10の石錐が出土。埋土からは11～14の無茎石鏃，15～22の有茎石鏃，23～25の石槍，26・27のナイフ，28・29・36の削器，30～35の搔器が出土。10が頁岩製の他は黒曜石製。

小 括

本竪穴は東西7m，南北7.20mの方形を呈する擦文期の竪穴で，時期は床面出土の土器から宇田川編年後期に比定される。埋土中から炭化物が検出されていることから焼失住居と考えられる。埋土中からファイゴの羽口が出土しているがこの竪穴に伴うものであるか断定できない。

（佐々木 覚）

74 号 豎 穴

遺 構 (第155図, 図版25-4)

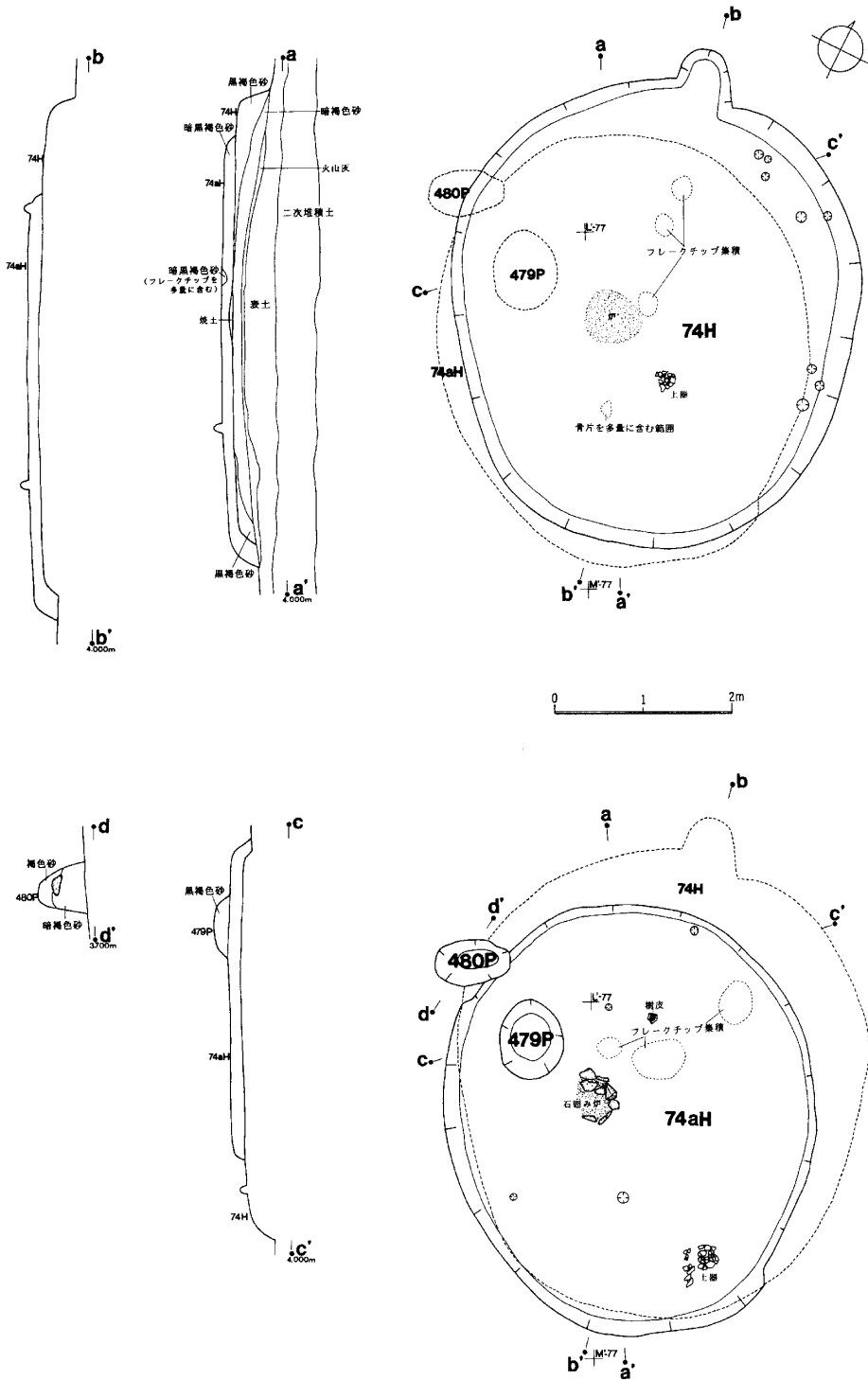
本豎穴は64号豎穴と73号豎穴の間にあり、摩周 b 火山灰に覆われている。豎穴の規模は長軸 5.20m, 短軸 4.60m の楕円形を呈し、北側に長さ 40cm 程の張出し部をもつ。壁高は確認面から北壁側で 40cm, 南壁側で 20cm を測り、壁は斜めに立ち上がる。柱穴は東壁際と北壁際に直径 8 ~ 14cm, 深さ 5 ~ 14cm のものが 8 本検出された。豎穴中央よりやや西側に炉跡の焼土が検出され、焼土には骨片を含んでいる。その北側の床面に黒曜石のフレーク・チップの集積が 3 箇所検出され、炉跡と南壁との中間の床面に直径 20cm 位の範囲で骨片が検出された。豎穴を覆っている火山灰層の上面からは土器片と礫が多数出土し、炭化物も認められた。その北側の火山灰上の炭化粒集積の中と周辺から釘状の鉄製品と鉄片が 7 点出土している。

遺 物 (第156図, 第157図, 第158図, 第159図, 第160図, 第161図-1~4, 図版25-1)

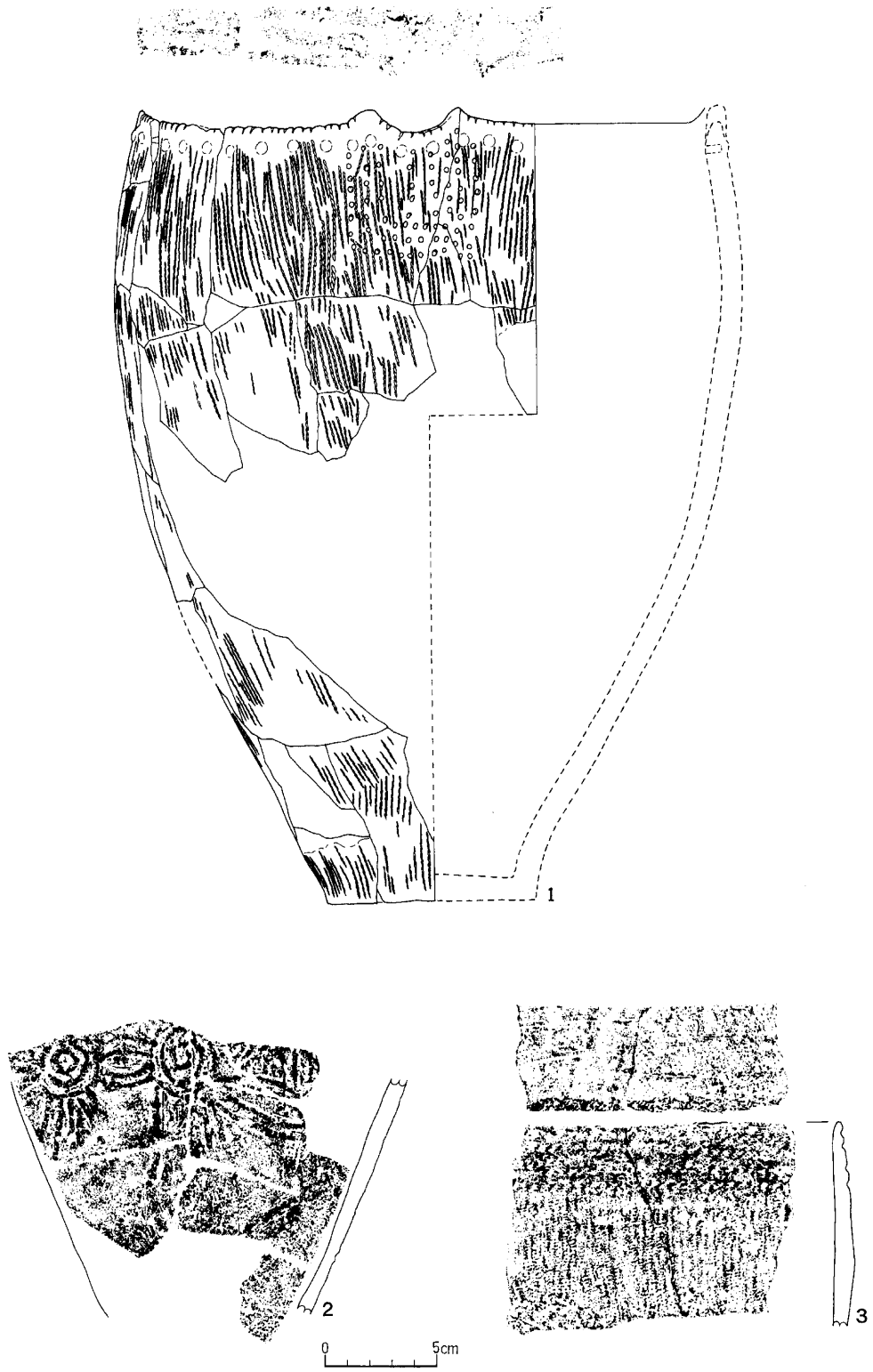
床面から第156図-1~3, 第157図-1, 第158図-1 の土器が出土している。第156図-1 は燃糸文を地文とし、口縁部に突瘤を巡らし口唇部に 2 個 1 対の小突起をもつ。小突起の下には刺突が施される。口径 25cm, 器高 36cm。宇津内 II a 式。2 は同心円文をもつ宇津内 II b 式。3 は続縄文初頭。口縁部に太い縄線文を 5 条巡らす。第157図-1 は口縁部に突瘤文をもち、下部に半截竹管状具による斜めの刺突文と縄端圧痕文により 4 列施文されている。口唇部の小突起の下には半截竹管状具により施文された山形の隆帯をもつ。宇津内 II a 式より多少古いものと考えられる。第158図-1 は広口壺ですぼまった頸部から急な角度で胴部につながる。頸部下には 4 条の沈線と竹管による斜め方向からの刺突文列が 1 条巡る。続縄文初頭であろう。

埋土の火山灰上面からは第157図-2~6 が出土している。2・3 は擦文土器。2 は手塩手法により施文されている。3 は無文の小型土器。4・5 は続縄文初頭。6 は縄文晩期中葉。7 は高坏。8・9 は後北 C₂・D 式。10・11 は宇津内 II b 式。第158図-2 は宇津内 II b 式。3・4 は宇津内 II a 式。5 は縄文晩期前葉。第159図-1~6 は続縄文初頭。7 は幣舞式。8~15 は縄文晩期中葉であろう。8・9 は口縁部内側に縄線文を巡らす。11 は口縁部に沈線と刺突文, 12 は土器底部に刺突文, 13 も口縁部下に刺突文を施す。14 は底部に縄文がある。16 は口縁部内側に縄端圧痕文を施す。17~19 は縄文晩期前葉。17 は無文で内側に斜めの刺突文, 18 は無文で口唇部に刻みをもつ。20 も口唇部に刻みをもつ。21 は口唇部が肥厚し、口唇上部に斜めの刺突文を施す。22 は縄文後期堂林式。23 は土製品。

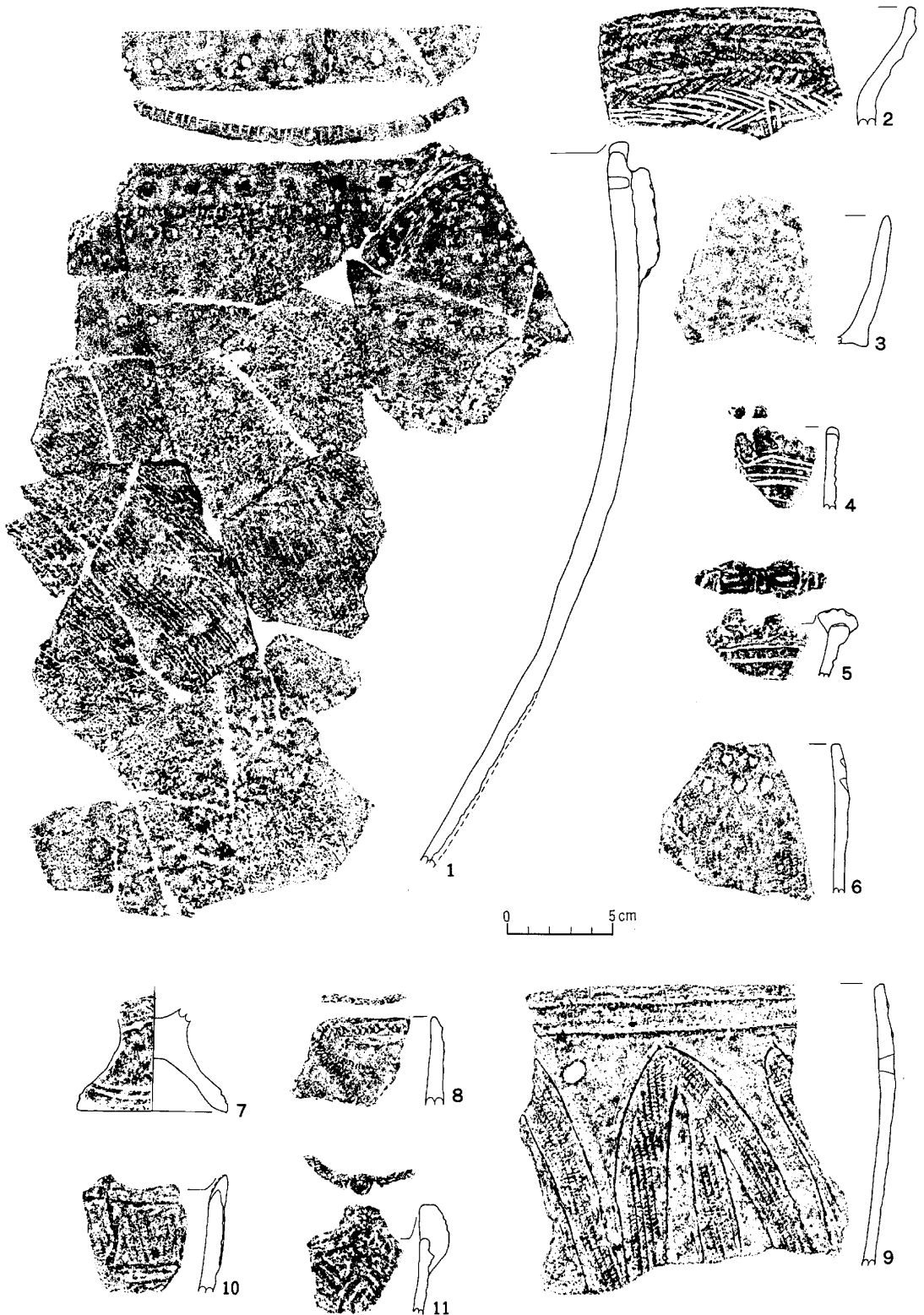
石器は床面から第160図-1・2 の有茎石鏃と 3 のナイフが出土している。埋土からは 4~11 の石鏃。12 は石槍。13~15 がナイフ。16~26 が削器。27 が搔器。28 は磨製石斧。15 が硬質頁岩製, 28 が泥岩製でありそれ以外は黒曜石製。第161図-1 は泥岩製の磨製石斧。2 は砂岩製の凹石。3・4 は火山灰の上から出土した釘状の鉄製品。



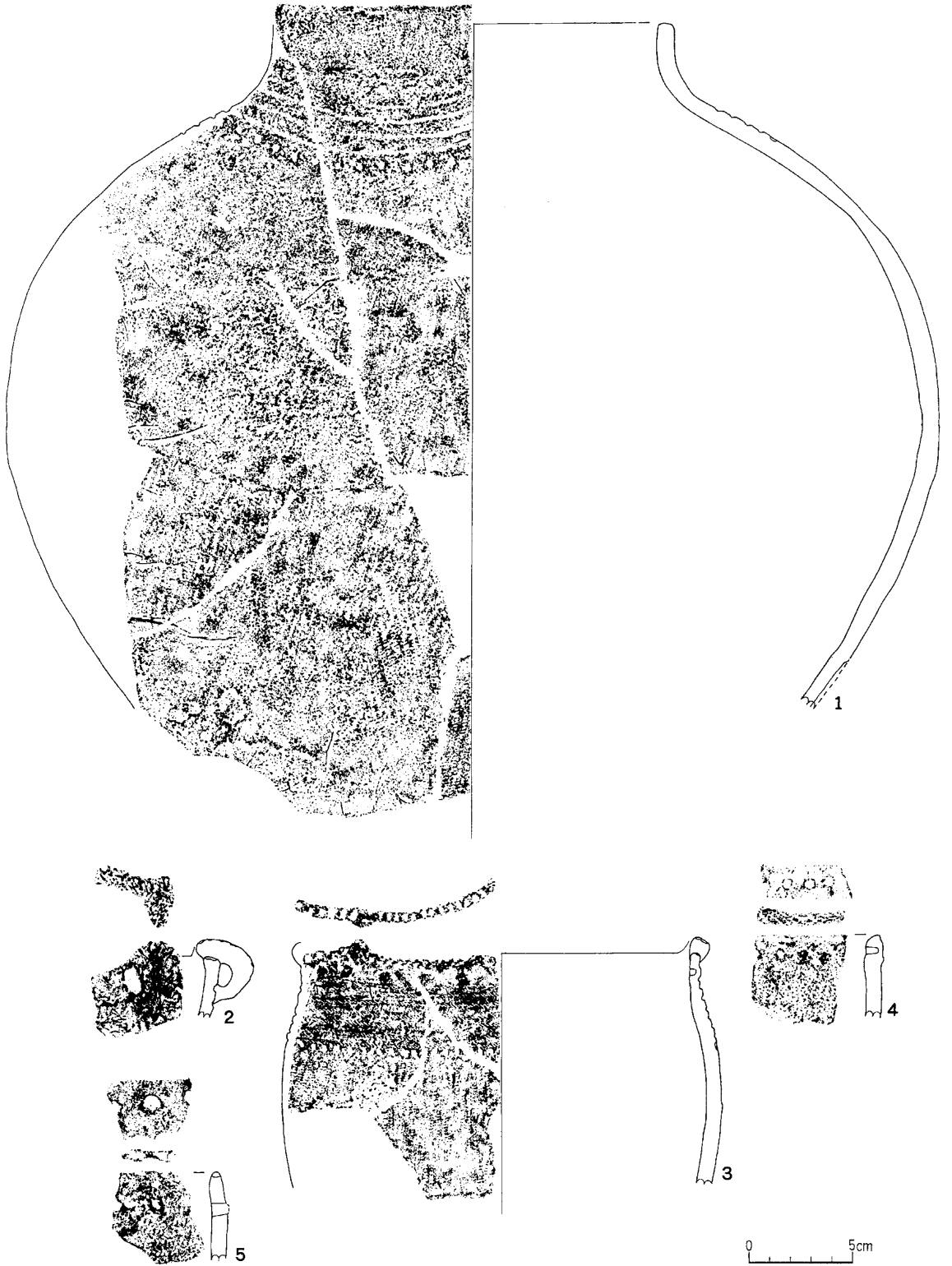
第155図 74号竖穴, 74a号竖穴, ピット479, 480平面図



第156图 74号竖穴床面(1~3)出土土器



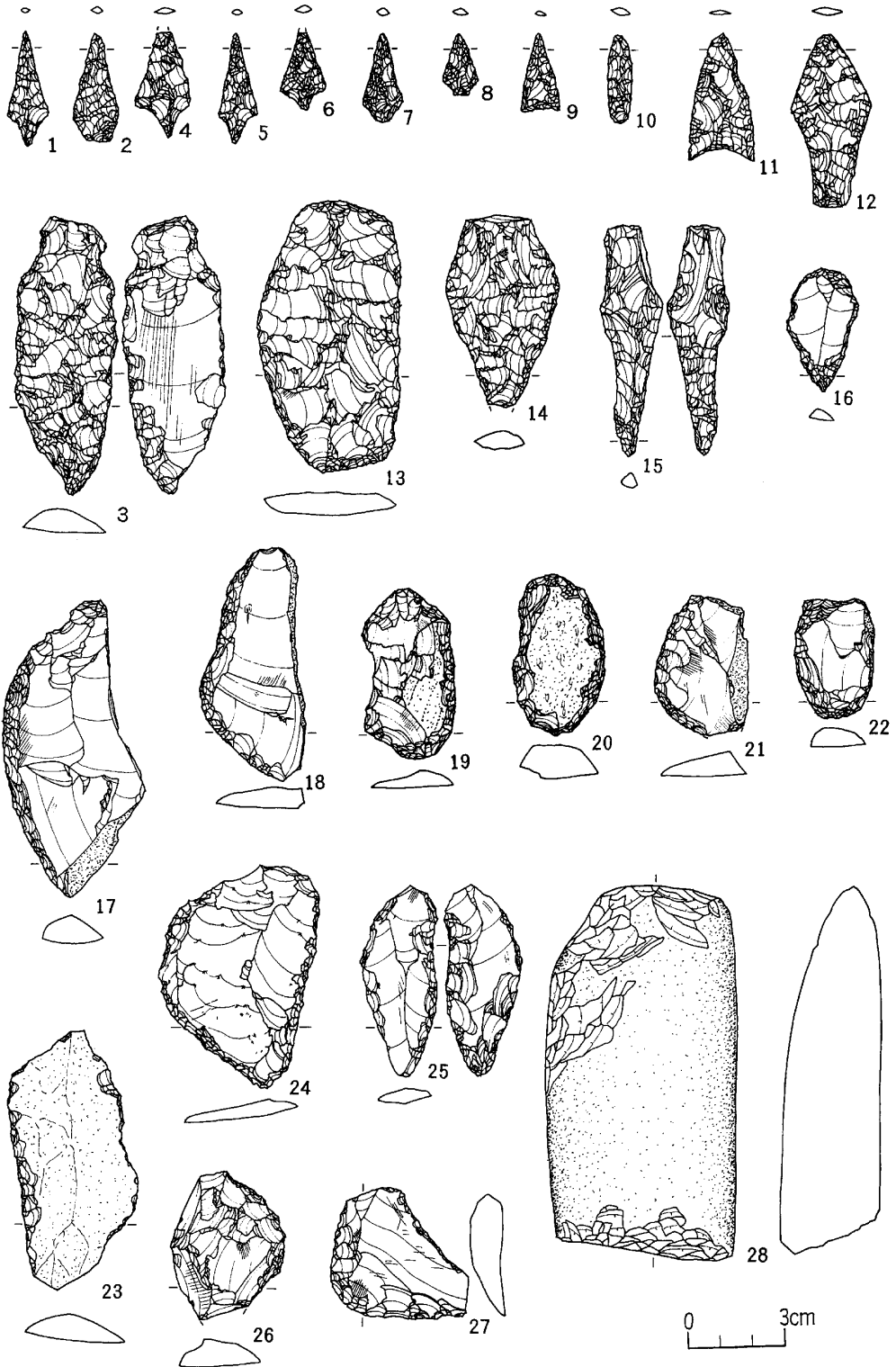
第157图 74号竖穴床面(1)·火山灰上(2~6)·埋土(7~11)出土土器



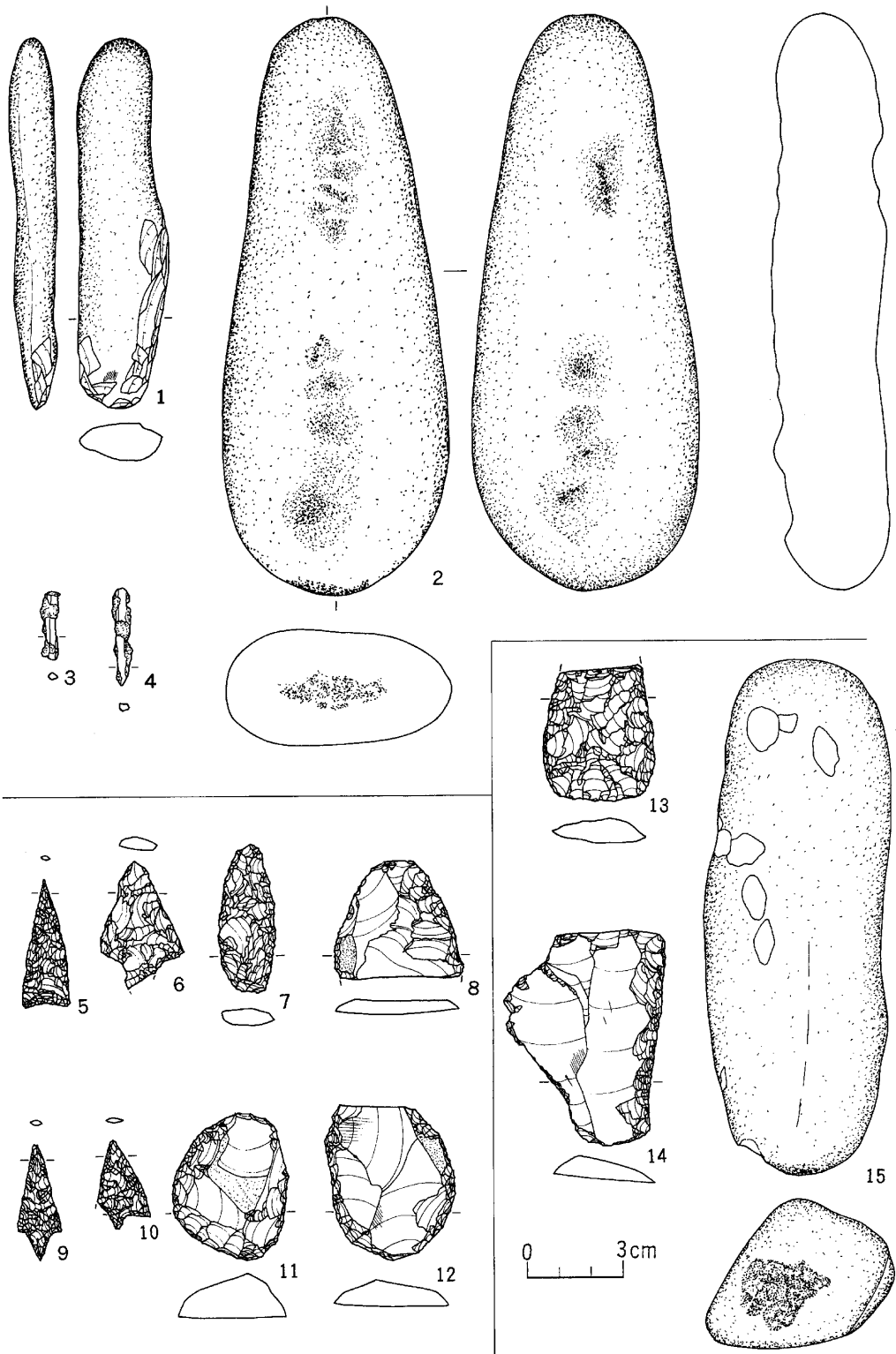
第158図 74号竪穴床面(1)・埋土(2~5)出土土器



第159图 74号竖穴埋土(1~23)出土土器



第160圖 74号豎穴床面(1~3), 74号豎穴埋土(4~28)出土石器



第161図 74号竪穴埋土 (1・2)・火山灰上 (3・4), 74a号竪穴床面 (5~8)・埋土 (9~12), 75号竪穴埋土 (13~15) 出土石器・鉄製品

小 括

本竪穴の時期は床面出土の土器から統縄文字津内期より多少古いものと考えられる。64号竪穴・73号竪穴・74号竪穴の立地を見ると、擦文期の64号竪穴と73号竪穴は74号竪穴の窪みを避けて構築されたように見受けられる。また、73号竪穴の埋土中からフイゴの羽口が出土していること、74号竪穴の埋土の火山灰上部の炭化粒集積の中から釘状の鉄製品が出土していることから鉄の加工が行われていた可能性が考えられる。(佐々木 覚)

74 a 号 竪 穴

遺 構 (第155図, 図版25-4)

74号竪穴と重なって検出された竪穴で、74号より多少南にずれて構築されており、長軸4.80m、短軸4.20mの楕円形を呈する。壁高は南側で確認面から35cm、北側で74号竪穴の床面から14cmを測り、斜めに立ち上がる。柱穴は主柱穴が確認できなかったが直径8~14cm、深さ8~10cmのものが5本検出された。竪穴の中央よりやや西寄りに石囲み炉をもち、焼土中からは骨片が検出されている。その北側に3箇所フレーク・チップの集積が認められた。

遺 物 (第162図, 第161図-5~12, 図版25-2・3)

床面から第162図-1~7の土器が出土している。1は撚糸文を地文とし、口縁部に突瘤文をもつ。口径13cm、器高16cm。2は口縁部に突瘤文と4列の縄線文を巡らし、口唇部に突起を1対もつ。突起の下には隆帯を垂下させている。口径17cm、器高24cm。いずれも宇津内II a式。3・4も宇津内II a式。5・6は統縄文初頭。7は幣舞式。

埋土からは8が宇津内式の底部。9は縄文晩期前葉の爪形文。10は縄線文を巡らした異形土器。縄文晩期中葉と思われる。11・12は刺突文を施した縄文晩期中葉。13は内側から斜めの突瘤文をもつ縄文晩期前葉。

石器は床面から第161図-5が無茎石鏃。6が有茎石鏃。7が小型ナイフ。8が削器。埋土からは9・10が有茎石鏃。11が搔器。12が削器。すべて黒曜石製。

小 括

本竪穴は床面出土の土器から統縄文字津内II a式のものと考えられる。(佐々木 覚)



第162图 74a号竖穴床面(1~7)·埋土(8~13)出土土器

75 号 竪 穴

遺 構 (第163図, 図版25-5)

本竪穴はD'75・76グリッドに位置する。第II層の茶褐色砂層を約15cmほど下げた段階で掘り込みを確認した。北東壁隅がピット463, 464に切られているものの規模は長軸約3.14m, 短軸約2.50mの不整形を呈する。壁高は確認面から約20cmを測り、緩く立ち上がる。9個の角礫を利用した石囲み炉は中央部からやや南側に寄った位置にあり、南側は開口する様である。炉石の2点は凹み石である。

柱穴は石囲み炉を囲む4本が直径約17~22cmと大きいもので支柱穴と考えられる。深さは5~12cmである。

遺 物 (第164図-1~5, 第161図-13~15)

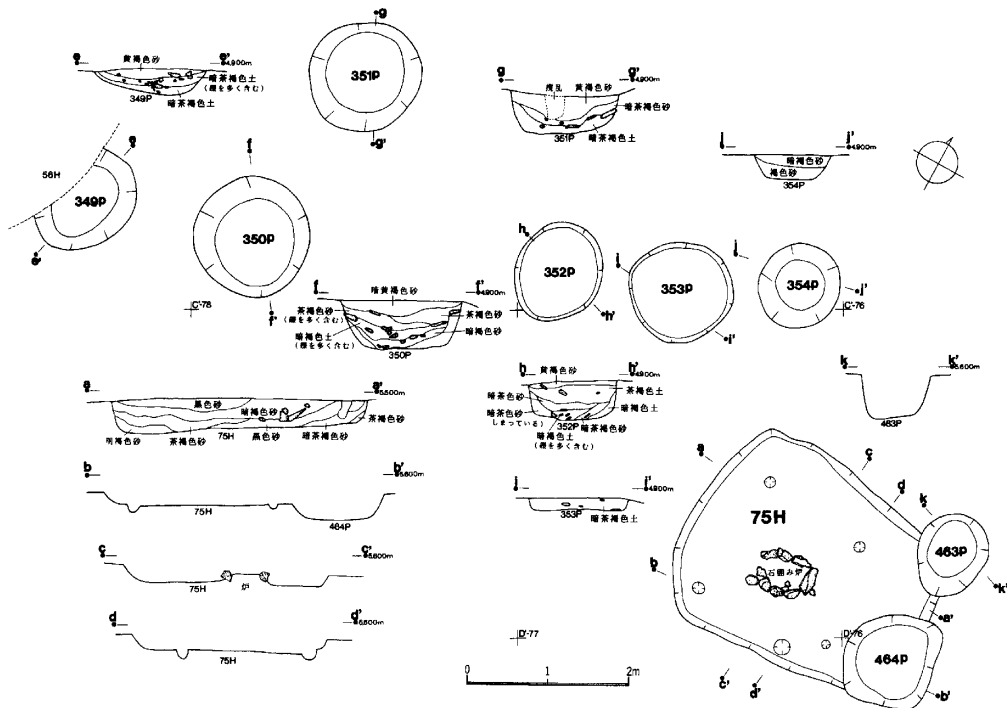
第164図-1は宇津内II b式。2は口縁下部に「◇」字状の隆帯を施し、四隅に円形刺突文で強調されている。宇津内II b式。3は宇津内系の底部であろう。4は宇津内II b式。5は同II a式。

石器は第161図-13が両面加工ナイフ。14は削器。15はたたき石。

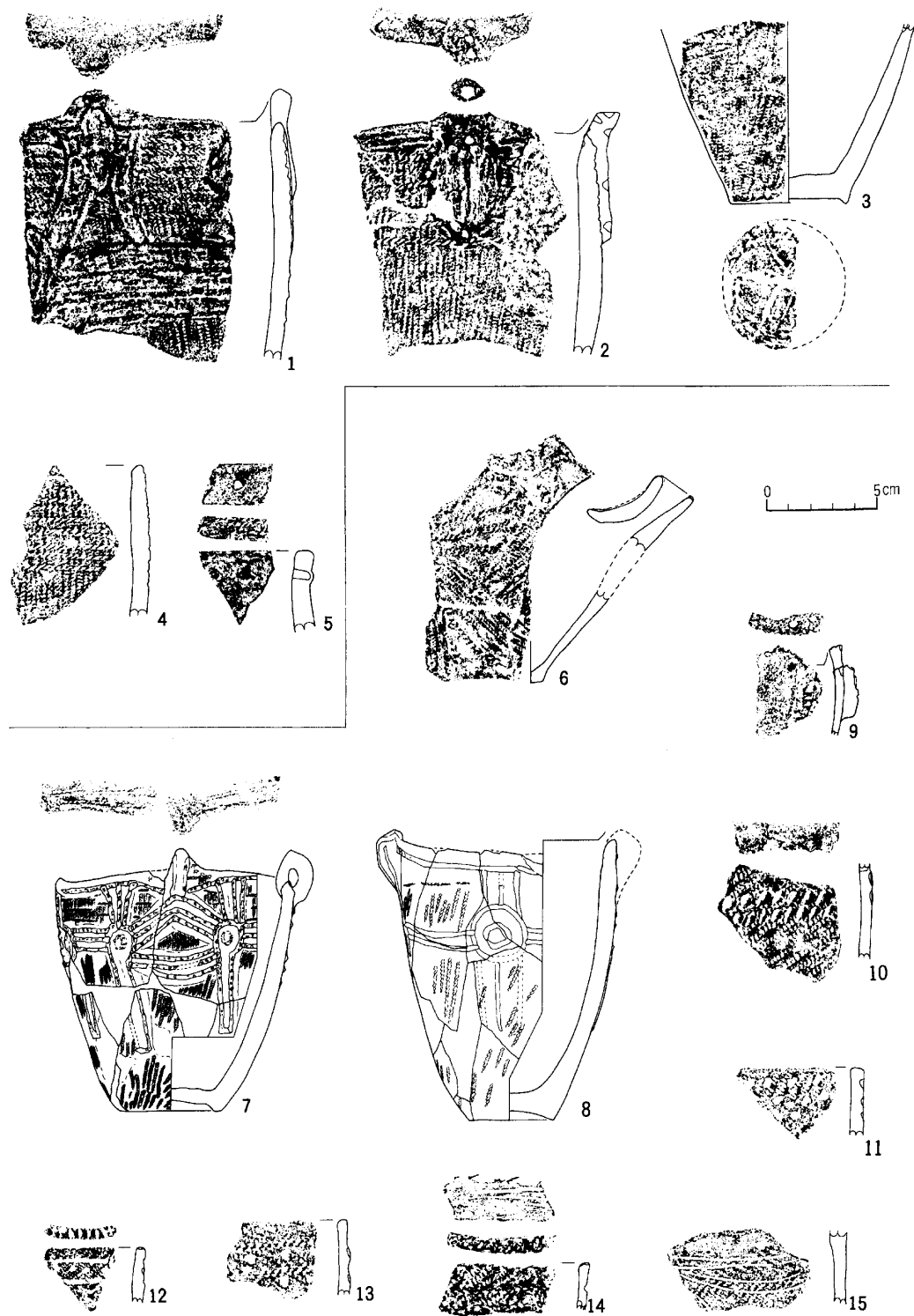
小 括

本竪穴は石囲み炉をもつ続縄文期の小型竪穴である。詳細な時期は不明であるが、宇津内系のものであろう。

(武田 修)



第163図 75号竪穴, ピット349, 350, 351, 352, 353, 354, 463, 464平面図



第164图 75号竖穴埋土(1~5), 76号竖穴埋土(6~15)出土土器

76 号 豎 穴

遺 構 (第165図, 図版26-1)

本豎穴は68号豎穴の北側にあり長軸4.50m, 短軸4.10mの円形を呈し, 壁高は確認面から北西側で30cm, 南東側で10cmを測り, 壁は緩やかに立ち上がる浅い皿状を呈している。柱穴は主柱穴が壁近くに直径20~30cm, 深さ16~20cmのものが2本検出され, 壁柱穴は直径8~14cm, 深さ6~14cmのものが10本検出された。炉跡は豎穴の中央に位置し, 焼土は直径1mで北側に礫が3個検出されていることから石囲み炉と考えられる。炉跡の焼土は骨片を含んでいる。北壁付近が攪乱を受けており, 床面が一部破壊されている。炉と南壁の間の床面直上から炭化物が出土していることから本豎穴は焼失されたものと思われる。また, 床面より25cm程上の埋土中から直径20cmの範囲で骨片が検出されている。

遺 物 (第164図-6~15, 第168図-1~14, 図版26-2・3)

すべて埋土出土。第164図-6は後北C₂・D式の注口土器。7は吊り耳と2個1対の小突起をもち, その下部に小さな同心円文を施す。口径10cm, 器高12cm。8は小突起とその間に同心円文を施し, 隆帯で連結している。口径10cm, 器高13cm。いずれも宇津内II b式である。9は幣舞式。10は縄文晩期前葉の内側から斜めの突瘤文をもつ爪形文。11~13は縄文晩期中葉。14は斜めの突瘤文をもつ縄文晩期前葉。15は縄文後期縄濶式。

石器は床面から第168図-1~3が出土している。1・2は削器。3は緑色泥岩製の磨製石斧。埋土からは4・5の有茎石鏃。6の無茎石鏃。7~13の削器。14の搔器が出土。3以外は全て黒曜石製。

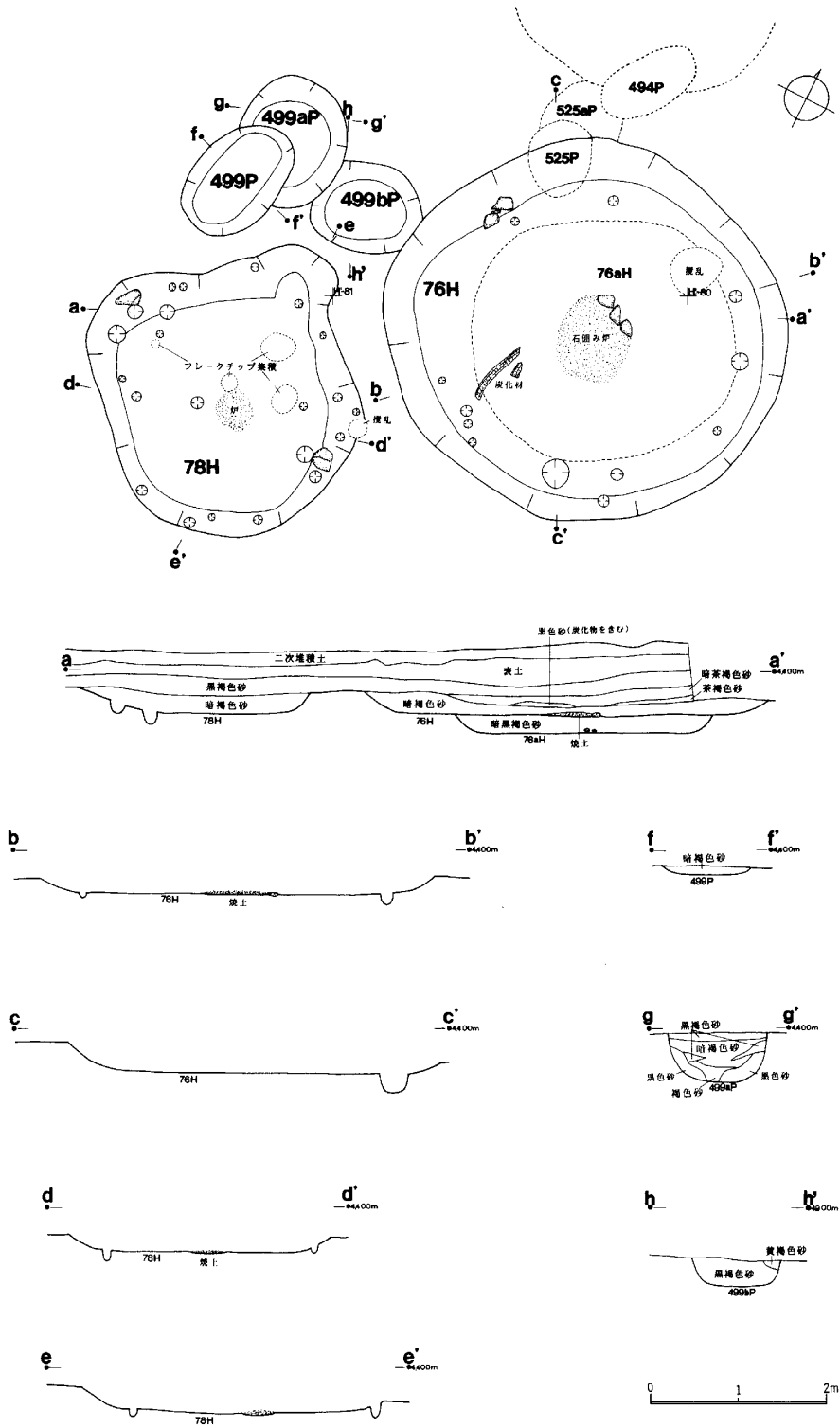
小 括

本豎穴は床面からの土器の出土は無いが, 埋土から続縄文字津内II b式が出土している。断定できないがこの時期の可能性がある。(佐々木 覚)

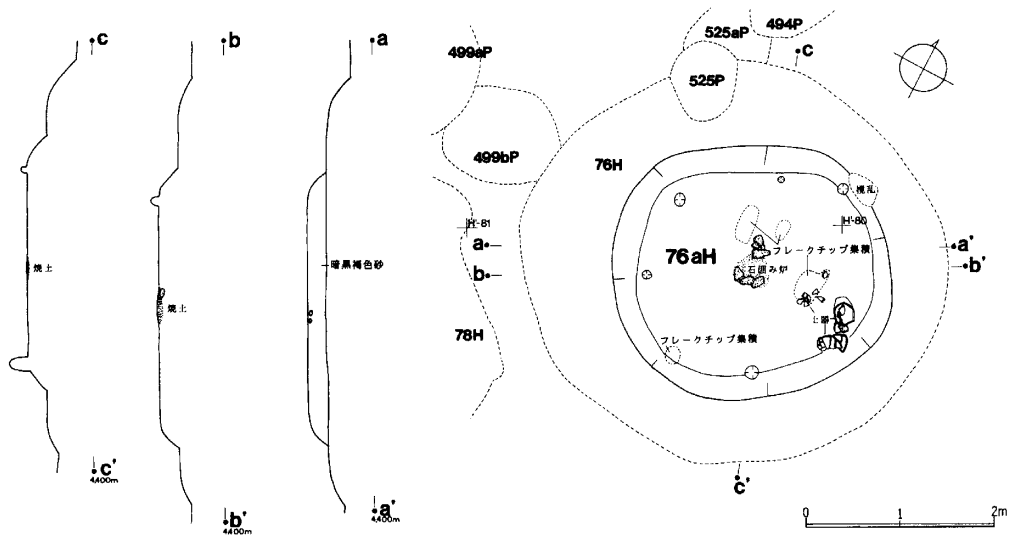
76 a 号 豎 穴

遺 構 (第166図, 図版26-4)

本豎穴は76号豎穴と重複しているもので, 76号豎穴の床面精査の途中で検出された豎穴である。長軸3m, 短軸2.70mの円形を呈する。壁高は76号豎穴の床面から20cmを測り, 緩やかに立ち上がる。柱穴は壁柱穴が直径8~14cm, 深さ6~20cmのものが5本等間隔に検出されている。豎穴中央に炉跡が検出され, 周囲に4個の礫が認められたことから石囲み炉と考えられる。また, 黒曜石のフレーク・チップの集積が炉と東壁との間, 炉の北側, 炉の北西側, 南壁際の4箇所を検出された。76号豎穴の床面の一部を破壊した攪乱は, 本豎穴の北壁の一部を破壊しているが床面までは及んでいない。



第165図 76号竪穴，78号竪穴，ピット499，499a，499b平面図



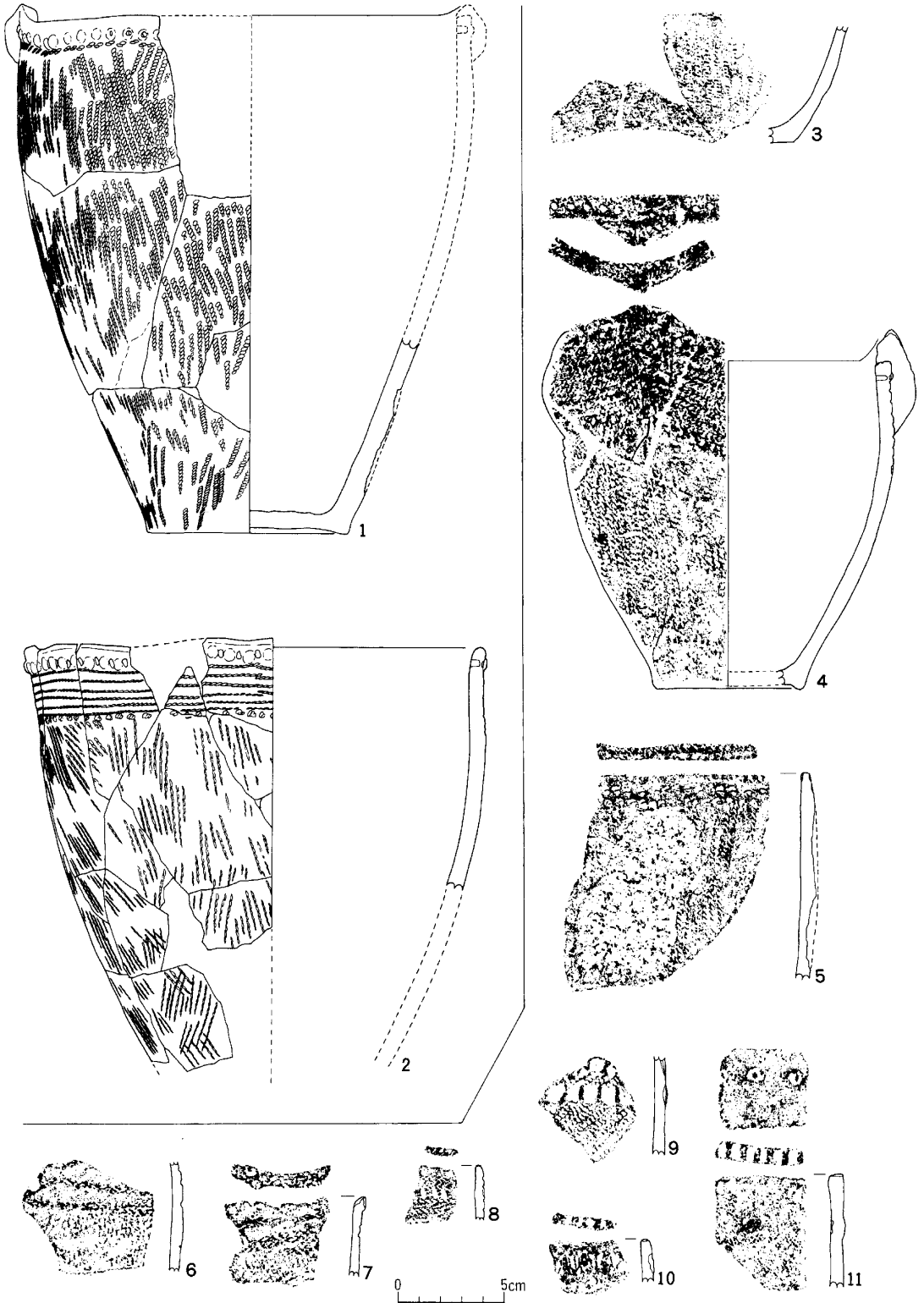
第166図 76a号竪穴平面図

遺物 (第167図-1・2, 図版26-5・6)

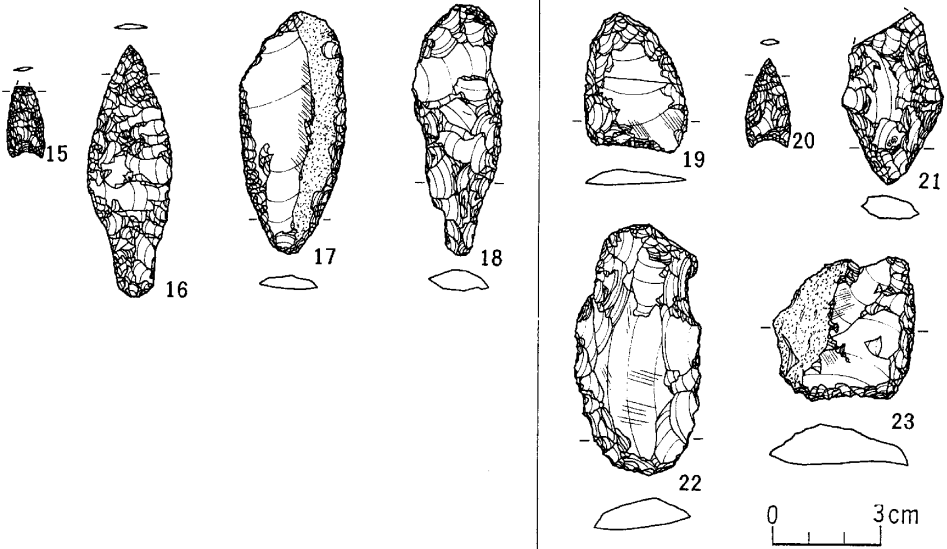
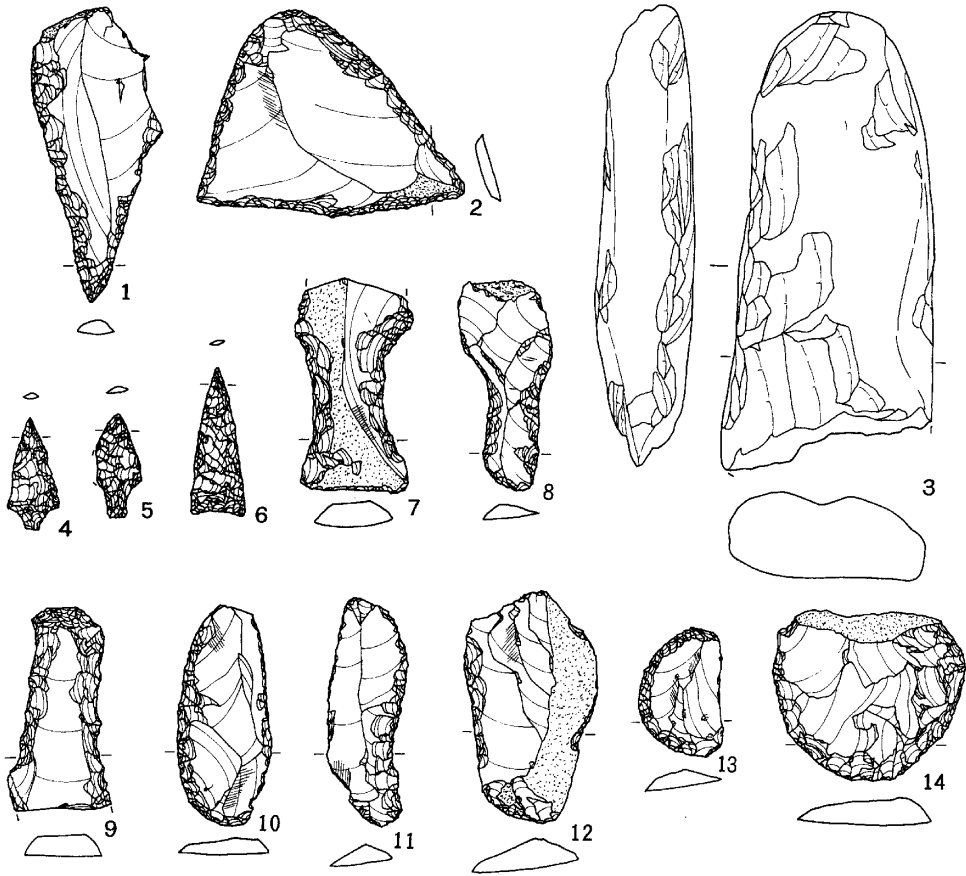
床面から第167図-1・2の字津内II a式が出土している。1は口縁部に突瘤文を施し、口唇部に小突起をもつ。口径約21cm, 器高25cm。2は口縁部に突瘤文と6本の縄線文を施し、縄線文の下に縄端圧痕文を1列巡らす。口径約22cm, 器高は底部を欠くが約23cmと思われる。

小括

本竪穴の時期は床面出土の土器から縄文文字津内II a式に比定される。 (佐々木 覚)



第167图 76a号竖穴床面 (1·2), 77号竖穴床面 (3)·埋土 (4~11) 出土土器



第168図 76号竖穴床面(1~3)・埋土(4~14), 77号竖穴埋土(15~18), 78号竖穴床面(19)・埋土(20~23)出土石器

77号 竪 穴

遺 構 (第169図, 図版27-1)

本竪穴は76号竪穴の北東0.50mにあり、長軸3.30m、短軸2.80mの楕円形を呈し、壁高は確認面から北側で30cm、南側で20cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。南壁の一部はピット494により、西壁の一部はピット481によってそれぞれ破壊されている。柱穴は直径8~14cm、深さ7~18cmのものが15本確認された。炉は中央より南側にあり、西側には5個の礫によって囲まれているが、東側には礫は確認されなかった。炉の焼土中から骨片が検出されている。

遺 物 (第167図-3~11, 第168図-15~18)

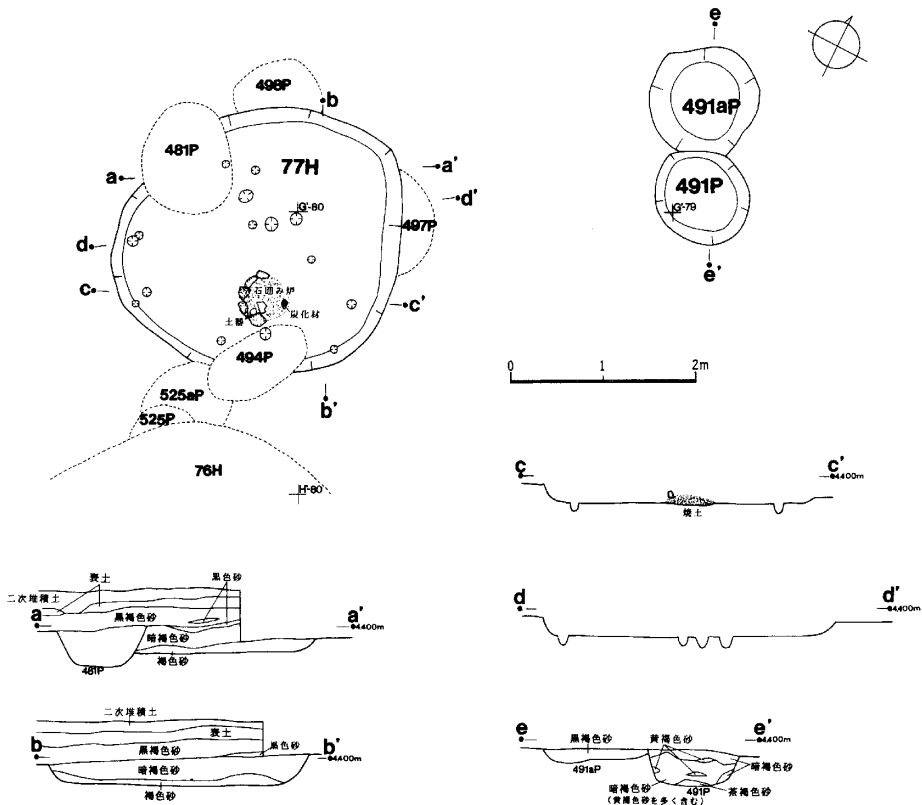
床面から第167図-3の底部が出土している。宇津内式である。埋土からは4が突瘤と9条の縄線文と縄端圧痕文を巡らした宇津内II a式。5・6は続縄文初頭。7は幣舞式。8は縄文晩期中葉。9~11は縄文晩期前葉。

石器は埋土出土で第168図-15が無茎石鏃。16が石槍。17・18は削器。いずれも黒曜石製。

小 括

本竪穴の床面から宇津内式の底部が1点出土しているのみであるためこの時期のものとは断定できない。

(佐々木 覚)



第169図 77号竪穴, ピット491, 491a平面図

78 号 豎 穴

遺 構 (第165図, 図版27-2)

本豎穴は76号豎穴の南西0.50mにあり, 東西3.20m, 南北3mの不整円形を呈し, 北側に約30cmの張出部をもつ。壁高は確認面から25cm程で壁は緩やかに立ち上がる。柱穴は緩やかな壁面に直径8~20cm, 深さ6~14cmのものが15本, 床面に直径8~18cm, 深さ8~16cmのものが7本検出された。豎穴のほぼ中央に炉跡と思われる焼土があり, 焼土の北東側, 北側, 北西側, 西壁際の4箇所に黒曜石のフレイク・チップの集積が検出された。

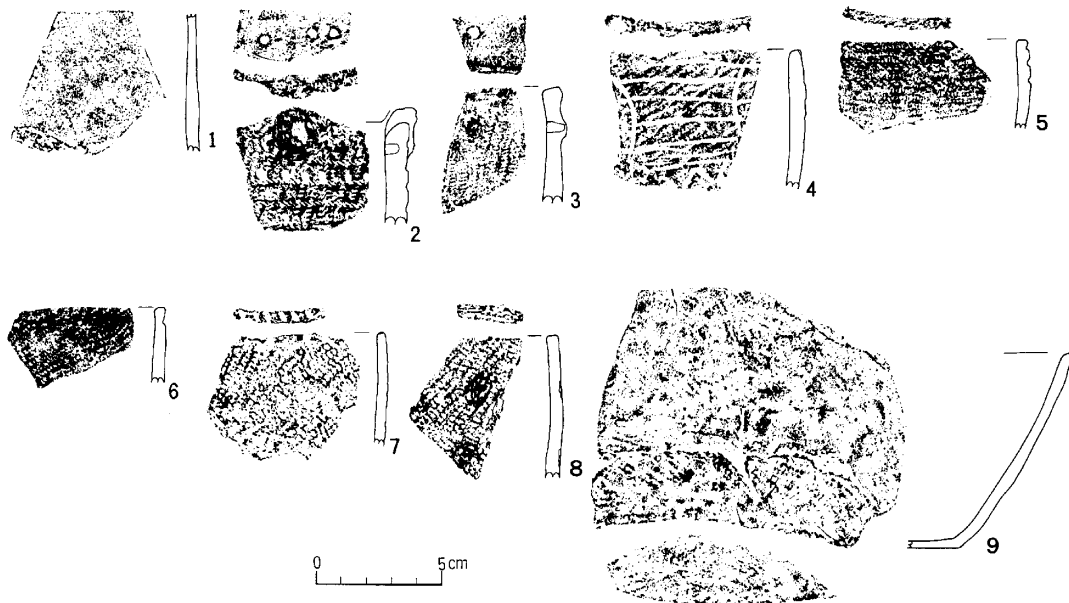
遺 物 (第170図, 第168図-19~23)

床面から第170図-1が出土している。縄文晩期と思われる。埋土からは2が字津内II a式。3は続縄文初頭。4は幣舞式。5・6は縄線文を巡らした縄文晚期中葉。7は縄文晩期。8は縄端圧痕文を施した縄文晚期中葉。9は縄文晩期の底部。

石器は第168図-19が床面出土の削器。埋土からは20が無茎石鏃。21はナイフ。22・23は削器。いずれも黒曜石製。

小 括

本豎穴は床面から縄文晩期の土器が出土しているが1点のみであるためこの時期のものとは断定できない。(佐々木 覚)



第170図 78号豎穴床面(1)・埋土(2~9)出土土器

79 号 竪 穴

遺 構 (第171図, 図版28-1)

本竪穴はJ'82・83, K'82・83グリッドに位置し、直径約4.30mの不整形円形を呈し、西側に約20cmの張出し部をもつ。壁高は確認面から西壁で40cm, 東壁で30cmを測り、斜めに立ち上がる。柱穴は直径8~20cm, 深さ6~18cmのものが18本検出された。竪穴の中央には10個の礫に囲まれた石囲み炉が認められた。埋土中から黒曜石のフレーク・チップの集積が2箇所で見出されている。

遺 物 (第172図, 第173図, 第174図, 第175図, 第176図, 第177図, 図版28-2~6)

床面から第172図-1~3, 第173図-1~3が出土している。第172図-1は口唇部に刻みをもち、口縁部に突瘤と1条の縄線文と縄端圧痕文を1列巡らす。口径12cm, 器高14cm。宇津内II a式である。2・3も口縁部に突瘤文をもつ宇津内II a式。

第173図-1も口縁部に突瘤をもつ宇津内II a式。2は口縁部が外反する続縄文初頭。3は宇津内式の底部。埋土の4・5は後北C₂・D式。6~9は宇津内II a式。6は口唇部に刻みをもち、口縁部に突瘤を施す。地文は撚糸である。口径20cm, 器高25cm。7は口唇部に縄文と1対の小突起をもち、口縁部に突瘤文と縄線文を巡らす。口径16cm, 器高15cm。10は宇津内II a式よりも多少古いものと思われる。

第174図-1~3は宇津内II a式。1は口径30cmの大型土器であるが胴下部が欠けているため器高は不明である。口縁部は突瘤をもち、5条の縄線文と縄端圧痕文を1列巡らす。2対の小突起があり、小突起から垂直と斜めに隆帯を垂下させている。斜めの隆帯は隣の隆帯に連結している。隆帯には縄端圧痕文が施されている。2は口唇部に小突起を1対もち、口縁部に突瘤と6条の縄線文と縄端圧痕文を1列巡らす。突起の間には小さな貼瘤があり、突起と貼瘤の間をそれぞれ2条の隆帯が「V」字状に連結している。口径13×15cm, 器高17cm。3は地文が撚糸文であり、口縁部に突瘤をもつ。口径9cm, 器高10cm。4は宇津内系。

第175図-1は口唇部に1対の吊り耳をもち、口唇部の内側にも縄文を施している。口縁部は突瘤と5条の縄線文と縄端圧痕文を3列巡らす。吊り耳の間に小さな同心円文があり、同心円文から口縁部にかけて「M」字状に隆帯を施している。また、吊り耳からも3条の隆帯を垂下させている。宇津内II a式。口径18cm, 器高24cm。2・3は宇津内式の底部。4~10は続縄文初頭。11・12は緑ヶ岡式。第176図-1~3は続縄文初頭。4~8は幣舞式。9~12, 15・16・18は縄文晩期中葉。7・9・10は縄線文をもつ。12は縄端圧痕文を施す。15・16は刺突文をもち、18は沈線を施す。13は無文で口唇部に刻みをもつ。14・17は縄文のみの口縁部。縄文晩期と思われる。19・20は両側から加工を加え穿孔されている。21は縄文のみの底部。22は縄文晩期前葉の爪形文。23・24はトコロ五類。

石器は床面から第177図-1の両面加工ナイフが出土している。埋土からは2・3のナイフ。

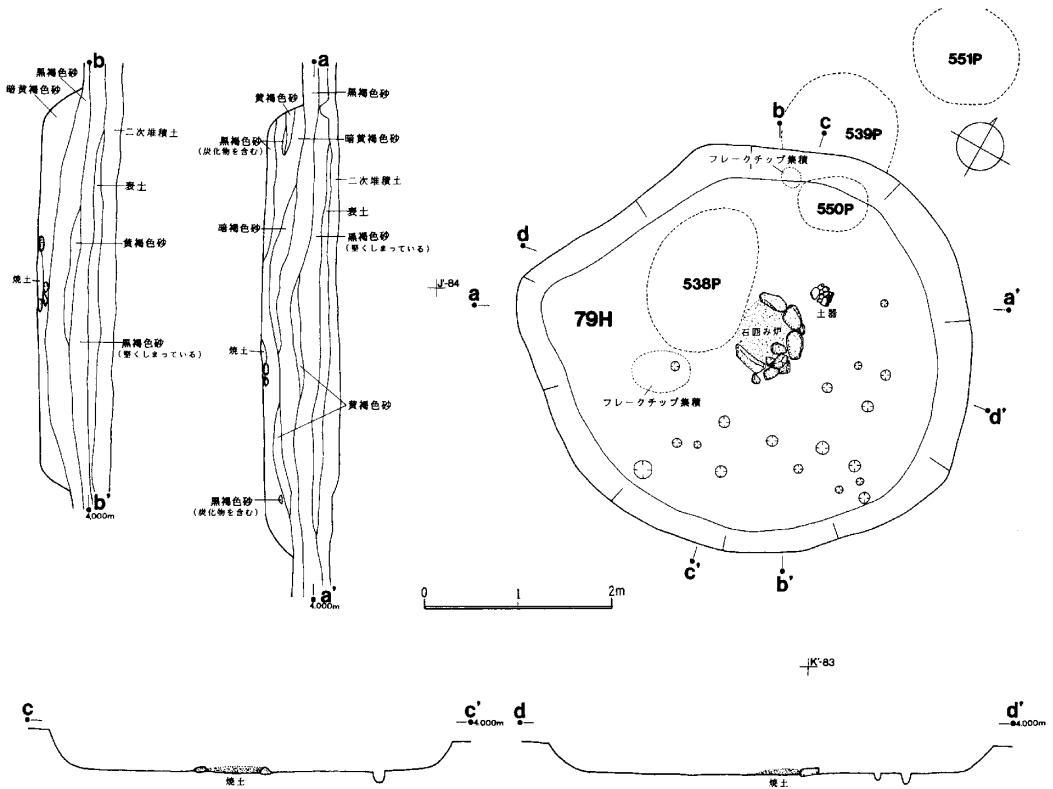
常呂川河口遺跡

4～12は削器。7は表裏の一縁辺部に刃部があり、11は柄部がある。13・14は搔器。15は肉厚で表裏面に大きな剝離が残るが、両面加工ナイフの未製品と思われる。16は一部が欠けているが「く」字状の削器。17も一部が欠けているが「く」字状の石器であり、表裏両面を加工していることから異形石器とも考えられる。5が頁岩製の他はすべて黒曜石製。

小 括

本竪穴の時期は床面出土の土器から続縄文字津内II a 式と思われる。

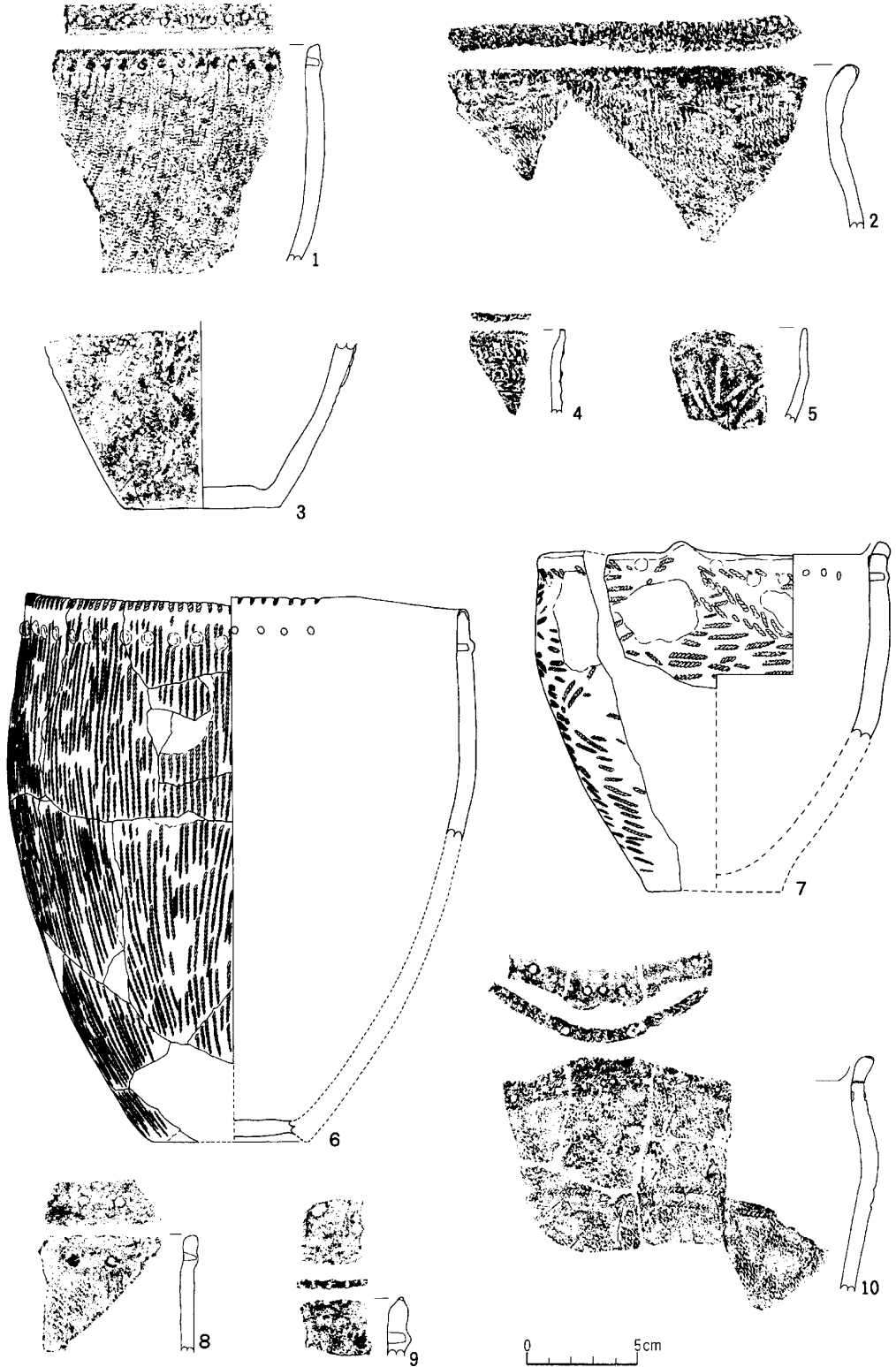
(佐々木 寛)



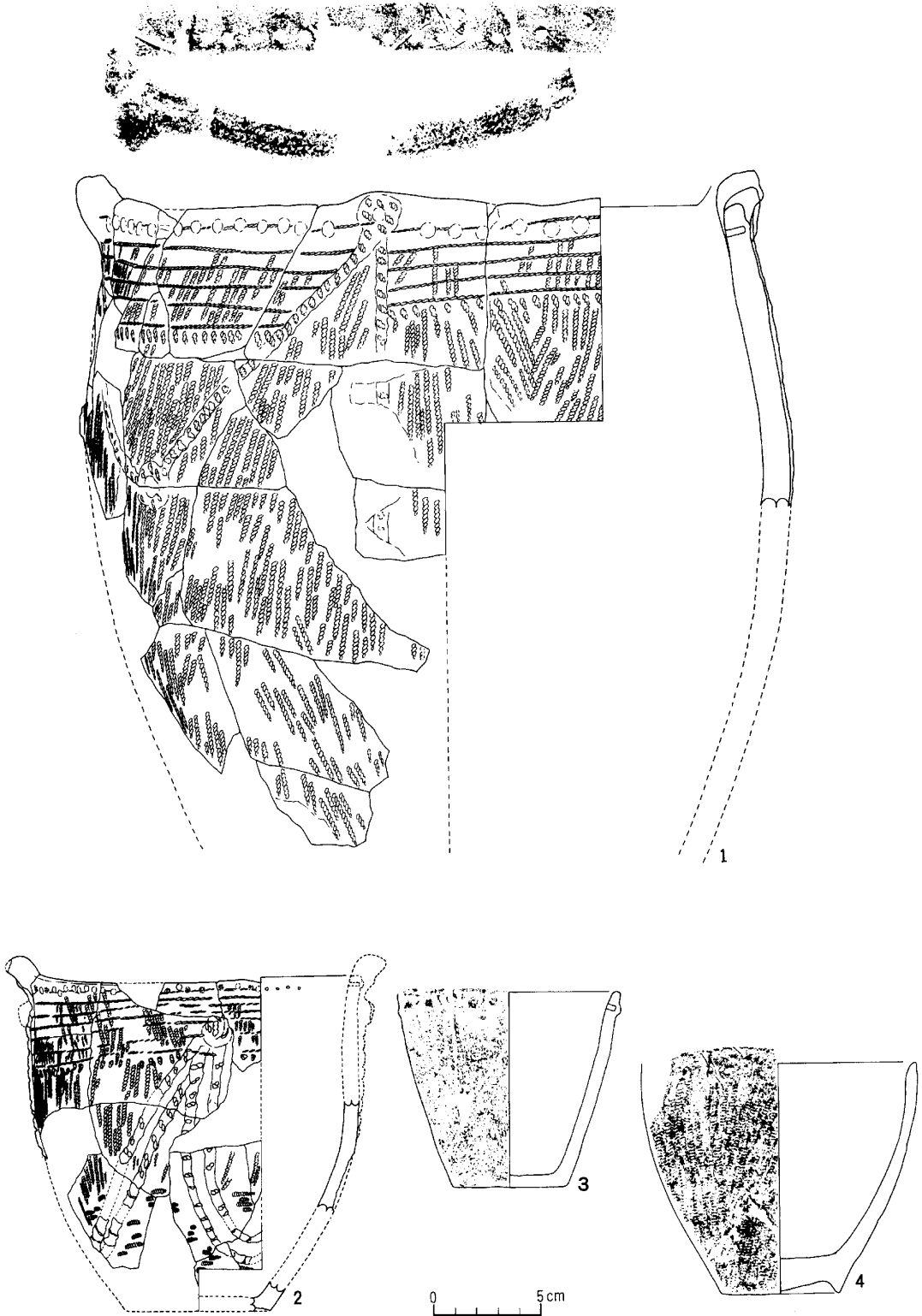
第171図 79号竪穴平面図



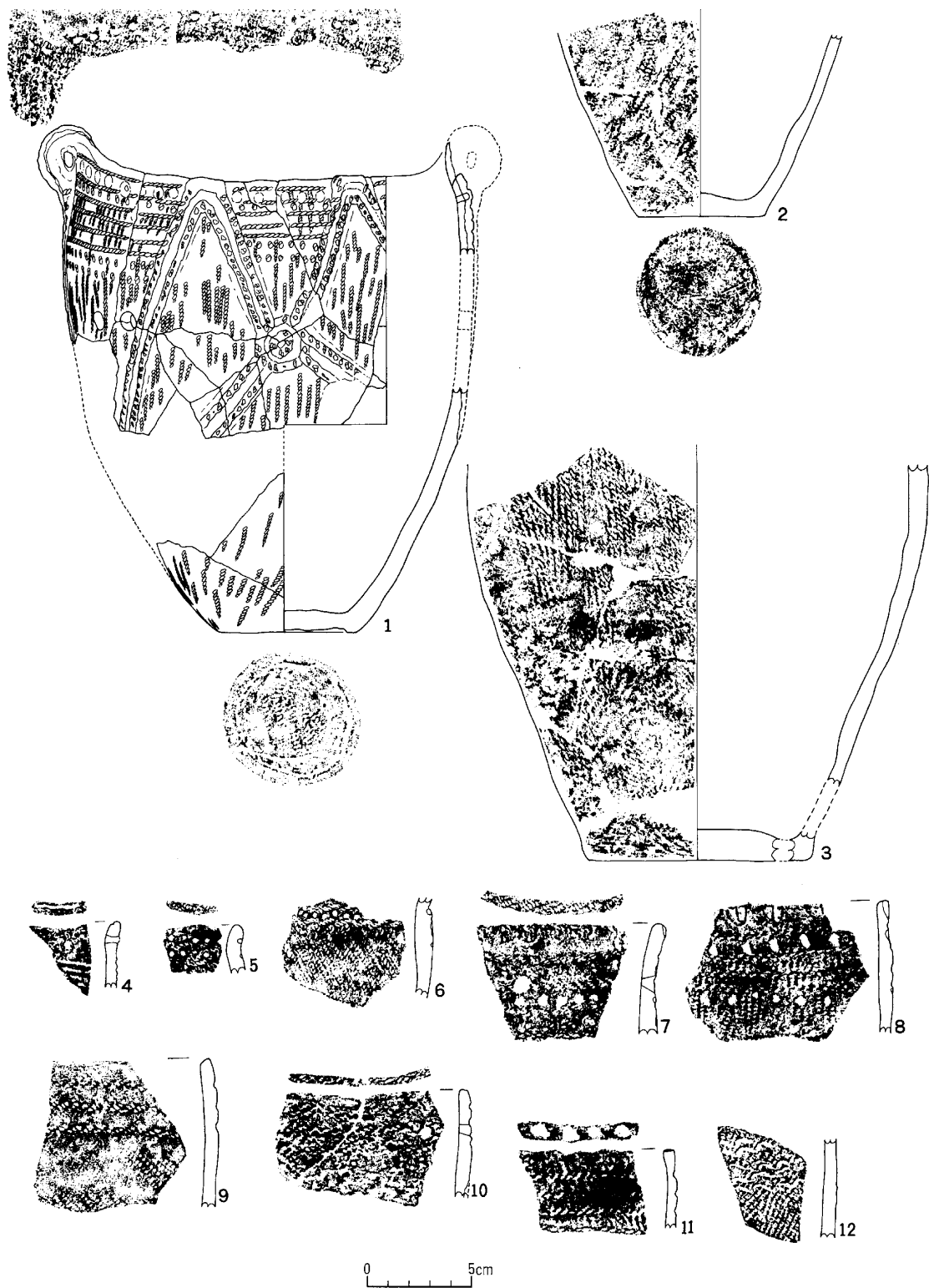
第172图 79号竖穴床面（1～3）出土土器



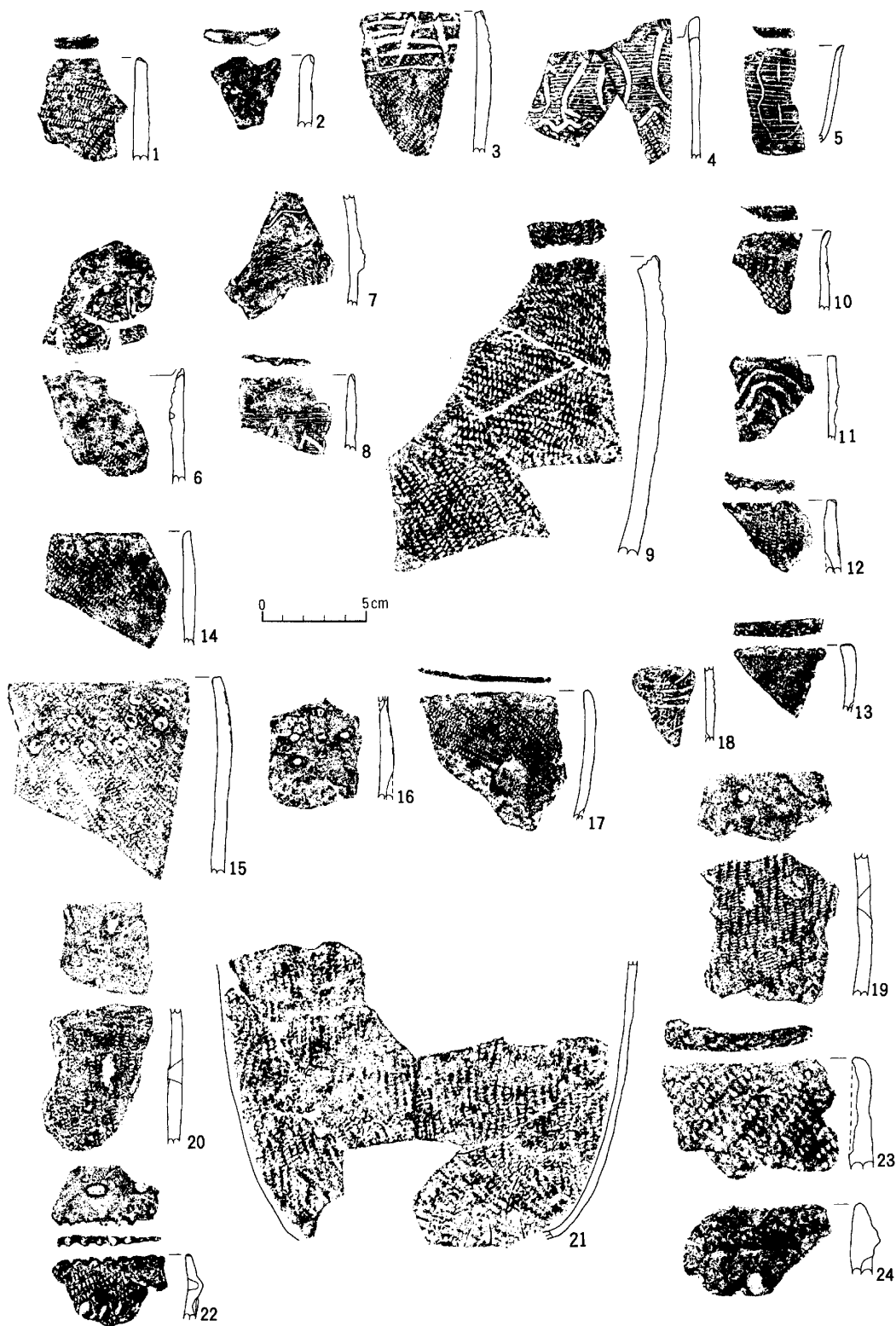
第173図 79号竖穴床面(1~3)・埋立(4~10)出土土器



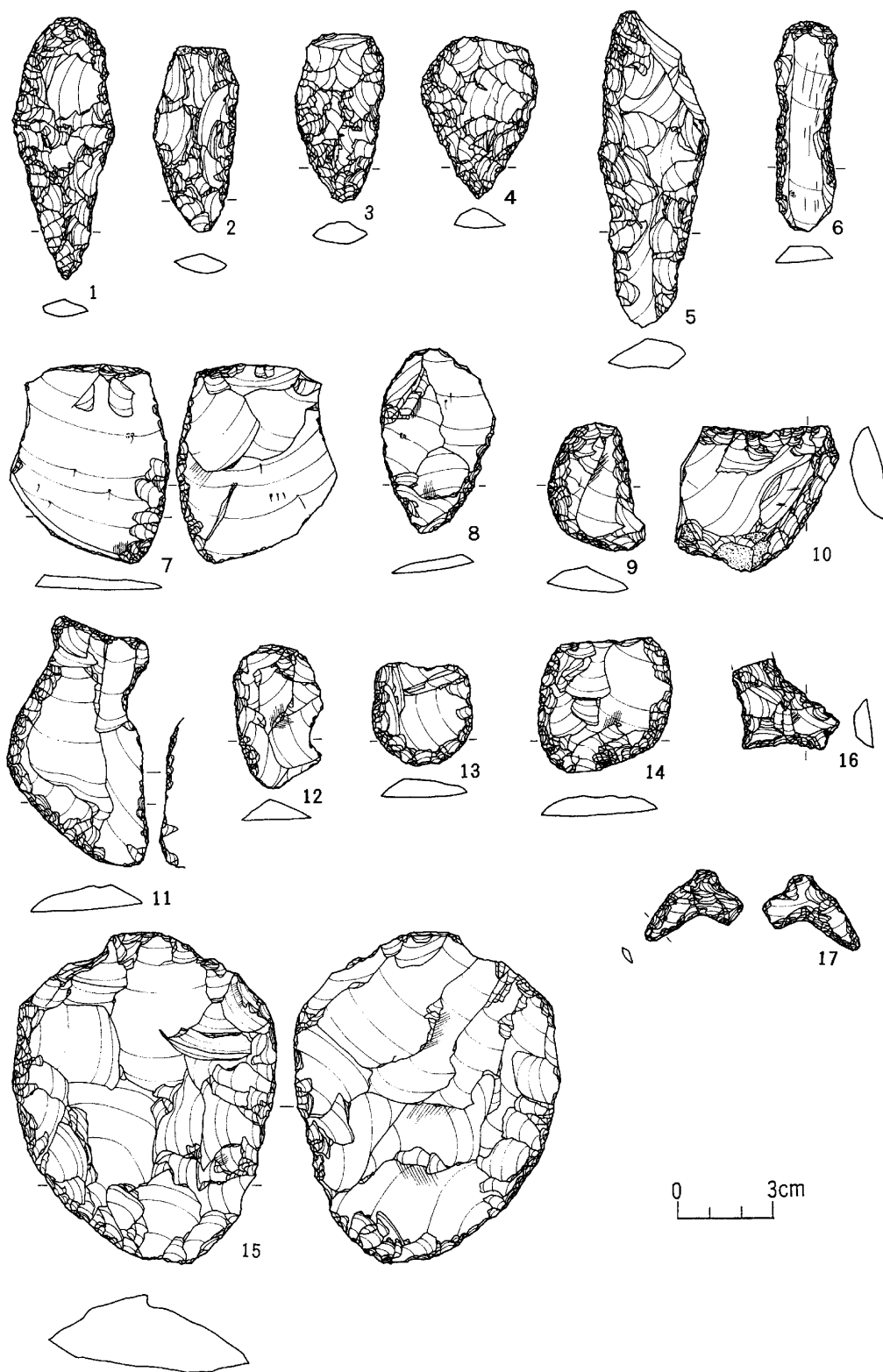
第174图 79号竖穴埋立(1~4)出土土器



第175圖 79号竪穴埋土(1~12)出土土器



第176图 79号竖穴埋土(1~24)出土土器



第177图 79号竖穴床面(1)·埋土(2~15)出土石器

80 号 竪 穴

遺 構 (第178図, 図版29-1)

本竪穴は69a号竪穴の南側2.80mにあり、長軸5.40m、短軸4.60mの不整楕円形を呈し、壁高は確認面から40cmを測り、斜めに立ち上がる。柱穴は主柱穴と思われるものが直径12~16cm、深さ10~20cmのものが4本、壁柱穴は直径10~14cm、深さ7~15cmのものが6本検出された。炉跡と思われる焼土は直径60cm程で、中央より少し南壁側にあり、炉跡の東側には4個の礫が認められたことから石囲み炉であったと考えられる。炉跡の焼土には骨片が含まれている。南壁近くと西壁近くには黒曜石のフレーク・チップの集積が検出された。

遺 物 (第179図, 第180図, 第181図, 第182図, 図版29-2)

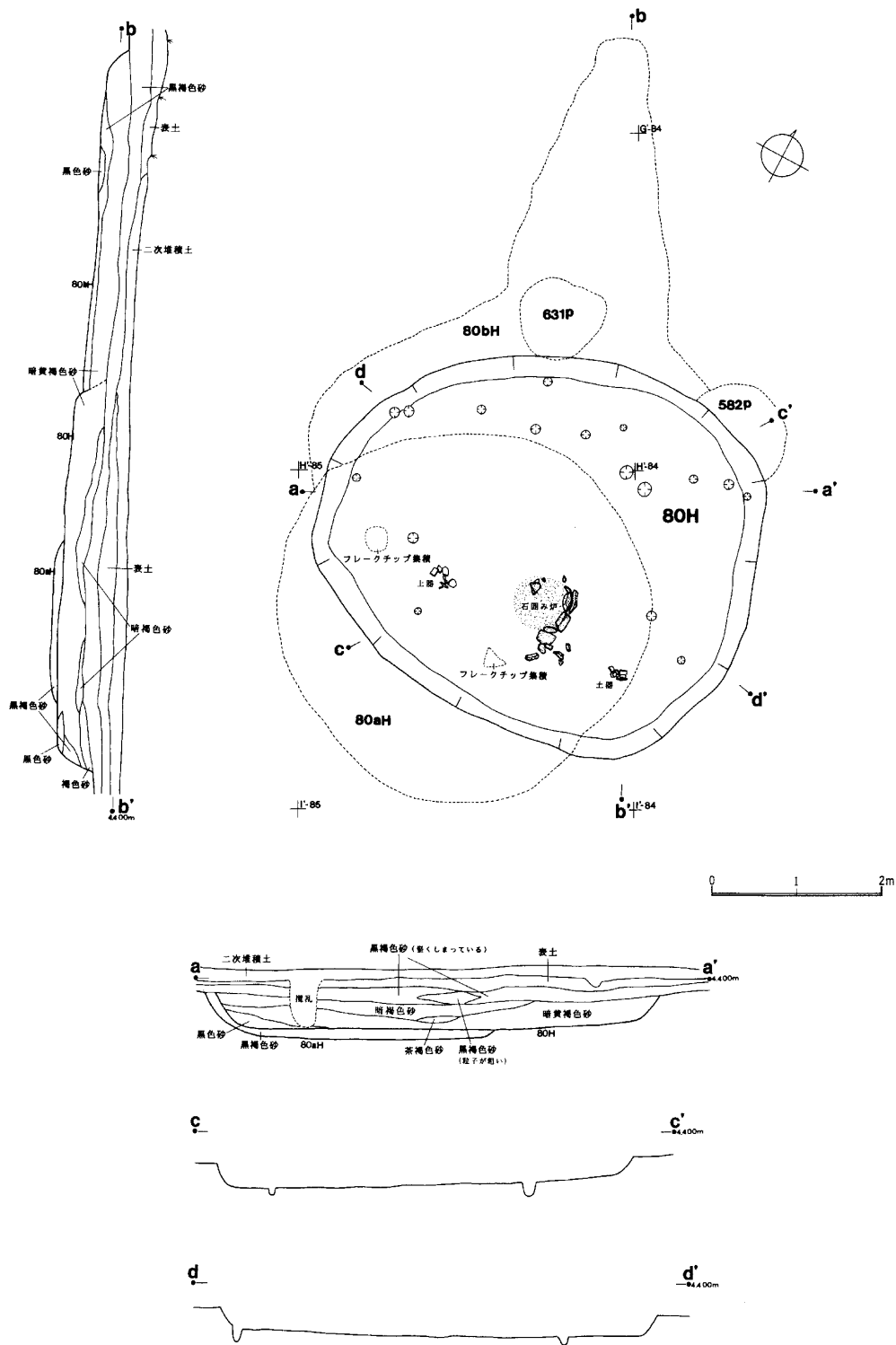
床面から第179図-1~9の土器が出土している。1は口縁部に2条の縄線文をめぐらし、その下に縄端圧痕を施す。吊り耳を2個もち、吊り耳と吊り耳の間の貼瘤からは「ハ」字状に隆帯を垂下させ、隆帯の上には縄端圧痕文が施されている。底部には縄端圧痕文を円形に二重めぐらせている。口径12cm、器高14cm。宇津内II a式。2は小突起から隆帯を垂下させ縄端圧痕文を2列と縄線文を7条めぐらす。宇津内II b式。3~5は宇津内II a式。6~9は続縄文初頭。

埋土からは10・11が後北C₂・D式。第180図-1・2は同心円文を施した宇津内II b式。3・4も宇津内II b式。5~7は突瘤文をもつ宇津内II a式。第181図-1・2は続縄文初頭。3・4は弊舞式。5~9は縄文晩期中葉。5~7は縄線文をもつ。10・11は縄文のみの口縁部。12・13は無文の口縁部。12は口唇部に刻みをもつ。14は続縄文初頭。

石器は床面から第182図-1~3の削器が出土。埋土からは4が有茎石鏃。5~9が両面加工ナイフ。10~19・21は削器。17は表裏の一縁辺部と先端部に刃部がある。20・22・23は搔器。8は頁岩製、9はチャート製、10は玄武岩製の他はすべて黒曜石製。

小 括

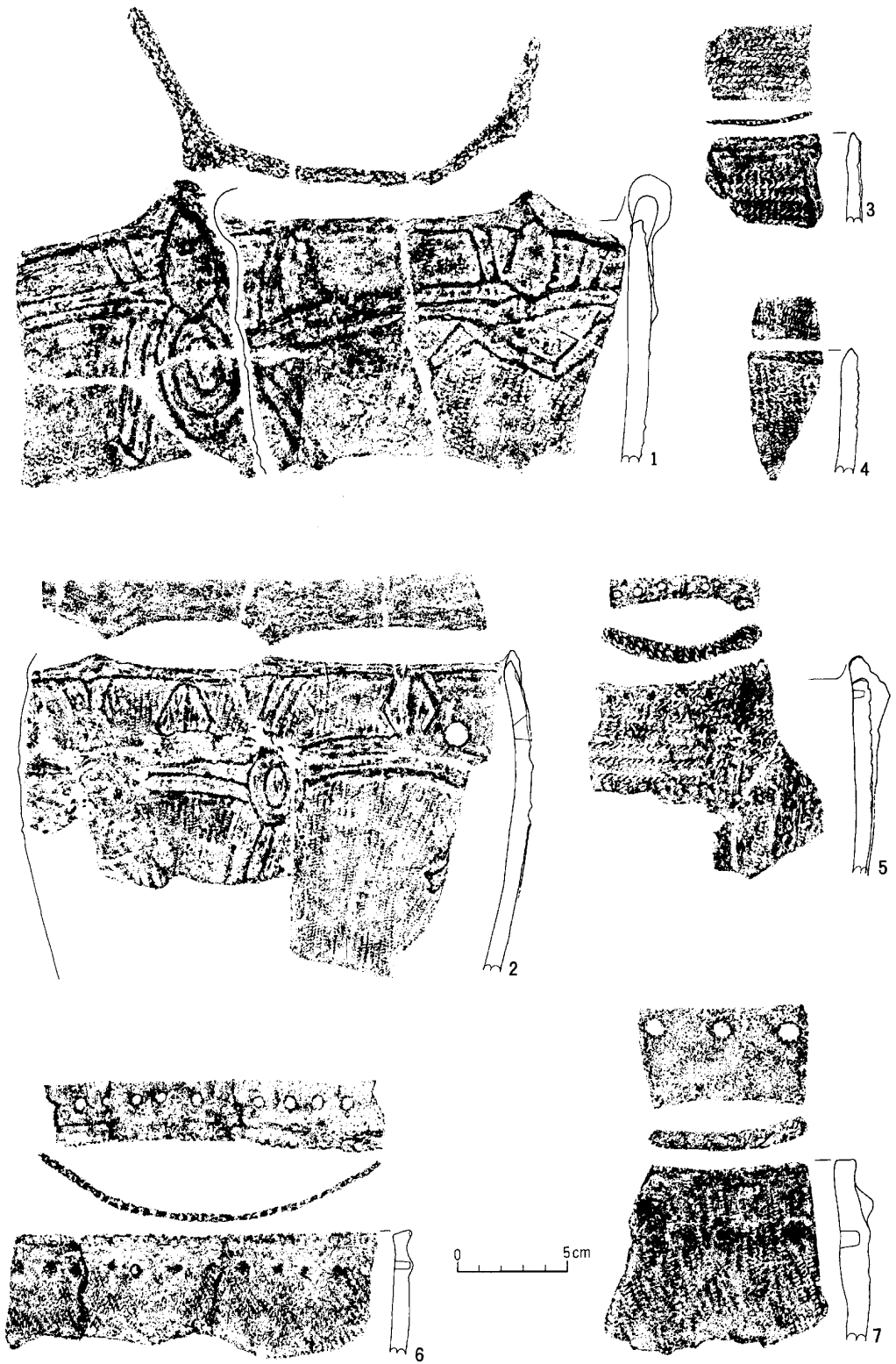
本竪穴は床面から続縄文宇津内II a式の土器が出土していることからこの時期に比定される。
(佐々木 覚)



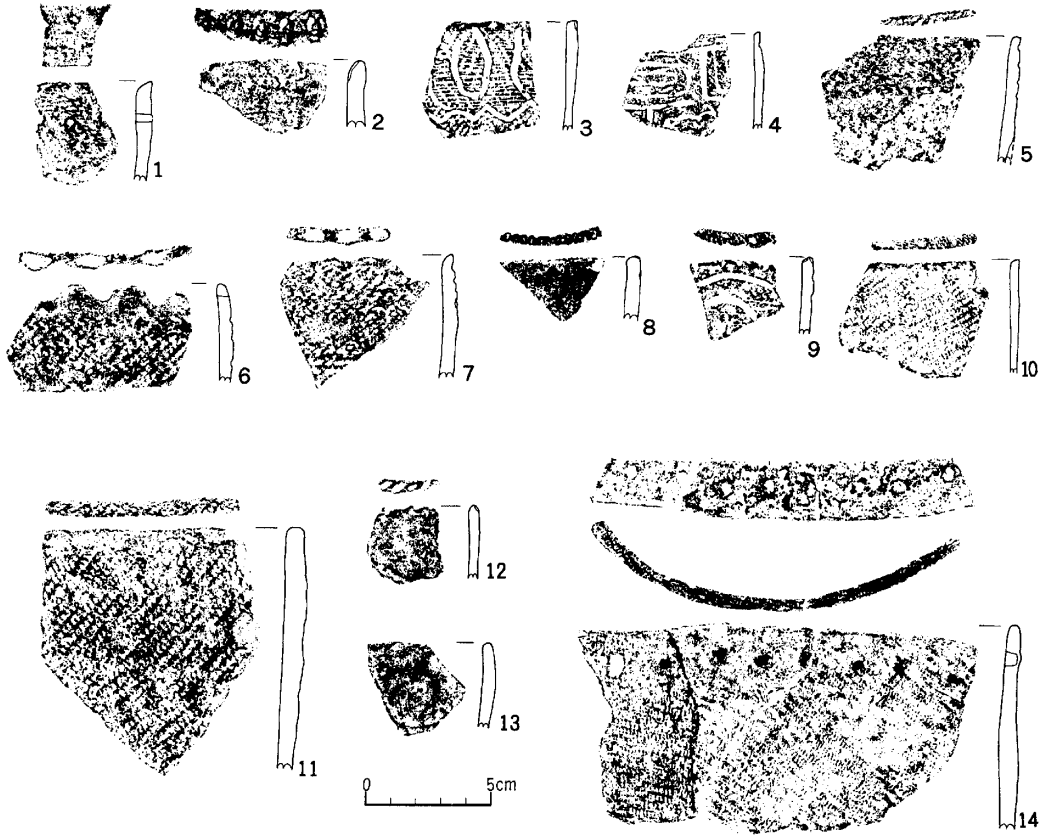
第178図 80号竪穴平面図



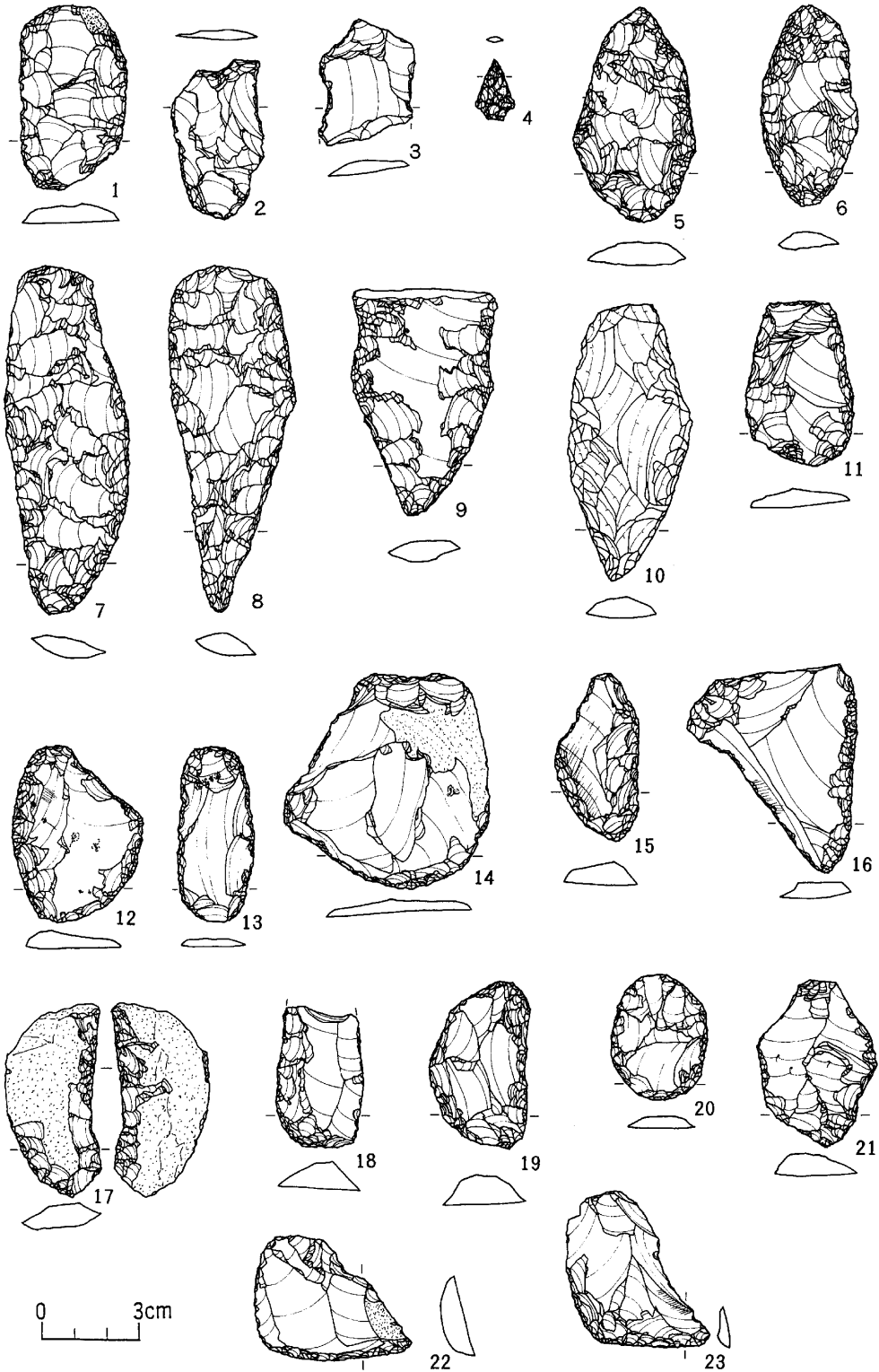
第179图 80号竖穴床面 (1~9)·埋土 (10·11) 出土土器



第180图 80号竖穴埋土(1~7)出土土器



第181图 80号竖穴埋土(1~14)出土土器



第182図 80号竖穴床面(1~3)・埋土(4~23)出土石器

80 a 号 竪 穴

遺 構 (第183図, 図版29-3)

本竪穴は80号竪穴と重複して検出された竪穴で、80号竪穴より多少南にずれて構築されている。規模は直径約4.40mの不整形円形を呈し、壁高は南壁で確認面から50cm、北壁で80号竪穴床面より12cmを測り、斜めに立ち上がる。支柱穴は直径28~32cm、深さ30~36cmのものが2本、補助穴は直径8~20cm、深さ8~30cmのものが26本、壁柱穴が直径8~20cm、深さ10~23cmのものが16本検出された。竪穴の中央に8個の礫に囲まれた石囲み炉があり、炉跡の焼土の中には骨片が含まれている。炉跡と北壁の間には黒曜石のフレーク・チップの集積が2箇所検出された。

遺 物 (第184図-1~11, 第185図-1~6)

床面から土器は出土していない。埋土からは第184図-1は宇津内II b式。2・3・5は続縄文初頭。4は無文の口縁部。口唇部に刻みをもつ。6は緑ヶ岡式。7~9は縄文晩期中葉。7・8は刺突文をもつ。9は浅鉢であろう。10はトコロ五類と思われる。11は鯨潤式。

石器は床面から第185図-1・2の無茎石鏃と3・4の両面加工ナイフが出土している。5・6は埋土出土の削器。いずれも黒曜石製。

小 括

本竪穴は床面からの土器の出土がないため時期は不明であるが、80号竪穴が宇津内II a式であることからそれよりも古いものと考えられる。(佐々木 覚)

80 b 号 竪 穴

遺 構 (第183図)

80号竪穴の北側に一部が検出された竪穴で、規模は不明である。北側に約3mの舌状の張出しをもつ。張出しの基部の幅は約2mであるが、端部は0.6mと狭くなっている。壁高は確認面から30cmを測り、斜めに立ち上がる。柱穴は壁柱穴が直径12~18cm、深さ10~20cmのものが6本確認された。

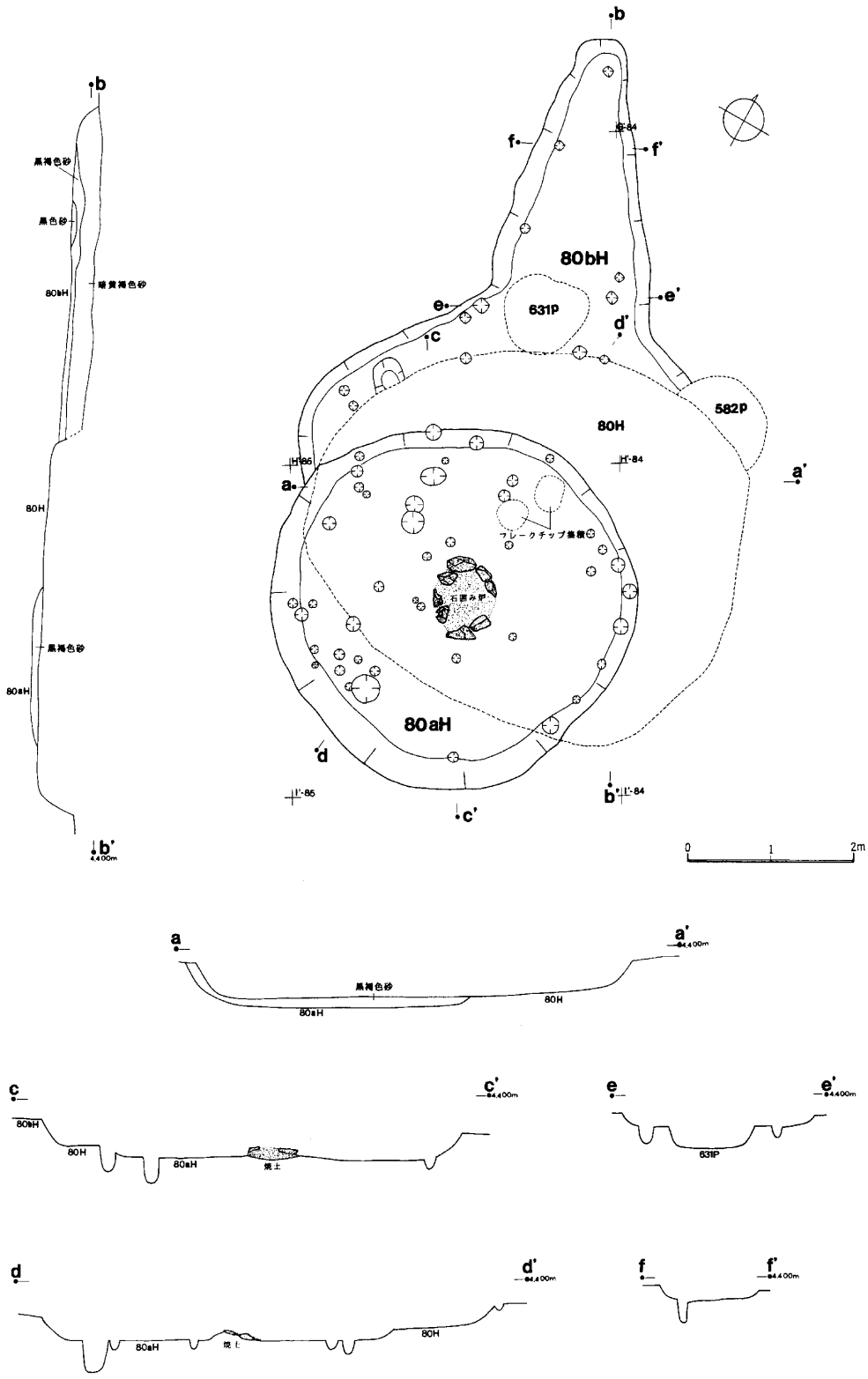
遺 物 (第184図-12~18, 第185図-7~11)

床面から土器は出土していない。埋土からは第184図-12・13が宇津内II b式。14は続縄文初頭。15は無文の口縁部。口唇部に刻みをもつ。16・17は縄文晩期中葉。18は厚手土器の底部。

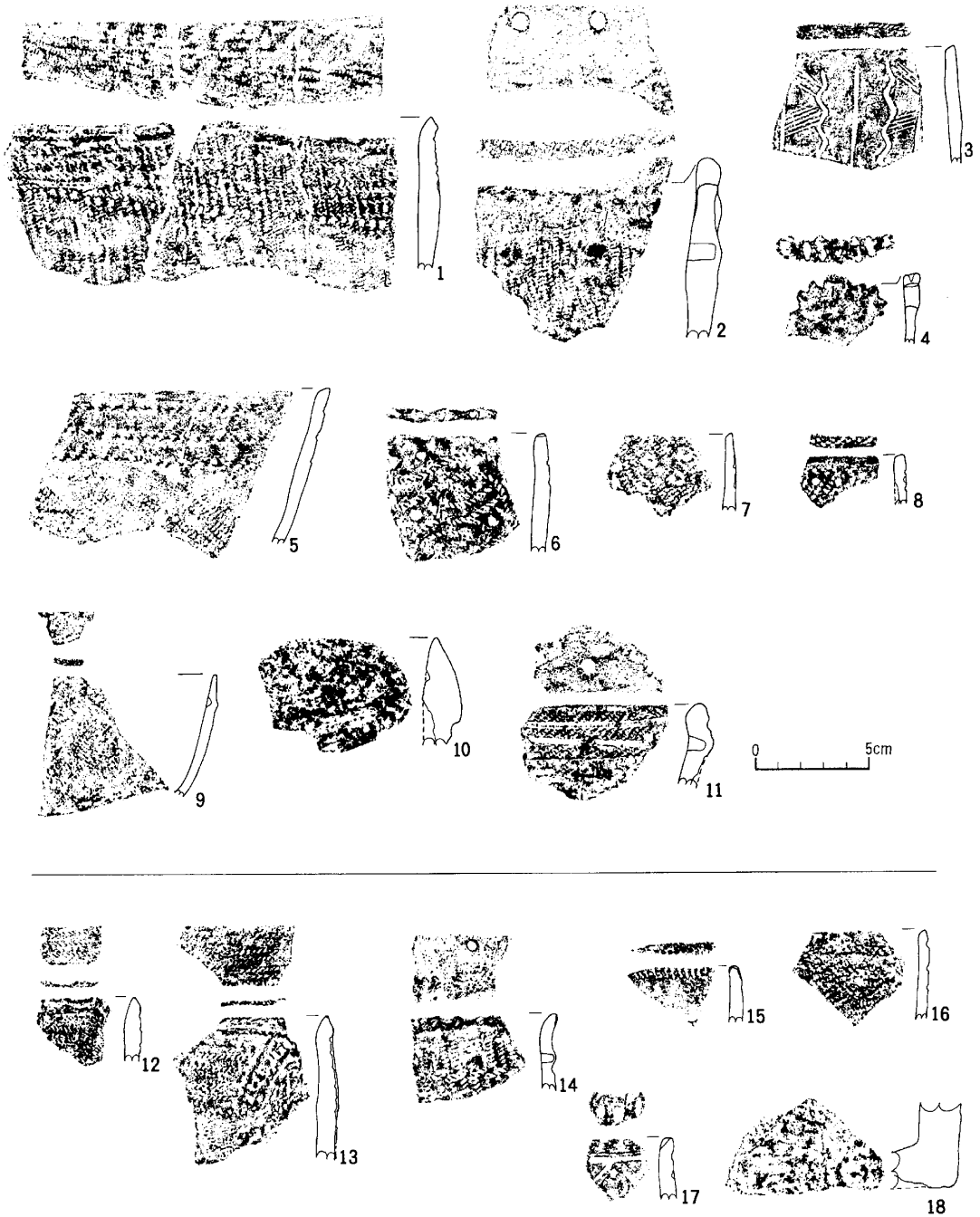
石器は床面から第185図-7~9の石鏃が出土している。埋土からは10が石鏃。11が削器。

小 括

本竪穴は床面から土器が出土していないため時期は不明である。(佐々木 覚)



第183図 80a号竖穴, 80b号竖穴平面図



第184图 80a号豎穴埋土（1～11），80b号豎穴埋土（12～18）出土土器

集 石 6

遺 構 (第247図)

86号竪穴の床面を切り込んで構築されている。長軸約0.82m, 短軸約0.60mの楕円状の平面形をもつ。皿状に浅く掘り込まれており、深さは86号の床面から約10cmである。角礫主体であり、礫は小型で約3～4cm, 大型で約10～15cmである。大部分の礫は上部に位置し床面には達していない。礫は火熱を受け、煤が付着する。

小 括

86号竪穴は縄文文字津内II a期のものであり、本集石はそれよりも新しい時期である。

(武田 修)

集 石 7

遺 構 (第247図)

86号竪穴の床面を切り込んで構築されている。直径約0.80mの円形を呈する。皿状に浅く掘り込まれており、深さは86号の床面から約14cmである。角礫主体であり、礫は小型で約3～4cm, 大型で約10～15cmである。集石6同様に大部分の礫は上部に位置し床面には達していないが小枝状の炭化材が上部から底面に向かって斜めに伸び、礫はその真上から出土する傾向がある。あるいは床に小枝が敷かれていたのかもしれない。礫は火熱を受け、煤が付着する。

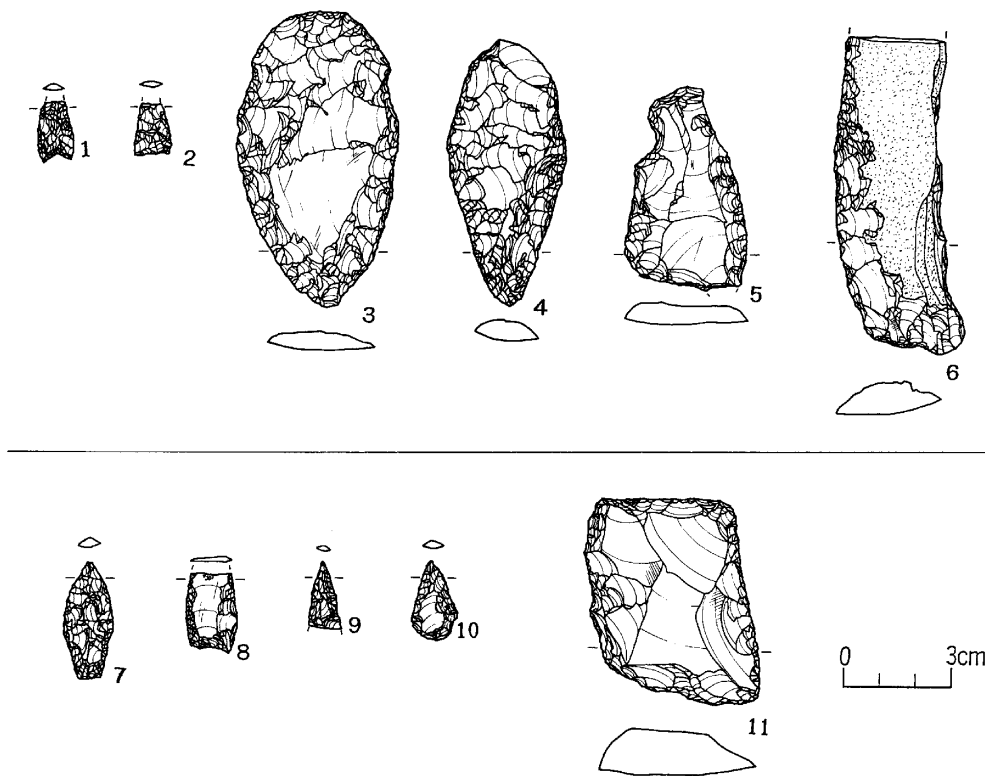
遺 物 (第288図-1～2)

1は1対の大突起。2個1対の小突起下部に同心円文が施された字津内II b式。2も同II b式の底部。2点とも集石上部から出土。

小 括

86号竪穴は縄文文字津内II a期のものであり、本集石はそれよりも新しい時期である。

(武田 修)



第185図 80a号竪穴床面（1～4）・埋土（5・6），80b号竪穴床面（7～9）・埋土（10・11）出土石器

4 号 小 竪 穴

遺 構（第274図，図版30-1）

本竪穴はE'75・76，F'75・76グリッドに位置する。表土を剥土した段階で黒色土の落ち込みを確認したものである。認西壁側が攪乱により，破壊を受けているものの，規模は一辺約2.63mの方形を呈する。掘り込みは浅く確認面から約14cmを測り，壁の立ち上がりも緩い。中央部に約40cmの炉跡があるものの，柱穴等は検出できなかった。

小 括

擦文期の竪穴と思われるが，遺物も出土しておらず詳細な時期は不明である。（武田 修）

第V章 ピ ッ ト

ピ ッ ト 316

遺 構 (第186図)

本ピットはH'72, G'72グリッドに位置する。ピット316 a, 316 bと重複するが、セクションから本ピットが新しい。規模は長軸0.84m, 短軸0.66mの楕円形である。底面から丸みをもって立ち上がる壁高は確認面から約48cmである。

層上部には2～3cm程度の小円礫を多量に含む。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第187図-1～4)

埋土からは第187図-1の統縄文字津内II a 式の他、縄文晩期の土器片が17点出土している。2は縄文晩期後葉の幣舞式の浅鉢。3は口唇部の外側に鋭い刻みがあり、4は縄線文が施される。いずれも縄文晩期中葉であろう。(武田 修)

ピ ッ ト 316 a

遺 構 (第186図)

本ピットはピット316に東壁側を削られている。規模は長軸1.20mの楕円形で、壁高は確認面から約22cmである。埋土層の全域には5mm～1cm程度の炭化片が多量に含まれる。中には1cm程の小枝状の炭化物も見られる。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第187図-5～7, 第188図-1)

遺物は埋土から出土している。第187図-5は器面に捺糸が施された統縄文字津内系。6は斜縄文と帯縄文が施されている。統縄文初頭であろう。縄文晩期の土器片は23点出土している。7は右方向から刺突が加えられたもので、縄文晩期中葉と思われる。第188図-1の石器は黒曜石製の円形搔器である。(武田 修)

ピ ッ ト 316 b

遺 構 (第186図)

本ピットはピット316に西壁の一部を削られている。規模は長軸1.08m, 短軸0.86mの楕円形

である。床面は凹凸があり西側から東側に向かって傾斜する。壁高は最も深い東壁側が確認面から約31cmである。

詳細な時期は不明である。

遺物 (第187図-8~10, 第188図-2・3)

埋土から12点の縄文晩期の土器片が出土している。第187図-8・9は口唇部に縄が押捺され、刻みが施された縄文晩期後葉の幣舞式の浅鉢。10は底部で、8~10は同一個体と思われる。

石器は第188図-2・3は黒曜石製の有茎石鏃。 (武田 修)

ピット 317

遺構 (第186図)

本ピットはI'73グリッドに位置する。ピットの大半を52号堅穴により破壊を受けているため正確な規模等は不明である。壁高は確認面から約17cmの浅いピットである。

詳細な時期は不明である。

遺物 (第187図-11~19)

出土土器の大半は縄文晩期であり、11~18はその中葉のものである。11は内面、12は表面に縄線文が押捺される。13・14は器面に刺突と刻線が施され、13の内面には篋状施文具による刺突が加わる。15の内面は縄端圧痕文、16の器面には半截状爪形文が施される。17は無文の皿状土器。18は縄文を施す。19は縄文後期鮎澗式であろう。 (武田 修)

ピット 318

遺構 (第239図)

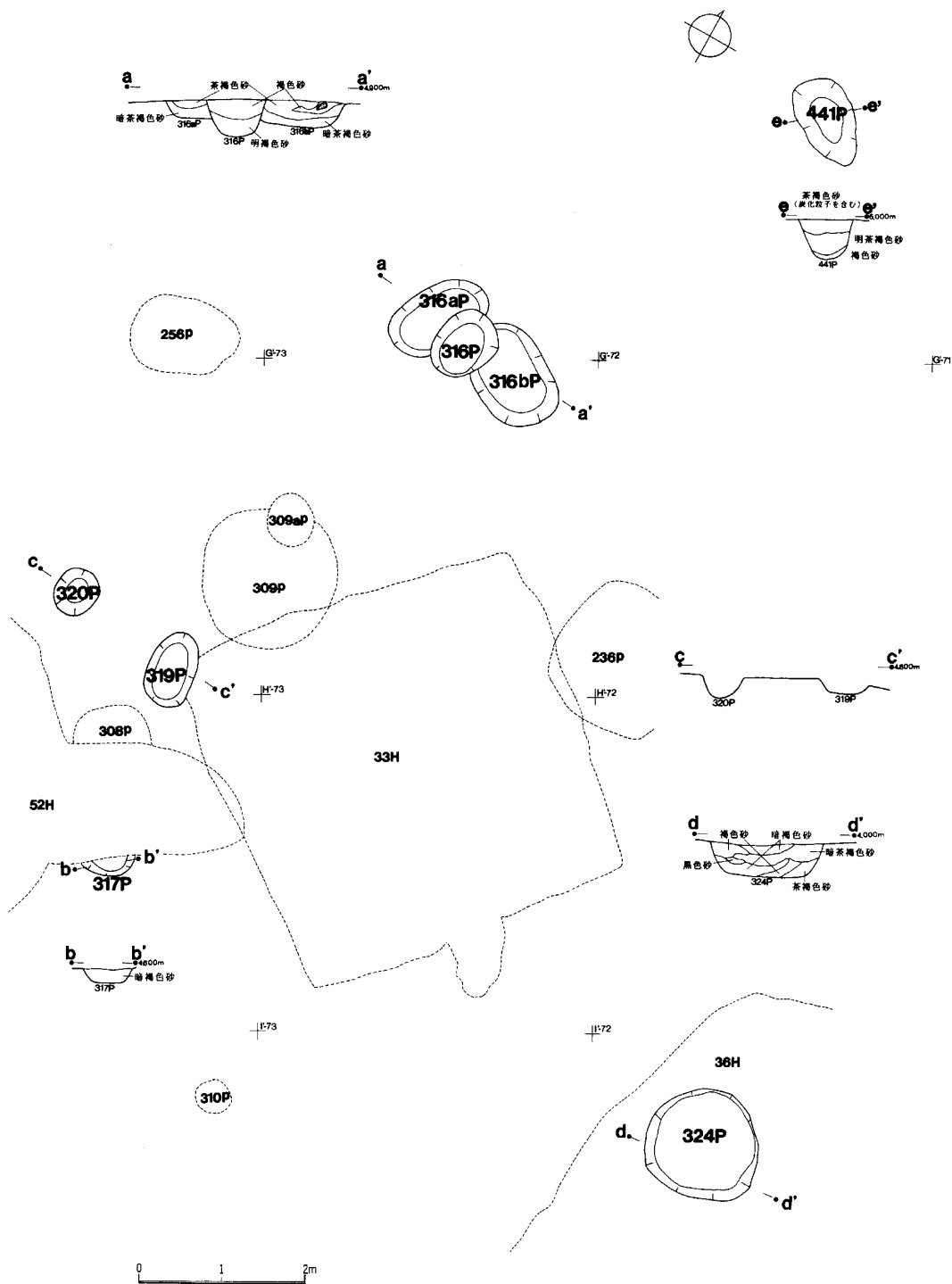
本ピットはG'74グリッドに位置する。規模は長軸1.58m、短軸1.25mの楕円形を呈する。掘り込みは浅く、皿状に立ち上がる。高さは確認面から約16cmである。壙上部に長さ26cm程の角礫1点が認められる。

詳細な時期は不明である。

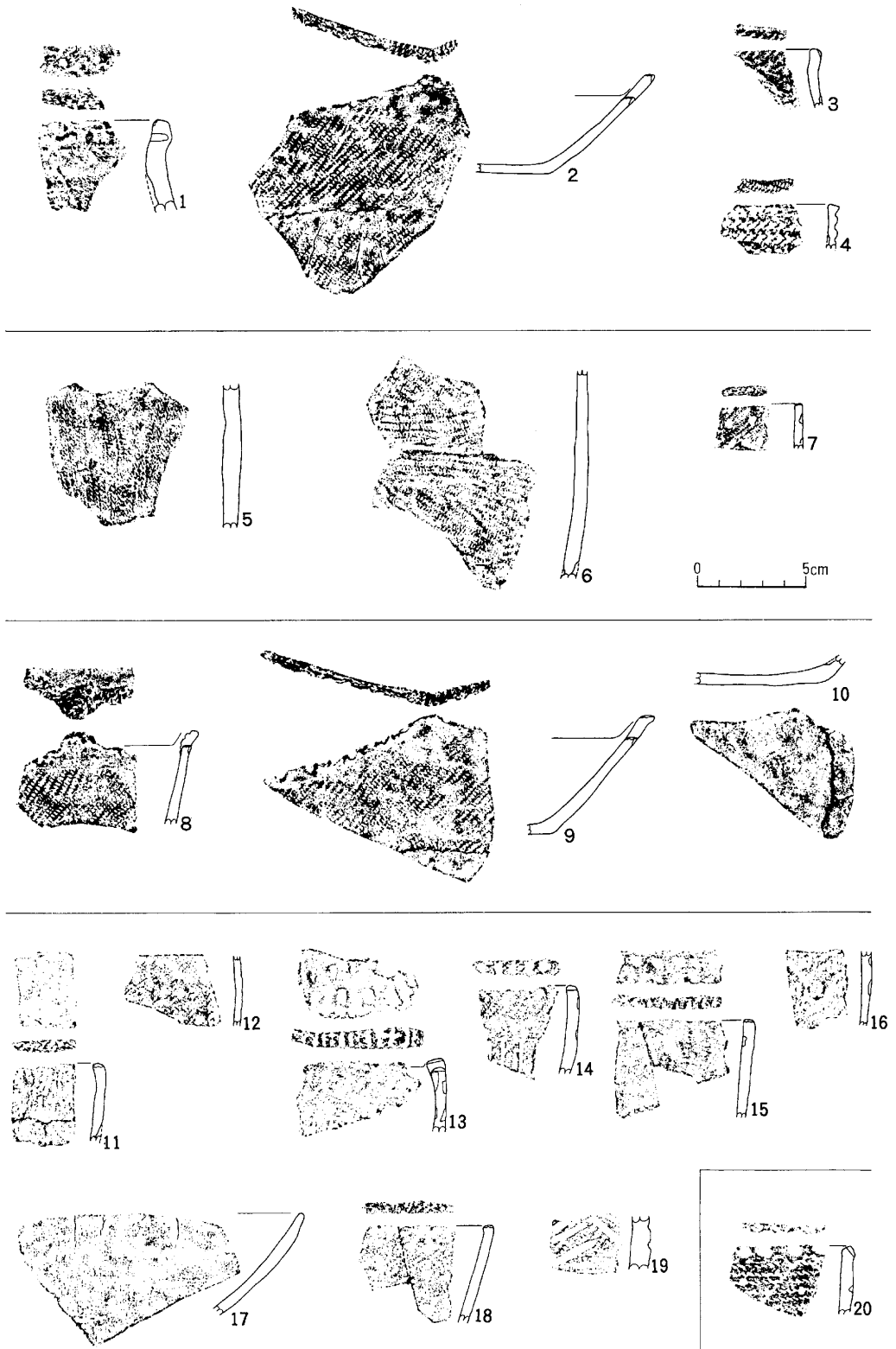
遺物 (第187図-20)

20は口縁部に縄線文を多用し、口唇部の外側に刻みを加えた縄文晩期幣舞式である。

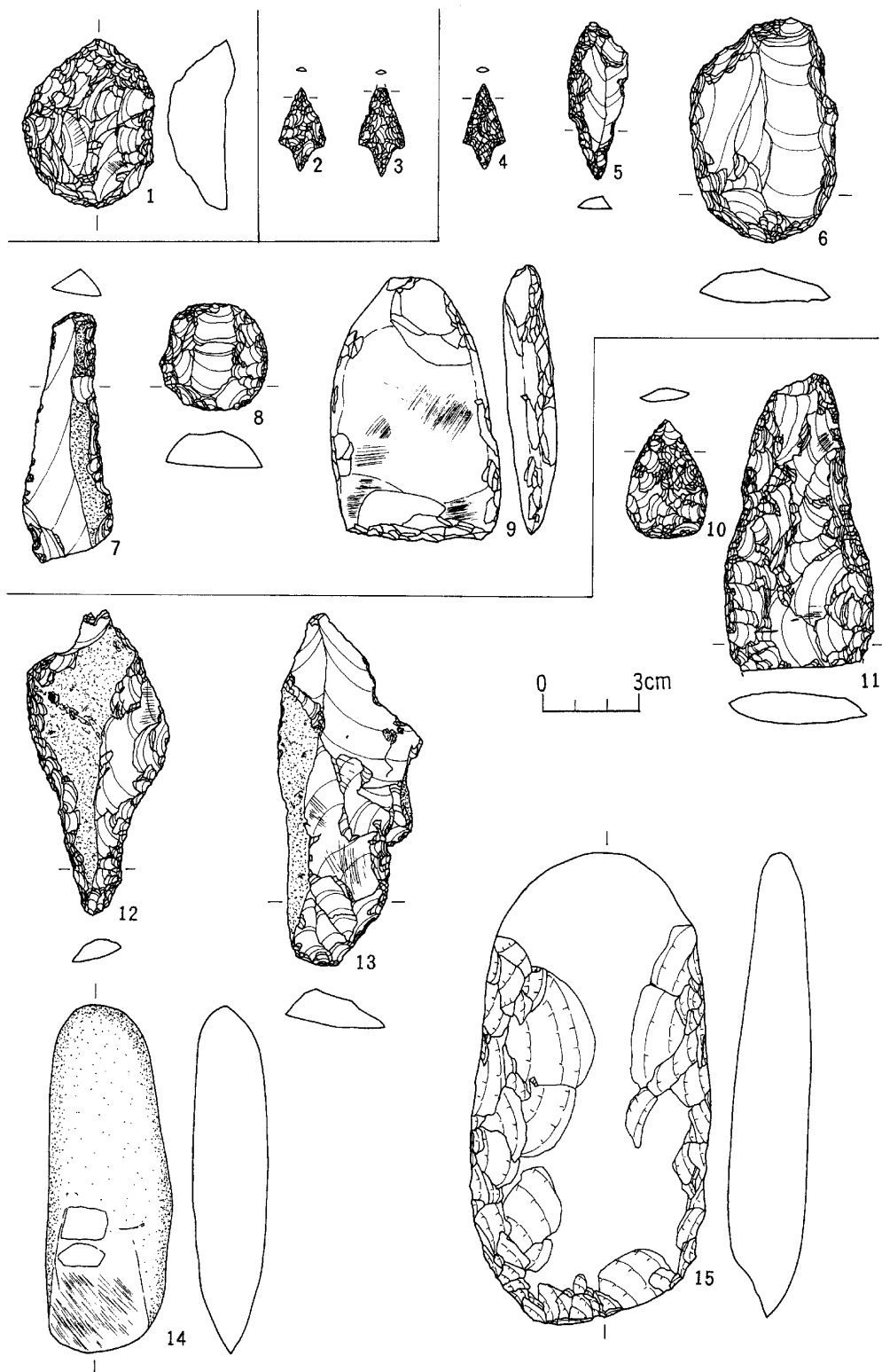
(武田 修)



第186図 ピット316, 316a, 316b, 317, 319, 320, 324, 441平面図



第187図 ピット316埋土 (1~4), 316a埋土 (5~7), 316b埋土 (8~10), 317埋土 (11~19), 318埋土 (20), 出土土器



第188図 ピット316a埋土(1), 316b埋土(2・3), 324埋土(4～9), 327埋土(10～15) 出土石器

ピ ッ ト 319

遺 構 (第186図)

本ピットはH'73グリッドに位置する。規模は長軸0.88m、短軸0.56mの小楕円形で、壁高は確認面から約17cmである。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第189図)

埋土からは縄文晩期の土器片が比較的多く出土している。1は僅かに外反した口縁部直下に1条の縄線文が施された続縄文初頭の土器と思われる。2～4は縄文晩期後葉の幣舞式。5は多用された縄線文の下部に細い円形刺突文が連続されたもので幣舞式の前後の時期と思われる。6・7は縄線文が施され、7は断面三角形の隆起帯をもつ。8～10は器面に縄文が施される。9は丸みをもった浅鉢と思われる。10も浅鉢。11・12は半截状の刺突が施され、11は内面に縄線文が押捺される。13の内面には細い竹管状施文具による刺突が見られる。14は浅い沈線が曲線的に施される。6～14は晩期中葉と思われる。(武田 修)

ピ ッ ト 320

遺 構 (第186図)

本ピットはH'73グリッドに位置する。規模は直径約0.56mの小円形を呈する。壁高は確認面から約24cmである。床面は北側に向かって傾斜する。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第191図-1・2)

1・2とも埋土出土。1は丸みをもった底部近くの破片で2点とも縄文晩期であろう。

(武田 修)

ピ ッ ト 321

遺 構 (第190図)

本ピットはC'82グリッドに位置する。規模は長軸約1.29m、短軸約0.80mの楕円形を呈するが東壁側が西壁側と比較するとすばまる傾向があり、各壁とも皿状に立ち上がる。壁高は確認面から約9cmである。

詳細な時期は不明である。

遺物 (第191図-3・4)

埋土から3の縄文後北C₂・D式, 4の縄文晩期の細片が出土している。(武田 修)

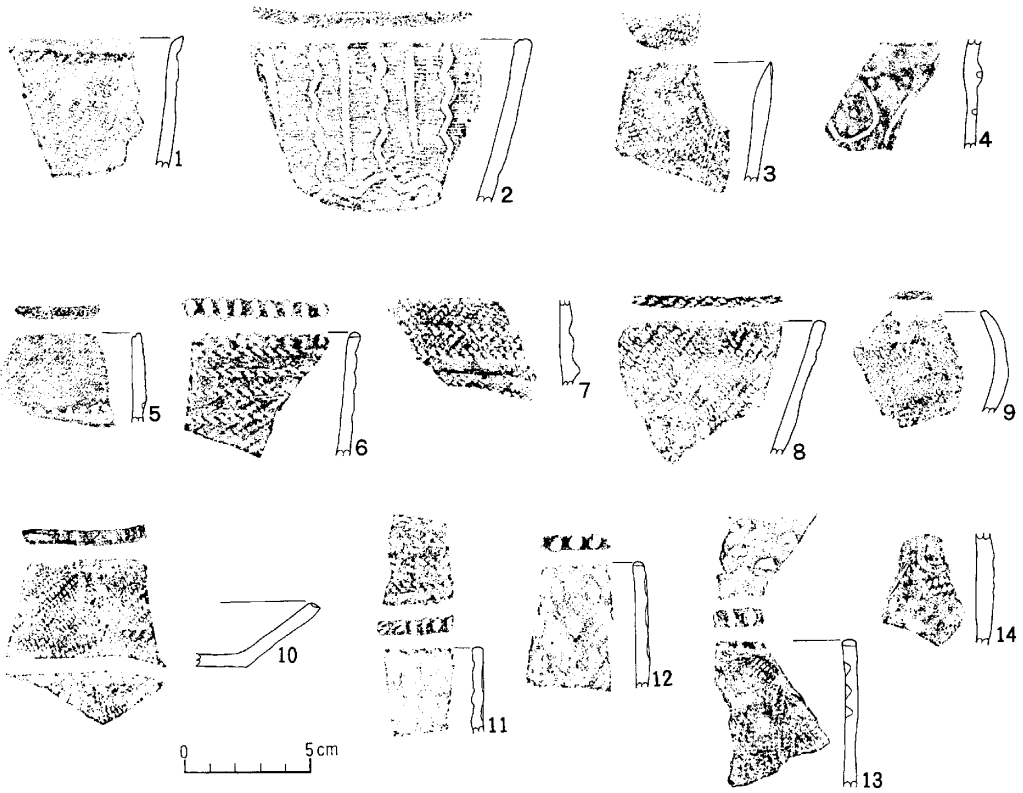
ピット 321 a

遺構 (第190図)

本ピットはピット321に西壁の上部を切られている。規模は直径約0.65mの円形を呈する。底面は細く、壙上部が大きく開いた断面は「V」字形を呈する。壁高は確認面から約34cmを測る。

遺物 (第191図-5・6)

埋土から5の縄文土器の底部片と6の縄文晩期の細片が出土している。正確な時期は不明である。(武田 修)



第189図 ピット319埋土 (1~14) 出土土器

ピット 322

遺構 (第190図)

本ピットはC'82グリッドに位置する。規模は長軸約1.24m、短軸約0.72mの楕円形を呈する。掘り込みは浅く確認面から約14cmである。上部に10~15cm程度の角礫が8点混入している。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピット 323

遺構 (第247図)

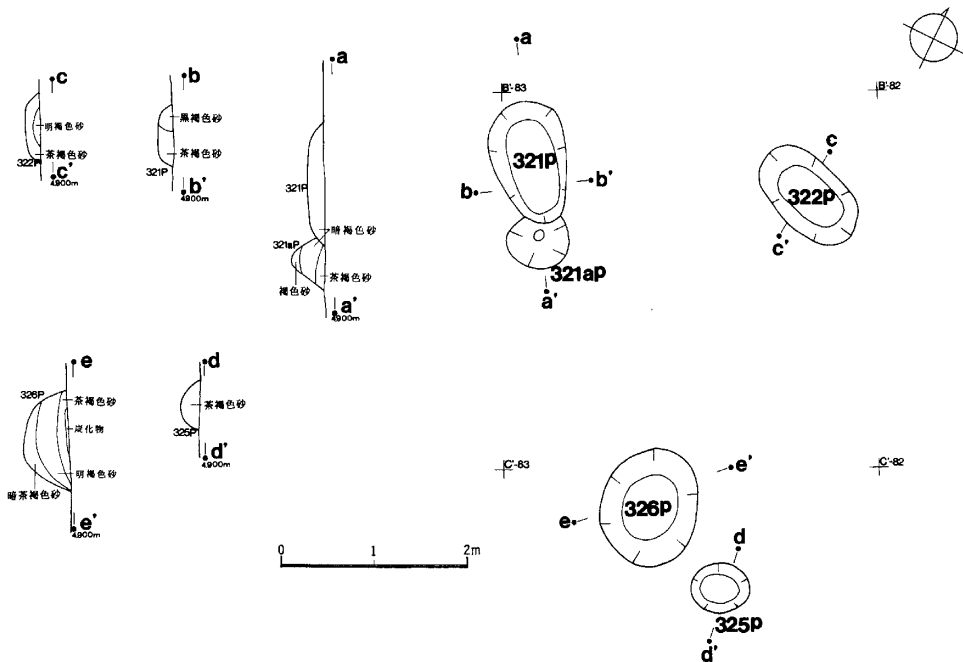
本ピットはB'80グリッドに位置する。規模は長軸約1.40m、短軸約1.12mの不整形を呈する。壁高は確認面から約15cmである。

詳細な時期は不明である。

遺物 (第191図-7)

口縁部が丸みをもった薄手の土器で縄文が施される。縄文晩期中葉であろう。

(武田 修)



第190図 ピット321, 321a, 322, 325, 326平面図

ピ ッ ト 324

遺 構 (第186図)

本ピットはJ'71グリッドに位置する。36号竖穴の床面精査中に発見したもので、規模は直径約1.30mの円形を呈する。壁高は36号竖穴の床面から約30cmである。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第191図-8~15, 第188図-4~9)

第191図-8は直線と弧線状の沈線文で構成され、刺突文が加わる。統縄文初頭フシココタン下層式に比定される。9は内湾した口縁上部に6本の横走沈線があり、口唇部の内側は縄を引きずり刻線状に見せるもので、統縄文初頭であろう。10は縄文晩期後葉幣舞式。13は縄線文間に円形刺突が連続する。12~14は縄文が施されるもので、11の内側には極めて浅い半截状の沈線と14には内側からの突瘤が施される。11~13は晩期中葉。14は同前葉であろう。15は縄文中期北筒式(トコロ五類)。胎土に繊維を僅かに含む。

石器は第188図-4~9に示した。4は有茎石鏃。5~7は削器。5は先端部が尖る。左側縁部が刃部となる。表裏面とも火熱を受けている。6は全周面が加工される。7は原石面を残し、右側縁部に加工を施した断面三角形の削器。8は円形搔器。4・5・7・8は黒曜石製。6は玄武岩製。9は右側縁部の両面を敲打調整した片刃磨製石斧。泥岩製。(武田 修)

ピ ッ ト 325

遺 構 (第190図)

本ピットはD'82グリッドに位置する。規模は直径約0.62mの円形を呈する。壁は床面から丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約20cmを測る。

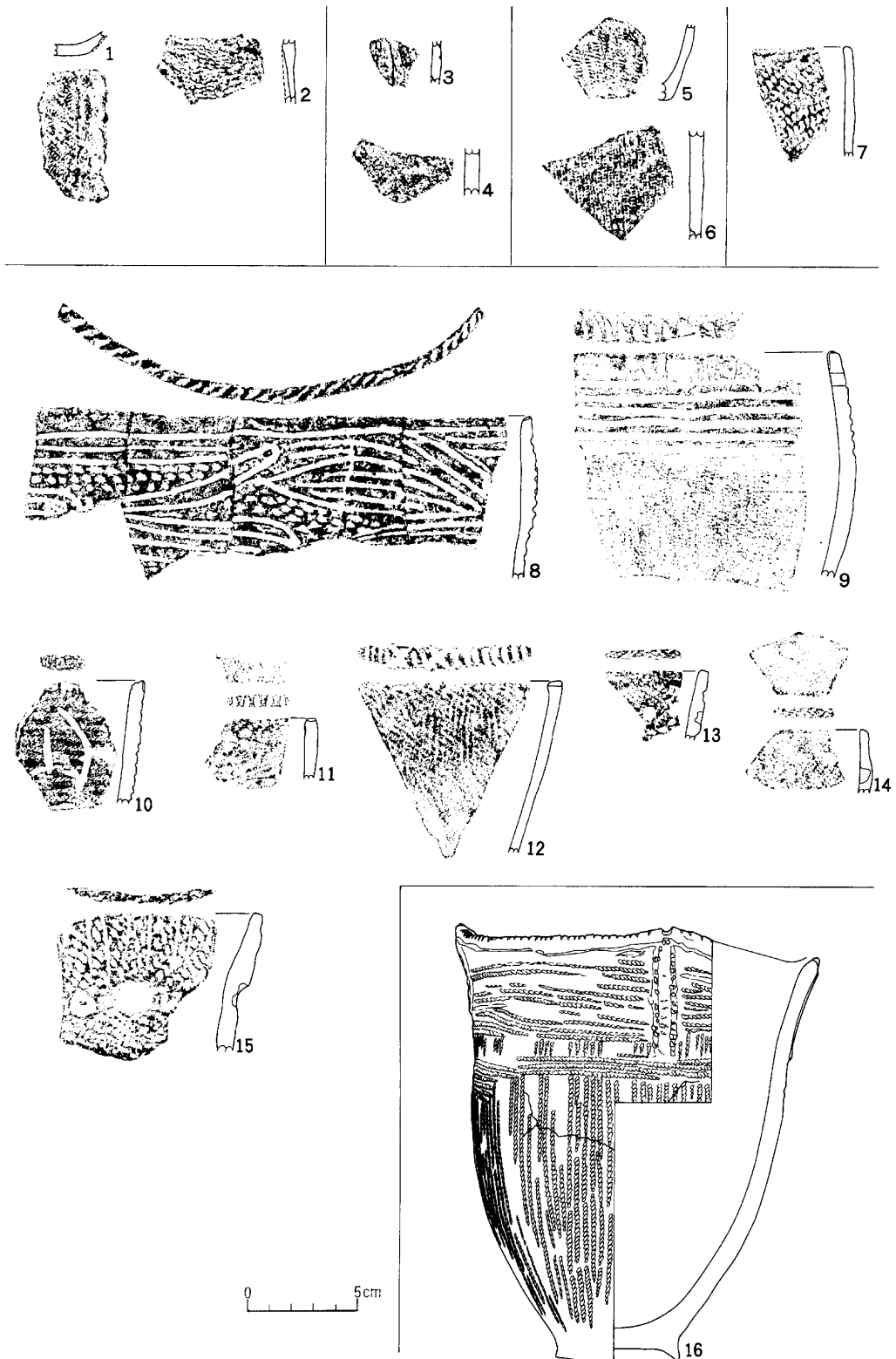
遺物は出土していない。(武田 修)

ピ ッ ト 326

遺 構 (第190図)

本ピットはD'82グリッドに位置する。規模は長軸約1.24m、短軸約1.02mの楕円形を呈する。壁は底面から壙上部にかけて緩く立ち上がり、壁高は確認面から約50cmを測る。最上部には幅約50cmの範囲に炭化物と粘性のある黄褐色土が認められる。この黄褐色土は土壙墓に見られる遺存体と同質である。

遺物は図示していないが埋土から縄文晩期の胴部片5点が出土するものの詳細な時期は不明である。(武田 修)



第191図 ピット320埋土 (1・2), 321埋土 (3・4), 321a埋土 (5・6), 323埋土 (7), 324埋土 (8~15), 327埋土 (16) 出土土器

ピ ッ ト 327

遺 構 (第192図, 図版31-1)

本ピットはD79グリッドに位置する。規模は長軸約1.18m, 短軸約1.02mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約23cmを測る。遺存体は粘性のある暗赤褐色を呈する。

第191図-16は西壁隅から出土した。中央部に向かって僅かに傾くものの口縁部を上にした正立の状態で置かれている。土器から約20cm程離れて歯骨も検出されていることから頭部付近に置かれたことに間違いはない。

石器の重なりから判断すると先に白色粘土を置き、次に刃部を内側に向けた2本の石斧、最後に大型フレークが配置される。それぞれの石器は重なっており意図的に順序を決めている様にも見受けられる。

遺 物 (第191図-16, 第188図-10~15, 図版31-2)

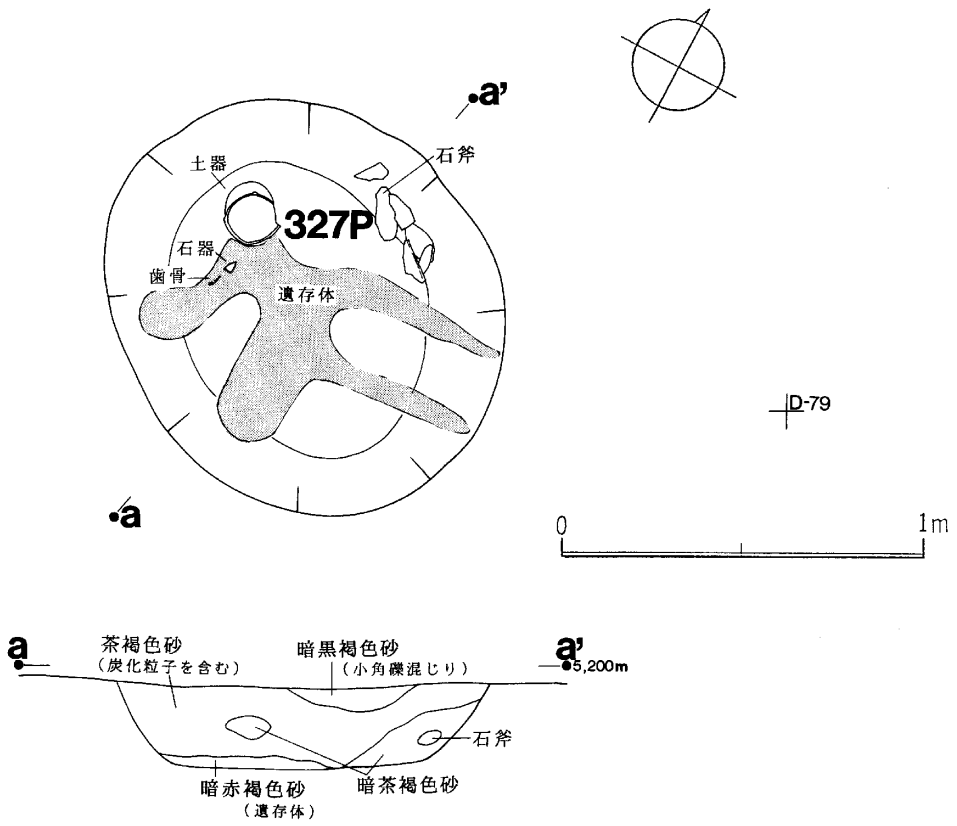
第191図-16は口径約17cm, 器高20.5cmの中型土器である。縦走縄文を施した後に、帯縄文を口縁下部と胴上部に付けている。微隆起線は4個の小突起から派生する2本と口縁部と平行する1本がある。口唇部には細かな刻みが連続し、底部は揚げ底となる。続縄文後北C₁式に比定される。

石器は第188図-10を除き北壁際に張り付くようにまとまって出土した。10は頭部付近から出土した石鏃。基部は幅広で丸みもち、右側縁部を細かく調整したもので小型ナイフの可能性もある。11は先端部が破損する。柄部の両側が弧状を呈した両面加工ナイフ。12・13は原石面を残す。12は縦長剥片の両側縁に刃部をもつ削器。13は右側縁部の一端に細部加工を施す。14は自然礫の下端部だけを研磨した両刃の磨製石斧。敲打調整は行われていない。15は両側縁部が調整された片刃磨製石斧。2点の石斧とも刃部は弧状を呈する。15は泥岩製。10~13は黒曜石製。

小 括

本ピットには遺存体があり土壌墓である。土壌墓の長軸は東-西方向にあり、頭位は西である。頭部付近に土器が正立の状態で見られる。時期は続縄文後北C₁式に比定される。

(武田 修)



第192図 ピット327平面図

ピ ッ ト 328

遺 構 (第193図, 図版31-4)

本ピットはC79グリッドに位置する。規模は長軸約1.50m, 短軸は北壁が膨らみをもつもので約1.30mである。緩く立ち上がる壁高は確認面から北壁が約22cm, 東壁が約25cmである。床面は北側から東側にかけて緩く傾斜する。埋土の中央部付近から床面にかけてベンガラ混じりの暗赤褐色土が厚く堆積している。粘性は無いが遺存体と判断される。

小柱穴は直径約8~10cm, 深さ約7~10cmのものが中央から西側の床面を中心に7本あり, ほぼ等間隔に配置されるものの中央部から東側の床面では検出できなかった。

遺 物 (第194図-1, 第195図-1~20, 図版31-3, 図版32-1~20)

第194図-1は遺存体の上部を主体としてピット328bの上部及び周辺のグリッドから出土した破片が接合した。口径は最長部28.6cm, 最短部25.5cmの楕円形を呈する。器高は37.7cmの大型土器である。胴中央部から底部にかけて膨らみをもち, 底部は揚げ底となる。器面は縦走縄文を地文として, 口縁下部に2条の縄線文が施される。口唇部の内側には縄端が押捺される。口縁部から胴中央部にかけて煤が多量に付着する。

石器は第195図-1~20が出土している。1・2は床面から出土したもので, 2は両面加工ナイフの柄部。1・3~13は無基石鏃である。1・3~6の基部は抉りがあるが7~13は抉りがなく平基である。15・17は片面加工ナイフ。16は両面加工ナイフ。18は棒状原石を利用した断面が楔状の削器。19・20には微細な加工痕, 21は原礫面を残す大型剥片の縁辺部に微細な使用痕がある。16・17は玄武岩製であり, 他は黒曜石製。

小 括

第194図-1の土器は破碎されて遺体及び周辺に散布された可能性があり, この土器は本土壙墓に伴う可能性がある。時期は続縄文初頭である。 (武田 修)

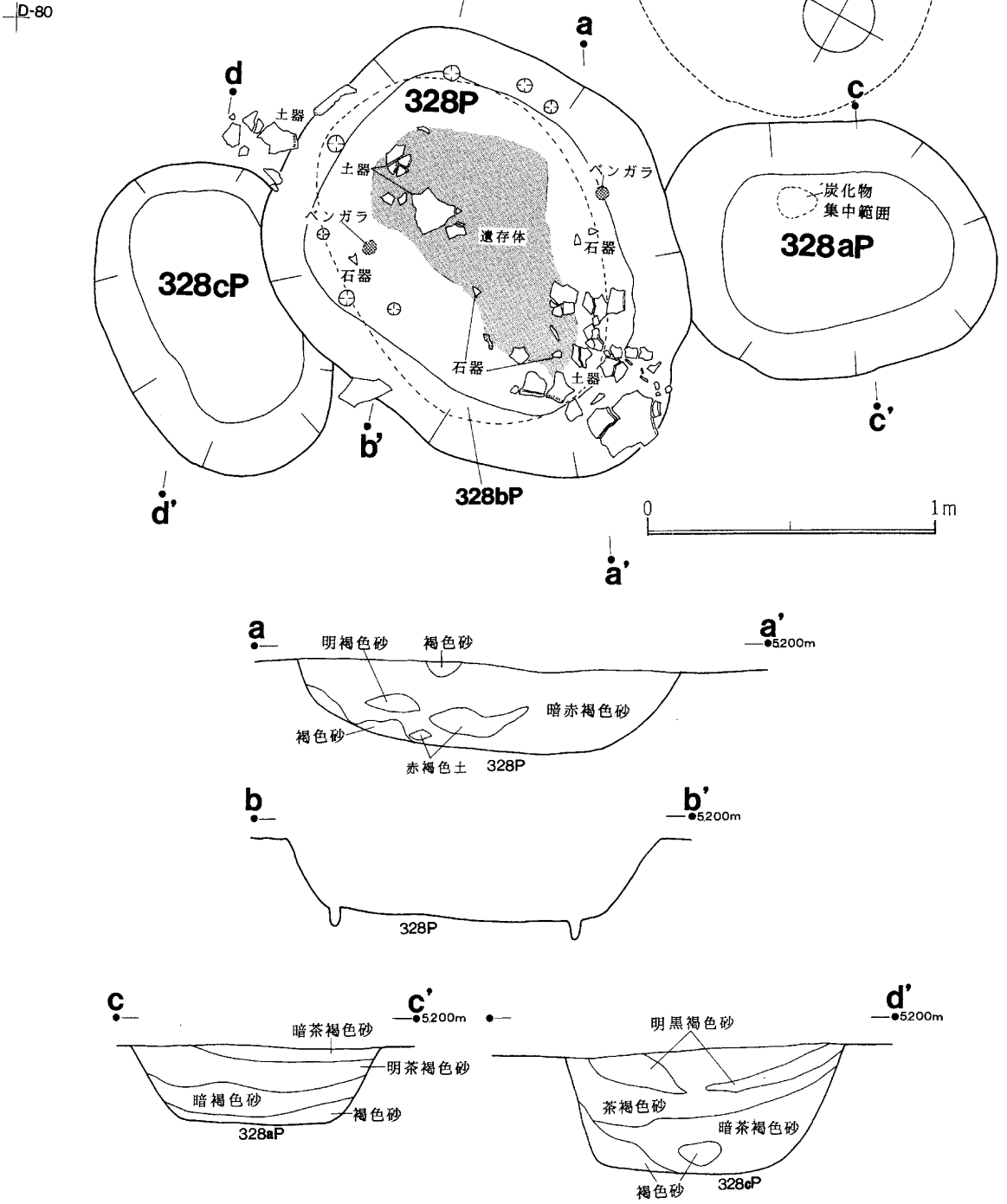
ピ ッ ト 328 a

遺 構 (第193図)

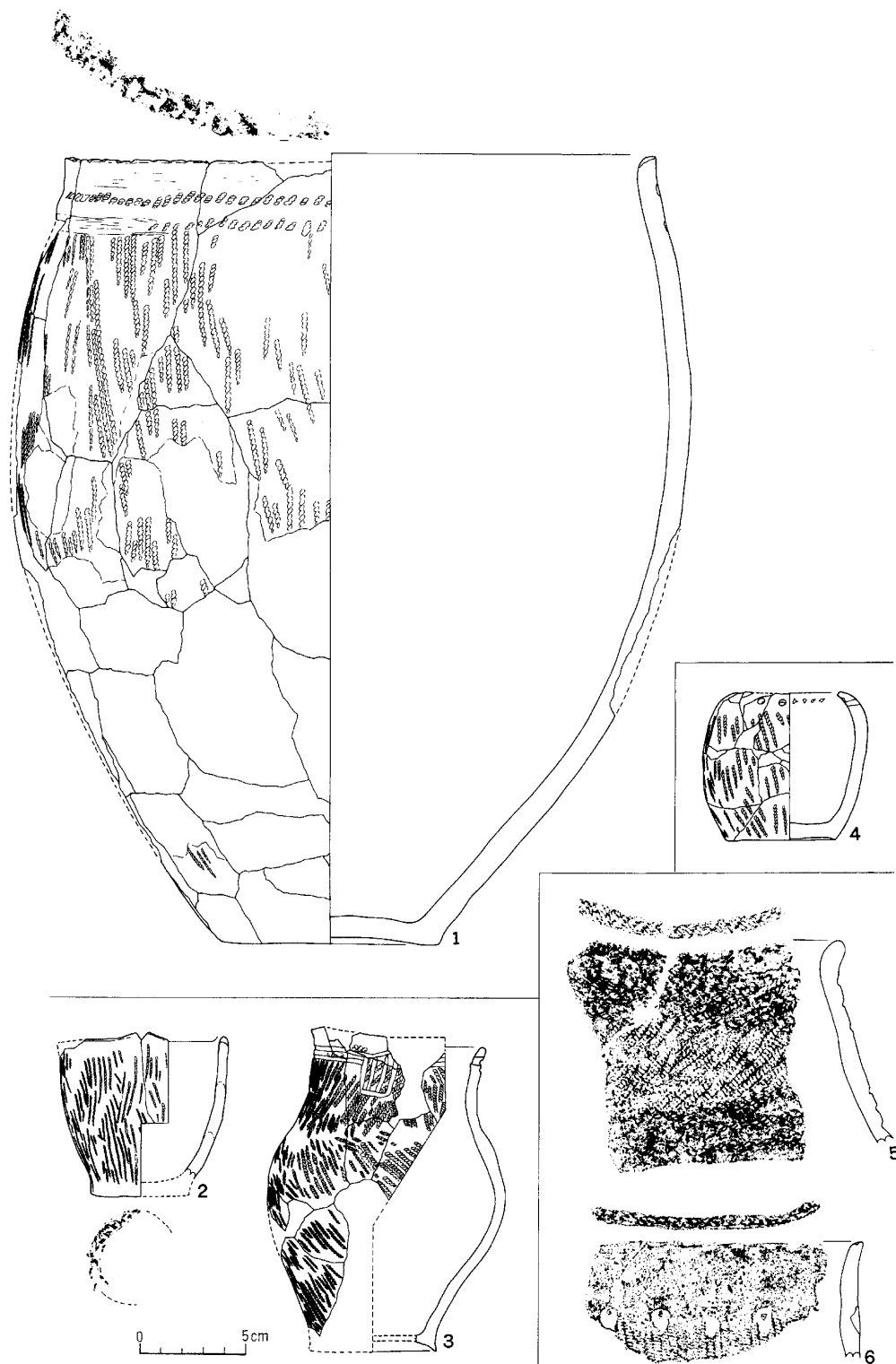
本ピットはピット328の北壁と一部分であるが重複する。明確な切り合い関係を確認することはできなかった。規模は長軸推定約1.20m, 短軸約0.90mの楕円形で軸は南-北方向を向く。壁高は確認面から約26cmである。西壁側の床面に炭化物が見られる。

遺 物 (第194図-2・3, 第195図-22, 図版32-21・22)

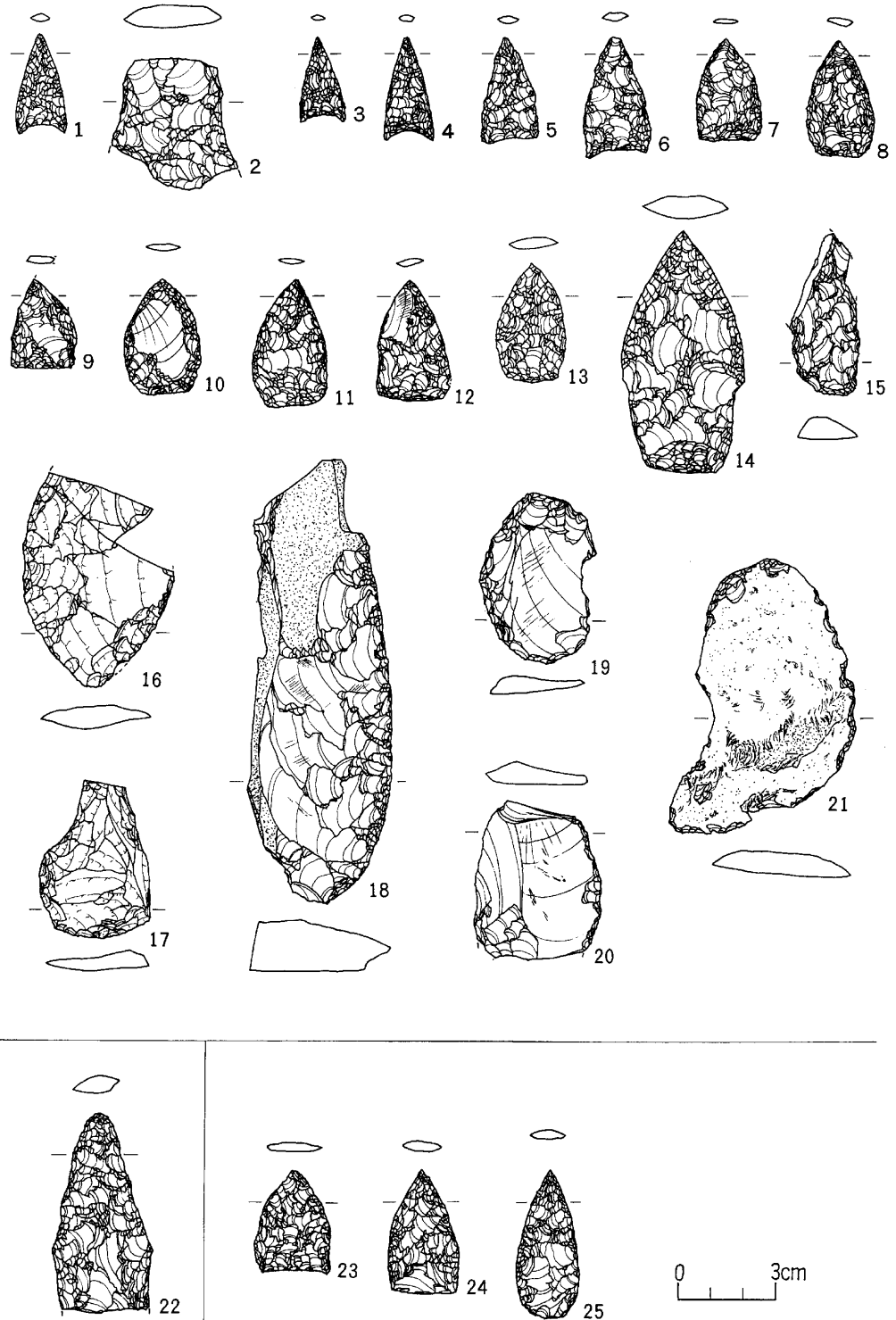
第194図-2は口径8cm, 器高7.5cmの小型土器。器面は縦走縄文を地文とする。口唇部には頂部に切り込みのある小突起をもつ。現存は2個であるが4個もつのであろう。底部の円周部には刺突が加えられている。内面には赤色顔料が付着する。3は口径8.5cm, 器高15.5cmの中



第193図 ピット328, 328a, 328c平面図



第194図 ピット328埋土(1), 328a埋土(2・3), 328b埋土(4), 328c埋土(5・6)出土土器



第195図 ピット328床面 (1・2)・埋土 (3~21), 328a埋土 (22), 328c埋土 (23~25) 出土石器

型土器。胴中央部が丸みを持ち、口縁部が頸長の壺形を呈する。器壁は薄い。地文は頸部が縦走縄文、胴部から底部にかけては横走縄文が施される。口縁直下には2条の横走沈線と実測図に示す通り区画された数本の短い沈線と2個の小孔がある。底面の大部分は欠失する。意識的に破壊されているのかもしれない。残存部を見ると揚げ底を呈する。2・3の土器は続縄文初頭フシココタン下層式であろう。

石器は第195図-22が両面加工ナイフか石銛であろう。黒曜石製。

小 括

床面等に遺存体の痕跡は認められなかったものの形態から土壙墓と思われる。時期は第194図-2・3に示す続縄文初頭の土器が最も近いのであろう。(武田 修)

ピ ッ ト 328 b

遺 構 (第196図, 図版33-1)

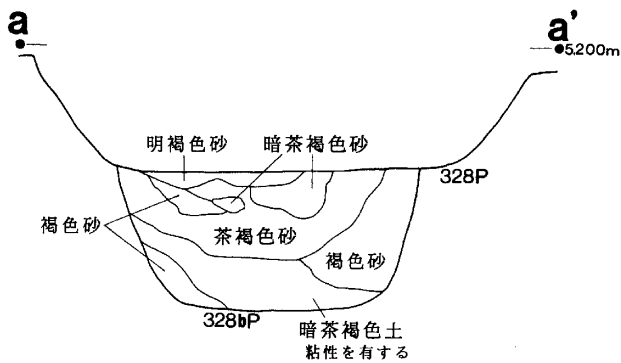
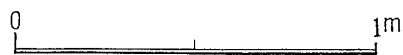
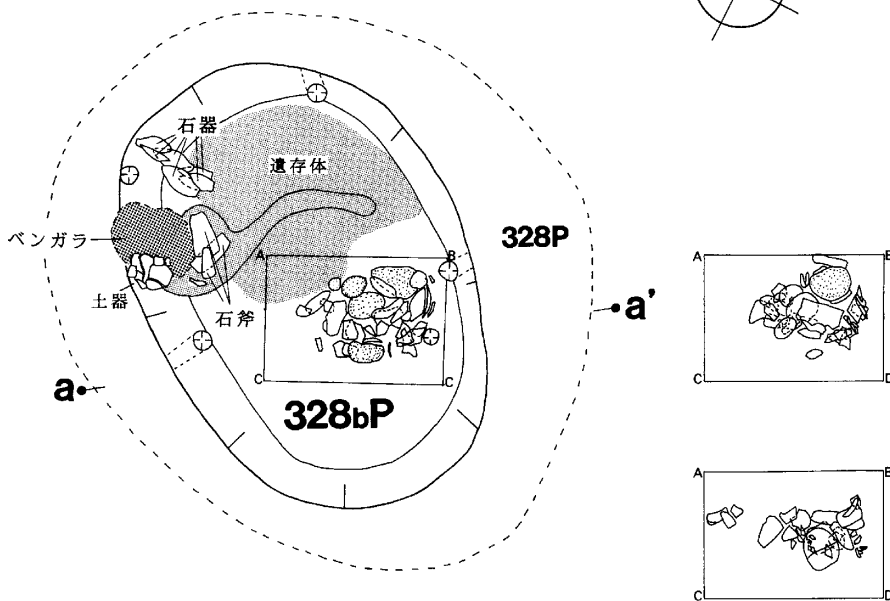
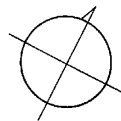
本ピットはピット328の暗赤褐色土の遺存体を除去後の床面精査中に落ち込みを確認した。規模は長軸約1.30m, 短軸約0.80mの楕円形を呈し、壁高は確認面から約38cmである。上部から約21cm程掘り下げた段階で約3cmの厚さのあるベンガラが幅約20~25cmの範囲に散布されており、第197図-1・2の石鏃2本が出土した。並行して壁の周辺部からは小柱穴を確認した。小柱穴は埋土を除去する際からすでに確認していた。約25cm程下げると粘性を有する暗赤褐色土が現われた。部分的に骨の腐食部が北側方向に伸びている。この面の南壁隅からは第197図-11~13, 第198図-2・5の両面加工ナイフは柄部を下面に向け傾斜した状態で出土した。第200図-3・7・8の3本の磨製石斧は両面加工ナイフと同じ向きを示し、刃部は下側にあるなど一定の規則性が窺える。この暗赤褐色土は底面のほぼ全域に広がるもので層厚約26cmに及ぶ。スクリーンで示した区域が最も厚い部分で、各種の遺物は暗赤褐色土を数cm下げた段階で出土した。

中央部からやや南側に寄った位置から出土している石器群の埋納方法にも何らかの規則性がある。まず、初めにメノウ、頁岩などの小型フレーク、次に大型フレーク、次に原石・各種のツールを入れ、比較的上部に黒曜石の石器を入れていることが高低差から推測できる。これらの石器は約30~50cmの範囲にレベル差をもって出土している。或いは木製の容器に納められていたのかもしれない。

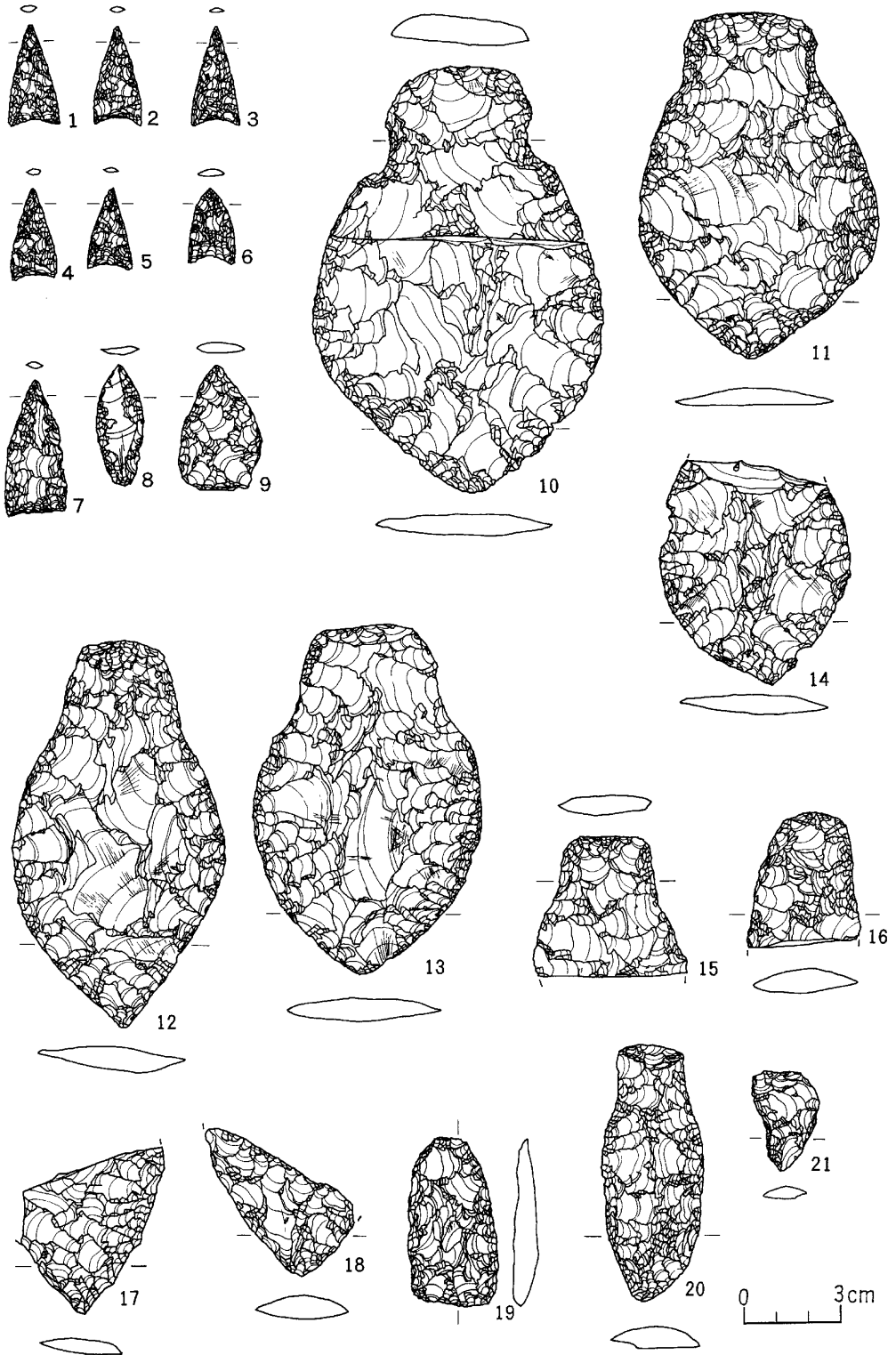
遺 物 (第194図-4, 第197図, 第198図, 第199図, 第200図, 第201図, 第202図, 第203図, 第204図, 図版33-2~14, 図版34, 図版35, 図版36, 図版37)

第194図-4の土器は口縁部を斜めに向けた状態で南壁際から出土した。口径5cm, 器高7.3cmの小型土器。内屈した口縁部の内側には細い刺突が3~4mm間隔に連続して施される。吊り下げ様の小孔が2個見られる。反対側は破損しており状況は不明であるが、本来は2個1対

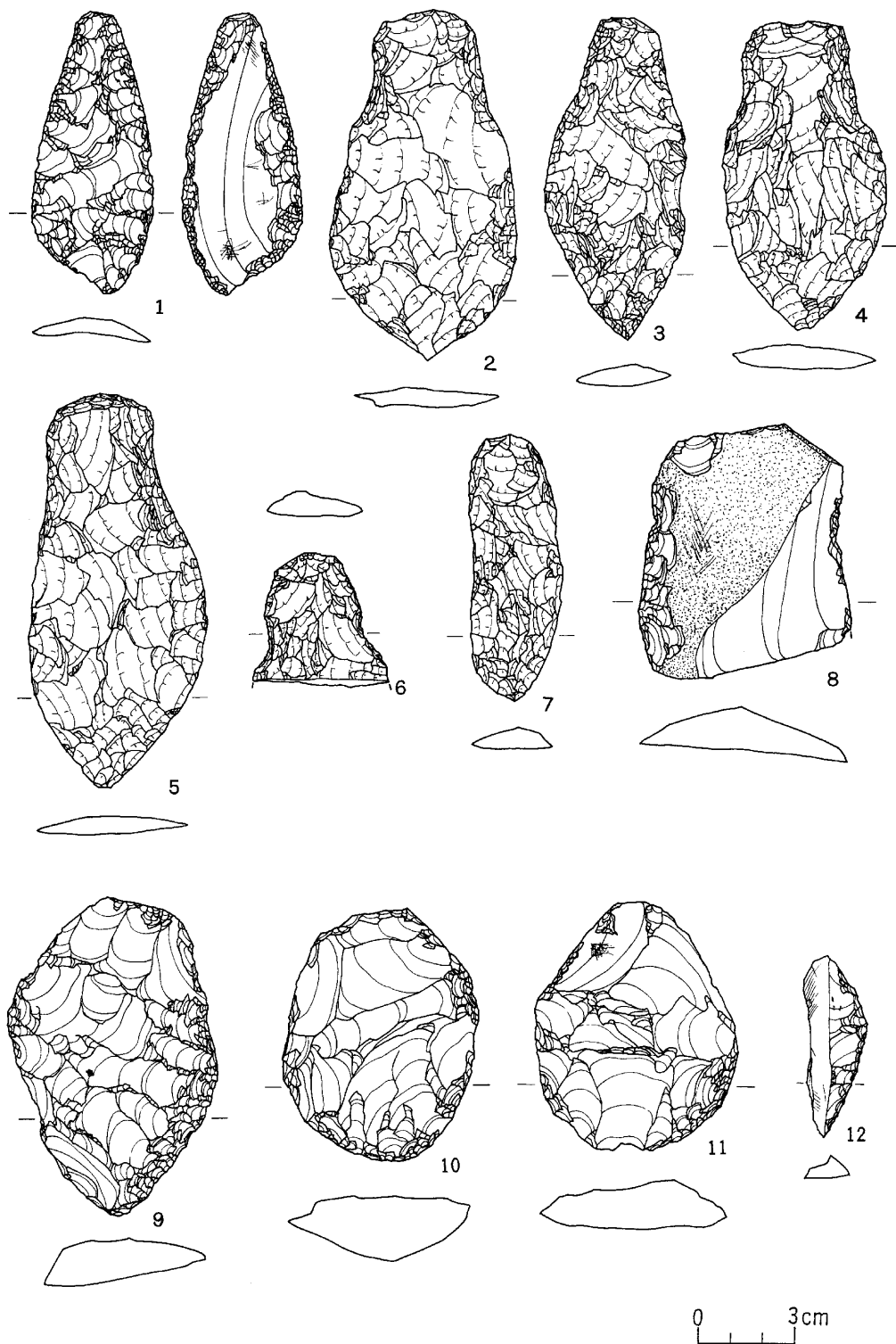
D-80



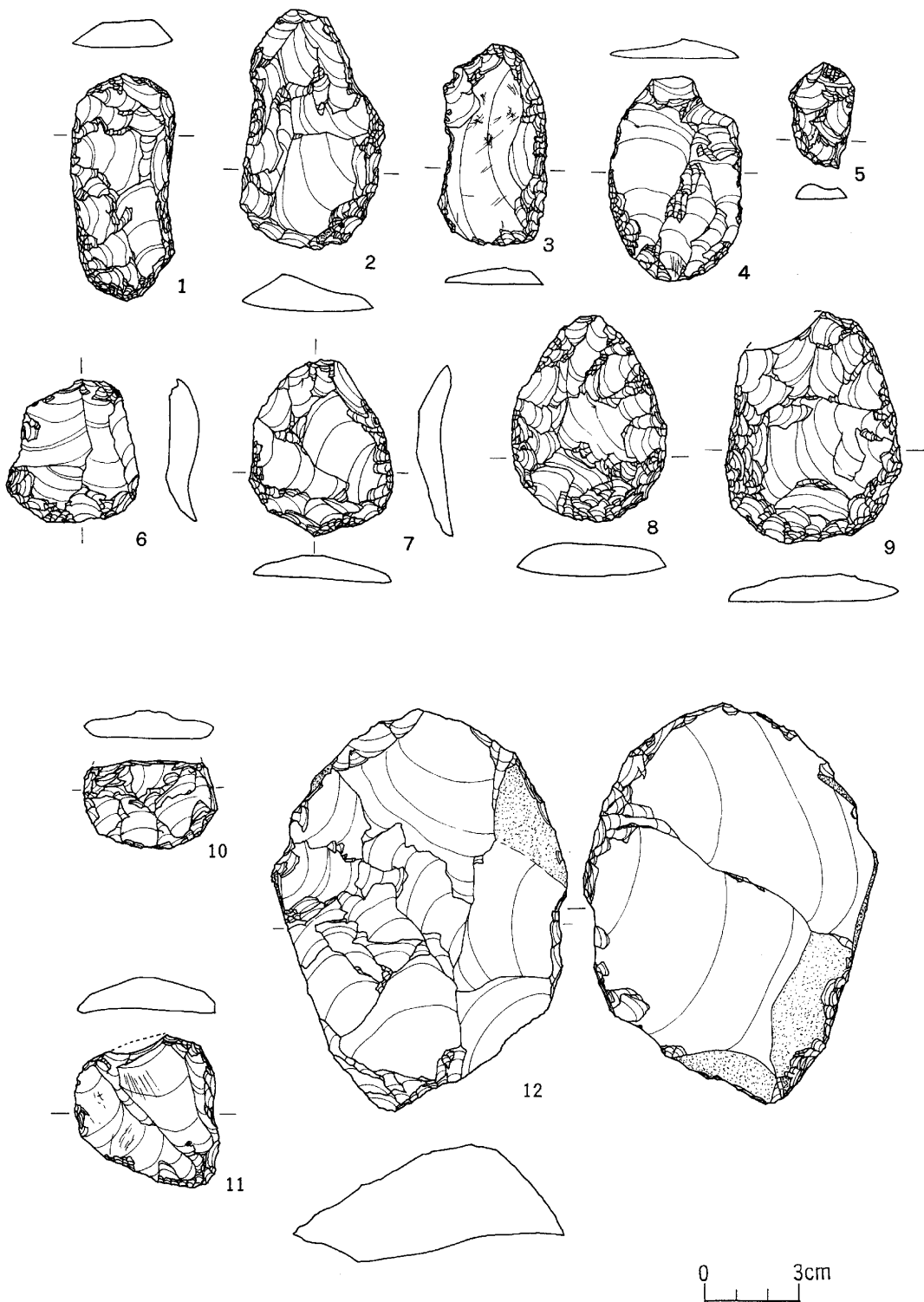
第196図 ピット328b平面図



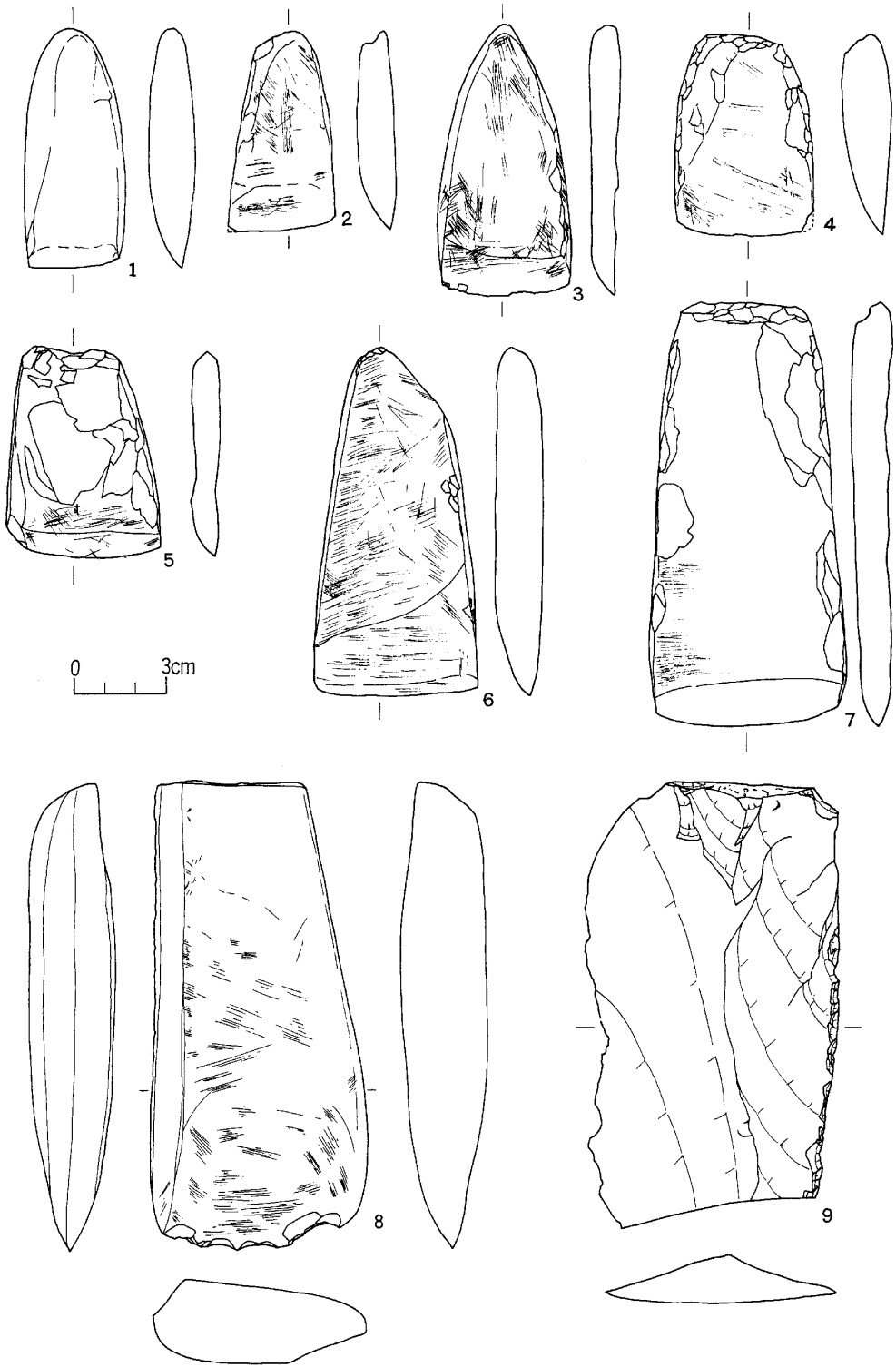
第197図 ビット328b上部ベンガラ内 (1・2)・床面 (18)・埋土 (3~17・19~21) 出土石器



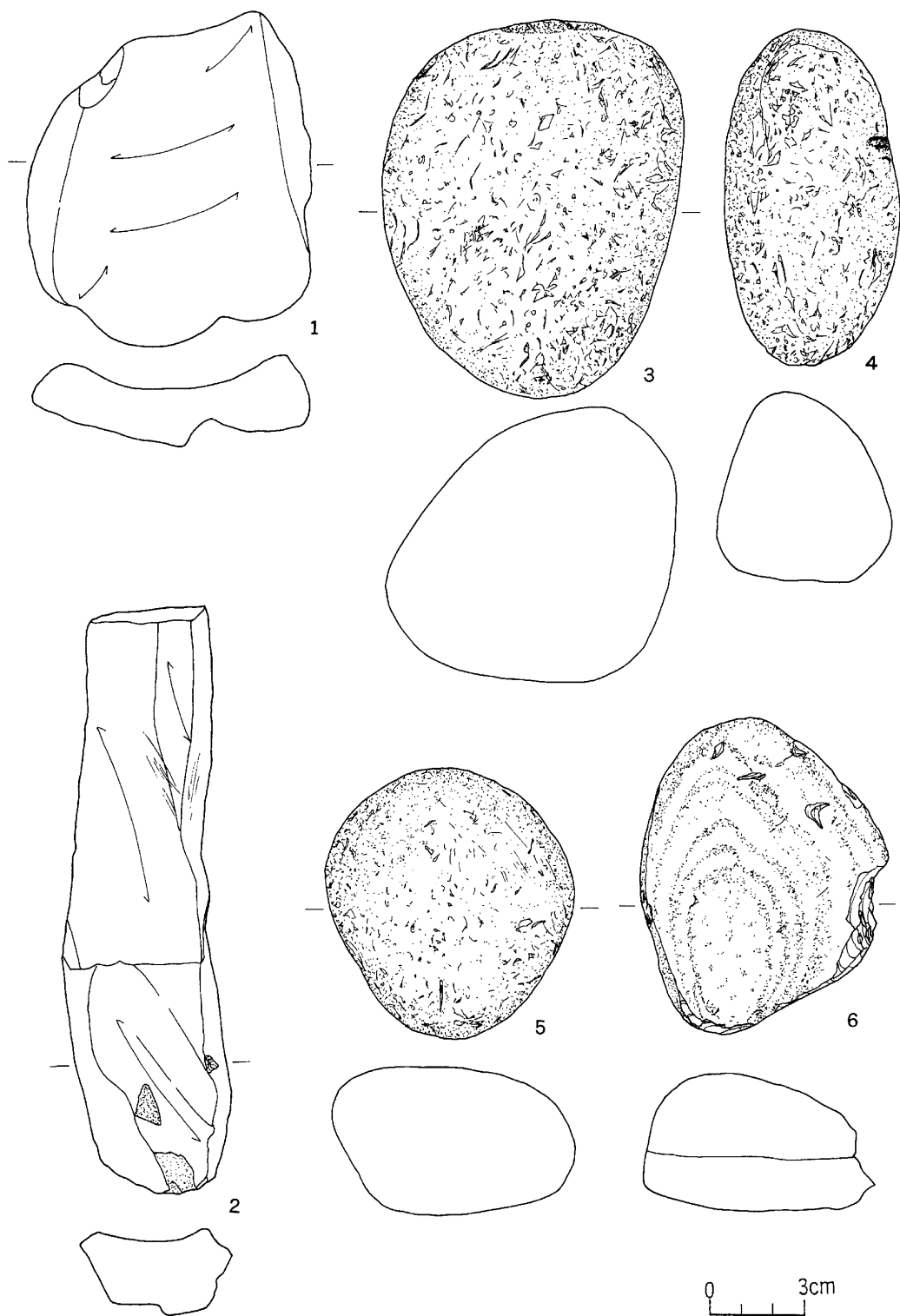
第198図 ピット328b埋土(1~12)出土石器



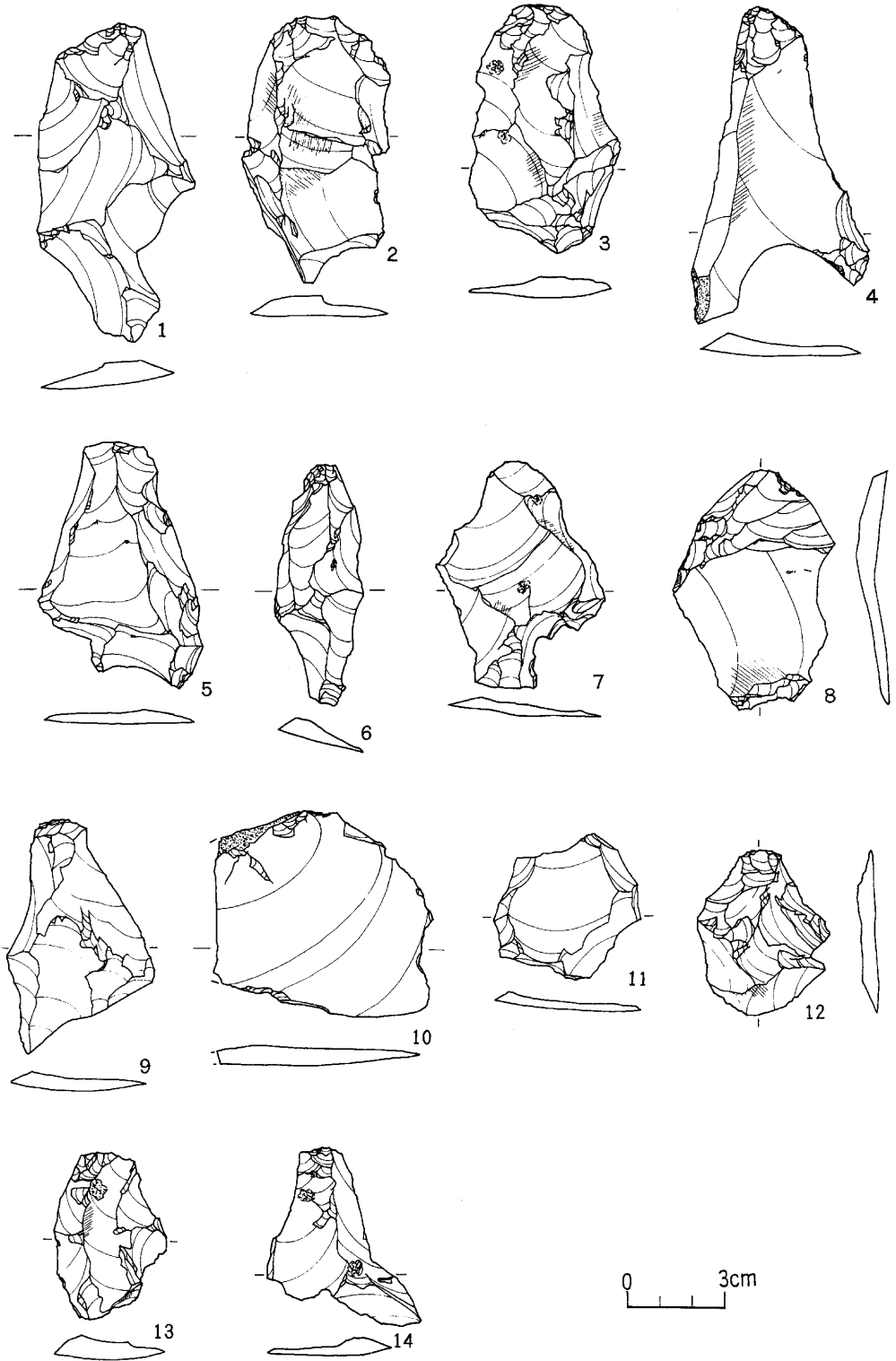
第199図 ビット328b埋土(1~12)出土石器



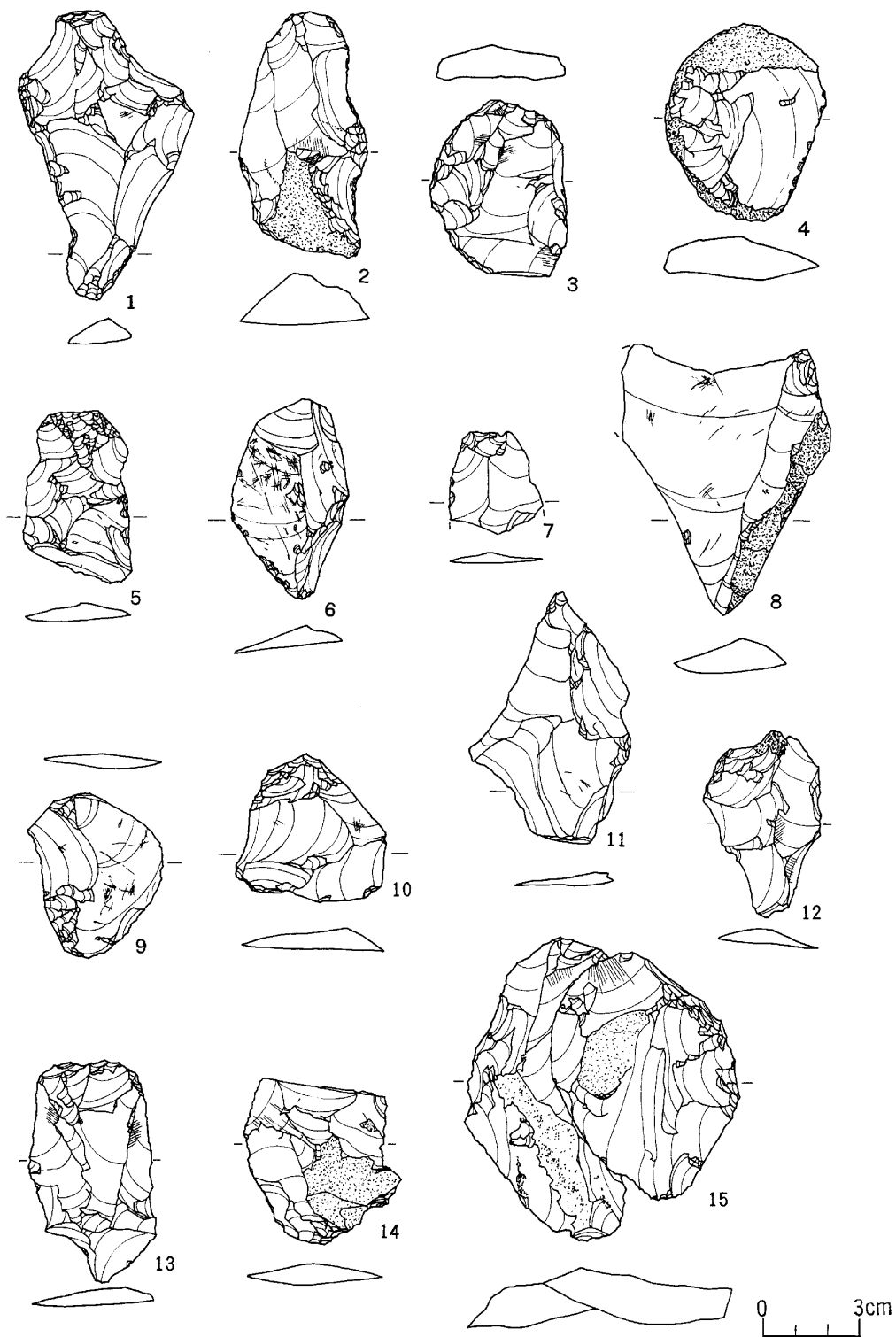
第200図 ピット328b埋土(1~9)出土石器



第201図 ピット328b埋土（1～6）出土石器



第202図 ピット328b埋土(1~14)出土石器



第203図 ピット328b埋土出土石器



第204図 ピット328b埋土(1~26)出土石器

あったのであろう。器面は縦走縄文を地文とする。底部は若干であるが揚げ底を呈する。続縄文初頭。

石器は各種のものが多量に出土している。第197図-1～9は石鏃。1～7は無茎石鏃。8は柳葉形、9は三角形を呈する。両面加工ナイフには3タイプある。明瞭な柄部を作出し、中央部の両縁辺部が丸く膨らむ10～13がある。14・17・18もこのタイプであろう。また、柄部は作出されるものの柄と刃部がほぼ平行な20、第198図-2～6があり、柄部が作出されない第197図-16・19、第198図-1がある。これらのナイフは黒曜石と安山岩の2種類を素材としている。第197図-21は削器。第198図-7は片面加工ナイフ。8は削器。9～11は肉厚で剝離面が大きく、加工も充分でない。ナイフの未製品であろう。12は削器。

第199図-1～4、10・11は削器。5～9は搔器。12は残核。第198図-2～7は玄武岩製であり、他は黒曜石製。

第200図-1～8は片刃磨製石斧。1のみ刃部と側縁部が研磨されるが、他は全面が研磨される。2は柄部に敲打痕がある。3・6は撥状を呈する。4は両側縁部と柄部は敲打調整される。8は擦り切り手法による。9は長軸両端部に原石面を有し、右側縁部は刃こぼれがある。1は泥岩製。2・3・5・6・8は緑色片岩製、4・7は青色片岩製、9は玄武岩製である。第201図-1・2は砂岩製の砥石。3～6は黒曜石の原石。

定形石器は黒曜石を主体とする。僅かであるがナイフに使用された玄武岩、第199図-5の搔器1点があるだけで、他の石材は見られない。一方、剥片は第202図、第203図の黒曜石の他に、第204図-1～3のチャート製、4～11、25・26のメノウ製、12～24頁岩製がある。この剥片は定形石器の下部から出土した。意識的に剥片を下部に置き、定形石器を上部に位置づけている。21・22、24～26の5点は接合石器である。

小 括

本ピットの長軸は東-西方向にある。暗赤褐色土の遺存体は見られるものの歯骨は検出できず、頭位は不明であるが、他の時期の土壙墓の形態などから判断して西頭位の可能性が高い。壁の周囲には小柱穴がある。続縄文宇津内IIa式と切り合っており、本土壙墓が古い。第194図-4の小型土器は宇津内式に特徴的な内湾（屈）であり、突瘤は見られないものの内側からの刺突は突瘤の発生を想起させる。興津式に関連するのであろう。 (武田 修)

ピ ッ ト 328 c

遺 構 (第193図)

本ピットはピット328の南壁隅の上部で僅かに切り合う。明確に新旧関係を把握することはできなかつた。規模は長軸約1.14m, 短軸約0.75mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約40cmである。底面は比較的丸みを帯びる。

遺 物 (第194図-5・6, 第195図-23~25, 図版38-1~3)

第194図-5の口縁部は丸みをもって外反する。口縁直下に2条の縄線文と斜位縄文を挟んだ下部に3条の縄線文が施されたもので器形的には長頸壺状になると思われる。6の口縁部は幅広の無文帯をもち、縦走縄文とは下方から突き刺した円形文で区画される。この円形文の内部中央には施文具に伴う突起が残る。この2点は続縄文前半フシココタン下層式に比定されるところと思われる。

石器は第195図-23~25がある。いずれも無茎石鏃であるが、23・24は鏃身が幅広く五角形状を呈し、25の基部は丸みをもつ。3点とも黒曜石製。

小 括

形態から土壙墓と思われるが、詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピ ッ ト 329

遺 構 (第205図, 図版38-5)

本ピットはC78グリッドに位置する。規模は長軸1.40m, 短軸0.73mの楕円形を呈する。長軸は西-東方向を取る。底面から壁にかけて丸みをもって立ち上がり、壁高は確認面から約30cmを測る。南端部の上部に円礫があり、礫の下部から第207図-1に示す土器が出土した。土器の底部周辺にはベンガラが散布されており、土壙墓と思われる。ピット329a・329bとは南壁の一部で切り合うが、明確な新旧関係を把握することはできなかつた。

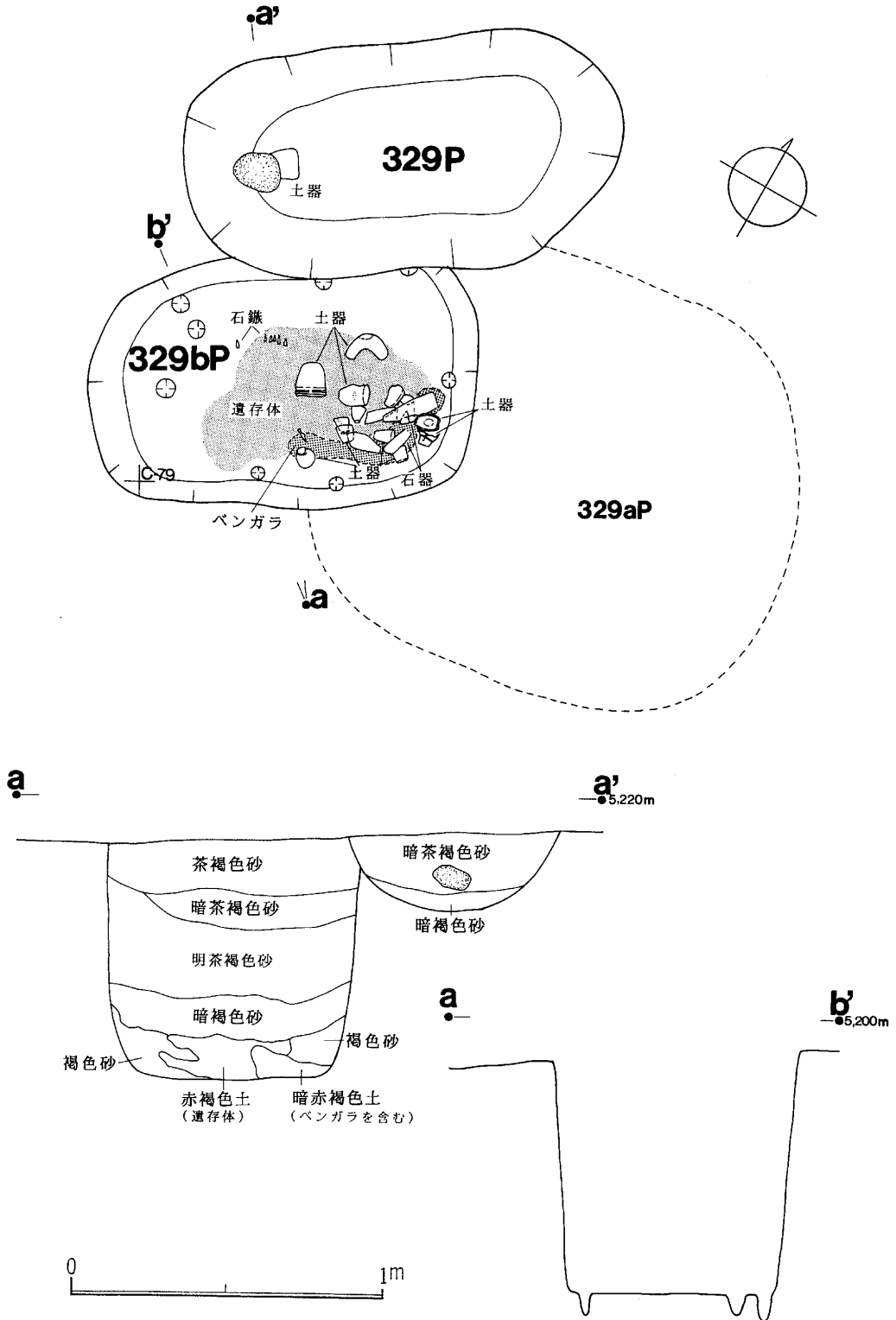
遺 物 (第207図-1, 図版38-4)

この土器は口径9.2cm, 器高7cmの小型土器である。縦走縄文を地文とする。底部の中央が丸みをもつためやや不安定である。内面には赤色顔料が付着する。時期は続縄文初頭であろう。

小 括

遺存体と思われる赤変部は認められなかつたが、ピットの形態とベンガラ散布から土壙墓と判断できる。第207図-1に示した土器が本土壙墓に伴うものと思われる。時期は続縄文初頭と思われる。

(武田 修)



第205図 ピット329, 329b平面図

ピ ッ ト 329 a

遺 構 (第206図, 図版39-1)

本ピットはピット329と西壁の一部, ピット329bと南壁の一部が重なる。規模は長軸約1.70m, 短軸約1.35mを測る幅広の楕円形を呈する。壁高は確認面から約50cmである。暗赤褐色を呈した遺存体はピットの中央部にある。頭部は膨らみ輪郭を掴むことができた。頭位は西方向にある。直径約6~10cm, 深さ約14~24cmの小柱穴は四隅にある。ベンガラは東壁隅に3箇所あり近接して土器, 石器が出土している。

石器は遺存体からやや離れた東側にあり, 第207図-2の土器はその上部から出土した。先に石器を埋納したのであろう。近接する第207図-3の大型土器も同一レベルから出土している。

遺 物 (第207図-2~4, 第208図, 図版39-2~4, 図版40)

第207図-2は口径約8~9cm, 器高約13cmの小型土器。口縁部には内側からの突瘤がめぐり, 山形小突起からは1対の垂下した隆帯と1対の吊り耳をもつ。ベンガラ散布域から出土したためか口縁上部の内外面にはベンガラが付着し, 底部近くでは炭化煤が残る。3は口径約16~17cm, 器高約23.5cmの大型土器。口縁下部に突瘤文がめぐり, 2個1対の円形貼付文がある。胴部は縦走の捺糸文を地文とする。口縁部から胴部にかけて炭化煤が著しく付着する。この2点は続縄文字津内IIa式に比定される。4は頭部付近の埋土から出土した。口径は長径9.5cm, 短径6cmの楕円形であるが, 底部は円形。器高約8cmの小型土器。口縁部の長径面外側と短径面内側に縄短圧痕文が施され, 変化を持たせている。両短径部に1対の小孔がある。やや外反した口縁部直下に縄線文が施され, 胴部から底部にかけて「∩」字状に縄線文が押捺されている。内外面に煤が付着する。この土器はピット329bの土器群に伴うのであろう。本土壙墓を構築する際に偶然発見したピット329bの土器をそのまま副葬品として埋納したのであろう。

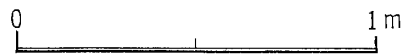
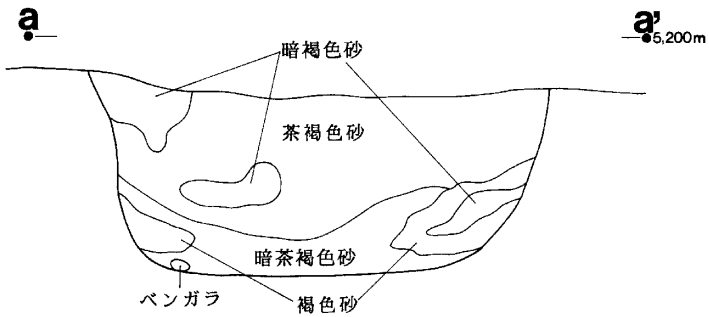
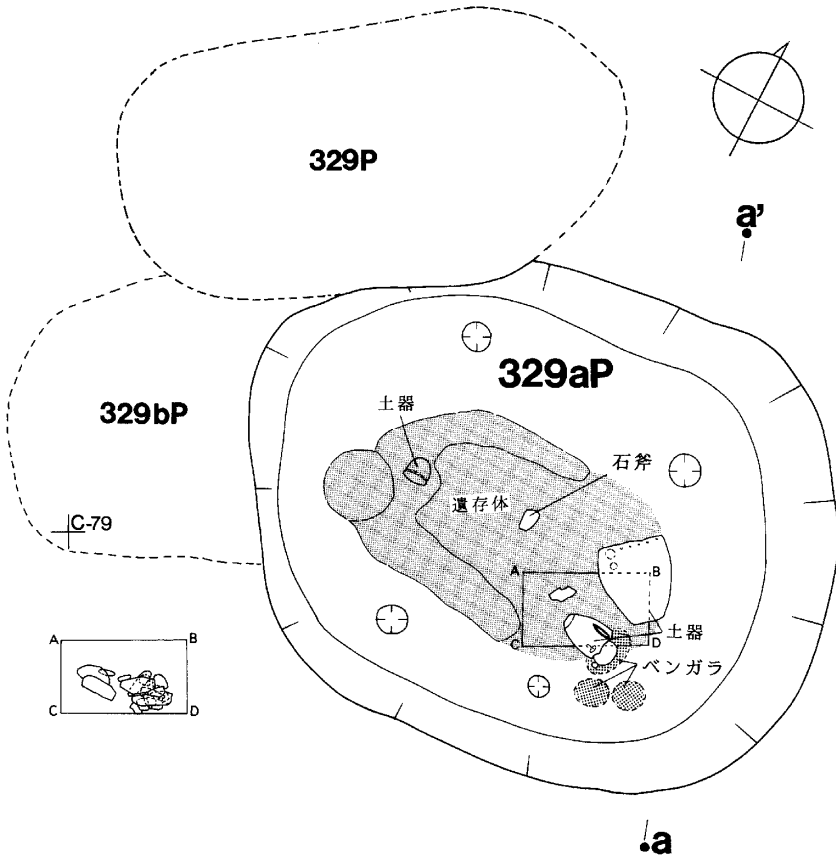
石器は第208図-1~4が両面加工ナイフ。1は先端部が欠失する。上部はつまみ付きとなる。2・4の先端部は尖り, 3は丸みをもつ。5・6・10は削器。7~9は搔器。11~14は剥片であるが11には加工痕と微細な使用痕がある。15・16は両刃磨製石斧。15の中央部は両側縁が敲打調整される。柄部などの装着固定と関係するのであろう。16は中間で折れている。本来はかなり大型であったと思われる。擦り切り手法によるもので, 丁寧に研磨調整されている。

小 括

本ピットは遺存体上部から出土した2点の土器から続縄文字津内IIa式の土壙墓である。頭位は西方向にある。

(武田 修)

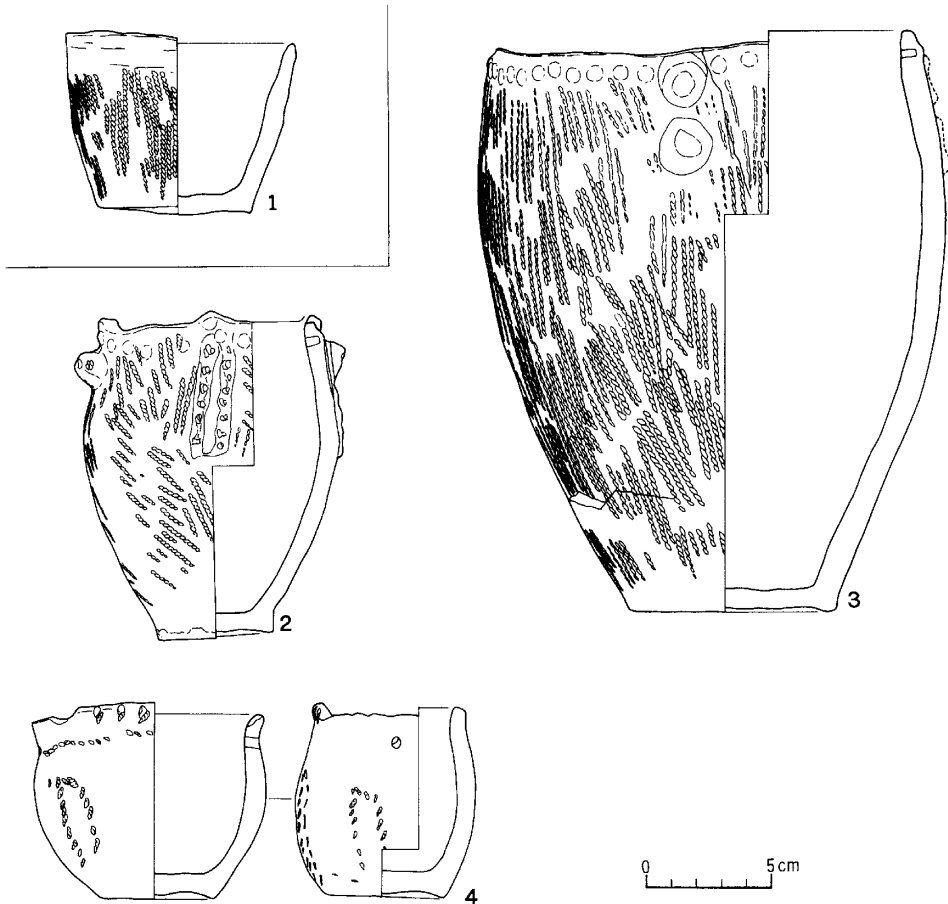
ピ ッ ト 329 b



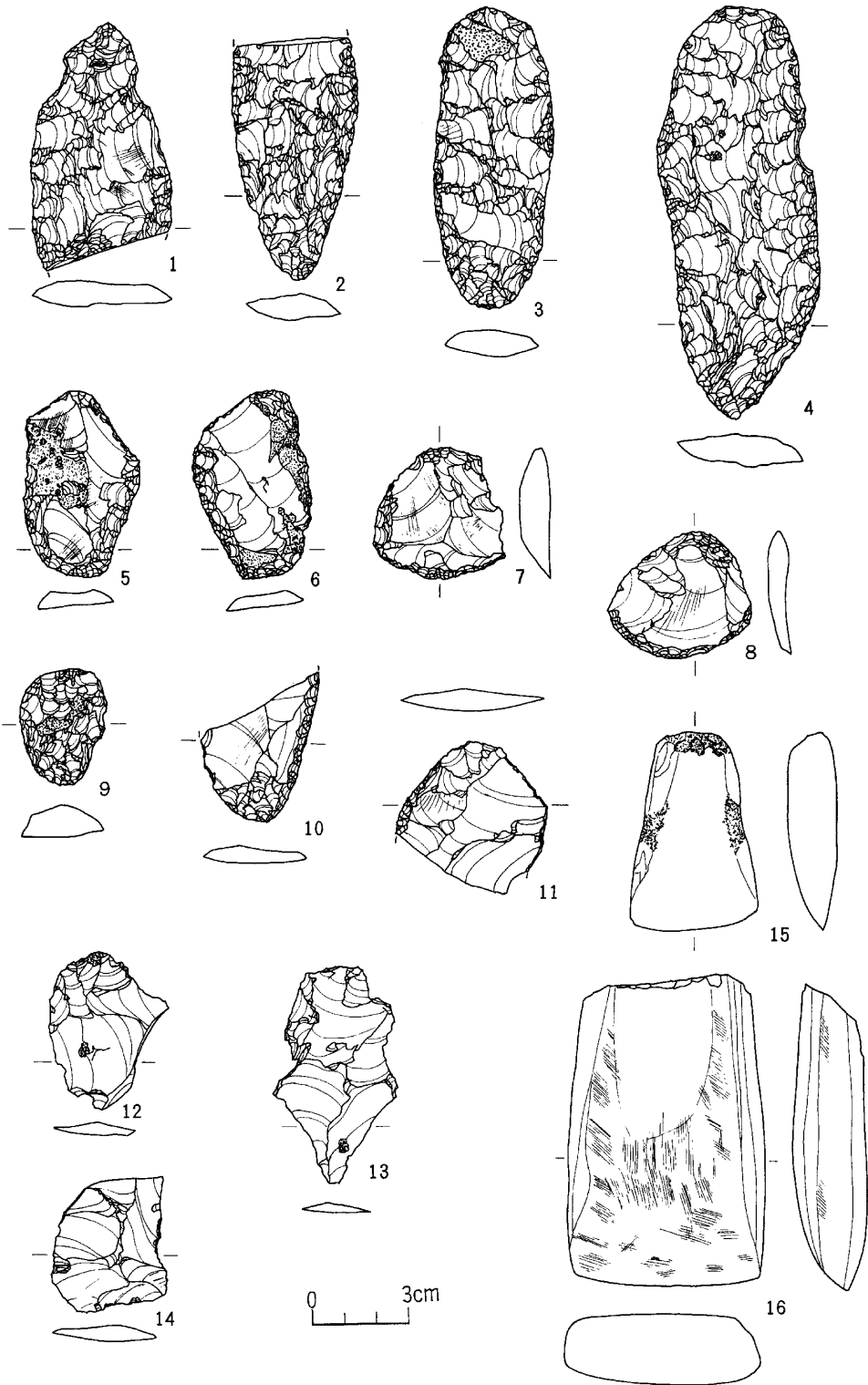
第206図 ピット329a平面図

遺 構 (第205図, 第209図, 図版41)

本ピットはピット329aの南壁検出中に確認した。ピット329と北壁側, 329aとは東壁側で切り合う。北壁側の上部がピット329によって切られているため正確な規模は不明であるが長軸約1.25m, 短軸約0.80mの不整形を呈する。壁は垂直に立ち上がり, 壁高は確認面から約75cmである。遺存体は暗赤褐色を呈しミニチュア土器群, 石器が東壁隅周辺で縦長に散布されたベンガラ上部から出土し, 小型土器, 双口土器は遺存体の中央付近から出土している。これらの土器は伏せられたり, 斜めの状態で出土している。どちらかと言うと乱雑である。土器と石器の出土レベル, 重なりから見ると先にベンガラを散布し, 次に土器を置き, 最後に石器を副葬している。歯骨は確認できなかったが頭部の丸い膨らみは長軸面の南側にある。直径約5~8cm, 深さ約6~12cmの小柱穴は西壁3本, 南壁2本, 東壁1本, 北壁2本がある。



第207図 ピット329埋土(1), 329a埋土(2~4)出土土器



第208図 ピット329a埋土(1~16)出土石器

遺物(第210図, 第211図, 第212図, 図版42, 図版43, 図版44)

第210図-1~10はミニチュア土器。4, 10を除き底部は揚げ底で1~5は無文。1は口径5.5cm, 器高4.6cm。2は口径5.5×4cmの楕円形で器高6.2cm。内面の胴下部から底部にかけてベンガラが付着する。底部は小さい。3は口径5.8cm, 器高6.7cm。口縁部の台形状の突起下に小孔をもつ。4は口径6.5cm, 器高7.3cm。口縁部に2個の山形小突起が1箇所あり, その下部は外側から穿孔された小孔がある。5と6は入れ子の状態で出土。5は口径7×5.5cm, 器高5.5cm。口縁部の上面観は楕円形を呈し, 実測図に示す通り, 左側が「軸先」状となる。6は口径6.3cm, 器高5.8cm。口唇部には縄線文がめぐり胴部, 底部に円形刺突文が施される。7は口径6cm, 器高5.5cm。沈線文を三角形に構成し, 刺突文を胴上部で横位, 胴下部では2列単位として縦位に施す2個の小孔をもつ。8は口径6cm, 器高5.5cm。9は口径7cm, 器高5.5cm。口縁部の直下に縄端圧痕文が連続し, 底部には「×」字状に刺突が施される。10は口径3.5cm, 器高8cm。胴部は膨らみ, 口縁部がすばまる壺形である。口唇部と口縁部に縄端圧痕文があり, 2個のボタン状貼付文には鋭い刻みが施される。器壁は厚い。11は口径12.7cm, 器高13cm。口縁直下に工字文状の沈線文を施し, 刺突文を加える。底部の外周部には縄端圧痕文がめぐり。12は口径9cm, 器高10.4cmの小型土器。横位の縄線文は2本の短い縄線文で仕切れ, 下部にも横位の縄線文をもつ。口縁部の内側には縄端圧痕文が連続する。13は双口土器。一方の口縁部は欠失するものの, 片方は口径が6×4cmの方形状である。口縁部下に円形刺突と3条の縄線文が施され, 4個の小孔がある。捺糸文を地文とし, 胴下部は膨らみをもつ。器高13.4cm。

石器の第211図-1~9は頭部に近い西側端部から出土した無茎石鏃。全点とも一定方向にまともって並べられている。10は石槍。11・12は両面加工ナイフ。13・14は削器。15~17は片刃磨製石斧。15は左側縁部の表裏が敲打調整される。16は擦り切り手法による。17は全面とも横位方向に研磨される。18は磨石。19は凹石。15~17の磨製石斧は緑色泥岩製。18は泥岩製。19は砂岩製。他は黒曜石製である。

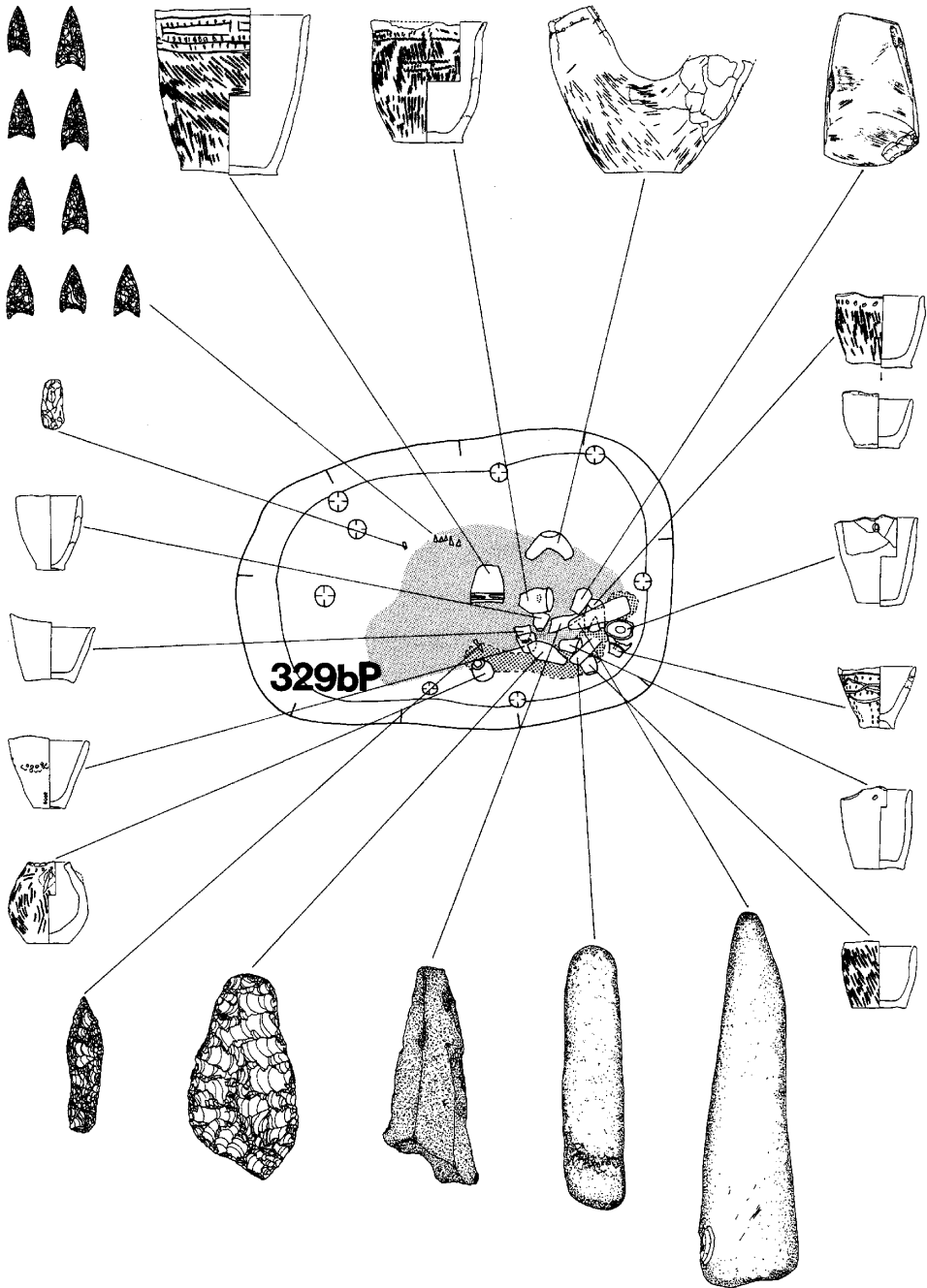
第212図-1~4は土器, 石器群の周辺から出土したたたき石。1の断面は扁平, 2・3は楕円状でありその長軸面の端部に使用痕が残る。4は角柱状の断面であり中央部にキズ状の使用痕がある。埋土出土であるが本ピットに伴うものであろう。5~8は幅広の棒状原石。8は断面が三角形となる。9は表面の色調が確認された遺存体に近い暗紫赤褐色を呈した土製品。ベンガラを含有させているのかもしれない。1~4は泥岩製。5~8は黒曜石製。

小括

第210図-11, 12の土器など沈線文系と縄線文系の土器が共伴するもので, 12は工字状である。縄文晩期終末から続縄文初頭の時期と思われる。平面形態は不整長方形を呈し, 底面に8本の小柱穴をもつ。南頭位の土壙墓である。

ピット329との新旧関係を掴むことはできなかったが, ピット329aとは明らかに本ピットが古い。

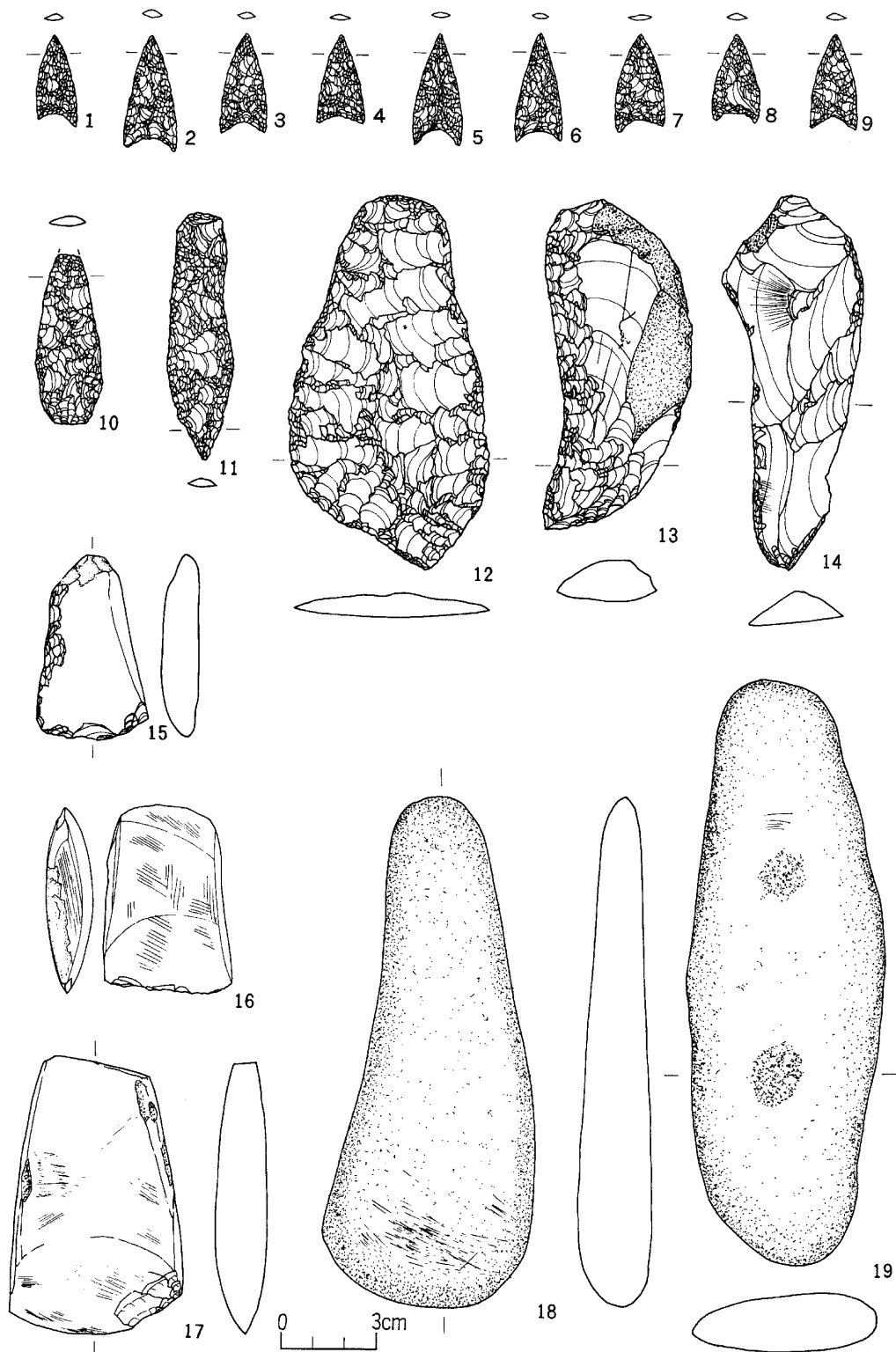
(武田 修)



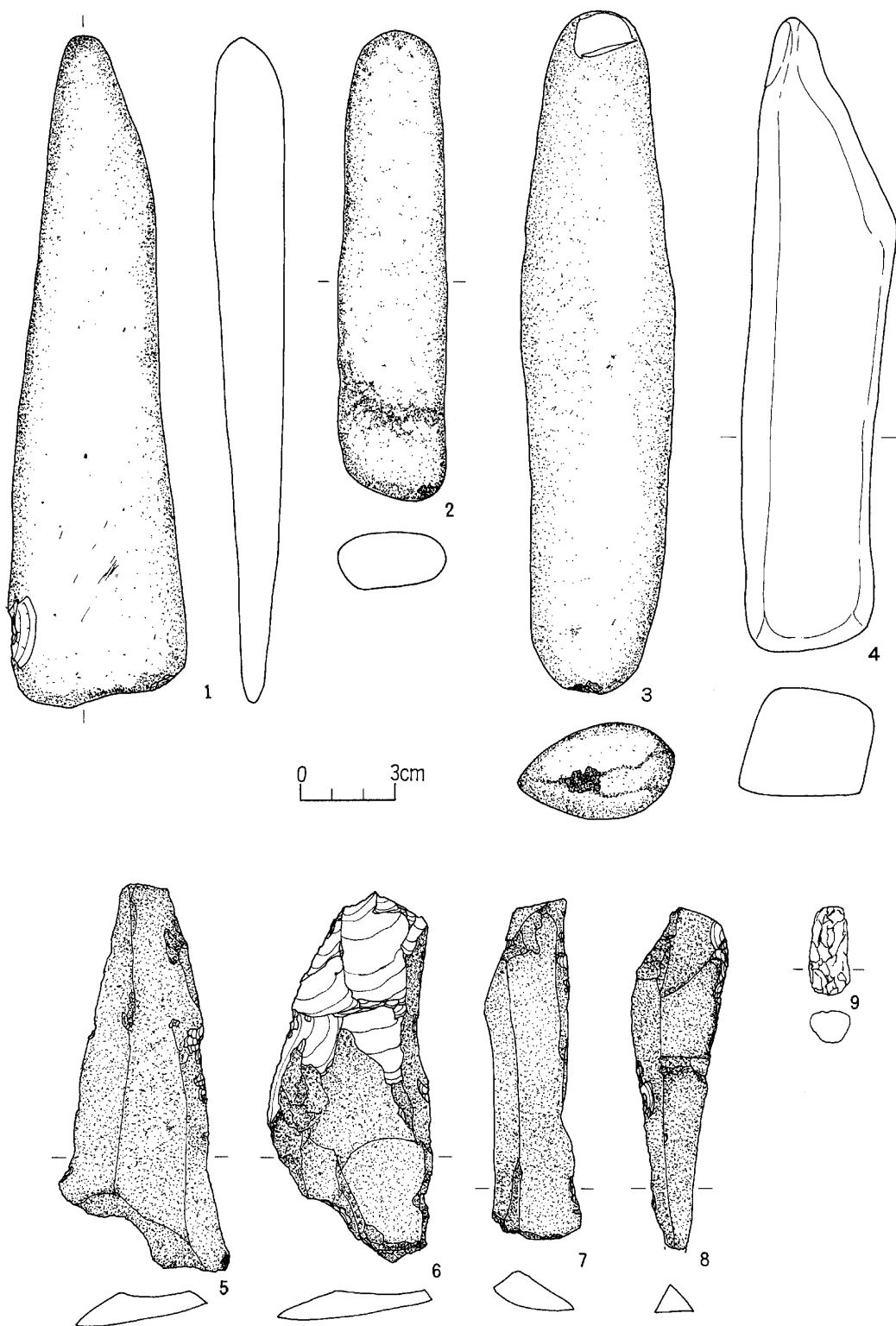
第209図 ヒット 329b土器石器出土分布図



第210図 ピット329b埋土(1~13)出土土器



第211図 ピット329b埋土出土石器



第212図 ピット329b埋土（1～9）出土石器・土製品

ピ ッ ト 330

遺 構 (第213図)

本ピットはD76グリッドに位置する。擦文期の44号竪穴の床面精査中に落ち込みを確認した。規模は直径約0.70mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約24cmである。壙上部から中央部にかけて直径約30cm、幅約7～8cmのベンガラが散布されている。本遺跡で通常見られる粘性を有した赤褐色土の遺存体は認められないものの土壌墓の可能性はある。

遺 物 (第214図-1・2, 第215図-1～3, 図版45-1～3)

第214図-1は口径約8.5×7.5cm、器高約10cmの小型土器。楕円形状の形態であるため図示する様に正面と側面では幅が異なる。正面には1個1対、側面には2個1対の合計6個の山形文がある。正面の山形文下部には円形文、側面では垂下した2本の隆帯がある。この隆帯は縦位に貫通しており吊り耳的な効果をもたせている。口縁部では円形文から円形文まで縄線文を菱形状に施文する。胴部では縦走した撚糸文、胴下部から底部には6条の縄線文がある。底面には縄線文と縄端圧痕文が蒲鉾状に区画される。全面に炭化煤が付着する。2は口唇部の内側に深い刻みが連続する。1・2とも続縄文初頭であろう。

石器は第215図-1が無茎石鏃。黒曜石製。2・3は片刃磨製石斧。2点とも刃部は弧状を呈し、3は黒色片岩製。

小 括

詳細な時期は不明であるが、第214図-1の土器に見られる菱形文は緑ヶ岡式の影響を受けたものであろう。

(武田 修)

ピ ッ ト 331

遺 構 (第213図)

本ピットはD76グリッド、ピット330の東側に近接する。規模は長軸約1m、短軸約0.66mの楕円形で軸は北-南方向に向く。壁は南壁側が丸みをもって立ち上がるのに対し、他の壁はほぼ垂直である。壁高は約26cmである。ピットの中央部からやや西側に直径4cm程の小柱穴が上部から床面にかけて貫通し、北側には貫通しないが直径約5～6cmの小柱穴が見られる。埋土後に打ち込まれたことは明らかであるが、どの程度の時間差があるのか不明である。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第214図-3・4)

第214図-3は口縁下部に円形小突起と貼付文が施される。続縄文初頭であろう。4は宇津内IIb式。

(武田 修)

ピット 332

遺 構 (第213図)

本ピットは擦文期の44号竪穴の北壁検出中に発見した。44号竪穴に切られているため遺存は悪く、壁上部の大半が破壊を受けている。長軸面の東側は確認できなかったが規模は推定1.20m、短軸約0.67mの楕円形である。壁高は確認面から約25cm。床面には遺存体である粘性を有する暗赤褐色土が見られ、北端部から第215図-4・5に示す石器と白色粘土塊が出土。

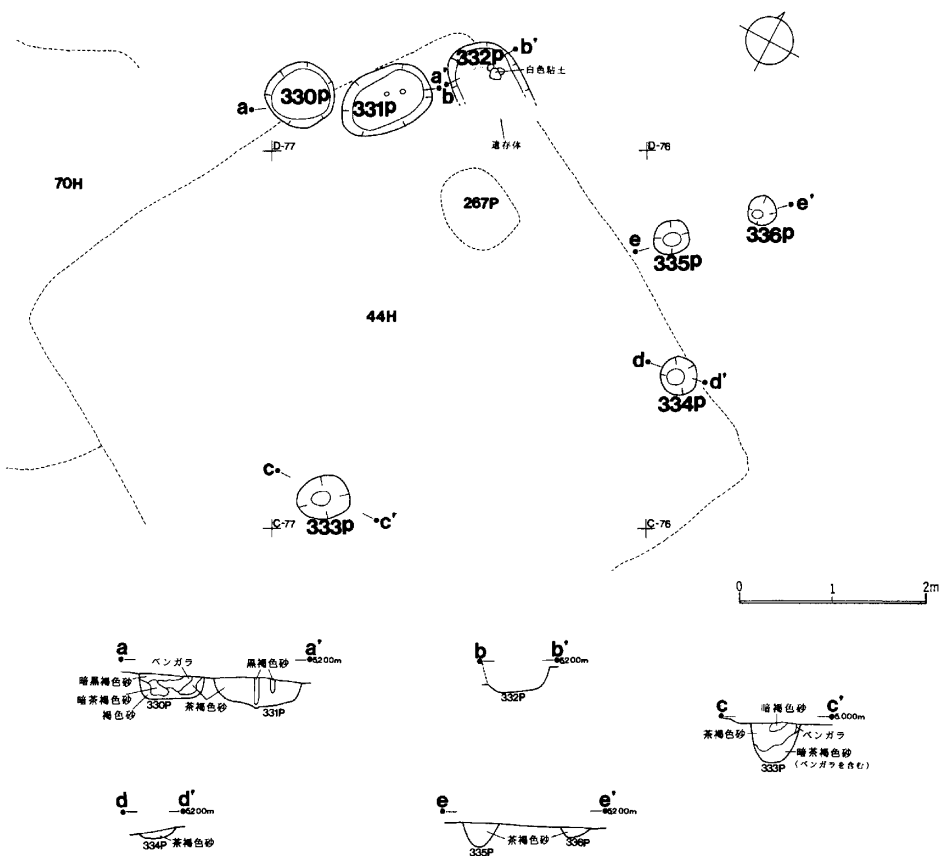
遺 物 (第215図-4・5, 図版45-4~5)

第215図-4は床面から出土した磨石。磨り面が浅い弧状を呈し、外周部を中心に細長い使用痕が見られる。5は柄部が欠損し、右側縁部が敲打調整された片刃磨製石斧。硬質負岩製。

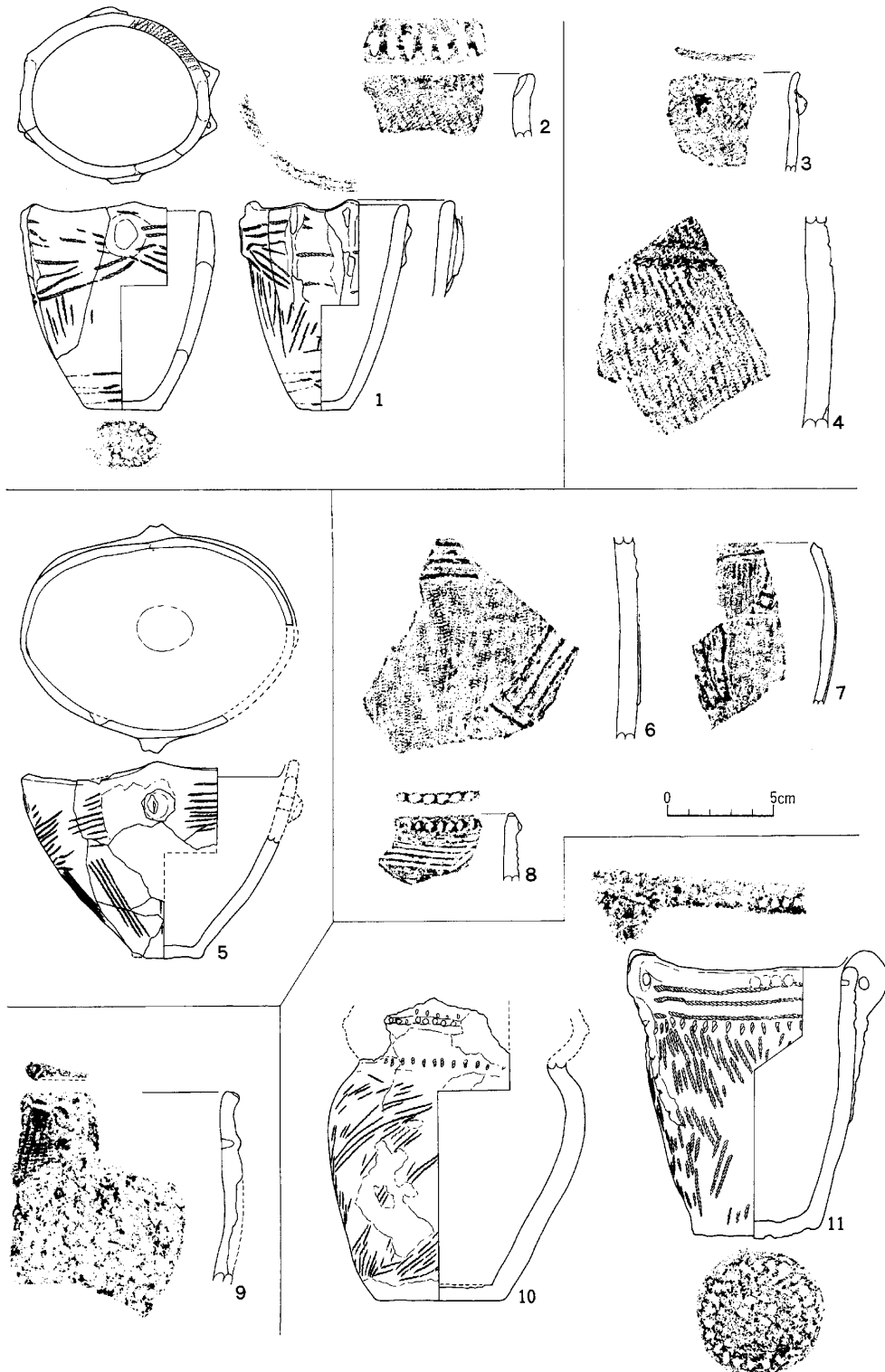
小 括

遺存体があることから土壙墓であることは間違いないが、詳細な時期は不明である。

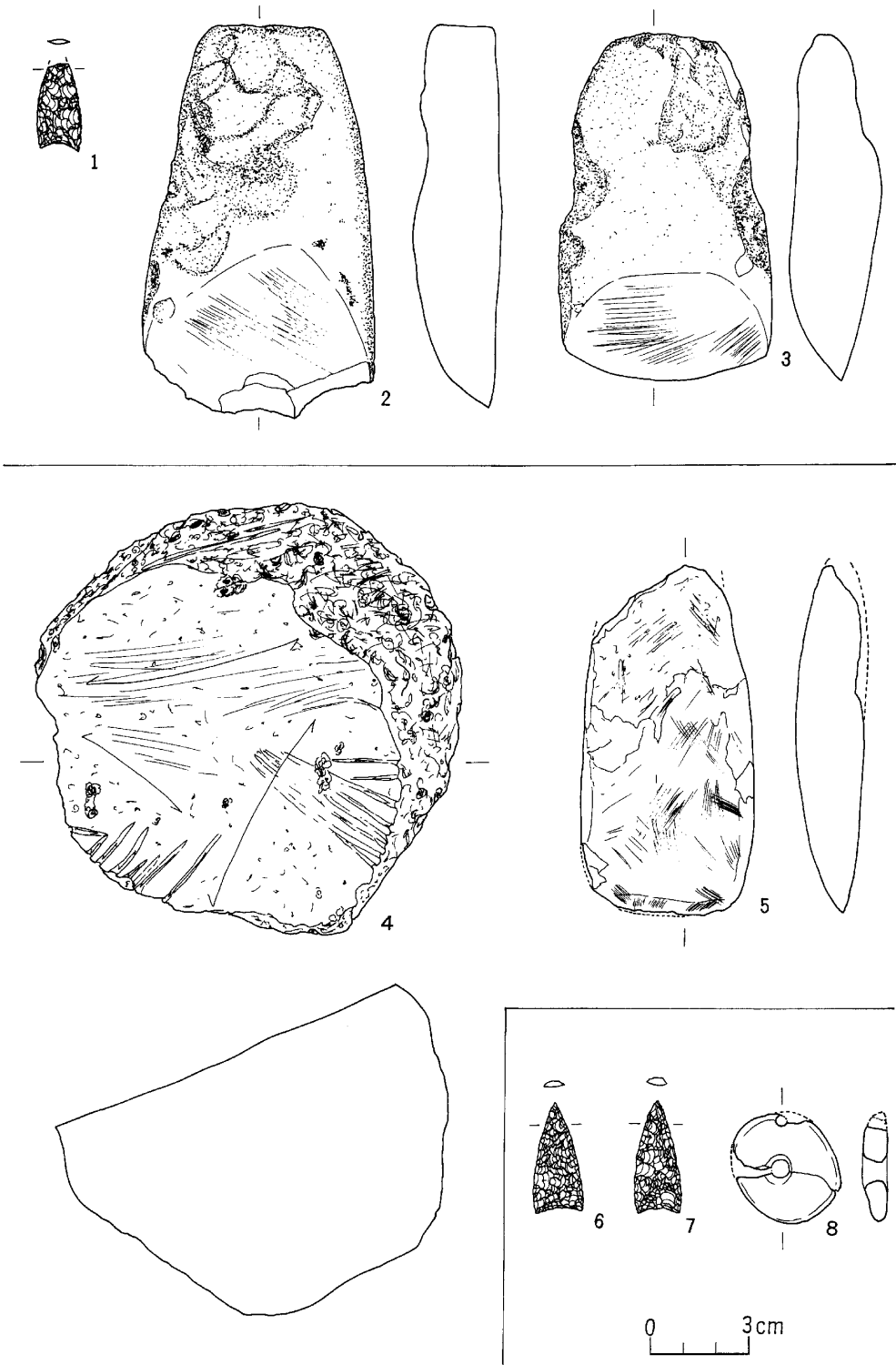
(武田 修)



第213図 ピット330, 331, 332, 333, 334, 335, 336平面図



第214図 ピット330埋土 (1・2), 331埋土 (3・4), 338a埋土 (5), 340埋土 (6～8), 342埋土 (9), 343床面 (10)・埋土 (11) 出土土器



第215図 ピット330埋土（1～3），332床面（4）・埋土（5），337埋土（6～8）出土石器・琥珀玉

ピ ッ ト 333

遺 構 (第213図)

本ピットはC76グリッドに位置する。規模は直径約0.52mの円形を呈する。壁は底面から上部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、壁高は確認面から約43cmである。底面にはベンガラを含み締まった暗茶褐色砂が堆積し、壙上部にもベンガラが認められる。明確に遺存体を確認することはできなかったが土壙墓と思われる。

遺物も出土していないため詳細な時期は不明である。(武田 修)

ピ ッ ト 334

遺 構 (第213図)

本ピットはC75グリッドに位置する。規模は直径0.40m、壁高は東壁が約20cm、西壁が8cmの皿状の立ち上がりをもつ円形小ピットである。

遺物も出土していないため詳細な時期は不明である。(武田 修)

ピ ッ ト 335

遺 構 (第213図)

本ピットはC75グリッドに位置する。規模は直径約0.40m、壁高は確認面から約27cmの円形小ピットである。

遺物は出土しておらず時期は不明である。(武田 修)

ピ ッ ト 336

遺 構 (第213図)

本ピットはC75グリッドに位置する。ピット335に近接するもので規模は直径約0.30m、壁高は確認面から約13cmの円形小ピットである。

遺物は出土しておらず時期は不明である。(武田 修)

ピ ッ ト 337

遺 構 (第110図)

本ピットはA76グリッドに位置する。規模は直径約1.15mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は確認面から約20cmである。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第215図-6~8, 図版45-6~8)

第215図-6・7は無茎石鏃。8は琥珀玉。直径約3.2cmの円形を呈し、中央部は両側から穿孔され、上部に約3mmの小穴がある。表面は研磨されている。(武田 修)

ピ ッ ト 338

遺 構 (第216図)

本ピットはC78グリッドに位置する。ピット338aの北壁中央部を切って構築されている。規模は長軸約1.20m、短軸約1mの不整楕円形を呈する。壁は浅い「V」字状に立ち上がり、壁高は確認面から約21cmである。床面に直径11cm、深さ約10cmの小柱穴がある。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピ ッ ト 338 a

遺 構 (第216図)

本ピットはC78グリッドに位置する。ピット338に北壁の一部を切られるものの、規模は長軸約1.38m、短軸約0.72mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約25cmを測る。ピット中央部に直径約30~40cmに及ぶ大型角礫があり、東壁隅には直径約20~25cmの中型角礫がある。大型角礫は壙上部、中型角礫は床面出土である。遺存体の痕跡が残され、ベンガラが床面に突き刺さる様にあるため土壙墓と判断できる。

遺 物 (第214図-5, 第218図-1~6, 図版45-9~15)

第214図-5は東壁際の壙上部からつぶれた状態で出土した。口径約13×9cm、器高約10cmの小型土器。小さい底部から上面観が楕円形の口縁部にかけて大きく開いた特徴ある器形である。4個の山形小突起をもち、正面には刻みのある円形突起、側面には小孔がある。口縁部には横走、胴部には縦走する捺糸文が施される。時期は続縄文初頭であろう。

石器は第218図-1~3が床面出土。1・2は両面加工ナイフ。3は片刃磨製石斧。4・5は両面加工ナイフ。6は削器。2は玄武岩製、3は緑色泥岩製であり他は黒曜石製。

小 括

本ピットの上部から出土した第214図-5の土器は続縄文初頭に位置づけられる。近接する続縄文初頭のピット329とは形態、長軸方向が同じであり同一時期の可能性はある。

(武田 修)

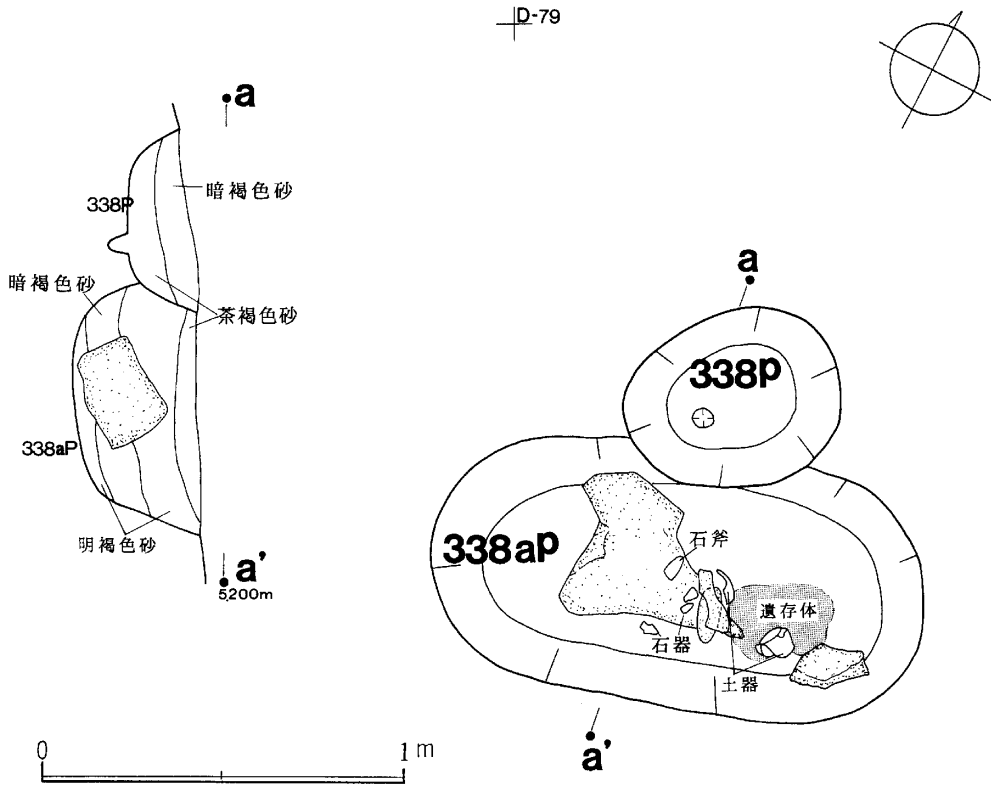
ピ ッ ト 339

遺 構 (第217図)

本ピットはC79グリッドに位置する。規模は長軸約1.74m、短軸約0.85mの楕円形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約70cmと深い。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。

(武田 修)



第216図 ピット338, 338a平面図

ピ ッ ト 339 a

遺 構 (第217図)

ピット339に東側の大半が削られているため全体の規模は不明である。残存部から判断して楕円形になるのであろう。短軸は約0.98m, 壁高は確認面から約23cmである。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 339 b

遺 構 (第217図)

ピット339aに東壁側を削られているものの規模は長軸約0.88m, 短軸約0.52mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約21cmである。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第218図-7)

第218図-7は削器。黒曜石製。 (武田 修)

ピ ッ ト 339 c

遺 構 (第217図)

ピット339に南壁側が削られているものの規模は長軸約1.02mの楕円形を呈する。詳細な短軸の長さは不明であるが約0.80mになるであろう。壁高は確認面から約14cmである。

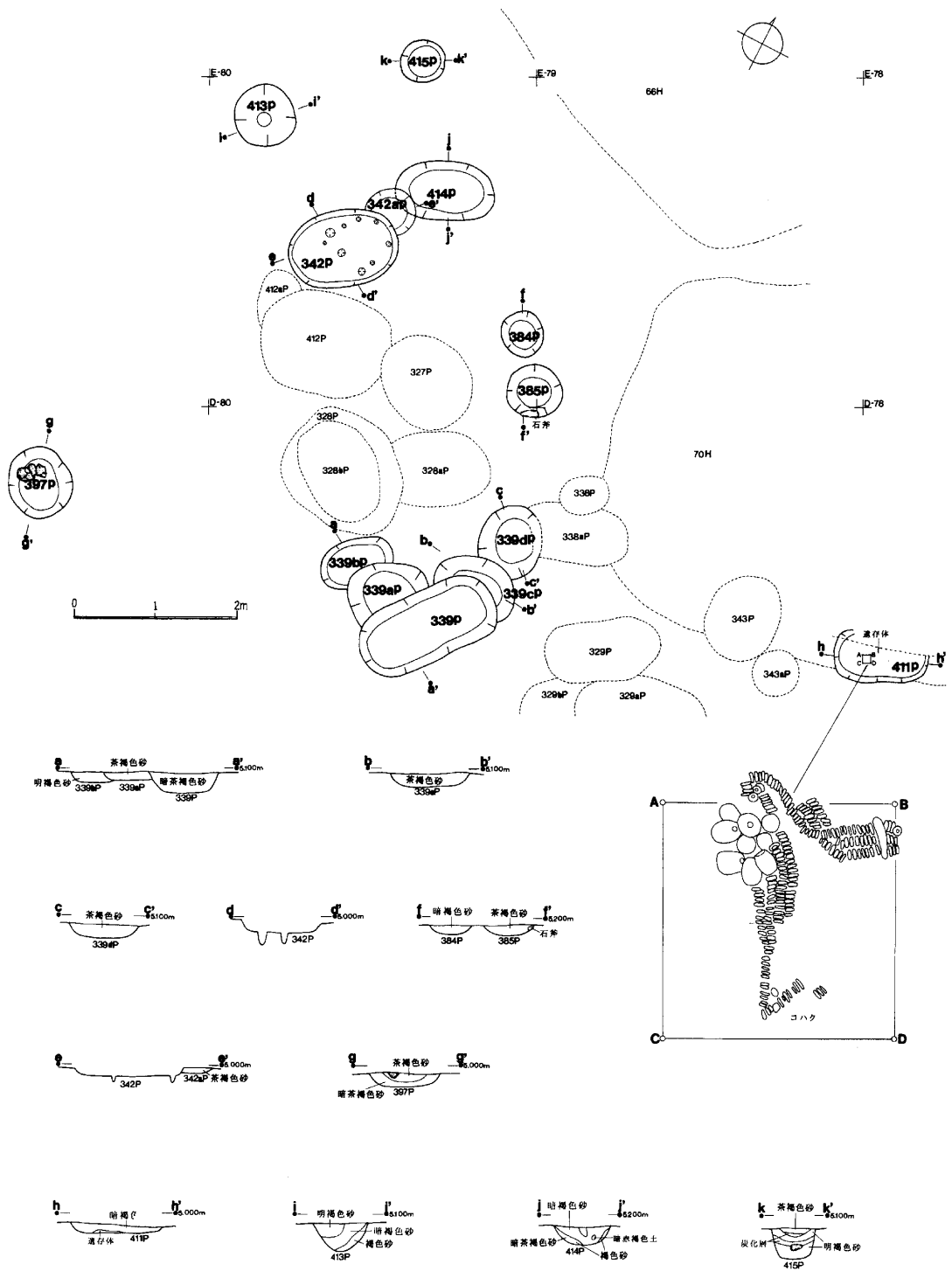
詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 339 d

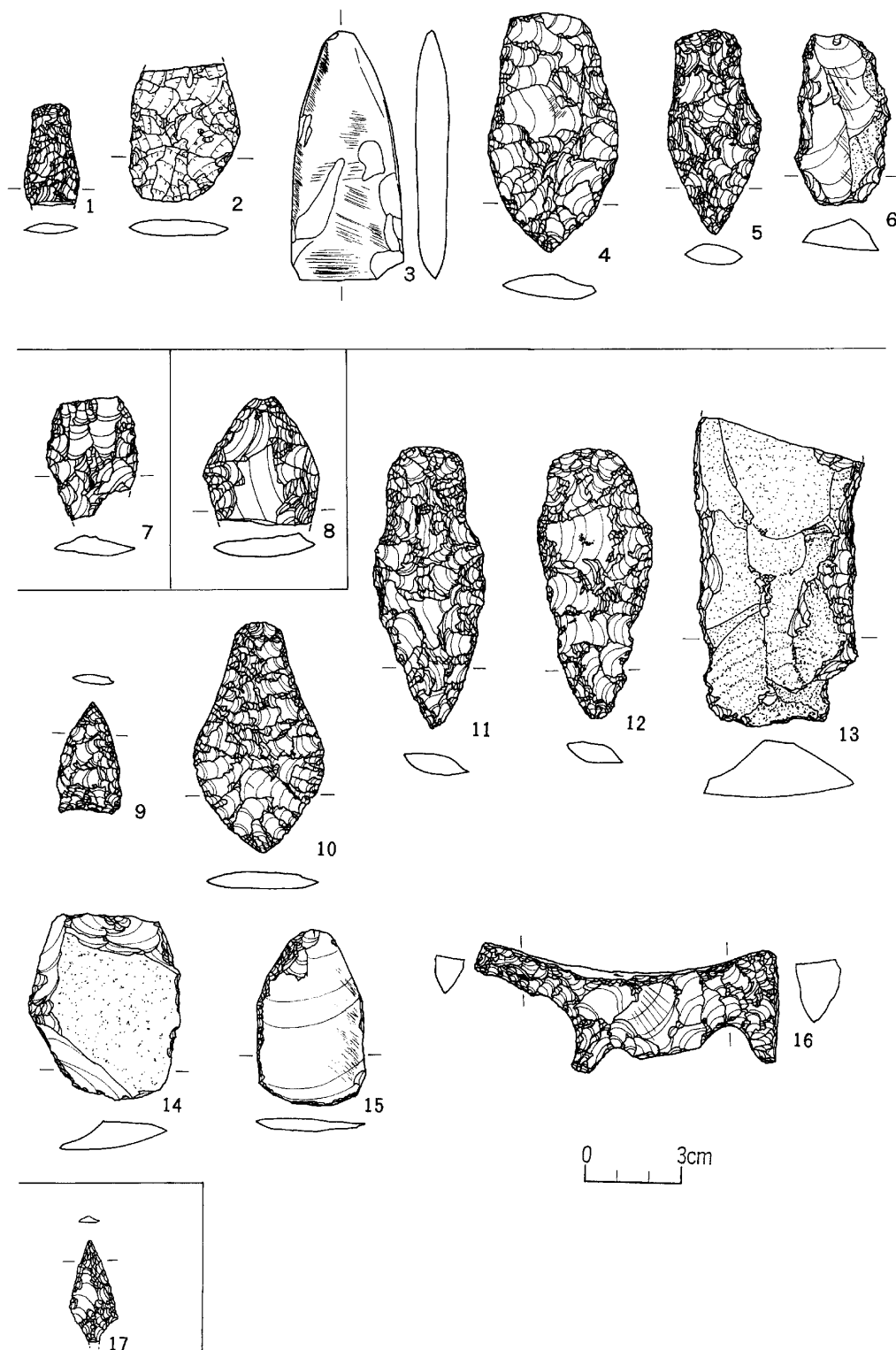
遺 構 (第217図)

ピット339cに南壁の上部を削られている。規模は直径約0.80m程の不整形を呈する様である。壁高は確認面から約14cmである。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)



第217図 ピット339, 339a, 339b, 339c, 339d, 342, 342a, 384, 385, 397, 411, 413, 414, 415平面図



第218図 ピット338a床面(1~3)・埋土(4~6), 339b埋土(7), 340埋土(8), 342埋土(9~16), 342a埋土(17)出土石器

ピ ッ ト 340

遺 構 (第260図)

本ピットはB'75グリッドに位置する。規模は長軸約1.35m, 短軸約0.67mの楕円形を呈する。壁は皿状に浅く立ち上がり, 壁高は確認面から約23cmである。南壁の上部には直径約32cm程の大型の円礫がある。本遺跡のピットでは角礫の利用が多く, 円礫は極めて少ない。壙上部ではあるが本ピットに伴う円礫であろう。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第214図-6~8, 第218図-8)

第214図-6・7は続縄文字津内IIb式。8は同C₂・D式。

第218図-8の石器は玄武岩製の片面加工ナイフ。

(武田 修)

ピ ッ ト 341

遺 構 (第31図)

本ピットはH'73グリッドに位置する。南壁側を52号竪穴, 西壁側を52a号竪穴に切られる。形態は楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約22cmである。

詳細な時期は不明であるが52号竪穴が続縄文字津内IIa式のものなのでそれよりは古い。

(武田 修)

ピ ッ ト 342

遺 構 (第217図)

本ピットはD79グリッドに位置する。規模は長軸約1.35m, 短軸約0.90mの楕円形を呈する。壁は比較的緩く立ち上がり, 壁高は確認面から約11cmである。ピット床面の中央部から北側にかけて小柱穴が方形状に取り囲む。小柱穴は細いもので直径約5~8cm, 深さ約5~10cmのものが6本。太いもので直径約10~13cm, 深さ8~14cmのものが3本ある。石器は床面中央部から出土している。

遺 物 (第214図-9, 第218図-9~16, 図版46-1~7)

第214図-9は埋土出土。内側から突瘤が加えられた続縄文字津内IIa式。石器は第218図-9が無茎石鏃。10・11・12は柄部が作出された両面加工ナイフ。10の刃部は幅広となる。13~15は削器。13は大形の棒状原石を素材とする。16は断面三角形の剥片を素材に入念な調整を施した異形石器。クマを意匠したものであろう。石器は全て黒曜石製。

小 括

遺存体の痕跡は確認できなかったが平面形態から土壙墓と思われる。長軸方向と床面に小柱穴があることから時期は続縄文字津内IIa式と判断される。(武田 修)

ピ ッ ト 342 a

遺 構 (第217図)

本ピットはピット342に南側を切られている。規模は直径約0.60mの小円形を呈する。壁高は確認面から約8cmである。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第218図-17)

埋土から17の黒曜石製の有茎石鏃が出土しているだけであり、時期は不明である。

(武田 修)

ピ ッ ト 343

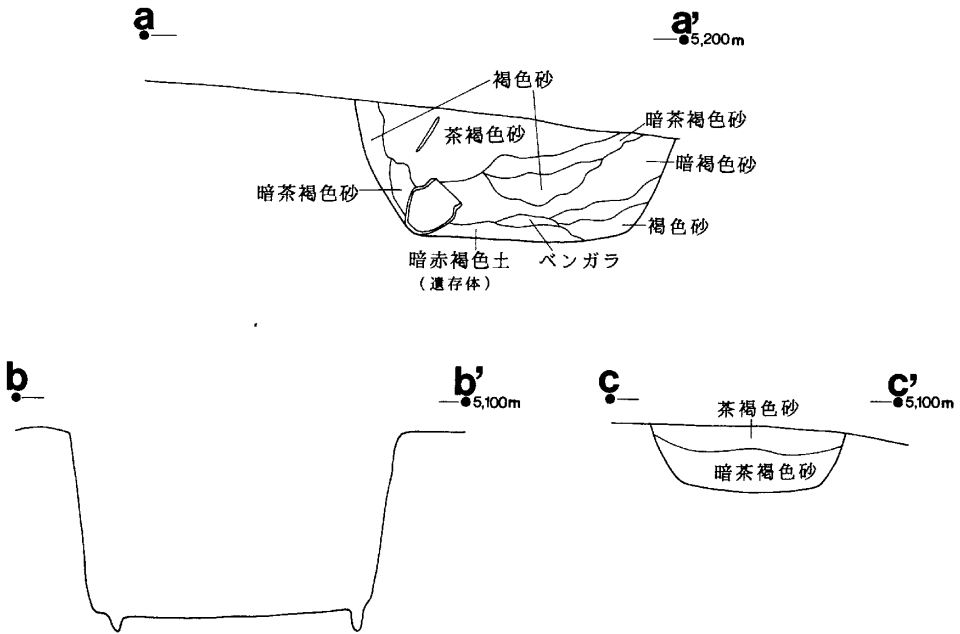
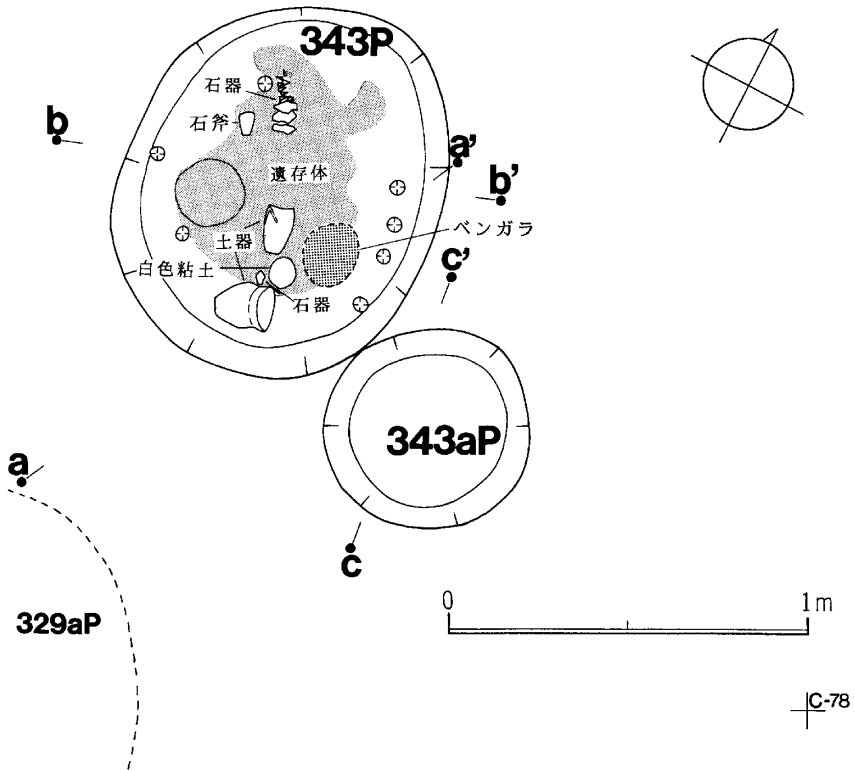
遺 構 (第219図, 図版46-8, 図版47-1)

本ピットはC78グリッドに位置する。規模は長軸約1.05m, 短軸約0.87mの楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり, 壁高は確認面から約35cmである。約20cm掘り下げた段階で第214図-10の土器が口縁部を東側に傾けた状態で出土し, 11の土器は暗赤褐色土の遺存体上部に置かれたものである。2点とも明らかに共伴する。土器と接して白色粘土とベンガラがある。特にベンガラは4~5cmの厚さをもち椀状に盛り上がっていた。遺存体を約5cm程下げると2点の土器と対峙するかの様に西壁側からナイフ, 石鏃が並べられた状態で出土し, 近接して石斧も見られた。頭部は長軸面にあるのではなく短軸面の南壁側に近く, 頭部を中心に土器と石器群が区分されて副葬されたと思われる。遺物の検出状態から判断するとまず遺体を埋葬し, 次に西側の石器群を配置し, 最後に土器, 白色粘土を副葬した様に見られる。

小柱穴は東壁に4本, 南西壁に2本ある。いずれも直径約7~8cm, 深さ約6~10cmである。

遺 物 (第214図-10・11, 第220図-1~23, 図版47-2~24, 図版48-1・2)

第214図-10は口径約11cm, 器高約15cmの小型土器。土圧によるため変形している。口縁部の大半は欠失するものの丸みをもつ様であり, 1条の隆帯と頸部には縄端圧痕文が施される。器面は撚糸文を地文とする。宇津内IIa式より古手であろう。11は口径約9cm, 器高約14.5cmの小型土器。突瘤文が施されるが, 実測図に示す個所に4個あるだけである。3条の縄線文下に縄端圧痕文が連続し, 2個の吊り耳からは「ハ」字状の隆帯が垂下する。底部にも縄端圧痕文が施される。宇津内IIa式。



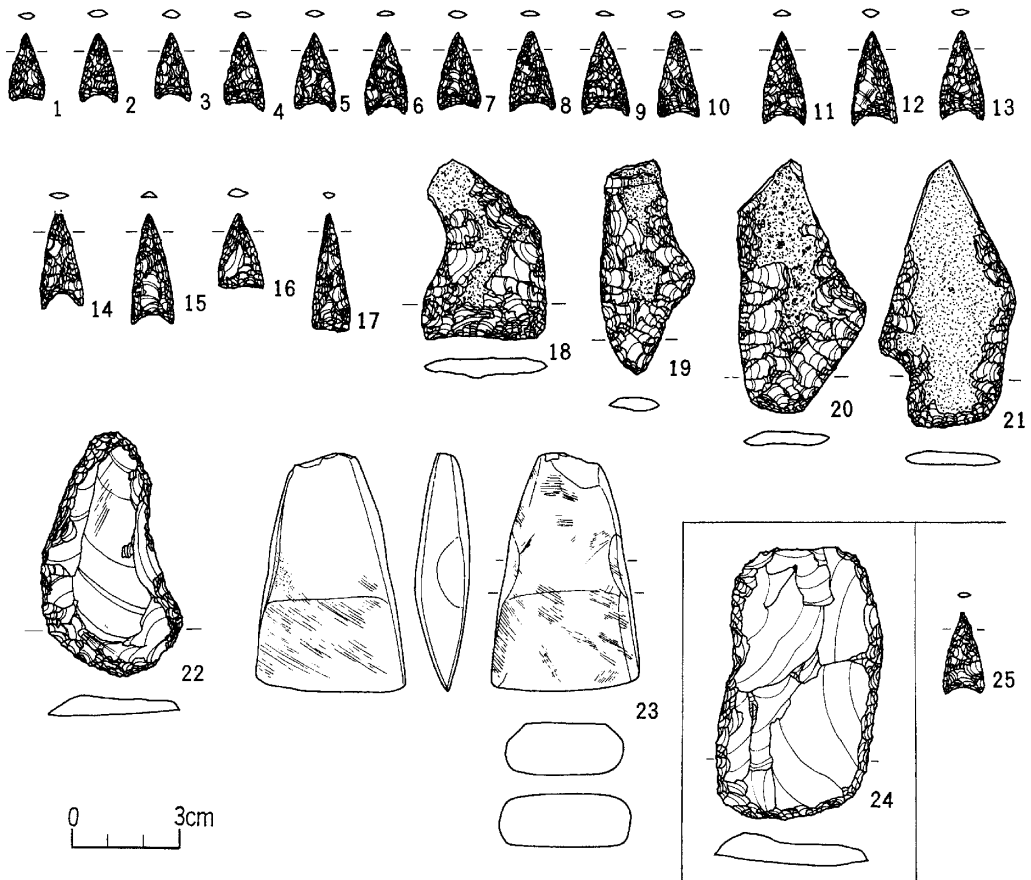
第219図 ビット343, 343a平面図

石器は第220図-1~17が無茎石鏃。18~21は両面加工ナイフ。4点とも原石面を残し、19~21は張り出しも持つ。22は搔器。裏面の全面には細かな使用痕があり、乳灰色の汚れが縦方向に観察される。23は磨製石斧。実測図の断面に示す通り中央部の両端で凹部を作出する。石斧装着時の紐掛けと関係するのであろう。1~17・22は黒曜石製。18~21はメノウ製。23は緑色泥岩製。

小 括

頭部を中心とした両側から土器、石器が出土する。頭位は南西頭位。宇津内IIa式と異質な壺形土器が共伴する。時期も続縄文字津内IIa式よりやや古手に属するのであろう。

(武田 修)



第220図 ピット343埋土(1~22)・遺体上(23), 353埋土(24), 361埋土(25)出土石器

ピ ッ ト 343 a

遺 構 (第219図)

本ピットはピット343の東南側と接するが、切り合いが僅かなため時間関係は不明である。規模は直径約0.58mの円形を呈し、壁高は確認面から約36cmである。

遺物の出土は無く時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 344

遺 構 (第260図)

本ピットはC'74グリッドに位置する。規模は直径約0.60mの円形を呈する。底面から各壁にかけて丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約31cmである。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 345

遺 構 (第260図)

本ピットはC'74グリッドに位置する。規模は直径約1.20mの不整形円形を呈する。壁は開き気味であり、壁高は確認面から約44cmである。壙上部の角礫のうち1点は凹み石である。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 346

遺 構 (第260図)

本ピットはB'75グリッドに位置する。上部は45号竪穴に切られている。規模は長軸約1.25m、短軸約1.15mの楕円形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり、壁高は確認面から約40cmである。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピット 347

遺構 (第260図)

本ピットはB'76グリッドに位置する。上部は45a号竪穴に切られている。埋土に大小の角礫を多量に含む。床面中央に黒褐色土の遺存体が「へ」の字状に残っている。床面中央に土器片が1点、遺存体上に1点出土している。規模は長軸約1.25m、短軸約1.05mの楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は確認面から約35cmである。

遺物 (第221図-1・2)

第221図-1・2は同一個体と思われる。2は口縁部直下に縄線文が施され、1は胴部片である。縄文晩期中葉であろう。 (渡部 高士)

ピット 348

遺構 (第78図)

本ピットはA'73グリッドに位置する。規模は長軸約1.60m、短軸約1.25mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約30cmである。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピット 349

遺構 (第163図)

本ピットはC'78グリッドに位置する。西壁が56号竪穴に切られている。規模は長軸約1.4mで短軸は不明だが楕円形を呈すると思われる。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は確認面から約30cmである。床面が南から北に向かって僅かに傾斜している。

詳細な時期は不明である。

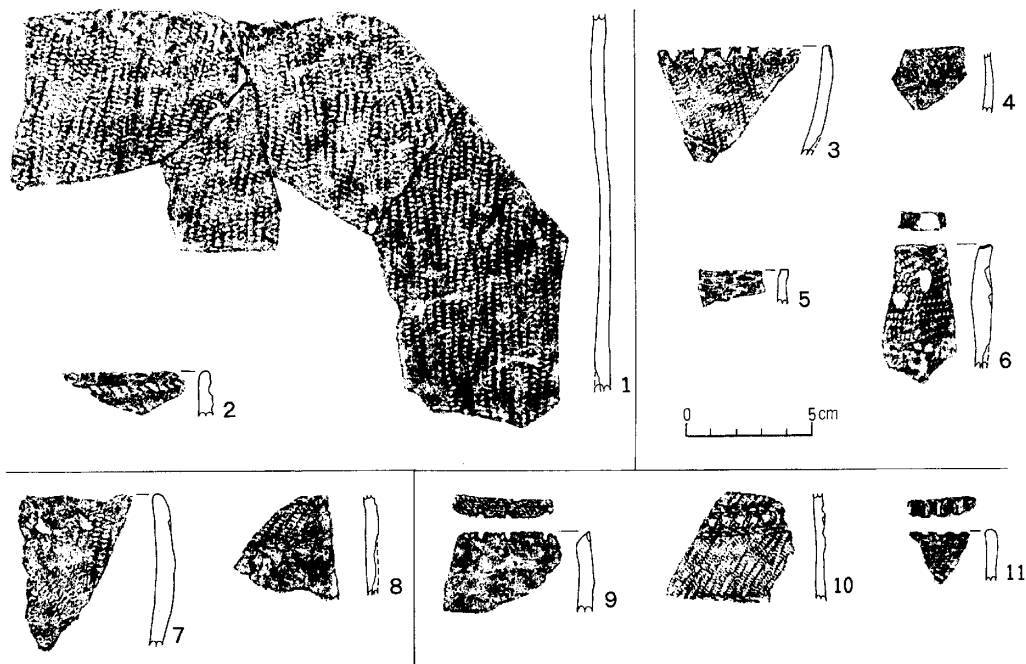
(武田 修)

ピット 350

遺構 (第163図)

本ピットはC'77グリッドに位置する。規模は直径約1.5mの不整形円形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約60cmである。

詳細な時期は不明である。



第221図 ピット347埋土（1・2）、ピット350埋土（3～6）、ピット351埋土（7・8）、
ピット352埋土（9～11）出土土器

遺物（第221図－3～6）

第221図－3は口唇部の外側に刻みが施される。縄文晩期後葉の幣舞式。4・6は刺突，5は無文である。4～6は縄文晩期中葉であろう。（渡部 高士）

ピット 351

遺構（第163図）

本ピットはC'77グリッドに位置する。規模は直径約1.35mの円形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり，壁高は確認面から約45cmである。

詳細な時期は不明である。

遺物（第221図－7・8）

第221図－7は口縁直下に「∩」字状の縄端圧痕文がある。続縄文初頭であろう。8の器面は剥落するものの2条の縄線文が見られる。縄文晩期中葉と思われる。（渡部 高士）

ピ ッ ト 352

遺 構 (第163図)

本ピットはC'76グリッドに位置する。規模は長軸約1.2m, 短軸約1.05mの不整円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり, 高さは確認面から約45cmである。床面近くでは直径約6~10cmの角礫が多く認められる。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第221図-9~11)

第221図-9は口唇部の外側に刻みがあり, 無文の口縁部には浅い沈線が見られる。縄文晩期幣舞式。10は縄線文間に半截状施文具による刺突文が施される。11は無文。10, 11は縄文晩期中葉であろう。

(渡部 高士)

ピ ッ ト 353

遺 構 (第163図)

本ピットはC'76グリッドに位置する。規模は長軸約1.30m, 短軸約1.20mの楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり, 壁高は確認面から約15cmである。

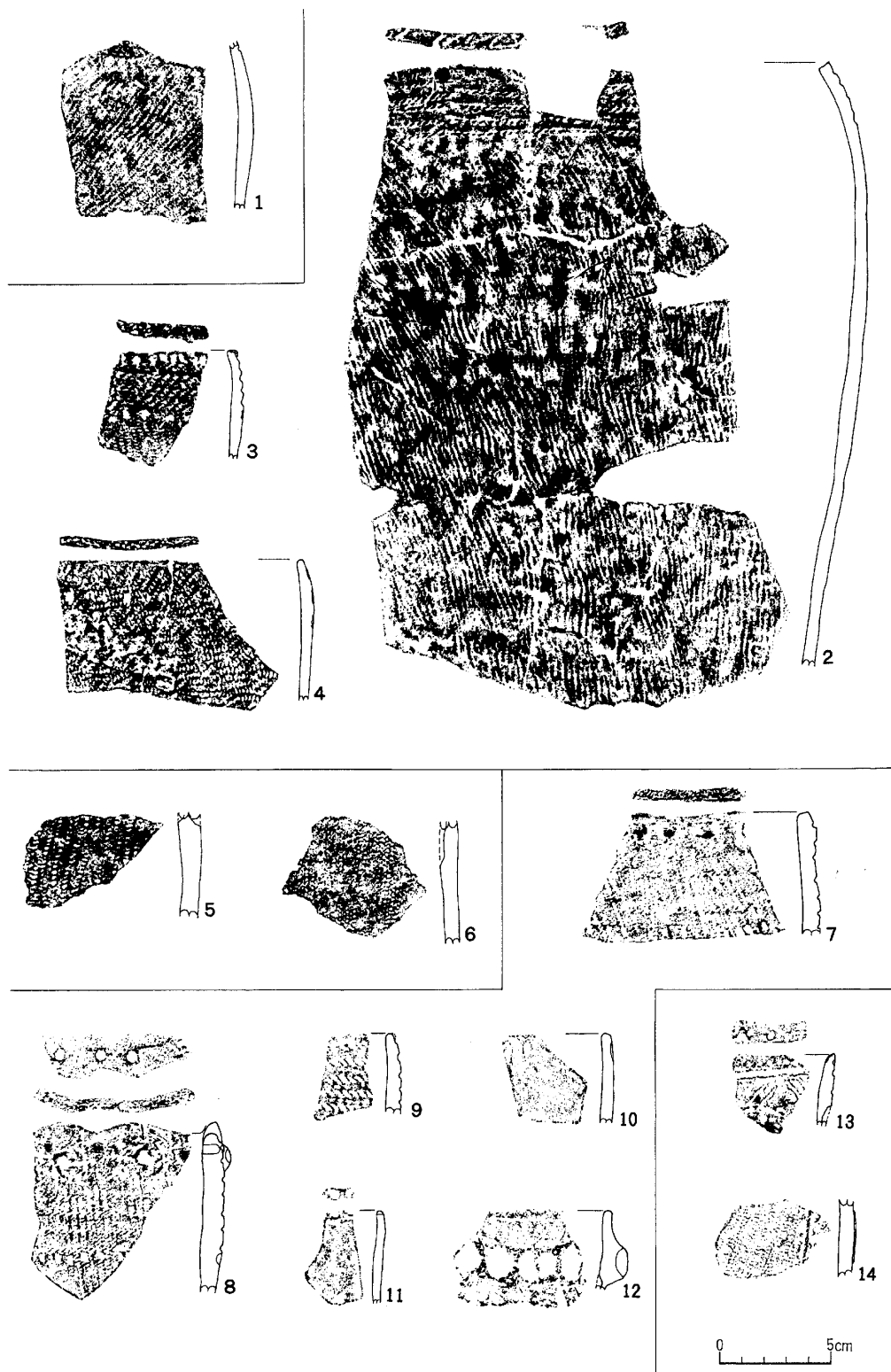
詳細な時期は不明である。

遺 物 (第222図-1, 第220図-24)

第222図-1は上部に縄線文が見られる。縄文晩期中葉であろう。

第220図-24は削器。黒曜石製。

(武田 修)



第222図 ビット353埋土(1), 355埋土(2~4), 356埋土(5・6), 360床面(7)・埋土(8~12), 361埋土(13・14)出土土器

ピ ッ ト 354

遺 構 (第163図)

本ピットはC'76グリッドに位置する。規模は直径約1.0mの円形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約30cmである。

詳細な時期は不明である。 (渡部 高士)

ピ ッ ト 355

遺 構 (第260図)

本ピットはC'75グリッドに位置する。規模は直径約1.0mの不整形円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約34cmである。埋土のほぼ中央部に堆積する暗褐色砂層には角礫が多量に含まれる。大きいもので直径約18cm、小さいもので直径約5cmである。底面の中央部には黒褐色を呈した遺存体の痕跡が「V」字形に残る。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第222図-2~4)

第222図-2は内湾した口縁部に5条の縄線文が施され、口唇部に刻み加わる。3は縄線文下に縄端圧痕文、4は縄端圧痕文が施される。縄文晩期中葉であろう。 (渡部 高士)

ピ ッ ト 356

遺 構 (第260図)

本ピットはB'75グリッドに位置する。上部を45a号竪穴に切られている。規模は長軸約1.3m、短軸約1.15mの楕円形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約15cmである。詳細な時期は不明である。

遺 物 (第222図-5・6)

第222図-5は宇津内系、6は後北C₂・D式の胴部片と思われる。 (渡部 高士)

ピ ッ ト 357

遺 構 (第91図)

本ピットはA'76・77グリッドに位置する61c号竪穴の西壁際に位置する。61c号竪穴の西壁一部を切り込んで構築されている。規模は長軸約1.10m、短軸0.85mの楕円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは61c号竪穴の床面から約30cmである。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピ ッ ト 358

遺 構 (第91図)

本ピットはA'76・77グリッドに位置する61c号竪穴の西壁際に位置する。61c号竪穴の西壁一部を切り込んで構築されている。規模は直径約0.80mの円形を呈する。壁は皿状の浅い立ち上がりで、61c号竪穴の床面から約15cmである。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピ ッ ト 359

遺 構 (第260図)

本ピットはB'75グリッドに位置する。規模は直径約0.70cmの円形を呈する。壁は開き気味に立ち上がり、高さは確認面から約15cmである。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピ ッ ト 360

遺 構 (第54図)

本ピットはB'78・79、C'78・79グリッドにある56号竪穴内にある。56号竪穴の床面上に堆積した茶褐色砂から切り込んでいる。廃棄直後に構築されたと思われる。規模は長軸約2.07m、短軸約1.94mの不整楕円形を呈する。壁は皿状の浅い立ち上がりで高さは確認面から約30cmである。埋土は拳大の角礫が多く混入する。

床面中央部からやや東側に寄ると比熱を受けた5点の角礫に混じって骨片・骨粉が検出されている。

遺物 (第222図-7~12)

第222図-7は床面出土の続縄文字津内IIa式。8~12は埋土出土。8は宇津内IIa式、9は縄文晩期幣舞式。10・11は同中葉であろう。10には半截状の爪形文が施され、11は無文。12は口縁下部の横位隆帯部を指でつまみ揚げた文様である。同様の手法は縄文晩期前葉の盛り上がりのある爪形文が特徴的であるが、晩期の場合は横位の隆帯はもたず、この土器の場合は胎土がやや脆弱であり、繊維を混入する。類似資料は無いが縄文前期から中期と思われる。

(武田 修)

ピット 360 a**遺構** (第54図)

本ピットはピット360の南側にある。大半はピット360に切られている。形態は楕円形を呈すると思われる。皿状の浅い立ち上がりをもち、高さは56号竪穴の床面から約10cmである。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピット 361**遺構** (第54図)

本ピットは56号竪穴の北壁上部に位置する。56号竪穴の掘り込み確認面を検出中に発見したもので時期的には本ピットが新しい。規模は長軸約1m、短軸約0.70mの楕円形を呈する。ピット上部では大型の角礫が楕円状に配置され、粘性のある黄褐色土が角礫にへばり付く様に残っていた。この黄褐色土は遺存体の一部と思われるが、それ以外に認めることはできなかった。壁高は確認面から約10cmである。

遺物 (第222図-13・14, 第220図-25)

第222図-13は口縁直下に半截状の列点文、横位・斜位の沈線文が施される。続縄文初頭であろう。14は宇津内系であろう。

第220図-25は無茎石鏃。黒曜石製。

(武田 修)

ピ ッ ト 362

遺 構 (第54図)

本ピットは56号竪穴の西壁際にある。56号竪穴の床面、ピット366を切って構築されている。規模は長軸約0.94m、短軸約0.51mの楕円形を呈する。壁高は56号竪穴の床面から約10cmである。詳細な時期は不明である。

遺 物 (第223図-1～3, 第224図-1・2)

土器は第223図-1～3が口唇部が尖り、微隆起帯が垂下した字津内IIb式。

石器は第224図-1の削器、2の撥状を呈した両面加工ナイフは埋土出土。いずれも黒曜石製。

(武田 修)

ピ ッ ト 363

遺 構 (第54図)

本ピットはB'78, C'78グリッドに位置する。南壁を56号竪穴、北壁をピット363b, 中央部をピット363aに切られる。規模は残存部の短軸が約1.08mを呈する。壁高は確認面から約22cmの浅い皿状の立ち上がりである。詳細な時期は不明である。

遺 物 (第223図-4・5, 第224図-3)

土器は第223図-4は口縁部が縮約された壺形土器であり、幅約3.5cmの吊り手がつけられる。5は若干の揚げ底から大きく開く。4は字津内IIb式。5も字津内系であろう。

石器は第224図-3が黒曜石製の無茎石鏃。

(武田 修)

ピ ッ ト 363 a

遺 構 (第54図)

本ピットはB'78グリッドに位置する。規模は長軸約0.70m, 短軸約0.40mを呈する。壁高は確認面から約80cmである。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第223図-6・7, 第224図-4)

第223図-6は宇津内系, 7は縄文晩期中葉と思われる。

石器は第224図-4が下端部に急斜な刃部を作出した搔器。(武田 修)

ピ ッ ト 363 b

遺 構 (第54図, 図版48-4)

本ピットはB'78グリッドに位置する。規模は長軸約1.04m, 短軸約0.88mで西壁側がややすばまる不整楕円形を呈する。壁高は確認面から約30cmである。遺存体の痕跡は確認できなかったがベンガラ混じりの淡赤褐色砂とブロック化した白色粘土が南壁際で直径約20~25cmの幅で残されていた。

遺 物 (第223図-8~10, 第224図-5, 図版48-3)

第223図-8はピットのほぼ中央部から伏せた状態で出土。口径約11cm, 器高約10cmの小型土器。口縁下部は幅約1cm程度の無文帯を残し, 縦走縄文が施される。実測図正面の山形突起は外に張り出すもので片口土器的であり, 内側には縄線文が見える。9は撚糸文を地文に口縁直下に同一原体を用いた絡縄帯が施される。続縄文初頭であろう。10は横位・縦位の沈線文が施される。続縄文初頭。石器は第224図-5が石鏃片。黒曜石製。

小 括

床面からは少量ながらベンガラも検出した。土壙墓であろう。第223図-8の土器が伴う可能性が高い。続縄文宇津内系であろう。(武田 修)

ピ ッ ト 364

遺 構 (第54図)

本ピットはB'78グリッドに位置する。56号竪穴により南壁の一部が削られているものの, 長軸約0.77m, 短軸約0.55mの小楕円形を呈する。壁高はほぼ垂直に立ち上がり高さは確認面から約20cmである。

56号竪穴より古いピットであるが詳細な時期は不明である。(武田 修)

ピ ッ ト 365

遺 構 (第54図)

本ピットは56号竪穴の北壁近くに構築されている。床面を覆う茶褐色砂とその上層の暗茶褐色砂層を切り込んで構築されている。埋土の土質は粘性をもち、上部には炭化粒が多量に混入する。層下部では3～4cmの焼礫を主体として、10cm程の焼礫も僅かに含まれながら広がっている。

新旧関係は56号竪穴より新しいが詳細な時期は不明である。

遺 物 (第225図－1～7)

全て埋土出土である。1は続縄文後北C₂・D式。2は宇津内IIa式。3は横位の縄文を地文として口唇部に刻みと刺突が加えられ、口縁下部は撚りの太い縄線文が4条施される。4は縦位の縄文を地文に口唇部に縦端圧痕文、口縁下部に刺突文が連続する。5は縄線文が施され、6は無文である。3～5は続縄文初頭、6は縄文晩期であろう。7は揚げ底の底部から大きく開いた続縄文土器。

(武田 修)

ピ ッ ト 366

遺 構 (第54図)

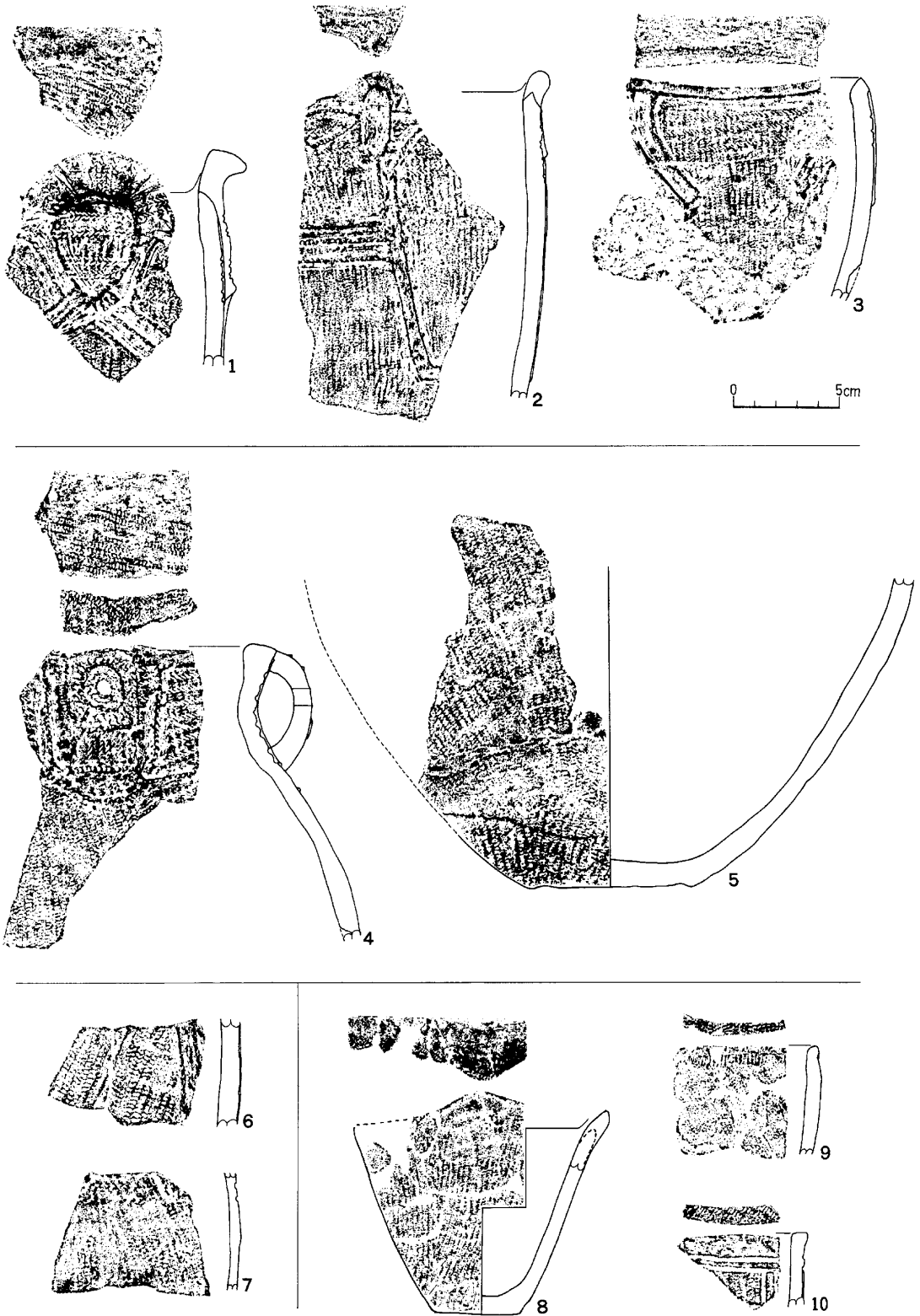
本ピットは56号竪穴の西壁際にある。56号竪穴の埋没過程で構築されたものである。ピット362の南壁と僅かに重複するものの新旧関係を掴むことはできなかった。規模は直径約0.45mの円形を呈し、壁高は確認面から約15cmである。

56号竪穴より新しいが詳細な時期は不明である。

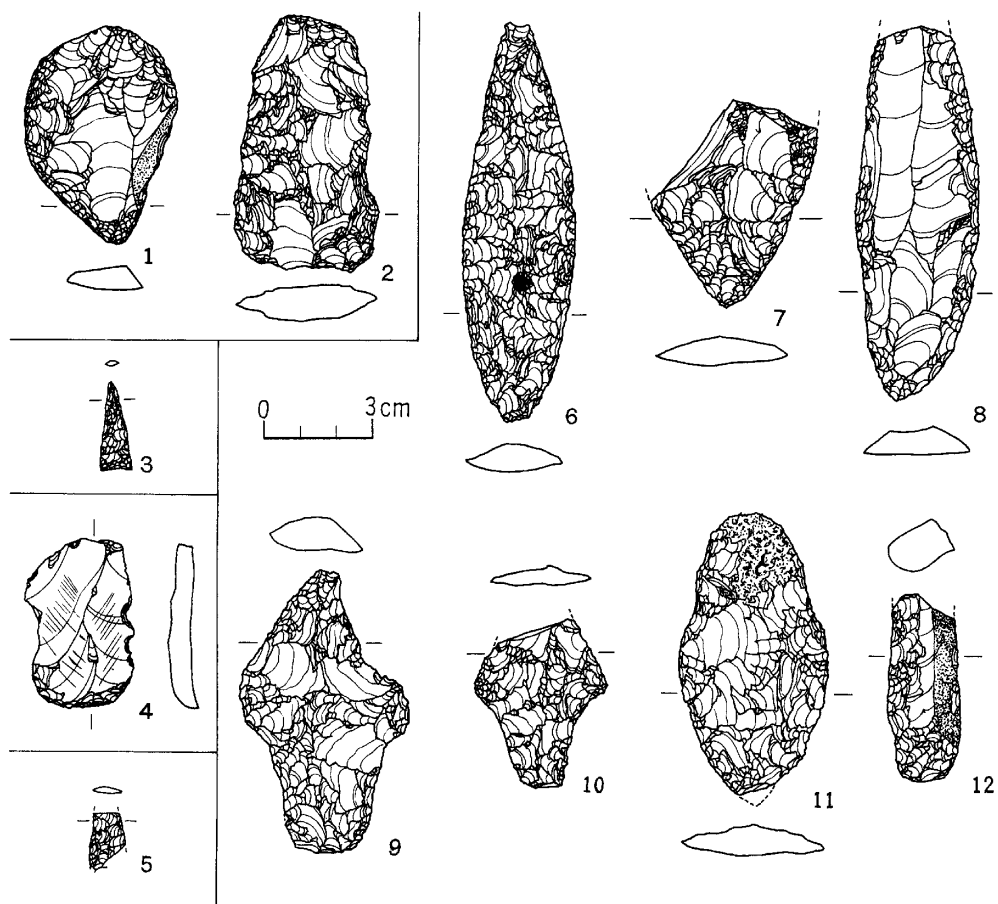
遺 物 (第225図－8)

第225図－8は内側から突瘤文が施された続縄文宇津内IIa式。

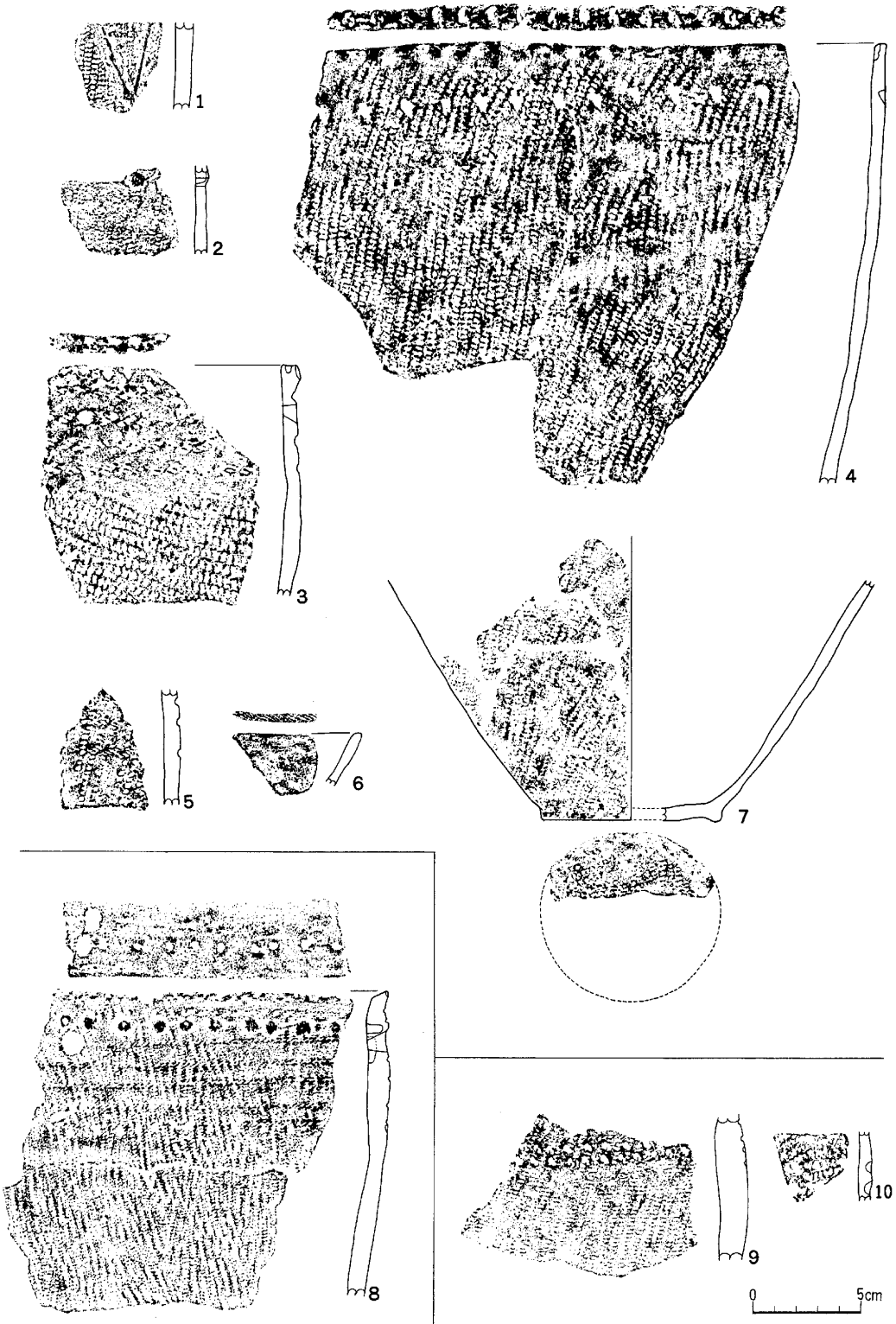
(武田 修)



第223図 ピット362埋土(1~3), 363埋土(4・5), 363a埋土(6・7), 363b埋土(8~10)出土土器



第224図 ピット362埋土(1・2), 363埋土(3), 363a埋土(4), 363b埋土(5),
370床面(6~8)・埋土(9~12)出土石器



第225図 ピット365埋土(1~7), 366埋土(8), 367埋土(9・10)出土土器

ピ ッ ト 367

遺 構 (第54図)

本ピットは56号竪穴の東壁に近い床面を掘り込んで構築されている。規模は長軸約1.27m, 短軸約0.97mの不整楕円形を呈する。壁高は56号竪穴の床面から約30cmである。北壁側にある小柱穴は56号竪穴に伴うものであろう。

56号竪穴より古い時代のものであるが詳細の時期は不明である。

遺 物 (第225図-9・10)

第225図-9は字津内系, 10は縄端圧痕文が施される。縄文晩期であろう。(武田 修)

ピ ッ ト 368

遺 構 (第71図)

本ピットはB73・74・75, C73・74・75グリッドに位置する58a号竪穴の南壁を切って構築されている。上部から床面にかけて直径約38cmの円礫がある。規模は長軸約0.50m, 短軸約0.32mの小楕円形を呈する。壁は「V」字状に立ち上がり, 高さは確認面から約28cmを測る。

遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが, 続縄文字津内IIb式の58a号竪穴より時期は新しい。(武田 修)

ピ ッ ト 369

遺 構 (第69図)

本ピットは58号竪穴の床面精査中に発見した。直径約0.40mの小円形を呈する。上部から底部にかけて大小の角礫5点が内部から出土した。壁は「U」字状の浅い立ち上がりをもち, 壁高は58号竪穴の床面から約15cmである。

58号竪穴より新しい時期のものであろう。(武田 修)

ピ ッ ト 370

遺 構 (第226図)

本ピットはA'72グリッドに位置する。規模は長軸約1.63m, 短軸約1.20mの楕円形を呈する。内部を掘り下げる段階で第227図-1の土器が正立の状態出土し, 近接して大型の凹石もやはり立った状態で出土している。床面中央部から南側にかけて粘性のある暗赤褐色土が広く残っており, 頭部と思われる膨らみも南壁際で確認した。遺存体である。土器は頭部に接して出土

したことになる。ベンガラは遺存体上と東壁側にある石器集中区域で散布されている。この石器集中区域では多量の黒曜石の剥片に混じってナイフ、削器などの製品が出土する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は確認面から約48cmである。

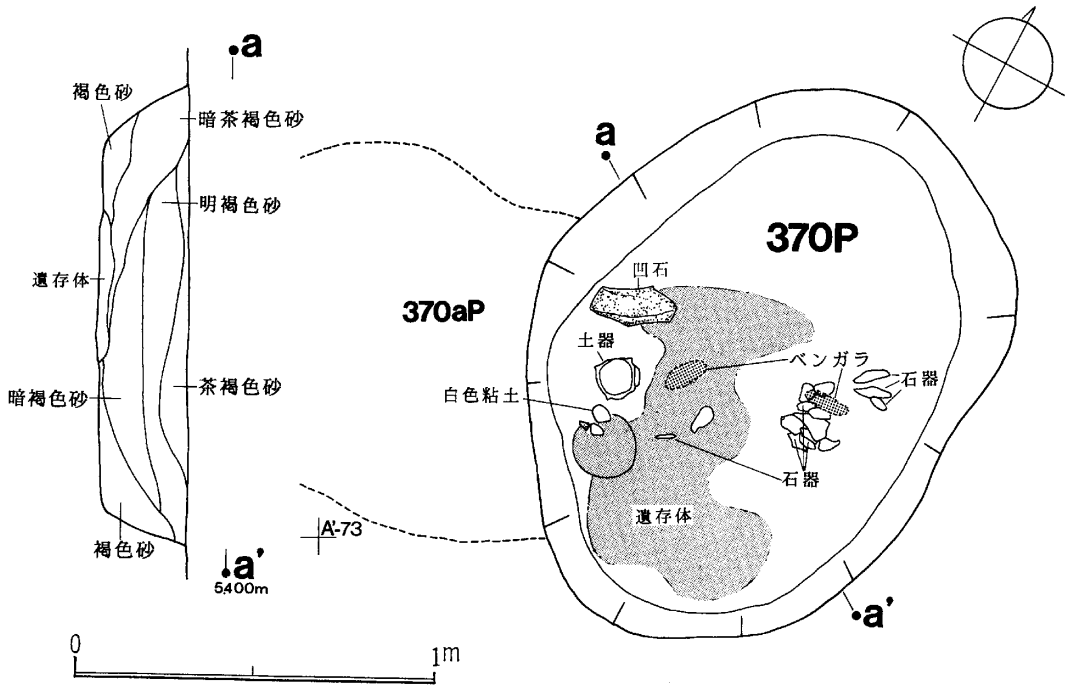
遺物 (第227図-1~6, 第224図-6~12, 図版49-1~8)

第227図-1は頭部近くの床面から出土した。この土器は口縁部が長径約14cm, 短径約12.5cmの楕円形を呈し, 器高約15cmの中型土器である。短径面に吊り耳, 長径面に小突起をもちそれぞれの下部には擬縄隆帯で連結された同心円文のある字津内IIb式。3も字津内系であろう。4は内湾した口縁部に横走沈線文が多様され, 5は絡縄体が施される。4・5は続縄文初頭と思われる。6は縄文晩期末葉の緑ヶ岡式。

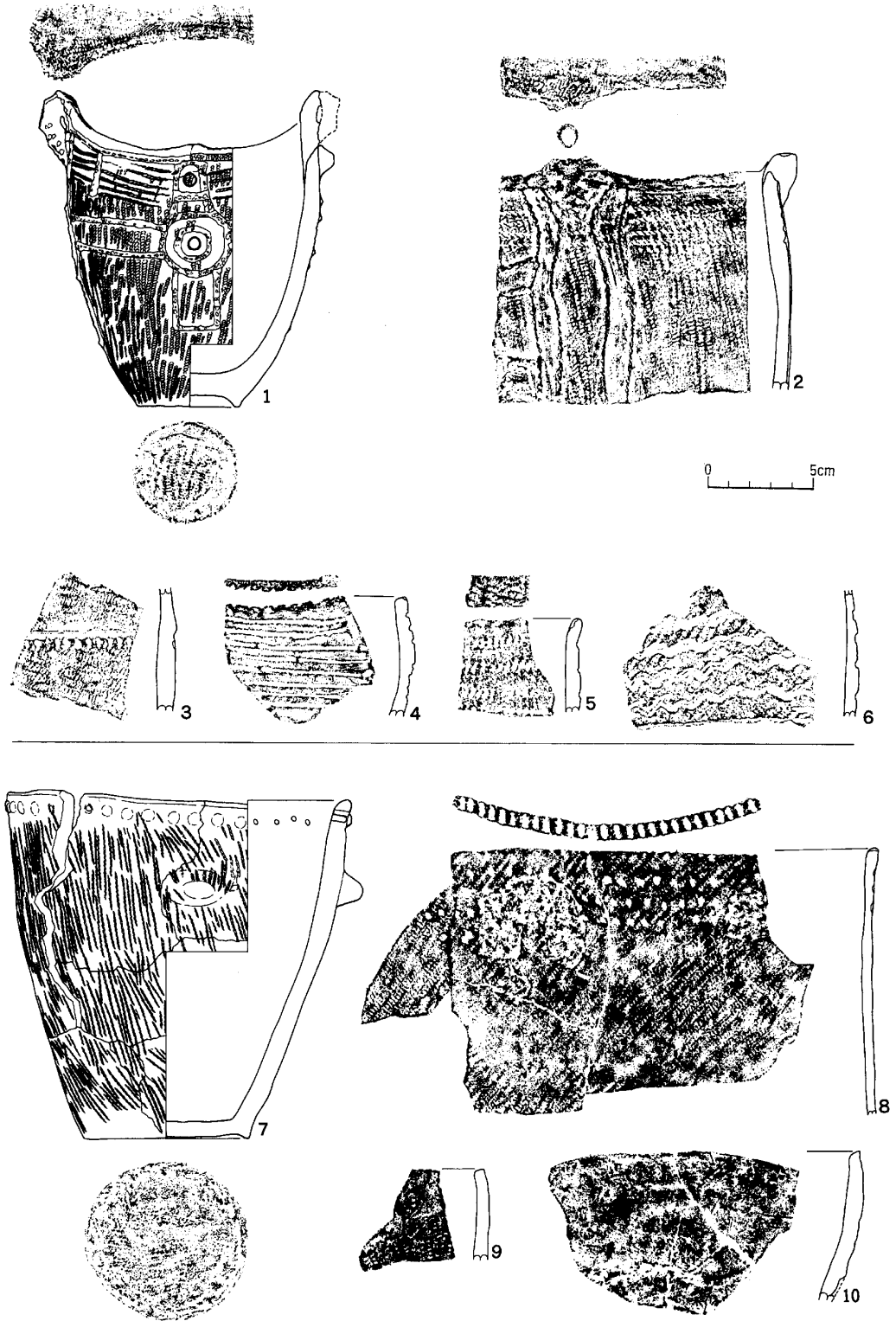
石器は第224図-6が表裏面とも入念に調整された両面加工ナイフ。7も両面加工ナイフ。8は削器。埋土出土の9・10は石銛。11は柄部に原石面を残す両面加工ナイフ。12は削器。すべて黒曜石製。

小括

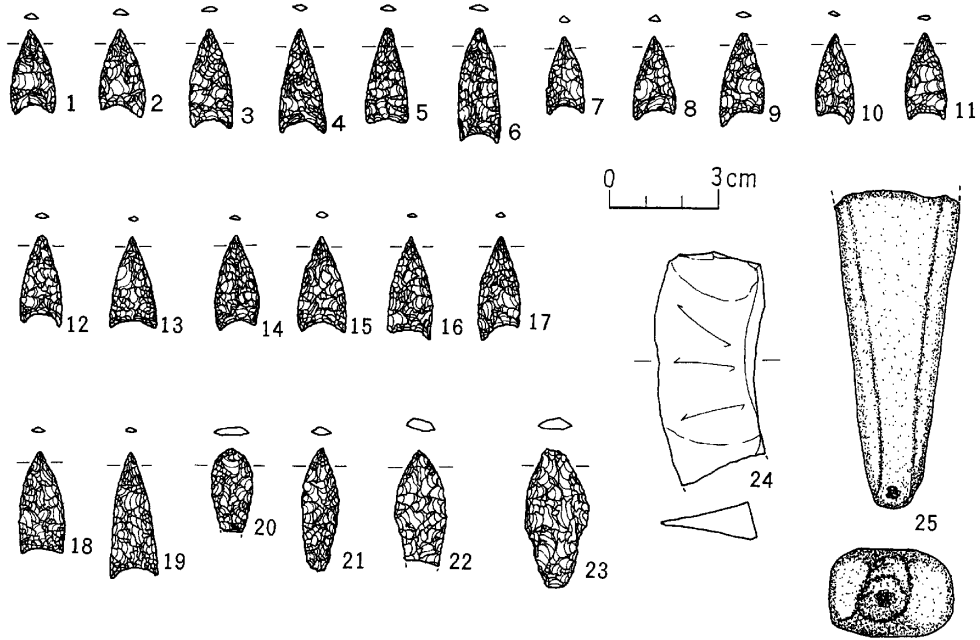
本ピットは続縄文字津内IIb式の土壌墓である。頭部は南にあり, 遺体上部とやや離れた東壁近くの2箇所から各種の石器が出土している。 (武田 修)



第226図 ピット370平面図



第227図 ピット370床面(1)・埋土(2~6), 370a床面(7)・埋土(8~10)出土土器



第228図 ピット370a床面（1～6・20～23）・ベンガラ内（7～19）・埋土（24・25）出土石器

ピ ッ ト 370 a

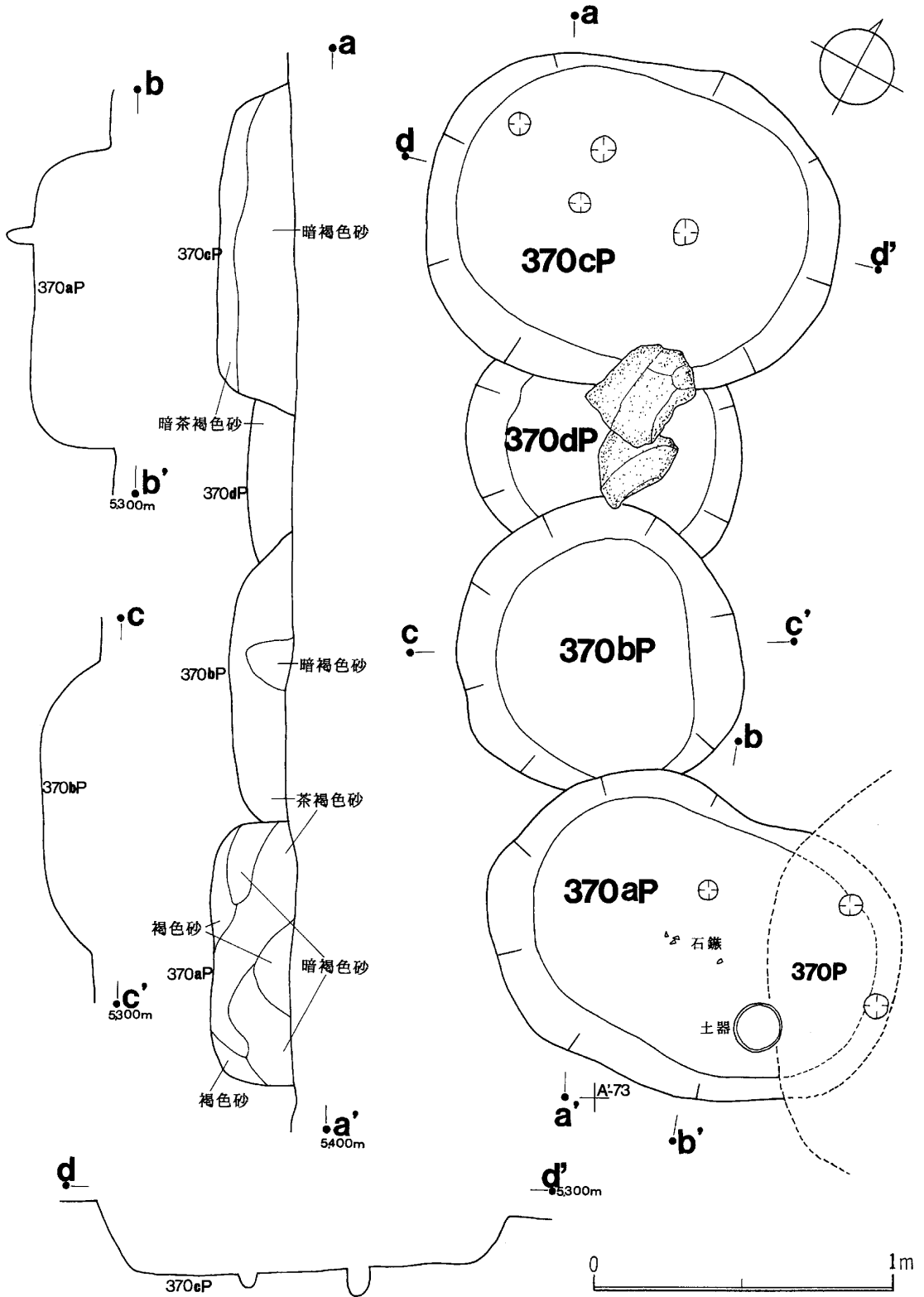
遺 構（第229図，図版49－9，図版50－1）

本ピットはピット370と東壁で重複する。規模は長軸約1.40m，短軸約1mの楕円形を呈する。床面には遺存体と思われる赤褐色土が薄く広がり，第228図－19～31の石鏃が上部から出土した。床面中央部からやや北側に1本，東壁際に2本の柱穴がある。直径約8～10cm，深さ約9～13cmのものである。

遺 物（第227図－7～10，第228図－1～25，図版50－2～27）

第227図－7は東壁際の床面から正立の状態出土した口径約16.5cm，器高約16cmの中型土器である。口縁直下には内側からの突瘤文が施され，撚糸文を地文とする。胴上部にはボタン状の貼付文が見られる。縦方向に亀裂があるが，この亀裂の上部にある突瘤文だけ貫通している。突瘤文を補修孔として利用したのであろう。時期は続縄文宇津内IIa式である。8は口縁下部に3列の縄端圧痕文が施される。9は縄文，10は無文の浅鉢であろう。8～10は縄文晩期中葉と思われる。

石器は第228図－1～19が無茎石鏃。20～23は有茎石鏃。20は茎部が細く先端部は幅広で丸みをもつ。21は茎部は細く，22・23は太い。24は表裏面の中央部が研磨された砥石。25はたたき



第229図 ピット370a, 370b, 370c, 370d平面図

石。24の硬質頁岩製，25の泥岩製を除きすべて黒曜石製である。

小 括

本ピットは東西方向に長軸面をもつ。時期は続縄文字津内IIa式である。 (武田 修)

ピ ッ ト 370 b

遺 構 (第229図)

本ピットはA'72・73グリッドにまたがって位置する。ピット370aとは東南壁の一部で重複する。規模は直径約1mの円形を呈する。掘り込みは浅く皿状に緩く立ち上がり，壁高は確認面から約20cmである。

遺 物 (第231図-1)

第231図-1は曲線文の内部を三角形の施文具による刺突文が重鎮し，3本の短刻線を加え，曲線文の外側は4列，口唇部は1列の刺突文だけが見られる。器壁は薄く，焼成も良い。縄文晩期中葉のものと思われる。

小 括

切り合い関係から続縄文字津内IIa式より古い時期と思われるが，詳細は不明である。

(武田 修)

ピ ッ ト 370 c

遺 構 (第229図)

本ピットはA'72・73グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約1.40m，短軸約1.10mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約28cmである。床面中央部に2本，西壁側に2本の柱穴がある。直径約6～10cm，深さ約5～11cmのものである。形態等から土壙墓である可能性が高いものの遺存体の痕積は無く，副葬品などの遺物も認められない。床面に柱穴があることから続縄文字津内IIa式のピットかもしれない。

遺 物 (第231図-2，第232図-1)

第231図-2は口縁下部に外側から突瘤状の円形文と3条の横走沈線文が施される。円形文は1個であるため文様を意識したものかわからない。緑ヶ岡式系の土器に類似する様であるが，これらには外側からの突瘤文は見られず，注目すべき資料である。

石器は第232図-1が黒曜石製の両面加工ナイフ。

(武田 修)

ピ ッ ト 370 d

遺 構 (第229図)

本ピットはA'72・73グリッドにまたがって位置する。南壁をピット370b、北壁をピット370c切られている。規模は長軸約0.94m呈し、壁高は確認面から約15cmである。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第231図-3・4, 第232図-2)

第231図-3は宇津内系、4は縄線文と細い刺突が施される。縄文晩期中葉と思われる。

第232図-2の表面は原石面を残し、刃部が作出されるものの主要剥離面側の刃部は粗く未調整である。ナイフの未製品であろう。(武田 修)

ピ ッ ト 371

遺 構 (第230図, 図版51-1)

本ピットはB'71・72グリッドに位置する。規模は直径約1.26mの不整形円形を呈する。ほぼ垂直に立ち上がった壁高は確認面から約47cmである。床面には遺存体である粘性の有する暗赤褐色土が薄く広がっている。ピット371aとは南西壁上部で僅かに重複する。

遺 物 (第231図-5~10, 第232図-3・4, 図版51-2・3)

第231図-5は宇津内IIb式。6は口縁直下に1条の縄線文、内側からの突瘤文が施される。突瘤文の間隔は広い。7・8は口唇部の内側に縄端圧痕文があり、8では縄線文が4条施される。6~8は続縄文初頭であろう。9は直線、10は波状曲線のある縄文晩期緑ヶ岡式。9・10は同一個体と思われる。

石器は第232図-3が北壁際から出土した両刃磨製石斧。青色泥岩製。4は両面加工ナイフ。黒曜石製。

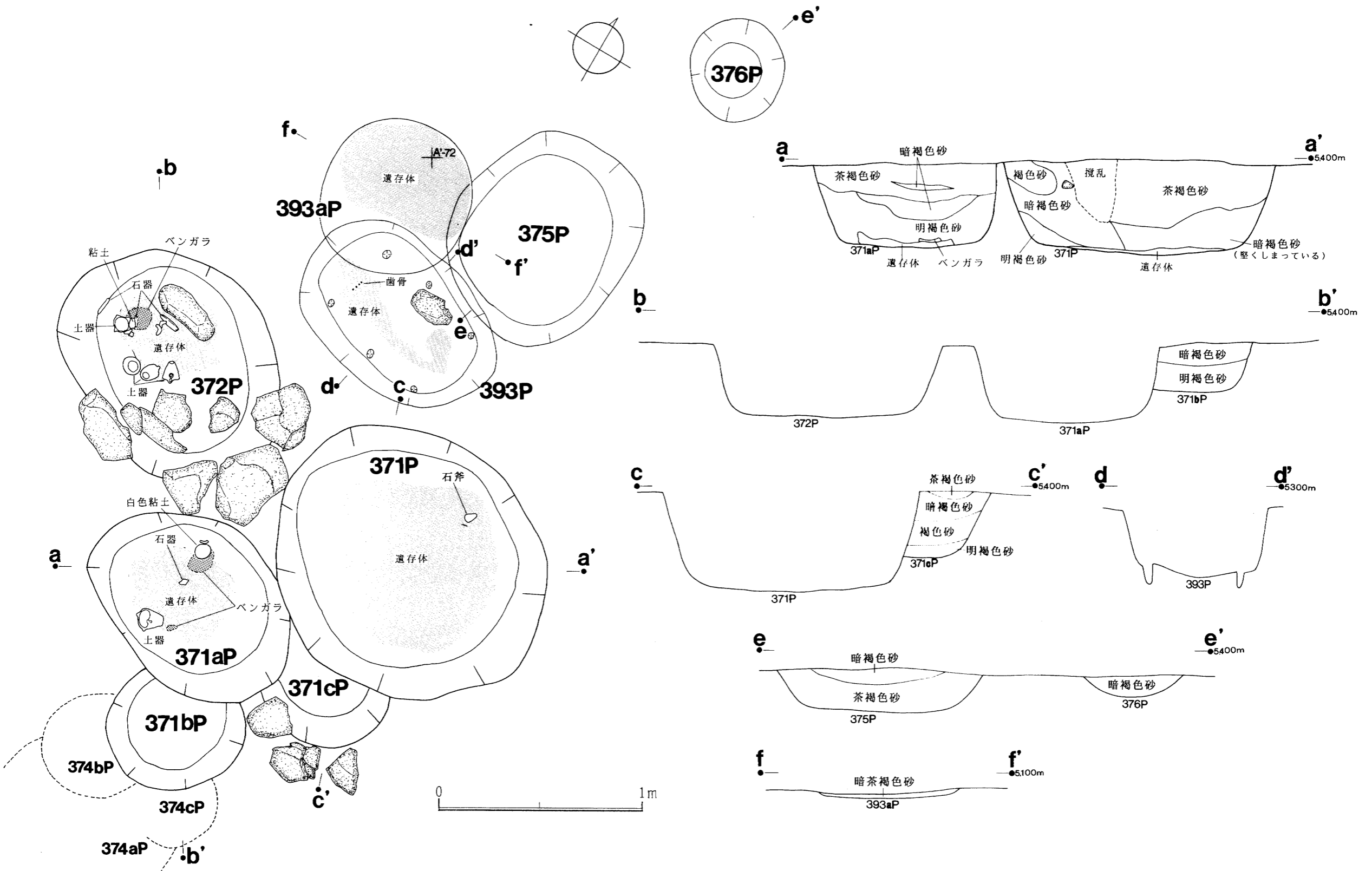
小 括

続縄文期の土壌墓と思われるが、詳細な時期は不明である。(武田 修)

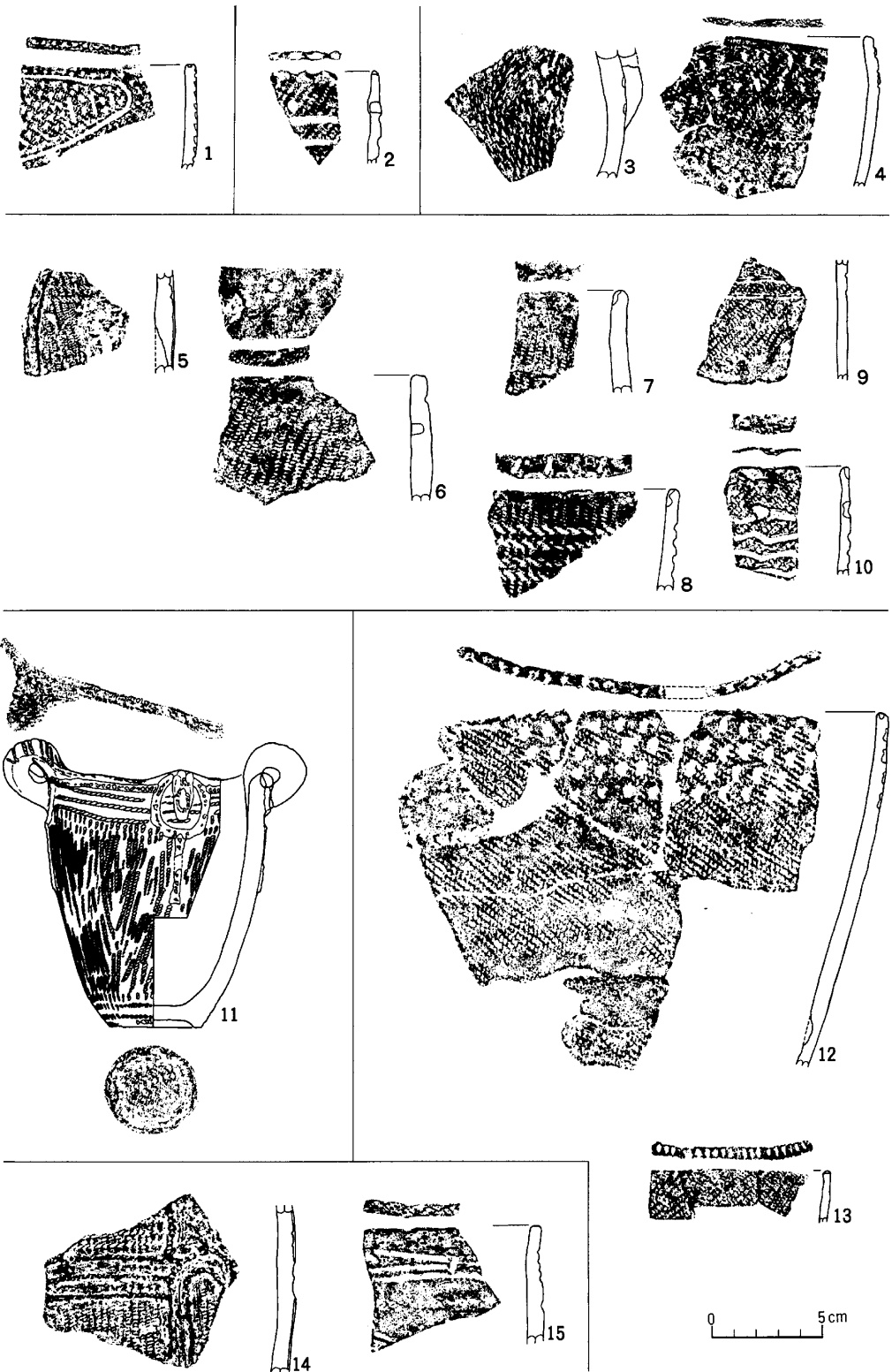
ピ ッ ト 371 a

遺 構 (第230図, 図版51-1)

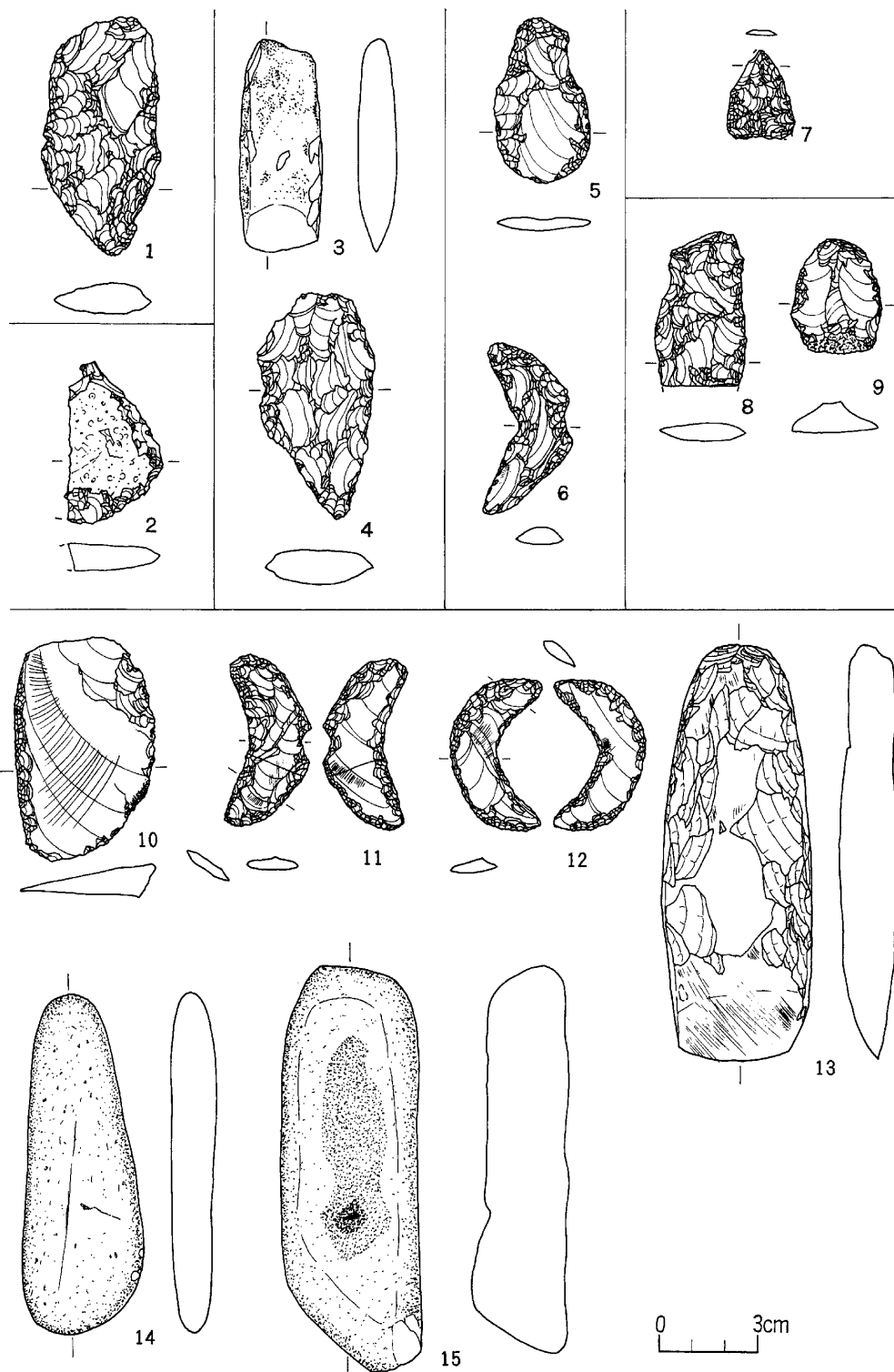
本ピットはB'72グリッドに位置する。規模は長軸約1.10m、短軸約0.80mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約40cmである。ピット371とは北東壁の上部で僅かに重複するものの新旧関係を明確にとらえることができなかった。床面には遺存体である暗赤褐色土が広がり、北側には直径約11cm、南側には直径約7cmの範囲でベンガラが散布されている。北側のベンガラ上部



第230図 ピット371, 371a, 371b, 371c, 372, 375, 376, 393, 393a平面図



第231図 ピット370b埋土 (1), 370c埋土 (2), 370d埋土 (3・4), 371埋土 (5~10), 371a床面 (11), 371b埋土 (12・13), 371c埋土 (14・15) 出土土器



第232図 ピット370c埋土 (1), 370d埋土 (2), 371埋土 (3・4), 371a床面 (5・6), 371b埋土 (7), 371c埋土 (8・9), 372ベンガラ内 (10~13)・埋土 (14・15) 出土石器

には白色粘土があり、南側のベンガラと近接して続縄文字津内IIb式の完形土器が横倒しの状態で出土。

遺物 (第231図-11, 第232図-5・6, 図版51-4~6)

土器の第231図-11は床面出土。口径約10.5cm, 器高約13cmの小型土器。口縁部と底部に縄線文がめぐり、吊り耳と小突起下部では円形の擬縄隆帯で強調される。宇津内IIb式である。

石器の第232図-5は柄部をもつ両面加工ナイフ。頁岩製。6は黒曜石製の「三日月形」石器。第232図-11・12はピット372出土の「三日月形」石器であるが、特に11とは右側縁の中央にある「V」字状の抉りが最も近似する。

小括

本ピットは続縄文字津内IIb式の土墳墓である。近接するピット372とは「三日月形」石器の特徴から同一時期と判断できる。(武田 修)

ピット 372

遺構 (第230図, 図版51-1)

本ピットはB'72グリッドに位置する。第II層の茶褐色砂層を約4~5cm掘り下げた段階で大型の角礫4点が並んでいたため周囲を精査した。その結果、長軸約1.20m, 短軸約0.95mの楕円形の輪郭を確認した。壁高は確認面から約34cmである。角礫はピットの東壁を取り囲む様に配置されている。内部を掘り進めるとさらに中型の角礫が出土した。遺存体よりは上部の位置にあり、本来はピット上面を覆っていたのであろう。遺存体は中央部からやや西側に寄った位置にある。あまり粘性を持たないものの赤褐色の色調を呈する。各種の遺物のほとんどは遺存体上部からの出土である。小型の土器は南側で4点並んで出土した。正立のもの、伏せたもの、倒れたものなど出土状態は不規則であるが、遺存体の周囲に置かれている。

石器は直径約15cmの範囲に散布されたベンガラ上部とその周辺にある。白色粘土もベンガラ上部から出土した。

遺物 (第233図-1~6, 第232図-10~15, 図版51-7~9, 図版52-1~5)

第233図-1~3は床面出土。1・2は口縁下部に縄線文があり、1は口径約8cm, 器高12cmの小型土器。2個の吊り耳下部には同心円文が施され、それぞれは3本の擬縄隆帯で連結される。2は口径約8.5cm, 器高約9.5cmの小型土器。吊り耳下部と小突起部の円形貼付文の下部に同心円文が施される。3は口径約8.5cm, 器高約9.5cmの小型土器。横長、縦長の小突起を1対づつもち、横長突起には小孔がある。吊り耳的な機能があるのであろう。各突起間には横走沈線と半截状施文具による刺突が施される。器面には縄文は認められず、器壁は厚い。本時期の土器としては異質な文様である。4は口径約9.5cm, 器高約10cmの小型土器。口縁部の一端は欠失するものの上面観は方形である。角部に小突起が付けられ、小突起間には小孔がある。1

～3の土器よりやや浮いて出土したが近接するため本ピットに伴うと判断した。1～4の土器は続縄文字津内IIb式に比定される。5は続縄文字津内系、6は同初頭の土器であろう。

第232図に示した石器の10～13はベンガラ内出土。10は主要剝離面側の左側縁部が刃部であり、右側縁部に原石面を残す。11・12は三日月形石器。13は両縁が敲打調整された片刃磨製石斧。14は左下端部に敲打痕のあるたたき石。泥岩製。15は砂岩製の凹み石。10～12は黒曜石製。13は黒色片岩製。

小 括

本ピットの時期は続縄文字津内IIb式である。ピット371aと本ピットの距離は約15cmである。両ピットは配石の有無による差異はあるものの規模と長軸方向、内部の遺物出土状況は相似する。両ピットともベンガラは北壁近くに散布され、上部に白色粘土をもつ。土器の個体数に差はあるものの南壁側に置く点で共通する。石器はいずれもベンガラ付近から出土している。その石器の中でも特徴的なものが第232図-6と第232図-11・12に示した三日月形石器である。同一形態をもつ石器が隣接するピットに副葬されていることは両ピットが同一時期、同一集団の手によることを裏付けている。副葬品の配置手法を含め、異形石器のもつ意義について改めて考える必要がある。

(武田 修)

ピ ッ ト 373

遺 構 (第234図, 図版52-6)

本ピットはB'72グリッドに位置する。規模は長軸約1.15m, 短軸約0.60mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約47cmである。西壁端部に大型角礫2点と近接してやはり2点の大型角礫がある。これもまたピット372と同様の配石をもっていた可能性がある。第233図-7の土器はセクションに示される通り口縁部と接する様に黒色砂が斜めに堆積する。黒色砂はこの土器の周囲にだけ認められた。この土器と8・9の土器は文様、胎体調査段階で明確に確認することはできなかったがこの土器は本ピットに何らかの理由により混入されたのかもしれない。赤褐色の遺存体は中央部からやや東側に寄った位置にある。

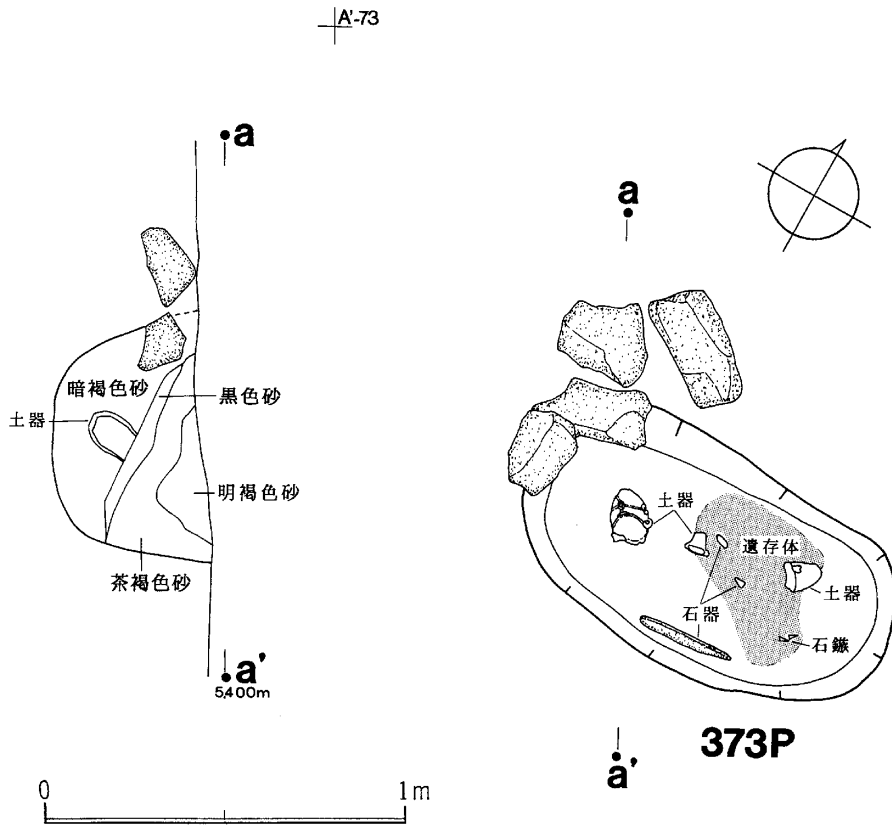
遺 物 (第233図-7～9, 第236図-1～3, 図版52-7～9, 図版53-1～3)

第233図-7は口径長軸約11.5cm, 短軸約9.7cmの楕円形を呈し、器高17cmの中型土器。内湾気味の口縁部には縄線文が施され、大きな吊り耳の下部とその間に付けられた小突起の下部に同心円文が施される。続縄文字津内IIb式である。8は口径約6.5cm, 器高約6cmの小型土器。9は口径約8cm, 器高約9cmの小型土器。9は縄線文が口縁下部にあり吊り耳と小突起下部からは2本の短い隆帯が垂下し、8は口縁下部にやや太めの擬縄隆帯と縄線文がある。8・9は遺存体のほぼ上部から出土した宇津内IIa式である。

石器は第236図-1・2が遺存体の上部から出土した無茎石鏃。黒曜石製。3は偏平な礫のほ



第233図 ピット372床面(1~3)・埋土(4~6), 373埋土(7~9), 374埋土(10), 374a埋土(11・12), 375埋土(13)出土土器



第234図 ピット373平面図

ば中央部と下端部に叩き痕があり，右側縁部に沿って縦長の擦痕が観察される。泥岩製。

小 括

本ピットは遺存体上の土器である第233図-8・9から続縄文字津内IIa式に比定される。第233図-7の土器とは文様，胎土で異なりをみせる。(武田 修)

ピ ッ ト 374

遺 構 (第235図)

本ピットはB'72グリッドに位置する。規模は長軸約1.54m，短軸約1.20mの楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり高さは確認面から約62cmである。東壁側でピット374a，374bを切っ
て構築するが詳細な時期は不明である。

遺 物 (第233図-10)

10は縄文晩期中葉の土器であろう。(武田 修)

ピ ッ ト 374 a ・ 374 b

遺 構 (第235図)

ピット374aはB'72グリッドに位置する。西壁の上部をピット374, 北壁側をピット371b, 374bと重複する。このため全体の規模, 形態は不明であるが直径約0.90m程の円形を呈すると思われる。壁は床面から丸みをもって立ち上がり, 高さは確認面から約68cmである。

ピット374bはピット374aを切り, 北東壁をピット371bに切られる。規模は直径約1mの円形で, 高さは確認面から約48cmである。詳細な時期は不明である。

遺 物 (第233図-11・12, 第236図-4・5)

第233図-11・12はピット374aの埋土出土。11は胴部に曲線状の沈線文が施される。続縄文初頭であろう。12は続縄文津内IIb式。

石器は第236図-4が先端部の尖がる両面加工ナイフ。5は縦長剥片の右側縁下端部に歯こぼれ状の使用痕がある。2点とも黒曜石製。 (武田 修)

ピ ッ ト 374 c ・ 374 d

遺 構 (第235図)

ピット374cはB'72グリッドに位置する。南西壁側をピット374a, 北壁側をピット371bに切られる。このため全体の規模, 形態は不明であるが直径約0.48mほどの円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約24cmである。

ピット374dは大半をピット374, 374aに切られているため検出できたのは東壁と南壁の一部である。残存部のコーナーから判断すると規模は直径約1.23mの方形を呈するのであろう。壁は皿状に浅く立ち上がるもので, 高さは確認面から約14cmである。

2基のピットとも詳細な時期は不明である。

遺 物 (第236図-6)

ピット374cから遺物の出土は無い。6はピット374dの埋土から出土した端削器。

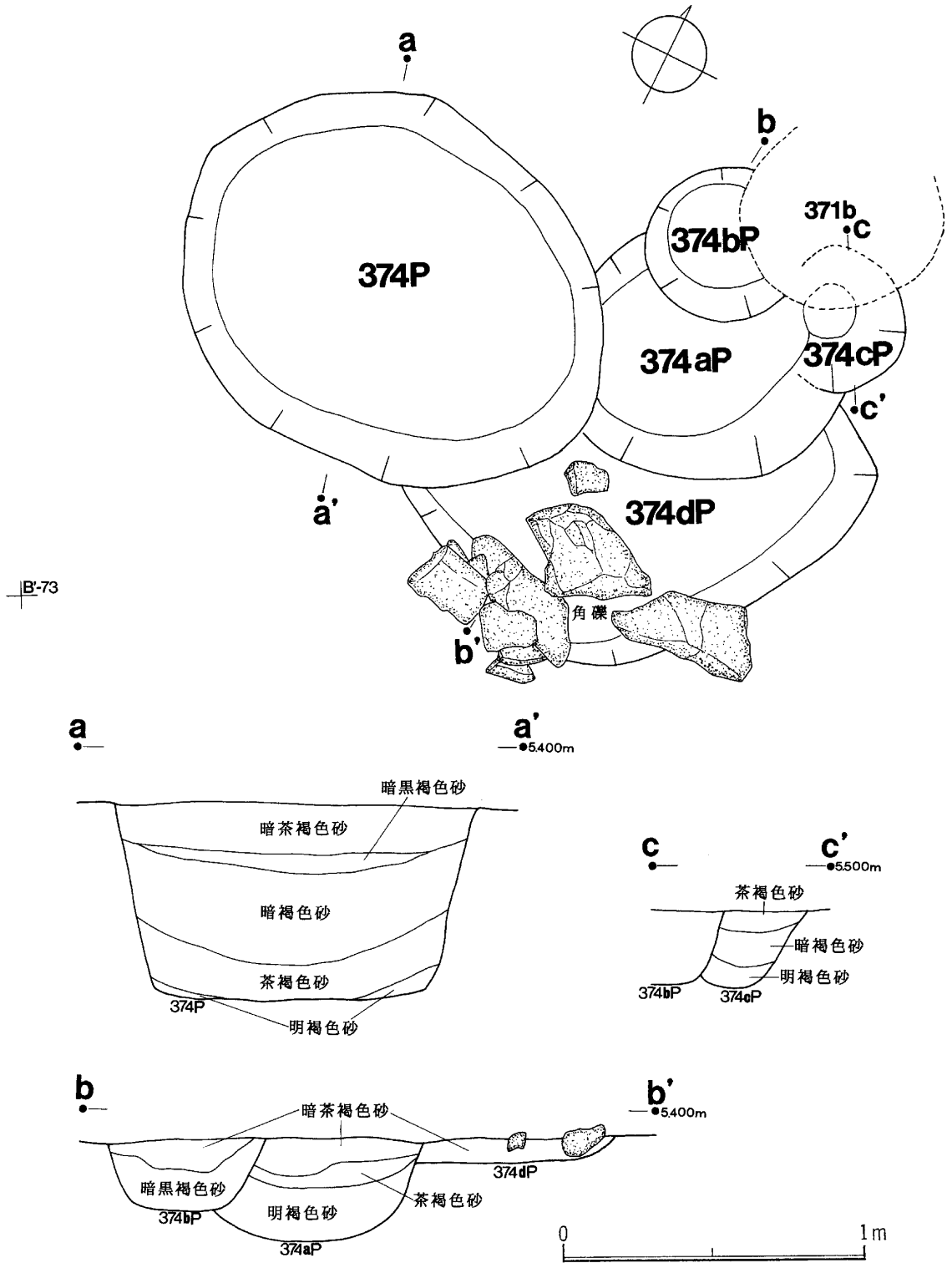
(武田 修)

ピ ッ ト 375

遺 構 (第230図)

本ピットはB'72グリッドに位置する。規模は直径約1mの不整円形を呈する。壁高は確認面から約20cmを測る。詳細な時期は不明である。

遺 物 (第233図-13)



第235図 ピット374, 374a, 374b, 374c, 374d平面図

埋土出土の続縄文字津内IIb式。

(武田 修)

ピ ッ ト 376

遺 構 (第230図)

本ピットはA73グリッドに位置する。規模は直径約0.45cmの小円形を呈する。壁高は確認面から約40cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピ ッ ト 377

遺 構 (第78図)

本ピットはA73グリッドに位置する。規模は長軸約1.10m, 短軸約0.90mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約26cmを測る。

南壁の床面に直径約8cm, 深さ約11cmの小柱穴がある。詳細な時期は不明。(武田 修)

ピ ッ ト 378

遺 構 (第78図)

本ピットはB74グリッドに位置する。規模は直径約0.40mの小円形を呈する。壁は「V」字状の断面であり、深さは確認面から約30cmである。詳細な時期は不明。

遺 物 (第238図-1・2, 第236図-7・8, 図版58-4・5)

第238図-1は宇津内式, 2は3条の絡縄体と刺突が施される。続縄文初頭であろう。

石器は第236図-7は削器。黒曜石製。8は刃部が折れた磨製石斧。青色片岩製。

(武田 修)

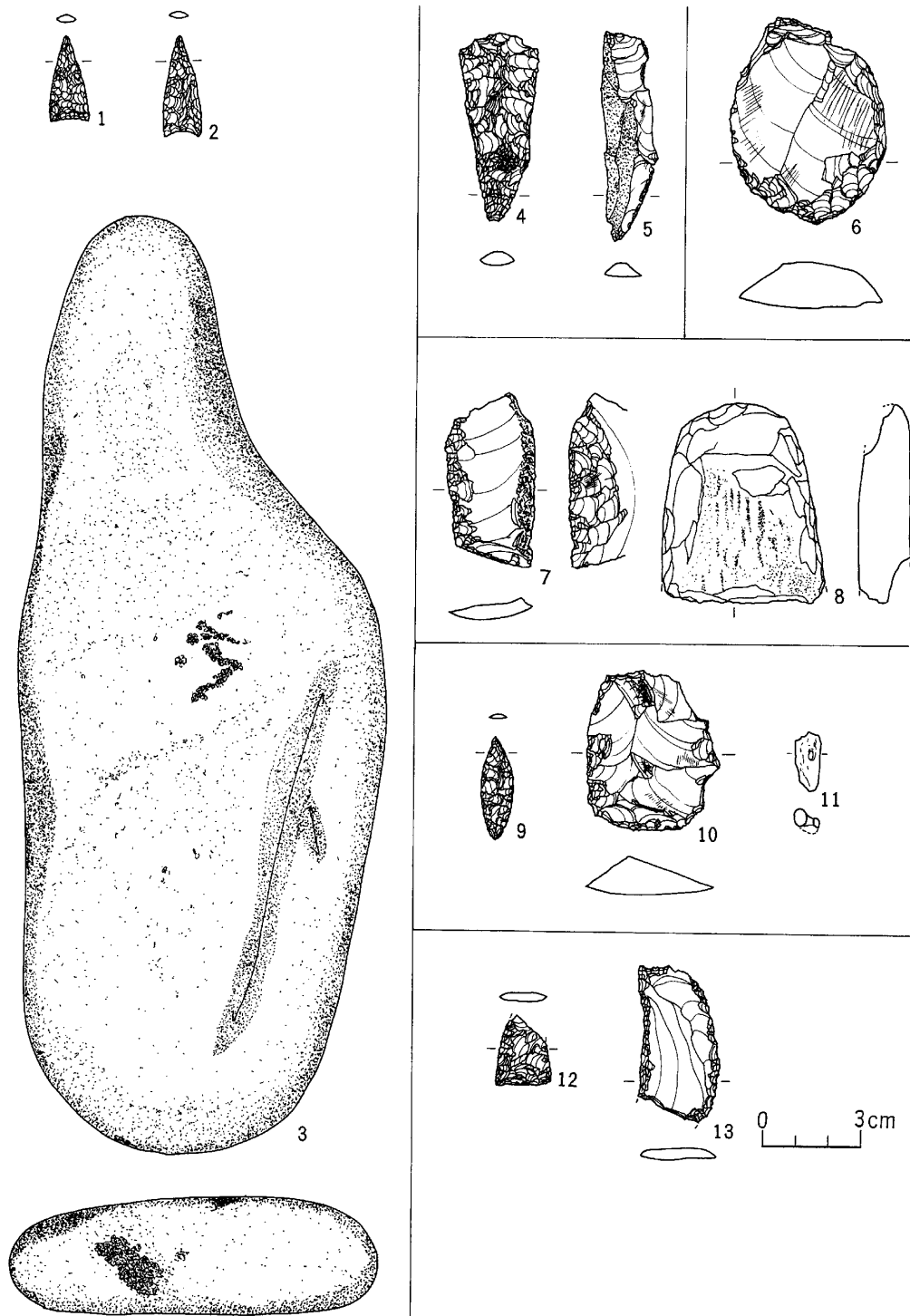
ピ ッ ト 379

遺 構 (第237図)

本ピットはA'71・72グリッドにまたがって位置する。ピット379bを掘り進める段階のセクション観察時に発見した。このため東壁の一部は破壊してしまった。規模は長軸約0.60m, 短軸約0.50mの隅丸方形を呈する。壁高は確認面から約30cmである。

遺 物 (第238図-3~7, 第236図-9~11)

第238図-3は口縁下部に太めの縄線文が3本施される。続縄文初頭であろう。4は横位の直



第236図 ピット373遺体上部 (1・2)・埋土 (3), 374a埋土 (4・5), 374d埋土 (6), 378埋土 (7・8), 379埋土 (9~11), 380埋土 (12・13) 出土石器・琥珀等

線、山形沈線に縦位の沈線、5は孤線状の沈線、6は直線、孤線の沈線文が施される。縄文晩期末葉から続縄文初頭であろう。7は口縁部の無文帯に細い円形刺突文が上下に施される。続縄文初頭であろう。

石器は第236図-9が柳葉形の石鏃。10は端削器。いずれも黒曜石製。11は琥珀玉。

小 括

詳細な時期は不明であるがピット379bは続縄文初頭であり、それよりは新しい。

(武田 修)

ピ ッ ト 379 a

遺 構 (第237図)

本ピットはピット379の南西側に位置する。ピット379のセクション観察で確認したものである。規模は長軸約0.88m、短軸約0.52mの楕円形を呈する。ピット上部の南側には大型角礫4点と小型角礫1点が配置されている。ほぼ垂直に立ち上がった壁高は確認面から約30cmである。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第238図-8~11)

第238図-8は続縄文後北C₂・D式。9は僅かに外反した口縁部は無文帯となり、口唇部の内側は縄端圧痕文が施される。続縄文初頭であろう。10は宇津内IIb式。11は口縁下部に2条の横走沈線文が施される。続縄文初頭であろう。

(武田 修)

ピ ッ ト 379 b

遺 構 (第237図, 図版53-7, 図版54-1)

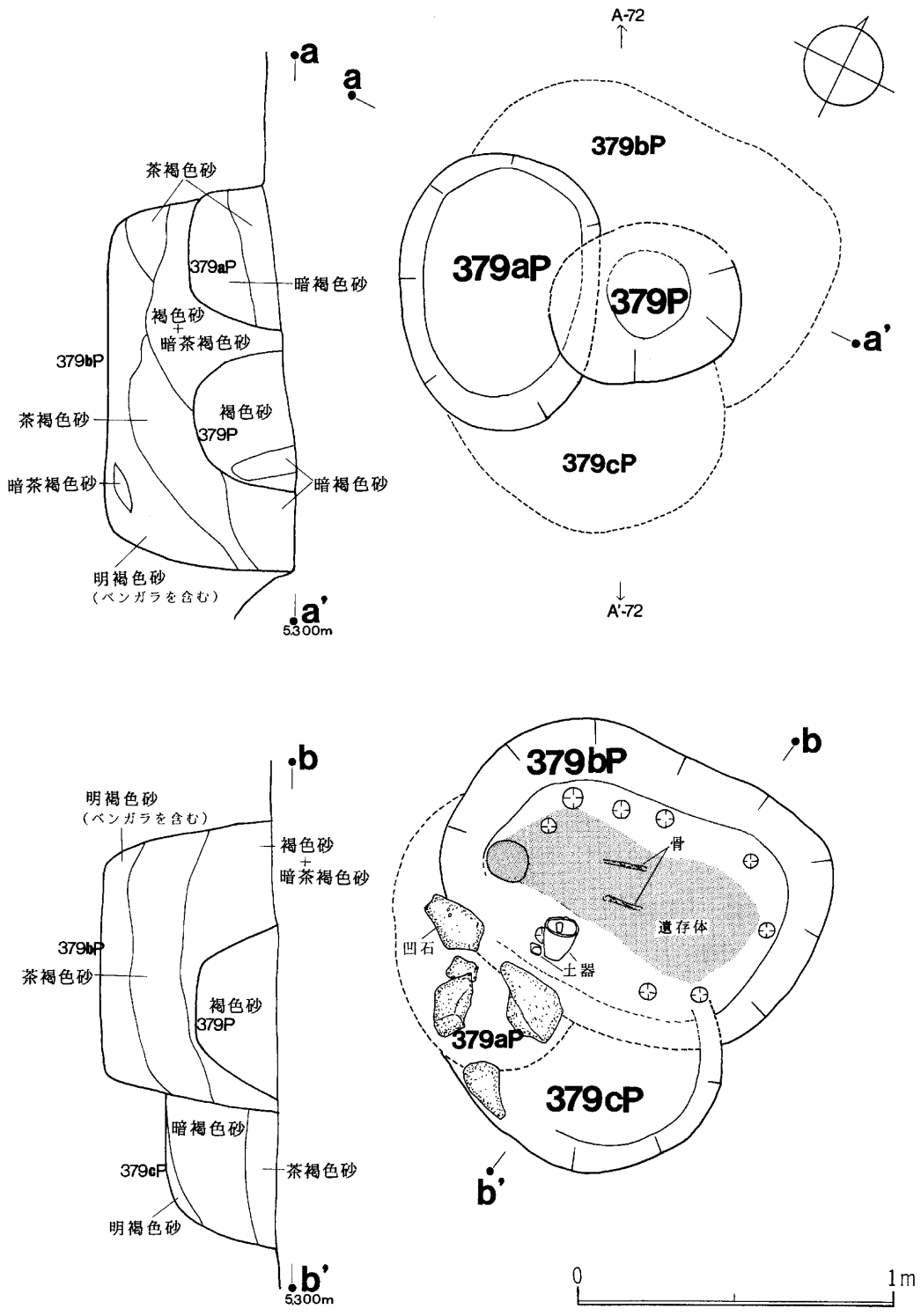
本ピットの南壁上部はピット379, 379aに切られているため検出できたのは床面から約30cmである。他の壁はピットに絡まないため確認面から約60cmの掘り込みである。規模は長軸約1.20m、短軸約0.90mの楕円形を呈する。

遺存体である赤褐色土は粘性をもち長軸方向に広がる。頭部の膨らみは南西壁隅にある。遺存体の中央部では長さ約12cm、幅約2~3cmの骨が2本並んで検出された。大腿骨であろう。壁の周りには直径約5~7cm、深さ約7~10cmの壁柱穴がほぼ等間隔にめぐる。副葬品である。第238図-12の土器は頭部に近い南壁隅の床面から横倒しの状態で出土。

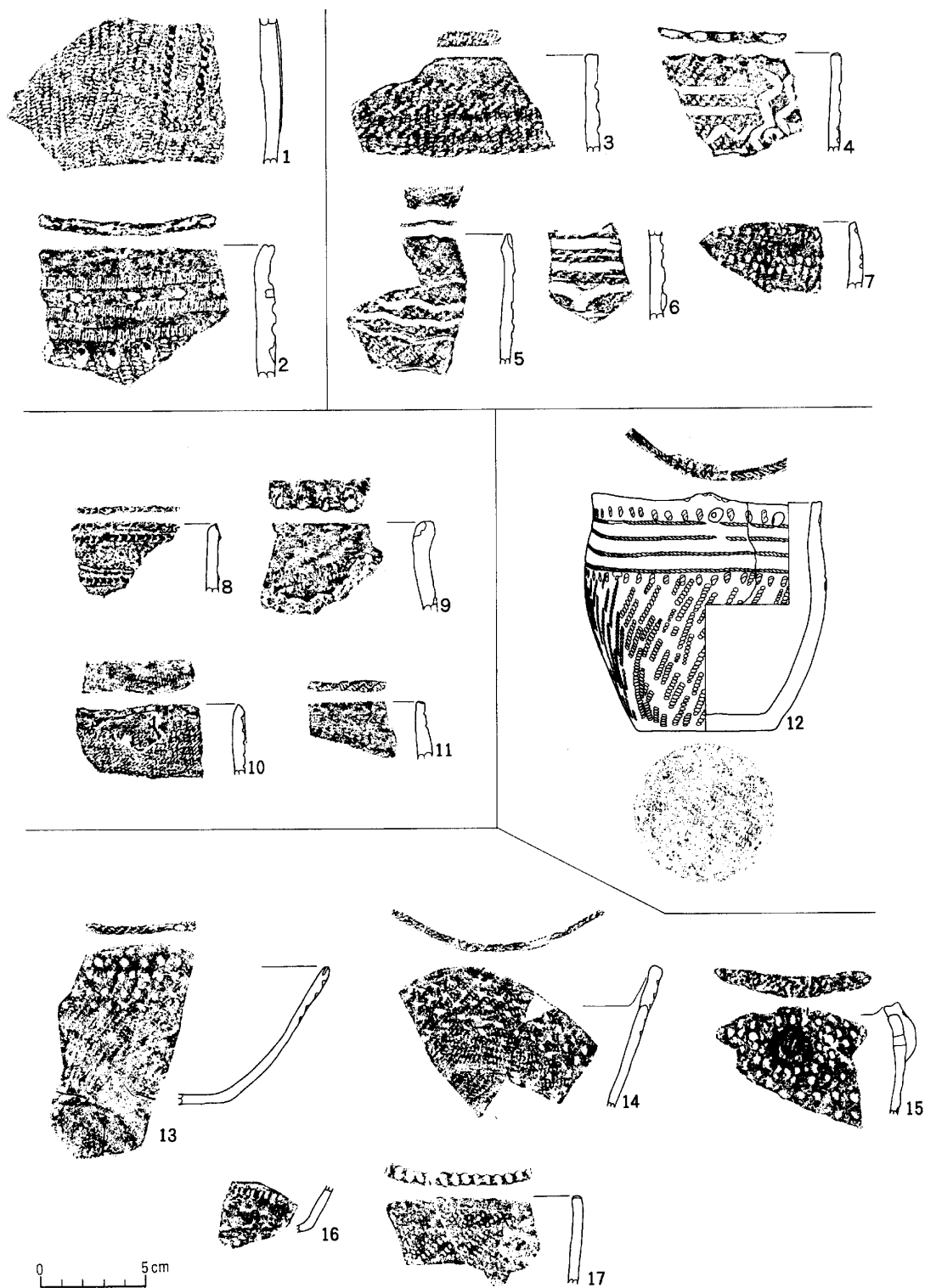
遺 物 (第238図-12, 図版55-6)

第238図-12は口径、器高とも約11cmの小型土器。口唇部に1対の小突起がある。2条の縄端圧痕文に挟まれて4条の縄線文が施される。土器内部の全面に煤が付着する。

詳細な時期は不明である。



第237図 ピット379, 379a, 379b, 379c平面図



第238図 ビット378埋土 (1・2), 379埋土 (3~7), 379a埋土 (8~11), 379b床面 (12), 380埋土 (13~17) 出土土器

小 括

本ピットは東西方向に長軸面をもつ西頭位の土壙墓である。壁に沿う小柱穴は続縄文字津内IIa式の土壙墓と共通するが、床面土器はそれよりもやや古手の土器である。

ピ ッ ト 379 c

遺 構 (第237図)

本ピットの西側部をピット379a、北側部をピット379bによって切られるため検出できなかったが楕円形の形態をもつピットと思われる。壁高は確認面から約35cmである。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明であるが、ピット379bより古いことは確実である。

(武田 修)

ピ ッ ト 380

遺 構 (第239図)

本ピットはF'73・74グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約1.50m、短軸約1.20mの不整楕円形を呈する。埋土の各層では拳大の円礫・角礫が顕著に含まれる。床面はやや丸みをもち壁はほぼ垂直に立ち上がる。高さは確認面から約45cmである。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第238図-13~17, 第236図-12・13)

第238図-13は下方からの刺突が加えられたボール形土器。14は横方向から刺突が施される。深めなボート形の器形を呈するであろう。15は抉りの入った幅広い突起に「∩」字状の隆帯と小孔をもち、器面には縄端圧痕文が施される。16は半截状の刺突が連続して施されるミニチュア土器。16は縄文が施される。これらの土器は縄文晩期中葉と思われる。

石器は第236図-12が先端部が欠失した無茎石鏃。13は両側縁部に刃部をもつ削器。2点とも黒曜石製。

(武田 修)

ピ ッ ト 381

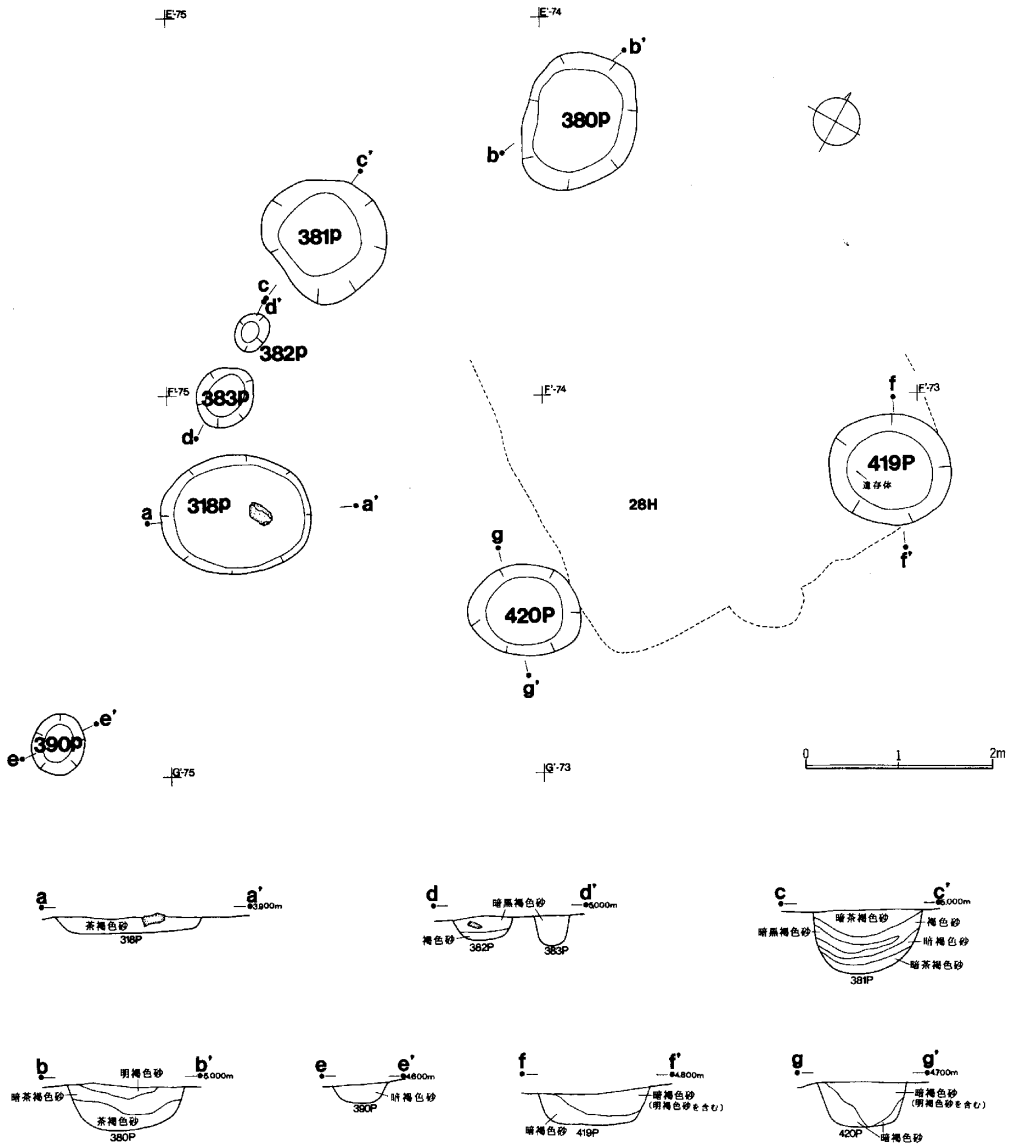
遺 構 (第239図)

本ピットはF'74グリッドに位置する。規模は直径約1.30mの不整方形を呈する。丸みをもった床面から壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約64cmである。

遺 物 (第241図-1)

第241図-1は孤線状の沈線文と突瘤文が施された縄文後期堂林式。

(武田 修)



第239図 ピット318, 380, 381, 382, 383, 390, 419, 420平面図

ピ ッ ト 382

遺 構 (第239図)

本ピットはF'74グリッドに位置する。規模は直径約38cmの小円形を呈する。壁高は確認面から約32cmである。

遺物は出土しておらず時期は不明である。

(武田 修)

ピ ッ ト 383

遺 構 (第239図)

本ピットはG'74, F'74グリッドに位置する。規模は直径約70cmの小円形を呈する。床面は丸みをもち、壁は緩く開く。壁高は確認面から約20cmである。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第241図-2~4)

第241図-2, 3は縄文, 4は無文である。縄文晩期中葉であろう。

(武田 修)

ピ ッ ト 384

遺 構 (第217図)

本ピットはD78・79グリッドに位置する。規模は直径約0.69mの円形を呈する。壁は皿状に立ち上がり高さは確認面から約10cmである。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第242図-1, 図版54-2)

第242図-1はピットの東南壁に接した状態で出土した。刃部は刃こぼれするものの丁寧に敲打調整された磨製石斧である。泥岩製。

(武田 修)

ピ ッ ト 385

遺 構 (第217図)

本ピットはD78・79グリッドに位置し、ピット384と接した距離にある。規模は直径約0.50mの円形を呈する。ピット384と同じく床面は平坦である。壁高は確認面から約10cmである。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第242図-2)

第242図-2は切り出し状の形態をもった削器。黒曜石製。

(武田 修)

ピット 386

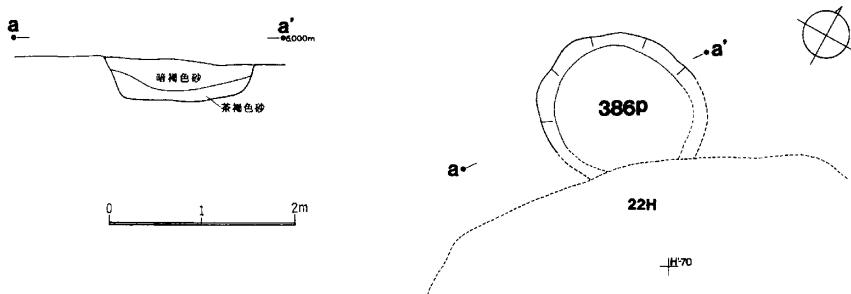
遺構 (第240図)

本ピットはH'69・70グリッドに位置する。22号縦穴に東側の大半が切られているため正確な規模は不明である。残存部での短軸は約1.60m。壁高は確認面から約35~40cmを測る。

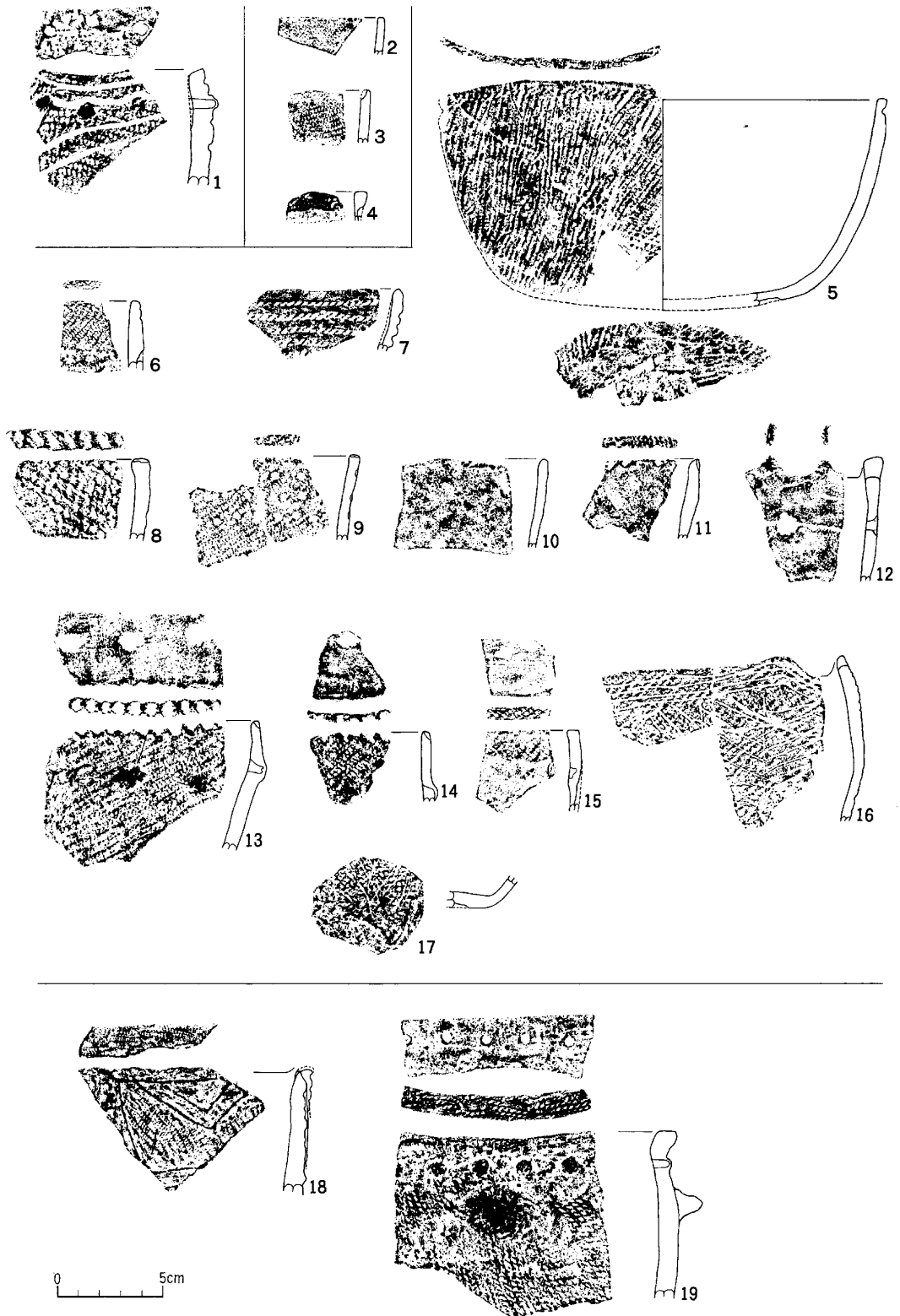
遺物 (第241図-5~17, 第242図-3~5, 図版54-3~4)

第241図-5~7は口縁下部に縄線文が施される。5はボール形土器。8は縄文, 9は縄端圧痕文, 10は無文。11は無文に浅い擦痕が残る。口唇部の外側に刻みがあり, 縄文晩期後葉の幣舞式かもしれない。12は口縁部は僅かに内湾気味であり, 幅広い無文帯の下部に縄文がある。5~10, 12は縄文晩期中葉。13~15は突瘤文が施された同前葉。16は口縁部に横走る沈線文と胴部では縦の区画部を斜めの沈線文が施される。縦方向の沈線文が施された17とは同一個体と思われる。

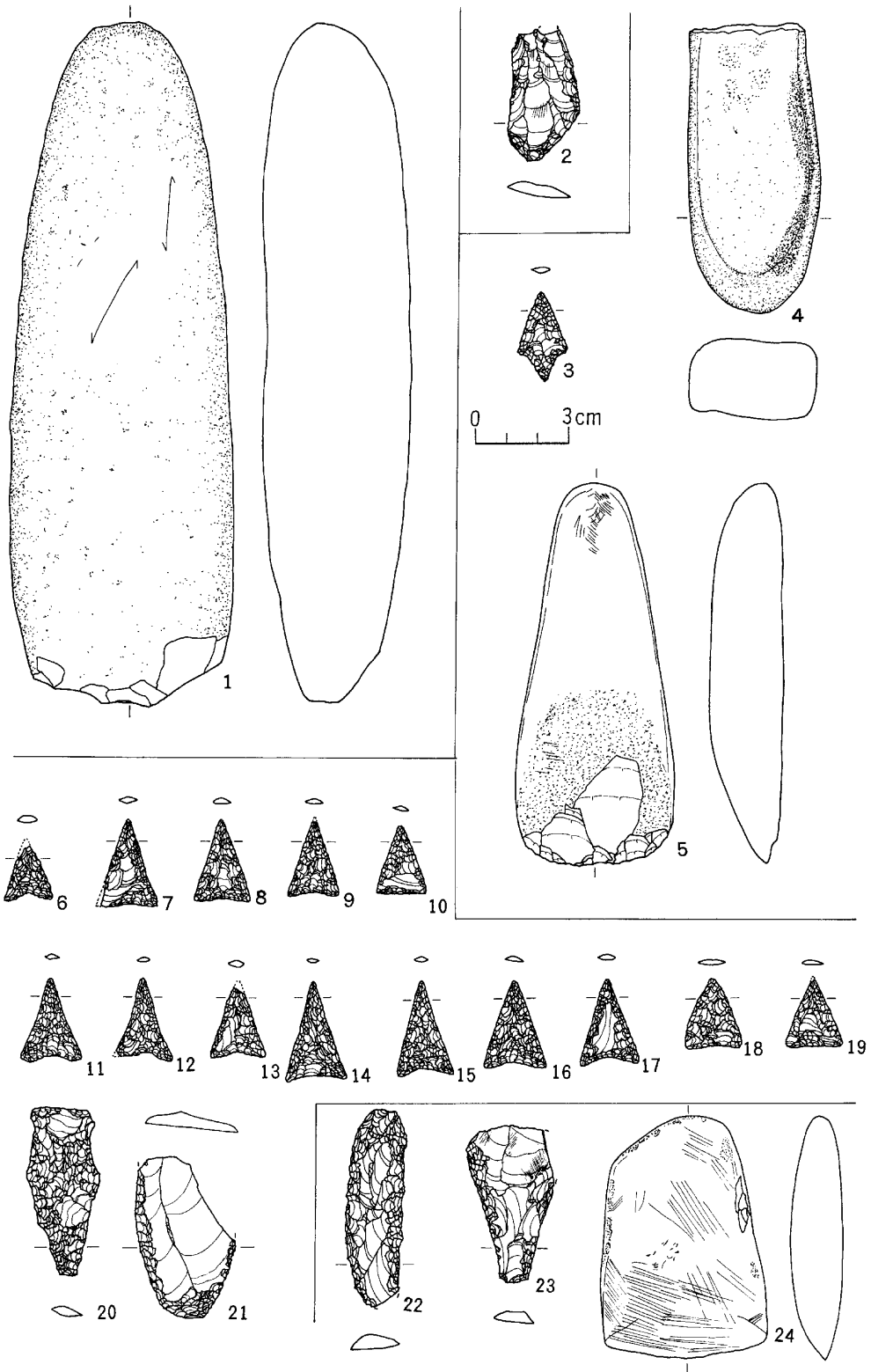
石器は第242図-3が有茎石鏃。4は右側縁上部に使用痕があるたたき石。泥岩製。5は撥状を呈した自然礫の端部に敲打調整を加えて刃部とした片刃磨製石斧。泥岩製。(武田 修)



第240図 ピット386平面図



第241図 ピット381埋土 (1), 383埋土 (2~4), 386埋土 (5~17), 389埋土 (18・19) 出土土器



第242図 ピット384埋土 (1), 385埋土 (2), 386埋土 (3~5), 389床面 (6~19)・埋土 (20・21), 391床面 (22・23)・埋土 (24) 出土石器

ピ ッ ト 387

遺 構 (第71図)

本ピットはB73・74・75、C73・74・75グリッドに位置する58a号竪穴の床面を切って構築されている。規模は直径約0.45mの円形を呈し、深さは58a号竪穴の床面から30cmを測る。

詳細な時期は不明である。(武田 修)

ピ ッ ト 388

遺 構 (第248図)

本ピットはB78・79グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約0.95m、短軸約0.56mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約40cmを測る。

遺物は出土しておらず時期は不明である。(武田 修)

ピ ッ ト 389

遺 構 (第243図, 図版55-1)

本ピットはA74グリッドに位置する60号竪穴の南東壁隅を切って構築されている。規模は長軸約1.72m、短軸約1.24mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約38cmである。第II層の茶褐色砂層の上面を約3～4cm下げた段階で落ち込みを確認した。落ち込み面とほぼ同一レベルの位置から直径約20～30cmに及ぶ大型角礫がピットを囲む様に配置されている。床面にかけて縦方向に重なる様に積まれている。角礫群の中央部には大型礫は見られず空白部となる。5～6cm程下げた段階で長さ約40cm、幅約4cmの黄褐色を呈した骨が出土した。

角礫を取り除くと粘性のある黄茶褐色を呈した遺存体が2体認められた。2体とも頭部の膨らみが確認でき、歯骨も検出した。2体とも南頭位である。遺存体の上部には第241図-6～19に示す石鏃が置かれていた。

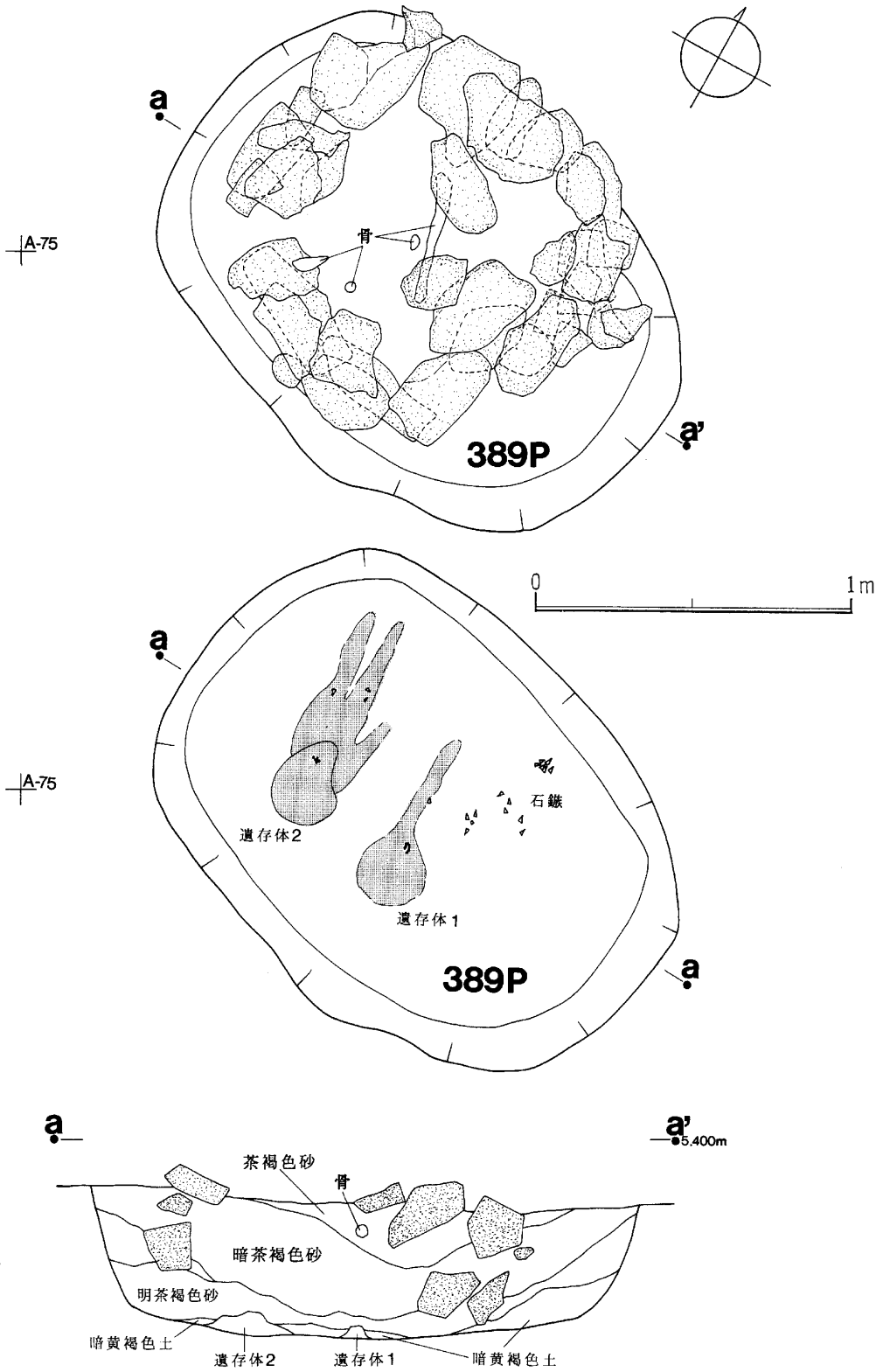
遺 物 (第241図-18・19, 第242図-6～21, 図版55-2～17)

第241図-18は続縄文後北C₁式。19は突瘤文下に突起が付される。宇津内IIa式。

石器は床面から第242図-6～19の無茎石鏃が出土。埋土出土の20は両面加工ナイフ。21は削器。すべて黒曜石製。

小 括

詳細な時期は不明であるが、長軸面に反して短軸面に2体を合葬する例は平成12年に調査した続縄文後北C₁式の1351号土壙墓と同じである。1351号土壙墓は配石こそ持たないものの南頭位であり本土壙墓も後北C₁式の可能性がある。(武田 修)



第243図 ピット389平面図

ピ ッ ト 390

遺 構 (第239図)

本ピットはG'75グリッドに位置する。規模は長軸約0.63m、短軸約0.55mの楕円形を呈する。壁は床面から丸みをもって立ち上がり、高さは約20cmである。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 391

遺 構 (第244図)

本ピットはB'71グリッドに位置する擦文期の42b号竪穴の床面精査中に検出した。規模は長軸約1.37m、短軸約1.17mの楕円形を呈する。壁は北西壁側がやや緩く立ち上がるものの他の各壁は概ね垂直に立ち上がる。高さは42b号竪穴の床面から約23cmである。床面には遺存体である粘性を有した暗赤褐色土が認められる。南壁際には頭部の盛り上がり確認され、移植ゴテで削ると頭骸骨の輪郭が確認され、歯骨も検出された。頭骸部の直径は約18cmである。また、頭部の北東側には大腿部と思われる2本の腐食した黄褐色の骨を確認した。遺存体にはやや淡い色調のベンガラが直径約28～22cmの範囲に散布され、宇津内IIb式の完形品が横倒しの状態で出土。近接した床面には濃いベンガラが直径約10cmの範囲に散布されている。

床面には直径約5～6cm、深さ約6～13cmの4本の小柱穴があり、このうち3本は壁に沿って巡る周溝で連結される。周溝の深さは約5cmを測る。東壁では確認できなかった。

遺 物 (第245図-1, 第242図-22～24, 図版55-18～20)

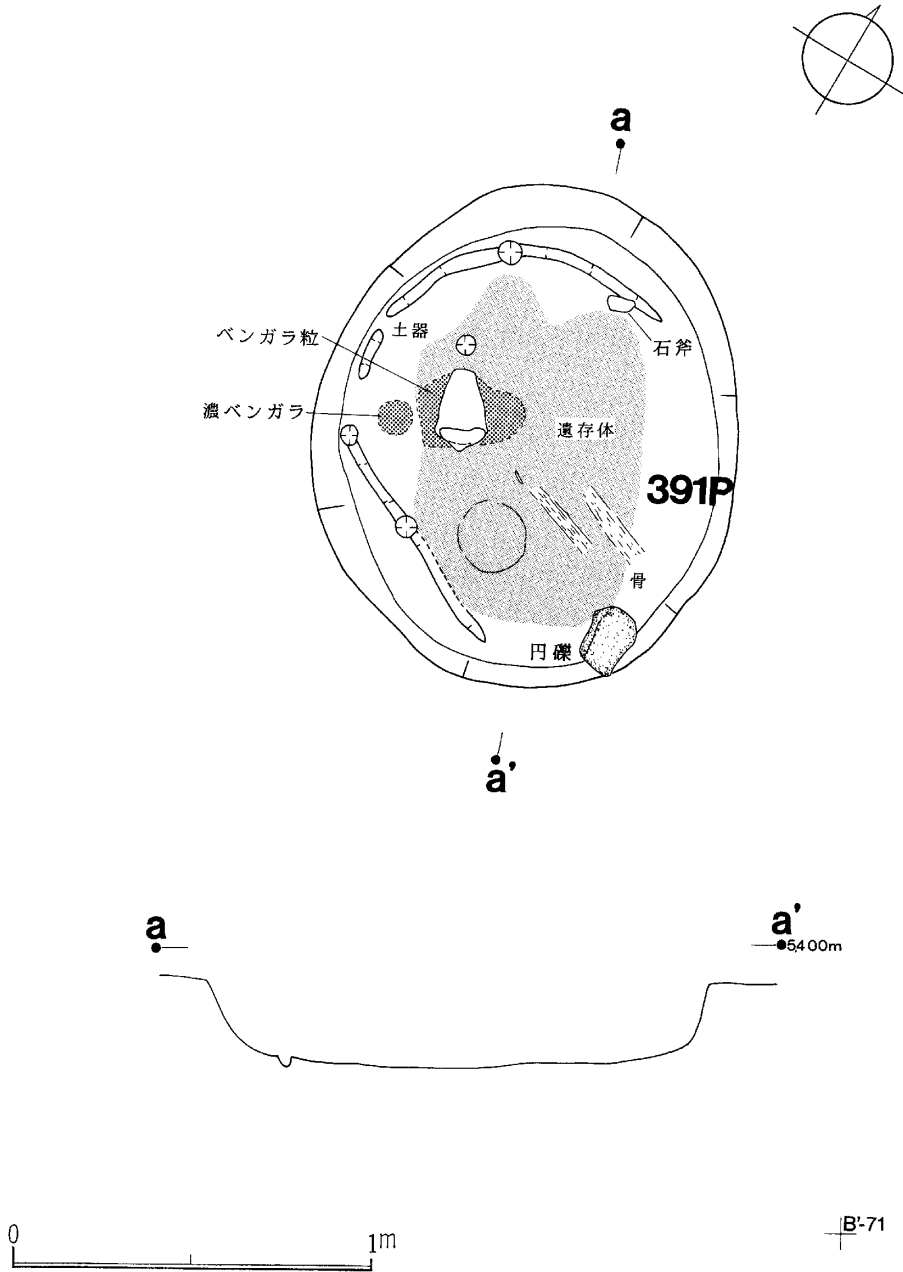
第245図-1は口径11.5cm、器高19cmの中型土器。2個の吊り耳と小突起の下部には同心円文が施される。器面には煤が付着した、宇津内IIb式。

石器の第242図-22・23は床面出土。22・23は黒曜石製の削器。24は片刃磨製石斧。柄部、左側縁部が敲打される。緑色泥岩製。

小 括

本ピットは続縄文字津内IIb式の土壙墓。南頭位の屈葬である。床面の小柱穴は周溝と連結する。ピットでは炭化した板材も検出されており、周溝には板材か半割材が巡らされていた可能性がある。全体規模の割りに遺存体の西側のスペースが広く、2体合葬の可能性もある。

(武田 修)



第244図 ピット391平面図

ピ ッ ト 392

遺 構 (第69図)

本ピットはB73・74・75, C73・74・75グリッドに位置する58a号竪穴の南側に位置する。壙上部に10～20cmの角礫がある。規模は直径約0.60mの小円形を呈し、壁高は確認面から約25cmを測る。

58a号より新しい時期のものであるが、詳細は不明である。

遺 物 (第245図-2)

第245図-2は胎土に繊維を含むトコロ六類。 (武田 修)

ピ ッ ト 393

遺 構 (第230図)

本ピットはB'71・72グリッドに位置する。規模は長軸約1.07m, 短軸約0.70mの楕円形を呈し、長軸面を東-西にもつ。壁高はほぼ垂直に立ち上がり、確認面から約35cmを測る。長軸面に沿って粘性のある暗赤褐色土を呈した遺存体があり、西側に歯骨も検出された。床面中央部は孤状を呈する。小柱穴は合い対して北壁3本, 南壁3本ある。いずれも直径約4～5cm, 深さ約5～9cmである。壙上部の北壁側に直径約24cmの角礫1点が見られる。

小 括

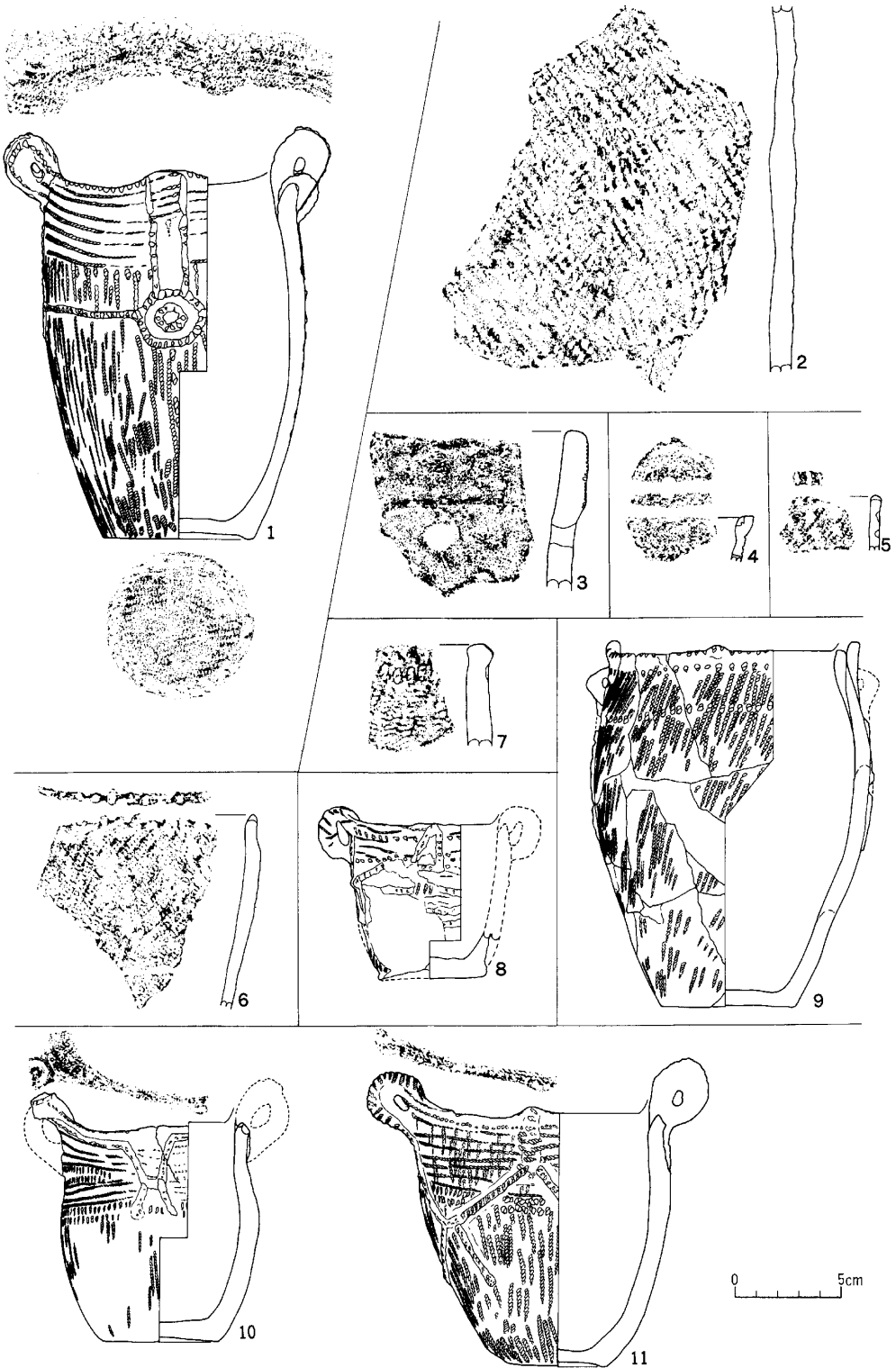
出土遺物が無いため詳細な時期は不明であるが、長軸方向、床面に小柱穴をもつ点から宇津内IIa式と判断される。 (武田 修)

ピ ッ ト 393 a

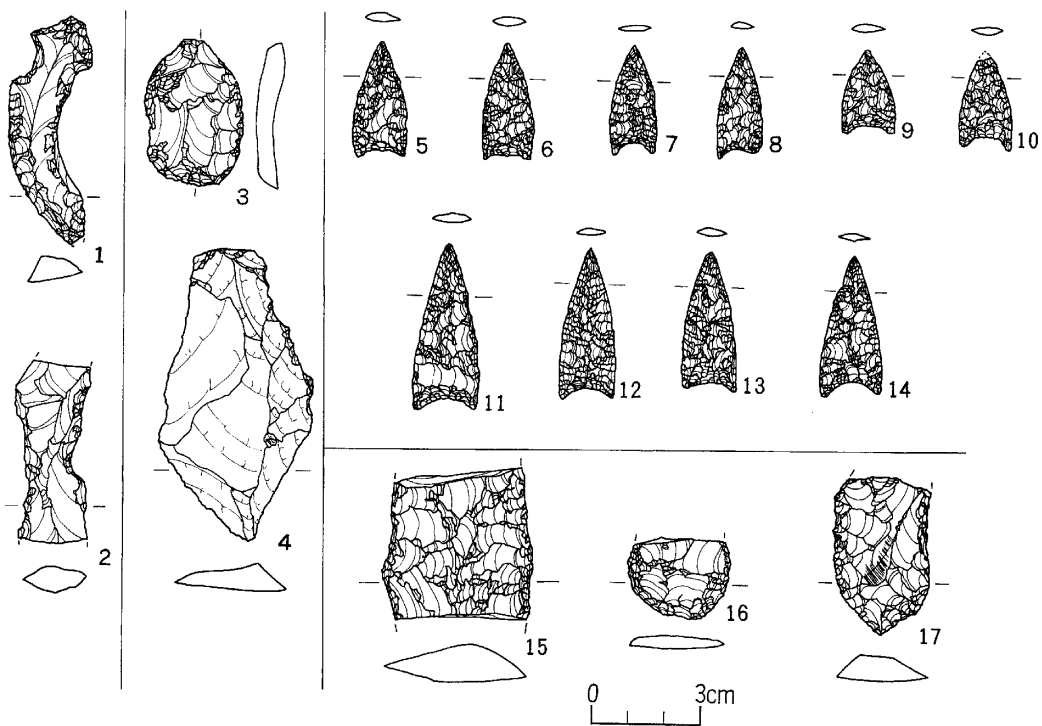
遺 構 (第230図)

本ピットはB'72グリッドに位置する。規模は直径約0.70mの不整形円形を呈する。壁高は確認面から3cmを測る。ピット上部は平成4年の増水で削られている。暗茶褐色砂で遺存体の痕跡と思われる。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。 (武田 修)



第245図 ビット391床面(1), 392埋土(2), 394埋土(3), 396埋土(4), 398埋土(5), 400遺体上(6), 401埋土(7), 404遺体上(8), 404a遺体上(9), 405床面(10・11)出土土器



第246図 ピット394埋土 (1・2), 397埋土 (3・4), 400遺体上 (5~14), 401埋土 (15~17) 出土石器

ピ ッ ト 394

遺 構 (第248図)

本ピットは83号竖穴の床面を切って構築されている。規模は長軸約0.92m, 短軸約0.50mの楕円形を呈する。深さは83号竖穴の床面から約10cmを測る。

遺 物 (第245図-3, 第246図-1・2)

第245図-3は角形の口唇部をもち、幅広の無文帯に櫛目文を施す本遺跡の第Ⅷ層からまともに出土している平底押形文に伴う櫛目文土器である。

石器は第246図-1・2がある。1は孤状の縦長剥片を素材としたつまみ付きナイフ。2は両側縁部に粗い加工を施し孤状の刃部とした削器。2点とも黒曜石製。 (武田 修)

ピット 395

遺構 (第248図)

本ピットはA80グリッドに位置する。規模は長軸約0.93m, 短軸約0.80mの楕円形を呈する。壁高は浅く確認面から約12cmである。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。(武田 修)

ピット 396

遺構 (第248図)

本ピットはA80グリッドに位置する。規模は長軸約1.23m, 短軸約0.98mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約20cmである。

詳細な時期は不明である。

遺物 (第245図-4)

第245図-4は口唇部が剥落しているため定かでないが、内側も厚味があり小突起があったと思われる。2条の縄線文下部に小孔がある。続縄文初頭であろう。(武田 修)

ピット 397

遺構 (第217図)

本ピットはC80グリッドに位置する。規模は長軸約0.86m, 短軸約0.76mの楕円形である。東壁側から中央部にかけて2個の角礫と1個の円礫が上部に配置される。壁高は確認面から約18cmである。

詳細な時期は不明である。

遺物 (第246図-3・4)

第246図-3は黒曜石製の搔器。4は玄武岩製の削器。(武田 修)

ピット 398

遺構 (第248図)

本ピットはA80グリッドに位置する。規模は長軸約1.08m, 短軸約0.86mの楕円形を呈する。東壁側が垂直に立ち上がるのに対し、西壁側はやや緩やかである。高さは確認面から約23cmである。

詳細な時期は不明である。

遺物 (第245図-5)

第245図-5は縄端圧痕が施される。縄文晩期中葉であろう。

(武田 修)

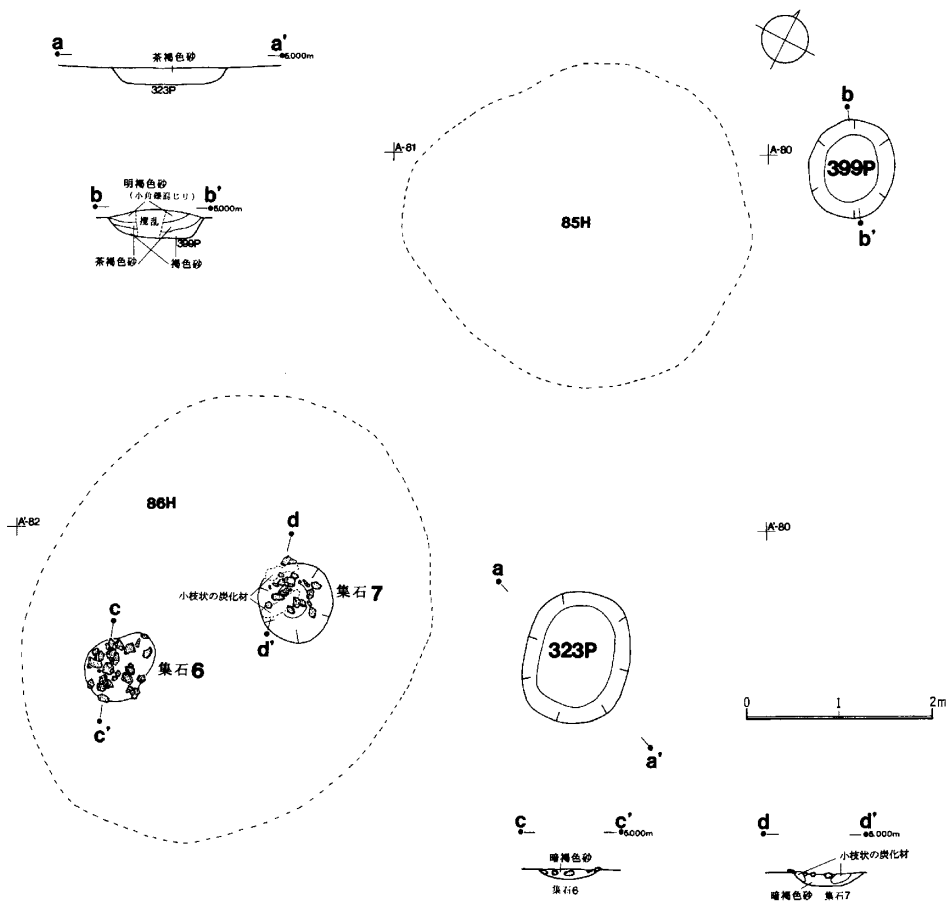
ピット 399

遺構 (第247図)

本ピットはA79, A'79グリッドに位置する。規模は長軸約1.04m, 短軸約0.91mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約30cmを測る。

遺物は出土しておらず時期は不明である。

(武田 修)



第247図 ピット323, 399, 集石6, 7平面図

ピ ッ ト 400

遺 構 (第248図)

本ピットはA78・79, B78・79グリッドにまたがって位置する83号竪穴の北西側に位置する。83号竪穴に南側を切られているため正確な規模は不明であるが、楕円形を呈すると思われる。短軸は約0.86mを測り、黄褐色の遺存体が薄く認められた。上部から第246図-5~14の石鏃が出土。壁高は確認面から約18cmである。

遺 物 (第245図-6, 第246図-5~14, 図版56-1~10)

第245図-6は口唇部に刻みをもつ。縄文晩期前葉の土器では内側に斜め方向から突き刺した突瘤文があるが、この土器は突瘤文は無いが胎土、口唇部の刻み、縄文など類似する。

第246図-5~14は遺存体の上部から出土した無茎石鏃。黒曜石製 (武田 修)

ピ ッ ト 401

遺 構 (第250図)

本ピットはA77, 78グリッドに位置する。第III層の茶褐色砂層を切り込んで構築されており、壙上部の暗褐色砂層には4~5cmの小角礫、円礫が混入する。黒色砂層を挟んだ埋土の暗茶褐色砂層の床面近くには小型のもので6~8cm、大型のもので約20cm前後の角礫があり第245図-7に示す土器の他に25点の破片が出土している。いずれも続縄文期のものである。規模は直径約1.02mの円形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。高さは確認面から約48cmである。

遺 物 (第245図-7, 第246図-15~17)

第245図-7は厚手の土器で、口縁直下に縄端圧痕文が施される。続縄文初頭であろう。第246図-15は両面加工ナイフ片。16は円形搔器。17は片面加工ナイフ。

小 括

床面に遺存体の痕跡は確認できなかった。土壙墓以外の遺構であろう。時期は続縄文初頭の可能性が高い。 (武田 修)

ピ ッ ト 402

遺 構 (第248図)

本ピットはA78, A78グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約1.28m、短軸約0.96mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約21cmである。長軸面を北-南方向にもつ。東壁隅の上部から凹石が出土。形態から土壙墓と判断されるが詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 403

遺 構 (第248図)

本ピットはA78・79, B78・79グリッドに位置する83号竪穴の床面を切り込んで構築されている。規模は長軸約0.74m, 短軸約0.50mの小楕円形を呈する。壙上部に直径約28cmの砂岩製のくぼみ石がある。壁高は83号竪穴の床面から約12cmを測る。

小 括

83号竪穴より新しいが、詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 404

遺 構 (第249図)

本ピットはA'77・78, A77・78グリッドに位置する。規模は長軸約2m, 短軸約1.50mの楕円形を呈するが、両長軸端部はすばまる傾向である。長軸面は南-北にもつ。壁高は確認面から約30cmを測る。中央部から南寄りには暗茶褐色を呈した遺存体がある。遺存体の上部には部分的にベンガラが散布されている。南西壁近くの小さな突出部が頭部である。

北壁から西壁にかけて直径約3～5cm, 深さ約8～10cmの小柱穴がある。

遺 物 (第245図-8, 第252図-1～6, 図版56-11～17)

土器は第245図-8が遺存体の上部から出土した口径約8cm, 器高約8cmの小型土器。2個の吊り耳をもつ。器面の剥落が著しいため全体のモチーフは不明であるが、擬縄貼付文が底部近くまで及んでいる。口縁部は縄線文, 縄端圧跡文が施される。

石器は第252図-1～4が遺存体の上部から出土。1～3は無茎石鏃。4は有茎石鏃。5・6は埋土出土の無茎石鏃。

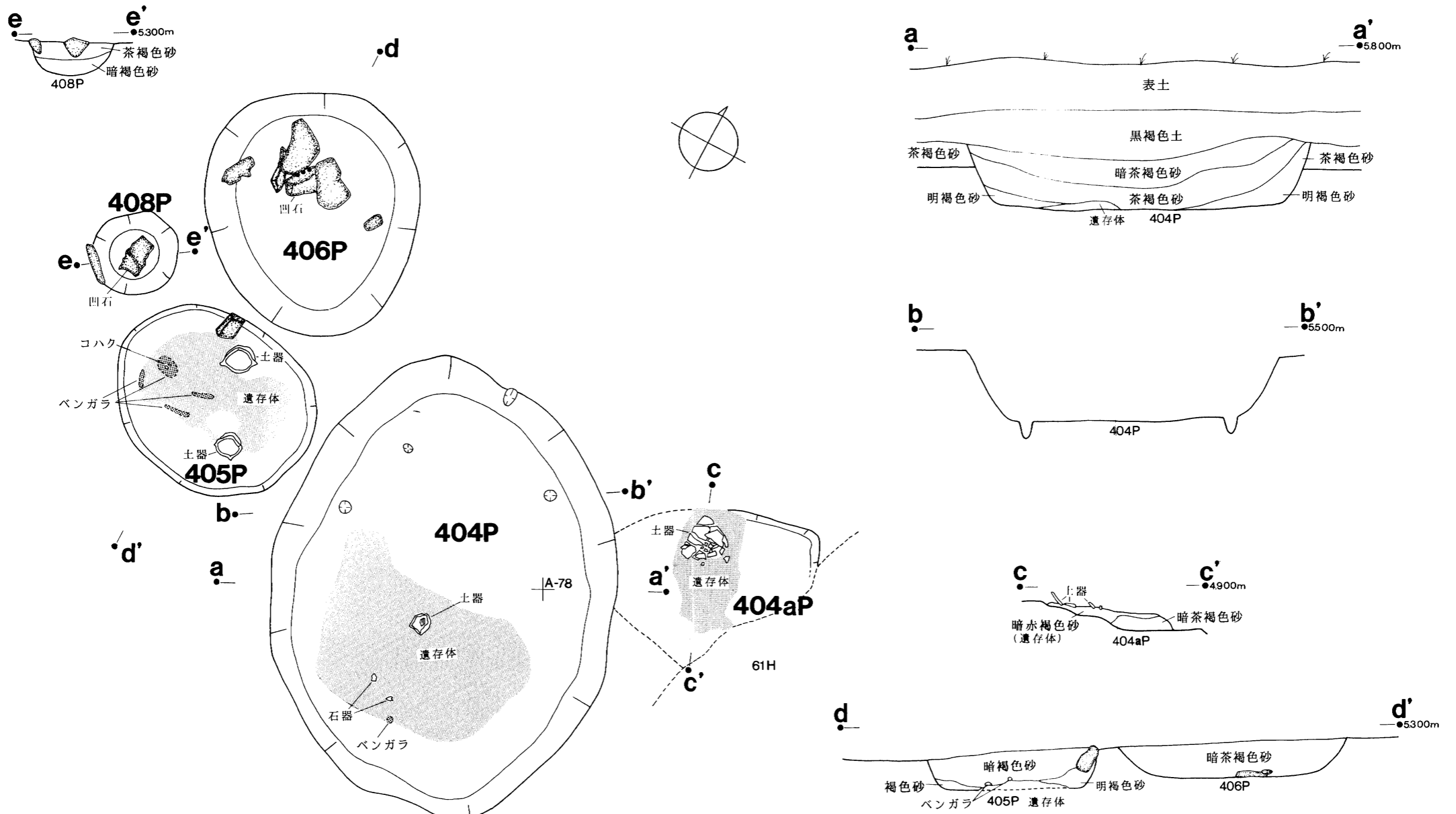
小 括

本ピットは第245図-8の土器に示される通り、続縄文字津内IIb式の土壙墓である。頭位は南西方向である。 (武田 修)

ピ ッ ト 404 a

遺 構 (第249図)

本ピットはA77, A'77グリッドに位置する。上部からの掘り込み面を検出できず、確認できたのは遺存体とその上部にある土器が出土しているからであり、上部は遺憾にも破壊してしまった。西壁の一部はピット404と僅かに重複し、東壁は61号竪穴に切られているため全体の形態・規模は不明であるが、東西方向に長軸面をもつ楕円形であろう。遺存体は暗赤褐色土を呈



第249図 ピット404, 404a, 405, 406, 408平面図

する。

遺物 (第245図-9, 第252図-7, 図版56-18)

第245図-9は遺体上から出土した。口径約11cm, 器高約17cmの中型土器。口唇部に2個1対の大突起と2個1対の小突起をもつ。大突起下部の吊り耳からは1本の擬繩隆帯が垂下する。口縁下部に2条の繩端圧痕文が横走する。統繩文初頭興津式に比定せれる。

石器は第252図-7が遺体上から出土した両面加工ナイフ。実測図裏面中央部の剝離面には縦位の使用痕が観察され、鈍い光沢が見られる。

小括

本ピットは宇津内IIb式のピット404と重複する。明確に新旧関係を掴むことはできなかったが興津式に比定される本ピットが古く位置づけられる。(武田 修)

ピット 405

遺構 (第249図, 図版56-21)

本ピットはA78グリッド、ピット404の西側約5cmに位置する。規模は長軸約0.90m, 短軸約0.75mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約17cmを測る。長軸面を東-西にもつ。埋土を約12cm掘り下げた段階で粘性のある暗赤褐色土の遺存体が現われた。遺存体の上部には幅約2~7cm, 長さ約8~10cmのベンガラが4箇所にわたって散布されている。第252図-8・9に示す2点の琥珀玉はベンガラの中から出土。2点の土器は相対峙する様に正立の状態出土。

遺物 (第245図-10・11, 第252図-8・9, 図版56-19・20)

第245図-10は口径約12cm, 器高約12.5cm。11は口径約16cm, 器高約15cm。いずれも吊り耳をもつ小型土器である。文様は繩線文と繩端圧痕文, 擬繩貼付文で構成される。10の擬繩貼付文は小突起の下部で「H」字状である。11は小突起と吊り耳から「×」字状に連結する。2点とも宇津内IIb式に比定できる。

小括

本ピットは統繩文字津内IIb式の土壙墓である。頭位を西方向に向ける可能性が高い。

(武田 修)

ピ ッ ト 406

遺 構 (第249図)

ピット405の北側約4cmに位置する。東壁側がややすぼまる直径約1mの不整円形を呈する。壁高は確認面から約16cmを測る。壙上部には直径約20～22cm、10～15cmの角礫に混じって2点の凹石が出土。床面に遺存体の痕跡は認められない。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。(武田 修)

ピ ッ ト 407

遺 構 (第250図)

本ピットはA77グリッドに位置する。規模は直径約0.70mの円形を呈する。床面は小さく、壙口部は広い「V」字状の立ち上がりをもつ。壁高は確認面から約42cmを測る。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第251図-1)

1は揚げ底の浅鉢。縄文晩期中葉であろう。(武田 修)

ピ ッ ト 407 a

遺 構 (第250図)

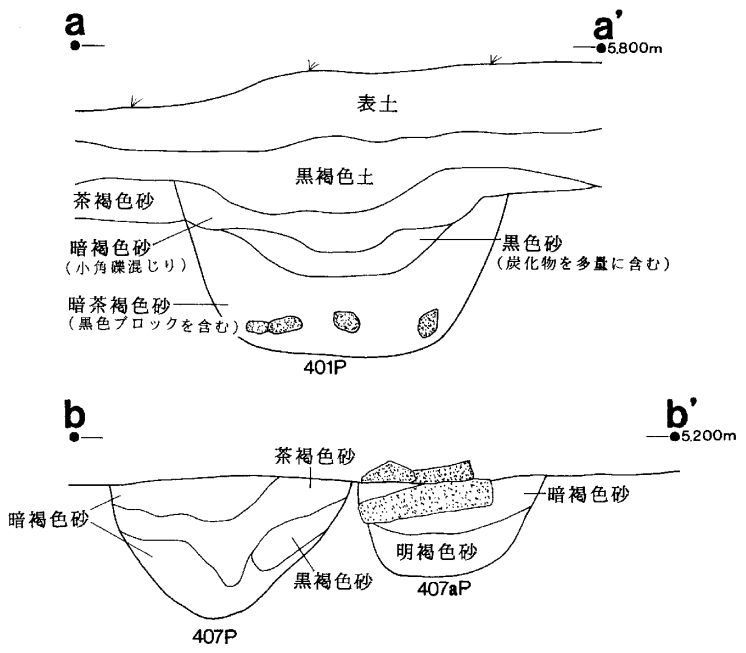
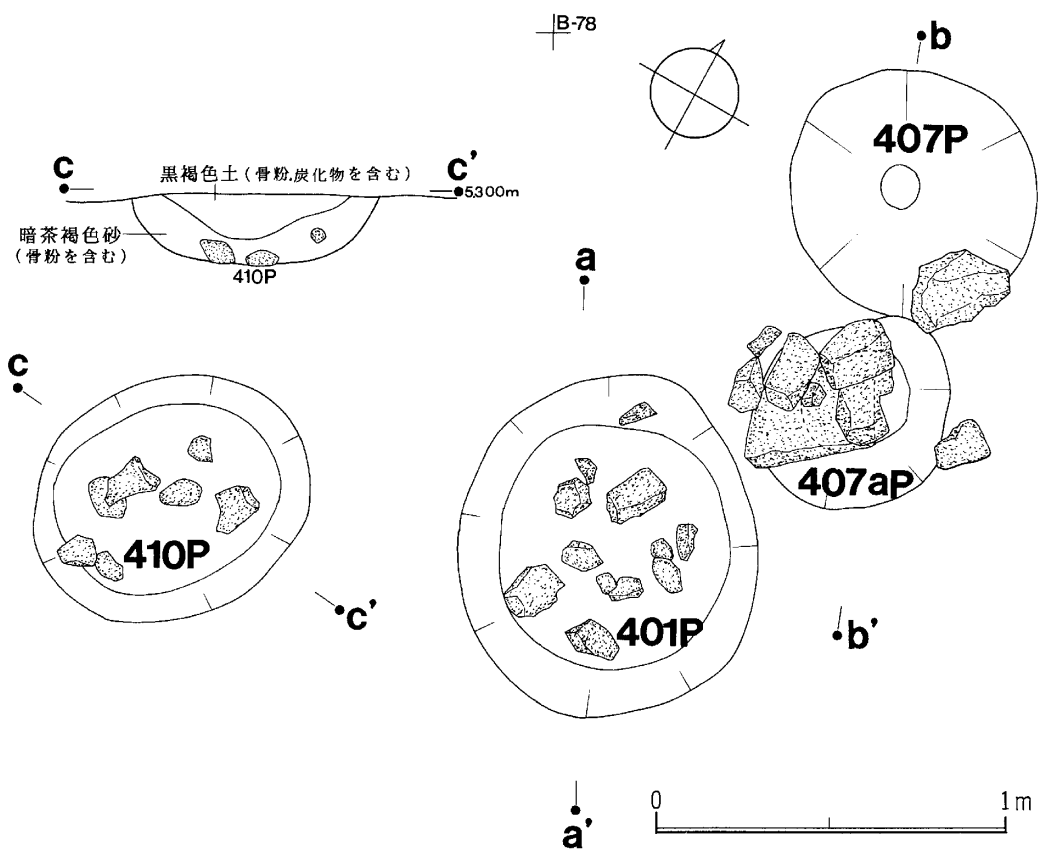
本ピットはピット407と東壁で僅かに接する。壙上部に直径約20cm程の角礫があり、これを取り除くと直径約40cmの角礫がピットを覆う様な状態で出土した。規模は直径約0.50mの不整円形を呈し、壁高は確認面から約30cmを測る。

詳細な時期は不明である。(武田 修)

ピ ッ ト 408

遺 構 (第249図)

本ピットはA78グリッドに位置する。規模は直径約35cm、深さ約14cmの小円形を呈する。中央から約20cm程の凹石が出土するものの詳細な時期は不明である。(武田 修)



第250図 ピット401, 407, 407a, 410平面図

ピ ッ ト 409

遺 構 (第248図)

本ピットはA78グリッドに位置する。続縄文期の409a号土壙墓の北西壁を切って構築されているもので、規模は長軸約0.87m、短軸約0.60mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約32cmである。

小 括

続縄文期字津内IIa式の土壙墓であるピット409a号を切っているためそれより新しいことは確実であるが、詳細な時期は不明である。(武田 修)

ピ ッ ト 409 a

遺 構 (第248図, 図版57-1)

本ピットはA78グリッドに位置する。規模は長軸約1.55m、短軸約1.05mの不整楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約38cmを測る。床面には暗赤褐色土の遺存体が見られるが、一部はピット409c号が切っている。頭部は東壁隅にあり、近接して第251図-2に示す土器が横倒しの状態で出土。

遺 物 (第251図-2, 第252図-10・11, 図版57-2)

第251図-2は口径約13cm、器高約14.5cmの中型土器。連続した突瘤文の下部には7条の縄線文が施され、ボタン状貼付文が上下2個1対となり1個1対の貼付文には小孔がある。字津内IIa式に比定できる。

石器は第252図-10・11が削器。11は主要剥離面の左側縁部に加工痕がある。2点とも黒曜石製。

小 括

比較的規模の大きな土壙墓である。頭部近くから出土した土器は続縄文期字津内IIa式である。頭位を東方向にもつ。(武田 修)

ピ ッ ト 409 b

遺 構 (第248図)

ピット409aの南西側にあるが大半を切られているため正確な規模は不明であるが、おそらく楕円形を呈していたのであろう。壁高は皿状に立ち上がり、高さは確認面から約30cmである。

字津内IIa式のピット409aより古いことは確実であるが、詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピット 410

遺構 (第250図)

A78グリッドに位置する。規模は長軸約0.80m、短軸約0.66mの楕円形を呈する。床面から壁にかけて丸みをもって立ち上がるもので、高さは確認面から約22cmを測る。床面からは7点の角礫が出土。埋土の黒褐色土、暗茶褐色砂は粘性があり骨粉を含むことと、壁の立ち上がりから判断して土壙墓とは異なる性格の遺構と思われる。

遺物 (第251図-3・4, 第252図-12・13)

第251図-3は床面出土の続縄文字津内IIa式。縄線文の下部に円形刺突を2段にわたって施す。4は後北C₁式。

第252図-12は床面出土のたたき石。13は埋土出土の両面加工ナイフ片。 (武田 修)

ピット 411

遺構 (第217図, 図版57-3)

C77, 78グリッドに位置する。掘り込み面の確認ができなかったため第III層の茶褐色砂層を約15cm下げた段階で検出したものであり、本来は約30cm以上の壁高をもっていたのであろう。北西壁の大半は70号竪穴によって切られているものの、規模は長軸約1.15m、短軸約0.60mの楕円形を呈する。中央部にある暗赤褐色土の遺存体の上部から琥珀の丸玉を中心に平玉が3~4連出土。丸玉17点、平玉341点に及ぶ。

小括

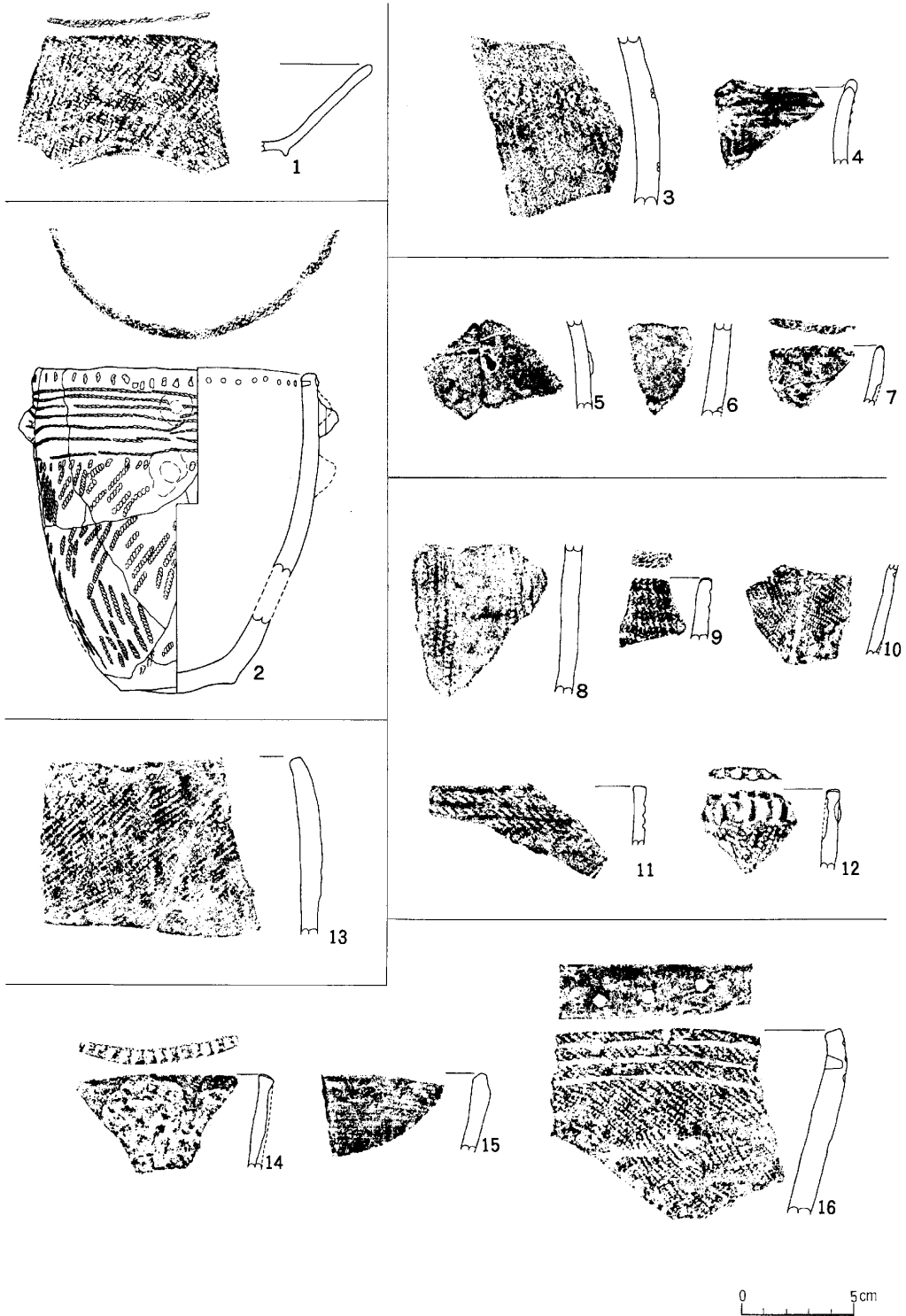
詳細な時期は不明であるが、土壙墓の平面形態や琥珀玉を副葬することから続縄文字津内IIa式の可能性が高い。 (武田 修)

ピット 412

遺構 (第253図)

D79グリッドに位置する。規模は長軸約1.60m、短軸約1.21mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約50cmである。長軸面を東-西方向にもつ。遺存体は糊状の粘性のある暗褐色土を呈し、ベンガラが粒子状に散布される。頭部は膨らんだ輪郭を残す。遺存体の直上部には直径約3~14cmの拳大ほどの円礫約44点が頭部から胸部にかけて散布され、同一レベルから各種の石器が出土。

南壁際の床面には直径約4cm、深さ約9cmの小柱穴がある。



第251図 ビット407埋土(1), 409a床面(2), 410床面(3)・埋土(4), 415埋土(5~7), 416埋土(8~12), 417埋土(13), 419埋土(14~16)出土土器

遺 物 (第252図-14~25, 図版58-1~12)

第252図-14~21は無茎石鏃。ほぼまとまって出土しているが、先端部の方向は一様でない。22は石槍。23は両面加工ナイフ。24は搔器。25は片刃磨製石斧。両側縁部と柄部は敲打調整される。14~24は黒曜石製。25は泥岩製。

小 括

遺存体の上部に円礫を散布する特徴をもつ。東頭位の屈葬であろう。詳細な時期は不明であるが土壙墓の形態、床面に小柱穴をもつ特徴から続縄文初頭と思われる。(武田 修)

ピ ッ ト 412 a

遺 構 (第253図)

本ピットはピット412に東側を切られる。規模は長軸推定0.80m, 短軸0.60mの小楕円形を呈すると思われる。高さは確認面から約20cmを測る。

詳細な時期は不明である。(武田 修)

ピ ッ ト 413

遺 構 (第217図)

D79グリッドに位置する。規模は直径約0.69mの円形を呈し、断面は「V」字状を呈する。高さは確認面から約38cmを測る。

詳細な時期は不明である。(武田 修)

ピ ッ ト 414

遺 構 (第217図)

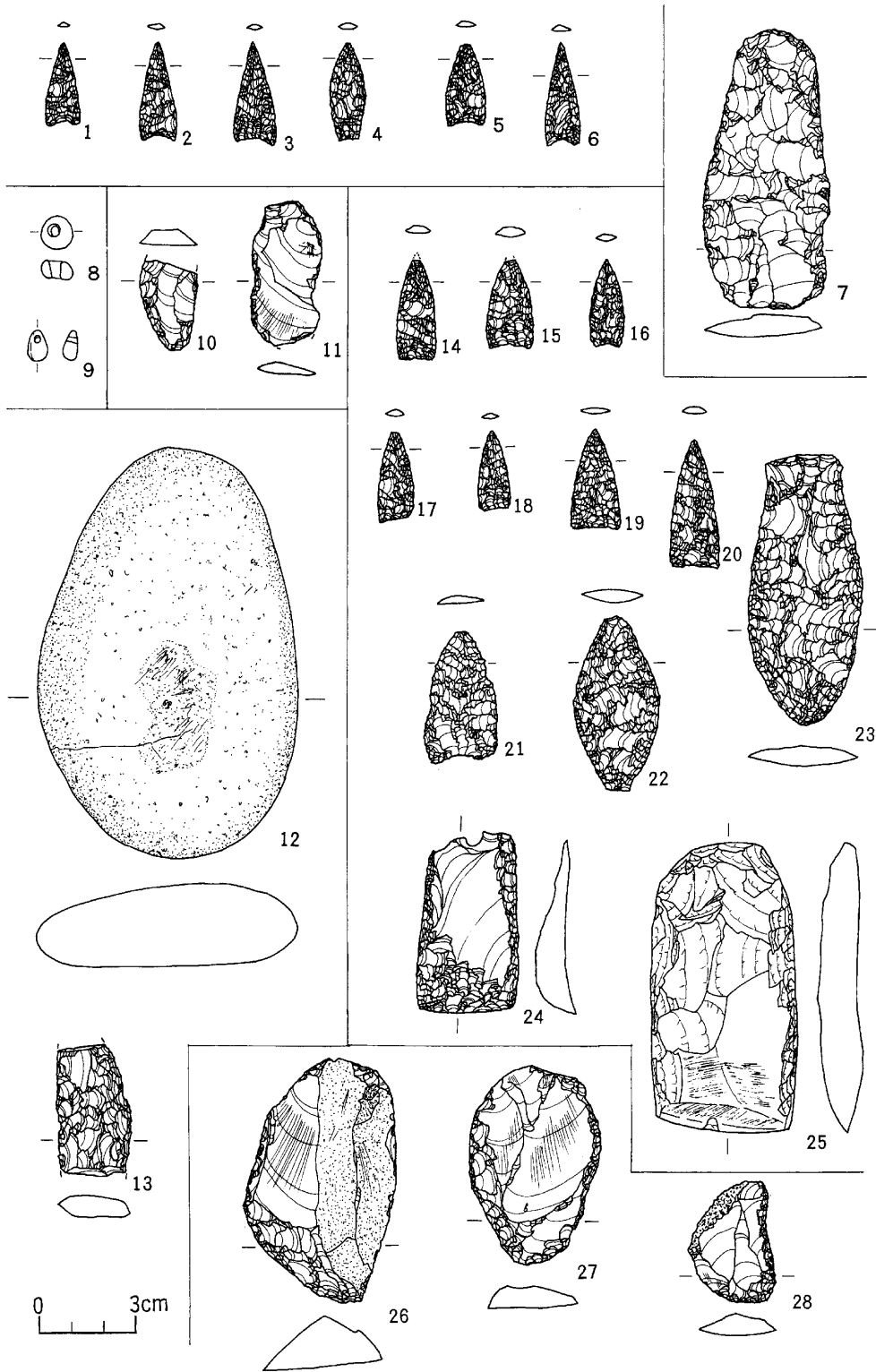
D79グリッドに位置する。規模は長軸約1.18m, 短軸0.70mの楕円形を呈し、壁は皿状に立ち上がる。高さは確認面から約20cmを測る。

詳細な時期は不明である。(武田 修)

ピ ッ ト 415

遺 構 (第217図)

E79グリッドに位置する。規模は直径約0.52mの円形を呈し、壁は垂直に立ち上がる。高さは確認面から約40cmを測る。



第252図 ビット404遺体上 (1～4)・埋土 (5・6), 404a遺体上 (7), 405ベンガラ上 (8・9), 409a埋土 (10・11), 410床面 (12)・埋土 (13), 412埋土 (14～25), 416埋土 (26～28) 出土石器

詳細な時期は不明である。

遺物 (第251図-5~7)

第251図-5はオホーツク文化期のソーメン状貼付文であり、6はその胴部片であろう。7は口唇部に刻みが施された後北C₂・D式。 (武田 修)

ピ ッ ト 416

遺構 (第275図)

本ピットはG'77グリッドで検出した。規模は長軸2.05m、短軸1.36mの楕円形を呈し、壁高は確認面から40cmを測る。埋土上層の黒色土層には焼土と炭化物を含んでおり、壙底直上から礫が出土している。壙底には粘性をもった黒色砂が認められる。

遺物 (第251図-8~12, 第252図-26~28)

遺物は埋土からの出土である。第251図-8は後北式。9~12は縄文晩期である。石器は第252図-26~28の削器が出土している。いずれも黒曜石製。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 417

遺構 (第275図)

本ピットはG'76グリッドで検出した。規模は長軸1.36m、短軸1.24mの円形で、壁高は確認面から16cmを測る。壁は緩く立ち上がり、浅い皿状を呈する。壙底から第251図-13の土器が出土していることから本ピットがこの時期のものであるとも考えられるが、出土したのが1点のみであるため断定はできない。

遺物 (第251図-13)

壙底から出土した土器で、縄文晩期と思われる。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 418

遺構 (第275図)

本ピットは62号竪穴の北側のG'76グリッドで検出した。規模は長軸0.60m、短軸0.54mの円形を呈する。断面は摺鉢状を呈し、壁高は確認面から45cmを測る。埋土中には多少の炭化物を含む。

遺物の出土が無く時期は不明である。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 419

遺 構 (第239図)

本ピットはG'72, 73グリッドで検出した。規模は長軸1.30m, 短軸1.08mの円形を呈し, 壁高は確認面から33cmを測る。壙底の一部には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められ, 埋土には多少の骨片を含む。

遺 物 (第251図-14~16, 第255図-1~3, 図版58-13~15)

埋土から第251図-14~16の土器が出土している。14・15は縄文晩期。16は縄文後期堂林式。石器は第255図-1~3が埋土から出土している。1は片面加工のナイフ。2は削器。どちらも黒曜石製。3は青色泥岩製の片刃磨製石斧。

小 括

本ピットは壙底の一部に遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂があることから土壙墓と思われるが時期は不明である。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 420

遺 構 (第239図)

本ピットはG'73, 74グリッドで検出した。規模は長軸1.20m, 短軸0.96mの楕円形を呈し, 壁高は確認面から46cmを測る。

遺 物 (第255図-4)

埋土から出土した黒曜石製の両面加工ナイフ。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 421

遺 構 (第274図)

本ピットはF'76, 77グリッドで検出した。規模は長軸1.94m, 短軸1.80mの不整円形を呈し, 壁高は30cmを測る。西壁近くの壙底直上から礫が出土している。

遺 物 (第254図-1~5・第255図-5)

第254図-1~5は埋土出土の土器で1は続縄文宇津内IIb式。2は同初頭。3~5は縄文晩期。第255図-5は黒曜石製の搔器。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 422

遺 構 (第113図)

本ピットはF78グリッドに位置する。規模は直径約0.46mの円形を呈する。壁高は確認面から約15cmを測る。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 423

遺 構 (第78図)

本ピットはB74・75グリッドにまたがって位置する。規模は長軸0.80mの不整円形を呈する。壁高は確認面から約11cmを測る。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第254図-6)

6は内側から突瘤の施された続縄文字津内II a式。 (武田 修)

ピ ッ ト 424

遺 構 (第78図)

本ピットはB74グリッドに位置する。規模は直径約0.42mの小円形を呈する。壁は「V」字状の立ち上がりをもつ。高さは確認面から約28cmを測る。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 425

遺 構 (第110図)

本ピットはB77グリッドにある65a号竪穴の南壁の一部を切って構築されている。第110図の土層セクションラインに沿って掘り下げたところピット425aの立ち上がりを確認した。明らかにピット425aが新しく、本ピットの大部分を切り込んでいるものの規模は直径約1.25mの円形を呈する。壁高は確認面から約35cmを測る。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第254図-7)

第254図-7は内側から突瘤が施され、器面の瘤間に円形刺突がある。宇津内II a式。

(武田 修)

ピット 425 a

遺構 (第110図)

本ピットはピット425を切り込んで構築されている。規模は直径約1.15m, 短軸約0.95mの楕円形を呈する。暗紫赤褐色を呈した粘性のある遺存体は床面全体に広がっている。南壁際の床面には長さ約38cm, 幅約3～8cmのベンガラがピットの長軸面と同じ方向で散布されている。遺存体の西側からは直径約10～18cmの白色粘土塊が5個, 東側には約12cmの白色粘土塊が1個出土した。この白色粘土塊は遺体の縁に置かれたものであろう。

遺物 (第254図-8・9)

第254図-8・9は宇津内II b式。

小括

遺存体があることから土壙墓であることは確実であるが, 詳細な時期は不明である。本遺跡では続縄文各期の土壙墓から白色粘土塊が出土するがいずれも3～5cm程度の小さなものである。本土壙墓は続縄文期と思われるがこれまでにない大きな粘土塊である。続縄文各期を通して粘土塊を持つ土壙墓と持たない土壙墓の意味を考える必要がある。 (武田 修)

ピット 425 b

遺構 (第110図)

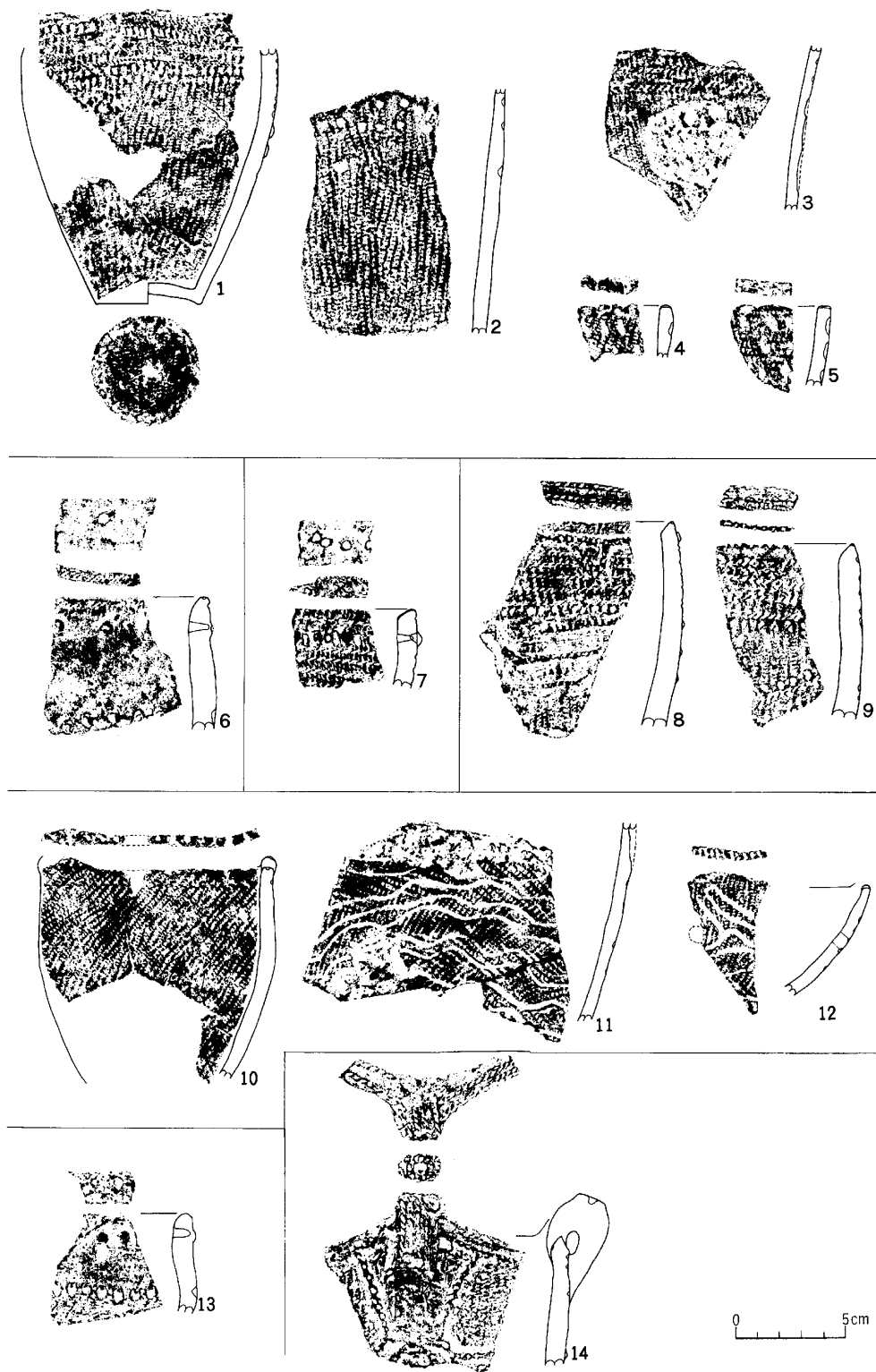
本ピットはピット425の西壁上部を切り込んで構築している。規模は直径約0.50mの円形を呈し, 高さは確認面から約12cmを測る。

詳細な時期は不明である。

遺物 (第254図-10～12, 第255図-6)

第254図-10の口唇部は円形刺突文が連続し, 口縁直下と山形小突起には縄線文が施される。続縄文初頭と思われる。11は直線, 曲線状の沈線文が施される。縄文晩期中葉と思われる。12は小波状の沈線文が数状にわたって施され, 直径0.7cm程の小孔をもった皿状土器。縄文晩期後葉であろう。

第255図-6は遺存体の上部から出土したもので, 原石面の下端部に刃部をもつ削器。黒曜石製である。 (武田 修)



第254図 ピット421埋土 (1~5), 423埋土 (6), 425埋土 (7), 425a埋土 (8・9), 425b埋土 (10~12), 426埋土 (13), 426c埋土 (14) 出土土器

ピ ッ ト 426

遺 構 (第110図)

本ピットは65号竖穴の床面精査中に発見した。規模は長軸約1.30m、短軸約0.88mの楕円形を呈し、長軸面を東西にもつ。壁高は65号竖穴の床面から約23cmを測る。床面中央部には粘性のある暗赤褐色土を呈した遺存体がある。長さ約70cm、幅約28cmの遺存体であり、頭部の膨らみも確認できた。西頭位である。

遺 物 (第254図-13)

第254図-13は幅広の無文帯に内側からの突瘤文が施され、胴部とは円形刺突文で区画される。続縄文字津内II a 式よりやや古手に位置づけられると思われる。

小 括

副葬品が無いため詳細な時期は不明であるが、65号竖穴より新しいと思われる。頭位の方向、形態から推測すると続縄文初頭、中でも宇津内II a 式の可能性がある。(武田 修)

ピ ッ ト 426 a

遺 構 (第110図)

本ピットはピット426の北側に位置する。南壁側がピット426に切られているため正確な形態は不明であるが、残存部から判断して長軸約1m、短軸約0.80mの楕円形を呈すると思われる。壁高は65号竖穴の床面から約5cmを測る。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピ ッ ト 426 b

遺 構 (第110図)

本ピットは65号竖穴の西壁隅を切って構築されている。東壁側をピット426 a に切られるものの長軸約0.74m、短軸約0.57mの楕円形を呈する。壁高は65号竖穴の床面から約13cmを測る。

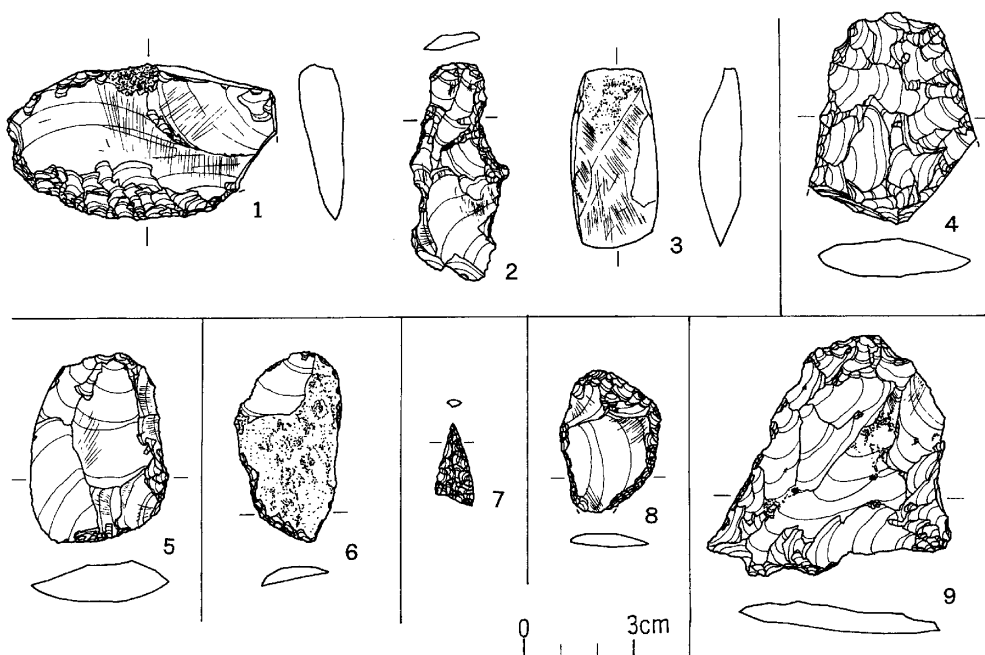
詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピ ッ ト 426 c

遺 構 (第110図)

本ピットはピット426の南側に位置する。北壁側がピット426に切られているため正確な形態は不明であるが、残存部から判断して長軸約1.40m、短軸約0.70mの長楕円形と思われる。壁高



第255図 ピット419埋土（1～3）、420埋土（4）、421埋土（5）、425b埋土（6）、427埋土（7）、429埋土（8）、430埋土（9）出土石器

は確認面から約50cmを測る。

詳細な時期は不明である。

遺物（第254図-14）

第254図-14は吊り耳のもった宇津内II b式。

（武田 修）

ピット 427

遺構（第110図）

本ピットはB76・77グリッドにある65竖穴の北西壁の一部を切って構築されている。第II層の茶褐色砂層の上面に大小の角礫と直径約40cmに及ぶ砥石1点がまとまって出土した。角礫を取り除き円形の落ち込みを確認した。規模は直径約1.30mの円形を呈する。床面から壁の立ち上がりは丸みをもつ。高さは確認面から約55cmを測る。埋土の中位層にあたる茶褐色砂層には約5mmから1cm程度の炭化粒が多く含まれ、火熱を受けた拳大の円礫も混入する。

遺物（第256図-1～5、第255図-7）

第256図-1～3は続縄文字津内II b式。4はボタン状の貼付文が見られる。宇津内II a式。

5は3条の縄線文が施される。縄文晩期中葉であろう。

石器は第255図-7が黒曜石製の無茎石鏃。

小 括

遺存体は確認できなかった。時期も不明である。

(武田 修)

ピ ッ ト 428

遺 構 (第110図)

本ピットはB76グリッドに位置する。規模は直径約0.75mの不整形を呈する。壁は床面から丸みをもって立ち上がる。高さは確認面から約20cmを測る。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピ ッ ト 429

遺 構 (第110図)

本ピットはB76グリッドに位置する。規模は直径約0.68mの円形を呈する。壁は丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約20cmを測る。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第256図-6~9, 第255図-8)

第256図-6~9の4点は統縄文字津内II b式である。

第255図-8は黒曜石製の削器。

(武田 修)

ピ ッ ト 429 a

遺 構 (第110図)

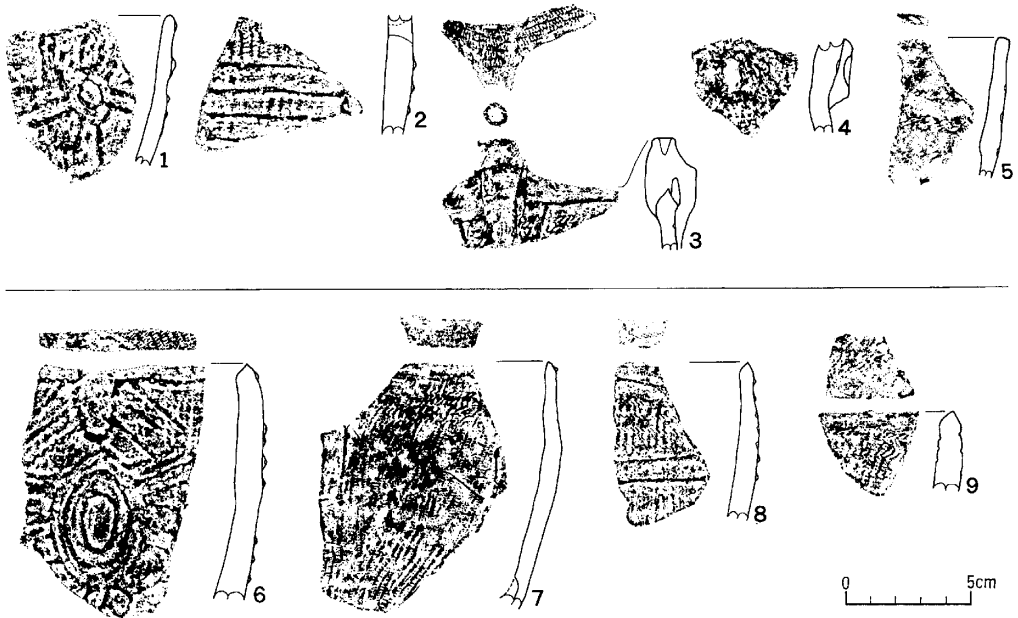
本ピットはピット429に南壁側を切られる。規模は直径約0.40mの小円形を呈する。壁高は確認面から約18cmを測る。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第257図-1~3)

第257図-1は「く」字状に外反した口縁部に貼付文、縄線文と縄端圧痕文が施される。統縄文字津内II a式。2は口唇部と口縁部に縄線文が施される。統縄文初頭であろう。3は縄文晩期幣舞式。

(武田 修)



第256図 ピット427埋土（1～5）、429埋土（6～9）出土土器

ピ ッ ト 430

遺 構（第102図）

本ピットはJ'77・78に位置する擦文期の63号竪穴の床面である。規模は直径約1.37m程の不整形円形を呈する。壁は皿状に緩く立ち上がり、高さは63号竪穴の床面から約18cmを測る。

詳細な時期は不明である。

遺 物（第257図－4，第255図－9）

第257図－4は縄文初頭。

石器は第255図－9の黒曜石製の削器が1点出土。

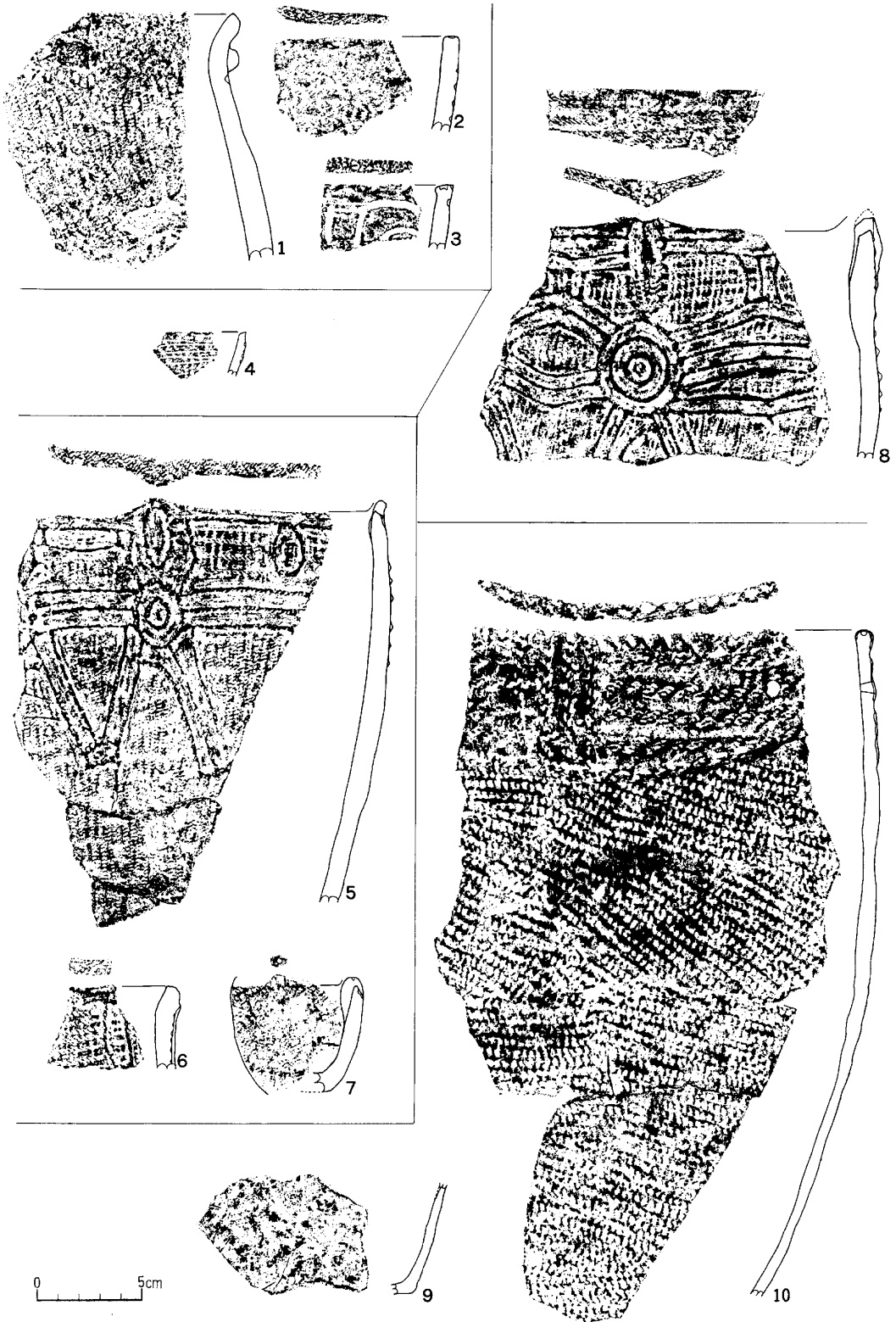
（佐々木 覚）

ピ ッ ト 430 a

遺 構（第102図）

本ピットはピット430の北壁側に位置するが、同ピットに大部分を削られているため、検出できたのは南壁の一部である。形態・規模は不明であるが、壁高は63号竪穴の床面から約14cmを測る。

（佐々木 覚）



第257図 ピット429a埋土(1~3), 430埋土(4), 432埋土(5~7), 433埋土(8), 436a埋土(9・10)出土土器

ピ ッ ト 431

遺 構 (第110図)

本ピットはA76・77, B76・77グリッドに位置する65号竪穴の床面に位置する。上面に5～10cmの角礫が多くあり, 30cmに及ぶ角礫1点が中央に配置される。規模は長軸約0.50m, 短軸約0.40mの小楕円形を呈する。高さは65号の床面から約30cmである。

遺物は出土しておらず時期は不明である。

(武田 修)

ピ ッ ト 432

遺 構 (第110図)

本ピットは65号竪穴の東壁隅の一部を切り込んで構築している。規模は直径約0.95mの不整円形を呈する。壁高は確認面から約23cmを測る。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第257図-5～7, 第258図-1・2)

土器は第257図-5・6が統縄文字津内II b式。7は口縁直下に一条の縄線文を施し, 小突起には細い刺突が加えられている。宇津内系の土器であろう。

石器は第258図-1・2は削器。1の右側縁部はノッチ状の加工がある。2点とも黒曜石製。

(武田 修)

ピ ッ ト 433

遺 構 (第110図)

本ピットはピット432に近接する。65号竪穴の東壁の一部を切り込んで構築している。規模は長軸約1.10m, 短軸約0.90mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約31cmを測る。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第257図)

第257図-8は統縄文字津内II b式。

(武田 修)

ピ ッ ト 434

遺 構 (第110図)

本ピットはA76・77, B76・77グリッドに位置する65号竪穴の床面に位置する。規模は直径約0.70mの不整円形を呈する。高さは確認面から約56cmである。

遺物は出土しておらず時期は不明である。

(武田 修)

ピ ッ ト 434 a

遺 構 (第110図)

本ピットはA76・77, B76・77グリッドに位置する65号竪穴の床面に位置する。規模は長軸約0.90m, 短軸約0.70mの楕円形を呈する。ピット434と南西壁側で僅かに重複するが新旧関係を明らかにできなかった。高さは確認面から約50cmである。

遺物は出土しておらず時期は不明である。

(武田 修)

ピ ッ ト 435

遺 構 (第78図)

本ピットはA74, 75グリッドにまたがって位置する。北壁の一部は60号竪穴と重複するものの、新旧関係は明確にすることはできなかった。規模は直径約0.50mの円形を呈し、壁は皿状で浅い。高さは確認面から約17cmを測る。

(武田 修)

ピ ッ ト 436

遺 構 (第78図)

本ピットはA74グリッドに位置する。規模は直径約0.50mの小円形を呈し、壁高は確認面から約18cmを測る。

遺 物 (第258図-3)

第258図-3はナイフの柄部。玄武岩製である。

ピ ッ ト 436 a

遺 構 (第78図)

本ピットはA74グリッドに位置する。ピット436に北壁を切られるものの推定長軸約1.12m, 短軸約0.8mの小楕円形を呈する。壁高は確認面から約13cmを測る。詳細な時期は不明である。

遺 物 (第257図-9・10)

第257図-9は続縄文後北C₂・D式。10は横位の縄文を地文とする。口縁部では太い縄線文上に縦方向の縄線文が加わる。口唇部には縄端圧痕文と外側に刻みが施される。続縄文初頭である。

(武田 修)

ピ ッ ト 437

遺 構 (第78図)

本ピットはA74グリッドに位置する。南壁の一部は60号竖穴と重複するものの、新旧関係は明確にすることはできなかった。規模は直径約0.56mの円形を呈し、壁は皿状で浅い。高さは確認面から約15cmを測る。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 438

遺 構 (第78図, 図版58-16)

本ピットは60号竖穴の床面精査中に発見した。60号竖穴との切り合いを確認することはできなかった。規模は長軸約1.26m, 短軸約0.78mの楕円形を呈する。床面中央部には暗赤褐色土の遺存体があり、北壁と東壁の端部にベンガラが散布されている。壁高は60号床面から約10~20cmである。

遺 物 (第258図-4・5)

第258図-4は両面加工ナイフ。柄部のみ調整されている。5は削器。2点とも黒曜石製・

小 括

本ピットは遺存体の存在から土壙墓である。両面加工ナイフの形態から続縄文初頭と思われるが、詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 439

遺 構 (第248図)

本ピットはA78グリッドに位置する。規模は長軸約1.10m, 短軸約0.82mの楕円形を呈する。長軸は東-西方向にもつ。南壁側の壙上部には直径約40~50cmの範囲で黒曜石製のフレイク・チップが集積されている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約30cmである。

遺 物 (第259図-1・2, 第258図-6・7, 図版59-1・2)

ピ ッ ト 440

遺 構 (第278図)

本ピットはG'70グリッドに位置する。規模は直径約1.60m程の不整円形を呈する。壁は垂直に立ち上がり、高さは確認面から約50cmである。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第259図-3・4, 第258図-8)

第259図-3・4は後北C₂・D式。3は注口土器。

第258図-8は台形状を呈した削器。黒曜石製。

(武田 修)

ピ ッ ト 440 a

遺 構 (第278図)

本ピットはG'70グリッドに位置する。規模は直径約0.80m程の不整円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約20cmである。

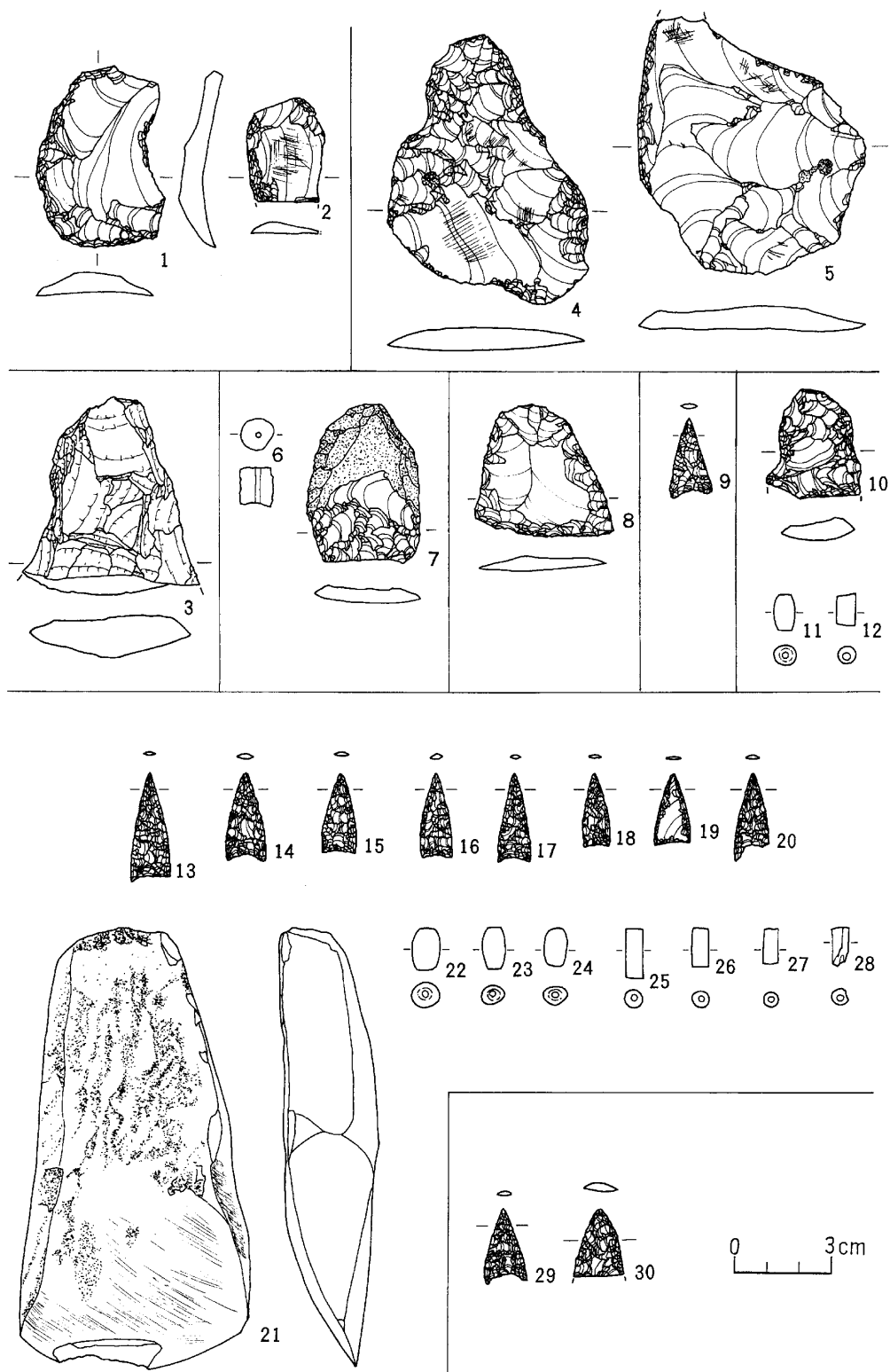
詳細な時期は不明である。

遺 物 (第259図-5～8, 第258図-9)

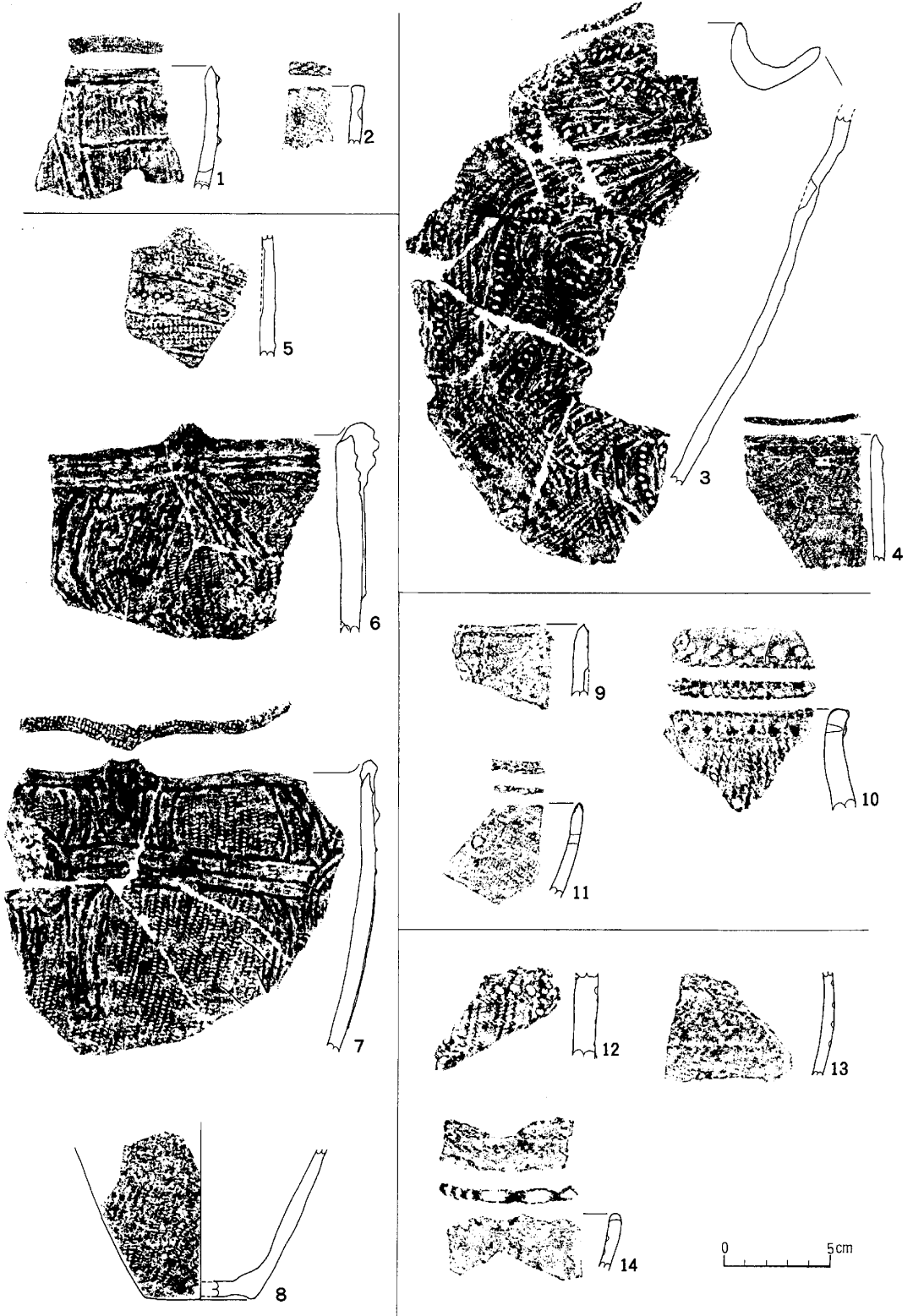
第259図-5は後北C₂・D式。6・7は宇津内II b式。8は宇津内系の底部であろう。

第258図-9は無茎石鏃。黒曜石製。

(武田 修)



第258図 ピット432埋土(1・2), 436埋土(3), 438埋土(4・5), 439床面(6)・埋土(7), 440埋土(8), 440a埋土(9), 444埋土(10~12), 444a埋土(13~28), 445埋土(29・30)出土石器・琥珀玉



第259図 ピット439埋土 (1・2), 440埋土 (3・4), 440a埋土 (5～8), 444埋土 (9～11), 444a埋土 (12～14) 出土土器

ピ ッ ト 441

遺 構 (第186図)

本ピットはG'71グリッドに位置する。規模は長軸約1.10m, 短軸約0.60mの楕円形を呈するが東壁側が細くすぼまる形態である。床面は丸みをもつ。壁高は確認面から約48cmを測る。

遺物は出土しておらず時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 442

遺 構 (第142図)

本ピットはE'82・83グリッドに位置する。72b号竖穴の東壁を切って構築されている。規模は長軸約1.30m, 短軸約0.86mの楕円形を呈する。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 443

遺 構 (第142図)

本ピットはE'82・83グリッドに位置する。72号竖穴の東壁, 72b号の床面を切って構築されている。規模は直径約0.76mの円形を呈する。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。

ピ ッ ト 444

遺 構 (第260図)

本ピットはピット444aを掘り進め, 土層セクションを取る段階で切り合いを確認した。規模は直径約1mの円形を呈する。壁は丸みをもって緩く立ち上がり, 高さは確認面から約55cmである。

墳上部から直径約25~30cmの大型角礫と直径10~20cmの中型角礫が検出された。本ピットに伴うものであろう。床面ではさらに約5~10cm程皿状に掘り込んでいる。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第259図-9~11, 第258図-10~12, 図版59-3・4)

第259図-9は統縄文後北C₁式。4は燃糸文を地文として突瘤文の下部に縄線文が施された宇津内II a式。11は縄文晩期幣舞式。

第258図-10は黒曜石製の削器。9・10は琥珀製の管玉。ピット444a出土の管玉と形態が類

似している。ピット444 a の管玉が本ピットに混入したのであろう。

(武田 修)

ピ ッ ト 444 a

遺 構 (第260図)

本ピットはA'74, 75グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約1.98m, 短軸約1.48mの楕円形を呈し, 南北方向に長軸面をもつ。壁高は確認面から約40cmを測る。床面は東側から西側にかけて緩く傾斜する。東壁側では遺存体と思われる暗赤褐色土が薄く広がっているが, 大部分はピット444に削られている。北壁上部に直径20cmの角礫, 炭化材があるが, 本ピットに伴うものか不明である。第258図-13~28に示す遺物は遺存体の上部から出土した。特に琥珀製の管玉は2~3cmの白色粘土と同じ様に散在して出土した。

東壁, 南壁に直径約10cm, 深さ約8~10cmの小柱穴が1本ずつある。

遺 物 (第259図-12~14, 第258図-13~28, 図版59-5~19)

土器は第259図-12が宇津内II b式。13は表面, 14は内面に縄線文が施される。縄文晩期中葉であろう。

石器は第258図-13~20が無茎石鏃。黒曜石製。21は片刃磨製石斧。青色泥岩製。22~28は琥珀製の管玉。

小 括

本ピットは薄く広がる遺存体の存在から土壙墓と判断できる。詳細な時期は不明であるが, 琥珀製の装身具は宇津内II a式に多く見られる。しかしその場合は平玉が主体となる。本遺跡において管玉を伴う土壙墓はピット122 aがある。

(武田 修)

ピ ッ ト 444 b

遺 構 (第260図)

本ピットはピット444 a の東壁隅を切り込んで構築されている。規模は直径約0.60mの円形を呈し, 壁高は確認面から約20cmを測る。上部の角礫が本ピットに伴うものか不明である。時期は宇津内II a式よりも新しいと思われるが, 詳細は不明である。

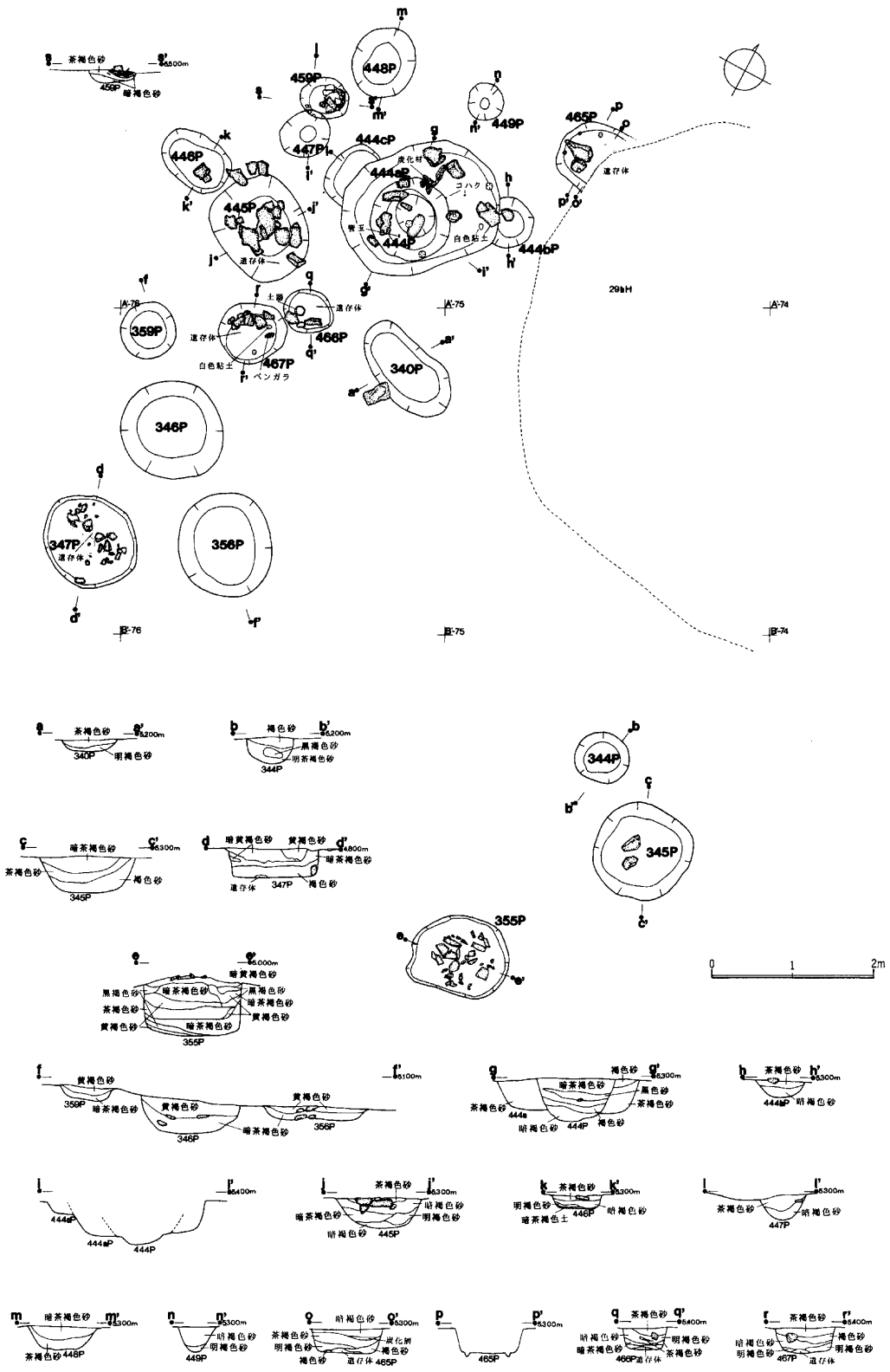
(武田 修)

ピ ッ ト 444 c

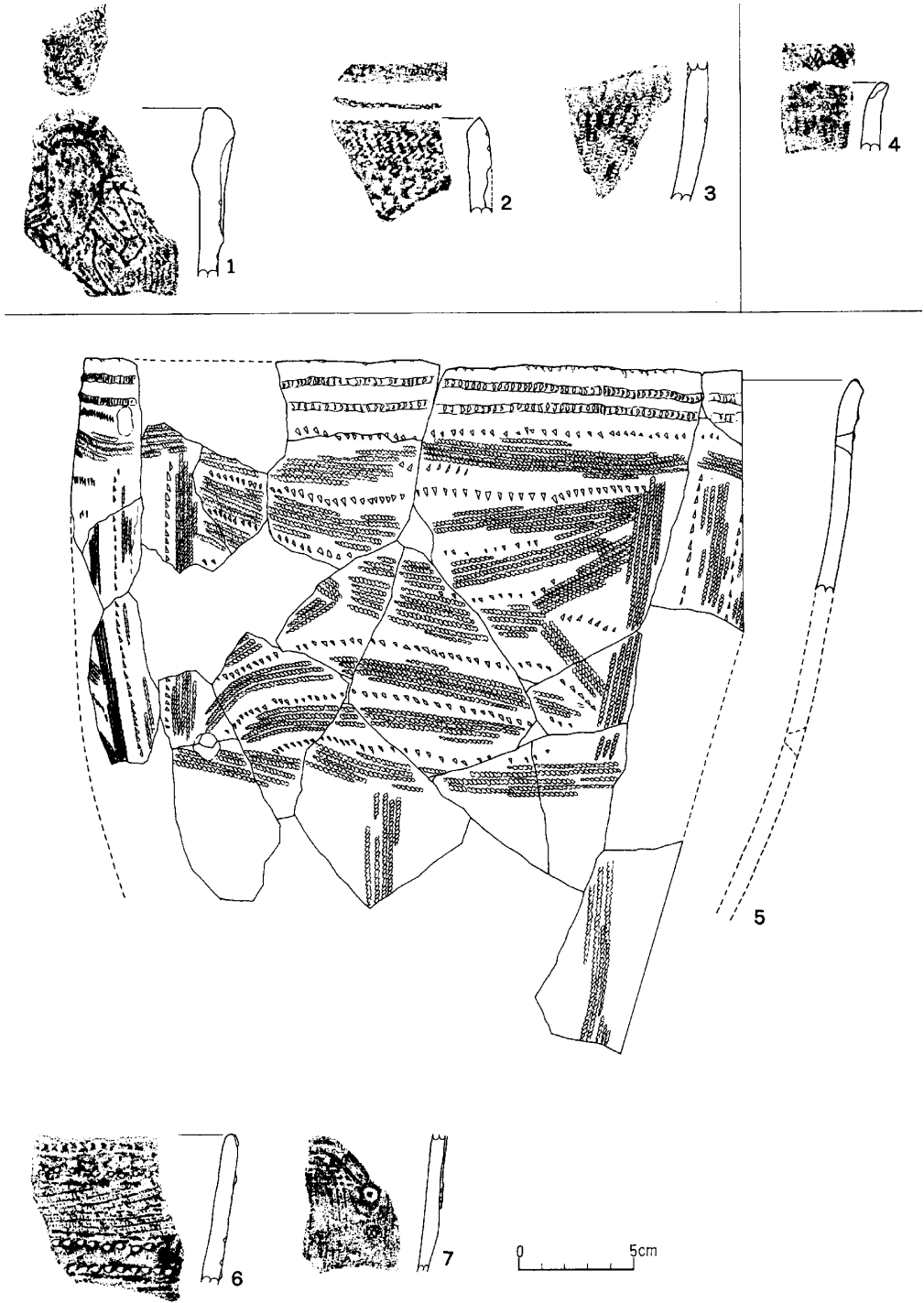
遺 構 (第260図)

本ピットはピット444 a の西壁側に位置するが, 大半を削られているため正確な規模・形態は不明である。残存部の直径は約0.80m, 高さは確認面から約15cmである。

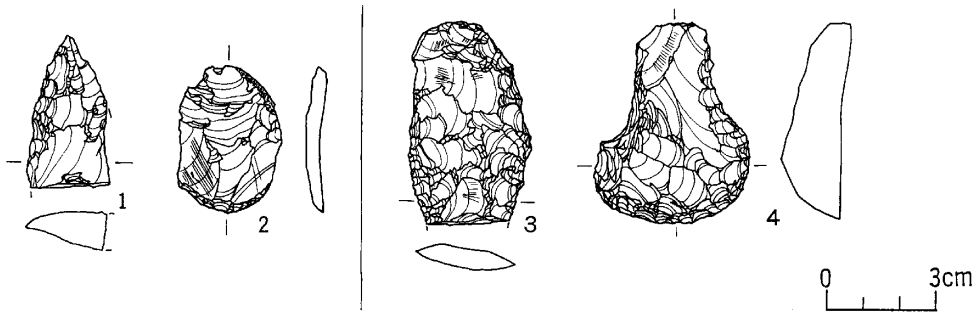
常呂川河口遺跡



第260図 ピット340, 344, 345, 346, 347, 355, 356, 359, 444, 444a, 444b, 444c, 445, 446, 447, 448, 449, 459, 465, 466, 467平面図



第261図 ピット445埋土（1～3），447埋土（4），448埋土（5～7）出土土器



第262図 ピット448埋土（1・2）、464埋土（3・4）出土石器

ピット444 a より古い時期のものであるが、詳細は不明である。

（武田 修）

ピ ッ ト 445

遺 構（第260図）

本ピットはA'75グリッドに位置する。規模は長軸約1.25m、短軸約1.08mの隅丸方形を呈する。壁高は確認面から約37cmである。長軸面は東－西方向にもつ。ピット中央部を中心に直径約20～42cmの大型角礫、直径約10～15cmの小型角礫が配置されている。大型、小型の角礫は壙上部から中部にかけて混在する。また、ピット上部の西側縁辺部にある3点の角礫も本ピットに伴う配石と判断できる。遺存体の一部と思われる粘性を有した暗赤褐色土は東壁に密着する。

遺 物（第261図－1～3、第258図－29・30）

土器は第261図－1、2が宇津内II b式であり、3はその胴部片であろう。

石器は第258図－29が無茎石鏃。30は石槍かナイフの先端部と思われる。2点とも黒曜石製。

小 括

平面形態、遺存体の確認から土壙墓であることに間違いはないが、詳細な時期は不明である。

（武田 修）

ピ ッ ト 446

遺 構（第260図）

本ピットはA'75グリッドに位置する。規模は長軸約0.90m、短軸約0.62mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約16cmである。東壁側に10～20cmの角礫2点が見られる。遺存体を確認することはできなかったが、形態的に見て土壙墓の可能性はある。

遺物は出土しておらず時期は不明である。

（武田 修）

ピット 447

遺構 (第260図)

本ピットはA'75グリッドに位置する。規模は直径約0.60mの円形を呈する。底面は小さく、ピット上部にかけて大きく開いた壁高は確認面から約30cmを測る。

詳細な時期は不明である。

遺物 (第261図-4)

第261図-4の口縁部はわずかに外反し、口唇部に縄端圧痕文が施される。続縄文初頭であろう。
(武田 修)

ピット 448

遺構 (第260図)

本ピットはA'75グリッドに位置する。規模は長軸約0.82m、短軸約0.76mの不整円形を呈する。各壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約30cmを測る。

遺物 (第261図-5~7, 第262図-1・2)

第261図-5は口径約34cmの大型土器。口縁下部に2条の擬縄隆帯が横走り、胴中央部は区画された縦走帯縄文間を弧線状の帯縄文がめぐる。6は無文部に列点文が施される。5・6は後北C₂・D式。7は弧状の微隆起線の末端にボタン状の貼付文がある後北C₁式。

石器は第262図-1が表裏面とも加工は粗く折れているため全体の形状は不明であるが、左側縁部に刃部をもつ両面加工ナイフであろう。2は上部に原石面が残る。端削器。2点とも黒曜石製。
(武田 修)

ピット 449

遺構 (第260図)

本ピットはA'74グリッドに位置する。規模は直径約0.45mの小円形を呈し、壁は「V」字状に開く。壁高は確認面から30cmである。遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピ ッ ト 457

遺 構 (第151図)

本ピットは擦文期の73号竪穴の床面中央部からやや北側に寄った位置にある。竪穴の柱穴がこのピットを切り込んでいる。規模は長軸約0.65m、短軸約0.50mの楕円形を呈する。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明であるが、73号竪穴よりは古いのであろう。

(佐々木 覚)

ピ ッ ト 458

遺 構 (第91図)

本ピットは61c号の南側、61e号の床面を切って構築されている。規模は長軸約0.70m、短軸約0.52m程の不整形を呈する。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。

(武田 修)

ピ ッ ト 459

遺 構 (第260図)

本ピットはA'75グリッドに位置する。第II層の茶褐色砂層の上面から角礫と図版59-20に示す土器が出土したため、周辺を精査したところ落ち込みがありピットであることを確認した。規模は直径0.60m程の小円形を呈する。床面は東側から西側に向かって緩く傾斜するため、壁高は西壁で約15cm、東壁で約8cmを測る。

遺 物 (図版59-20)

口径約25.5cm、高さ約39.5cmの大型土器。口縁部に蒲鉾状の大きな突起を4個もつ。この突起には直径約1cm程の孔がそれぞれ2個ずつある。吊り耳の機能も考えられるが、紐擦れ痕などは観察できず、装飾効果を意図したものであろう。想像を逞しくすればフクロウを意匠する様にも見受けられる。器面の文様は蒲鉾状突起の下部配置された2個の同心円文、横位の隆帯で連結する。内外器面の上部には煤が大量に付着する。

小 括

土器はピット上部から出土するものの本ピットに伴うものと判断できる。時期は続縄文字津内II bである。

(武田 修)

ピ ッ ト 460

遺 構 (第110図)

本ピットA77グリッドに位置する。規模は直径約0.60mの円形を呈する。壁高は確認面から約47cmを測る。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 460 a

遺 構 (第110図)

本ピットピット460に北壁の大半を切られる。規模は長軸約0.64m、短軸約0.40mの小円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約15cmを測る。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

ピ ッ ト 461

遺 構 (第58図)

本ピットは57号堅穴の床面を切って構築されている。規模は長軸約0.60m、短軸約0.45mの楕円形を呈する。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 462

遺 構 (第248図)

本ピットはB78グリッドに位置する。規模は直径約0.38mの円形を呈する。壁高は確認面から約24cmを測る。

詳細な時期は不明である。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 462 a

遺 構 (第248図)

本ピットはピット462に南壁を切られているが、長軸約0.60m、短軸約0.46mの楕円形を呈する。壁高は確認面から20cmを測る。

詳細な時期は不明である。 (佐々木 覚)

ピット 463

遺構 (第163図)

本ピットはD'76グリッドに位置する75号竪穴の北壁隅を切り込んで構築している。規模は長軸約1m、短軸約0.78mの楕円形を呈する。床面は西側から東側にかけて若干であるが傾斜する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約53cmを測る。

詳細な時期は不明である。

遺物 (第263図-1~3)

第263図-1, 2は宇津内II b式。3の口縁部は緩く外反し、3条の横走沈線と長方形の沈線が施される。続縄文初頭であろう。(武田 修)

ピット 464

遺構 (第163図)

本ピットはD'75・76グリッドに位置する75号竪穴の東壁隅を切り込んで構築している。北壁から西壁にかけて丸みをもち、南壁から北壁にかけては直線的な不整形である。規模は直径約1.10m。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約30cmを測る。

詳細な時期は不明である。

遺物 (第263図-4~6, 第262図-3・4)

第263図-4は縦走縄文を地文に4条の横走沈線文が施される。宇津内II b式に相当される。5は口唇部の内側に縄文がある。後北C₂・D式。6は縄文晩期。

第262図-3の石器は両面加工ナイフ。黒曜石製。4の形態は分銅形である。刃部が極めて肉厚な頁岩製の搔器。裏面の柄部を中心に茶褐色を呈した汚れが観察される。(武田 修)

ピット 465

遺構 (第260図)

本ピットはA'74グリッドに位置する。大半を29b号竪穴に切られているため検出できたのは西側半分である。残存部から判断して長軸東側が削られているためその規模は不明であるが、短軸は約0.82mである。西壁端部に約30cmの大型角礫、約20cmの中型角礫が並べられており、これを取り除くと粘性を有した暗赤褐色土の遺存体が現われた。2点の角礫は遺存体の上部に置かれていたことになる。

床面には直径約8~11cm、深さ約5~10cmの小柱穴が西壁3本、北壁1本、南壁に1本ある。

小 括

出土遺物が無いため時期を確定することはできないが、長軸面を東―西にもち、床面に小柱穴をもつ特徴から続縄文字津内II a 式である可能性が高い。(武田 修)

ピ ッ ト 466

遺 構 (第260図)

本ピットはA'75, B'75グリッドに位置する。規模は長軸約0.62m, 短軸約0.47mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約27cmを測る。壙上部の東南側には大小3点の角礫が縦位に並ぶ。角礫を取り除くと第263図-7の土器が遺存体の上部から正立の状態出土した。遺存体は粘性のある暗赤褐色土であり、床面のほぼ全域に広がる。

遺 物 (第263図-7・8, 図版59-21・22)

第263図-7は銚先鏝をイメージさせる擬縄貼付文を「△」状に1対施した特徴をもつ。宇津内II a 式。8は口径4cm, 器高7cmで底部が張り出した細長い無文のミニチュア土器。1対の小孔がある。続縄文初頭であろう。(武田 修)

ピ ッ ト 467

遺 構 (第260図)

本ピットはB'75グリッドに位置する。規模は長軸約0.82m, 短軸約0.75mの楕円形を呈する。ピット466とは反対側の北西側に大小の角礫が縦位に配置される。壁高は確認面から約30cmを測る。粘性をもつ暗赤褐色土の遺存体は角礫下の南西壁寄りにある。遺存体の形状から頭部は北方向にあるものと考えられる。北壁際には白色粘土, ベンガラ, 灰が等間隔に配置される。灰はサラサラした灰白色を呈する。

西壁と東壁際の床面には直径約5～6cm, 深さ3cmの小柱穴が2本ある。

小 括

遺物の出土が無いため正確な時期は不明であるが、楕円形の形態と底面に小柱穴をもつ点から続縄文字津内II a 式の土壙墓である可能性が高い。(武田 修)

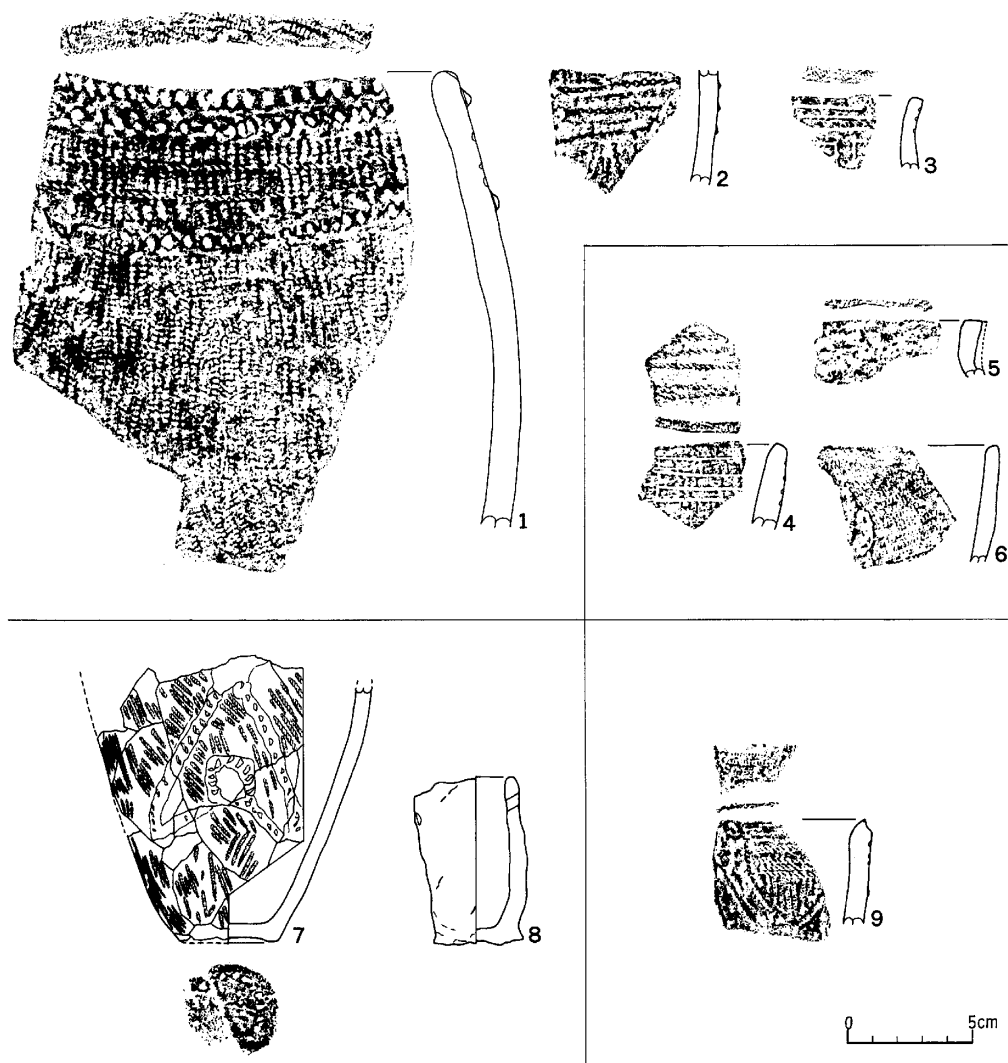
ピ ッ ト 468

遺 構 (第274図)

本ピットはE'74・75グリッドにまたがって位置する。規模は直径約0.45m程の円形を呈する。床面は細く、壁は「V」字状に立ち上がる。高さは確認面から約35cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。

(武田 修)



第263図 ピット463埋土（1～3）、464埋土（4～6）、466埋土（7・8）、469埋土（9）出土土器

ピット 469

遺構 (第274図)

本ピットはE'75グリッドに位置する。規模は長軸約0.70m、短軸約0.60mの小楕円形を呈する。壁は床面から丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約20cmを測る。

遺物 (第263図-9)

9は宇津内II b式。

(武田 修)

ピット 470

遺構 (第264図, 図版60-1・2)

本ピットは61c号堅穴の埋土を掘り下げる段階で確認した。規模は長軸約1.80m、短軸約1.62mの不整形を呈する。深さは61c号の床面から17~24cmである。粘性があり、糊状化した暗赤褐色の遺存体は床面のほぼ全域に広がる。長さ30cm、幅15cm、厚さ4~6cmのベンガラは東壁際から内側に傾斜する様に盛られている。西側にも長さ12cm、幅10cmのベンガラがある。

壁際にある小柱穴は東壁2本、西壁3本、北壁2本、南壁2本の9本である。いずれもほぼ等間隔に配置され、直径約8~14cm、深さ約7~12cmである。

遺物の分布状態を見ると一定の規則性がある。土器と石器は相対峙する様に東側と西側の遺存体の端にあり、装身具である琥珀玉、クマ意匠のペンダント、石偶は遺存体の上部に置かれる。東側の土器は大型1点、小型4点である。大型土器は口縁部を上に向け、胴部は口縁部を囲む様に出土しているため、本来は正立の状態で置かれていたものが土圧により押し潰されたものと判断できる。小型の土器のうち第268図-2は5の中に入れ子になっていた。小型土器はほぼ同一方向に倒れている。本来は正立の状態で置かれていたのかもしれない。

西側の石器はさらに細かく器種ごとにまとめられて副葬されている。西側上部からナイフ形石器、剥片、棒状原石が置かれる。石鏃は南壁側に多くまとまっている。

装飾品である琥珀玉は大きさの異なる2種類が遺存体上部の上下に連なった状態で検出した。クマ意匠ペンダントと石偶は2種類の琥珀玉とつかず離れずの位置から出土しており、儀礼行為に伴う遺物と思われる。4点の白色粘土は頭部と思われる付近にまとまっている。

遺物 (第268図, 第269図, 第270図, 第271図, 図版60-3~7, 図版61, 図版62, 図版63)

第268図-1は口径約18cm、器高約35cmの大型土器。口径部が縮約し胴部が張り出した壺形土器である。縦走縄文を地文として、口縁下部にボタン状貼付文の付けられた太い隆帯が4箇所ある。2は口径約5.5cm、器高約8.5cmの小型土器。口縁直下の無文部と胴部の縄文とは縄端圧痕文で区画され、1対のボタン状貼付文と縦位の短い隆帯が1対付される。3~5は口縁部に突瘤文が施される。3は口径約8cm、器高約8.5cmの小型土器で2個の吊り耳をもつ。4は

口径約8.5cm、器高約10cmの小型土器。2個の吊り耳を弧状の隆帯が連結する。5は口径約10cm、器高約11.5cmの小型土器。短い「一」状、「∩」状にボタン状貼付文を単位とした隆帯が施される。土器は宇津内II a式に特徴的な内側からの突瘤文が見られない1・2もあるが、他の小型土器ともセットとして捉えられるものである。

石器は第269図-1~20が南壁隅および頭部周辺などから出土した無茎石鏃。20は基部に両側から抉りがある。21・22は小型土器の下部から出土した石槍。23・24・27は両面加工ナイフ。28・29は断面形態が楔状を呈し、表裏に原石面を残す。

第270図-1~3は磨製石斧。4は大型棒状原石。5~22は小型棒状原石。23~25は中型棒状原石。

26は頭部、両手、両足を現したクマもしくは人間を意匠した石偶である。縦長剥片を素材として丁寧に調整されている。27・28は東壁際にあるベンガラ内から出土した土製管玉である。28は貫通するものの27は未貫通である。29はクマの頭部を意匠したペンダントである。縦断面は孤状、横断面はかまぼこ状を呈し、鼻面を両側から尖孔している。底面は平らである。下部は浅い掘り込みが両側縁からなされ、海獣を意匠したと思われる。粘版岩製。

遺存体の上部には第271図-1~20に示す直径約0.4cm~1.2cmの琥珀玉が置かれている。0.6~1.2cmのやや大型のものは総計1,400粒、0.4~0.5cmの小型のものは総計777粒、異型玉56粒の合計2,233粒。破損品・砕け品の280粒を加味すると約2,500粒に及ぶ。

小 括

本ピットは続縄文字津内II a期の土壙墓である。直径約1.80mの円形に近い形態であり、同時期の他の土壙墓が楕円形であるのに対し平面形態、規模に差異が認められる。副葬品は極めて豊富なことも大きな特徴であり、クマもしくは人間を意匠した石偶、クマ・海獣を意匠したペンダントなどはこの土壙墓に埋葬された人物が集団を統率する「族長」、儀礼・祭祀を司る「シャーマン」など特異な地位にあったことを示しているであろう。(武田 修)

ピ ッ ト 471

遺 構 (第275図)

本ピットはH'76、I'76グリッドにかけて検出した。規模は直径約1.30mの円形を呈し、壁高は確認面から36cmを測る。

詳細な時期は不明である。

遺 物 (第272図-1・2、第281図-1・2)

土器は第272図-1・2は埋土出土。1葉続縄文中葉、2は続縄文初頭。

石器は第281図-1は有茎石鏃。2は片面加工ナイフであるが主要剥離面に残る打瘤は柄部作りのため除去する。2点とも黒曜石製。(武田 修)

ピット 472

遺構 (第275図)

本ピットはH'75, I'75グリッドにかけて検出した。規模は直径約0.98mの円形で、壁高は確認面から17cmを測る。形態は壁が緩やかに立ち上がる皿状を呈している。

遺物 (第272図-3)

埋土から出土した縄文晩期の土器。

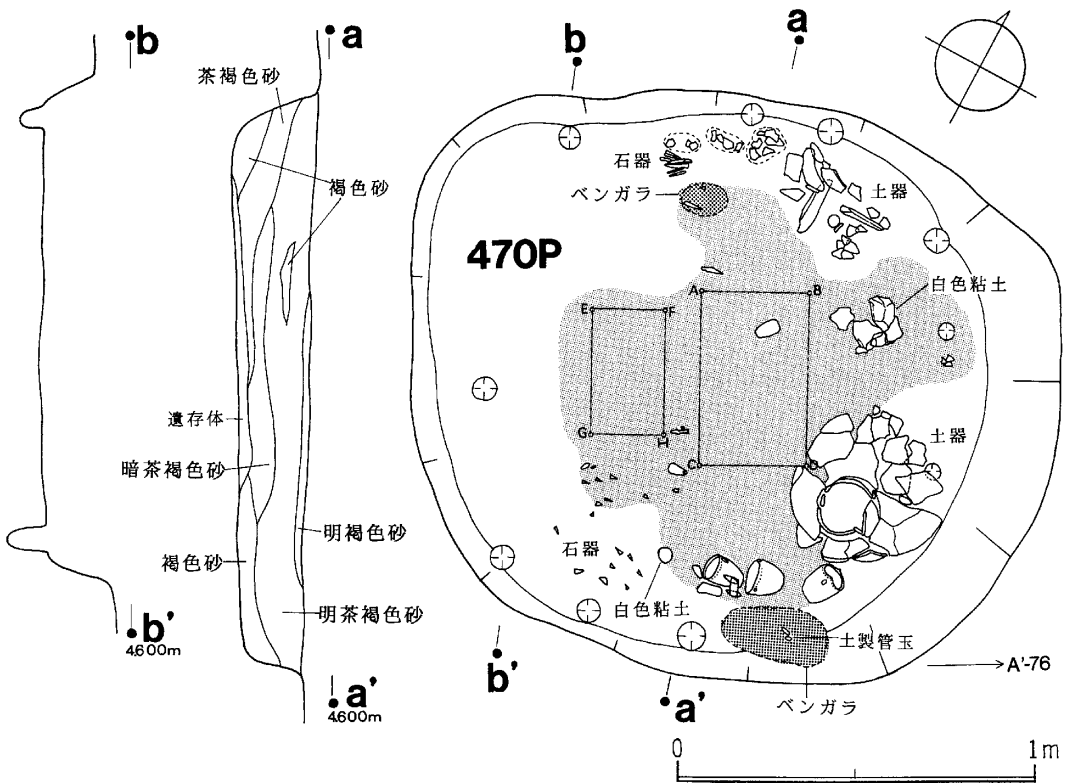
(佐々木 覚)

ピット 473

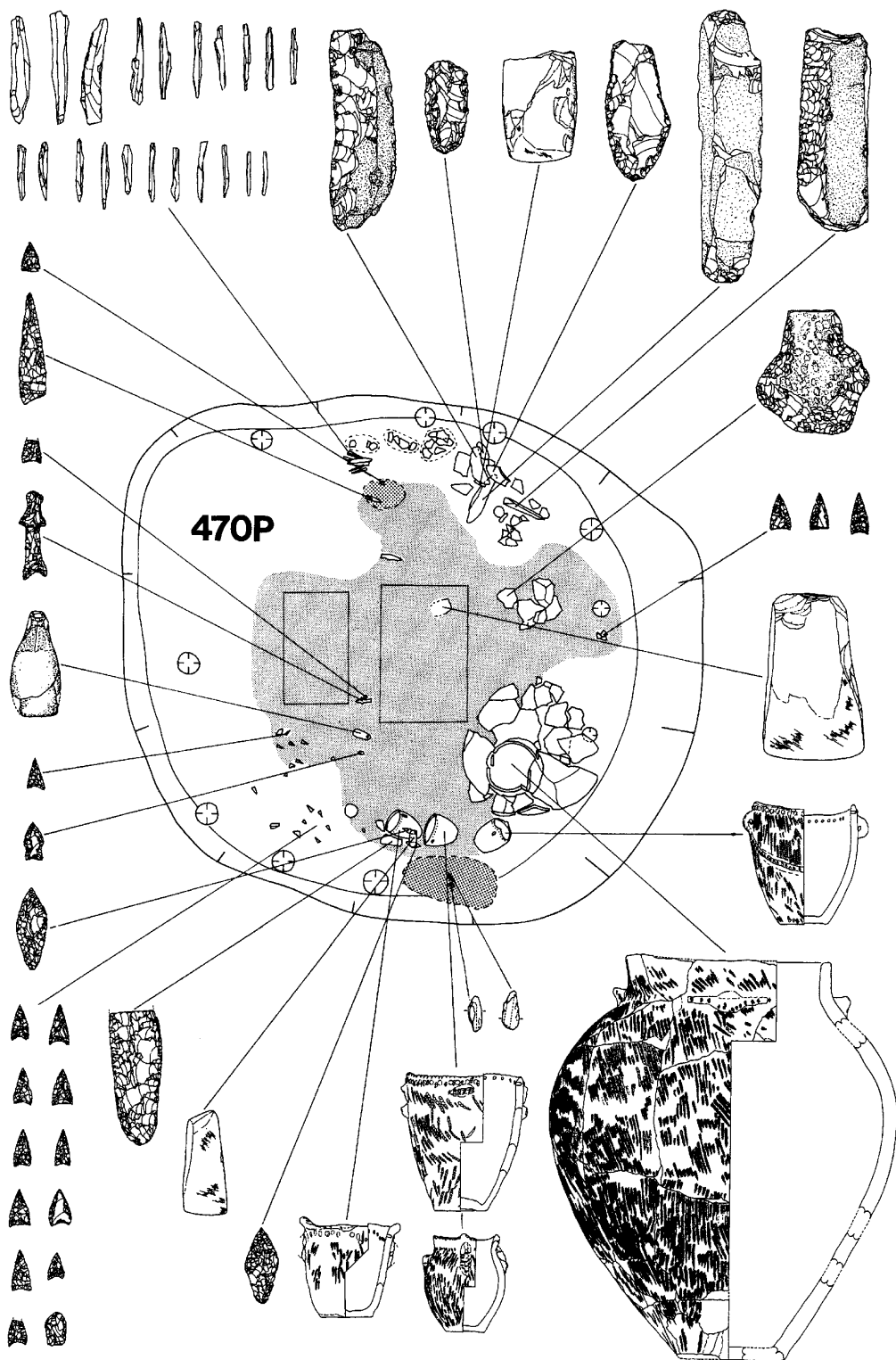
遺構 (第274図)

本ピットはF'76グリッドに位置する。直径約1.06mの円形で、壁高は確認面から26cmを測り、壁は緩く立ち上がる。

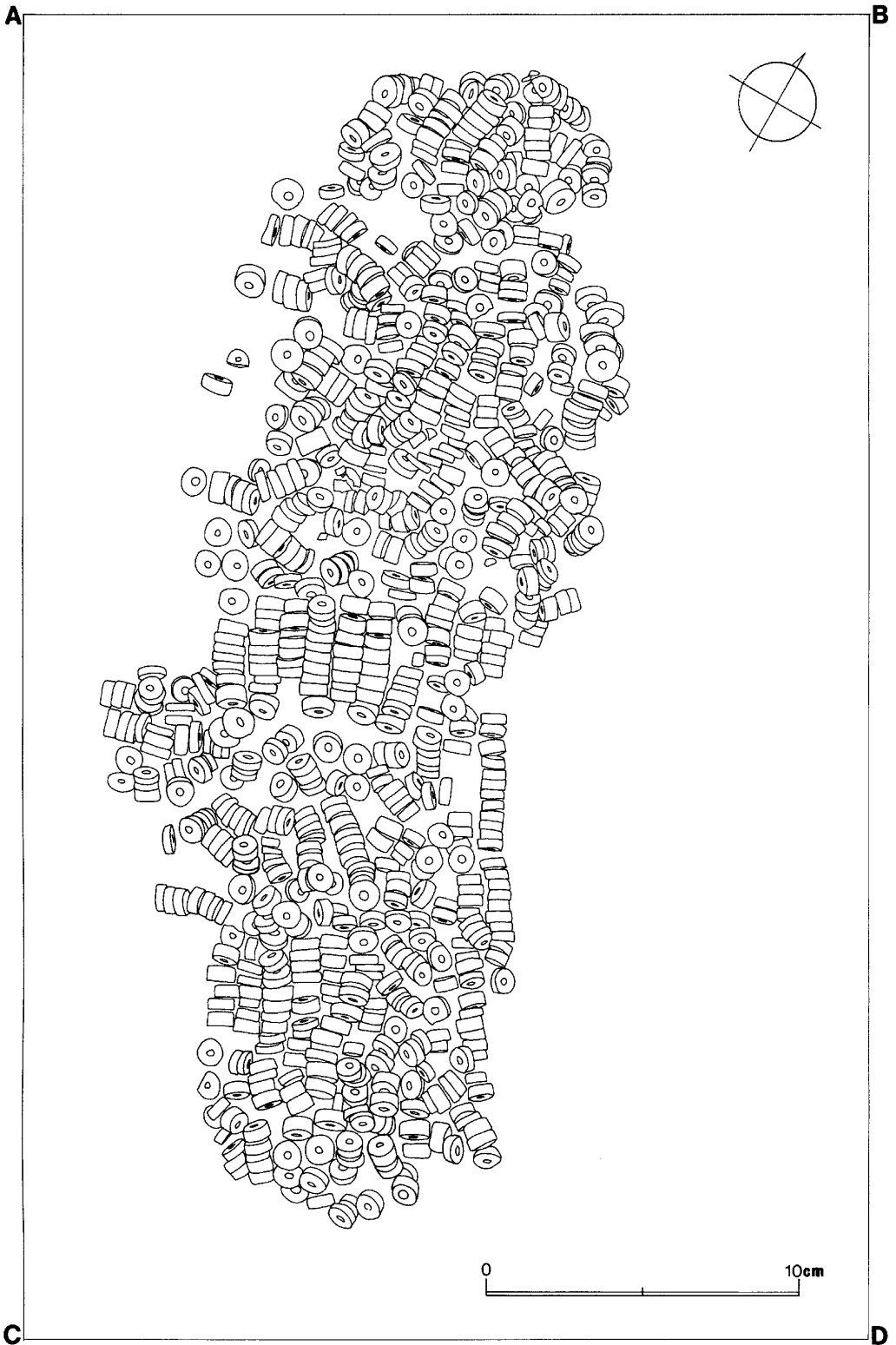
遺物 (第272図-4・5)



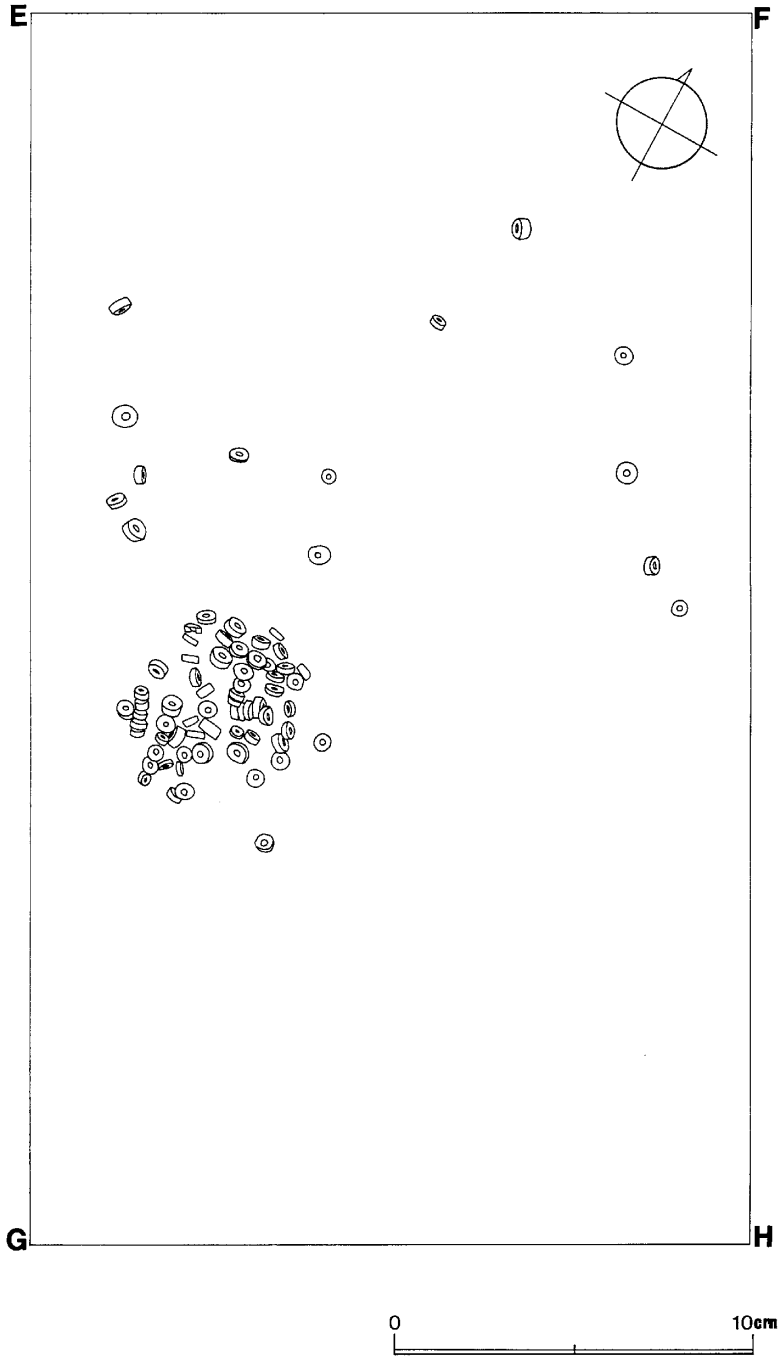
第264図 ピット470平面図



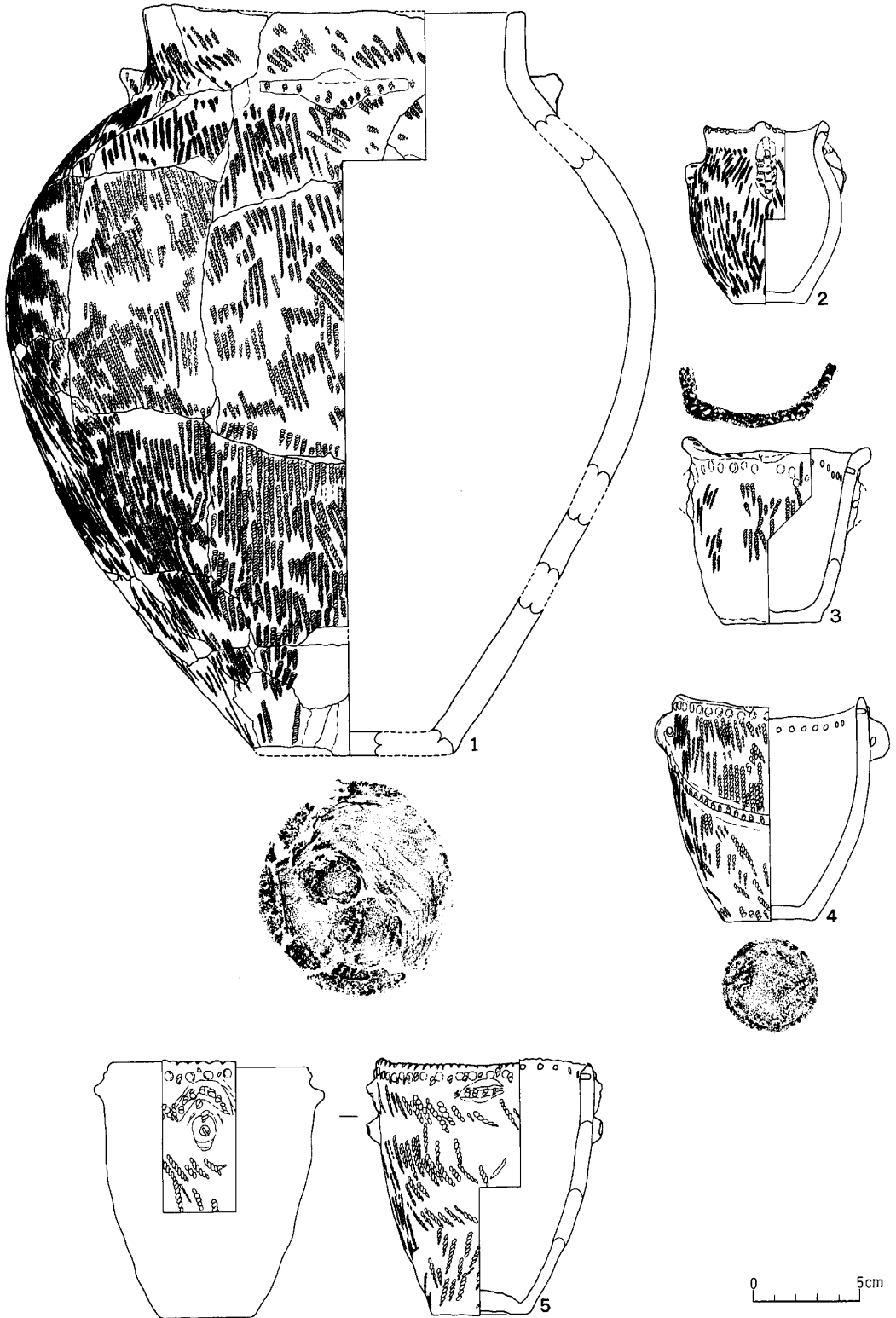
第265図 ピット470土器石器出土分布図



第266図 ピット470琥珀玉出土状況(1)

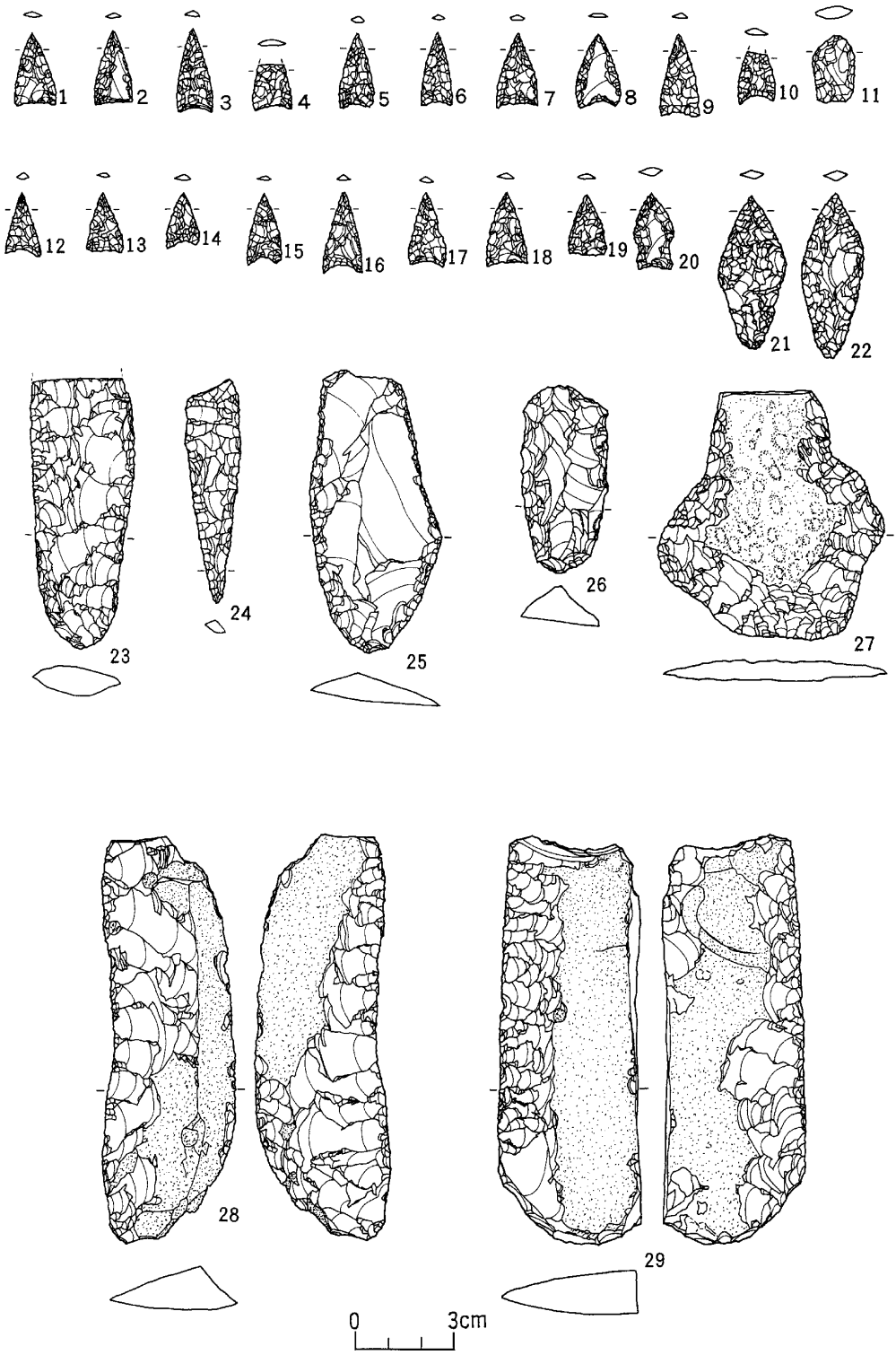


第267図 ピット470琥珀玉出土状況(2)

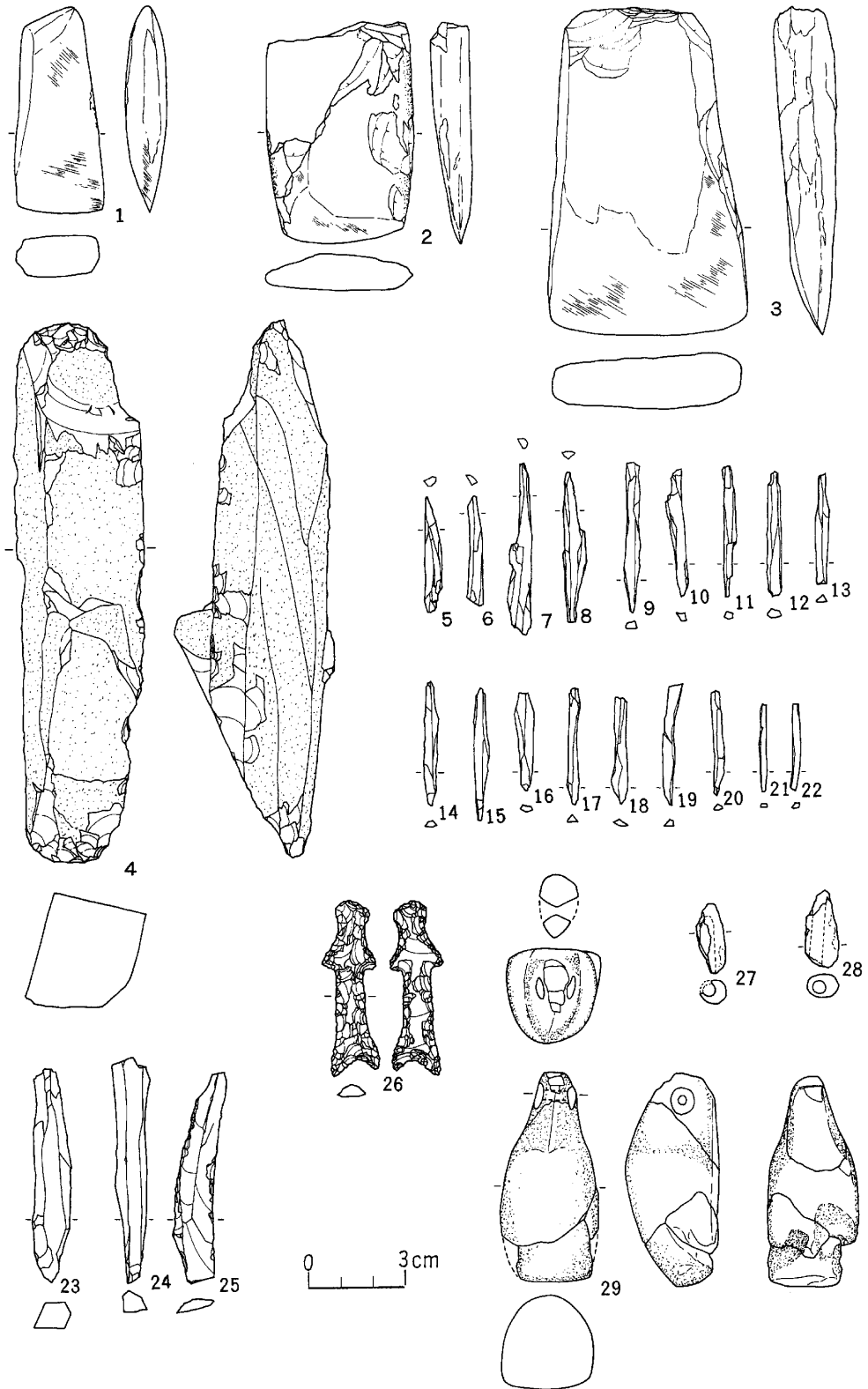


第268図 ピット470遺体上(1~5)出土土器

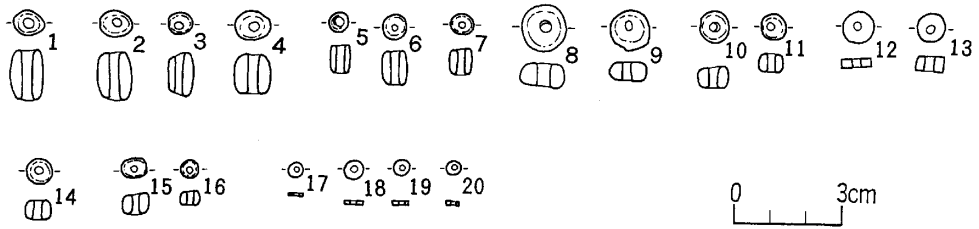
常呂川河口遺跡



第269図 ピット470床面(1~29)出土石器



第270図 ピット470床面 (1~25)・遺体上 (26・29)・ベンガラ内 (27・28) 出土石器・土製品・石製品



第271図 ピット470遺体上（1～20）出土琥珀玉

第272図－4・5は埋土出土。4は縄文晩期幣舞式。5も同晩期であろう。（佐々木 覚）

ピ ッ ト 474

遺 構（第274図）

本ピットはF'75グリッドに位置する。規模は長軸1.78m，短軸1.28mの楕円形を呈し，壁高は確認面から40cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がり，埋土の暗褐色砂上層からは直径約20cmの範囲でフレーク・チップの集積が見られる。

遺 物（第272図－6～8，第281図－3）

第272図－6～8は埋土から出土した土器。6は統縄文初頭。7は縄文晩期幣舞式。8も同晩期であろう。

石器は第281図－3が黒曜石製の削器。（佐々木 覚）

ピ ッ ト 474 a ・ 474 b

遺 構（第274図）

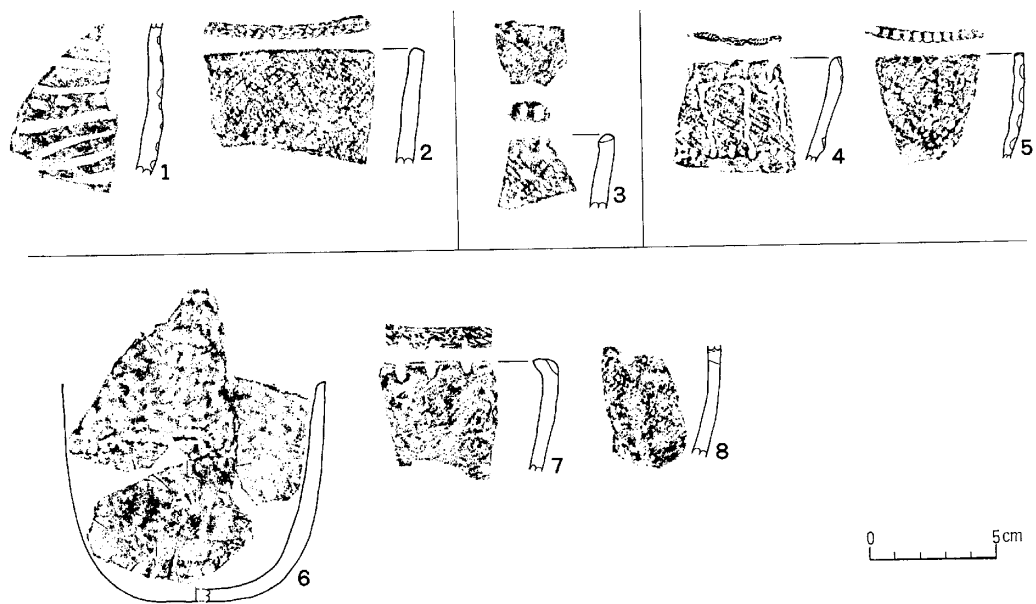
ピット474 aはF'76グリッドで検出した。規模は長軸1.16m，短軸0.94mの楕円形を呈し，壁高は確認面から29cmを測る。

ピット474 bはピット474 aの北側に位置する。規模は南側がピット474 aに切られているため長軸は不明であるが，短軸が1.14mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から34cmを測る。

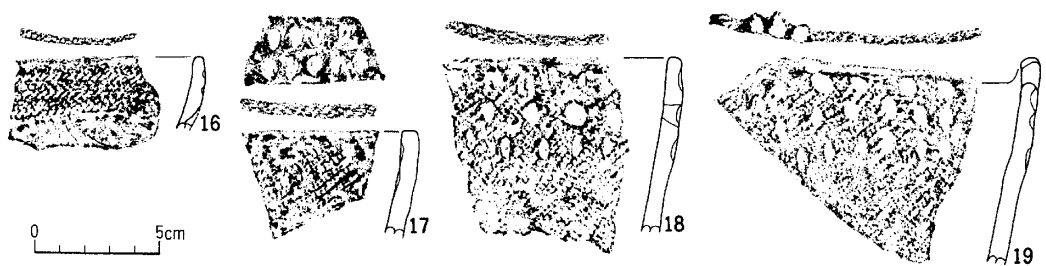
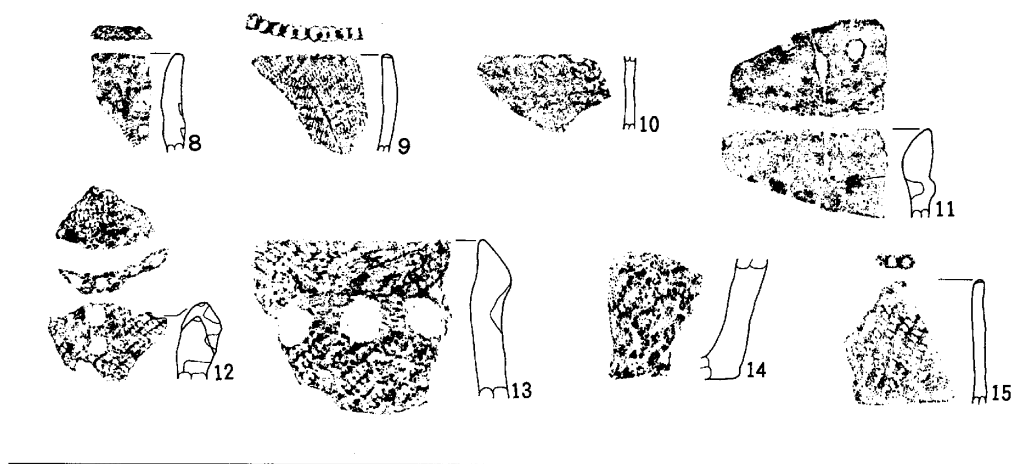
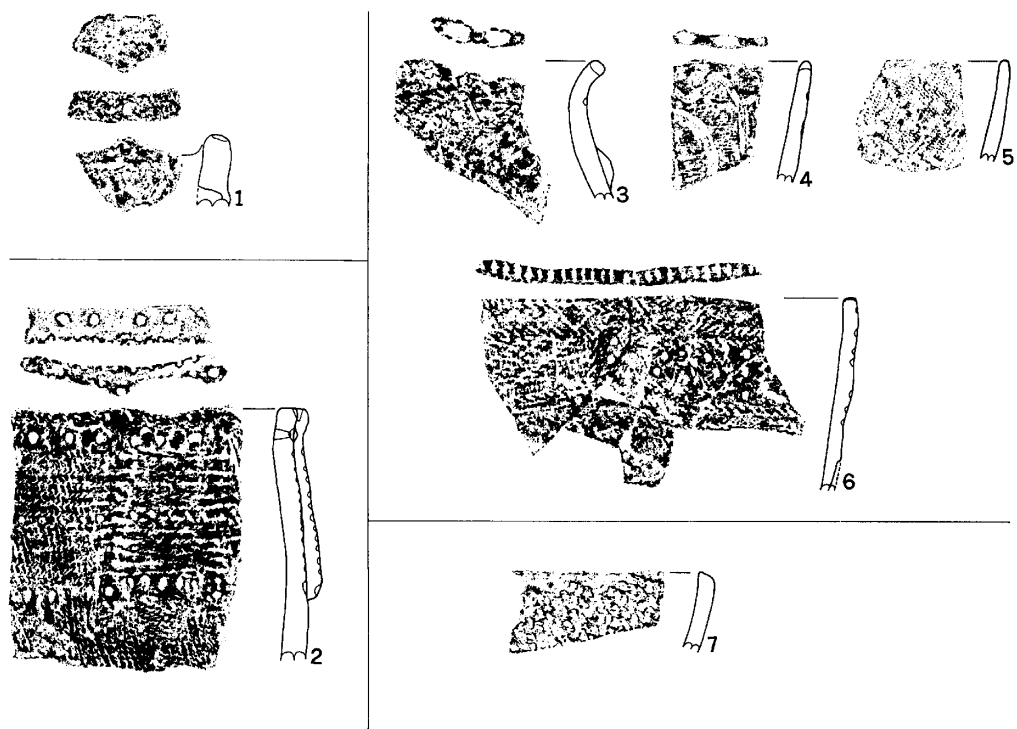
遺 物（第273図－1・2，第281図－4～8）

ピット474 aは第273図－1が埋土から出土した統縄文字津内II a式。石器は第281図－4が黒曜石製の削器。

ピット474 bの埋土から第273図－2の統縄文字津内II a式が出土。石器は第281図－5～8が黒



第272図 ピット471埋土（1・2）、472埋土（3）、473埋土（4・5）、474埋土（6～8）出土土器



第273図 ビット474a埋土 (1), 474b埋土 (2), 474c埋土 (3~6), 474d埋土 (7), 478埋土 (8~15), 479埋土 (16~19) 出土土器

曜石製の石鏃。

(佐々木 覚)

ピ ッ ト 474c

遺 構 (第274図)

本ピットはピット474の南西側に位置する。規模は東側でピット474, 南側でピット474a, 西側で474bにそれぞれ切られているため長軸は不明であるが, 短軸1.70mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から49cmを測り, 壙底には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が見られ, 小骨片が1点検出された。

遺 物 (第273図-3~6)

第273図-3~6は埋土出土。3は統縄文初頭。4は縄文晩期幣舞式。5・6も縄文晩期であろう。

小 括

本ピットは壙底から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されていることから土壙墓と考えられるが, 時期は不明である。

(佐々木 覚)

ピ ッ ト 474d・474e

遺 構 (第274図)

ピット474dはピット474bの北側に位置する。規模は長軸0.64m, 短軸0.56mの円形を呈し, 壁高は確認面から27cmを測る。南側でピット474bに接している。

ピット474eはピット474の南側に位置する。規模は長軸0.66m, 短軸0.58mの円形で, 壁高は確認面から12cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がった皿状を呈する。

遺 物 (第273図-7)

ピット474dから第273図-7が埋土から出土。縄文晩期であろう。

(佐々木 覚)

ピ ッ ト 475

遺 構 (第274図)

本ピットはF'77グリッドで検出した。規模は直径0.40mの円形を呈し, 壁高は確認面から25cmを測る。

(佐々木 覚)

ピ ッ ト 476

遺 構 (第275図)

本ピットはF'77グリッドで検出した。規模は長軸0.60m、短軸0.56mの円形を呈し壁高は確認面から20cmを測る。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 477

遺 構 (第275図)

本ピットはG'75, H'75グリッドで検出した。規模は南東側の一部が攪乱を受けているため短軸は不明であるが、長軸1.16mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から25cmを測る。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 478

遺 構 (第275図)

本ピットはG'76, H'76グリッドで検出した。東側から南側にかけて攪乱を受けているが壙底までは達していない。規模は直径1.9mの円形を呈し、壁高は確認面から48cmを測る。埋土下層の黒褐色砂中は炭化粒が含んでおり、壙底には僅かに遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められた。

遺 物 (第273図-8~15, 第281図-9)

埋土から第273図-8~15の土器が出土している。8・11は統縄文初頭。9・10・15は縄文晩期。12~14は同中期。

石器は第281図-9が黒曜石製の削器。

小 括

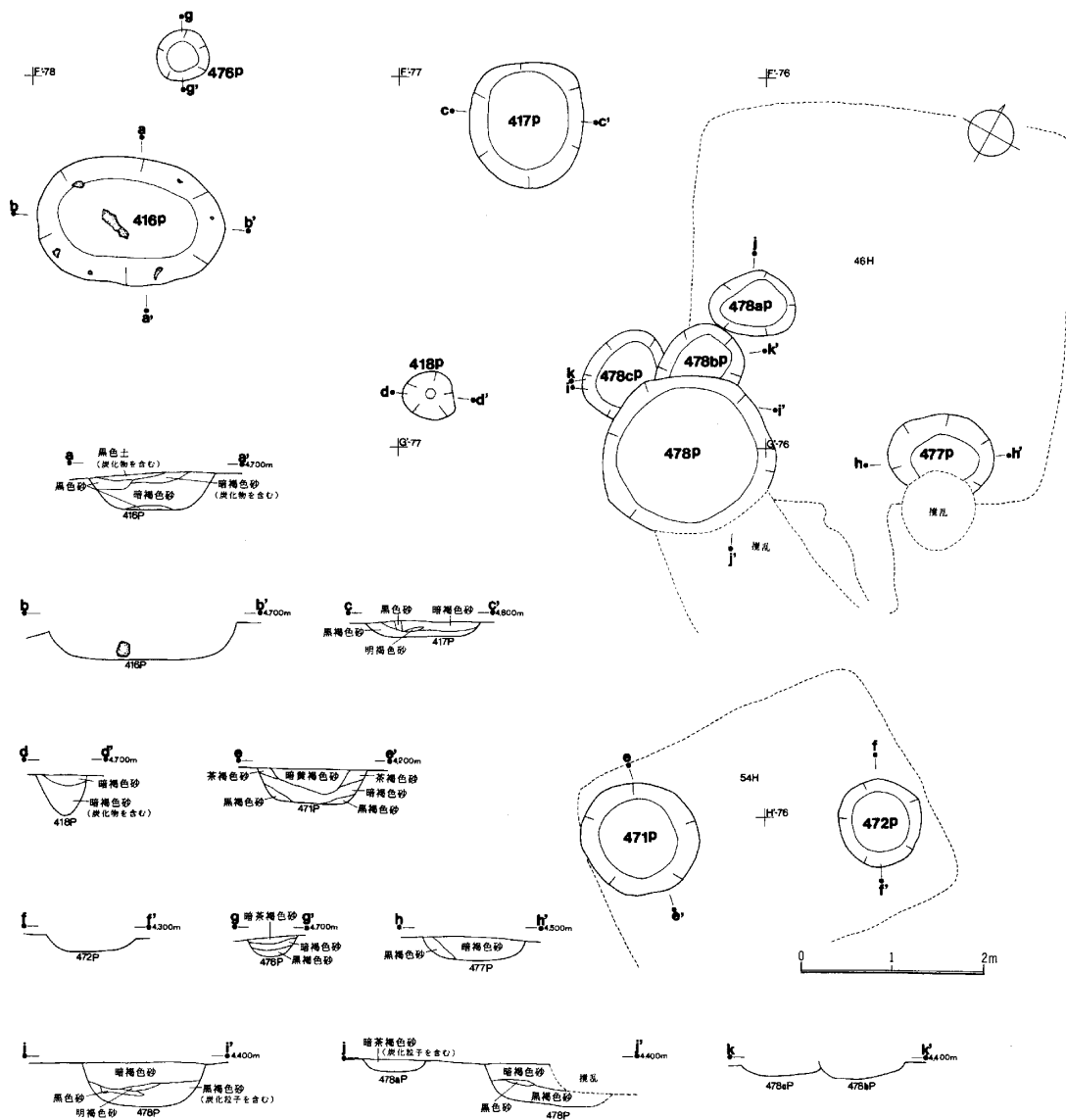
本ピットは壙底から僅かであるが遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されたことから土壙墓と考えられるが、時期は不明である。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 478 a

遺 構 (第275図)

本ピットはG'75, 76グリッドで検出した。規模は長軸0.92m、短軸0.72mの楕円形で、壁高は確認面から14cmを測る。浅い皿状を呈し、南側では僅かにピット478 bに接している。埋土は暗茶褐色砂の1層が炭化粒を多少含む。 (佐々木 覚)

常呂川河口遺跡



第275図 ピット416, 417, 418, 471, 472, 476, 477, 478, 478a, 478b, 478c平面図

ピ ッ ト 478 b ・ 478 c

遺 構 (第275図)

ピット478 bはピット478の北西側に位置する。規模は長軸が不明であるが短軸は0.84mある。壁高は確認面から19cmを測る。

ピット478 cはピット478の西側に位置する。規模は長軸1.00mあるが短軸はピット478に切られているため不明である。壁高は確認面から10cmとごく浅い皿状である。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 479

遺 構 (第155図)

本ピットは74 a 号竖穴の床面で検出した。規模は長軸0.90m, 短軸0.70mの楕円形を呈し、壁高は74 a 号竖穴の床面から17cmを測る。

遺 物 (第273図-16~19)

埋土から第273図-16~19の縄文晩期の土器が出土している。17は内側, 18・19は外側に爪形文をもつ。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 480

遺 構 (第155図)

本ピットは74号竖穴, 74 a 号竖穴の東壁で検出した。規模は長軸0.95m, 短軸0.55mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から55cmを測る。壙底から約15cm上で礫が出土している。

遺 物 (第277図-1・2, 第281図-10)

埋土から第277図-1・2の縄文晩期の土器が出土している。

石器は第281図-10が黒曜石製の削器。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 481

遺 構 (第283図)

本ピットは77号竖穴の西壁で検出した。規模は長軸1.20m, 短軸0.96mの楕円形を呈し、壁高は確認面から45cmを測る。竖穴が廃棄された後に構築されており、黒褐色砂の下層より掘りこまれているものと考えられる。

遺 物 (第277図-3, 第281図-11~13)

埋土から第277図-3の縄文晩期の土器が出土。

石器は第281図-11~13が黒曜石製の削器。

(佐々木 覚)

ピ ッ ト 482

遺 構 (第276図)

本ピットはC'72グリッド、42 a 号竪穴の北壁際に位置する。上部に5点の角礫がピットを囲む様に配置され、そのうちの1点は凹石を利用している。規模は長軸約0.75m、短軸約0.45mの楕円形を呈するが、東壁側がすばまる。遺存体と思われる暗赤褐色土は床面に広がり、ベンガラを含む。中央部からやや西側に歯骨が検出された。壁は浅い皿状に立ち上がり、高さは約30cmである。

遺 物 (第277図-4, 図版64-1)

第277図-4はピットの西壁上部から出土した。口径約8cm、器高約9.5cmの小型土器。口縁部は2条の縄線文と縄端圧痕文が施され、2個の吊耳間に縦位の隆帯が垂下する。続縄文字津内II b 式に比定される。

小 括

上部に角礫を配置した土壙墓である。長軸方向を東-西にもつ。埋土出土であるが第277図-4に示した宇津内II b 式の時期に属する可能性が高い。

(武田 修)

ピ ッ ト 482 a

遺 構 (第276図)

本ピットはピット482の南側に位置する。北壁の一部はピット482と重複し、大半を42 a 号竪穴に切られている。このため全体の形態、規模は不明であるが残存部から判断して長軸約1.20m程度の楕円形を呈すると思われる。深さは16cmである。

遺物は出土しておらず時期は不明である。

(武田 修)

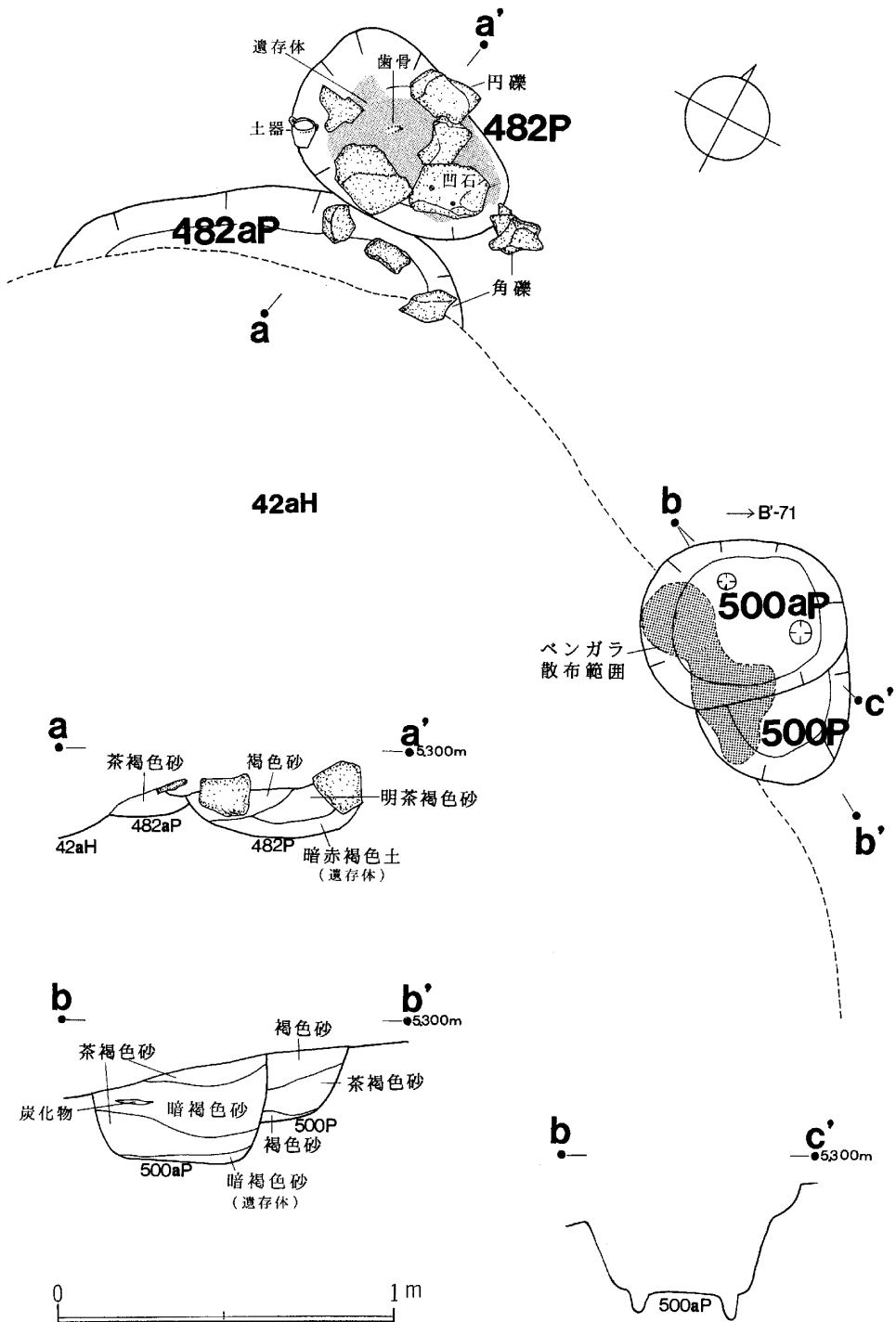
ピ ッ ト 483

遺 構 (第274図)

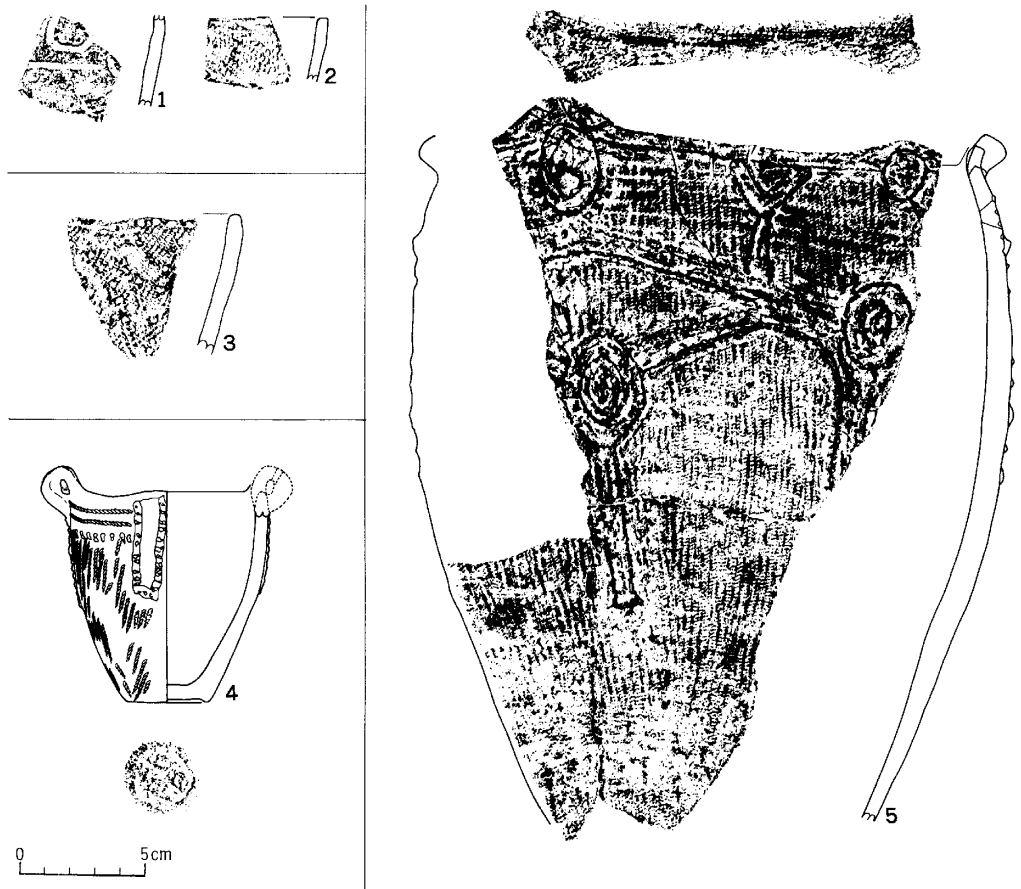
本ピットはE'75グリッドに位置する。規模は長軸約1.45m、短軸約1.22m程の不整楕円形を呈する。床面は僅かながら弧状を呈する。壁高は確認面から約25cmを測る。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。

(武田 修)



第276図 ピット482, 482a, 500, 500a平面図



第277図 ピット480埋土(1・2), 481埋土(3), 482上部(4), 484埋土(5)出土土器

ピ ッ ト 484

遺 構 (第278図)

本ピットはF'71・72グリッドに位置する。規模は長軸約0.90m、短軸約0.70mの楕円形を呈する。壁は皿状の浅い立ち上がりである。床面もやや起伏がある。北壁際の床面には粘性のある暗赤紫褐色の遺存体が残存し、南壁近くにはフレーク・チップが集積する。

遺 物 (第277図-5, 第281図-14~16)

第277図-5は口縁部の小突起下部と胴部に同心円文の施された宇津内II b式。

石器は第281図-14が表裏面の縁辺部に加工を施す。特に表面の刃部は急斜である。左側縁部が欠失するものの三角形状を呈した削器。15は削器。16は片面加工ナイフ。3点とも黒曜石製。

小 括

僅かであるが遺存体も検出されたので土壇墓と判断できる。明確な時期は不明であるが第277図-5に示した続縄文宇津内II b式が最も近いものかもしれない。(武田 修)

ピ ッ ト 485

遺 構 (第278図)

本ピットはF'71グリッドに位置する。規模は長軸約2.40m、短軸約1.70mの比較的大形の楕円形を呈する。壁高は確認面から約25cmを測る。床面には南壁側で直径約8~12cm、深さ6~14cmの柱穴4本、北壁で直径約7cm、深さ約9cmの柱穴1本ある。西壁には壙上部から直径約20cmの柱穴が掘り込まれているが本ピットに伴うものか確認できなかった。

南壁上部には20点のガラス玉、平柄の鉄斧、刀子が出土したピット300、東側ではピット485 aと重複する。いずれも本ピットよりも時期は新しい。

遺 物 (第279図-1~10)

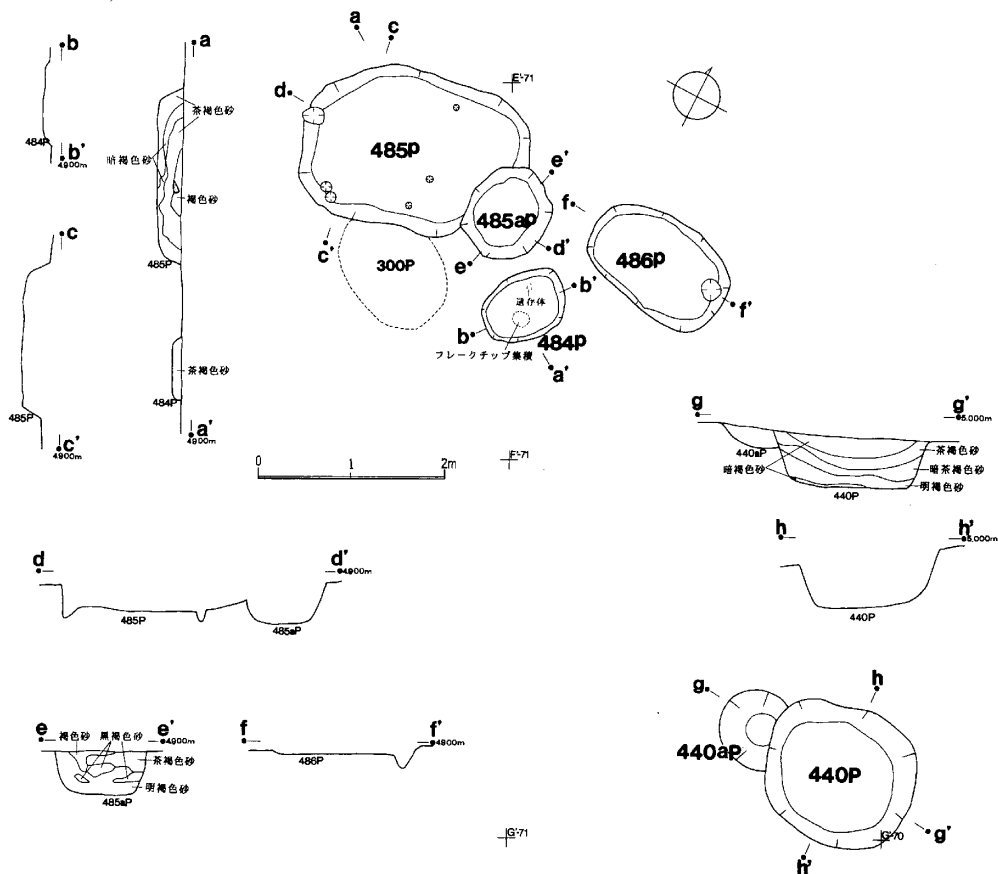
全て埋土からの出土である。1・2は宇津内II a式。3は口唇部に山形小突起と縄端圧痕文が施される。口縁下部の文様は長方形に区画された内部に山形沈線文を上下に施し、刺突文が加わる。フシココタン下層式に比定される。

4・6は縄文晩期幣舞式。5・7~9は縄文晩期中葉。9は縄端圧痕文が施される。10も縄文晩期である。(武田 修)

ピ ッ ト 485 a

遺 構 (第278図)

本ピットはピット485の東壁を切り込んで構築されている。規模は長軸約1m、短軸約0.80m



第278図 ピット440, 440a, 484, 485, 485a, 486平面図

の円形を呈する。

詳細な時期は不明である。

遺物 (第279図-11~13)

第279図-11~13は口縁下部に数条の縄線文が施され, 11は渦巻文が加わる。縄文晩期中葉であろう。(武田 修)

ピット 486

遺構 (第278図)

本ピットはF'70グリッドに位置する。規模は長軸約1.60m, 短軸約1mの楕円形を呈する。掘り込みは浅く確認面から約5~10cmである。東壁に直径23cm, 深さ15cmの小ピットがあるが, 本ピットに伴うものか確認できなかった。

遺物は出土しておらず時期は不明である。

(武田 修)

ピット 487

遺構 (第274図)

本ピットはE'75グリッドに位置する。規模は直径約0.70mの不整形を呈する。壁高は確認面から約25cmを測る。

遺物 (第279図-14~16)

第279図-14は撚糸文を地文とするが、拓本図の下部に横位の縄文がある。宇津内II a 式。15は縄文晩期幣舞式。16は盛り上がりのある爪形文をもつ。縄文晩期前葉であろう。

(武田 修)

ピット 488

遺構 (第280図)

本ピットはE'71グリッドに位置する。規模は直径約1mの円形を呈する。壁は南壁と西壁が垂直に対し、東壁は床面から丸みをもって立ち上がる。高さは確認面から約30cmである。壙上部からは細長い角礫が2点出土。

遺物 (第281図-17)

第281図-17は主要剝離面の先端部も加工した片面ナイフ。黒曜石製。

(武田 修)

ピット 489

遺構 (第274図)

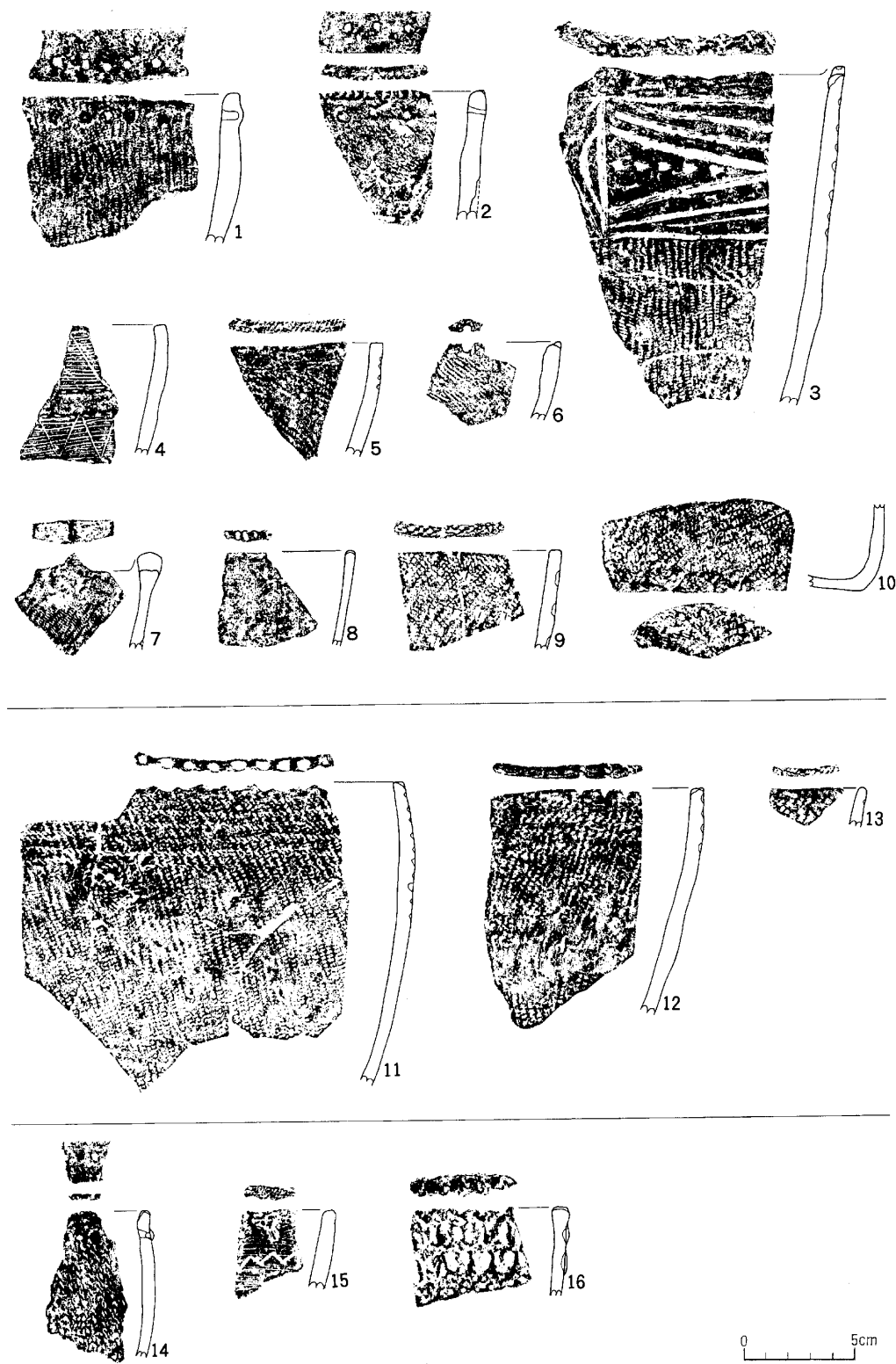
本ピットはD'74・75グリッドに位置する。規模は直径約1.70mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約60cmである。埋土堆積の大部分を占める暗茶褐色砂層では5~6cmの小角礫、15~20cmの中角礫、25~28cmの大角礫を層の全域に混入するが、特に中央部から多く出土する傾向がある。

遺物 (第282図-1~9, 第281図-18~20)

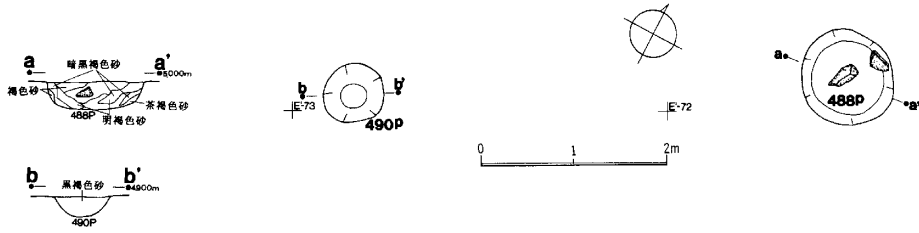
第282図-1~9は全て埋土出土である。1~3は続縄文字津内II b 式。4~6, 8は同II a 式。7も宇津内系の底部であろう。9は口縁部に刻みある小突起をもち、4条の横走沈線文が施される。続縄文初頭であろう。

石器は第281図-18がたたき石。19は両面加工ナイフ。20は搔器。19・20は黒曜石製。

(武田 修)



第279図 ピット485埋土 (1~10), 485a埋土 (11~13), 487埋土 (14~16) 出土土器



第280図 ピット488, 490平面図

ピット 489 a

遺 構 (第274図)

本ピットはピット489の北西壁上部と僅かに重複する。規模は長軸約1.72m, 短軸約1.10mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約42cmである。埋土の暗黒褐色砂層には10~20cm程の角礫が混入する。床面中央部からやや北壁側に直径10cm, 深さ17cmの小柱穴がある。

遺 物 (第284図-1~4, 第281図-21)

第284図-1は床面出土。口唇部の内側に縄端圧痕文が施される。縄文初頭であろう。2は極めて強く外反した口縁部に2条の縄線文が施される。縄文初頭であろう。3は縄文晩期幣舞式の異型土器。4は縄線文と縄端圧痕文が多様される。縄文晩期中葉であろう。

第281図-21は頁石製の両面加工ナイフ。

(武田 修)

ピット 489 b

遺 構 (第274図)

本ピットはピット489の南西壁上部を切って構築されている。規模は長軸約0.70m, 短軸約0.50mの小楕円形である。壁高は確認面から約18cmである。中央部に直径20cm程の角礫がある。

遺物は出土しておらず時期は不明である。

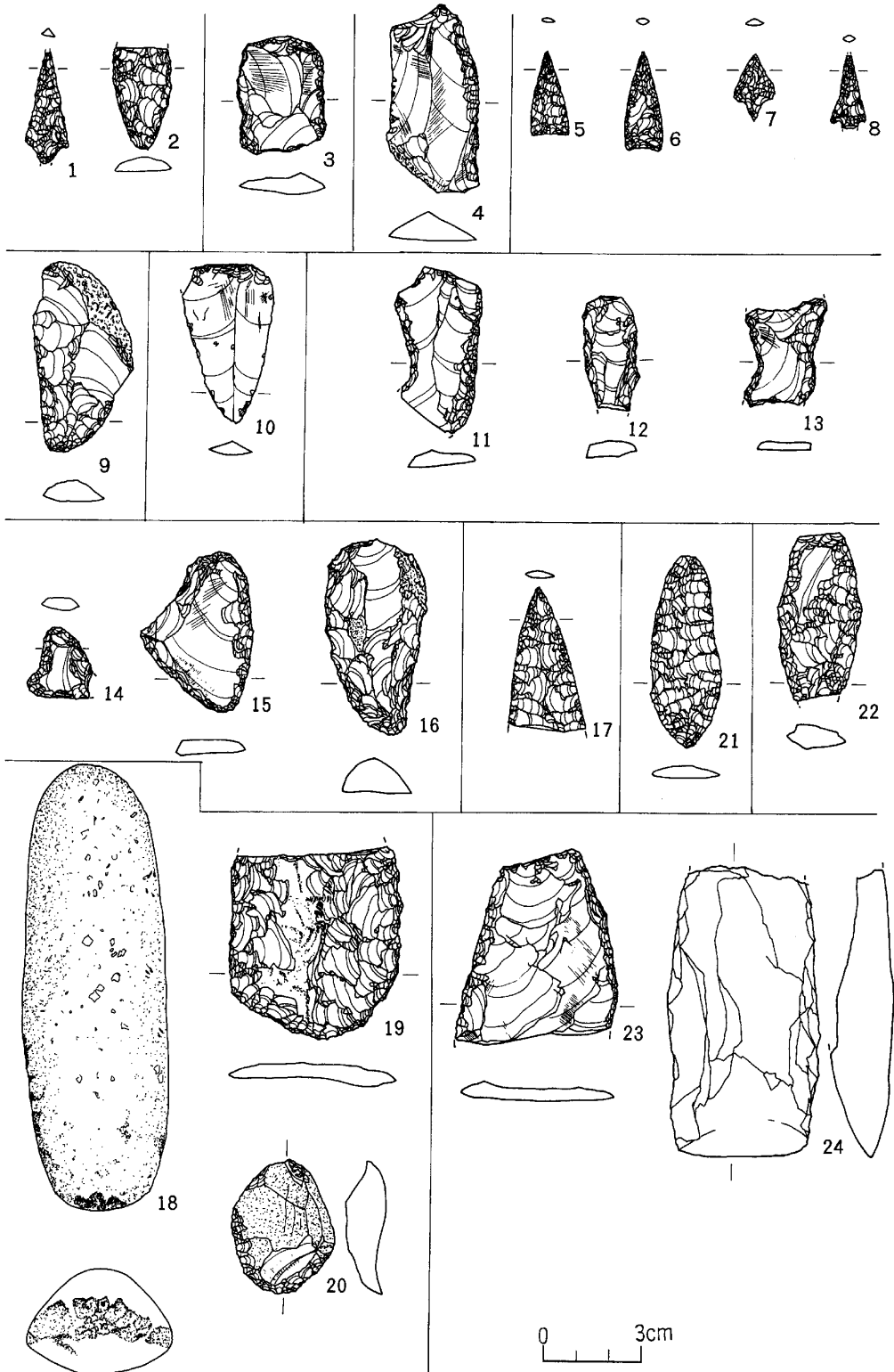
(武田 修)

ピット 490

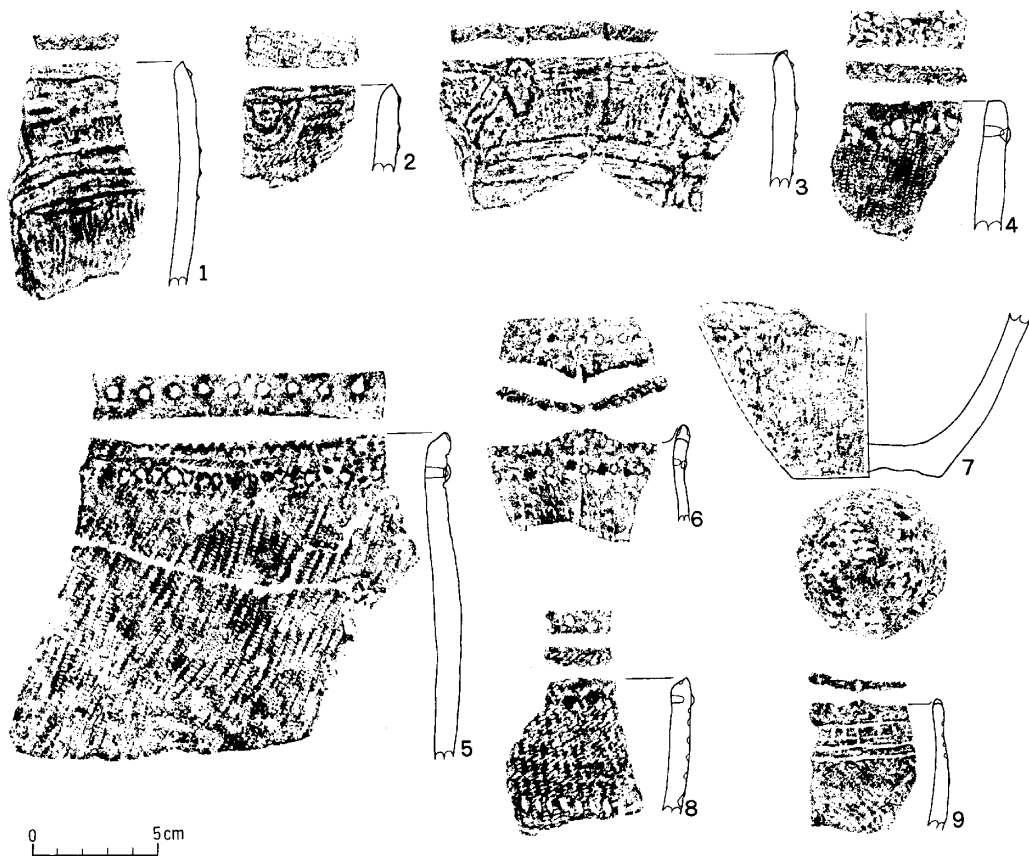
遺 構 (第280図)

本ピットはE'72グリッドに位置する。規模は直径約0.65mの円形を呈し, 壁高は確認面から約20cmである。

常呂川河口遺跡



第281図 ピット471埋土(1・2), 474埋土(3), 474a埋土(4), 474b埋土(5~8), 478埋土(9), 480埋土(10), 481埋土(11~13), 484埋土(14~16), 488埋土(17), 489埋土(18~20), 489a埋土(21), 491埋土(22), 494埋土(23・24) 出土石器



第282図 ピット489埋土（1～9）出土土器

遺物は出土しておらず時期は不明である。

（武田 修）

ピ ッ ト 491

遺 構（第169図）

本ピットはG'78グリッドで検出した。規模は長軸1.08m、短軸0.96mの円形を呈し、壁高は確認面から38cmを測る。壙底には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められた。

遺 物（第281図-22）

第281図-22は黒曜石製の両面加工ナイフ。

小 括

本ピットは壙底に遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められることから土壙墓と思われる。時期は不明である。

（佐々木 寛）

ピ ッ ト 491 a

遺 構 (第169図)

ピット491 aはピット491の北側に位置する。規模は直径1.18mの不整形を呈し、壁高は確認面から14cmを測る。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 492

遺 構 (第283図)

本ピットは77号竪穴の北側1.10mに位置する。規模は長軸1.70m、短軸1.56mの円形を呈し、壁高は確認面から35cmを測る。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 493

遺 構 (第283図)

本ピットはピット492の南西側と接する。規模は長軸1.20m、短軸1.14mの円形を呈し、壁高は確認面から47cmを測る。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 494

遺 構 (第283図)

本ピットは77号竪穴の南壁に位置する。長軸1.16m、短軸0.60mの長円形を呈し、壁高は確認面から35cmを測る。竪穴の廃棄後に構築しているため竪穴の南壁を破壊している。ピット上面より第284図-5の土器が出土しており、埋土上層からベンガラを含む赤褐色砂と小さな粘土塊が認められた。

遺 物 (第284図-5～7, 第281図-23・24, 図版64-2・3)

第284図-5はピット上面から出土した土器で口唇部に大突起が1対と2個1組の小突起が1対あり、口縁部には縄線文を巡らし、垂下した隆帯の下に同心円文をもつ。同心円文は隆帯で連結され、さらに隆帯を垂下させている。器高は下部が欠けているため不明であるが口径は22.5cmである。縄文文字津内II b式である。埋土からは6・7の土器が出土している。6は口径12.5cm、器高13.0cm。縄文のみである。7は口径14.5cm、器高13.0cm。1対の吊り耳と1対の小突起をもつ。縄線文と隆帯を巡らし吊り耳と小突起の下に同心円文をもつ。縄文文字津内II b式である。石器は第281図-23は黒曜石製の削器。24は泥岩製の石斧。

小 括

本ピットは壙底から遺存体は検出されていないが、上部にベンガラが見られることから土壙墓と考えられる。時期は続縄文字津内II b式。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 495

遺 構 (第102図)

本ピットはI'78グリッドに位置する。規模は長軸1.24m, 短軸0.86mの楕円形で、壁高は確認面から13cmと浅い皿状を呈する。

遺 物 (第284図-8)

第284図-8は続縄文字津内II a式。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 496

遺 構 (第283図)

本ピットは77号竖穴の北西壁際の床面で検出した。規模は長軸0.80m, 短軸0.66mの楕円形を呈し、壁高は77号竖穴の床面から25cmを測る。77号竖穴より古いと思われるが時期は不明である。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 497

遺 構 (第283図)

本竖穴は77号竖穴の北東壁で検出した。規模は上部の大半が77号竖穴によって削られているため不明であるが、壁高は確認面から25cmを測る。77号竖穴より古いと思われるが時期は不明である。

遺 物 (第285図-1)

第285図-1は埋土出土。縄文晩期であろう。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 498

遺 構 (第283図)

本ピットは77号竖穴北西壁で検出した。規模は長軸0.96mであるが短軸は南東側が77号竖穴とピット496に切られているため不明である。壁高は確認面から33cm。埋土中に大きな礫が認められた。77号竖穴より古いと考えられるが時期は不明である。 (佐々木 覚)

ピ ッ ト 499

遺 構 (第165図)

本ピットはH'81グリッドで検出した。規模は長軸1.43m、短軸0.96mの楕円形を呈する。壁高は確認面から10cmと浅い皿状である。(佐々木 覚)

ピ ッ ト 499 a ・ 499 b

遺 構 (第165図)

ピット499 aはピット499の北側に位置する。規模は長軸1.50m、短軸1.20mの楕円形を呈し、壁高は確認面から55cmを測る。南側をピット499に切られている。

ピット499 bはピット499 aの東側に位置する。規模は長軸1.28m、短軸1.00mの楕円形を呈し、壁高は30cmを測る。西側をピット499 aに切られ、東側を僅かに76号竪穴と重複している。

遺 物 (第285図-2)

ピット499 aは第285図-2が縄文晩期。(佐々木 覚)

ピ ッ ト 500

遺 構 (第276図)

本ピットは42 a号竪穴の北壁を切って構築されている。壙上部の南側からピット500 aの南側にかけてベンガラが東西方向に散布されている。規模は長軸約1.20m、短軸約1mの不整形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約55cmを測る。西壁と東壁の端部には直径約10~13cm、深さ約8~10cmの小柱穴が認められる。

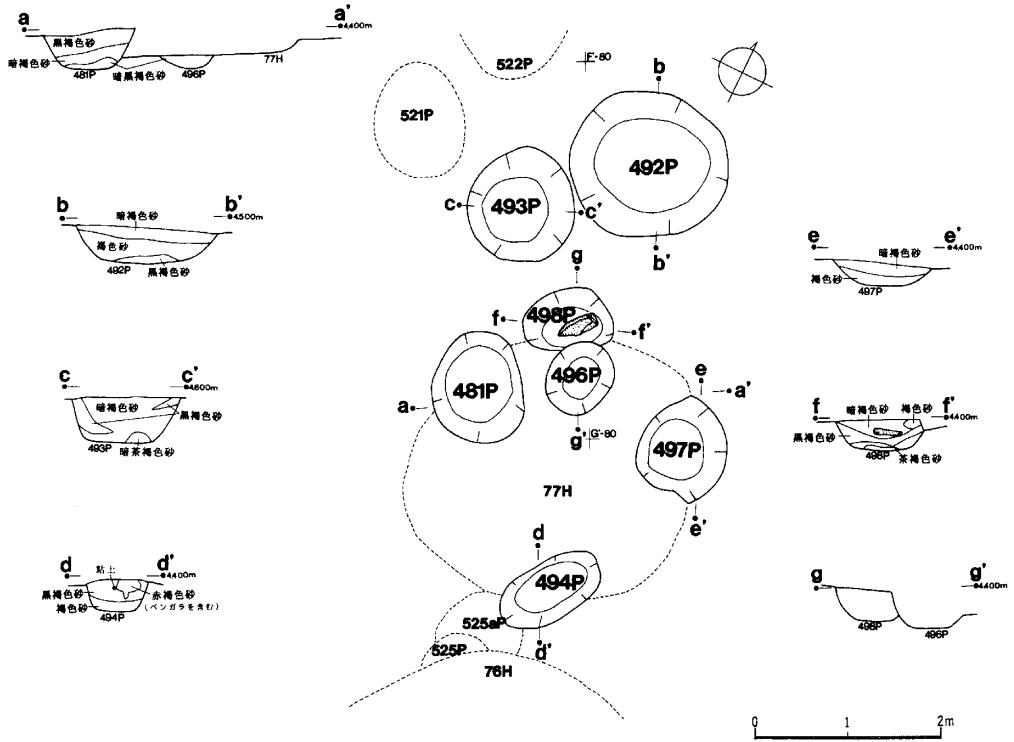
遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、底面に小柱穴をもつことから続縄文初頭の土壙墓の可能性がある。(武田 修)

ピ ッ ト 500 a

遺 構 (第276図)

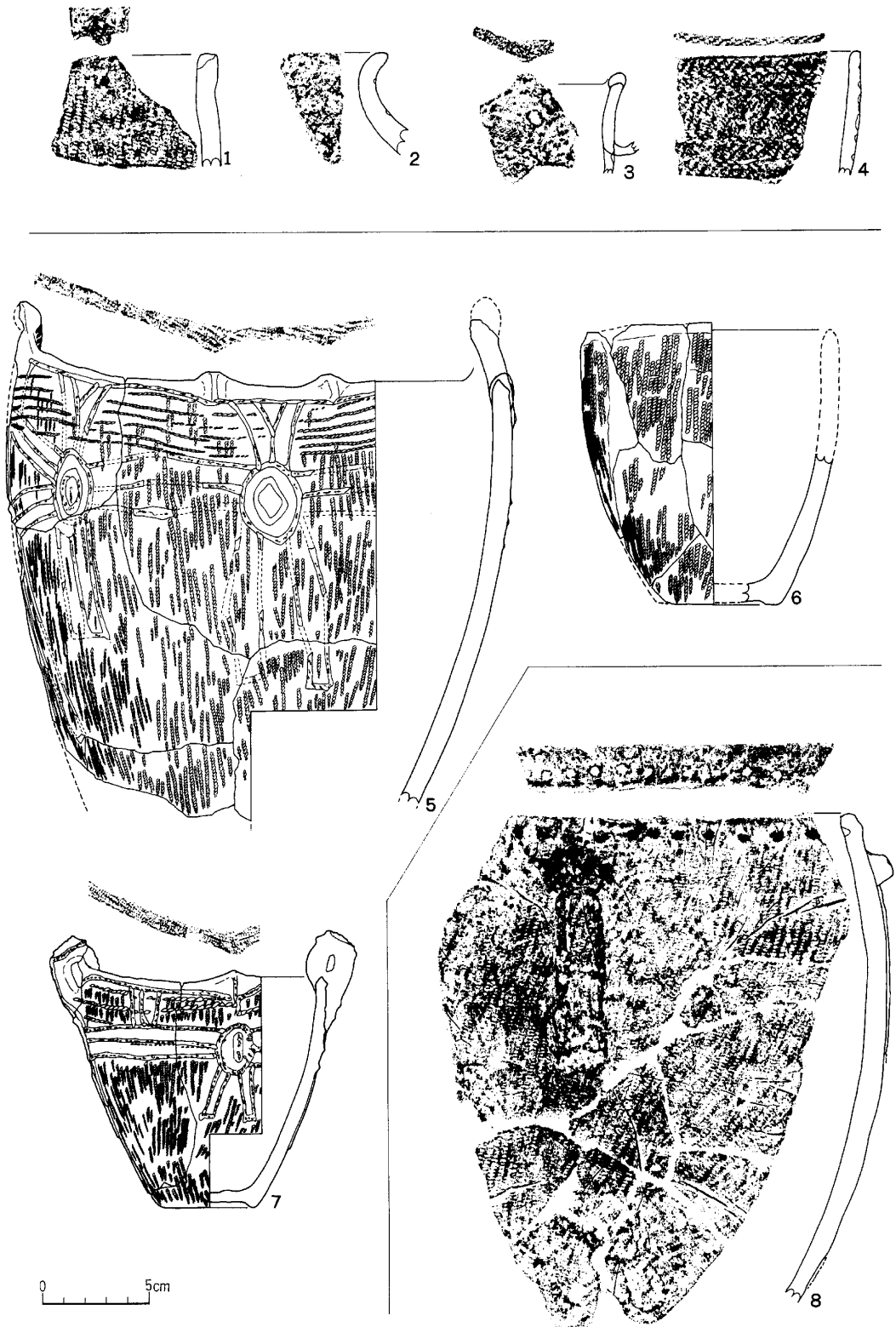
本ピットはピット500に西側の大半を削られている。残存部から判断すると形態は楕円形を呈すると思われる。短軸約0.96mである。壁は斜めに立ち上がり、高さは確認面から約40cmを測る。

遺物が出土していないため詳細な時期は不明である。(武田 修)

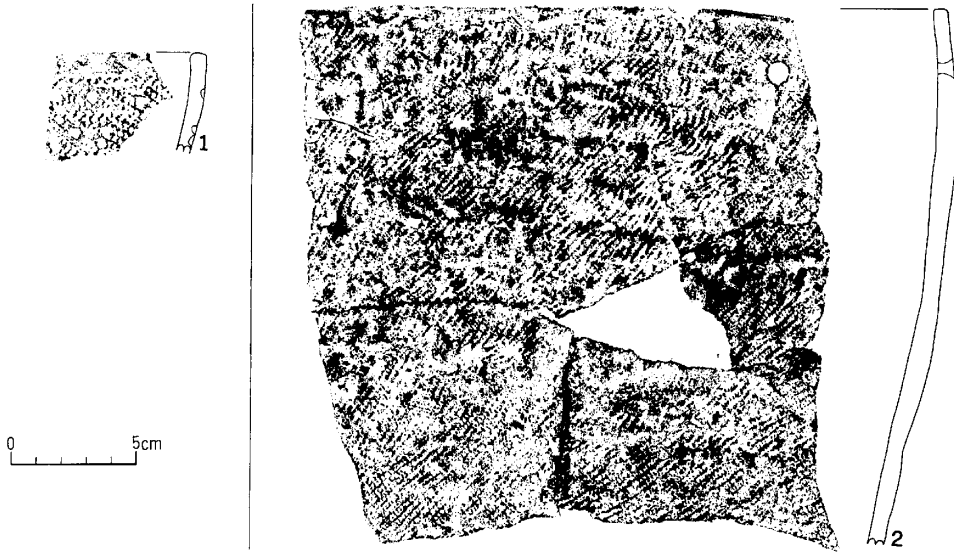


第283図 ピット481, 492, 493, 494, 496, 497, 498平面図

常呂川河口遺跡



第284図 ピット489a床面(1)・埋土(2~4), 494埋土(5~7), 495埋土(8) 出土土器



第285図 ピット497埋土（1）、499a埋土（2）出土土器

埋 甕 5

遺 構 (第286図, 図版64-4)

本埋甕はピット401の下部のA77グリッドに位置する。ピット401の調査段階で埋甕の存在を確認できなかった。規模は長軸約0.82m, 短軸約0.65m程の小楕円形を呈し, 長軸面を南-北方向にもつ。土器は縦に割られたためであるのか内面を上に向け南北に大きく別れた状態で出土した。掘り込み面の断面は緩い「V」字状を呈し, 高さは約35cmを測る。底面中央部には直径約28cm, 深さ約8cmの小ピットがある。

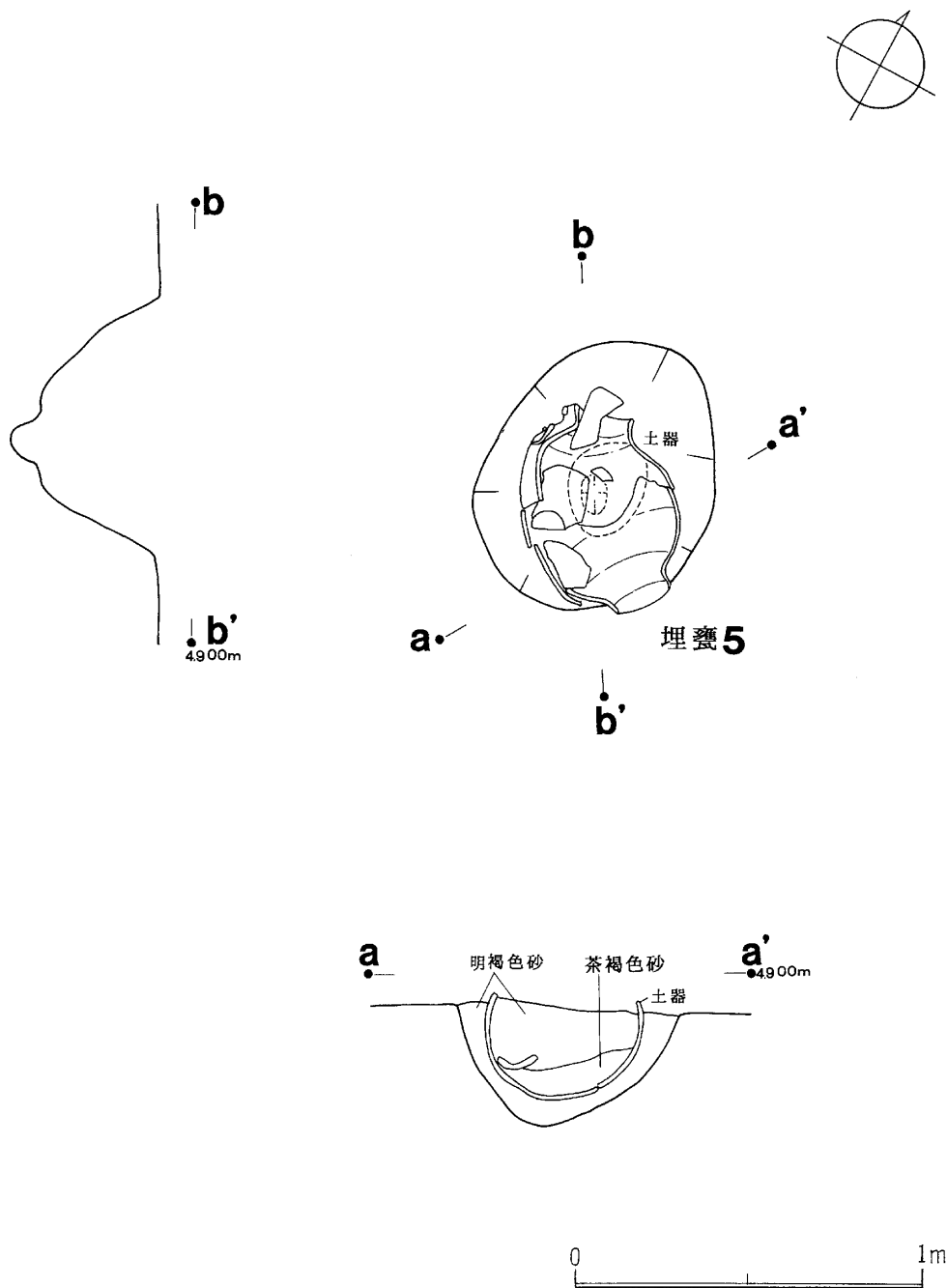
遺 物 (第287図)

この土器は口径約20cm, 器高約56.5cmの特大土器である。口径, 底部が小さく胴部が丸みをもった壺形土器である。底部が小さいため建てると不安である。直立した口縁部に8条の縄線文と縄端圧痕が施され, 4個のボタン状貼付文に向かって施され, 三角形の文様となる。時期は宇津内II a式に比定される。

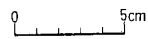
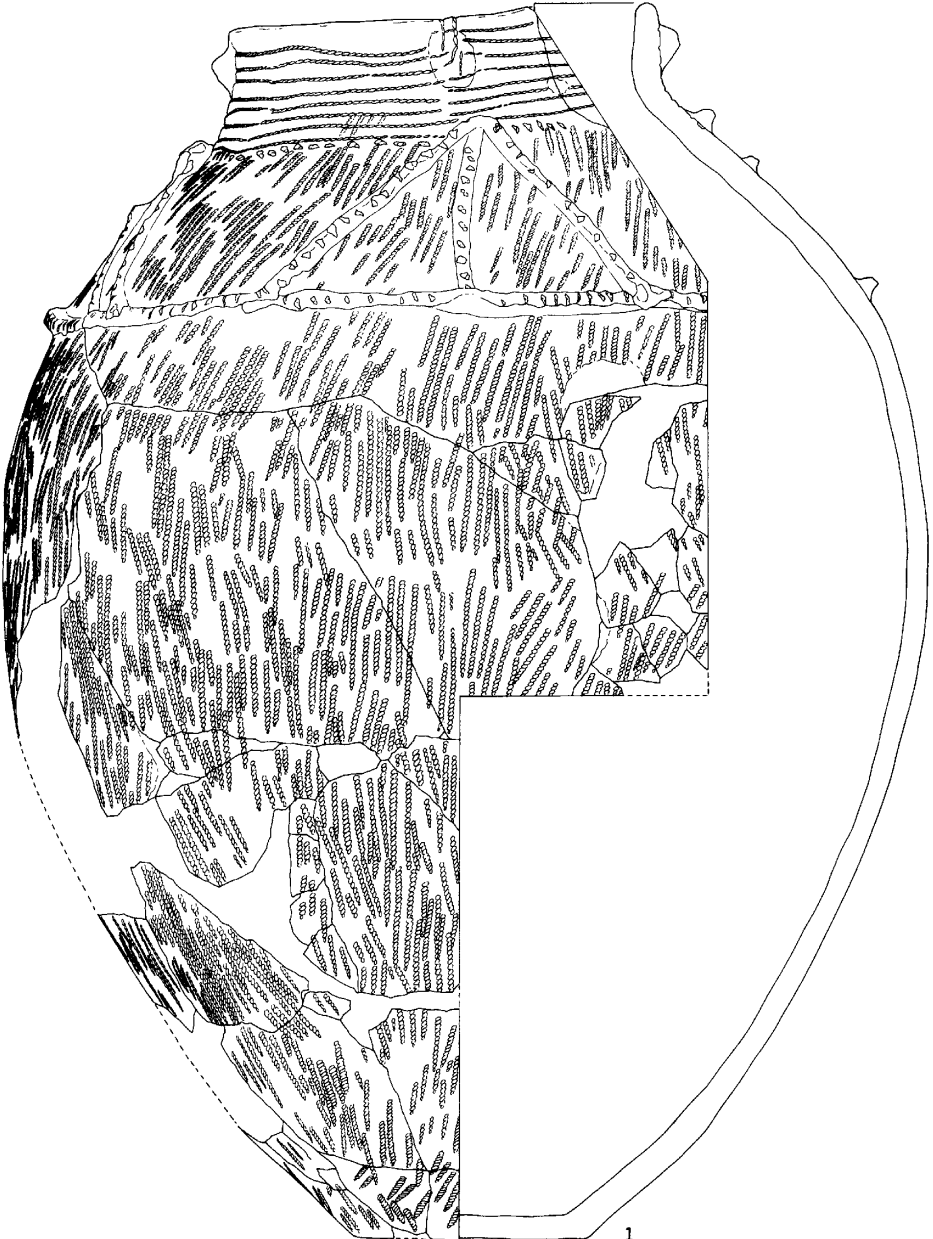
小 括

宇津内II a式の埋甕はこれまで岐阜第2遺跡, 栄浦第一遺跡, 常呂川河口遺跡などで発見されている。これらの遺跡の埋甕は口縁部が内湾するキヤリパー形の土器であり, 口縁部が欠失する土器はあるものの完形品で出土する傾向がある。岐阜第2遺跡では内部からベンガラと伴に新生児の骨も検出されており甕棺とし利用されたことが指摘されている。しかし, 本例は宇津内II a式の中でも古く位置付けられ, 器形も異なる。割れた状態で出土しているため甕棺としてではなく他の用途があると思われる。底部は極端に不安定であり, 内外面に煤は付着していないため煮炊き用ではなく, 保存用・水溜め用として使用されたのであろう。(武田 修)

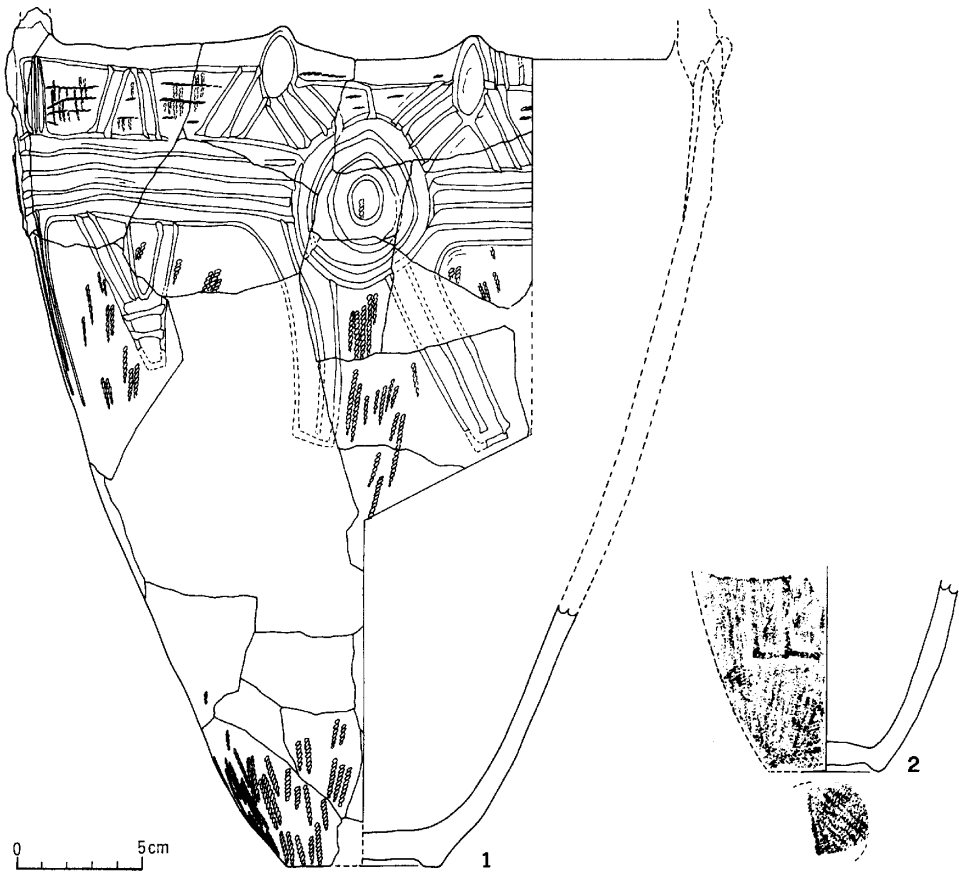
B-78



第286図 埋葬5 平面図



第287図 埋 甕 5



第288図 集石7 (1・2) 出土土器

第VI章 ま と め

1. 擦文文化期

本時期の竪穴は50, 51, 63, 64, 73, 66号の6軒, カマドを持たない4号とした小竪穴1軒を調査した。各竪穴の時期は宇田川編年後期に比定される。特筆されることは51号竪穴の埋土から擦文後期, 藤本編年g・h期とトビニタイII群とI群の中間タイプの土器が共伴することである。本遺跡においてトビニタイII群が出土するのはオホーツク文化期14号竪穴埋土に堆積する摩周b火山灰上から擦文後期の土器が共伴する例が挙げられ, 平成12年度に調査した168号竪穴のカマド内からも完形土器が出土する。ソーメン状貼付文を主体とするオホーツク文化期15号竪穴埋土を覆う摩周b火山灰層を切り込んで擦文後期の土壇墓が構築されている。これらの事例はオホーツク文化後半期に位置づけられるソーメン状貼付文と擦文後期, 藤本編年g・h期とは時間差があり, トビニタイI群と擦文後期は同一時間に接触したことを明示している。なお, 次号で報告予定の137号竪穴は中央に石囲み炉をもち, 近接するグリッドからトビニタイII群が出土している。

73号竪穴の埋土からはファイゴの羽口が1本出土し, 74号竪穴の樽前a火山灰層上面では鉄滓も認められた。73号竪穴の居住者が続縄文期の竪穴の窪みを利用して破損した鉄器の補修など野鍛冶を行ったものと推測される。

63号竪穴は焼失住居である。壁際を中心に丸太材, 半割材, 板材などの炭化材が多量に検出された。興味深いのは北西部壁に「L」字状のベッド状遺構が見られることである。この部分は床面より約10cmほどの高まりを持ち, その上に板材が並べられている。意識的に掘り残してベッド状にしたものと考えられる。一方, 東壁側ではこの高まりは認められないものの床面に板材が並べられ板敷としている。ベッド状遺構と床面板敷の2方法が取られていることになる。ベッド状遺構の検出は小平町高砂遺跡18号竪穴, 紋別市オムサロC遺跡3号竪穴などで報告されている。床面板敷の例は無いが美深町楠遺跡37号の下層炭化材はこの可能性がある。ベッド状遺構と床面板敷を持つ本例は特殊と言える。

擦文期の竪穴は平成13年度までにカマドを持つ竪穴66軒, カマドを持たない竪穴19軒を調査している。カマドを持つ竪穴は後期を主体とした竪穴であるが, 土器形式からみた竪穴の変遷過程, 同時併存の問題などがあり, カマドを持たない竪穴の集落内における位置づけなども今後の課題として残されている。

2. 続縄文文化期

調査した土壇墓を時期別にみると続縄文初頭フシココタン下層など12基。宇津内II a期11基。同II b期9基。後北C₁期2基。時期不明36基の計70基である。その他, 埋甕1基がある。各期

の墓の重複はフシココタン下層並行期のピット329bを切り込んだ宇津内II a期のピット329a、宇津内II a期のピット329aを切った同II b期のピット329があり、前後関係を確認することができた。

フシココタン下層並行期の土壙墓であるピット329bの形態は楕円形を呈する。南頭位の屈葬と思われる。底面の壁際には小柱穴がほぼ等間隔に配列されている。遺存体の上部からミニチュア土器10点、小型土器2点、双口土器1点の合計13点出土。土器の文様構成では縄文晩期に特徴的な変形工字文と続縄文的な縄線文が施され、底部は揚底と丸みをもつものがある。これまでの宇津内II a期の土壙墓と比較すると底面の小柱穴、頭位の方向などは宇津内II a期の土壙墓と類似するものの、幅は宇津内II a期の方がやや広がった楕円形であり、形態的に若干の差異がある。フシココタン下層式は縄文文化晩期幣舞式、緑ヶ岡式に後続し底面の小柱穴はその影響を受け、宇津内II a式まで引き継がれるものと理解される。ピット329aと329bの重複はそれを示している。

宇津内II a期の土壙墓で特筆されるのはピット470である。これまでの同期の土壙墓と比較すると副葬品の量において格段の差があり、規模も異なる。副葬品では多量の琥珀玉は従来通り遺体上部の胸部付近に連状で置かれているものの、土器は東側、石器群は西側に配置するなど意識的である。連状の琥珀玉は直径約4～5mmのものと直径約6～12mmのもの2種類ある。2種類とも上下同一方向に並べられており、総数約2,500粒に及ぶ。琥珀玉に近接して石偶、クマ形のペンダントが出土。第270図-26のヒトを意匠した石偶は東北・北海道さらに北千島、沿海州などの北方地域から「靴形石器」と称される石製ナイフと関連して出土すると指摘されている¹⁾。この土壙墓では第269図-27のナイフは刃部が弧状を呈する特徴をもつ。また、側縁部に原石面を遺した断面三角形・楔状の第269図-28・29の縦長ナイフも特徴的である。第270図-29のクマ形ペンダントは鼻面を両側から穿孔している。上面観はクマ、底面は海獣を表現する。北海道では江別市高砂遺跡、同旧豊平河畔遺跡、芦別市滝里安井遺跡などが続縄文初頭のクマ形石製品出土遺跡として報告されている。いずれも続縄文初頭に位置づけられるものである²⁾。この様なクマ意匠遺物は縄文期よりも続縄文期が増加するとされている³⁾。石偶、クマ形ペンダントは他の土器群、石器群とは異なった意義づけをもち、遺体のほぼ中央部に置かれた琥珀玉と同様に特別な「物」として解釈される。本土壙墓の形態は不整円形である。これまでの同時期の土壙墓は楕円形を基調としたものであったが、唯一本例だけが形態を異にする。豊富に副葬品を埋納する必要性が楕円形から不整円形へと大型化したのだろう。頭位の方向は明らかにできなかったが、遺存体の状況から北頭位の可能性がある。南-西頭位の従来の土壙墓とも相違する。この様に土壙墓の形態、副葬品の状況から被葬者は集団を司るなど特別な地位にあった者と理解される。

ピット371a、372は宇津内II b期の土壙墓である。両ピットからはカムチャツカ、千島列島などにも見られる三日月形石器が出土している⁴⁾。

本遺跡の琥珀玉は宇津内II a 式段階が最も多く、次の同II b 式では減少することを先に指摘したことがある。今回の報告でも同様であり、同II b 式から琥珀玉は全く出土していない。滝里安井遺跡の琥珀玉はVI群 a 類であるフシココタン下層式から興津式に限定されるという。本遺跡ではこの時期の土壌墓も調査しているが現在のところ琥珀玉は認められない。この差は地域性によるものか、伝播ルートが異なるものか不明であるが、いずれにしても続縄文初頭に増加するのは事実である。本遺跡例にみられるII a 式の段階で爆発的に増えるのはサハリン、千島など北方地域との接触によるところが大きいのであろう。ピット470に代表される石偶、靴形石器、琥珀玉はその例である。一方、三日月形石器も北方地域と関連ある遺物であるが、II b 式のこの頃からのために後北系文化の影響が道東部まで広がりをみせ交易ルートが変容したのであろう。後続する後北系文化において石偶、靴形石器は見られず琥珀玉の減少はそれを端的に現わしている。

続縄文期の土壌墓に副葬された石器の産地同定では新知見が得られた。宇津内II a 期の土壌墓はピット263a, 267。同II b 期はピット24, 132。後北B期はピット23。後北C₁期はピット22, 130。後北C₂・D期はピット44a出土石器の産地を同定した。附編に報告されている通り、全期間を通じて置戸産の黒曜石が多用されているものの、宇津内II b 期だけは白滝産の黒曜石も増加し、後北期では置戸産が使用される。常呂川の支流に位置する置戸産の黒曜石が多用されることは理解されるが、白滝産が少ないのは意外である。宇津内II b 期において白滝産が増加する理由は定かでないが黒曜石の流通ルートに何らかの変化があったことが読み取れる。今後、さらに各期の複数の土壌墓出土石器の同定を行い、常呂川河口遺跡における続縄文各期の黒曜石産地の利用頻度を明らかにしたい。

57号竪穴埋土出土の鈴谷式土器も特筆される。近接して出土した後北C₂・D式、北大I式とは明確に共伴したと断定できないが3者の土器は時間的にそれほど差がないと思われる。北大I式は築館町伊治城遺跡では塩釜II式とも共伴しており4世紀と考えられているが、大量生産された蛇紋岩製の石製小玉と比較して4世紀末、あるいは5世紀の意見もある⁹⁾。札幌市K135遺跡4丁目地点の第VII c 層からは鈴谷式とそれに伴う角柱状石斧、後北C₂・D式、東北地方弥生文化終末の天王山式などが出土しており¹⁰⁾、3世紀末から4世紀と考えられるが、本遺跡出土の後北C₂・D式は新しいタイプのものであり4世紀後半に比定できる。鈴谷式もまた後北C₂・D式に近い4世紀後半と思われる。北大I式は5世紀前半に位置するのであろう。

本遺跡の発掘調査が昭和63年度に開始されてから15年が経過した。この報告書の上梓で3巻目となる。全体の3分の1を報告した程度であり、最終報告まで残り4巻を目標としている。この様な長期間の発掘調査、並びに遺物整理期間には新潟大学教授（東京大学名誉教授）の藤本強、東京大学大学院人文社会系研究科教授宇田川洋、北海道埋蔵文化財センター大沼忠春、種市幸生の各氏をはじめ大変多くの方からご指導、助言を頂きました。記して感謝の意を表す
（武田 修）

文 献

- (1) 宇田川洋『アイヌ文化成立史』 北海道出版企画センター 1988年
- (2) (財)北海道埋蔵文化財センター『滝里遺跡群IX』 (財)北海道埋蔵文化財センター調査 報告書第137集 平成8・9・10年度
- (3) 宇田川洋「動物意匠遺物とアイヌの動物信仰」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第8号 1989年
- (4) 杉浦重信「千島列島における考古学研究の現状と課題」 1995年
- (5) 阿部義平『蝦夷と倭人』 1999年
阿部義平氏は石狩市ワッカオイ遺跡出土の石製小玉を大阪府和泉黄金塚古墳の多量の石製小玉と比較して4世紀後半とし、北海道大学構内遺跡の小玉を5世紀と指摘している。
- (6) 上野秀一編『K135遺跡－4丁目地点』 札幌市文化財調査報告書XL 1990年

圖 版



1. 47号竖穴



2. 47号a竖穴



1. 47号竖穴埋土出土土器



2. 47号a竖穴床面出土土器



3. 49号竖穴



4. 49号竖穴埋土出土土器

5. 49号竖穴埋土出土土器

6. 49号竖穴埋土出土土器



1. 50号竖穴



2. 50号竖穴床面出土土器

3. 50号竖穴埋土出土土器



4. 50号竖穴埋土出土土器



1. 51号竖穴



2. 51号竖穴埋土出土土器

3. 51号竖穴埋土出土土器

4. 51号竖穴埋土出土土器



5. 51号竖穴埋土出土土器

6. 51号竖穴埋土出土土器

7. 51号竖穴埋土出土土器



1. 51号竖穴埋土出土土器

2. 52号竖穴床面出土土器

3. 52号竖穴埋土出土土器



4. 52号竖穴



1. 53 a 号竖穴 · 53 b 号竖穴



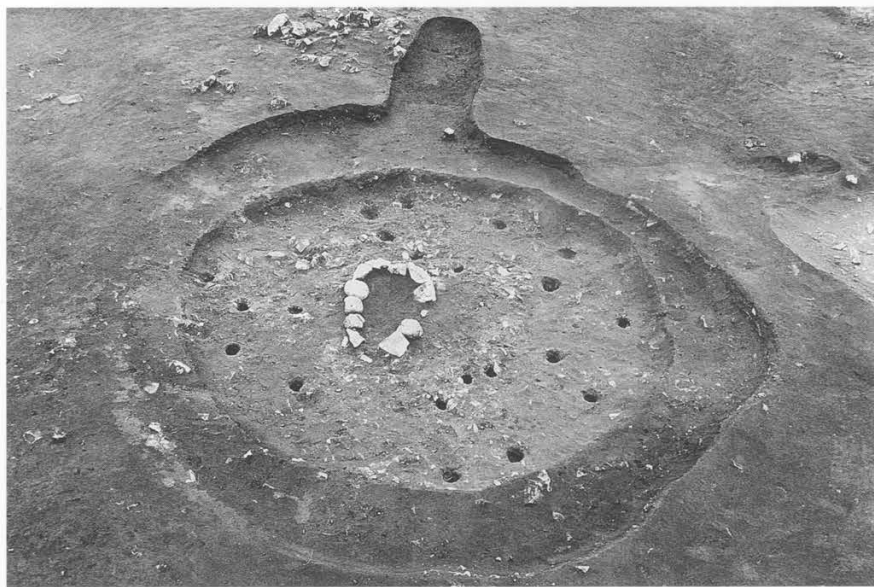
2. 53号竖穴床面出土土器

3. 53号竖穴火山灰直上出土土器

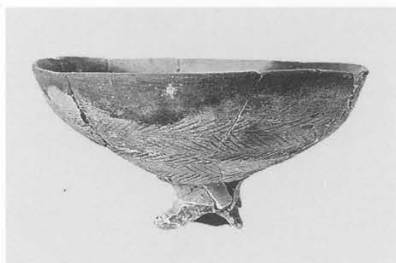
4. 54号竖穴埋土出土土器



5. 54号竖穴



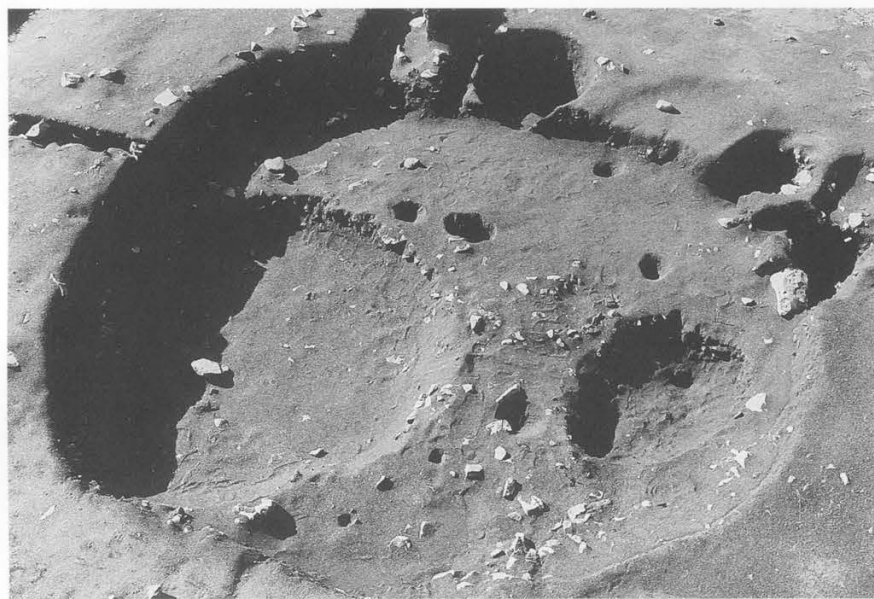
1. 55号竖穴·55a号竖穴



2. 55号竖穴埋土出土土器



3. 55号竖穴埋土出土土器



4. 56号竖穴



1. 57号竖穴



2. 57号竖穴床面出土土器

3. 57号竖穴床面直上出土土器

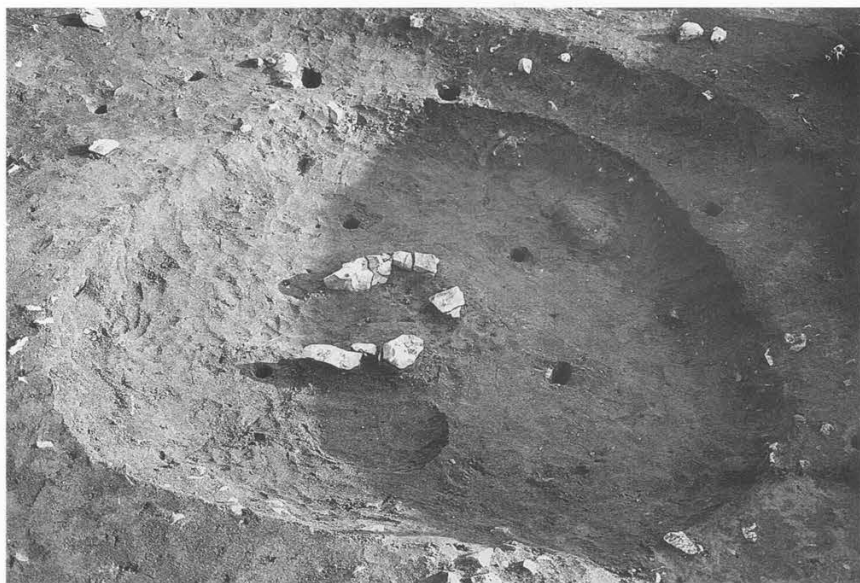
4. 57号竖穴埋土出土土器



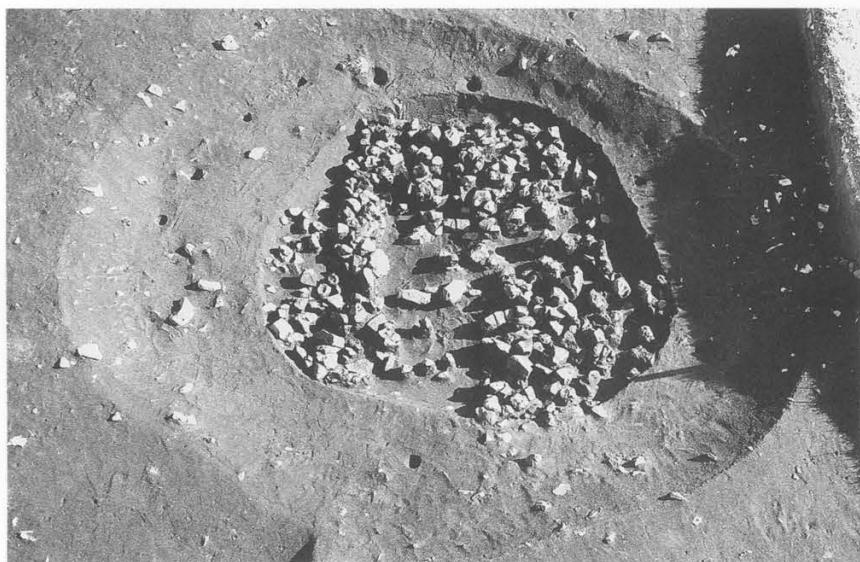
5. 57号竖穴埋土出土土器

6. 57号竖穴床埋土土器

7. 57号竖穴埋土出土土器



1. 75 a 号竖穴

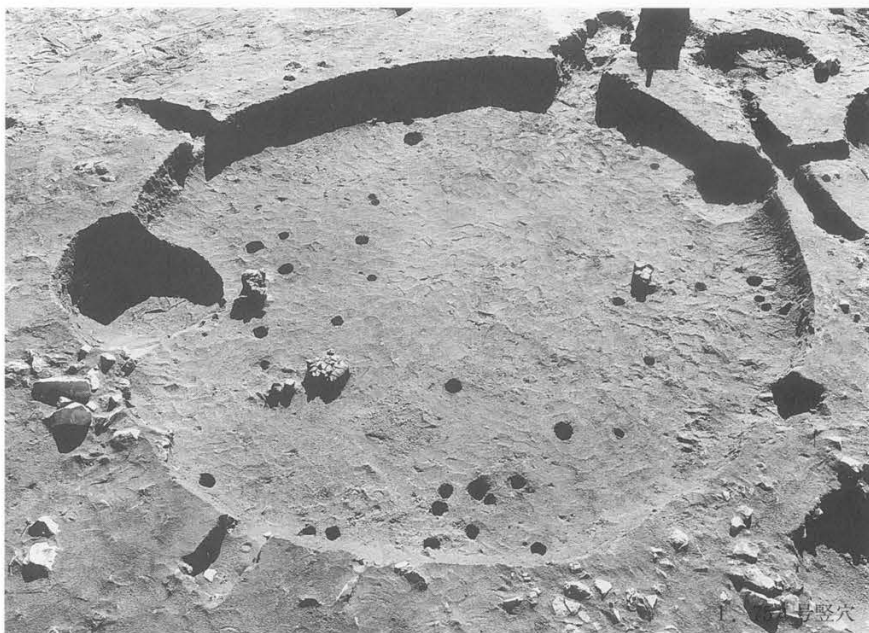


2. 57 a 号竖穴礫出土状况

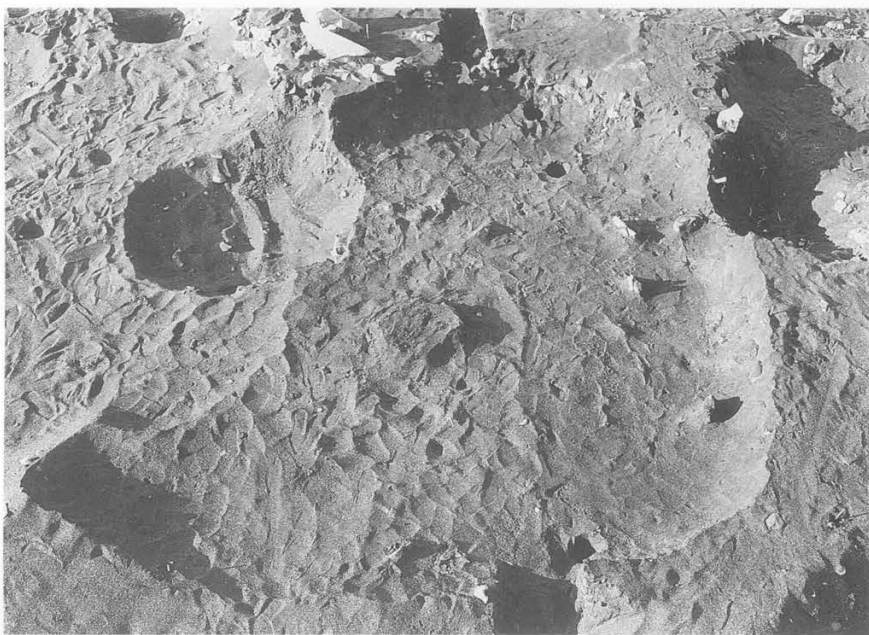


3. 57 a 号竖穴埋土出土土器

4. 57 a 号竖穴埋土出土土器



1. 57b号竖穴



2. 57c号竖穴



1. 58 a 号竖穴床面出土土器

2. 58 a 号竖穴埋土出土土器

3. 58 a 号竖穴埋土出土土器



4. 58 a 号竖穴



5. 60号竖穴



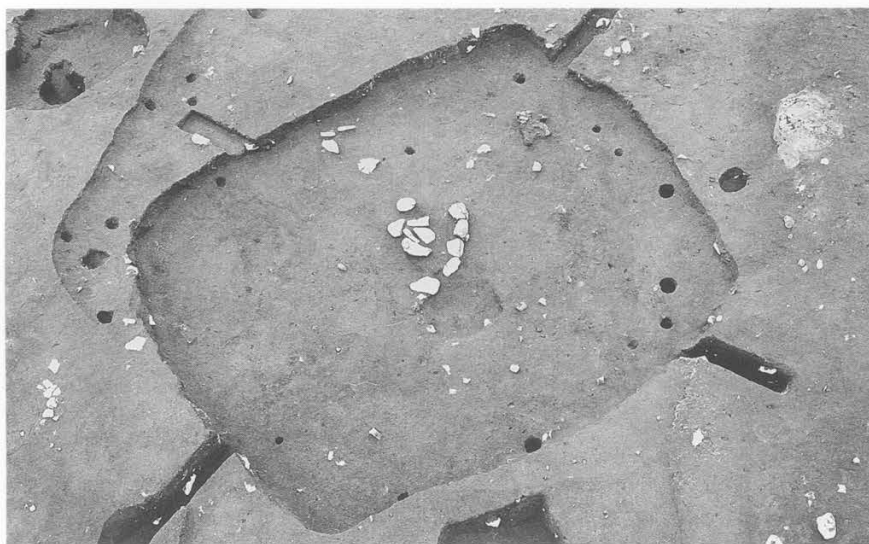
1. 61号竖穴



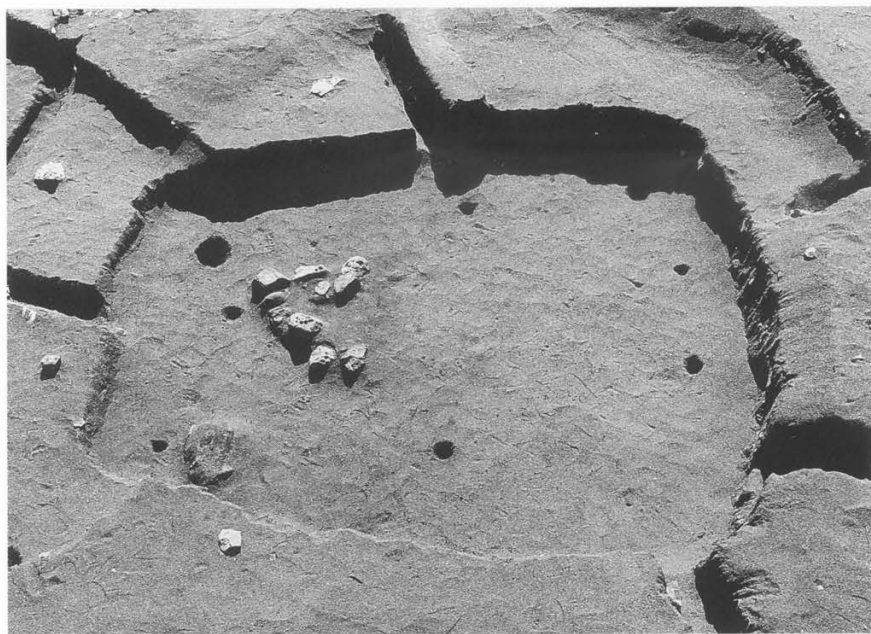
2. 61号竖穴埋土出土土器



3. 61a号竖穴埋土出土土器



4. 61a号竖穴



1. 61b号竖穴



2. 61c号竖穴



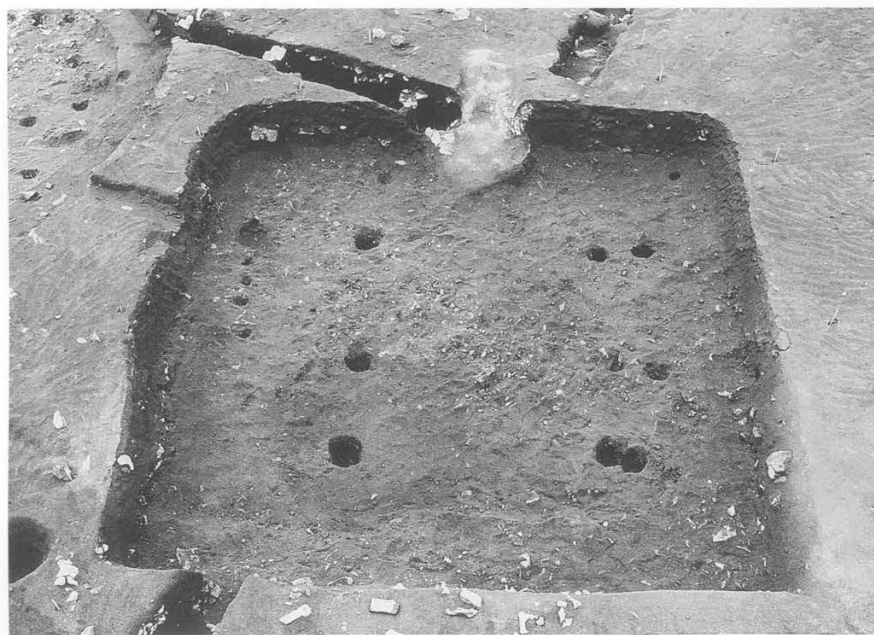
1. 61 f 号竖穴



2. 62号竖穴



1. 63号竖穴遗物出土状况



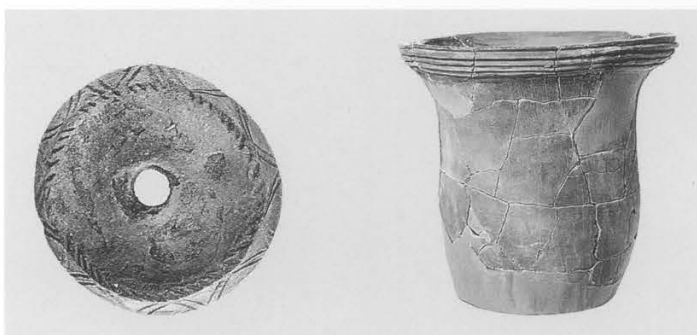
2. 63号竖穴



1. 63号竖穴床面出土土器

2. 63号竖穴床面出土土器

3. 63号竖穴床面出土土器

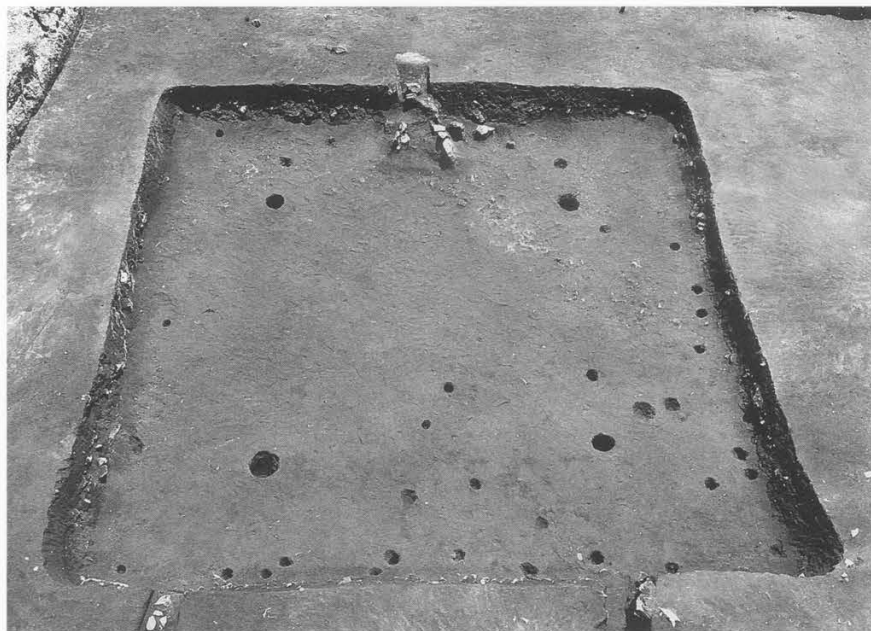


4. 63号竖穴床面出土土製品

5. 63号竖穴床面出土土器



6. 64号竖穴遺物出土狀況



1. 64号竖穴



2. 64号竖穴床面出土土器



3. 64号竖穴床面出土土製品

4. 64号竖穴床面出土土製品



5. 64号竖穴埋土出土土器



1. 65 a 号竖穴



2. 66号竖穴



3. 66号竖穴床面直上出土土器

4. 66号竖穴床面直上出土土器

5. 67号竖穴床面出土土器



1. 67号竖穴



2. 68号竖穴



3. 68号竖穴床面出土土器

4. 68号竖穴埋土出土土器

5. 68号竖穴埋土出土土器



1. 69号竖穴



2. 69号竖穴床面出土土器

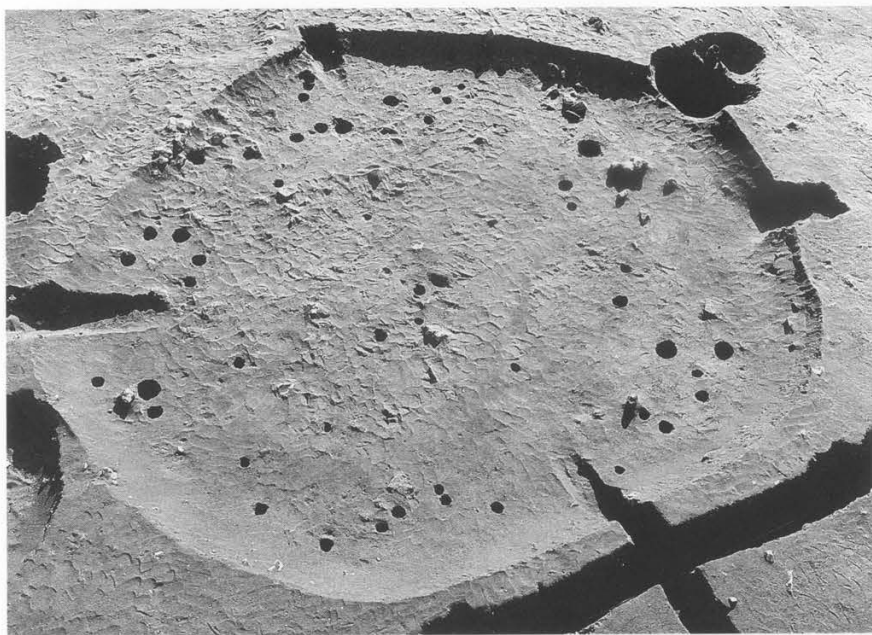
3. 69号竖埋土面出土土器

4. 69号竖穴埋土出土土器



5. 69号竖穴埋土出土土器

6. 69号竖穴埋土出土土器



1. 69a号竖穴



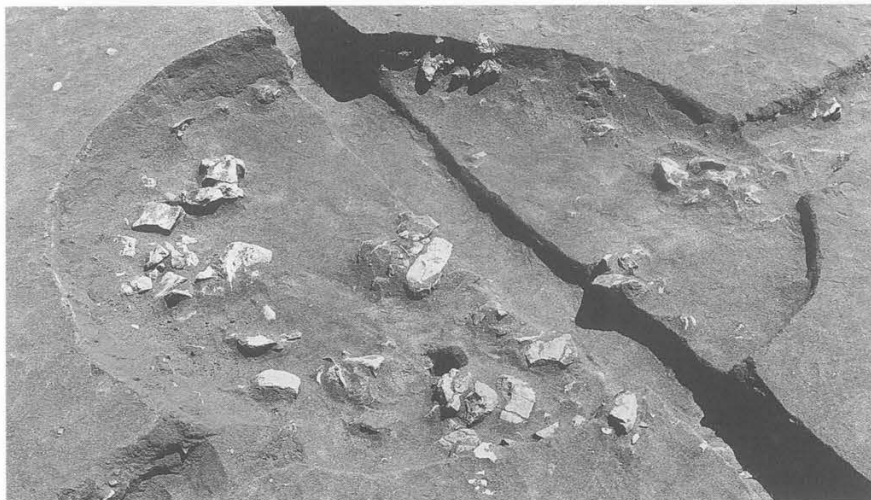
2. 70号竖穴



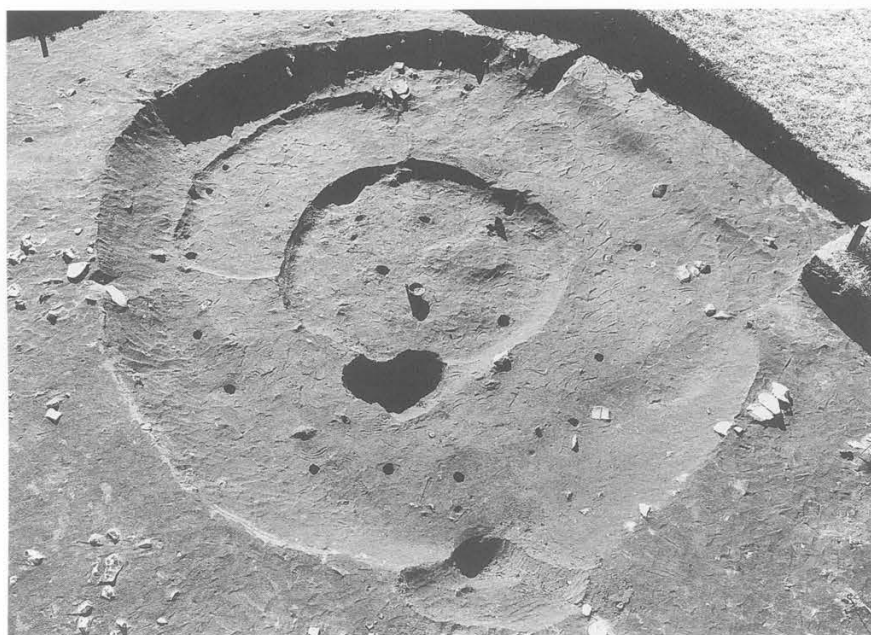
3. 70号竖穴埋土出土土器



4. 70a号竖穴埋土出土土器



1. 71号竖穴



2. 72号竖穴·72a号竖穴·72b号竖穴



1. 72号竖穴床面出土土器

2. 72号竖穴床面出土土器

3. 72号竖穴埋土出土土器



4. 72号竖穴埋土出土土器

5. 72号竖穴埋土出土土器

6. 72号竖穴埋土出土土器



7. 72号竖穴埋土出土土器

8. 72 b号竖穴床面出土土器 (正面·侧面)



9. 73号竖穴遺物出土狀況



1. 73号竖穴



2. 73号竖穴床面出土土器

3. 70号竖穴床面出土土製品

4. 73号竖穴埋土出土土器



5. 73号竖穴埋土出土土器

6. 73号竖穴埋土出土土器

7. 73号竖穴埋土出土土器



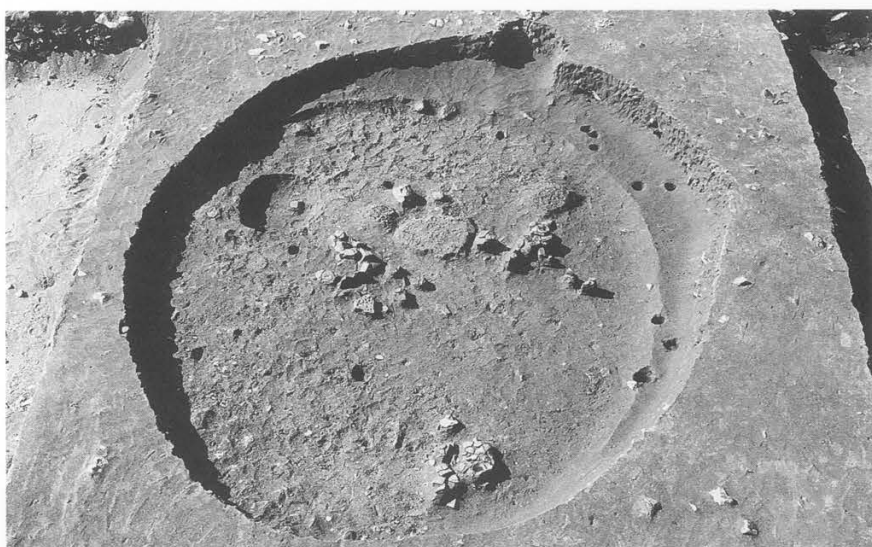
8. 73号竖穴埋土出土土器



1. 74号竖穴床面出土土器

2. 74a号竖穴床面出土土製品

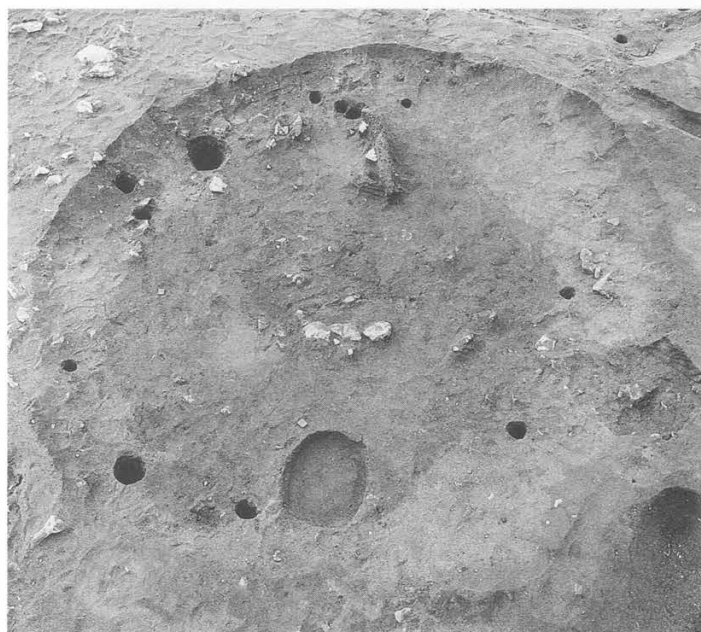
3. 74a号竖穴床面出土土器



4. 74号竖穴·74a号竖穴



5. 75号竖穴



1. 76号竖穴



2. 76号竖穴埋土出土土器



3. 76号竖穴埋土出土土器



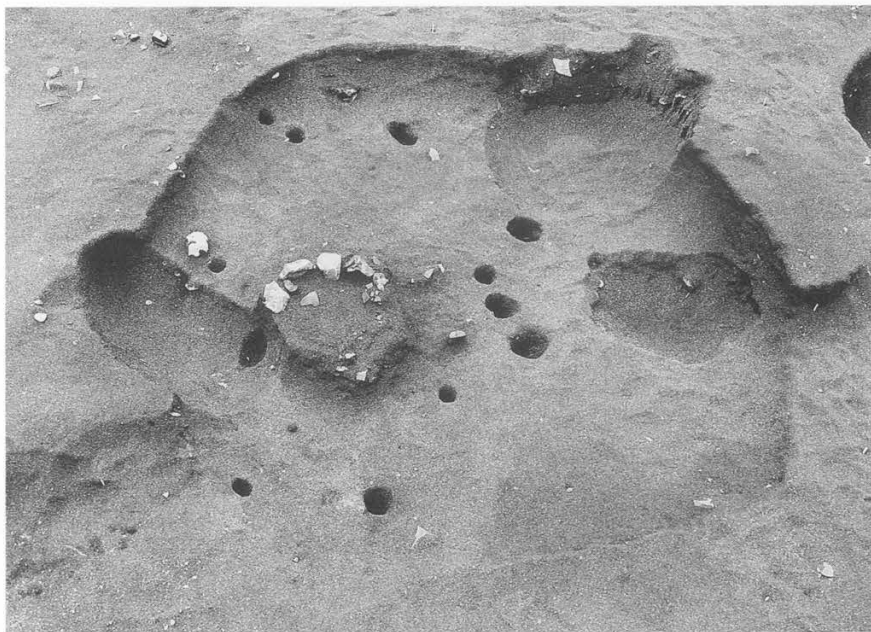
4. 76a号竖穴



5. 76a号竖穴埋土出土土器



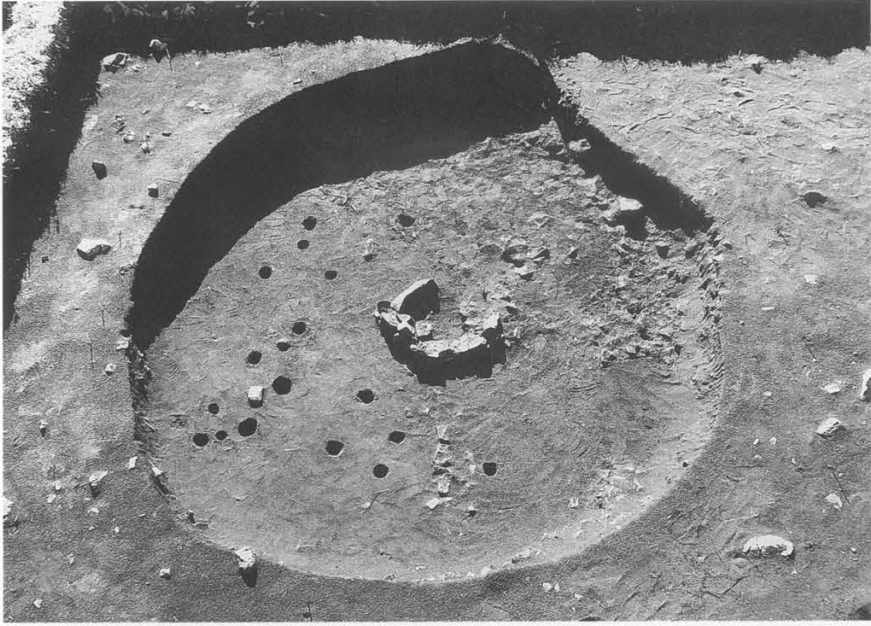
6. 76a号竖穴床面出土土器



1. 77号竖穴



2. 78号竖穴



1. 79号竖穴



2. 79号竖穴床面出土土器

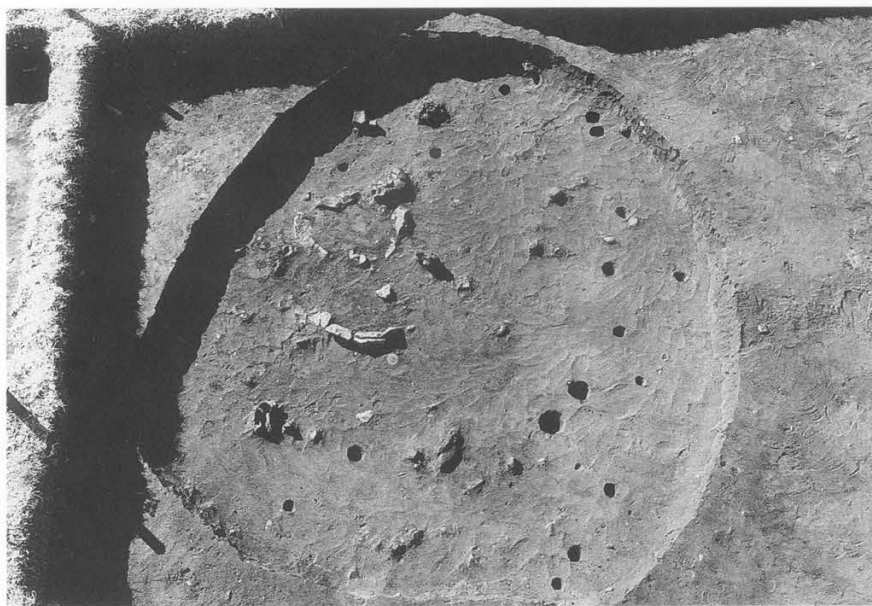
3. 79号竖穴埋土出土土器

4. 79号竖穴埋土出土土器



5. 79号竖穴埋土出土土器

6. 79号竖穴埋土出土土器



1. 80号竖穴



2. 80号竖穴床面出土土器



3. 80a号竖穴



1. 4号小竖穴



1. ピット327



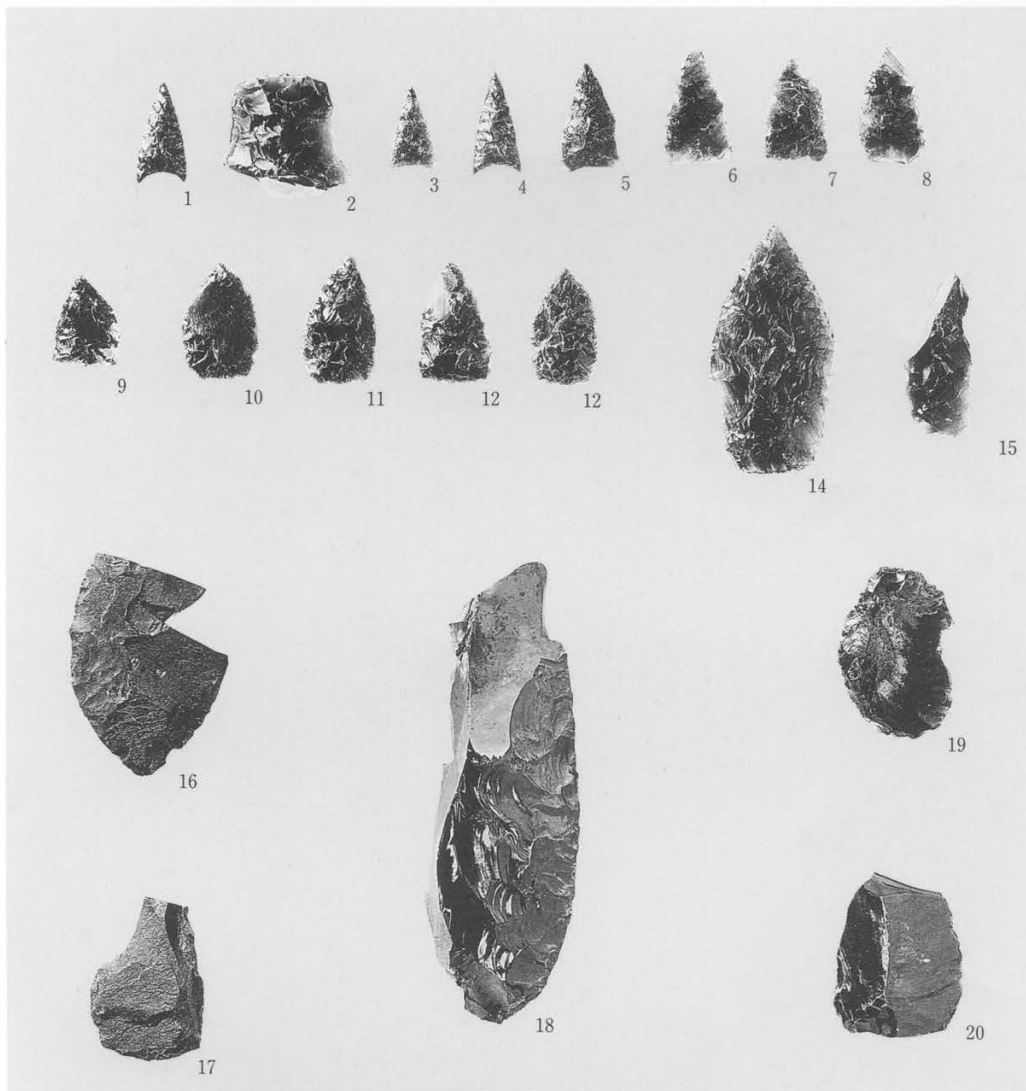
2. ピット327埋土出土土器



3. ピット328埋土出土土器



4. ピット328



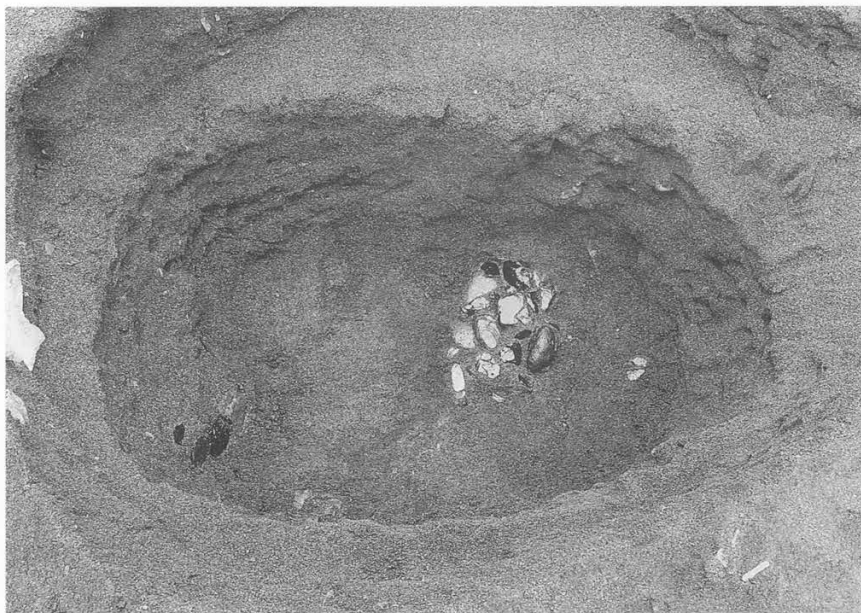
1・2 ピット328床面出土石器
3～20 ピット328埋土出土石器



21 ピット328a埋土出土土器



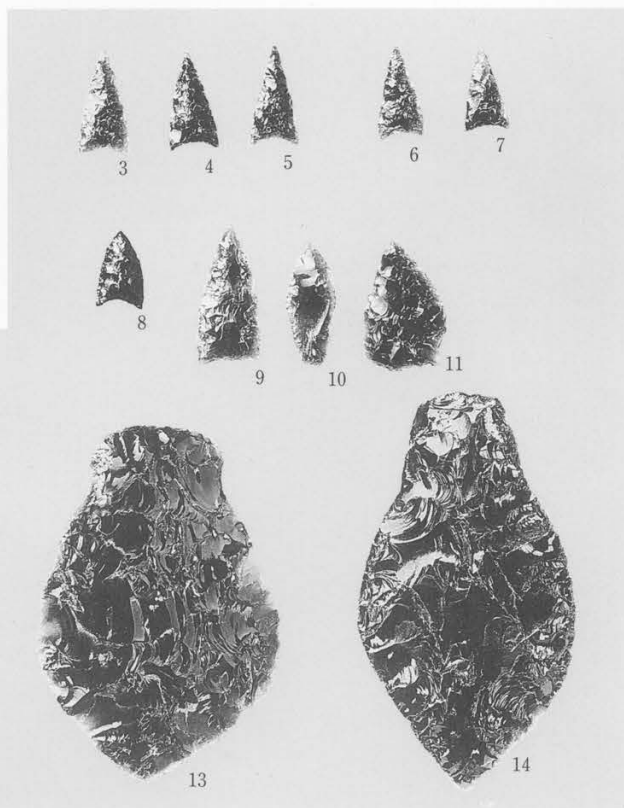
22 ピット328a埋土出土土器



1. ピット328b



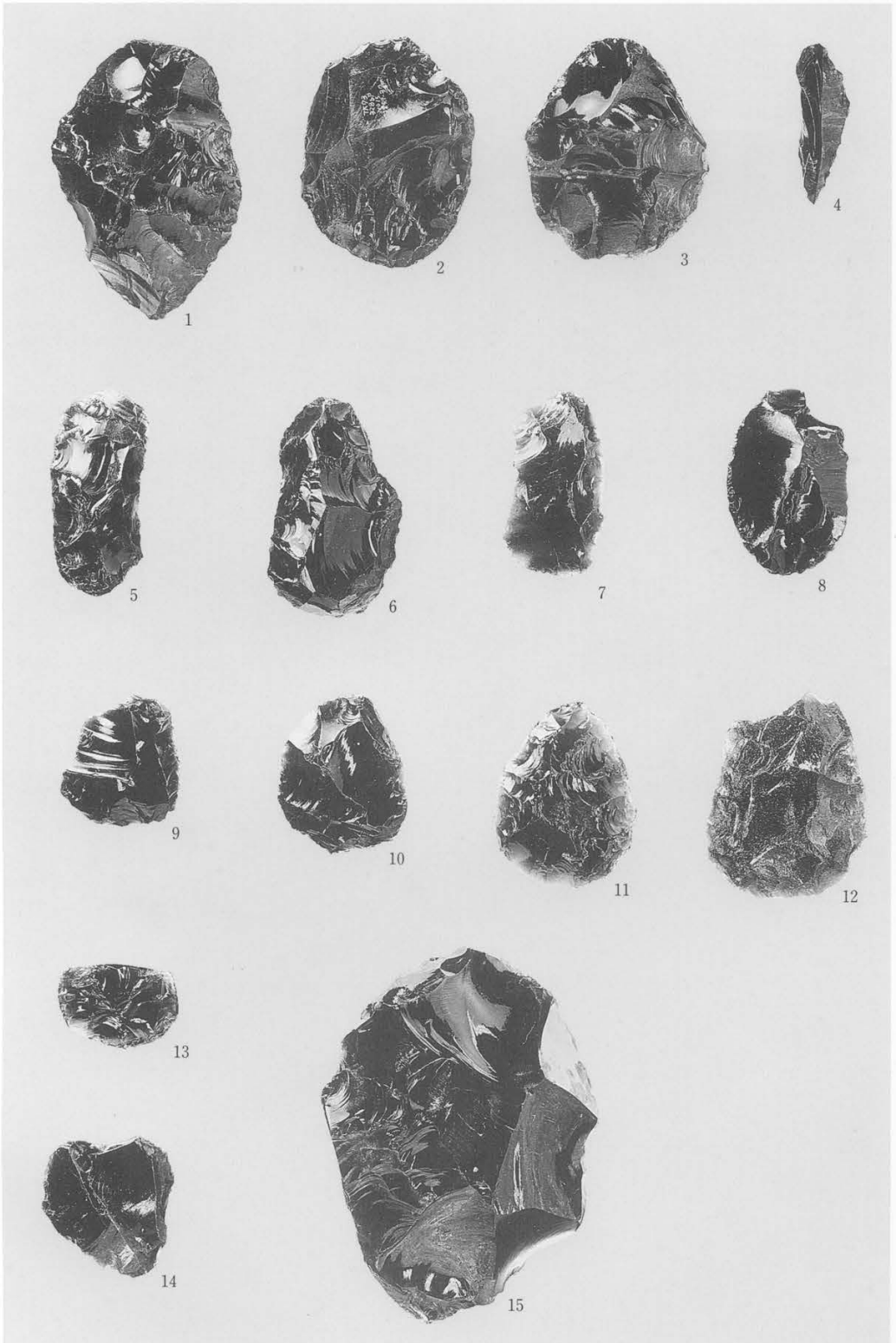
2. ピット328b埋土出土土器



3・4 ピット328b上部ベンガラ内出土石器
5～14 ピット328b埋土出土石器



1~12 ピット328b埋土出土石器



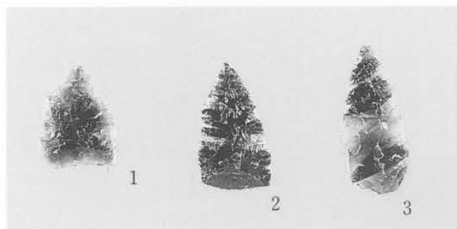
11~15 ピット328b埋土出土石器



1~10 ピット328b埋土出土石器



1～5 ピット328b埋土出土石器



1～3 ピット328c埋土出土石器



4. ピット329埋土出土土器



5. ピット329



1. ピット329 a



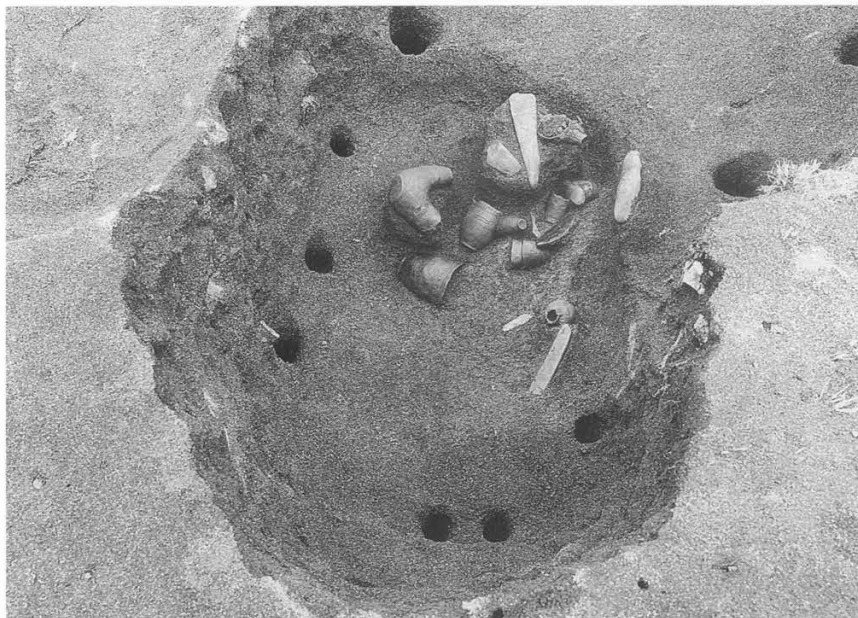
2. ピット329 a 埋土出土土器

3. ピット329 a 埋土出土土器

4. ピット329 a 埋土出土土器



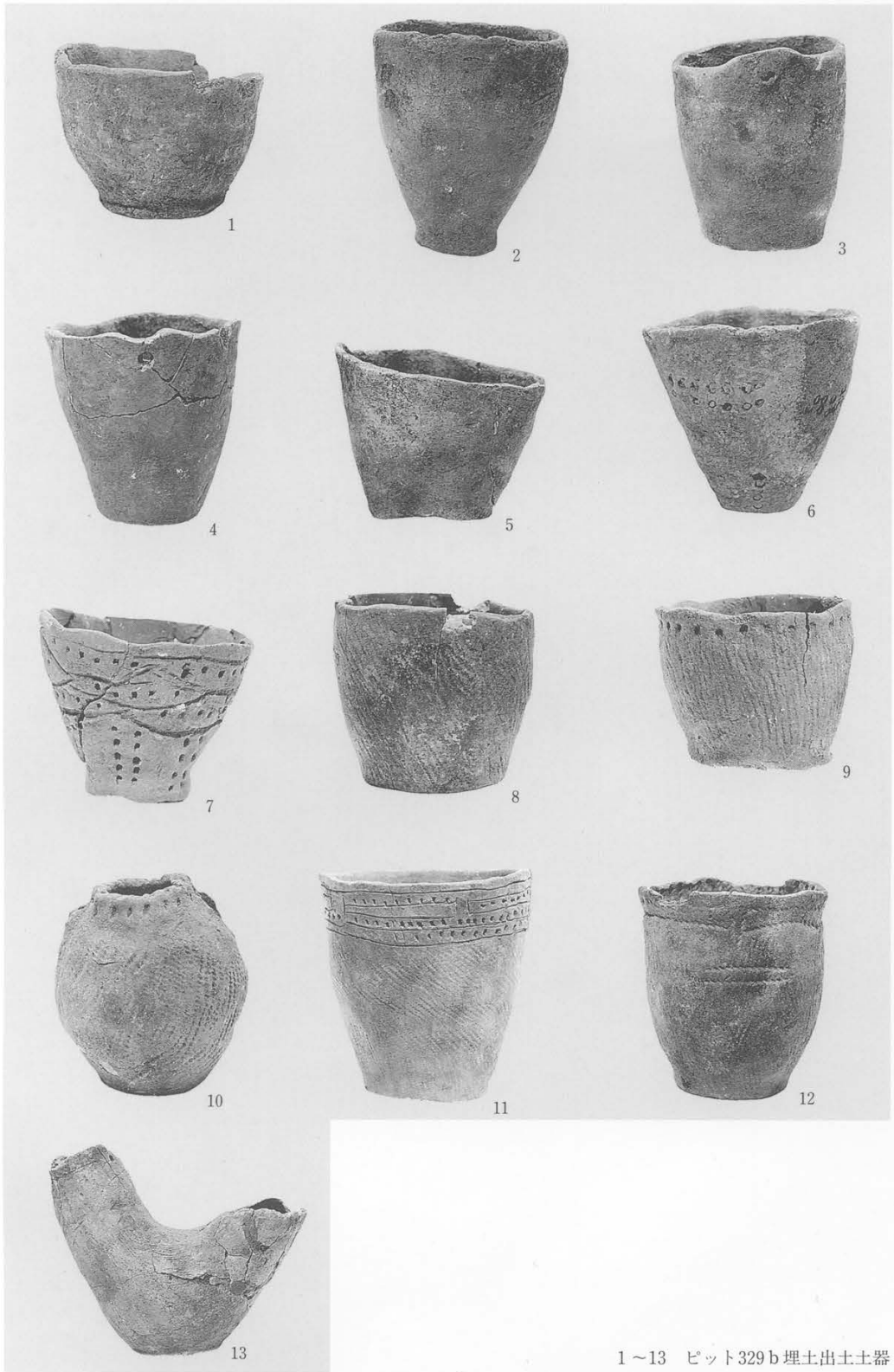
1~11 ピット329a埋土出土石器



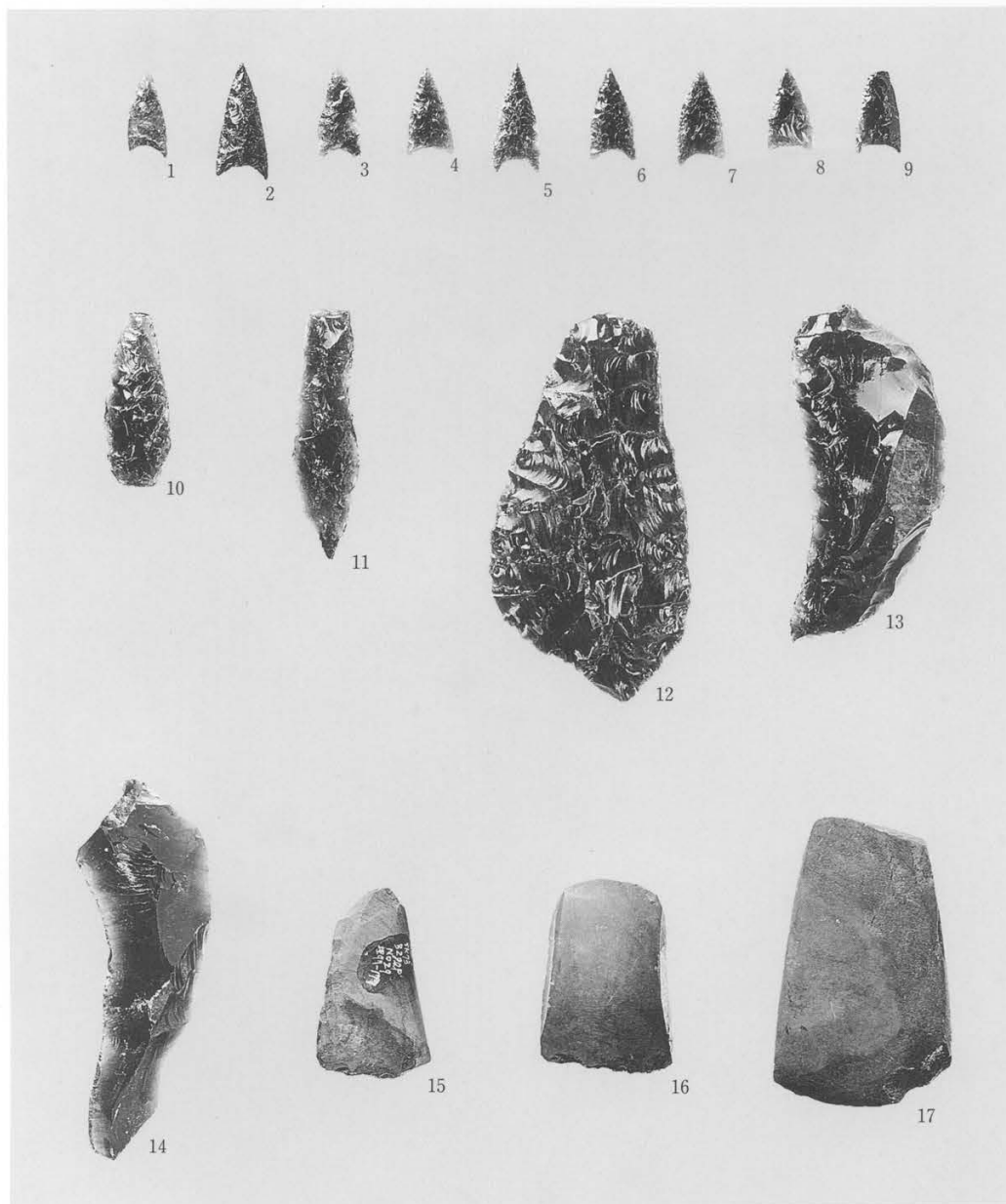
1. ピット329b



2. ピット329b遺物出土状況



1～13 ピット329b埋土出土土器



1～17 ピット329b埋土出土石器



7. ピット329 b埋土
出土土製品

1 ~ 6 ピット329 b埋土出土石器



1. ピット330埋土出土土器



2. ピット330埋土出土石器



3. ピット330埋土出土石器



4. ピット332床面出土石器



5. ピット332埋土出土石器



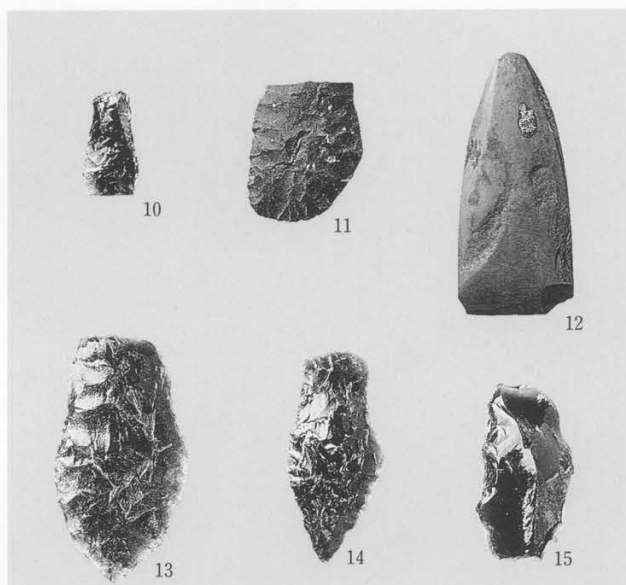
6・7. ピット337埋土出土石器



8. ピット337埋土出土琥珀玉



9. ピット338a埋土出土土器



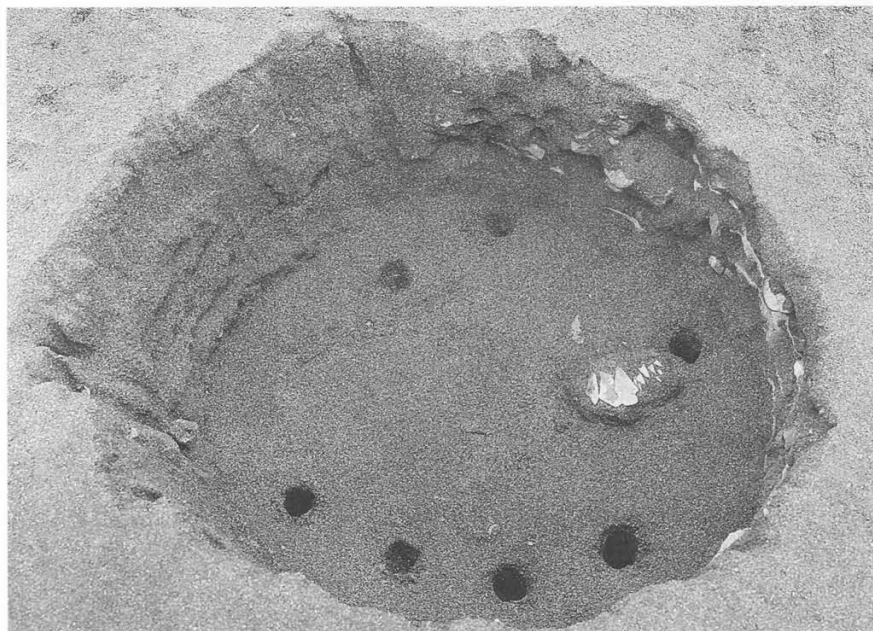
10~12 ピット338a床面出土石器
13~15 ピット338a埋土出土石器



1～7 ピット342埋土出土石器



8. ピット343遺物出土状況



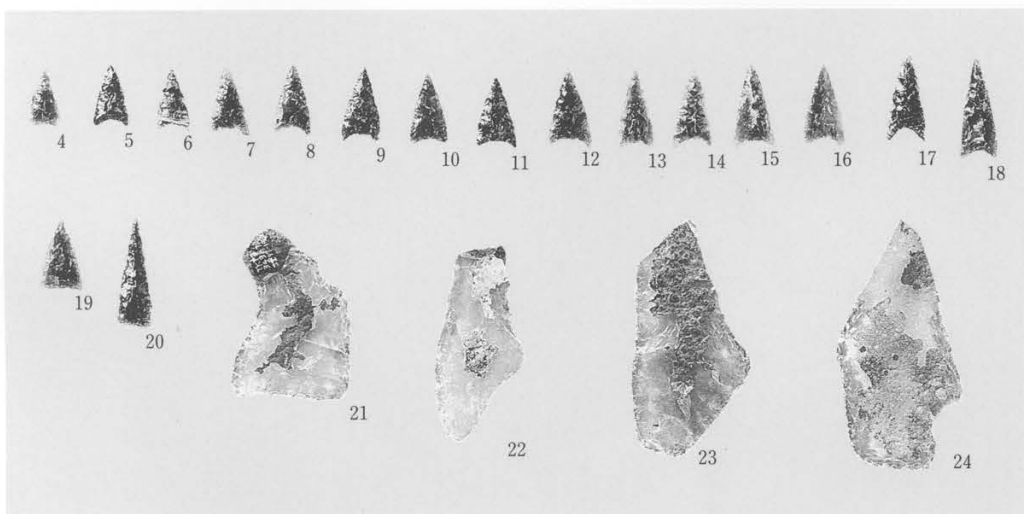
1. ピット343



2. ピット343床面出土土器



3. ピット343埋土出土土器



4～24 ピット343埋土出土石器



1. ピット343埋土出土石器

2. ピット343遺体上出土石器

3. ピット363b埋土出土石器



4. ピット363b



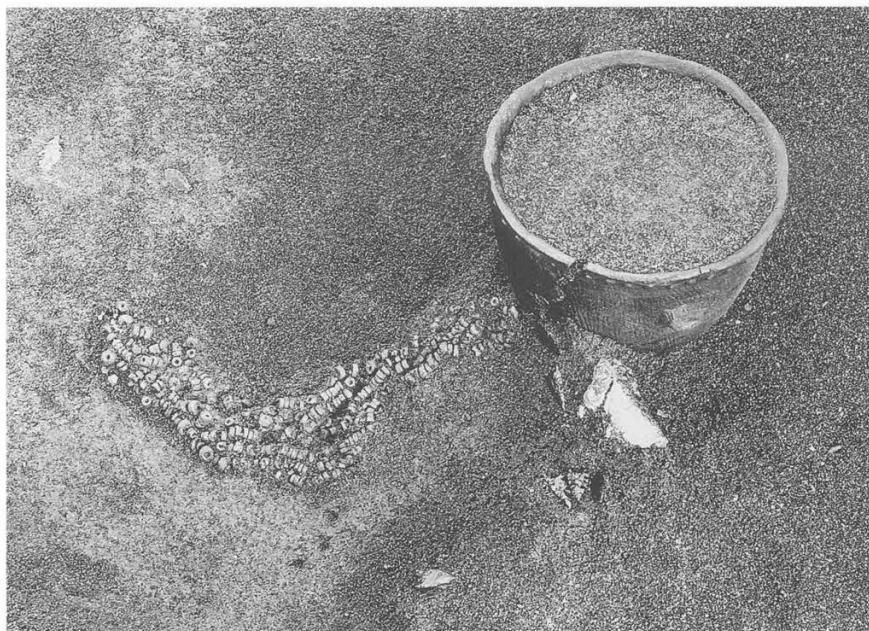
1. ピット370床面出土土器



2～4 ピット370床面出土石器
5～8 ピット370埋土出土石器



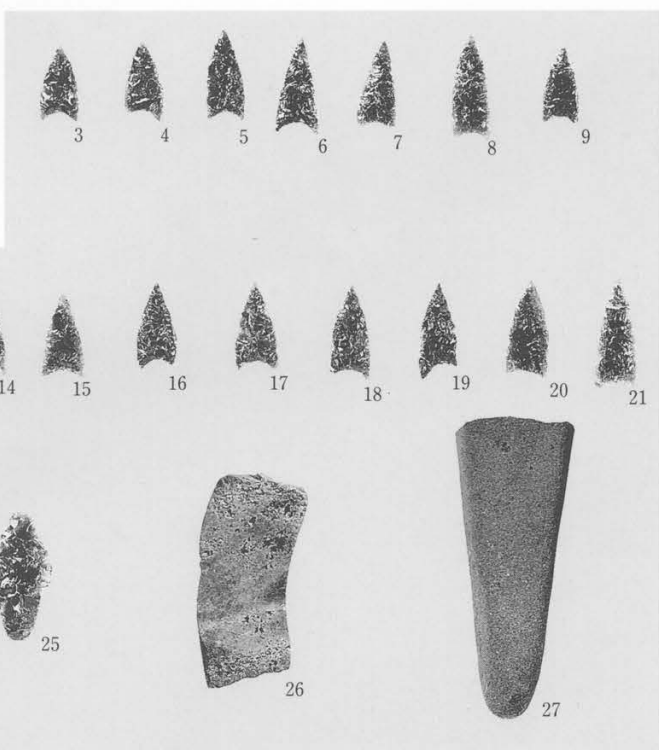
9. ピット370a



1. ピット370a 遺物出土状況



2. ピット370a 床面出土土器



3～8・22～25 ピット370a 床面出土石器
9～21 ピット370a ベンガラ内出土石器
26・27 ピット370a 埋土出土石器



1. ピット371・ピット371a・ピット371b・ピット372



2・3 ピット371埋土出土石器

4. ピット371a床面出土土器

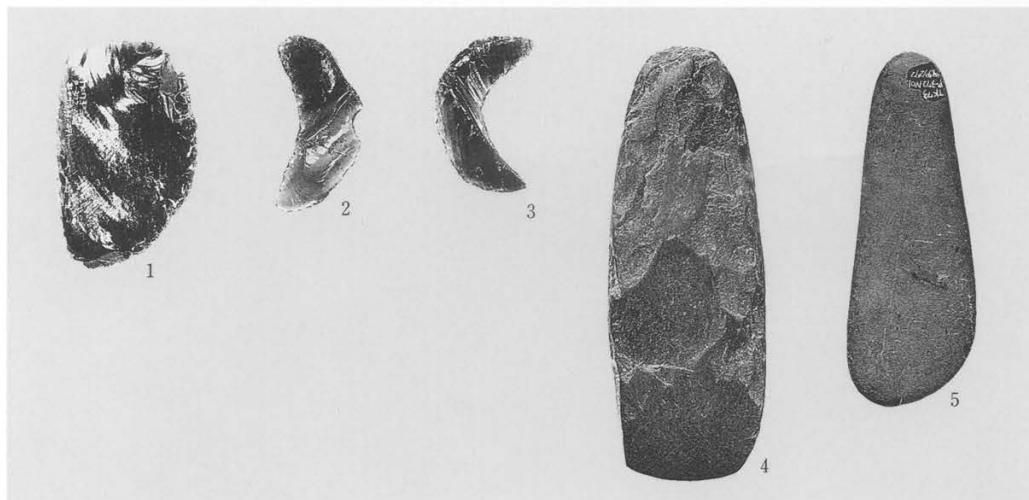
5・6 ピット371a床面出土石器



7. ピット372床面出土土器

8. ピット372床面出土土器

9. ピット372床面出土土器



1～4 ピット372ベンガラ内出土石器
5. ピット372埋土出土石器



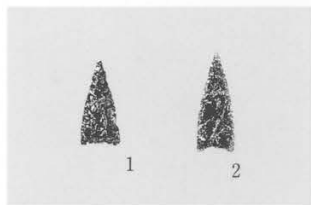
6. ピット373



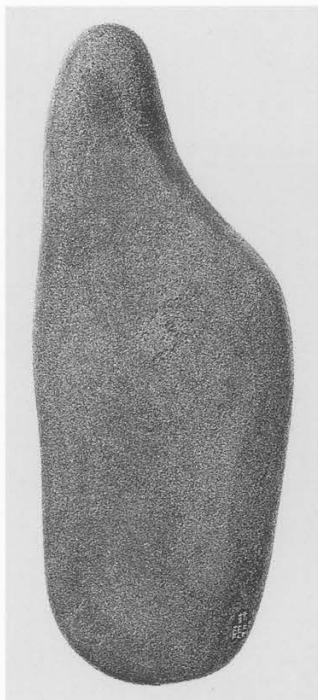
7. ピット373埋土出土土器

8. ピット373埋土出土土器

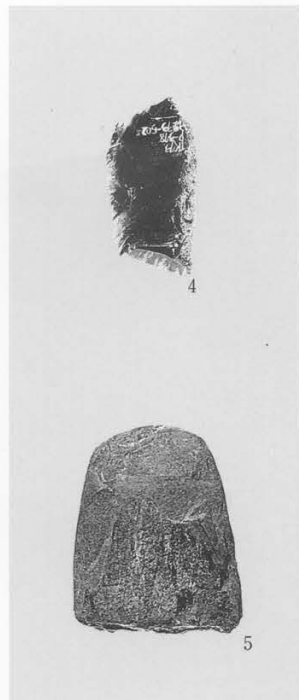
9. ピット373埋土出土土器



1・2 ピット373遺体上部出土石器



3. ピット373埋土出土石器



4・5 ピット378埋土出土石器



6. ピット379 b床面出土土器



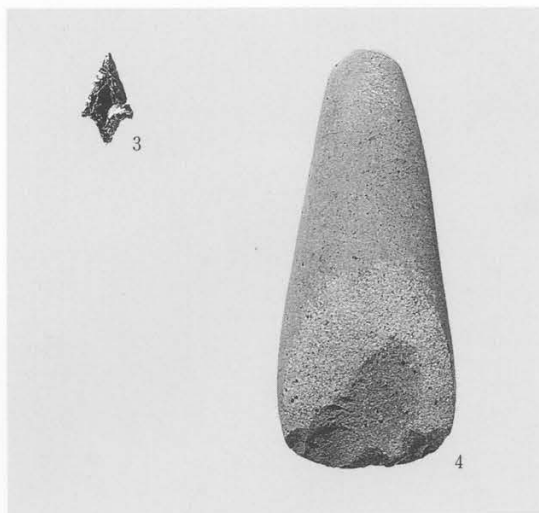
7. ピット379 b 遺物出土状況



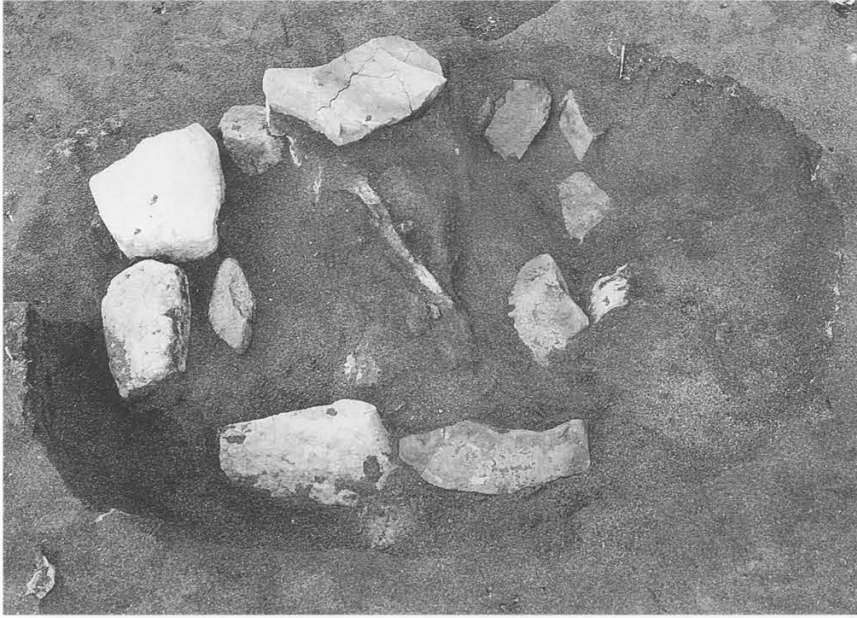
1. ピット379b



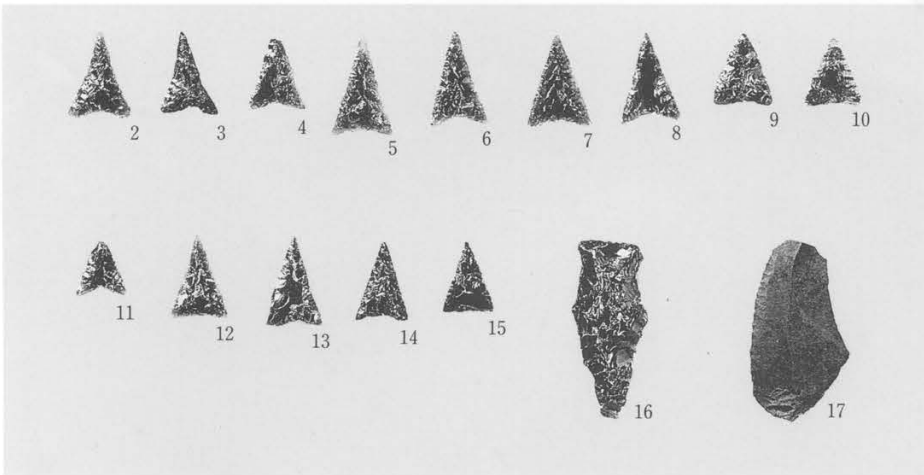
2. ピット384埋土出土石器



3・4 ピット386埋土出土石器



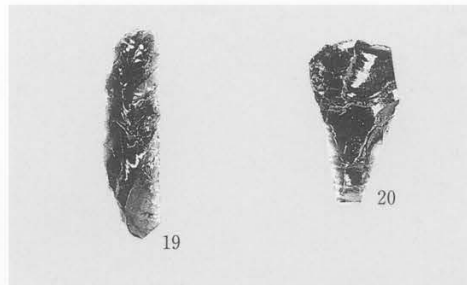
1. ピット389



2～15 ピット389床面出土石器
16・17 ピット389埋土出土石器



18. ピット391床面出土土器



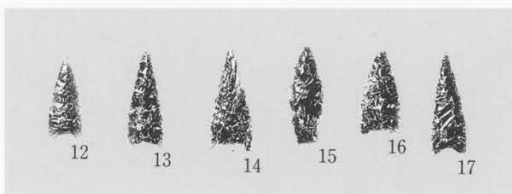
19・20 ピット391床面出土石器



1～10 ピット400遺体上出土石器



11. ピット404遺体上出土土器



12～17 ピット404遺体上出土土器



18. ピット404a 遺体上出土土器

19. ピット405床面出土土器

20. ピット405床面出土土器



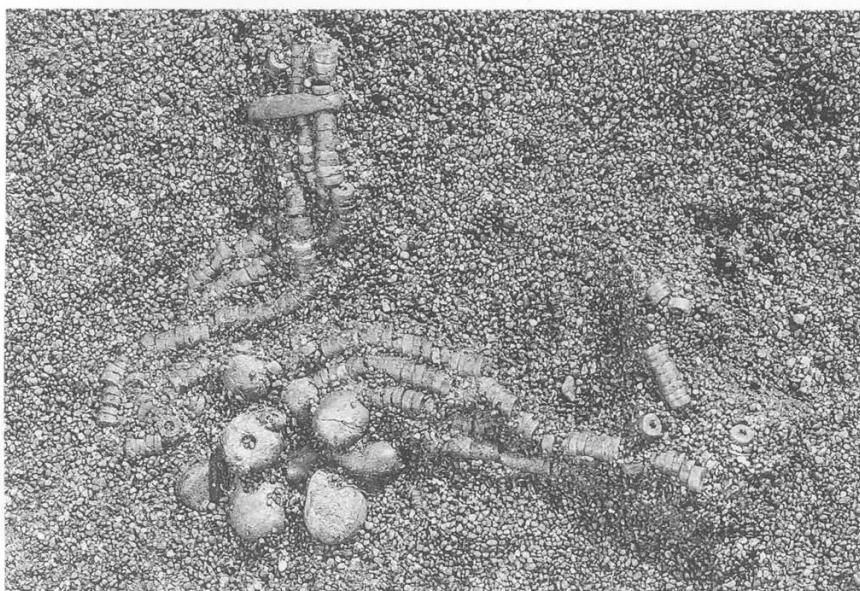
21. ピット405



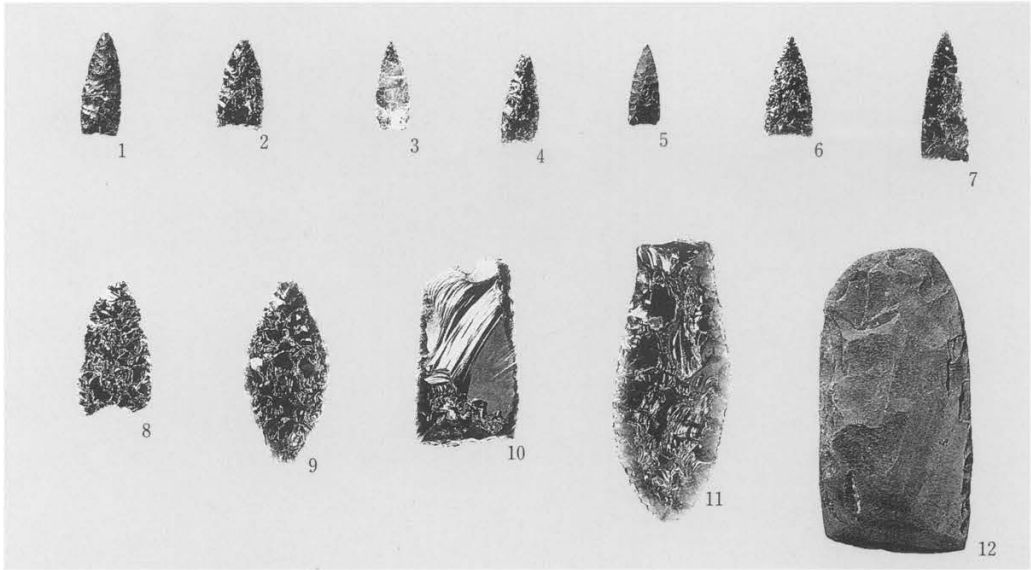
1. ピット409 a



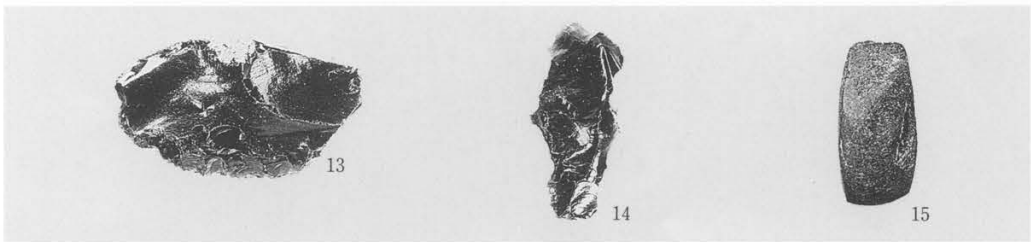
2. ピット409 a 床面出土土器



3. ピット411琥珀玉出土状況



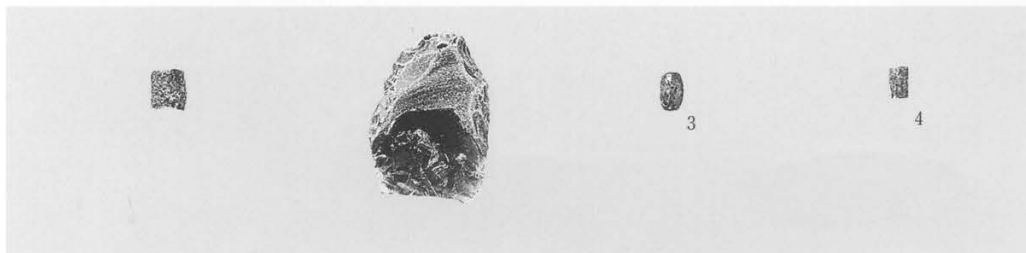
1～12 ピット412埋土出土石器



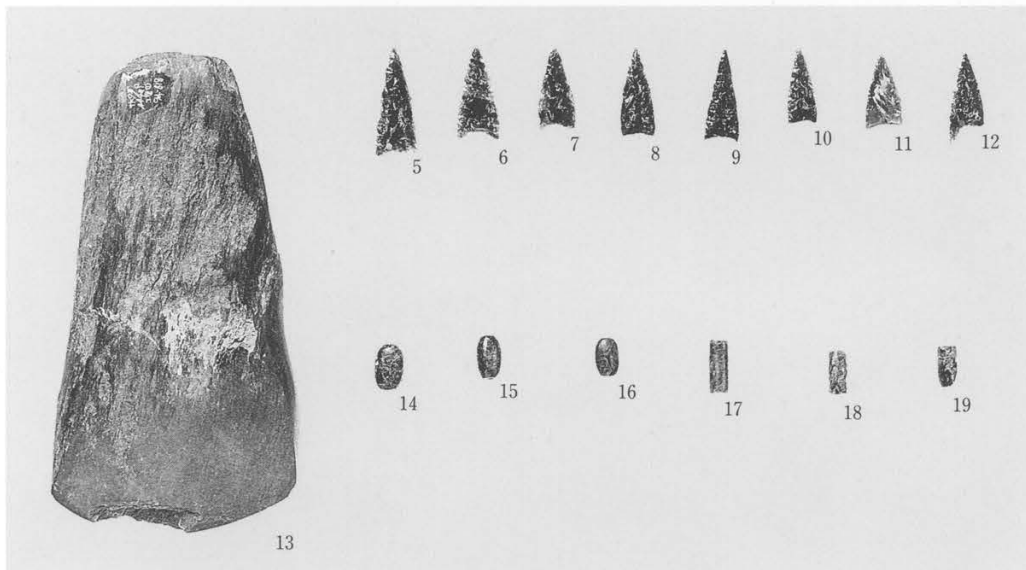
13～15 ピット419埋土出土石器



16. ピット438



1. ピット439床面出土土製品 2. ピット439埋土出土石器 3～4 ピット444埋土出土琥珀玉



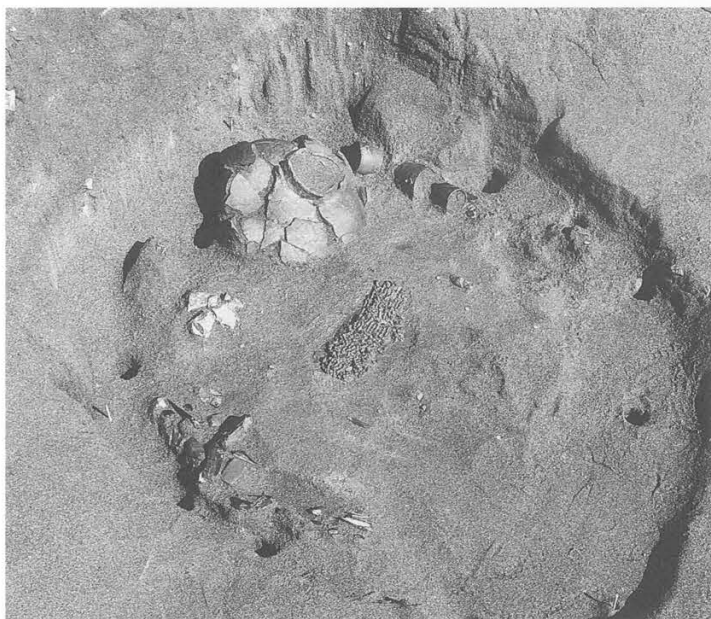
5～13 ピット444 a 埋土出土石器
14～19 ピット444 a 埋土出土琥珀玉



20. ピット459埋土出土土器

21. ピット466埋土出土土器

22. ピット466埋土出土土器



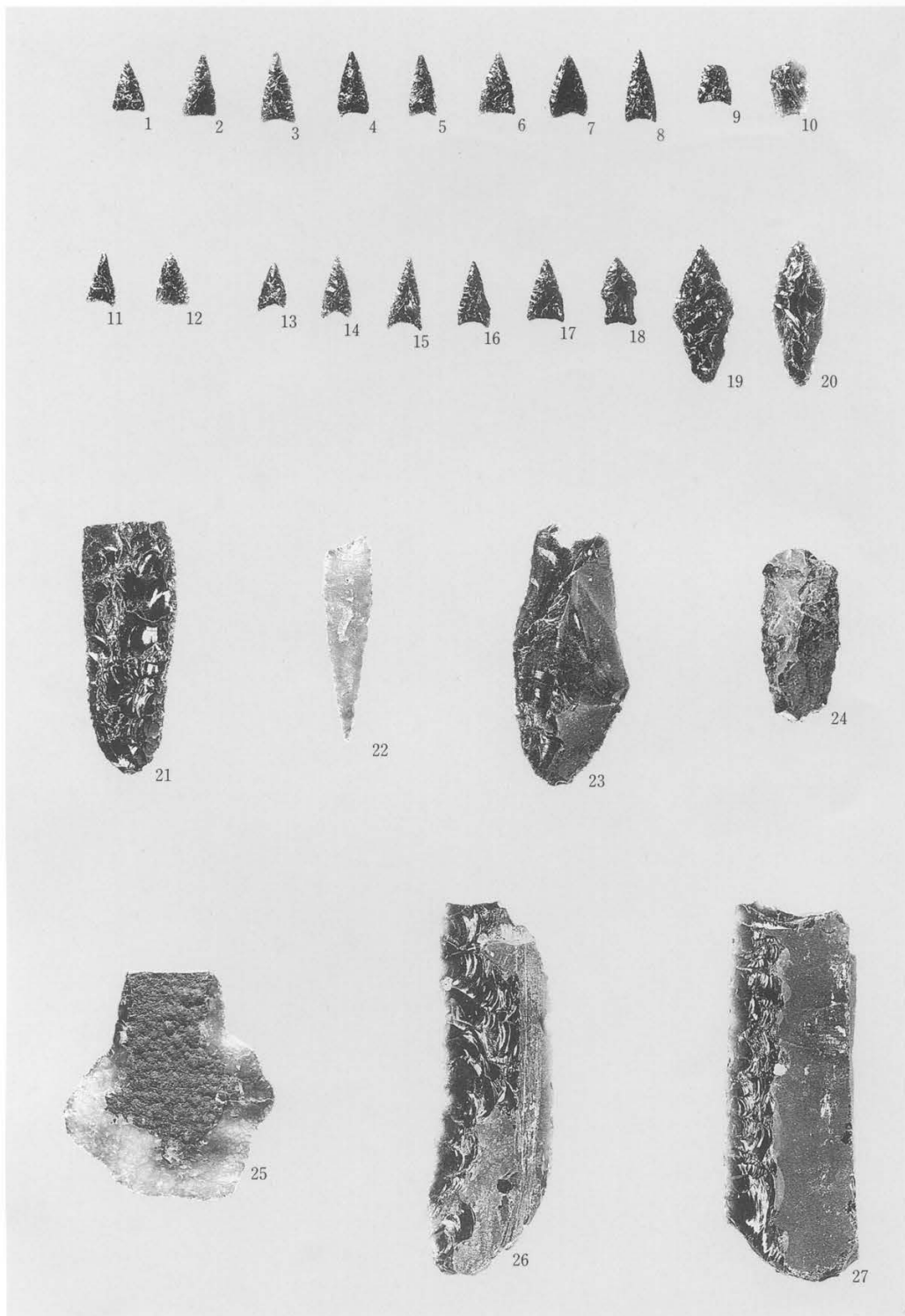
1. ピット470



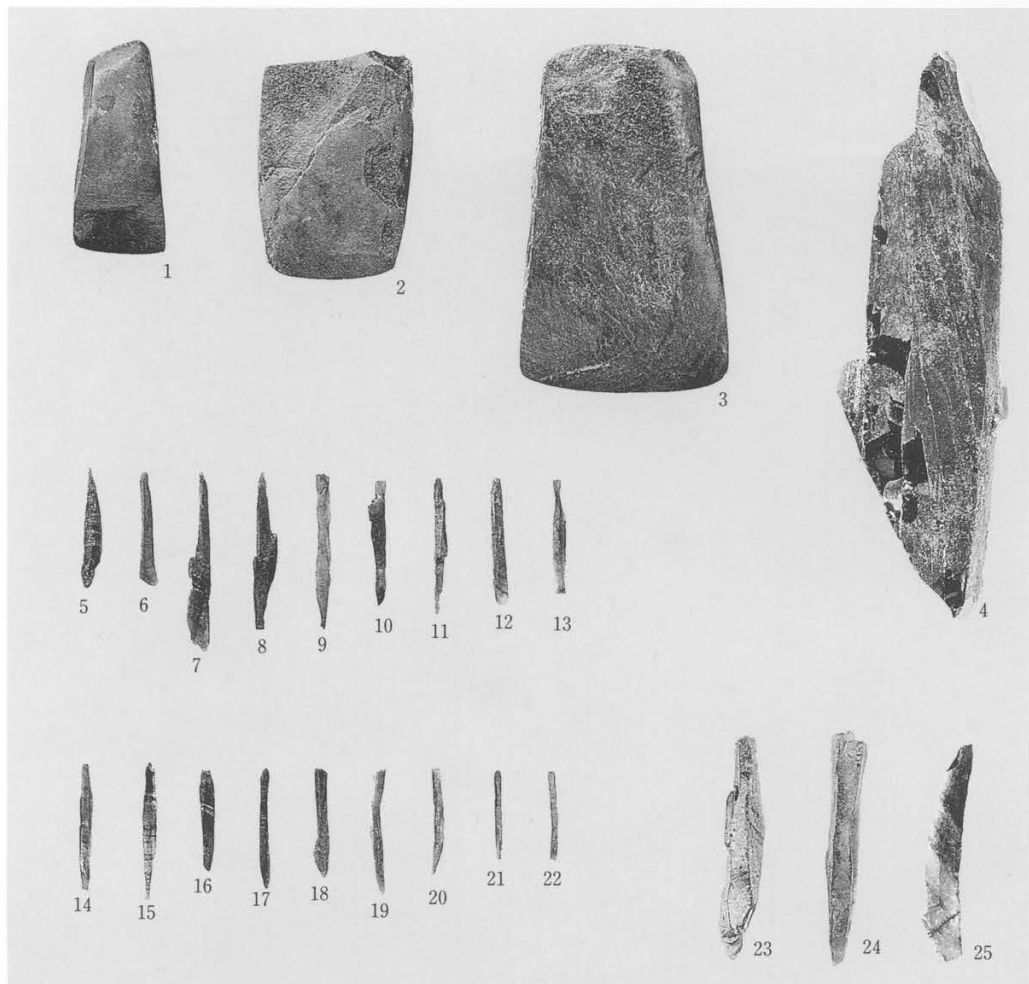
2. ピット470遺物出土状況



3～7 ピット470遺体上出土土器



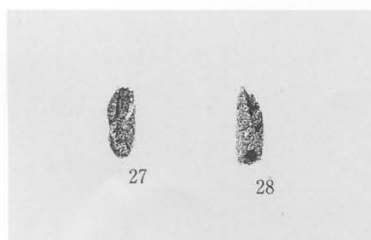
1~27 ピット470床面出土石器



1~25 ピット470床面出土石器



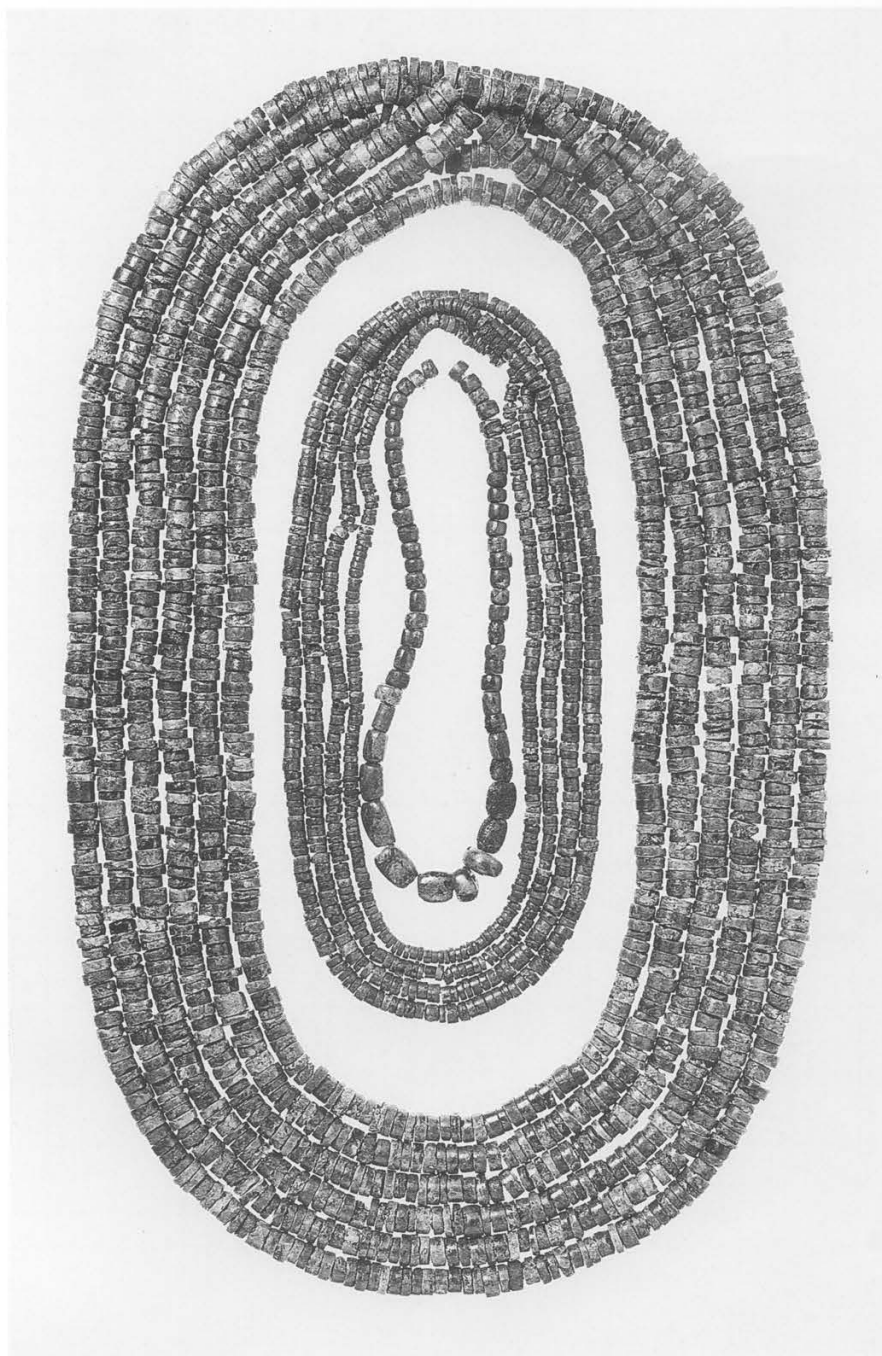
26. ピット470遺体上出土石製品



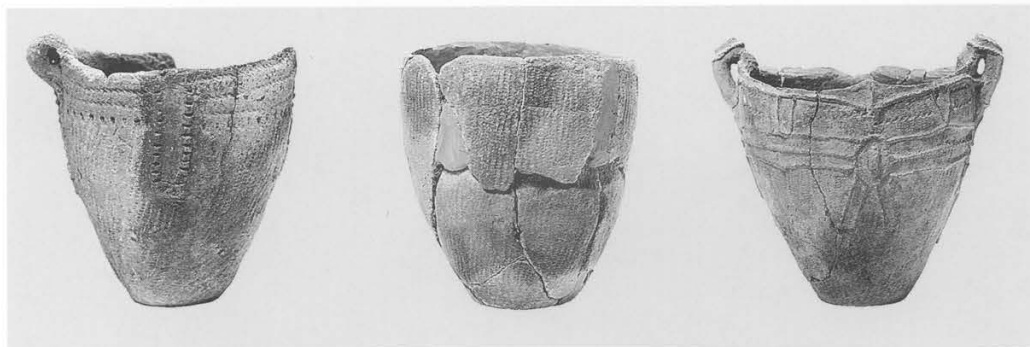
27・28 ピット470ベンガラ内出土土製品



29. ピット470遺体上出土石製品



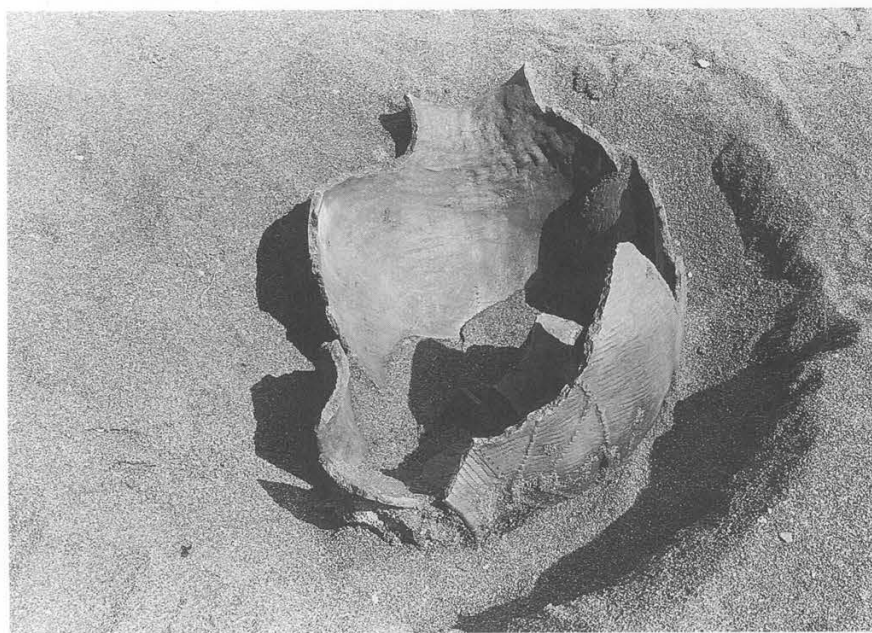
1. ピット470遺体上出土琥珀玉



1. ピット482上部出土土器

2. ピット494埋土出土土器

3. ピット494埋土出土土器



4. 埋甕5出土状況

報告書抄録

ふりがな	ところがわかこういせき				
書名	常呂川河口遺跡（3）				
副書名	常呂川河口右岸掘削護岸工事に係る発掘調査報告書				
シリーズ名					
シリーズ番号					
編著者名	武田 修				
編集機関	北海道常呂町教育委員会				
所在地	〒093-0209 北海道常呂町字土佐 2-1				
発行年月日	西暦2002年 3月23日				
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号		
ところがわかこう 常呂川河口 いせき 遺跡	北海道常呂町字常呂	01553	I-16-128	44° 06' 58"	144° 04' 42"
調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	所収遺跡名	種別	主な時代
平成5年～ 平成6年	3,000	河川改修	常呂川河口 遺跡	集落 包蔵地	擦文 続縄文 縄文
主な遺構		主な遺物		特記事項	
住居跡, 土壇墓		土器・石器・琥珀 玉など		続縄文期初頭のフシココタン下 層式, 宇津内II a 式の土壇墓で は多量の副葬品が見られる。特 に宇津内II a 式の470墓は琥珀 玉, 石偶, クマ意匠ペンダント など貴重な資料が豊富に出土。	

2002年3月10日 印刷

2002年3月23日 発行

常呂川河口遺跡 (3)

—常呂川河口右岸掘削護岸
工事に係る発掘調査報告書—

発行者 北海道常呂町教育委員会

印刷所 株式会社 小林印刷
北海道北見市本町5丁目